THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年特輯號

附錄「最新學說」紹介

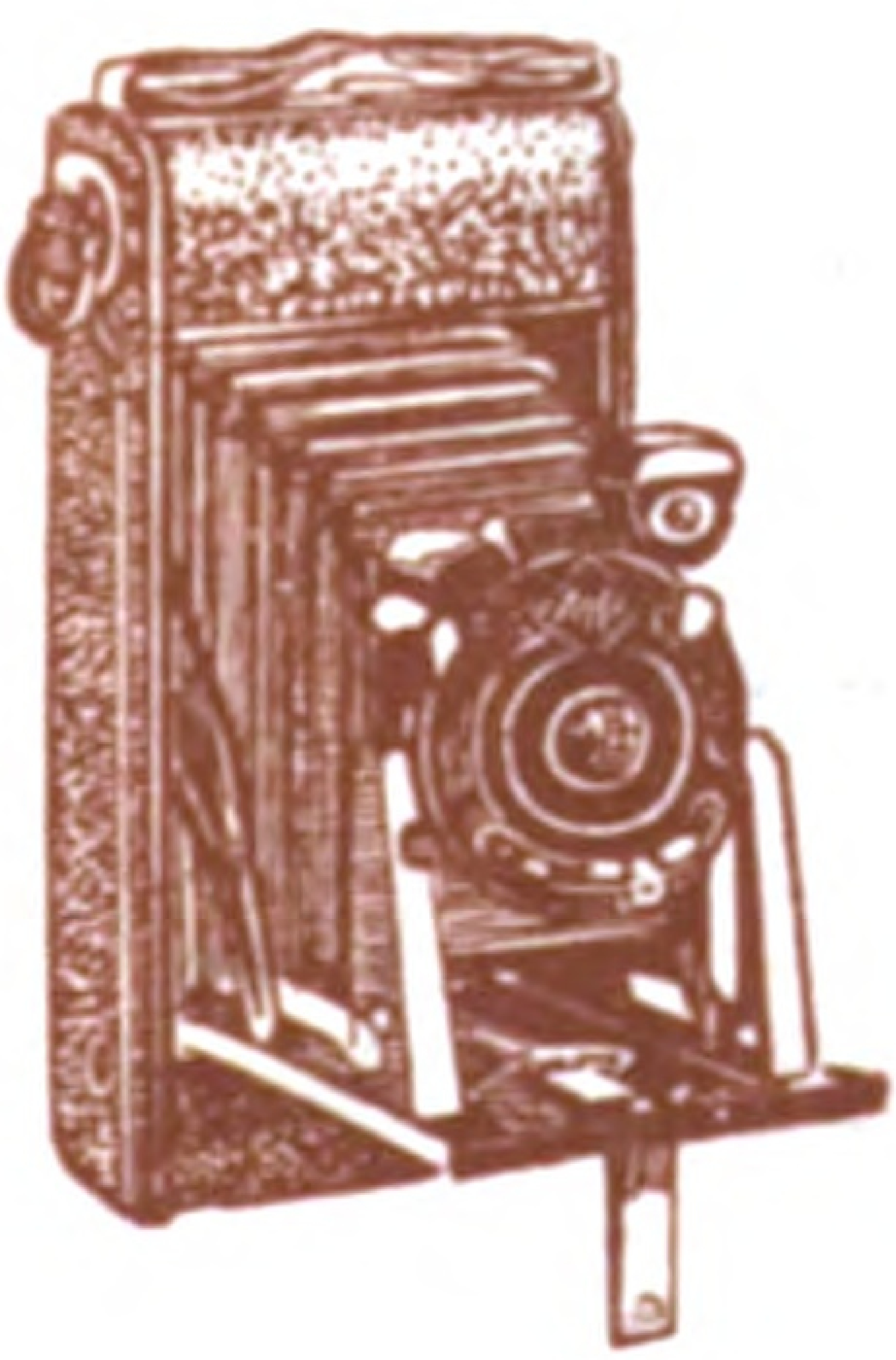
第四十五年　第一號　第五百四號

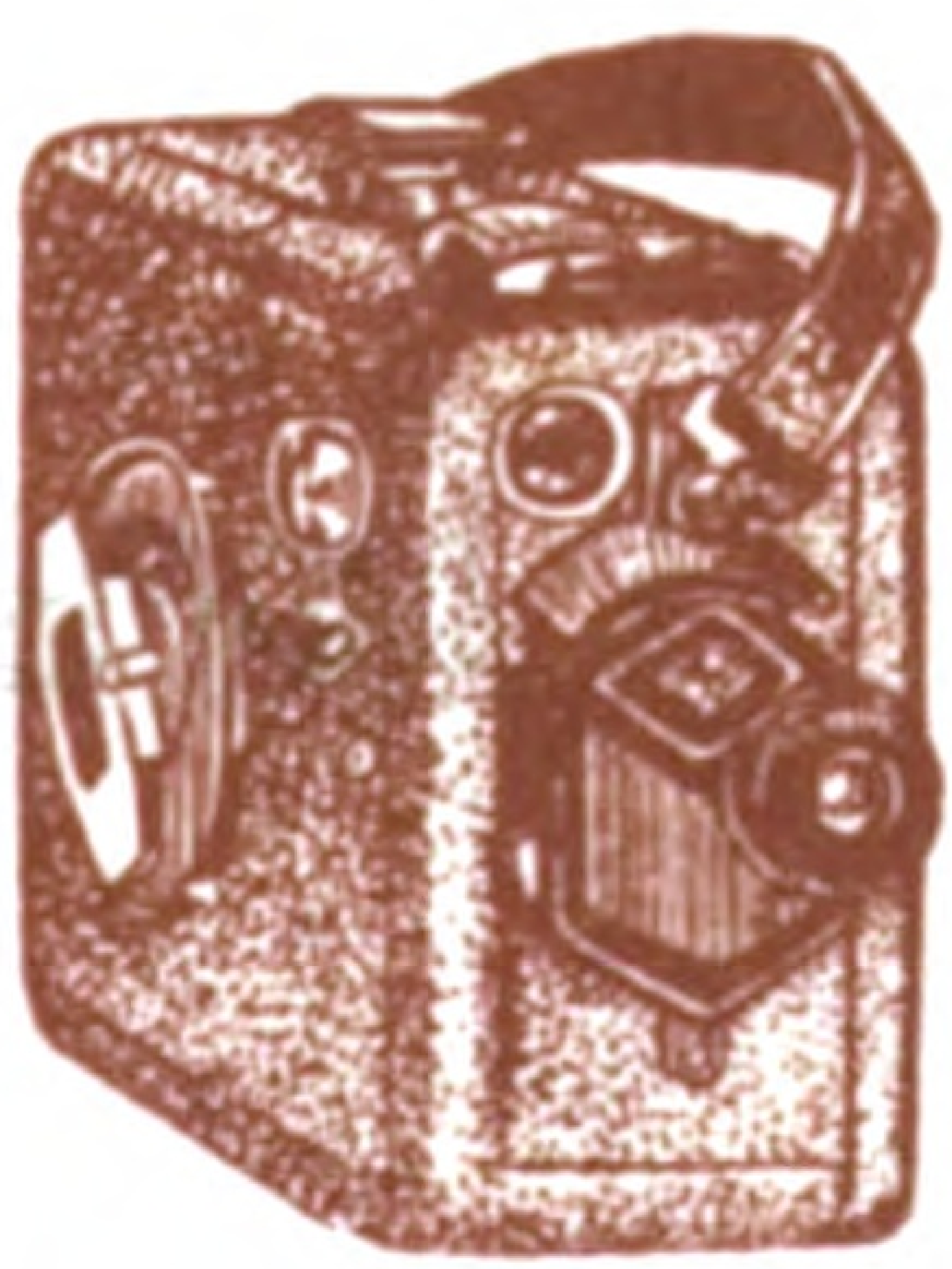
謹賀新年

スキーに
スケートに
温泉に
お正月のお集ひに

皆様のこの冬の樂しい思出は

今、流行の
モウベックス、カメラ（十六ミリ活動寫眞機）
ビリー、カメラ（ブロニー形）
て
是非、お收めを!!





アグファ合名會社
東京・大阪



A Happy New Year!

1930年の女王！

會心の笑を含んで皆樣に贈る！

第十五周年を迎へて……島中雄作

夢の神秘……[illegible]

私の顔

額は滿點……里見弴

ほくろ……三宅やす子

雪の中で拾つた話……大泉黑石

街頭の微笑……小野賢一郎

セザンヌの畫室……有島生馬

1930年の戀愛を語る

・新ラヴテキニック……武野藤介

・科學的戀愛……深尾須磨子

・二十世紀君の戀愛……石川欣一

・女・A・B・C……大木篤夫

・一九三〇年型の戀愛……淺原六郎

◆新生活と臺所……（専門家七氏）

◆應用圖案のはなし……山形駒太郎

◆商品になるまで……前田榮一

母校禮讃（お茶の水高女）（日本女子大學）（大阪府立高女）（大阪樟蔭高女）

◆**父として母として**……德田秋聲

自分の行跡を小説にしてきた今日の老大家は、我が子の上にどんな影響を及したかを考へてみる――私の戀愛事件と子供の教育

新連載長篇小説

漫然たる所謂長篇小説の如き浮薄なものではない。先づ此の顔振れを御覧下さい。正に一騎當千の力作のみ。明日の文學の光は本誌によつて燦然たるものがあらう。

◆**極光**……里見弴 小田富彌畫

◆**同志愛**……貴司山治 竹中英太郎畫

◆**銀座**……高田保 永田一脩畫

◆**遍路行**……下村千秋 中澤弘光畫

◆**マダム・ヴィタミン**……正木不如丘 山名文夫畫

◆**江戸巷塵譜**……林不忘 木村荘八畫

本號特價八十錢

中央公論社發行

日本一の

時事新報

明るい家庭
明るい新聞

(一)

善き家庭には良き新聞が必要です。

(二)

記事が速くて、誤りがなく徒らに煽情的な記事を掲げない新聞として又世上の善事を指摘して明るい社會に導こうとする新聞として本紙の如きは眞に安心して皆様方の御家庭にお勧め出來ると信じます。

(三)

本紙の日曜附錄漫畫はお子様方に喜ばれ、一家笑聲の發源地です。御愛讀下さい。

朝夕刊
十二頁
月一圓



◇丸の内お濠端◇

モダァン・ユゥモァ
行進曲●Wanted: Bald-Heads



蹴球　　小杉放庵筆

現代政治に對する無産派の態度

——卷頭言——

現代に於て[illegible]資本主義に對する[illegible]二種[illegible]政策に對する[illegible]を以て[illegible]終の目標として居る。[illegible]一たゞ[illegible]て之の最終目標に達する[illegible]見解の對立を見るのである。一を現實的漸進主義と云ふべく、他を革命的急進主義と謂つてもいゝ。現實主義と急進主義との何れを妥當とすべきかを純理の上から決めることは關係ない問題ではない（今日一部の人の間に盛んに論爭されて居るのは、種々雜多の因子が這入るから面倒になるので、問題の核心自身は割合に單純なのである）。併し乍ら純理の上の原則は、必要な基礎的智識ではあるけれども、其儘で實地に應用し得るものではない。活きた社會に處する政治上の方針は、例へば醫者の處方箋の如く、原則を基準としつゝ、實際の状況に應じて種々に斟酌按排せられなければならないものである。

政治上の方針を決定するに當り其の斟酌按排を要求する基礎的の社會現實として今日最も烈しく資本主義の頻繁が擧げられる。被搾取階級が案外呑氣なのを搾取階級の欺瞞的奸手段の結果とするは別に論究を要するとして、ブルジョア階級の到る處に於ける盲目的利己活術は、既に久しい間心ある者をして彼等の度す可からざることに失望せしめて居る。到底妥協の餘地なしと諦めて階級鬪爭の實踐的理論も生じ、果ては終に[illegible]るに暴を以てするも已むを得ずとするの説も叫ばれて居る。之等の立場を理論上裏付けようとの試みは聊か成功の疑はるるものあるも、實地の問題として大に之を諒とすべき理由あるは疑を容れない。

政治的活術の實際方針を決定する因子として最近の政界殊に無産派を主として觀じに特に強く顯はるるものに革命の可能と云ふ事がある。被搾取階級の覺醒を過大に盲信し所謂一種の公式に基いて社會の現勢を極度の頽廢に瀕せりと見做し、最も近き將來に於ける變革の必至を信ずるのである。客觀的状勢の斯の如き認識の正しきや否やは姑く措き、斯く信ずる限り、現存の政治機構を基礎とする諸般の實際問題の如きは毫も彼等の關心に値しない。樞密院をどう改革するか、貴族院のどの點に改革の鋒先を向くべきか、そんな事はどうでもいゝ。今に我々が天下を取る、天下を取つたら思ひの儘に振舞つて見せる。要は眼の先きにブラ下つて居る政權を一日も早く取る事だ。斯くして彼等に取ては速に天下を取る爲めの戰術が唯一の政治問題になるのである。而して斯かる急進主義的方針は、其事自身の是非善惡は別として、其の一つの論據たる客觀的状勢の判斷に謬りがあるとすれば、畢竟無駄骨折に終ることはまた論を待たない。

之に對する漸進主義の立場は別に事々しく説くまでもあるまい。現存の政治機構を前提し、其上に立てられたる諸施設を無産階級の利福の爲に誘導し、其上に爭はるる實際問題に付ては、無産階級の他日の雄飛の爲に坦々たる途を拓く樣巧みに解決の方針を向けるなど、やらうと思へばやり甲斐ある仕事は頗る多い。

今度の議會はどの道解散だらう。選擧となつて無産派の進出は大に我々の關心の問題となる。政治上の實際問題に對する各派の態度を精密に考ふることは、今日の我々に取て極めて肝要の事である。

中央公論



第四十五年第一號
一月號
五百〇四號

過剩の勞働者と過剩の商品

（マルクシズム所感）

小泉信三

唯物辯證法は今日最も人を惱ましつゝある問題の一つである。多くの學者は今日此問題に就いて何等かの發言をしなければならぬ義務を感じてゐるもの、如く見受けられる。此有樣に就いて、私は別の機會に左の如く云つたことがある。

「マルクスは唯物辯證法に從ひ資本主義の必然的崩壞及び社會主義の必然的到來を肯定した。マルクスの斷定は正しき

やがては別に論ずべき問題であるが、旣に[illegible]ムを其國教とするともいふべきソヴヰエト共和國政府が出現した。其革命が東西文野の上に及ぼしたる影響は、而かも佛蘭西革命が歐洲諸國に與へたそれに比すべくして、其深刻は更に幾倍を加へるものであつた。啻に歐米諸國のみではない。日本は固より、土耳古、埃及、波斯、印度、支那、到る處に於てマルクスの著作は其國の青年の、或は其精神を養ふ食餌となり、或は屢々之を醉はしめる酒ともなつた。而して……マルクシズムの基礎は唯物辨證法にある。此に於て唯物辨證法は一時の流行語となつて、眞摯篤實なる學者も、輕佻にして新奇を喜ぶ者も皆な之を口にし、哲學的素養なくして、而かも知らざるを知らずとすることを愧づる者は、爭つて之に雷同するやうになつた」云々。

私は決して哲學論としての唯物辨證法論を無用とするものではない。否な、反對に、此問題に就いては、私自身不及乍ら一家の見識を定めたいと、ひそかに心懸けてゐるものである。併し乍ら他面に於て、唯物辨證法なるものが今日幾多のマルクシストに依て妄用濫用せられてゐる事は爭ひ難き事實であつて、甚だしきに至つては、マルクスの立言に前後矛盾があるのは、資本主義社會其者に矛盾がある爲めであつて、これこそ眞に唯物辨證法の極致を得たものだと公言する者をさへ出すに至つて居る。これと同時に、吾々に切實の利害關係ある、例へば資本主義の崩壞は不可避の約束であるか否か、或は其崩壞は何時、如何にして行はれるかといふが如き、現實的諸問題に對しては、唯物辨證法は、何等の實證的興味を感ぜしめぬ稀薄なる解答をしか與へることが出來ぬ。ヘエゲルの辨證法なるものは、一切事物は皆な發展の過程上にあるものであつて、宇宙間のものとして固定不動なるはなく、而して此發展は、矛盾の止揚、即ち正——反——合の階梯に依て行はれるとする思考方法であるといふ。而して一切の發展は、ヘエゲルにあつては、絶對者たる理念若しくは理性の自發的發展から起るものであるといふ。今マルクスは、此のヘエゲルの理念若しくは理性に替へるに物質を以てした。物質が實在であつて、理念は人間頭腦中に於ける物質の影像に外ならぬものとなつた。これが即ち彼れが

[illegible]たへてゐる時節は恐しく早く[illegible]たしめたと自ら語る所以であることは、既に吾々マルクス派[illegible]に[illegible]も[illegible]する理由である。

併し一切のものは物質的事情の為めに変じて、より高きものに依て代られるといふ命題は、此の[illegible]ば、人に特別の興味を感ぜしめないであらう。資本主義の[illegible]を[illegible]に取つて、人類の[illegible]に関係する、人類が[illegible]てゐる地球も物質的事情の為めに[illegible]する。地球の[illegible]も[illegible]る。而して人間社会の一形態たる資本主義も亦同様に[illegible]崩壊するといふ[illegible]命題なれば、固より之を否定すべきではないかも知れぬ。特に之を[illegible]興味を[illegible]しめないであらう。吾々が[illegible]らんとするのは、資本主義を[illegible]せしめるといふ其の特定の具体的原因と其の[illegible]である。資本主義的[illegible]は、果して其に内在する矛盾の為めに[illegible]あらうか。[illegible]其の[illegible]はない。又[illegible]の[illegible]であらう。[illegible]の[illegible]の範囲に入つて、例へば、資本の[illegible]プロレタリアを[illegible]したるか否か。プロレタリアの[illegible]は[illegible]すべく[illegible]へる[illegible]ける[illegible]は[illegible]たるか否か。[illegible]ば、[illegible]なくてはならぬ。又[illegible]に、[illegible]の具体的問題に答へることに依つて始めて[illegible]ことが出来るのである。

前[illegible]の如く[illegible]に[illegible]。

[illegible]

[illegible]

因である」と。例へば、マルクスは『資本論』中に資本主義生産の崩壊を論じて、[illegible]て、少數資本家が其手に集中せる資本を剝奪することの必然なるべきを説き、資本家的私有は自己の否定を[illegible]く個人的私有の否定であり、其の資本家の私有は「否定の否定」であると謂つて居る。併し此場合の辨證法的用語は、資本主義崩壊の必然を論證する爲めには、單に一の装飾か、又は装飾たる以上の用を爲して居らぬ。或はいふであらう。辨證法的用語を嫌つても、辨證法的思考は辨證法的思考たることを失ふものではないと。無論其の通りである。併しマルクスを「剝奪者の被剝奪」の結論に到達せしめたその論究の諸階梯は、マルクスの哲學とは無關係に承認し、若しくは否認し得べきものである。生産力の發達は資本組成の高度化と相伴ひ、而して其事は勞働者の一部分を失業せしめて勞働者を窮迫せしめ、且つ其境遇を不安ならしめると、マルクスはいふ。併し此理を承認し若しくは否認する爲めには、決して唯物辨證法を奉ずることを要しない。又マルクスは大經營又は大資本の優越を認めて、中小經營又は中小資本は競爭上の敗者となつて消滅せんとする傾きがあるといふ。而かも此理を承認するにも、同じく唯物辨證法による必要はない。生産力の發達と共に利潤率低減の傾向があるといふことに就いても同樣である。勞働者大衆の購買力缺乏の爲め生産物の販賣が困難となるといふことに就いても亦た同樣である。學者は事實の觀察と推理に基づいて、或は是等の理論を承認し、或は之を否認する。併し乍ら、其承認否認は唯物辨證法により、若しくはよらざることゝは無關係になし得るのである。而かも是等の理論の凡てを是認すれば、當然マルクスの資本主義崩壊論の根據を是認することゝなる。而かもそれは辨證法の辨の字をも知ることなしになし得るのである。又實際、資本組成高度化による勞働者の失業、利潤率低減の傾向、生産力消費力不均衡による販路の難塞等は、マルクス以前にリカアドオ、マルサス、シスモンヂ等全く辨證法を知らざる者に依て既に説かれて、マルクスに繼承せられたものである。資本集中の傾向に着目せるものに至つては一々數ふるに遑なき程であらう。

[illegible]法論を[illegible]しようと[illegible]するものではない。併し[illegible]

必然を論ずる場合に[illegible]辯證法を[illegible]することは、[illegible]

的世界及び世界[illegible]の中に[illegible]

本主義の成立時期に於て、[illegible]

題[illegible]ってゐることを[illegible]いのである。[illegible]

の生ずるものが少なくない。併し然らば如何なる問題が提起されてゐるかが指摘されるにしても、[illegible]

と思ふ。

[illegible]

[illegible]

所得の分配と生產力との不一致にある。換言すれば、勞働者大衆の購買力が其の生產に對しては過少にある。然らば勞働者の購買力は何故に生產力に比較して乏しいかといへば、これを決定するものは所謂資本の蓄積である。同時に反對に、商品の過剩の生產が招いて勞働者を過剩ならしめることも當然考へ得らるべき所であらう。生產力の發展は斯の如く過剩勞働者と過剩商品とを造り出し、而して、此の結果現象は又相互に右記の如き因果關係に結び付けられてゐるのである。マルクスを批評するには此理論の當否を吟味しなければならぬ。

何故に過剩勞働者が造り出されるかといへば、マルクスに從へば、資本の蓄積進行と共に、所謂資本の有機的組成が變へられて、機械、道具、原料等に投ぜらるゝ不變資本部分が增加して、賃銀として支用せらるゝ可變資本部分の割合が減少する爲めであるといふ。而して資本の不變部分增大といふことは、事實上に於ては機械の採用を意味するものと解して好からう。機械の採用其自身は當然不變資本の增加を意味するが、機械採用の結果として生產力が增進すれば、原料の消耗が多くなる。而して原料はマルクスの場合には、賃銀と相對する不變資本の一部分を成すからである。斯の如くにして賃銀資本即ち可變資本の資本總額に對する割合は、蓄積の進行と共に減少する。而して勞働に對する需要の大小を定めるものは、此の可變資本のみであるから、勞働者の境遇の良否窮達は、一に此資本部分と勞働人口との關係如何に由て定まる。前者が後者に對して豐富たる場合には、勞働者の狀態は比較的安樂であり、其反對の場合には、反對の結果を見る譯である。而してマルクスは機械の採用は勞働者の一部を不要ならしめると解して居る。此の失業者が即ち產業豫備軍であつて、これが產業現役軍の賃銀騰貴を妨げる重錘の役目を果たすものである。

勞働者狀態良否の說明を斯く資本額と勞働人口との關係に求めるのはアダム・スミスやリカアドオが說く所と同軌に出るものであつて、此點マルクスの論法は極めて正統學派的或は賃銀基金說流であるといつて好いが、たゞ勞働人口と相對立せしめられる資本額の範圍が、彼等の場合よりも濟く狹小となり、スミスの場合に資本總額であつたものが、リ

[illegible]

マルサス [illegible]

リカアド [illegible]

マルクス [illegible]

（Lは賃銀、Kは資本、Pは人口、cは固定資本、cは流動資本、rは原料補助材料、vは可變資本を示すものである。）

是に由つて觀るに、マルクスの蓄積理論系の中心をなすべき賃銀理論は、要之人口と可變資本との關係、則ち勞働力の需 [illegible]

[illegible]

たい。然るに若は勞働の需給の關係を、資本家に對し一層有利なる樣に置き換へるものではない、さうなることはないのである。而して勞働者に不利なる此の需給關係は、分擔に依て造り出さるゝのではない。資本は其の有機的構成を益々高めに進めることに依て、（卽ち資本總額中に於ける不變資本の割合を益々大ならしむることに依て）自ら造り出すといふのがマルクスの說である。

要するに、現在社會に於ける勞働者の狀態を說明するものは、可變資本と勞働者人口との關係である。而して此關係は、結局勞働者を極度の困窮に陷らしめねば已まぬといふのがマルクスの斷定であるらしい。屢々引用せらるゝ資本論の左の文言は、此事を述べたものである。「產業豫備軍たる相對的過剩人口を常に蓄積の範圍及びエネルギーと均衡せしめる法則は、火神ヘフエーストスの楔が巨神プロメシユースを巖に打ちとめたよりもより堅く勞働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照應した窮乏を生ぜしめるのである。斯くて一方の極に於ける富の蓄積は、同時にまた、其對極たる、已れ自身の生產物を資本として造る階級の側に於ける窮乏、勞働苦、奴隸狀態、無知、凶暴、道德的頽落等の蓄積たるのである。」（第一卷第二十三章）。併し果して此斷定が當つてゐるか否かは、勞働人口及び可變資本それぞれの增加速度に徵して見なければならぬ。

マルクスの產業豫備軍說は、一面に於てマルサス人口原則の排棄を意味するものである。マルサスは人口と食物との增加速度を相對照して、後者が前者に及ばざることを斷定したのであるが、マルクスは、マルサスが食物に對しての絕對的過剩人口と見たものは、實は簡單にいへば、機械の採用による失業者に外ならざることを言ひ、從つて、資本主義的生產方法の撤廢と共に、所謂人口過剩の原因も亦た一掃せらるべきことを其中に含めたのである。併し乍ら、マルクスの見地に立脚しても、人口增減の速度は矢張り勞働者狀態を決定する一因素たることを失はぬものである。假りに可

れである」而して此三者皆な之を理論的に決定し得るだけの條件に基いたものではない。[illegible]益々増加し、「勞働者の窮乏、勞働苦、奴隷状態、無知、野蠻、道徳的頽落等[illegible]といふことは、マルクスの論據では理論的に論證し得ない筈である。たゞマルクスに就て考ふれば、人口と可變資本との關係如何に勞働者に有利であつても、賃銀の騰貴には或限度があるとは言ひ得るであらう。蓋し、賃銀の騰貴が或程度以上に搾取率(餘剰價値率)を減少せしむるに至れば、或は利潤の刺戟が鈍らされて蓄積の勢が阻礙せらるゝか、或は資本の高度化(人間勞働に對する機械代用)を促進することに依て、可變資本對勞働者數の關係を再び後者に不利とならしめるものと豫期されるからである。けれどもそれは餘剰價値に對しての賃銀騰貴の限度に就いての事であつて、勞働者の所謂實質賃銀(即ち賃銀額を以て購入し得る必需品、快適品、享樂品、或は贅澤品の數量)は勞働の生産力が增進しさへすれば、理論上は定限なく騰貴し得る筈である。

リカアドォが始め勞働者に及ぼす機械採用の影響を樂觀し、後に其説を改めて「機械を人間勞働に代用することは、勞働者階級の利益に取つては屢々極めて有害なることを納得するに至つた」といひ「勞働の階級が懷ける、機械の使用は彼等の利益を傷けることが屢々であるといふ意見は、成心や誤謬に基づくものではなくて、經濟學の正しき原理に適へるものだ」と謂ふに至つたことは有名な事實である。彼は其の主意を約説して、一社會の純所得の增加は必しも其總所得の增加を意味せぬ「地主及び資本家が其收入を仰ぐ所の一方の基金は增加しながら、同時に今一つの基金、即ち勞働階級が主として依賴する所の基金は減少することがあり得ることを納得すべき充分の理由を認める」といつてゐる。スチュアアト・ミルがリカアドォに從つて考案した例説は、下の如くである「一人の自作農業家があつて、穀物二千クォタアを資本とし之を以て勞働者を扶持して耕作を營む。勞働者が彼が爲めに、年々二千四百クォタアの穀物を生産する。

例[illegible]ある。[illegible]利潤[illegible]ある。然るに[illegible]今一年間[illegible]
收穫の半數[illegible]改良を施し[illegible]改良の[illegible]收穫[illegible]半數を[illegible]
あるものとする。一年の終りに於いて彼は二ヶ年[illegible]改良[illegible]一千ヶ[illegible]
て[illegible]せらるゝ[illegible]半數に[illegible]然るに[illegible]
年々二千四百ヶ[illegible]
る[illegible]なる[illegible]一千四百ヶ[illegible]
[illegible]

[illegible]（リカアドオ）[illegible]

[illegible]

第一あるが、問題は、只だ一不變に…[illegible]…不變に…[illegible]…を出門し得るといふことに存する。最も都合好く行けば、其れは都合よく…[illegible]…されゝば、生産費從つて生産價格が低廉となり需要の擴張を惹起す。從つて、若し其…[illegible]…倍…[illegible]…し、生産物の價格も半減した爲めに需要が倍加したとすれば、機械採用の爲めに結局一人の失業者をも出さずに濟む筈である。此想像は餘り好都合すぎて、讀者の微笑を誘ふであらう。併しこれも絶對的にあり得ぬ事ではない。低廉となつた生産物其れ自身に對する需要は増さずとも、其消費者の他の貨物に對する購買能力は、其爲めに増進するとも考へられる。從つて他の貨物の購買量が増加し、是等貨物の生産が機械による失業者の一部又は全部をば、直接間接に吸收するであらう。又若し貨物は低廉となつたのに、その貨物をも、他の貨物をも買はぬとすれば、其時買力の餘裕は貯蓄されると見て好からう。貯蓄は何等かの方法に於て勞働者雇傭資力となつて市場に出現する筈である。更に又機械の採用といふが、機械の製造其者が人手を必要とする。但し此場合に明白なることは、機械に依て節約せらるゝ勞働量は、機械製造の爲めに要せらるゝ勞働量よりも必ず少なくなくてはならぬ。若しさうでなければ、機械の採用は全く意義を成さぬといふこと是である。兎に角此の如き理由に由て、學者中には、機械に依て不要となつた勞働者は、必ず機械の採用其者に依て直接間接に雇傭の途を發見すると主張する者もあるのである。

勿論上述の如き場合は決して起り得ぬとは限らない。例へば、印刷術の發明に依て失業した寫字生の數は、忽ち之に取つて代つた植字工印刷工の數の凌駕する所となる。又今日鐵道從業員の數は、遙に往時の驛路に於ける人足を超過するであらう。併し上述の場合に於て、機械採用の爲めに生産物が低廉となると同時に一方に於て消費者の購買力に變りがないものと假定して居る。併し乍ら、此假定は必ずしも事實に合ふものではない。機械の採用の爲め失業者を出した場合、若し其失業者自身が其生産物自身の顧客であつたならば、生産物の低廉は其限りに於て毫も需要の増加を惹き起こさ

[illegible]

及び其他に由て來つてゐる事であるが、若しも農業が資本主義的に經營せられ、大なる資本の利用せらるゝこととならば、機械を使用することに多き工業が之を産み出して、寧ろ農業に於てはそれと正反對の運動が、而かも餘りに過當に行はれることゝ爲る。獨逸の一例を引用しても、一八八二年に於ては總人口約二千四百五十萬人中六百萬が都市、千八百五十萬が村落住民であつたのに、世界大戰前に於ては農村人口は千七百萬人に減少し、商工業人口は五千萬に増加してゐる。文明諸國の統計を見れば、何處の國に於ても同樣の現象に遭遇する。人口は到處に於て、不變資本の増加の速かならざる農村を去つて、其の速かなる都市に集中しつゝあるのである。これは確にマルクスの理論とは相反すと見らるゝ著大なる現象である。

尤も、是に反對して、マルクスを辯護するものはある。其一は、ベルンシユタインの説で、其れに由れば、人口の都市流入は人口が農業から工業に移ることを意味するものではなくて、畢竟農村で營まれてゐた工業が單に地理的に都市に集まるといふに過ぎぬ。詳しくいへば、從來村落で營まれた手工業が都市大工業の競爭に對抗し得ないで倒れ、或は農家の副業として營まれた各種の工業的作業が同じく大工業に壓倒される結果、是等の手工業者、或は副業を失つた農民が都會に移るといふに過ぎぬといふのである。此理由でオッペンハイマアを反駁するものは此外にもある。ユリウス・ヴルフも其一人であり、我高田博士にも同軌の説があつたと記憶する。

此批評には道理なしとはいはれない。オ氏自身も此批評に一部の眞理のあることを認め、都市流入者の群を村落に於ける工業分子に依て少しく膨脹させられてゐることは事實たといつてゐる。併し彼に從へば、それは僅に一小部分のことで、到底農村民都市流入の著大なる事實全部を説明し得るものでないことを、數字を以て説明せんと試みてゐる。其試み其者は、原著の叙述に讓りたいが（Oppenheimer, Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre S. 119 ff.）、兎に角ベルンシユタインの批評は眞相の全部を盡くして居らぬやうに思はれる。若しも、彼の言ふが如く、都市流入人口は皆

[illegible]

る必要に迫られてゐる爲め、其の消費者購買の爲めに生産する商品を生産する、[illegible]といふこと[illegible]資本が生産に依て利潤を獲得し得んが爲めには、第一、生産行程上に於て勞働力が搾取されねばならず、第二に、生産された商品が販賣せらるゝことを必要とする。若しもそれが販賣されぬか、僅に一部分販賣さるゝに過ぎぬか、或は生産費と普通利潤とを加算した丈けの價格では賣れぬとすれば、其場合には成程勞働者は搾取を受けるが、此搾取は資本家に取つては搾取として實現せられないのである。直接の搾取の諸條件と搾取實現の諸條件とは同一でない。前者は社會の生産力に依てのみ制限せられ、後者は樣々なる生産諸部門間の比例と社會の消費力とに依て制限せられる。然るに社會の消費力なるものは絶對的の生産力に依ても、また絶對的の消費力に依ても定まるものではなくて「人民大衆の消費を多かれ少かれ狹隘なる限界内に於てのみ變動し得る最低限度に引下げる、對抗的分配關係を基礎とする消費力に依て定められる」のである。一方「更に又それは蓄積衝動——資本の增大と擴大せられた規模に於ける剩餘價値の生産とを求める衝動——に依ても制限される。」マルクスは斯樣な言葉で說いてゐる。而して斯の如くにして起る「內部的矛盾は生産の外部的舞臺を擴大することに依つて均衡を保たうとする。然るに生産力が愈々發展するに從ひ、それは愈々消費關係の依つて立つ狹隘な基礎と撞着するのである。」

右段に述べた限りのマルクスの說は、恐慌論上に於てロオドベルトス等の唱へる所謂消費不足說（Unterkonsumtions-theorie）に外ならぬものゝやうである。現にマルクス自身明瞭に「宛ら社會の絶對的消費能力だけが限界であるかの如くにして生産力を發展せしめんとする資本家的生産の衝動に比較して考へた大衆の貧困及び消費制限が、常に凡ゆる現實的恐慌の終局原因となつてゐる」といつてゐるのである。（改造社版資本論三四頁。）併し少し考へて見ると、マルクスの理論は一見して認められるほど明白な道理を說いてゐるものではない。生産力は無限に發展し、消費力は制限されてゐるといへば、如何にも當然兩者間の不均衡が惹き起こされねばならぬやうに思はれるが、何故消費力が制限されてゐるかと

者も一致せず、一[illegible]
中間恐慌を論ずる章の一節に一致せし[illegible]
([illegible])であると言つて居る。常に重ねたるのみならず、此[illegible]
は彼等自身の生産物の中から僅かに小さな一部分を受けてゐるのであつて、彼等の生[illegible]受に分[illegible]。勞働者[illegible]増
膨することになれば、隨つて窮境からも救はれるであらうと說くことに依て、右の事[illegible]深い洞[illegible]の如く
見せ掛けようとする者があるとすれば、我々はたゞ次の如く答ふべきである。――どの場合の恐慌も、勞働者一般的に
品騰し、勞働者階級の中に歸する所の再生產物中の消費に豫定された部分が現實的に增大する一の期間に依つて準備さ
れるものであると。」而して此一項に就いて、エンゲルスは嘲笑を含んでロドベルトス恐慌說の萬一の信仰者たちの注
意までに。――F・E」と故らに註記して居る(改造社版(2)三六九―三七〇)。彼は此の註記と前段引用の大衆の貧困及消
費制限が常に凡ゆる現實的恐慌の終局原因になつてゐる」云々との間に自ら毫も矛盾を感じなかつたものであらうか。
兎に角恐慌論に就いてはマルクスの理論を批評することの外に先づ彼の眞意の那邊にあるかを、確めなければならない
のは甚だ厄介である。

資本主義崩壞の論據として看過すべからざるは、マルクスの利潤率遞減の理論である。此理論はいふ迄もなく、勞働
價値法則當然の歸結である。生產力の增進は一部其原因、一部其結果として必ず資本有機的組成の高度化を齎すといふ。
勞働者から搾取される餘剩價値は可變資本とのみ一定の比率を保つ約束であるから、資本の組成が高度となるに從ひ、
卽ち不變資本の割合が增大するに從ひ、餘剩價値と總資本との比率、卽ち利潤率は徐々低減せざるを得ぬ道理である。資
本主義を活かしむるものは利潤であるのに、其利潤は斯くして必然的に低減するといふ。マルクス[illegible]

一致である。曰く、[illegible]蓄積の進行が[illegible]くることなき故に、勞働の價格が騰貴[illegible]較が鈍る故に、蓄積が弛んで來ること。この場合、蓄積は後退することになるが、それと同時にまた、[illegible]の原因(卽ち資本と、搾取し得べき勞働力との不均衡)は消滅する。要するに、資本家的生産方法の機構は、それが一時的に造り出した障碍をみづから除去することになるのである。」と(改造社版三六一〇頁)資本蓄積の[illegible]であるならば、斯くいはれるのは當然である。之を利潤率遞減の理法に適用すれば、當然[illegible]の結果、資本蓄積は[illegible]鈍るといはねばなるまい。賃銀の騰貴は利潤を減少せしめるから蓄積を阻止して再び賃銀を前の低率に復せしめるけれども、資本高度の結果たる利潤率の低減は、愈々資本蓄積の歩みを速かならしめ、遂にこれを[illegible]に赴かしめねば已まぬといふのでは、たゞ所望の結論をのみこれ求むるに急だといふ批評を免れぬであらう。

生産力と生産關係との抵觸が、一社會形態を滅じて次のより高き形態に代らしめるといふのが、唯物史觀の一公式である。それを資本家社會に適用して具體的にいへば、卽ち現社會は過剰勞働者と過剰商品の壓迫の爲めに存續不可能となるといふに歸着するやうに見える。本文は此問題に就いての若干の所見を述べたものである。結論の不充分なるは自ら顧みて甚だ慊らぬ所であるが、些かでも問題の所在を指摘することに役立ち得れば、私の所志は果たされたのである。

社會改革者の内的煩悶

―ミルの自叙傳を讀む―

河合榮治郎

[illegible]

（二）

ジョン・スチュアート・ミル[illegible]

ン[illegible]を[illegible]成することは[illegible]ないであらう。況[illegible]主義[illegible]に[illegible]、一個[illegible]は今後も屢々繰返さるべき對立である。此の意味に於てベンサム・イデオロギーは[illegible]の學徒にとりて永く研究に値する。ベンサム自身は浩瀚なる全集を殘したけれども、彼の思想は各所に散在して捕捉するに困難である。彼に代はつて先師の爲めに經驗主義のイデオロギーを大成したものが、ジョン・スチュアート・ミルである。彼は「論理的體系」と「サー・ウィリアム・ハミルトン哲學の檢討」とに於て、經驗論的認識論を述べ、「功利主義論」に於て、功利主義の道德哲學を、「自由論」に於て自由主義を、「代議政體論」に於て議會主義を、「經濟原論」に於て正統派經濟學を大成した。ミル研究の一つの意義は此の點に在る。

然しミルに伴ふ興味は必ずしも之のみではない。彼は單にベンサムの影響の下に育つたに止まらないで、後年コールリッヂの影響を受けて、兩者のイデオロギーを調和せんと企てたことに在る。その調和がどの程度まで成功したかは別として、此の企てに着手することにより、遙かに十九世紀後半の理想主義運動の爲に、當時の人に心の準備を整へた。かくして彼はベンサム・イデオロギーとグリーン等の理想主義との中間に在る橋梁の役割を演じた。此のことは前に擧げた諸著の何れにもその痕跡[illegible]此の書は一[illegible]の思想[illegible]に[illegible]移を[illegible]せる[illegible]の跡を示し、苟くも思想の成長[illegible]によつて、幾度か繙かるべき貴重なる人生の記錄である。

筆者がミルの自叙傳に始めて接したのは、高等學校に在學せる時代であつた。爾來それを繙くこと數回に及んだが、その都度之より受ける感銘は必ずしも同一ではなかつた。ある時は彼がベンサムに傾倒せるに共鳴して、筆者も[illegible]經驗主義を謳歌した時があつた。又ある時は彼が理想主義に推移した變化[illegible]て、同感の念禁ずべからざることもあつた。又ある時は單に思想史上の一文獻として、冷靜なる研究の對象として之を扱つたこともある。最近に於て筆者の興味を喚起する自叙傳の一節は、「余の內面的歴史に於ける一危機」と題する第五章である。筆者は曾て此の章をベンサム・イデオロギーの自己反省と解して、やがて理想主義への推移を物語るものとして述べたことがある（拙著「社會思想史研究」第一卷二七七―二八二頁）。然し現在の筆者に對する興味は、必ずしも此の點のみではない。そこには單にベンサム・イデオロギーの批判・破滅[illegible]のみならず、凡そ一個の理論を持つ革命的改革者が、必然に逢着せざ

[illegible]。常に理論[illegible]下級に[illegible]際するに[illegible]は、それから有効しうべき問題を、社会改革の階段に従事する場合に於て、必ず解かざるべからざるものとして、彼の自ら解決を要するものである。かくしてミルの経験した危険は、今日の[illegible]百年の問題として默會するには、彼は現代的の重要さがある。それは社会改革者が一度は遭ふべき内面的問題として、終始、問題とされるに価する。彼の[illegible]、千八百[illegible]年、自叙伝の[illegible]されるが、此の章[illegible]世界[illegible]この論文の内容は多岐に[illegible]、[illegible]

[illegible]

三

今日の[illegible]社会改革者[illegible]内面的問題[illegible]

[illegible]

下に成長した時代である。彼は父ジェームス・ミルに[illegible]ムの[illegible]として一人の門に出入し、父の親友マルサス・リカルド等は共にベンサムの[illegible]の下にある人々である。其の父と[illegible]の指導の下に在ったミルは、生れながらにしてベンサミストであったが、特に彼が千八百廿一年[illegible]から成ったが、父の指導から離れて自身の途に入った時、彼の手にした書物はベンサムの主著[illegible]立法論[illegible]であ[illegible]其の書を読了した時に、ミルは完全に自覚したベンサム[illegible]の影響を受けた。彼の[illegible]的[illegible]思想は、今日自覚の[illegible]して、[illegible]者[illegible]のみならず彼はベンサム[illegible]かくして[illegible]第一期にベンサミストとしてのミルの時代[illegible]区別することが出来る。

第二期は千八百廿六年から千八百四十一年までを含んで、前期に[illegible]べき時代である。此の時代の前期に現はれたのは、自叙伝[illegible]に[illegible]る内面的危機である。[illegible]

に基づ[illegible]見るべからざる論理の[illegible]で、彼の[illegible]に[illegible]し、[illegible]代なかりせば、單に一ベンサミストとして終るべかりし[illegible]、各方面より豐かなる收穫を提へ、思想上の一飛躍をなしえたのであつた。彼を思想史上に意義あらしむるは、實に此の時代に流入した暗示の賜物である。第三期は千八百五十一年から死に至るまでを含み、之より先き永き戀愛の關係に在つたテーラー夫人との結婚が成立した年に始まり、第二期に對する反動として第一期に復歸したとも云ふべき時代である。彼が殘した重要な作物は、此の第三期に產れたものではあるが、第一期への復歸は決して第二期を無意義として第一期其儘への復歸ではない。第二期の收穫を前提として、變化せる社會事象が、彼の第一期に受容せる思想を力說せしめたに過ぎない。經驗論、功利主義、自由主義、議會主義が、等しく第一期のイデオロギーたるに拘はらず、皮想なる表面に囚はれずして論旨の課程を注目するものは、第二期の痕跡が點々として第三期に殘れるを指摘することが出來るであらう。今之等三期の各々に就て詳述することは、一方から云へば極めて興味あることではあるが、本文直接の課題に屬するものではない。社會改革者としてのミルの煩悶を語るに必要あるとは、第一期より第二期への心の變化である。第[illegible]

[illegible]破せるは[illegible]によつて成立[illegible]、人性論に於て快樂主義を採り、人は快樂苦痛[illegible]云ふ自然[illegible]に[illegible]く、正義とか人道とか眞理とか理想とかは、要するに人を欺く讒詐たるに過ぎないと云ふ。「道德哲學」に於て功利主義を採り、最大多數の最大幸福が善であると唱へて、理想主義の空なる概念が形式的無內容なるに對して、明確なる內容を與へんとした。「社會哲學」に於ても亦同一の原理を提げて、あらゆる社會制度を批判し、最大多數の爲めに制度を改革する民主的使命を果さんとした。更に「社會思想」として自然主義を採り、最大多數の爲めの最大幸福を實現するの路は、唯各個人の自由に放任して、政府が無用なる干涉を爲さざるにありとした。舉げ來れば思想の上下を一貫する誠に巨大なる體系である。而も此のイデオロギーの特異性は、當時自然科學の研究に使用されて成功を博した自然科學的方法を採用して、メスの如き明快なる因果關係の追窮を押し進めたことに在る。決然として斯の如き素朴なる理想主義と對立して、神秘の幕を斬落して現實の眞路を試みたるに在る。更に此のイデオロギーは單なる學徒の理論ではない。稍もすれば現存制度の保守思想に傾かんとする[illegible]

て成長し來たる、[illegible]二十歳の[illegible]論は、青年ミルをしてベンサム、自分[illegible]を喚起した。而もミルのベンサムより受けたる感化は、單に之のみではない。更に彼は「自叙傳」に云ふ。

讀み進んで行くに從ひ、此の智的明快に加へて、人事の實際的改善の前途が眼前に開けて、私の熱心を喚起した。……彼は人間の意見及び制度法規が如何なるものであるべきか、いかにすれば其をして其の正にあるべき狀態になすことが出來るか、又現在それが如何に甚だしく理想と懸隔してゐるかと云ふ事に就て、此の書の頁毎に一層品明安裕なる見地を開拓するが如くに見えた。私は此の書の最後の卷を讀み終つた時別人となつた。ベンサムが理解し、さうして此の三卷を通じて適用した通りの「功利の原則」は私の知識信仰の離れ〴〵で、斷片的な組成分を結合せしむる要石として適確に當嵌まつた。それは私の事物の考へ方に統一を與へた。私は今や獨自の意見を持つた。一の信條、一の教義、一の哲學を有つた。宗教と云ふ言葉の最善なる意味の二つに於て一の宗教を有つた。

此のことの意味は果して何であらうか。彼は此に最大多数の最大幸福を善なりとする功利主義の道徳哲學と、之を以て社會制度を批判し改革せんとする社會哲學とを把握したのである。人は皆何らかの意味に於て、人生の目的と社會の目的とを知らざるものはない。唯異る所はいかにそれを意識して明確なる原理として所有するや否やに在る。之を意識せざる場合に於て、[illegible]て動く人ではない。今や[illegible]信仰を持ち又我を持ち目的を持つた。彼は之に始めて精神より自覺の境涯に入り、自然より人となつた。年齡十五歳の青年の歡喜は察すべきである。かくして完全なるベンサミストたるをえた青年が、五年の後に於て內面的危機に瀕しやうとは夢にも思はなかつたであらう。所謂內面的危機とは千八百廿六年から廿七年にかけて、約一年間憂愁に閉された時代を云ふ。此の憂愁に就ては、ミル研究者の間に之を身體上の疲勞から來た神經衰弱に歸するものもある。なるほど此の以前彼はベンサムの著述の編纂を助けて疲勞してゐたことは事實であるが、此のことを以て內面的危機を說明することは、餘りに淺薄である。私は此の危機の襲來に興味ある青年時代の問題が認識する。而して之を解釋することが本文の主題である。

三

然らば內面的危機とは何であるか。彼は「自叙傳」に云ふ。

千八百二十六年の冬、私は始めてベンサムが[illegible]その[illegible]して、殊にウエストミンスター・レヴイユーが、[illegible]私

[illegible]二者共に[illegible]想主義が、善に與ふる概念が形式的で無內容であるに反して、明確な基礎を內容として指示してゐると思はれる點に特異性がある。當時社會制度が一部特權階級の爲めのみに獨占され、民衆の利益が無視されてゐた時に、最大多數の最大幸福の爲に社會を改革すると云ふことは、靑年ミルを誘引するに餘りあつた。況んや功利主義は單純にして明確なる基準を與へてゐるに於ては、彼が功利主義を信奉したことは極めて當然である。然し果して功利主義はミルを滿足せしめうる者であらうか。最大多數の最大幸福と云ふ言は、一見內容を指示すること明確なるかの如くであつて、實は嚴密に考へるとき、「最大多數」も「最大幸福」も共に計量しうべからざる曖昧模糊たるものに過ぎない。從つて實際問題に逢着して、何れが最大多數の最大幸福に合するかは、容易に判斷しえない。內容を指示することに特異性を持つ功利主義は、結局それは人々の錯覺たるに止まる。若し功利主義が實踐的の改革原理たりうる場合ありとすれば、それは民衆が漠然ながら何が最大多數の最大幸福なるかを既に直感してゐる場合である。而して當時の英國はあらゆる方面に亘つて改革の必要に迫られてゐた時であるから、民衆に此の直感が具[illegible]ものが內容の不明なものでさへ[illegible]的改革原理たりうる場合もあれば、[illegible]に於ても改[illegible]してゐる時である。然し社會改革者の爲の任務は、今日民衆に感ぜられてゐない社會惡に對して、民衆の良心を喚起するに在る。此の場合に最大多數の最大幸福は內容不明なる爲に、民衆の自覺を喚起しえないならば、結局改革的原理たりえないことゝなる。

然し此の點は必ずしも功利主義のみの缺點ではない、功利主義も亦缺點を免れえないと云ふに止まる。然しそれよりもより大きい缺陷は、功利主義が結局循環論に終ると云ふことである。今最大多數の最大幸福と現在社會制度との關係は、次の二樣に考へることが出來る。その第一は現在社會制度が最大多數の最大幸福に合致してゐる場合であり、その第二は兩者が合致してゐない場合である。第一の場合は現に功利主義が實現されてゐるのであるから、改革の必要が始めから存在しない。第二の場合に於てのみ改革の必要がある。此の場合に功利主義は果して改革的原理たりうるや否や、之が吾々の問題である。[illegible]場合にも亦二つの場合を假定することが出來る。[illegible]現在社

的以前たらしめることには、[illegible]
と云ふ功利主義は、[illegible]
若し功利主義を純粹に解釋すれば、論理上は宿命論に來らざるをえぬ。改革的原理として功利主義に歡迎したミルは、自己反省の時に以上の破綻を意識したのではあるまいか。

（四）

次に前の點よりも更に重要なことは、快樂主義と功利主義との接續に關して、ミルは遂にベンサム・イデオロギーの救ふべからざる矛盾に逢着したのだと思ふ。快樂主義は教へて云ふ。人は自己の快樂を求め苦痛を避けんとする自然必然の衝動によつてのみ動くと。又功利主義は人を願つて云ふ、最大多數の最大幸福を圖れよと。此の兩者はいかにして接續するのであらうか。之に就て二つの場合を想像することが出來る。第一の場合は最大多數の最大幸福を圖ることが、ある人の自己の快樂と完全に合致する場合であり、第二の場合は二者が必ずしも合致しない場合である。前の場合にはその人の快樂に從へば、必然に最大多數の最大幸福を圖ることになるのだから、快樂主義と功利主義との矛盾の問題は起らない。然し同時に此の場合には最大多數の最大幸福を圖れよと願ふ必要もない。即ち功利主義の必要
[illegible]
は、自己の快樂[illegible]最[illegible]
時に最大多數の最大幸福を圖れよと云ひ[illegible]命令[illegible]出
があるのである。然し自己の快樂と最大多數の最大幸福とが合致しない場合に、假りに自己の快樂に從ふたらば、功利主義の命令に背反する結果となり、若し自己の快樂に反するに拘はらず、最大多數の最大幸福の方を採るならば、人は必ずしも快樂によつてのみ動くものでないといふ示證を示すこと〻なり、快樂主義の人性論に認識の誤謬がなければならぬこと〻なる。若し快樂主義を正當な認識だとするならば、自己の快樂の赴く所に放任して、最大多數の最大幸福の實現の如きは、放擲して顧みないこと〻ならねばならない。此に於て社會改革を斷念する宿命論に歸せざるをえない。快樂主義と功利主義、此の兩者は並立しうべからざる不調和の結合である。その何れかを捨て〻何れを採るか、その取捨を決せねばならぬ立場に置かれる。

實際に於て快樂主義と功利主義とが矛盾せざる場合、即ち自己の快樂と最大多數の最大幸福とが完全に合致する場合は極めて稀有である。それは或はその人が天性生れながら沒我的犧牲的の人か、或は客觀的には兩者が合致せざるに拘はらず、その人の主觀に於て自己の快樂に從ふことが、最大多數の最大幸福に

合致するものと冒險して居るのである。然しそれだから常に不る。彼等の人は團體しえない、故に何時かくの如き人があるとしても、内面的に關係するものがおさまる人からは、強き性格を同化しえない。弱き性格から同化しうる最大多數の最大幸福の實現は許されるのでは限定せざるをえない。又自己の快樂と最大多數の最大幸福とが合致すると冒險することは、單に事態の實相を自ら否認する間のみ存續しうることとて、客觀的の不一致は早晩この人に矛盾を意識する事を餘儀なくするであらう。彼の實際に於ても多數の場合は、自己の快樂と最大多數の最大幸福とが合致せざる場合もなければならぬ。それが[illegible]に於いて云ふ所は、當の矛盾を意識したことを意味するものに相違ない。而して前者が矛盾する場合に、快樂主義と功利主義と何れかを取捨せねばならぬとすれば、之がベンサム・イデオロギー一の命題[illegible]求し何を云ふ

精神は常に第二義的であるのではない。思ふにこれによつて世界の改革者たることを[illegible]我の全部によるから、從って後によつて一定のことは、功利主義の一部快樂主義に存するのはない。若しこれを取れば、[illegible]ならぬのは、功利的な快樂主義ともいへる。若し最大多數の最大幸福に於ては、自己の快樂主義は[illegible]なければならぬ故に、ベンサムはこの功利を目的とし

ないに違ひない。若しそうならば自己の内部に自己の快樂を追求する欲望と之を犠牲として他の爲めに働かんとする欲望とが闘爭するものとして、後者をして前者を支配せしめんと努力することを認めることとする。此のことは彼が権力排斥に努めた結果、功利主義を是認するものに外ならない。快樂主義と功利主義とが當然に調和一致するに拘はらず、それが内的危機に來るまで、此の矛盾を意識しなかつたのは、言に快樂主義を採りつゝ、事實に於て無意識の裡に、理想主義の人格論を採用し、その[illegible]にまれて快樂主義と功利主義との矛盾の意識が延期されてゐた。この延期、之れ以上不可能になつたのが、内面的危機の眞相であらう。かくしてミルが快樂主義を懸念せざるをえざらせば、それは單に快樂主義の懸念のみではない。自然科學的研究方法の[illegible]に[illegible]して、之が限度を承認せざるをえざるに至つたことを意味する。千八百廿一年彼がベンサムから離脱して受容したものが、科學的研究方法に在つたとするならば、之に缺別なくることは、それによつて一旦[illegible]せしめた[illegible]の否定をえないかく解する時に、ベンサム・イデオロギーの根底は、[illegible]根本問と言はねばならぬ。ミル、[illegible]の一年を定めるに任ずる重大なる後事である。

ミルの歸着した最後の結論は、之と密接な關係にある。若し前述の如き課程によつて、快樂主義の方を修正したとするならば、その結果はいかに歸着するであらうか。快樂主義はたとへ誤つてゐやうとも、何故最大多數の最大幸福を爲さねばならぬかの説明を爲しえた。即ちそれを爲すことが汝自らの快樂であるからと云ふのがその答へである。それが答へとして正當ではないにしても、最大多數の最大幸福即ち善をなすべき行爲の原動力として、自己の快樂を擧げてゐたと云ふ意味に於て、ともかくも一つの答への形式は具備されてゐた。然るに今人は自己の快樂のみを求めるものと云ふ快樂主義が捨てられて、人には自己の快樂を追ふ欲求と、自己の快樂を捨てゝも最大多數の最大幸福を圖らんとする欲求とが、併立して内部的鬪爭を繼續するものとみられると、此の鬪爭をいかに決定するかの批判の基準が問題とならざるをえない。曩には自己の快樂なるが故に、最大多數の最大幸福を圖れと云ふことで、一應答へられてゐた問題が再び頭を擡げて、何故最大多數の最大幸福を圖らねばならないかと云ふ一歩窮局の反問に直面することゝなる。ミルは當時自ら自己に問を起して、「若し最大多數が最大幸福になつた

[illegible]

[illegible]に撞着して、之を[illegible]、更に[illegible]が存在することを[illegible]の中に承認したことに外ならない。これの終局なるものが最大多數の最大幸福を圖る[illegible]として、何故之を圖らざるべからざるかの問に答へるものであり、吾々の心の内部の鬪爭に、最後の判決を與ふる基準でなければならない。快樂主義と功利主義との矛盾は、遂に問題を[illegible]つて此にまで到達せしめた。

社會改革者は常に二つの對立せる社會を持つ。一は理想の社會であり、一は現實の社會である。前者を以て後者を批判し、後者を化して前者に近づかしめんとする。多くの人は唯一つの社會しか持たない。それは今ある社會である。唯之を持つのみなるが故に、多くの人は安き眠りに耽りうる。唯社會改革者は二つの社會を持つ、それはある社會とあらねばならぬ社會である。二つを持つが故に、靜かな眠りは彼に惠まれずして、活動と鬪爭と、困苦と迫害とに直面せざるをえない。然し真の對立はある社會とあらねばならぬ社會との對立ではない。此の對立は窮局に於て、彼の心の内部に於いて、あらねばならぬ社會を實現せんとする自我と、ある社會に滿足せんとする自我との對

[illegible]

改革者の意味と価値とがある。[illegible]

[illegible]

行なしたのである。

[illegible]

ことはできない。

ミルは根本的に[illegible]的につきつめた時、[illegible]

時に別のことが更に加へられた。それは今まで社會改革を唱へつゝ、直接社會改革に關係なく營んでゐた身邊の生活に統一が付いたことである。社會改革者はいかに改革に狂奔しやうとも、改革に關係したことのみが、彼の營む生活の全部ではない。家族の親愛を樂しみ、眞理を探求し藝術を愛好することも、更に娛樂も必ずしも絶無ではあるまい。之等を社會改革の事業と關係ありと云ふは牽強附會である。之等なくも社會改革の實の舉げられないことはない。若し之等なくば社會改革が成就されないからだと云ふならば、それは之等が改革の事業に關係があるからではなくて、之等のものなくば改革者が生活出來ないからである。生活出來なければ改革が出來ないと云ふに過ぎない。何故之等なくば生活が出來ないかと云ふならば、それが改革に必要だからでなくて、それが彼の人としての成長にとつて必要だからである。之等の欲求は、自己の快樂には屬しない。同時に社會改革の仕事自體でもない。而も社會改革者は身邊にかゝる生活を營んでゐる。若し社會改革が終局の善だと云ふならば、之等の生活はいかに價値付けらるべきであらうか。

ミルは社會改革と自己の快樂との矛盾から、改革の終局の根[illegible]

[illegible]

それは他をおいて自己の[illegible]を求めることに[illegible]る。[illegible]不定[illegible]べきか、[illegible]定まるべきか、其の問題は當然に起つたに違ひない。而して終局の善を「內的發達、人としての成長」に求めた時に、之等身邊の生活は當然にその主要なる要素として肯定された。此に社會改革の終局の根據を求めて、同時に生活の價値の統一がえられたのである。終局なれば常に統一がある。統一を求めんが常に終局に往らざるをえない。青年ミルは社會改革者として只管に邁進して來た。今や停止して何故なの反問を抱いて、社會改革の終局の根據を求めると共に、身邊生活の價値の統一を求め、此の二つながらをえた。之れ社會改革者の一度は逢着せざるべからざる問題である。彼は之に直面して煩悶の一年を送つた。內面的危機の眞相の一面が此に存在する。

（六）

之を要するに、第一に功利主義はそれ自體に於ては、改革的原理たらずして却て現狀を謳歌する保守主義に陥すること、第二に快樂主義の人性論と功利主義の道德哲學とは、理論上當然に矛盾する、その結果として快樂主義より來る宿命論を甘受する

[illegible]

[illegible]

[illegible]とを目的[illegible]

系である。功利主義の道德哲學は、最大多數の最大幸福なる内容を吾に與へた。吾に特定の内容を與へんとすること、之れ既に科學的立場より來る要求であり、最大の幸福にその内容を求めたこと、又科學的精神の表現に外ならない。功利主義とは道德哲學に現はれた自然科學的立場の適用である。快樂主義の人性論に至つては、その色彩更に顯著である。人は快樂苦痛といふ自然必然の衝動によつてのみ動く、此の自然の衝動を原因として人間の行爲を結果として、此の原因と結果との間に必然の關係を認めることは、正に自然科學そのものである。近世初期以來多大の成功を收めた自然科學的方法が、凱歌を揚げて人間を對象とするまでに侵入して來たのである。而して精密正確を求める學徒の心理は、双手を揚げて之を歡迎した。而もその結果が上述の暗礁に衝突し、再吟味を爲さざるをえざる危機に立つた。之れ單にベンサム・イデオロギーの再吟味に非ずして、凡そ一切の自然科學的方法に對する再吟味に外ならない。ミルの内面的危機に一般普遍性あるは、原因實に此に存る。

科學的方法の特異性は、ある現象と他の現象との原因結果の關係を明にするに存る。此の方法を自然に適用して、今まで神

[illegible]

[illegible]行された[illegible]

命に適用して、之を[illegible]の成果を收めんとすることは、十七八世紀以來絶えず試みられた企てである。然し自然に適用された科學的方法は、轉じて人間社會に及ぶ時に、必然にある限界に直面せねばならない。ある條件ある假定の下に於てのみ、その適用が許容されることを認めねばならないのである。原因といひ結果といふは何であるか。共にそれは時間と空間との中に既に存在を有せるもの即ち現象に付てのみ云はれる。社會の[illegible]もそれが時間と空間との中に存在を有する時に、當然に因果系列の中に含めうる。更に人間に就てもその行爲として既に現象となれる時、因果關係を知ることは可能であり、人間の中に快樂苦痛といふ必然の衝動があるとするならば、それが人間の生理的存在に必然に伴ふ限り、之をも原因として又は結果とすることも差支ない。之等の諸現象に直面して、一つの現象と他の現象との間に原因結果の關係を認識することは、人が之等の諸現象から特立し之を獨立するが故に、何等の問題を生じない。冷靜なる觀察者たる人は、觀察の對象を獨立して、嚴に科學的方法の任務に從ひうる。然し人そのものの原因結果の系列の中に

[illegible]……人が決定すると云ふ、……[illegible]……にイギリス……を置いて、両者に因果必然の関係ありとする時に、始めて時間が始まるのである。何故なれば異なる現象の間に因果関係が存在するといふことと、かゝる因果関係の存在を意識することとは、混淆し易くして、而も全く別個の問題である。因果関係は人の意識に関はりなく存在するとしても、……[illegible]……因果関係の存在を意識することは、……[illegible]

[illegible]

七

[illegible]

しめること[illegible]であらう。科學者は因果關係を追求する。而して因果關係は現象にのみ限定される。それは唯既に時間と空間との中に存在を有せるもののみの世界に妥當する。然るにあるべきこととは、今より後時間と空間との中に存在の與へらるべきものである。それは既に現實のものではない、未だ實現せられずしてやがて實現せらるゝものである。既に實現されたもの即ち現象の世界にのみ妥當する科學が、やがて實現せらるゝものに何等の口を挿むことの不可能なるは明である。若し今は實現さるべきものが、やがて既に實現されたる後に於て、それを因果系列の中に置くことは可能であらう。然しその場合にはあるべかりしこともあるべからざりしことも、一樣にその系列の中に置かれて、何れもに因果必然の關係が辿らるゝに過ぎない。その場合にあるべかりしこととあるべからざりしこととの差別はありえない。善惡の價値を沒して、何れもに原因が見出さるゝに止まる。それは既に實現されし現象の說明にはならう。然し今何を實現すべきかに苦しみ悶える人間にとつて、何の指針にもなりえない。人は何を爲すべきかを問ひつゝある時に、何を爲すとも何れもに必然の原因ありと答へらるゝは、パンを求めて石を與へらるゝが如くである。眼前に社會改革の急迫せるに臨んで、只管にいかにあるべきかの科學的理想を求むることは、[illegible]ふ。若し[illegible]改革に冷淡である。若し原理を打ち出しえずとせば、これは科學の無力である。科學的方法に固執することと、社會改革の原理を要求することとはそれ自身相容るべからざるものを求むることである。科學者より改革の原理を聽かんとするは、木に縁りて魚を漁るが如くである。之を斷念し放棄してあるがまゝの現實に安住し觀念するの外はない。ベンサムの科學的方法に徹底したミルは、同じイデオロギーよりして社會改革の原理を設けらるゝ筈はなかつた。之を求めた所に、彼れの內面的煩悶がある。

然し得るべからざる原理が、何かの偶然で得られたとしたらどうするか。例へば最大多數の最大幸福が善であるとか、プロレタリア階級の解放が善であるとか、ともかく改革の原理が與へられたとするならば、直に起る反問は何故それが善であるかである。それは善であるが故に、未だ實現されたものではない。未だ實現されないものは、因果系列の中に入りえない。科學者の任務はすべてのものの因果必然の關係を說明するに在る。然るに何故善であるかの問に對しては、之を說明することは出來ないならば、科學者はその任務を果さないこととなる。若し

[illegible]に終る[illegible]に甘んずるか[illegible]んずるか、その論理的歸着する所は、兩者の何れかに去就を決せねばならない。之れ快樂主義と功利主義との後裔にミルが陷惱したる所以であり、凡そ一切の自然科學的方法が必然に逢着する運命である。

〔一八〕

內面的危機を經過したる後、ミルはベンサムよりコールリッヂの理想主義に接近したのであるが、彼が果して此の理想主義に全部的に傾倒したか否かは後の問題として、ミルの逢着したる問題は果して理想主義によつては、いかに解決されるであらうか。

理想主義に於ても亦決して、因果必然の關係を認めないのではない。唯所謂自然科學的方法論者と異る所は、因果必然の關係の認識は、時間、空間、因果律等の形式を附與する、人間に先天的に內在する悟性の活動によつてのみ可能であることを云ふに止まる。旣にそれが悟性の形式に依存するが故に、因果必然の關係の妥當するは、同じく悟性の形式たる時間空間の中に存在する現象の世界にのみ限定せられる。自然界に適用して妥[illegible]するが合[illegible]題[illegible]ない。[illegible]は因果必然の關係の認識は、悟性の活動によつてのみ可能なるならば、それの存在を條件として始めて可能なる因果必然の關係をその條件自體に適用するは許されない。若しその適用が許されて悟性を因果系列の一端に置くならば、その因果關係を可能ならしむる悟性を更に別に豫定せねばならないからである。故に因果必然の關係は現象の世界にのみ限定され、現象の世界に屬せざる人間の悟性、理性に對しては適用されない。換言すれば之等のものは必然の外に在る即ち自由なるものである。

要するに理想主義に於て、因果必然の關係の認識はいかにして可能なるかが明に見られ、それの妥當する領域が現象の世界に在る、別言すれば現象の世界に於てはそれが妥當することを肯定され、その以外の世界に不當なる侵入を拒否される。快樂主義の非なる所以は、實に此に存在するのである。悟性の本體たる理性は、現象の認識に於てさへ旣に、あらねばならぬ認識を命令する。然し認識に於ては旣に實在するものに制限されるが故に、理性の活動は完全であり得ない。それが行爲を以て前景に現はれるのは、實踐的原理としてである。茲にあらねば

なる私人、あるは[illegible]を規定する。かくして理想主義は決[illegible]、因果必然の統計に相当するの[illegible]はない、所[illegible]の交渉する領域を[illegible]し、この領域の以外に於て必然に非ずして自由なることを云ふ。自由を[illegible]されたる理性は、理想、目的、[illegible]命令する。必然を云ふに至るの[illegible]め、需[illegible]、理想を[illegible]るべき統轄を開案したる自然科学的方法は、かくして始めて此に活路を見出すことが出来る。科学と理想、認識と評価とは、かくて調和のみ[illegible]発見さる。

ミルは内面的信條の後に於て始めて、理想主義へ推移[illegible]たのではない。その以前に於て既に[illegible]の[illegible]に、理想主義に依存しつゝあつたのである。前に述べたる如く、功利主義はその自身に於ては、現状の維持を[illegible]求する[illegible]論に終るべきに拘はらず、之を[illegible]論理的[illegible]とし、[illegible]て改革的[illegible]理[illegible] [illegible]功利主義と[illegible]
[illegible]

評價の理論を前提として交渉せられたる[illegible]、[illegible]の界に見はれ[illegible]を指導すると云ふ[illegible]、[illegible]内面的交渉に於て始め[illegible]整理し[illegible]、而[illegible]理想主義を把握したのである。

それではミルは果して理想主義に全面的に傾倒したであらうか。彼はコールリッヂの理想主義に多大の共鳴を感じたに拘はらず、ベンサムの思想は十八世紀の思想であり、コールリッヂの思想は十九世紀の思想であるとして、両者は[illegible]の両面にして併せて全面の真理をなすと云ふ。然しベンサム・イデオロギーと理想主義とは、質の両極として調和しうるものではない。[illegible]に相容るべからざるものとして、何れかを択ばねばならない。[illegible]ある。[illegible]年時代のもの[illegible]理想主義に[illegible]して[illegible]は[illegible]の[illegible]通[illegible]化し[illegible]る。[illegible]主義に[illegible]した[illegible]の[illegible]ない[illegible]云ふ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]人間の[illegible]依他[illegible]とし[illegible]、其の[illegible]的支柱を奪ひ去つただけであつて、それを克服する為にはその一歩を進めたに過ぎない。けれども、たとへ僅に一歩でも、是こそ全く必要欠くべからざる一歩であつた。何となれば、結局[illegible]見はたゞ哲學に因つてのみ打破し得るもの故、それが哲學の支助なきものである事が明示されるまでは、其の克服に向つて一層に歩を進めるは永久に不可能である。

即ち社會制度の改革を為すに必要な前提は、制度は常に流轉して止まないと云ふ觀念である。時間と空間とを超越した絶對的のものがあると云ふ理想主義こそは、正に保守主義の根據となり、社會の改革を阻止する障害に非ずして何ぞやと云ふのである。此に吾々にとつて興味あるは、千八百三十七年十一月十日附の青年マルクスが父親に宛てた書簡である。彼が伯林大學在學中に書いた此の一文は、いかに青年學生としてのマルクスが、拮据黽勉したかを語り、いかに各種のイデオロギーを遍迎したかを語る貴重なる文獻である。彼は人生の目的を探求して先づカントに赴きフイヒテに往つた。而もそれより何ものを得ることなくして、次でヘーゲルに至り、暫らく之に安住したが遂に去つて、フォイエルバッハの唯物論に走つた。彼は此の變遷の過程に就て詳細に述べてはゐない。然し若し私の想像にし[illegible]道[illegible]は[illegible]と問うて、[illegible]、何に對する何らの答へも得られない[illegible]。ミル[illegible]ヘーゲルに傾倒したのは、ヘーゲルもカント、フイヒテの如く的無内容の道徳哲學に優たらずして、内容を與へんとしたことに於て共鳴したのであらう。而も結局ヘーゲルを去らざるを得なかつたのは、ヘーゲルの法律哲學が遂に現状維持の保守主義に終る點に在つたのではあるまいか。果して然らば青年マルクスを理想主義より離れしめたるは、ミルを理想主義より離れしめたると、符節を合するが如くである。

此に於て殘る問題は、理想主義は論理的必然に保守主義たるべきや否やである。

（九）

なるほど理想主義が歴史上に於て、保守の役割を演じたことは尠くない。然し理想主義が論理的に保守主義とならざるをえない關係があるのではない。寧ろそれは偶然の結果に過ぎない。例へば理想主義者の力點は、認識論や道徳哲學に在つて、いかにして認識が可能なりやの問題、何が人生の目的であるかの問

[illegible]

[illegible]るのである。

[illegible]

[illegible]

學せしめたるに、フィヒテ[illegible]に依つて、ヘ[illegible]たの保守主義に陷らず、カントとヘ[illegible]して、[illegible]の進路を開拓し、此に急進的社會改革の原理を構成した。彼等の首領トーマス・ヒル・グリーンは、千八百八十二年レスターに於ける自由黨の會合に於て、當時自由放任論に囚はれて、勞働者保護に指を染むるをえなかつた自由黨を激勵して、勞働者保護の爲めに私有財産制度を制限することこそ、寧ろ自由主義の依つて立つ根本原理に忠なるものと說き、理想主義の眞髓がそこに在ることを指摘した。オックスフォードの哲人の此の言は、荒野に於ける孤客の聲ではなかつた。次で千八百九十一年ニューカッスル・オン・タインに於ける黨の例年大會に於て、自由黨は從來の自由放任論を放擲し、此に自由黨轉回の途に就いた。マーク・パチソンはグリーンを評して、理想主義者にして急進派とは[illegible]と驚嘆し、シドニー・ウエッブはその著『英國社會主義』に於て、グリーン等を哲學界に於ける社會主義者と稱してゐる。

何人もグリーンを以て當時に於ける急進派と呼ばざるはあるまい。唯彼は哲人として現存資本主義の解剖は、その能とする所ではなかつた。彼はプロレタリアの貧窮を以て文明失敗のインデックスなりと云ひ、之に對し[illegible]な憤激を感じたと云ふ。然し勞働者保護を力說しつゝ、プロレタリアの發生を英國の土[illegible]諸[illegible]ふず、[illegible]いた。斯くて資本主義を否定するに至らず、[illegible]の制限を認めるに停止した。然し哲人の[illegible]ざるの結果であつて、その意圖の此に止まるに在つたのではない。彼れの意圖をその論理的に發展せしめたるものは、即ち英國勞働黨の社會主義である。シドニー・ウエッブがその著『社會民主々義への路』の末尾に於て、吾々の立場はトーマス・ヒル・グリーンによつて最もよく表現せらると云ひ、理想主義をそのイデオロギーとする所に、彼等の社會主義とマルクス社會主義との鮮明なる對立がある。

グリーンが學徒としての將來を宣言した論文に依れば、社會改革と理想主義の關係は餘りに明白である。彼はベンサム、ミルの改革的情熱に反對ではない。寧ろそれへ全部的の共鳴を感ずる。然るに彼等の快樂主義的人性論は道德哲學を容るゝの餘地なからしめ、彼等の功利主義は結局宿命論に陷るを[illegible]して、此の破綻が自然科學的方法に在るを洞察し、彼等の改革的情熱に忠なるが爲めにこそ、却て理想主義に依るべきを明にした。理想主義の使命は此に在り、唯此にのみ在ることを言明したるに在る。若しミルをして[illegible]を保たしめて、理想主義[illegible]

けれども［illegible］が知［illegible］たならば、彼は又ノ一層一般に味讀した であらう。かくて始めて彼は内面的世代に於て述作したる難問を解決し得たであらう。

かくの如くして彼は世界を展望して、再び彼の内面的経路を回顧すれば、そこには自然科学的方法の当然に除外すべき革命の時代があるのである。而して彼は此の問題に注目した当時に、彼は問題をして彼の直面させた、赤裸々に表はれてゐる。それは彼自身が其処に於いて一箇の大なる人生の記録であつた。即ち時代に於ける一個の生活者は、思想に於いて同じく限定せらるることなく、まさにそれ自身の生活に於いて［illegible］。発展するものではない。それは多くの場合吾々の安寧する一般性を持つ。茲にこそ彼の時代的意義がある。

一九二九・一一・一九

權力と經濟

――河上氏の批評に答ふ――

高田保馬

一

河上肇氏は中央公論昭和四年三月號に於て「經濟と權力」と題する一論文を公にされた。それは私の價格の勢力說に對する批判である。發表の當時一讀の機會を得たが私はその中に承服すべき一事項をも見出し得なかつた。そこで、早く反批判の筆を執つてその敎を仰ぎたいと考へつゝ、眼前の仕事の多忙にまぎれて、夏と秋とを過してしまつてゐる。一昨日から暦の上ではもはやすでに冬、窓前の柿の葉殆ど散り盡して、風の音もやゝ寒い。餘り遲れるのもと思ひ、仕事の都合を無理して、この稿を起した次第である。

河上氏の論文は大體から見て二つの部分に分れてゐる。その前半に於ては私の小著「經濟學」に於ける價格理論、ことに價格の勢力說が批判せられてゐる。その後半は私の價格理論の直接なる批判ではなく、むしろ此批判をきつかけに、政治と經濟との關係についての自己の――その實はマルクスの、エンゲルスの――主張が述べられてゐる。從ひて、私の價格理論の直接なる批判として見らるべき部分はその前半であるが故に、茲にはそれだけを取扱ふ。それだけの吟味によりて、河上氏の批判は根本から覆され得ると信ずるからである。但し、後の部分、即ち政治と經濟との關係に關する主張については、決して吟味の勞をさけようとするのではない、仕事の都合からも少し後の機會に之をゆづる。私はそれと、福本和夫氏の私見に對する批評とを一しよに考察し、論駁しようと思つてゐる。

私の價格の勢力說に對する河上氏の見方は次の文句が之を物語る。「もしエンゲルスの言葉を借るならば、吾々は次の如くに

[illegible]

二

[illegible]

に引用し[illegible]、そこにはたゞ、た
定、あるのみで、論議[illegible]
[illegible]點についてまづ第一に答へる。ある他人の學説に對して、それが論證を缺くや否やを斷定する前には、當然その人の文獻について相當の注意を拂ふべきであらう。たゞ一の著書（而もそれは紙數の極度なる制限から十分に論じ盡すだけの餘地のない）に於て論證の見出されざることから、直にその學説が論證を缺くと斷定することは何人にも許されざる態度であらう。

私の價格理論の比較的に詳しき論證を試みたるものは論文「生産係數について」（經濟研究第五卷第二號所載『價格と獨占』二四七頁以下）である。此論文は河上氏の批評を公にせられたる時よりも一年以前に公にせられてゐる。私の見解が論證を缺くと斷定せらるるならば、當然此論文をも參照したる上に於てさうせらるべきであつたと思ふ。

私の自ら稱して、價格の勢力説と云ふものは本來、數學派經濟學の一般的均衡の理論の分析から出發してゐる（此理論の理解にはまだ十分でないところも多からうし、私の見解そのものも或は誤まつてゐるかも知れぬ。しかしそのことは此場合、論外に置かるべきである）。從ひて、私見の論證を吟味するとならば、當然まづ、此一般的均衡の理論を理解し、然る後に、私見の[illegible]
[illegible]
せられてゐない。[illegible]ならばその旨を明瞭に指示せらるべきであらう。[illegible]まれたいのである。それならば粗漏の[illegible]何れにしても、河上氏が私の價格理論の論證について何を理解せらるるところあるかは明白である。然れども、ある見解の論證を理解せざる、又は理解し得ざる故を以て、それが論證を缺くと云ふはあまりなる獨斷である（私の價格理論の論證と見るべきものには前揭の論文のほか　價格の勢力説（經濟論叢昭和四年五月號所載）がある、念のために附記する）。

轉じて、河上氏が問題とせらるる著書に於て、私が全然、自己の價格理論について何の論證をも下さざりしやと云ふに、私は然りと答へ得ない。河上氏は私の著書の中から一部分だけを引用して、その中に論證と見るべきものが、殆ど（全くではないだらうが——高田附記）ないといつてゐられる。論證と見るべきものはその前の部分にあるはずであるが、それには全然論及することなくして任意に一部分を抽き出し、讀者の見られる通り、そこにはたゞ斷定があるのみ　と云はれる。如何なる學説といへども論證の部分から切り離して結論だけが引用されゝばそ

こ[illegible]
の[illegible]
い[illegible]
所謂価格の勢力[illegible]（[illegible]）こ
とに外部の価格[illegible]勢力に[illegible]こ
とになる。こ[illegible]
と、従ってこの価格[illegible]
じ、伸し一時[illegible]界[illegible]じ
る。[illegible]
由から[illegible]河上氏は[illegible]を
聞かれる[illegible]に見える。[illegible]私には同
上氏がかの小[illegible]価格に於ける勢力関係—
の八[illegible]
少くも地代[illegible]。其[illegible]段
れるものである。
理[illegible]価格
を決定[illegible]
てよと[illegible]
には[illegible]価格
の[illegible]一論述せらる

[illegible]
[illegible]河上氏[illegible]
の中に於[illegible]商品[illegible]
る點において、其の[illegible]。[illegible]
働のうちに[illegible]
合の買[illegible]品質[illegible]
この[illegible]商品の其[illegible]発見しうるのである。[illegible]
せられ[illegible]（[illegible]）河上氏[illegible]価値の[illegible]
働に於[illegible]発見[illegible]
行[illegible]的勢力の人[illegible]的勢力[illegible]
外ならぬ。河上氏は[illegible]
られるのではないであらう。[illegible]
場[illegible]カ[illegible]
[illegible]
ルクスに[illegible]この勢[illegible]価値[illegible]
これに[illegible]
の[illegible]
詳[illegible]
[illegible]
たいと思ふ[illegible]界[illegible]用[illegible]価値を[illegible]界[illegible]用

であると云ふ、これも認容せらるべき事柄ではなくして、云はゞ發見せらるべき事柄に外ならぬ。[illegible]、私の前に[illegible]觀と稱したるもののどこまで異なるかは一面、これを基礎とする經濟理論の構成によりてどこまで事實を矛盾なく說明し得るかに存すると思ふ。

河上氏は前述の引用（小著よりの）の前後に於て云はれる。だが著者は、たゞかゝることを斷定せるのみで（それならば論證はないはずである——高田附記）、その論證のためには殆ど一言をも費してゐない「一言も費してゐないのならば、その次に」それから形式論理的に引き出された結論にすぎない」と云ふ批評を下されるのは矛盾ではないか、それ故に殆どと云ふ副詞があるのならば、眞意微妙捕捉しがたい。かう云ふことは姑く後に廻して、河上氏の批判のその後の部分を吟味する。

河上氏は、私の議論の構成を以て、次の如きものであると見られる。

第一の獨斷。「著者（高田をさす）はいふ、例へば、勞働者は、その供給する勞働の對價として種々なる程度の勞銀を要求しうるわけであると」

第二の獨斷。「そのあまたの可能的大きさのうち、現にどれだけを要求するかは、單純なる財の所有又は供給そのことから決定せらる[illegible]

結論。これについて[illegible]河上氏なる經濟的勢力の大きさを決定するものである。[illegible]氏によれば、終の命題は、第一第二の獨斷を前提としておいて、それから形式論理的に引き出された結論にすぎない。[illegible]

此最後の命題が前の二つの命題の形式論理的結論であると云ふ斷定に至りては驚き入る外はない。どこにこれが根據となるべき大前提があるか、私は不敏にして之を發見し得ない。これを以て三段論法であると云ふ河上氏の形式論理學はアリストテレス以後幾千年にしてはじめて河上氏によりて發明せられたるものであらう。

次に河上氏によりて獨斷の刻印を打たれたるこの命題について考へる。「勞働者はその供給する勞働の對價として種々なる程度の勞銀を要求し得るわけである」と云ふことが第一の獨斷であるとせられる。而も消極的には此命題を樹立する爲に、勞働が生産物に非ざることを論じてゐる（なほ進んではその他の勞銀學說をも批判してゐる）。而してかゝる見方をなし得可き餘地を切り拓いてゐるつもりである。積極的には同質同量の勞働が提供者の社會的勢力の強制によりて種々なる勞銀が支拂はるる本質をもあげてゐる。（一四八、一七[illegible]頁參照）。これらの

[illegible]第一の命題に就て[illegible]得るであらうか。
る。第二の命題について見ても、現に勞働者自身の[illegible]的關係によ[illegible]
い。[illegible]團結を作る時には其要求は[illegible]、其需給の事情
によつて、それが小となるのを見ると云ふ理由を述べてゐる。
理由が[illegible]のは河上氏の自由であるが、述べられ
てゐる[illegible]にして、其の主張を[illegible]せらるるのは承服
しかねる。[illegible]引用せられたる[illegible]の外[illegible]ざる故に、理論
[illegible]用者もあるならば致し方もないが、[illegible]批
[illegible]の外はない。

河上氏は[illegible]述べられる。「[illegible]簡單なる[illegible]法に[illegible]れ
[illegible]は、一の[illegible]。何故といふに、例へば[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]經濟的勢力は[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

論じた要點となるが、[illegible]らるる點について著者（高田をさす）は[illegible]説明が[illegible]であること云はれる。私はこの説明を拒んだ覺えはない。私の社會學的研究はすべて此問題の説明に集中せられてゐる、別しても此點を明にしようとしたものは、「階級及第三史觀」及び「社會關係の研究」の後半の二つである。私の説明が正當ならずと批判せられるならば致し方もない、固く説明を拒んでゐると云はれるのは餘りなる事實の誤認である。まづ、私の社會學上の述作に眼を通してからかゝる斷定を試みられることを希望する。なほまた、經濟學上の説明は常に、それ自體は經濟的ならざるところの、而も經濟的に究極的なるものを決定するところの事象にまでつきすゝむ。而もつき進みて到達したるものはもはや、經濟的に決定せらるるものではなく、經濟的範圍から見れば一の與へられたるもの、それは他の研究範圍に於て説明せらるべきものである。限界效用説に於ける效用又は欲望、勞働價値説に於ける技術、又は勞働の生産力の如きはこれに當るものと思ふ。私の立場に於ける經濟外的勢力はまたそれである。それは經濟的なるものを説明するのに役立つが、それ自體何によりて決定せらるるかは經濟學の關知するところでない。強いて經濟學の範圍内に於てその決定機構の説明を求めらるるのは經濟學方法論上の[illegible]

私は[illegible]河上氏[illegible]れを以て足りる。固陋、不肖、無理解と云ふ[illegible]すべて根據のないものであることは、明にせられてゐると思ふ。

三

河上氏は次に進みて、「著者（高田をさす）の主張の反動的意義」を述べられる。私は引きつゞいてこれに對しても、反駁を加ふるのであるが、率直に云へば、河上氏の批判はあまりに見當外れであり、從ひて私は筆をとるのに張合がない。けれども答辯の禮を盡すことは私に與へられたる義務であるから致し方もない。

河上氏は云はれる。「著者（高田を指す）自身の説明によれば經濟外的勢力とは普通廣義において權力と稱せらるるものであるが、かゝる權力を以て經濟的勢力を決定するものであるとなす點、こゝに著者の謂はゆる全體を貫く一の特色があるのであり、且つ正にこゝに著者の主張の反動的意義が横たはるのである。この主張は、理論的には、經濟的勢力をもつて結局のところ社會的・政治的・精神的諸勢力一般を決定するものとなすマルクス主義の對蹠物であり、實踐的には經濟的勢力の發展に伴ひ

[illegible]が作られる一切の[illegible]——[illegible]
自ら構成することによって、歴史の本質的な発展の要求に迎合せんとしている。ある人々の極端的武力政治の理論的錯誤に対立していることである。（同）
経済的な政治の中に、河上氏の批判の中に存するところの社会的な[illegible]せられている、私の見解を批判しようとするならば私の見解を[illegible]。比論に理解せられねばならぬ。而も此の[illegible]の中に河上氏の私見に対する誤れる理解が[illegible]してゐるらしい。其[illegible]その思想の混乱を暴露しているのである。これからこのことを説明しよう。

河上氏は「経済的勢力」と云ふ言葉を用ゐてゐられる。その意義を明確にされてはゐない。然し、経済的勢力、経済的勢力と云ふことについて[illegible]。河上氏は[illegible]に[illegible]の意義を[illegible]。ここでは[illegible]経済的勢力[illegible]のことを[illegible]経済的な勢力を一般的に決定するものとすれば[illegible]ならない。私の[illegible]存在するのである以上、河上氏の言ふ所の経済的勢力は全然私の言ふ所の経済的勢力とは[illegible]。従つてその[illegible]の中に現はれるものは、一つの[illegible]であつて、私の見解とは異なつてゐる。

私は反対して[illegible]を評したい。経済的基礎と経済的勢力とを[illegible]同一のものとしてゐる。マルクス主義における政治的[illegible]を決定するといふ。それは河上氏にとつて経済的勢力が政治的[illegible]な勢力を決定するといふ形に表現されてゐる。これを同視してゐられる以上、同一なりと[illegible]ざるを得ないのである。

私の意味する経済的勢力は全然さういふものではない。河上氏にして[illegible]経済学[illegible]のうち、批判の中で[illegible]に示されたと思ふ人は以外の部分にも眼を通されたならばさういふ[illegible]と誤解とをされなかつたはずである。それ[illegible]ではない。若し政治的勢力と云ふことについていくらかの思索を加へられたならば、経済・経済的勢力と云ふことを混同してはゐられないはずである。

「経済的勢力」と云ふは、ある[illegible]を代償として把持することにより、相手に作用を及ぼしうる勢力である。[illegible]その[illegible]把持そのことに伴ふこの勢力である。「経済的[illegible]」[illegible]把持の[illegible]ある。そして経済的勢力を[illegible]と云ふ意味に用ゐてゐるところは、経済的勢力を[illegible]に解する[illegible]である[illegible]。然るに、それは[illegible]の意味にとられてゐる。経済は商品の生産、交換、分配と云ふ[illegible]関係の事実[illegible]ある。経済的勢力

に對し提供に[illegible]人々を[illegible]る能りで[illegible]別せられてゐることが何故に河上氏に[illegible]れは私見を反動主義と云ふ名稱の下に葬らむとして、あはせて眼眩まれたのでもあらう。經濟的勢力を經濟的勢力として解する限り、河上氏がマルクス主義を目して「經濟的勢力をもつて結局のところ、社會的政治的精神的諸勢力一般を決定するものだと」せらるるのは明白の誤謬である。ことに造作もなく、何の定義をも説明をも加へずに、社會的精神的諸勢力一般と云はれるのは非學問的である。何となれば、此言葉はマルキシストたる河上氏も今まで一度も使用せられなかつた言葉であらうし、またマルクス、エンゲルスの文獻においてもかゝる特定の意味をもつ言葉でもなからう(恐らく使用せられてゐない言葉であらう)。

河上氏の次の文句「實踐的には、經濟的勢力の發展に伴うて必然化される社會の變革をば、權力――暴力――をもつて阻止し抑壓する」と云ふ此一行足らずの中にも、その混亂が暴露せられてゐる。第一に、權力と暴力とが同視せられてゐる、かう云ふ權力の解釋を以て私見を批判せらるゝこと位迷惑のことはない。私はなるほど、經濟外的勢力を以て廣義の權力であるとしてゐる、しかしそれは暴力と同視せらるべきものではない。此權力の意義を「階級及第三史觀」に於て組織的に叙述し分析してゐる[illegible]もまた、意味をなさぬ、也にかく、かゝる[illegible]精神の[illegible]、[illegible]に理解せらるゝはずがない「吾々はかゝる反動的政治權力が結局において經濟的勢力のために轉(？)覆されることを信ずるものであるが、高田氏の權力説は、その本質において、正に吾々の斯かる見解に對立するところのものである」(七頁)と。第一、經濟的勢力を當然河上氏が解釋せらるべきやうに(批判者として)解する限り、反動的政治權力が結局において經濟的勢力(それは有産者の方の力であるはずである――高田附記)のために覆へされると云ふ表現は意味をなさぬはずである、從つて此全文章は何等の學問的意味をも有しない。第二、經濟的勢力を經濟と混同する限り、私もその主張を(ある意味の下に)肯定してゐる、その限り「高田氏の權力説」はかゝる見解に對立するものではないはずである。

四

河上氏によれば、例外なく且つ經濟に[illegible]を開いて進みつゝある經濟的勢力」と云ふ文句[illegible]中に[illegible]

られてある。これは引用[illegible]のつもりであらう。而してそれはエ[illegible]

[illegible]河上氏[illegible]

[illegible]経済的勢力との関係が認められざるものと見える。

河上氏は亦次ぎの如く言はれる。「[illegible]は高田氏と全く[illegible]経済的勢力[illegible]においては非経済的の・政治的の・又は精神的の・勢力[illegible]勢力とは[illegible]

[illegible]

[illegible]し、非経済的勢力の経済的勢力[illegible]

[illegible]ば、[illegible]人の勢力が有[illegible]

る、[illegible]

[illegible]非経済的勢力が経済的勢力[illegible]

[illegible]

ルヂョアの手により國に採り入れたこと見てゐる。[illegible]二九頁以下、階級支配に関する史料二[illegible]六頁以下）。私に於ける[illegible]力と同視するのではない。同視してゐるのは、河上氏の見方は、私見の解釋としてみる限り全然誤れるものである。私の立場から云へば、非經濟的勢力が經濟的勢力を決定しても、ブルヂョア革命は當然起りうべき事である。

次の文句は一層明かに河上氏の混亂を暴露する。「しかるに今やブルヂョアジーの支配は、再び經濟的發展の防害物となりつゝある。社會の生産諸力は、多數の人々が現在よりも遙により善き生活をなしうる程度まで、すでに發展してゐるにも拘はらず、しかも多數の人々の生活は益々窮乏化し、その生存は益々脅かされつゝある。」「經濟的勢力が經濟外の勢力によつて決定されるのではなく、逆に經濟外の勢力が經濟的勢力によつて決定されるのである。だからブルヂョアジーは今日如何に絶大なる權力をもつてゐようとも、それが經濟の發展に逆行せんとするものであるかぎり、かゝる權力による新興階級の抑壓は結局において無效果である（一一頁）。果してさうであるか。經濟的勢力は財の所有に作ふ力、即ち富の力である（私の繰返しのべてゐる通り）。然るに河上氏によれば、經濟外の勢力が經濟的勢力によりて決定せられる、それは經濟外の勢力が富力によりて決定せられることを云ふことである。河上氏の主張の如く今日、經濟外の勢力が[illegible]

私思ふに、[illegible]今日政治的勢力は有産者の側にある。しかし無産者の側には所謂野生的なる經濟外的勢力が増加しつゝある。後者の勝利によりて前者が打遮せられんとする傾向が認め得られる。無産者の勝利は經濟的勢力が經濟外的勢力を決定するが故にあらずして、まさにその反對である。經濟的勢力が經濟外的勢力を決定すると云ふ河上氏の主張は無産者の勝利を全然不可能となす主張である。

河上氏は之を以て自己の眞意に非ずとせらるゝであらう。然り、その論文の示すところはその眞意ではなくなつてゐる。それは河上氏の混同の故である。價格の勢力說といふ私見の批判である限り、而して特別の斷りなき限り、經濟的勢力と云ふことは私の意味に解せらるべきは當然のことである。然るに、河上氏においては、これと經濟又は經濟的發展と云ふことが全く混同せられてゐる。それは此問題に關して斯かる概念の混亂を示し、又私見に對する無理解を示してゐる。

五

河上氏は私の價格理論の中心概念たる經濟的勢力と云ふ言葉の意味を[illegible]理解してゐる[illegible]河上氏は

価値に[illegible]河上氏の[illegible]は学問的[illegible]であらう。しかし事情は如何なるものであるにもせよ、混乱は混乱である、混乱は混乱である。

然に於て、河上氏の見方[illegible]我等の見方との間に存するあきらかなる隔りの理解を十分に見出すことが出来ぬ。河上氏は[illegible]理解してゐる[illegible]たるものよりの見解の[illegible]は当然[illegible]なければならぬ。

そこで[illegible]プロレタリア[illegible]。河上氏は云はれる「私は今、プロレタリアの要求が、何月何日の午前まで[illegible]河田氏の[illegible]プロレタリアの[illegible]それに後れること[illegible]再生産に入る[illegible]「それは全く本来的にはプロレタリア[illegible]再生産し[illegible]」[illegible]といふ[illegible]

然るに河上氏は[illegible]河上氏は[illegible]「[illegible]

[illegible]のみ見る。

[illegible]価値の性質に関する[illegible]系においては、極めて決定的な、同時に[illegible]政治[illegible]決定的[illegible]もの[illegible]であつて、経済的[illegible]いふ……[illegible]これを本来的なる政治的[illegible]である。たゞかに[illegible]的なる経済的[illegible]い」

これだけから、河上氏は[illegible]

エンゲルスが批判の対象としたデューリング[illegible]勢力説で[illegible]あつたのである」[illegible]何の[illegible]ところは[illegible]政治中心の理解[illegible]る、[illegible]経済的勢力説[illegible]するそれである。河上氏の[illegible]である。[illegible]いはゆる[illegible]政治的勢力を中心とする見方[illegible]価格の形成[illegible]なる。[illegible]用するところの[illegible]べきハイマンの如きに従つて[illegible]なデユウリングがとる様に、それは[illegible]価格について[illegible]勢力説[illegible]されるものとして見るのは、[illegible]コウリングの如く、政治的[illegible]

[illegible]。ここにこと、河上氏[illegible]に一一こ[illegible]とに唯物史觀を取扱へること一許せらるゝ[illegible]ば、貳に[illegible]ることがらである。

河上氏は私の價格理論をデュウリングの價格理論の再生產であるとせられるのであるが、二つの價格理論を一行も一句も比較してゐられず、加之、デュウリングの價格理論に一語も說き及ばれない。さうして、再生產のみと云ふ批判を下し得る權利を河上氏は如何にして有せらるゝや。私の價格理論の出發點をなし骨子をなすものは勞銀の理論であり、勞働の異質性の理論である。然るに此點に關するデュウリングの見解はエンゲルスの批評の前後に於て根本的と云ふべきほどに異なつてゐる（『講義』の第一版と第三版）。河上氏は私見をその何れの見解の再生產なりとせらるゝや。河上氏はデュウリングの見解を『反デュウリング論』に於ける引用によりて知ると明言してゐられる。私見に對してデュウリングの再生產のみと云ふやうな批判を下すが爲にはデュウリングの著書についてその思想の如何なるものであるか位をたしかむる事が必要ではないかと思ふ。

此點に關する私の言分だけを簡單に述べる。河上氏が私の價格の勢力說を批判して、デュウリングの再生產のみと云はれるのはその自由である。しかしその批判を一つの放言ならしめざる爲には、二者の間に如何なる類似あるかを明にせらるゝこと[illegible]いと思ふ。而して、若し河上氏にして私に對し、私の價格理論とデュウリングのそれとの間に存する根本的差異を述べよと要求せらるゝならば、いつにても二者を比較して之を判明せしめよう。二者の差異の餘りに明白なることを信ずるが故に、今一々之を列擧する必要なしと信ずるものである。デュウリングに於ける價値は獲得のために必要なる人間力の使用によりて定まること、分配上の價値即ち位置の上の價値が權力を背景とする課稅であること（私は此の如く利潤の中に何等經濟外的勢力による釣上を認めない）、勞働の價格がその生產費であること、これらの根本の見解に於て私見は全然デュウリングのそれと相容れず、而して私見はなほその再生產なりや。

デュウリングの『經濟學講義』の公刊以來すでに五十幾年、此間に社會學の躍進的發達があり、又經濟學に於ても限界效用說、別して數理學派の見解の確立がある。私どもはこれらの新しき文化財によりて根本的に影響せられてゐる。私見がデュウリングの再生產にすぎずと云ふのは、約半世紀に於ける文化の發達を餘りに輕視したるものではなからうか。

一方に於て、河上氏は私の見解について誤解であることの證據を示されてゐる。而してデュウリングの價格理論について

資本王國の財産調べ

――大倉及古河王國論――

高橋龜吉

大倉王國論

一、大倉王國の産業支配網

大倉王國第一の特色は、安田王國と正反對の立場に立つてゐることである。即ち安田は金融一本槍で進んで來たために目星しい事業を持たぬ、それが安田王國の一大缺點であるのに對し、大倉は事業にばかり突き進んで行つて、金融業を起さなかつた。それが、いまとなつては大倉王國の一大弱點である。

大倉王國には尚ほ三つの特徴がある。第一は大倉王國には、他の大中財閥の如く、管理統制の成文的組織を有せず、所謂、法三章的な統制法を依然續けてゐることである。之れは、一面に於て、内部の融和がよく出來てゐる反映だとも見られるが、一面に於ては、先代喜八郎專制の統制が、そのまゝに殘つてゐて、近代財閥の特徴たる、組織の力に由る經營にまで未だ發達してゐないことを語るものだ。

大倉王國第二の特徴は、その投資分野が非常に廣汎に亙つて居ること、而してその間の脈絡が比較的に乏しいことである。一體、財閥の事業が一般に比し成功率の高いわけは、[illegible]開始前に當つて充分な調査と準備が行はれ、スタッフが備はつて居るからである。例へば、三井物産から東洋棉花が分離し、東洋棉花から上海紡績等が生れる如く、或は三菱造船から三菱電機や三菱航空機が生れる如く、その間何等かの脈絡がある。所が、大倉王國の事業は一世の商才先代喜八郎が、新しいもの好きの特性を發揮して、次から次へと新事業を企畫して行つたものだから、事業の間に脈絡が無く、殊に事前の調査準備に缺けた所

[illegible]

二、大斎王国の人的支配網

[illegible]

（圖表）表中●印は大倉組の支配力が大體に決定的なもの。▲印は同じく準支配的なもの。△印は大倉の支配力がまだ以上の如くならざる關係會社である。(支)は在支那事業中支那の法律に由り設立したるものを除く。

大倉組

直系會社

大倉商事　●大倉[illegible]　●[illegible]　●[illegible]　●大倉[illegible]　●[illegible]　●[illegible]
[illegible]通信

大倉鑛業　●本溪湖煤鐵公司(支)　●大湯[illegible]　●南[illegible]　大[illegible]　●[illegible]

大倉土木―●大平[illegible]。

大倉火災海上保險。大倉製絲。東海紙料。入山採炭。日本自動車。東海自動車。愛媛中央自動車●

愛媛自動車。野村自動車。昭和自動車。下田自動車。富士[illegible]自動車。丸ノ内タクシー。川奈ホテル。

豆滿江林業(支)。鴨綠江製材(支)。奉天電車(支)。

傍系會社

秋田木材―露領林業。

日本皮革―●日本製靴。

大日本麥酒―●神中鐵道。

帝國ホテル。日本共立火災。日清製油。日本アスベスト。大海興業。竹村製材所。日本電氣。大島製鋼。汽車製造。日本カールローデ。鴨綠江製紙。東京府下地。中央自動車。日本化工。日本化學工業。大海水電。

關係會社

帝國劇場。合同毛織。東京製綱。[illegible]鐵路公司。[illegible]銀行。第一銀行。北海道拓殖銀行。川崎第百銀行。日本銀行。日本興行銀行。日本航空輸送。日本無線電信。宇治川電氣。大同電力。日本電力。[illegible]電力。京濱電力。廣島電氣。揖斐川電氣。東京電燈。上毛電鐵。南朝鮮鐵道。湖南電鐵。豐川鐵道。南滿洲鐵道。函館船渠。大社宮島鐵道。京都織物。鐘淵紡績。朝鮮興業。朝鮮肥料。帝國製麻。東亞興業。北海道炭礦。磐城炭礦。北樺太鑛業。山東鑛業。日本石油。秩父セメント。小野田セメント。石川島飛行機。大成火災海上。時事新報社。復興建築助成。東京[illegible]。王子製紙。[illegible]塗料。日本染料。日本[illegible]酸。日本鋼管。理化學工業。合同油脂。日[illegible]。南[illegible]拓殖。

[illegible]

大倉組
頭取　大倉喜八郎
副頭取　門野重九郎
[illegible]　大倉粂馬
[illegible]

大倉商事　[illegible]

[illegible]

右に[illegible]が、大倉[illegible]に大木の成育しないが如く、傑出せる人物の下に傑出せる人物は成育し難いと見へる。安田王國にこれを見、淺野系にこれを知り、いま又大倉王國に同じ傾きを發見する。しかし大倉は安田等に比し早く學校出の俊才を集め出した關係上、現在中堅處には仲々優秀な者が居ると云ふことだ。それは兎も角、上記の幹部は又自ら重役として、大倉系事業の多くに君臨するばかりか、その部下をも重役として、各種の大倉系事業に配置して居る。重なる者を列擧すれば左の如くである。

大倉喜七郎（合名會社大倉組頭取）——帝國ホテル社長、佛國通商社長、東海紙料會長、大倉製絲會長、大日本麥酒取締役、汽車製造取締役、帝國劇場取締役、帝國製麻取締役、日本皮革取締役、秋田木材取締役、養[illegible]銀行監査役、宇治川電氣監査役、日本化學工業監査役、日本製靴監査役、大倉ビルヂング監査役、日本自動車相談役、大倉火災海上保險相談役、京都ホテル相談役、南部銃製造所相談役。

門野重九郎（合名會社大倉組副頭取）——大倉商事會長、大倉鑛業會長、大倉土木會長、入山採炭會長、山東鑛業會長、東京製綱會長、朝鮮肥料會長、日本無線電信電話會長、[illegible]林業會長、大湊興業會長、共榮起業會長、東京[illegible]土地會長、川奈ホテル會長、鴨緑江製紙副會長、金福鐵路公司社長、日清製油社長、東洋モスリン社長、日本無線電信取締役、上毛電氣鐵道取締役、大社宮島鐵道取締役、大源鑛業取締役、南定炭鑛取締役、南朝鮮鐵道取締役、日本化學工業取締役、大島製鋼所取締役、合同毛織取締役、滿洲[illegible]花[illegible]取締役、大[illegible]役

大倉粂馬（合名會社大倉組監事）——東[illegible]取締役、東京製綱取締役、大倉ビルヂング取締役、日[illegible]機械取締役、[illegible]取締役、日本[illegible]取締役、湖南電氣鐵道取締役、日本[illegible]取締役、日清製油取締役、東京[illegible]土地取締役、大倉土木相談役

玉木誠次郎（合名會社大倉組理事）——日本ケーブル[illegible]取締役、大倉商事監査役、大倉土木監査役、日本電池監査役、大倉火災海上保險監査役、トキワ鉛工業監査役。

山田馬次郎（大倉商事常務取締役）——大倉ビルヂング取締役、佛國通商取締役、大湊冷藏取締役、日本共立火災取締役、石川島飛行機製作所取締役、昭和製作所取締役、大倉銃砲店取締役、南部銃製造所取締役、大島製鋼所監査役、日本無線電信電話監査役

今井修二（大倉商事取締役）——日本自動車監査役、日本アスベスト監査役、日本化工監査役、昭和製作所監査役、南部銃製造所監査役

[illegible]道[illegible]（大倉商事取締役）——日本電池取締役、日本化工取締役、トキワ鉛工業取締役、昭和製作所取締役、大倉銃砲店取締役、南部銃製造所取締役

淺野佐一郎（大倉鑛業取締役）——入山採炭取締役、大倉[illegible]取締役、

林[illegible]太郎（大倉火災海上保險社長）——大倉[illegible]社長、大倉鑛業取締役、[illegible]石油取締役、湖南鐵道取締役、大源鑛業取締役、南定炭鑛取締役、共[illegible]取締役

梅浦健吉（入山採炭專務取締役）——鴨緑江[illegible]取締役、山東[illegible]取締役、

[illegible]

伊藤源輔（日本皮革取締役社長）——日本製靴取締役社長、大倉商事監査役

三、大倉王國の資本網

[illegible]

[illegible]
こなる、と云ふこ[illegible]個の大中小[illegible]閥[illegible]
に劣らぬ資本蓄積の巣なることを指摘するわけとして注目に値する。蓋し、大倉王國は、對支投資では大失敗をしてゐるが、大正九年の反動その他では、損害の最小なりし方に屬し、特に、資產減の大なりしものと見るわけには行かないからである。

大倉王國資產調

	投資額	見積價額	備考
支配的諸會社	四八、[illegible]千圓	三六、四四九千圓	良いものもあるが、惡いものが多い。投資額の二割減に評價する。
準支配的諸會社	三四八	二[illegible]	成績不良のものばかり故、投資額の三分の一に評價す。
關係諸會社	九、〇九七	九、〇九七	成績不良のものもあるが、又優良のものも少からず、投資額通りの評價とする。
蒙古大倉農場	二、[illegible]	[illegible]	農場面積二百方里(三十三里四方)、現在水田二千町歩を開墾し、米作を爲すも、生産費高く、其の收支現在に於ては[illegible]、經濟的價値に乏しきを以て、全投資額を零と評價する。
南洋大倉農場	三、〇〇〇	三、〇〇〇	農場面積二千五百町歩、見込の[illegible]八支な[illegible]投資額通りに評價して差支へない。
大倉山林	[illegible]	七、[illegible]	駿、甲、信の三ヶ國に跨り面積五萬町歩に涉る。殆んど全部樹木密生の富源林である。評價は本田博士[illegible]大[illegible]に見て一町歩百五十圓とした。

	投資額	見積價額	備考
支那投資	[illegible]	[illegible]	[illegible]
本邦動產等外	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	三[illegible]	[illegible]	
借入金		[illegible]	[illegible]借入金[illegible]
差引純資產		七[illegible]	

尚ほ、以上に於て、誰しも看取し得るが如く、大倉王國の資力は、その過半が對支投資に振向けられてゐるが、その大部分は失敗に終つてゐる。ために、大倉王國支配の事業(現に活動的なもの)資本(資質見積價格)は、僅々三千八百五十萬圓を算するに過ぎず、且つ、その投資總額に對する割合四割六分弱と云ふ有様である。而して、對支借款及投資(單なる固定債權となれるもの)、及び山林、不動產、農場等の非活動的乃至は活動力少き資產は實に二千六百五十萬圓、全投資見積價格の四割三分餘の巨額を占めてゐる。以て、事業資本家としての大倉王國の勢力が、その資產の割合に、如何に小さく投影せられてゐるかの實情を伺ひ得るであらう。

扨て、筆者は、大倉王國の資產を第一表の如く、一應、大約七千萬圓と評價した。しかし、大倉組の財產中には、評價の困

大倉鑛業	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇〇・〇	九、八一	九八・一
大倉土木	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇〇・〇	一、七〇	八六・〇
大倉火災海上	五〇〇	四三七	八七・五	四三七	八七・五
大倉紡織	五〇〇	四三五	八七・〇	四二二	八四・三
東海紙料	二、五〇〇	一、五〇〇	一〇〇・〇	一、一三九	八五・六
入山採炭	四、二五〇	二、六〇八	六一・四	二、五五五	六〇・〇
日本自動車	一、七〇〇	九六三	五六・五	七一二	四一・九
東海自動車	三〇八	二〇七	七五・九	一三五	四四・七
愛媛中央自動車	二〇〇	五八	三八・五	五五	三三・五
愛媛自動車	八三	三八	一九・三	三七	一八・九
野村自動車	七〇〇	三五〇	五〇・〇	二六〇	三七・一
昭和自動車	一〇〇	四五	四五・〇	―	―
下田自動車	九四	四九	五〇・二	八	二三・三
富士屋自動車	八九九	三二九	三六・五	二三五	二六・五
丸ノ内ガレーヂ	五〇	五〇	一〇〇・〇	二五	五〇・〇
川奈ホテル	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇〇・〇	九六二	九六・二
豆滿江林業	一〇〇	五三	五三・五	一七	一七・五
鴨綠江製材	五〇〇	一〇七	二一・五	一〇七	二一・五
奉天電車	三七五	三七五	一〇〇・〇	三三五	八九・三
計	三三、七一九	一九、五五八	九一・七	一七、五九七	八四・七

●備考　大倉とあるは合名會社大倉組の投資に若干の大倉家の投資を加算したものである。

これらの直系會社は、前掲系統圖に明かなる如く、支配的子會社十社と準支配的子會社一社とを持つて居る。作表上の便宜

……これを一圓めにして見ると、大倉系の拂込資本は……六十八萬圓、大倉系所有株數の總株數に對する割合は……となる。第三表の如くである。

三、大倉直系會社の支配的子會社表（昭和四年十月末）

會社名	拂込資本	大倉系所有株式 拂込金	大倉系所有株式 株數	大倉系所有株式 同上割合
大倉ビルディング	二四〇千	二四〇千	六、〇〇〇株	一〇〇・〇％
佛國通商	二五〇	一六〇	三、八〇〇	六四・〇
日本無線電信電話	六五〇	二一七	七、〇〇〇	三五・[illegible]
大倉銃砲店	一二〇	一二〇	一、〇〇〇	一〇〇・〇
昭和製作所	一五〇	一五〇	六、〇〇〇	一〇〇・〇
南部銑製造所	三〇〇	三〇〇	六、〇〇〇	一〇〇・〇
大平建築	一二五	一二五	五、〇〇〇	一〇〇・〇
本溪湖煤鐵公司	七、〇〇〇	七、〇〇〇	不詳	一〇〇・〇
大濱炭鑛	八〇〇	五六〇	七、〇〇〇	七〇・〇
南定炭鑛	一、二五〇	六二五	五〇、〇〇〇	五〇・〇
▲大源鑛業	一、七五〇	二八六	六、六六六	一六・六
計	一三、五三〇	九、六八五	[illegible]	五[illegible]

（備考）本溪湖煤鐵公司は日支合辦事業なるも實質上は大倉の……ものなる故、全部を大倉の所有と見做す。但し……株數は不詳なり。

補して傍系會社が見られるに、別掲第四表の如く、全部で十社あり、その總拂込資本は九千二百四十八萬圓となる。これに對

する大倉系の払込金は、下□百二十萬円、大倉の払込金は、下□□□七十七萬円で、その総株數に對する割合は大倉系□□・一%、大倉□□・□%となる。

四、傍系會社及株式配表（昭和四年十月末）

會社名	払込資本	大倉系所有株式 払込金	株數割合	大倉所有株式 払込金	株數割合
秋田木材	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本皮革	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大日本麦酒	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
帝國ホテル	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日清製油	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大[illegible]興業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
竹村製作所	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本電気	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大島製鋼	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
代中製品	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大[illegible]電	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]製紙	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
中京[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

會社名				
中央自動車	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本化工	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本化學工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

傍系會社に[illegible]會社の[illegible]支配[illegible]、[illegible]支配的[illegible]。[illegible]詳細[illegible]、[illegible]切[illegible]する。

五、傍系會社に於ける大倉の持株（昭和四年十月末）

會社名	払込資本	大倉系所有株式 払込金	株數一〇〇に對する割合
日本製[illegible]	九四	[illegible]	五・九八
神中鐵道	[illegible]五・八	[illegible]八	一九・[illegible]
▲武蔵林業	[illegible]	八四	四[illegible]・四八
計	五四六八	一二・六九	二九・五[illegible]八

註　▲印は[illegible]會社なり。

大倉の持株會社[illegible]は、以下の如く大倉の持株は[illegible]。この勢力の[illegible]支配的[illegible]ないものであるが、これに傍系會社の關係會社[illegible]を加へると、關係會社の中でも一人[illegible]に所有株[illegible]は[illegible]以下の[illegible]一[illegible]である。而して[illegible]に對する持株割合、大倉系[illegible]、大倉[illegible]

百[illegible]圓に上る[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]に広く分布されて居るか、又關係會社に比して支配會社が如何に少いかの實狀を容易に窺ひ得るであらう。

以上述べ來つた所を綜合するに、大倉王國の支配下に立つ諸會社資本は、全部で公稱二億二千四百萬圓、拂込一億四千九百萬圓となり、此内公稱二億一千七百萬圓、拂込一億四千五百萬圓は大倉の支配下に在るもので、殘る公稱七百萬圓、拂込三百七十萬圓がその準支配下に立つものとなる。詳細は第六表に讓る。

六、大倉支配の諸會社資本表

	(A)大倉の支配下に在るもの 公稱資本	(A) 拂込資本	(B)同上準支配下のもの 公稱資本	(B) 拂込資本	以上合計 公稱資本	以上合計 拂込資本
	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
直系二十社	四五、[illegible]	三三、七[illegible]九	—	—	四五、[illegible]	三三、七[illegible]九
傍系十九社	一五一、六〇〇	九七、四八九	—	—	一五一、六〇〇	九七、四八九
直系子會社	一六、四五〇	一〇、七七七	二、〇〇〇	一、七五[illegible]	一八、四五〇	一二、五[illegible]
傍系子會社	四、〇〇〇	三、四六八	五、〇〇〇	二、〇〇〇	九、〇〇〇	五、四六八
合計	二一七、[illegible]	一四五、四[illegible]	七、〇〇〇	三、七[illegible]	二二四、[illegible]	一四九、[illegible]

第六表に示せるものゝ外、大倉の資本が未だ支配的ではないが、若干浸潤せるものには、大倉の關係會社と、その直系會社の關係會社とがある。前者は公稱資本二十五億三千七百萬圓、拂込[illegible]、[illegible]本六百萬圓である。[illegible]大倉[illegible]の直系[illegible]關係[illegible]る會社資本は、大部分の對支事業を除き、全部で二十七億七千一百萬圓となり、その拂込資本は二十億六千二百萬圓の多きに上る。これに資本の二重計算を顧みず、大倉組自身の投下資本を加算すると、公稱資本二十八億二千一百萬圓、拂込資本二十一億一千二百萬圓が、所謂大倉王國關係の會社資本となる譯である。第七表を參照せよ。

七、大倉支配及關係者會社資本高表

	公稱資本	拂込資本
	千圓	千圓
大倉支配諸會社	二二四、二[illegible]	一四九、[illegible]六
大倉關係會社	二、五三七、四[illegible]	一、九〇七、一七[illegible]
直系會社關係會社	一〇、〇〇〇	六、〇〇〇
合計	二、七七一、六二[illegible]	二、〇六二、三七九
大倉組	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
總計	二、八二一、六二[illegible]	二、一一二、三七九

扨て問題は、この巨額な大倉王國關係の資本に對し、大倉自身幾何の資本を投下することに由つて、それに關係づけて居るかである。この點を明瞭にする爲に作成したものが第八表である。

八、大倉系會社資本と大倉の投下資本

諸會社の位置	公稱資本	拂込資本	大倉系所有	割合	大倉所有	割合
大倉組	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
直系二十社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
傍系十九社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
支配的直系［illegible］社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
支配的傍系［illegible］社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
以上［illegible］計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
中支配的直系［illegible］社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
中支配的傍系［illegible］社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
以上合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大倉關係會社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

右表に依ると、大倉系［illegible］直系［illegible］支配的直系［illegible］

［illegible］

トロールして居る［illegible］ものがある。［illegible］會社の支配［illegible］

［illegible］

四、大倉系事業の位置

［illegible］

[illegible]借金に由つて[illegible]と云はれてゐるが、喜八郎氏は、此の場合、銀行業と[illegible]の産業との性質の異同を混合してゐたらしいと云ふ。即ち、銀行の預金は借金で、之を元にして經營する銀行は借金で事業を經營するものだと考へ、之を他の産業並みに、借金で事業を經營すると看做したのだと云ふ。

しかし、銀行を有せざる不利、不便は、大倉組中にも之を認めるものあり、從來屢々、銀行設立案が擡頭したが、その都度故喜八郎氏が之に反對したのだと云ふ。兎に角、喜八郎氏の此の銀行嫌ひは、大倉王國をして、金融業に進出する機會を失はしめた。いまとなつては、假令大倉が銀行業に進出せんとしても、銀行業の分野も定り、未經驗の大倉が、新に、此の方面に進出する餘地は殆んど封ぜられてゐるからである。斯樣にして、今日の金融資本の時代に於て、大倉は、何等の金融勢力を有せず、ために、今後の大財閥に不可缺の一大資格を缺くこと、なつた。知らず、大倉王國は、將來、此の缺點を果してよく他のもの(例へば第一銀行との提携の如き方法に由つて)に由つて補ひ得るか、將又、大財閥への進出を斷念して、現狀維持に滿足するか、どうか。

尤も、大倉王國は二つの火災海上保險を握つてゐる。例へば[illegible]海上[illegible]明治[illegible]東京に[illegible]之れ[illegible]大倉組[illegible]其の他[illegible]たものであつて、金融業への進出と見るわけには行かぬ。

顧るに、大倉王國が金融事業に缺けてゐることは(及び同じ精神の下に借金に由つて事業投資をなすことを嫌つたことは)、折角、大倉の育成せる大會社をも、その支配の外に逸せしめる結果を幾多示してゐる。例へば、宇治川電氣は先代喜八郎が中橋德五郎と相謀つて明治三十九年に創立したものである。東京電燈亦、先代喜八郎が矢島作郎及び藤岡市助等と共に發起人となり、明治十九年に設立したものである。にも拘はらず、今日その支配權が大倉の手中を離れて了つてゐる。又、大日本麥酒會社も、先代喜八郎が肝入りで合同成り、大倉はその第一の大株主であるが、こゝに於ても、大倉の支配權は漸次に薄らぎつゝある。これは一體何故かと云ふに、大倉がその事業との關係を絶つたからでは全くない。株式の賣買をしないのが大倉の一特徵である點から推すも、大倉が現に猶ほこれら株式を相當所有する點に見るも、これは明白なことだ。然らば、大倉とこれら諸會社の關係は何に依つて薄らいだか。要するに、大倉が金融

古河王國論

一、古河王國の産業支配網

古河は、三井、三菱、安田、住友、大倉の諸財閥に比すると遥かに規模が小だ。併し、金融一本槍で進んで居る安田や、産業一天張で押通して來た大倉に較べると、小乍ら一通り財閥としての形態を備へて居る。これが古河財閥の一つの特徴だ。古河財閥の第二の特徴は、中小財閥で産業と金融業を兼營し來つた高田、渡邊、村井、中井等々がみな没落し、没落しないまでも若尾、森村、藤田等々の如く何れも銀行を手放さねばならなくなつた時、大正九年のパニックで少からぬ痛手を受けながらも、

[illegible]

[illegible]本家を解放して、財閥[illegible]資本を[illegible]し、且つ[illegible]傾向に顕著なる今日に於て、依然、その本家たる古河一族で固めてゐることだ。それは、必然に保守と地味とを意味する。之れ、古河財閥が、その實際資産額に比し、著しく他の財閥よりも小さく世人の目に投影せらるる所以だ。

斯く、古河財閥は、その事業につき非公開的である。従つて、古河財閥第四の特徴は、その投下資本の著しく集中的であることだ。勢ひ、古河財閥の指揮下に立つ合社銀行の數は極めて少いが、その對古河合名關係乃至その相互關係は極めて緊密なるものがある。

（備考）表中※印は古河の支配力が大體に決定的なもの、無印は同じく準支配的なもの。▲印は古河の支配力未だ以上の如くならざる關係會社である。

古河合名
- 直系會社
  - 古河鑛業 ― ※大阪製煉、※鍋山人車鐵道。
  - 古河銀行 ― ※旭電化工業。▲川北電氣企業。▲第一銀行。
  - 古河電氣工業 ― ※日本電線製造。※東亞ペイント。※横濱護謨製造 ※千代田電線、中華電機製作所、原町紡織。
- 傍系會社
  - 日本伸銅 ― ※尼ヶ崎伸銅 ※日本輕合金工業。
  - 帝國生命 ― ▲東京電燈。▲明治製糖。▲東邦電力。▲宇治川電氣、▲九州水力電氣、▲東信電氣、▲南滿洲鐵道、▲朝鮮鐵道。▲京王電軌。▲玉川電鐵。▲博多灣鐵道。東京瓦斯 ▲北海道瓦斯。
  - 日本電線。富士電機。大正鑛業。日新護謨。
- 關係會社 ― 日本産業、輸送、南米拓殖、東亞興業、昭和銀行。

	出鑛量	品位
足尾	……八二、〇九五、〇一九	四・七一
別子	……一一七、三一四、九五七	二・八九
日立	……七八、七七六、七〇一	一・八八

(備考) 本表は農商務省發行の大正十五年「本邦重要鑛山要覽」(但鐵鑛を含まず)による。

足尾が、我國銅山中、如何に優れた鑛山なるかを窺ふに難くないであらう。しかも、その強味たる鑛石品位の優良なることは、金解禁に由る打撃が、品位の低位にある場合と比較にならない程輕微で濟むことである。

顧るに、我が國の大財閥の殆んどすべては、鑛山に由る巨利に由つて今日の大をなす基礎を築いてゐる。例へば三井の三池、三菱の高島、住友の別子、久原の日立、藤田の小坂、古河の足尾等々である。しかし乍ら、いま尙ほ、その財閥の繁榮をその双肩に荷つて、當該財閥の信用に堅固な基礎を與へてゐるものとしては、足尾の古河に對するが如きは他にその例を見ない。實に、古河王國の彫箱は、その足尾鑛山にある。而して、古河王國の各種事業は、已述の如く、この足尾鑛山を中心にして四肢を伸ばしてゐるものなること、已述の如くである。

二、古河王國の人的支配網

古河王國の大部古河合名の出資社員は古河虎之助、吉村萬治郎、及び木村長[illegible]初代古河市兵衛より、二代目は潤吉[illegible]にして市兵衛の養嗣子となれる[illegible]の當主となり、古河合名となつたものである。合名の出資が殆んど全部虎之助に依つてなされて居ることは改めていふ迄もない。他の二人の出資者、吉村萬治郎と木村長七は共に虎之助の姉婿である。

古河合名には社長の下に一理事長、七理事がある。理事長鈴木恒三郎は三井の團、三菱の木村に相當する格で、古河の事實上の指揮者である。社長、理事長及び理事會を形成し、古河の最高決議機關となる。理事會の下には査業課と秘書課がある。査業課は更に會計、査業、技術、調査の四つに分れる。會計は古河系諸會社の會計檢査に當り、査業はその成績と決算報告書の調査をやり、技術はそれら會社の技術の調査に任じ、調査はそれら會社及び合名の起業を調査する。

かゝる組織を持つた古河合名は、それら組織の活躍と調査に依つて、その傘下に立つ諸會社を統制する。具體的統制法の第一は古河系諸會社に向つて合名からその首腦者及び幹部を出すことである。第二はそれら諸會社の營業成績、起業に關する豫算、決算、利益處分案等の事項を報告せしめ、理事會でその採否を

[illegible]

[illegible]古河系[illegible]吟味[illegible]ことである。今、合名の首脳と古河系会社

[illegible]首脳名を一人に網羅すれば、次の如くである

社長	古河虎之助
理事長	鈴木恒三郎
理事	吉村萬治郎
理事	中川末吉
監事	[illegible]村信[illegible]
監事	岡田完[illegible]

古河鉱業	佐々木敏綱
古河電気工業	昆野元八郎
[illegible]	内[illegible]
日本電線	[illegible]谷安太郎
日本軽金属	長谷川[illegible]
大阪製鎖	小島甚太郎
日本伸銅	鈴木茂雄

これに[illegible]合名[illegible]首脳[illegible]

[illegible]合名[illegible]六[illegible]首脳[illegible]

[illegible]首脳[illegible]

[illegible]

鈴木恒三郎 古河合名理事長[illegible]古河鉱業取締役[illegible]

[illegible]日本電線[illegible]監査役[illegible]

吉村萬治郎 古河合名理事、[illegible]

中川末吉 古河合名理事[illegible]

[illegible]、日本電線製造取締役、[illegible]

[illegible]取締役。

吉田[illegible]之助 古河合名理事、日本伸銅取締役、日本電線製造取締役、古河鉱業取締役、大日本人造肥料取締役、大阪製鎖監査役。

山田復之助 古河合名理事、古河鉱業取締役、日本伸銅取締役、日本電線製造取締役、大日本人造肥料取締役、大阪製鎖監査役。

佐々木敏綱 古河鉱業取締役、古河合名理事。

小島甚太郎 大阪製鎖取締役社長、古河鉱業監査役

長谷川銑六郎 日本電線製造取締役社長、古河電気工業取締役、日本電線取締役、日本伸銅監査役。

木村列吉 日本電線製造取締役、[illegible]監査役。

鈴木茂雄 日本伸銅取締役社長、日本[illegible]取締役、尼ヶ崎伸銅取締役。

神戸正雄 日本伸銅取締役[illegible]、日本[illegible]合名[illegible]取締役、尼ヶ崎伸銅取締役。

三、古河王国の資本支配

[illegible]合名[illegible]合名[illegible]

[illegible]古河合名[illegible]

[illegible]古河合名[illegible]

[illegible]日本[illegible]

[illegible]

[illegible]會社に對する投資額中[illegible]

社に對する投資額中二千二百五十萬圓は、餘裕ある一割一分配當をして居る古河鑛業に對する投資であり、五十萬圓近くは皆通配當二割をなし、五十圓拂込の株式が三百圓摑みにある帝國生命への投資であるから、優良會社に對する投資額の實際價値は、平均して投資額の四割增と押へれば、先づ大過ないことになる。するとその實際價値は三千五百萬圓となる。次に優良ならざる會社に對する投資千四百萬圓であるが、此内には七分配當の會社もあれば、六分配當の會社もある。無配當の會社もあれば、赤字の出て居る會社もある。そこでこの實際價値を、古河の會社經營法の健實的なることを考慮に入れて、大摑みに投資額の三分の二とすると九百三十三萬圓になる。優良會社に對する投資額と合計すると四千四百三十三萬圓になる。

若し古河合名が他から借入金なしで投資して居るのであり、又他に大した財產(土地建物等)を持つて居なければ、これが古河合名の純資產となる。何分合名に關することは、世間に發表されないからハッキリしたことは判らないが、確實な筋から聞くに合名には約千萬圓の借入金(古河銀行からではなく、外部の大銀行から)があると云ふことだ。すると合名の資產は投資額四千四百三十三萬圓から、借金の千萬圓を差引いたもの、即ち[illegible]

[illegible]に合名の資產となる。

この外、古河本家の資產として古河家の所有せられる、古河家の財產は殆んど全部が合名への投資額となつて居るが、僅にも千の土地建物がある。その重なるものは、東北と足尾の山奧にある山林で、面積一萬五千町步、時價約九百萬圓と評せられて居る。從つて古河王國の總財產は、合名の投資額實價三千四百餘萬圓に古河家の資產九百萬圓を加算したもの、即ち三千九百餘萬圓、大約四千萬圓となるのである。

しかし、以上は專ら、會社の配當率から資產の評價したのであるが、實際に於ては、鑛業の利益配當は、採掘の仕方一つで非常に異ふ。例へば豐鑛部分を主として採掘せば、前途の命脈は短くなるが、目先は非常に良くなる。又、貧鑛が多くし、之に豐鑛を混入して、鑛山の繁榮の前途永く維持するとせば、目先の利益は惡くなるが、鑛山そのもの、實質はよくなる。又、設備費探鑛費等を營業費で切捨てるか、或は資本勘定にするかに由つても少なからず違つて來る。然るに、古河鑛業は、事實上個人經營なるが故に、目前の利益配當よりも、事業百年の繁榮を第一にしてゐる。例へば何時でも有利に採掘の出來る豐鑛には出來るだけ手をつけずに、貧鑛處理に努力し、現に、[illegible]

ばならない。この意味で、古河に於ける、然かも、中小財閥としては、大倉の如く、銀行を有せざるを可とするところは、今日の金融資本の時代に於て、他日大財閥に飛躍する資格を放棄するものだ。思ふに、中小財閥と金融業との關係は、いま現に古河が行ひつゝあるが如く、先づ、その金融業そのもの、健實なる發達のために、その資金を自家産業に投資することを極力避け、以て、強固なる一流銀行にまで之を仕立てることに專念する外ないであらう。一度び、この程度の信用と基礎とが出來れば、その金融資本の威力の下に、漸次、その財閥の事業的發展は容易になるに至らう。われ等はその典型を住友財閥と住友銀行に於て見る。

いま、古河が、一個の小財閥として、しかも金融業を併せ經營しつゝあることは、現在の古河財閥としては、寧ろ得るところよりも、心配の方が多い筈だ。しかし、その故に、銀行業を捨てることは、古河が他日の大成を期する限り策の得たるものではない。銀行業を有せざる事業財閥が、如何にその發展に行詰りつゝあるかは、現に、われ等の多く目撃しつゝあるところであるからだ。本論の冒頭に於て、筆者は、古河の特徴の第一が、小財閥にも拘らず財閥としての形式を備えてゐる、と申したわけは、この點である。こゝに、古河王國の興味がある。彼れ、[illegible]小財閥[illegible][illegible]河にして、その銀行を大成せしめ得ることあらば、それは同時に、我國に於ては、中小財閥が銀行を兼營し得る時期は、最早大きに在れることを語るものだ。この意味に於ても、古河王國の金融的運用の成否如何は、われ等の深大なる興味に値するものである。

轉じて、問題は、古河王國が、その支配下の資本を以て、如何なる事業を、何の程度に支配して居るかと云ふことである。先づ直系會社に就て見る。直系會社は古河の資力の集注して居る處で、總拂込資本四千二百六十五萬圓中、古河合名の投資額は三千百萬圓を超え、全體の七割三分に上り、若し古河系會社について見れば八割九分である。第一表の如くである。

一、直系會社資本支配表（昭和四年十月末）

會社名	拂込資本金	古河系會社保有株式 拂込金	同上割合	株數割合	古河合名會社保有株式 拂込金	同上割合	株數割合
古河鑛業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
古河銀行	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
古河電氣工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

[illegible]

以上傍系會社は[illegible]傍系會社の總資本金合計一千六百六十萬圓[illegible]であつて、古河合名自體の投下資本は[illegible]四百十八萬圓で、合計に對する割合は[illegible]。併し古河系の持株を合せれば、投資額は六百六十八萬圓で、この割合は四割となる。表第[illegible]の關係を示すものである。

（[illegible]表　昭和四年十月末）

會社名	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本電線	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
富士電機	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大日本電線	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
帝國[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

[illegible]古河の[illegible]である。[illegible]

[illegible]もない。[illegible]故平を進めて、直系會社及び傍系會社の子會社を一瞥することにする。直系會社の子會社は十社あり、内七社が支配的、[illegible]社は準支配的、[illegible]社が支配力の大ならず及ばぬものである。傍系會社には十五の子會社があり、内支配的なもの[illegible]社、支配力の大なる及ばぬもの十二社である。之等直系會社と傍系會社の子會社中、支配的なもの及び準支配的なもの十社を集めるに、總資本金一千二百二十二萬圓、古河合名の投資額[illegible]萬圓、古河系の投資額八百六十八萬圓で、古河系の投資[illegible]合計に對する比率は七八％となる、（表の第[illegible]）

（[illegible]表　昭和四年十月末）

會社名	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大阪製[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
旭電化工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
日本電線製品	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
中央ペイント	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

横濱護謨製造	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
千代田電線	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
▲中華電機製作所	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
▲尼ヶ崎伸銅	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
▲日本輕合金工業	[illegible]	[illegible]				
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

(備考) ▲印は準支配的子會社、×印は傍系會社の支配的子會社、※印は古河の所有關係割合の分の割合に從って計算す

古河の產業支配網は、概略上述の如くであるが、それ等資本の總計は一體幾らになるか。古河王國の支配的諸會社のみに就て、前述の分類に從つて之を總括すると、第四表の如くで、その全資本は公稱資本八千八百七十三萬圓、拂込資本七千百四十七萬圓となる。この中古河の支配が決定的なもの、拂込資本七千五十萬圓、同準支配的なものの九十七萬圓である。

四、古河支配の諸會社資本表

	古河の支配下にあるもの 公稱資本	古河の支配下にあるもの 拂込資本	同上準支配下のもの 公稱資本	同上準支配下のもの 拂込資本	以上合計 公稱資本	以上合計 拂込資本
	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
直系四社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
傍系六社	[illegible]	[illegible]			[illegible]	[illegible]
直系子會社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
傍系子會社	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

古河の支配子會社にはまだいくつもあるが、然しそれは極く振はない會社で、大きなものは概して宜い。從って古河の實際資本力を見るには、單なる拂込高に由らず、その實際價値に由らなければならない。然るに、古河支配の諸會社總拂込資本七千百四十七萬八千圓中、一割以上の配當をして居る優良會社の資本が三千九百四十萬圓ある。殘る三千二百餘萬圓が七分以下の配當、無配當、缺損を計上して居る不良會社の資本である。優良會社は、大體投下資本の四割增をその實價と見て大過なく、不良會社は大體投下資本の三分の二をその實價と押へれば大體妥當と思はれる。この計算の結果は双方で七千六百五十四萬圓となる。これが古河支配の諸會社資本合計額七千百四十七萬圓の實價となる。この外、古河王國の支配會社として資本金二千萬圓全額拂込濟の古河合名があるが、これを加算することは、明白に資本の二重計算となるから、ここでは計算外に置く。

次に古河王國がどれだけの資本を投じて、どれだけの資本を左右して居るかを見るに、第五表の如くになる

五、古河系會社資本と古河の投下資本

會社の位置	公稱資本總額	拂込資本	古河系所有	同上割合	合名所有	同上割合
直系四社	九七、九	四〇、八	三六、一九	八九%	[illegible]	[illegible]
傍系六社	一九八、一	一六八、八	八八、三四	四〇	二四、八	一二
支配的直系計	一〇七、九	八六、六六	六六、九六	七七	一一、五	五
支配的傍系計	二、五四	二、五四	一、九七	●七七	—	—
以上小計	八〇、四五	七七、五八	五八、八	●七七	七七、四	五八
準支配的直系子會社計	二、五	九七	二二	二二	二六	八
以上合計	八六、四五	七四、八	●五八	●七四	七七、六	九

〔註〕 これには古河系の日本製銅會社一覧を除く。

右に出るに、古河系の資本は直系四社で八九%、傍系六社で二一%、支配的直系子會社で七一%、支配的傍系子會社で七七%、準支配的直系子會社で二二一%の資本で、夫々の會社資本を支配して居る。併しこの古河系の有資本は、古河合名それ自身の投資でなくて、合名が其の何割かを占めるに過ぎない、直系又は傍系會社の投下資本が混入して居る。そこで古河が自己の投下資本に比し、何倍の會社資本を支配して居るかを見るには合名自らの投下資本とそれが支配會社の拂込資本に對比させる必要がある。この關係を前の表に依つて見ると、合名は直系四社でも一二%、傍系六社で二一%、支配的直系子會社に一一%、準支配的直系子會社に一六%の資本を投じて、夫々の會社を支配して居ることが觀測される。而してこの總平均は、合名が千七百三十八萬圓の資本で、七千百四十七萬圓の資本を左右して居ることになり、比率にして九二%の資本で、一〇〇%の資本を左右して居ることになる。

現代日本土地問題の發展

猪俣津南雄

一

我國における土地問題の發展の現狀の本質的な特徵は、土地の私的所有に基づく現在の生產關係が、日本農業の生產力のヨリ以上の發展に對する桎梏となつてしまつたことにある。

地主に對し、農民に對して、土地問題として現れてゐるところのものと同一の事態は、商工業資本家に對しては、國內市場の「行き詰り」となつて現れてゐる。

吾々がすでにいくたびか日本資本主義の最後的な經濟的運命は海外への發展なかんづく支那への進出にかゝつてゐると主張したときに、吾々はつねに國內市場の「行き詰り」を前提した。そして此の「行き詰り」にこそが、世界大戰時以來飛躍的に增大した日本工業の生產力に對する打克ちがたき障碍として、我國資本主義の異常に深大化した諸矛盾の最重大な一つをなしてゐることを指摘した。そして謂ふところの國內市場の狹隘化は、一方では工業資本がその有機的構成の高度化による過剩人口を決定的に增大せしめつゝ、獨占の段階に入込んでをり、他方では農業人口[illegible]に付隨する人口の率は[illegible]を占め

ることであれ――購買力が相対的減少の一路を辿るといふ、二重の要因によつて最早や決定的となつてゐることが分る。時はなかなか、一年の間内、農家の市価の変落といふやうな一時的な影響がなかにすれば、農村人口の購買力――消費力――が、増大する工業生産力に適応増加して絶えず国内市場を購入せしめるか否かは、農業それ自身の生産力が需要のテンポにつれて発展するか否かにかかつてゐる。農村人口が有機にその所得を引出すところの農業の、その生産力の発達なくしては、農村購買力の相当的な増大はありえないのである。

かくして、いまや日本農業の生産力の発展が停止状態におちいりつゝあることのうちに、農業生産の私的所有に基づく生産関係の現状の問題、すなはち我が国のいはゆる土地問題の、その重要性は問題である。それはたゞに農村問題の中心をなすのみではない。それがまた農村問題の中心をなすことによつて更にそれの解決如何は、日本資本主義全般の、発展の速度・方向・特質・位置――一口にいへば全運命を左右しうるものでなければならぬ。

二

しからば、その農業生産力の発展の停止状態は、いかに[illegible]あらはれてゐるか？ それはまづ、大農業生産力の発展の指標たるところの、[illegible]耕地面積の増加が、近年においては著しく停滞[illegible]、最近時にあつ[illegible]

[illegible]

の耕地増加は從つて毎年平均五萬町歩の割合で行はれたことを[illegible]の下における耕地増加の最後の段階を意味したものでなければならぬ。何故といつて、この我が五年間における耕地の戰時價格、あの米騒動の大正八年を含む五ヶ年間の、異例的な好條件の刺戟をうけてさへ、日本農業の耕地増加は、さきの十年間ほどの増加速度はもはや示し得なかつたのである。否な、そのまたさきの三十年間における毎年増加の割合にさへも劣つたのである。大正六年の六百二萬町歩は、大正十年に至つて六百十六萬町歩に増加した。この戰時景氣下に行はれた耕地増加は僅かに十四萬町歩、すなはち毎年平均二萬八千町歩に過ぎなかつた。しかも此のよわ〳〵しき増加率が、増加のためのあらゆる刺戟の下に辛うじてあらはれたものであればあるほど、それはすでに事實において、我國の現實條件關係下における耕地増加の「終焉の始まり」に外ならなかつたのである。いまや、日本耕地面積の絶對的減少が始まる、——かの大正十年の六百十六萬餘町歩を最後として。だふ、次表を見よ。

大正十年を基點とする耕地面積の絶對的減少

	實數(單位は町)	指數
大正十年	六、一六二、二三二・七	一〇〇・〇
大正十一年	六、一五四、〇八七・一	九九・八
大正十二年	六、一〇二、九七三・一	九九・〇
大正十三年	六、〇六五、一六四・九	九八・四
大正十四年	六、〇六七、〇一五・〇	九八・四
昭和元年	六、〇七三、七九七・〇	九八・五

註　昭和元年の耕地面積は、大正十年のそれに比して八萬八千餘町を減少してゐる。尤も、前年の大正十四年に比すれば、僅かながらも——即ち六千餘町歩ほどの——増加を示してゐる。昭和二年、三年、及び四年の耕地面積は尚ほ不明であるが、大なる増加のなかつたことは想像するに難くない。また假りに引續き若干の増加があつたとしても、その事實が[illegible]

[illegible]

米の一反步當り收穫高(五ヶ年平均)

	實數	指數
自明治三十四年至同三十八年	[illegible]	[illegible]
自同三十九年至同四十三年	[illegible]	[illegible]
自[illegible]年至[illegible]年	[illegible]	[illegible]
自大正[illegible]年至同九年	[illegible]	[illegible]
自大正十年至同十四年	[illegible]	[illegible]
昭和元年	[illegible]	[illegible]

[illegible]

[illegible]

界大戰以前の九ヶ年平均は、僅かに七％の增加を示すに過ぎないことに [illegible] する諸力は、世界大戰時代にもその作用をゆるめなかつた。さればこそ、反當り收穫を高めたるべき諸努力が集中されたかやうな戰時の五年間においてさへも、その實際の增加は、日露戰爭後の九ヶ年間の增加におよぶことを許さなかつた。從つてまた世界大戰後の九ヶ年間においても、反當り收穫の絕對的減少が生じたのは寧ろ當然といはねばならない。此の戰後の九ヶ年間平均の反當り收穫は、尚ほ戰前九ヶ年の平均よりは大きいとはいへ、これと比べての增加はさへ僅かに六升六合に過ぎず、日露戰爭後の五ヶ年平均が示した一斗五升の增加に比すればまさに格段の相違がある。そして、米の反當り收穫の增加における斯くの如き停滯的傾向はまた、麥の反當り收穫においても、殆ど同様的にあらはれてゐるのである。

三

我國の農業に投ぜられてゐる勞働力の相對的多量さは、しばしば外國觀察者の驚異の的であり、勞働力の投下がとくにその經濟的限界を超えてゐることはいまや周知の事實であるといふことは、言ふまでもなく、日本農業の生産力のヨリ以上の增大は、もはや單に、ヨリ多くの勞働力を投ずるのみでは不可能となつたことを意味する。從つて、殘された唯だ一つの途は、農業勞働の生産性を高めることにあるのを意味する。一單位の勞働をしてより多くを生産せしめるやうな諸條件がつくり出されるのでなければ、日本農業の生産力は停頓し減退するのみである。

だが、農業勞働の生産性を高めるといふことは、それは結局、一單位の農業勞働を、ヨリ多くの土地、ヨリ多くの生産手段と結合せしめることに歸着する。そして農業に於て商品生産が普及し、資本主義的生産方法さへが始つてゐる日本の現狀にあつては、それは結局、ヨリ多くの資本が農業に投ぜられ、ヨリ多くの耕地が擴大されることによつてのみ可能である。

吾々がさきに、全耕地面積の增加の趨勢を調べ、更に、反當りの收穫高を調べて、實證的に確定したところの、我國

[illegible]日本の[illegible]

[illegible]多くの人の[illegible]ることであらう。[illegible]は、一歩を進め、[illegible]

[illegible]の時[illegible]的[illegible]要、[illegible]資本制的生産様式と[illegible]は、日本に於ける土地所有関係の発展の到達[illegible]

[illegible]不可能[illegible]する。

[illegible]一般的法則である[illegible]

[illegible]法則の抽象的[illegible]ではない。[illegible]法則の一般的[illegible]もない。[illegible]

[illegible]一切の[illegible]的[illegible]日本[illegible]

[illegible]分析し、[illegible]発展している特殊の諸関係を究明することによって、日本に於ける土地関係の発展の[illegible]

[illegible]

四

[illegible]日本[illegible]多く、[illegible]

[illegible]自身の[illegible]

[illegible]

困難なること、[illegible]便を開くの困難なること、[illegible]困難なること、（七）漁業關係の解決困難なること、（八）企業の衝に當る人物の得難きこと、といふ八大原因が數へられてゐる。これらのうち、（四）および（五）の困難は、[illegible]のうちのたゞ一部分においてのみ存在し、さうした困難のない除拓地の開墾が進行するに從つておのづから消滅する。（一）の謂はゆる計畫・設計の困難は、一見技術的困難の如くにして實は（二）の「收支計算の見込困難」と同様に、「開墾は割が惡るい」といつたことに歸着する恐れがある。計畫・設計は、ひとへにたゞ收支計算の見込をたてるためになされるのだからである。だが、何故に開墾は割が惡るいことになる恐れがあるか？ それはたゞ、茲に開墾の當事者として想定されてゐる「人物」が地主であり、地主でないまでも地主同様に、ひたすらにたゞ土地の私的所有者の立場から、しかも土地への放資の見地から、その利廻りの見地から、すべてを考察するからである。そして銀行その他の金融業者・金貸しもまた、開墾資金の融通者としては必然に、地主の立場におかれ、土地放資者の見地を見地とし、そのうへでのみ貸す貸さないをきめなくてはならぬ。なぜといつて、問題の開墾地が抵當流れとなり、彼等自らが現實に地主と化し土地放資者と化す場合をば、損と德の兩面から、またしばしば不可抗的と作爲的の兩面から、「技術的」(!)に仔細に考察せずにすむだらうか。――されば、こそ、「開墾資金の融通困難」もあるのである。

開墾地のために貸すのは割が惡るいと同じやうに、開墾そのものもまた地主的土地放資者にとつて割が惡るいとすれば、そしてそのために開墾が遲々として進まぬとすれば、それはたゞ、開墾地以外の土地の私的所有の方がまた餘りにも格段に割がよすぎるからである。（耕地の利廻りについては例へば、石橋湛山氏の「新農業政策の提唱」を見よ。小作人搾取の強度化により、穀價の騰貴により、公課負擔の輕減により、土地の自然價値によらず、旣墾の土地を所有し兼併してきて機を見ては手離すことを常としたものの利廻りは、彼等に約束する時に、何に[illegible]未墾地の開墾へと[illegible]

[illegible]關聯[illegible]利[illegible]もの[illegible]關聯[illegible]搾取法の。総[illegible]相對的[illegible]ある。[illegible]搾取[illegible]關聯[illegible]所有[illegible]搾取[illegible]よって[illegible]搾取法[illegible]これは、[illegible]のであ

る。[illegible]、この[illegible]人に對する[illegible]は、現代日本の農民を小作料[illegible]運動へ[illegible]ているところの特殊の生産關係に[illegible]外[illegible]問[illegible]ある。[illegible]後に……

[illegible]開發[illegible]の[illegible]水利權關係の解決問題[illegible]の解決問題[illegible]大なる重要性[illegible]所有權に[illegible]る

[illegible]

その所有地を開墾すべきか[illegible]を決定する自由を[illegible]持者に與へる[illegible]
ろ。公課の輕減を企圖し、水利・道路・鐵道の利便計劃に參劃し、農民の土地耕作の合理的改良に[illegible]
大とを促進しつつもつて、自己所有の土地を進んで開墾しておく役にさへ[illegible]えてゐるだけの條件の出來あがるのを[illegible]ゐる。そして此の地主等の進取的でない否定は、社會的消費の要求が彼等の所有する土地の生産的利用を切望し、科學的な技術の水準がすでにそれを可能ならしめてゐる時に、まさにその生産的利用を拒ましめるのである。かくしてきた、土地の私的所有權が地主等に與へた自由は、農業生産力發展の妨害の自由であつた。

註、マルクスは既に言つた、――『土地の單なる法律的所有は、所有者に地代をつくり出してやりはしない。が、しかし、さうした所有は、經濟的諸關係が、剩餘を生ずるやうに彼れの土地を利用すること……を得しめるにいたるまで、それを耕作させないでおく權力を彼に與へてゐる。……すでにフーリエーの指摘したやうに、あらゆる文明國において比較的著大なる土地の部分が耕作されずにほつてゐることは、特徴的な事實である。』（資本論第三卷第二部、二八九――二九〇頁）。故にマルクスが「剩餘を生ずるやうに」云々といつてゐる時の「剩餘」は、地主それ自身の懷に入る剩餘のことであつて、剩餘一般のことではない。そして、その剩餘が、開墾のために地主の投する資本に對してどれだけの收益率になるかの問題が生じ、この收益率が、同額の資本に他のすべての[illegible]彼れにとつて現實に可能なる――放資形態をとらしめてあげ得るすべての收益率よりも高くなるまでは、地主はその所有地を開墾させずにおく、といふことは、筆者が、本節で力說した通りである。

五

土地の私的所有は、その所有者たる遊食的な地主達自身による土地開墾を妨げてゐるばかりでなく、自ら勞働を農業に投する直接の生産者たる小自作農や小作農による土地開墾に對してもまた[illegible]ところの克服しがたき障碍をなしてゐる。もしも地代を拂はなくてもよいならば、直ちに耕作されるであらうところの、[illegible]

[illegible]

もしく、小自作農や小作農が、開墾を断念して、[illegible]に[illegible]ふことをなさ[illegible]ことと[illegible]、ひとしく土地の私的所有の故にではあるが、過度に地—に[illegible]して[illegible]問題に[illegible]する。[illegible]小作農民——にあつては勞働報酬の得られぬことが開墾を断念させる。一方がいくら[illegible]の問題を問題として[illegible]に、他方は生きる死ぬるの瀬戸際に立つ。大地主等が開墾よりはむしろ他の事業に向ふのは、もつと割のいい利殖方法があるためならば、小農民の場合のそれは生きてゆけないためであり、プロレタリアになるためである。が、それにしても、日本の農業生産力の發展は停頓する。そしてそれは私的土地所有のブレーキのためである。

六

未墾の農耕適地は悉く私的に所有され、その結果大多數の農業生産者に對して絶望的な小作料や地價が要求されて、耕地の擴大は今や不可能となりつゝあるといふ事實は、また、既墾の耕地に資本を増投して反當りの收穫高を高めることが不可能になりつゝあることと密接に關聯する。

最近の十年間乃至は十五ヶ年間に生じたところの、一反歩當り收穫高の僅かばかりの増大が、殆んどすべて資本の増投のためであるのは周知のことである。さうだとすれば、その反當り收穫高の増加の割合が急速に減少しつゝあるのは、これ以上の資本の増投がもはや不可能となりつゝあるからでなければならぬ。なぜ不可能となりつゝあるか? それは、勞働力の供給を得ることの困難なためでないことの明かである限り、資本と土地を得ることを妨げる何物かのためでなければならぬ。

一定面積の土地——一町歩なら一町歩の限られた土地のうへに資本を増投するならば、それによつて無限に收穫を高めることは出來ないし、増投された資本に酬いるだけの増收をあげ得る限界は一層早くやつて來る。かゝる限界に達した場合、

（一）大藏省主税局の調査（大正十四年）

田の賣買價格

上等（一反歩） 六六五圓
中等（同　） 四一五圓
下等（同　） 二二七圓

畑の賣買價格

上等（一反歩） 四三四圓
中等（同　） 二三三圓
下等（同　） 九九圓

註、北海道と沖繩を除いた全國平均

（二）遞信省簡易保險局の調査（大正十四年）

田の賣買價格

上等（一反歩） 七一五圓
中等（同　） 四九八圓
下等（同　） 三一〇圓

畑の賣買價格

上等（一反歩） 四八一圓
中等（同　） 三〇五圓
下等（同　） 一七一圓

註、北海道、沖繩をも含む全國平均

（三）日本勸業銀行の調査

A　大正十四年の調査

田の賣買價格

上等（一反歩） 七三九圓
中等（同　） 五六〇圓
下等（同　） 三九〇圓

畑の賣買價格

上等（一反歩） 四八九圓
中等（同　） 三三八圓
下等（同　） 二一四圓

B　昭和三年の調査

上等一反歩	七[illegible]圓	上等一反歩	四六九圓
中等同	[illegible]	中等同	[illegible]
下等同	[illegible]	下等同	二〇[illegible]圓

[illegible]

かくしてまた、吾々の問題の範圍もおのづから限定されて來たことになる。

吾々は、まづ、日本農業の生産力の發展が停止の状態においやられつゝあることを見た。吾々は更に、いま農業生産力の發展を不可能ならしめてゐるものは、絶對的に高い地價及び小作料の形をとつて作用しつゝある封建的土地所有であることを見た。いまや吾々は、この法外に高い地價及び小作料が、いかにしてつくり出されてゐるかを見なければならぬ。が、それにさきだつて一應、謂ふところの地價及び小作料が果して法外に高いか否かを確かめておくべきであらう。その目的のためには、吾々は那須皓氏の見解を引用するの便宜をもつ。それは、吾々何等かの反地主的偏見の故に事實を虛構するといふ疑ひの餘地なからしめるであらう。

で、前掲の土地賣買價格の調査數字を指して那須氏はいふ——

「併し大體において上掲平均數字は、本邦内地耕地價格の一般を示すものと見ることが出來やう。十九世紀末まで無代價に近き國有地拂下をなし得たる米國は比較すべくもないが、人口稠密なる歐洲諸國にて數百年來農耕の地たるものの代價と之とを比較しても、本邦耕地は二三倍の高價にあるのである。」（「日本農業論」六四頁）

これを言ひ換へれば、吾國の地價はまづ世界第一の高價なものであり、絶對的にも、相對的にもさうだといふことである。相對にも、——即ち、一單位の土地の收穫の大小を考慮に入れても、である。そして吾々はすでに、現在のその地價が、農業勞働の生産性の發展を不可能ならしめてゐるほどの高さのものであることを見た。

では、小作料はどうか？　那須氏は次の如き農林省調査の數字（「本邦農業要覧」所載）をかゝげていふ——

田畑反當小作表

田　小作料（反當）

畑小作料（反當り）

種類	戸數	見積金額
米	[illegible]	[illegible]
大豆	[illegible]	[illegible]
麦	[illegible]	[illegible]
金	[illegible]	[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]

[illegible]

「…を見る時は、…小作料は…田に於て…高の…に當る。…畑に於ては…收穫高の…割に當る…」

[illegible]

「……近時我が國[illegible]小作料が之に依つて、右へうごいたか[illegible]、[illegible]もつてしても、我が農地價格及び小作料が歐米諸國に比して著しく高額なるは[illegible]

かやうに、地主のそろばんの立場に立つて農地價格を基本と見、小作料はそれに準ずるとし[illegible]、日本における小作料の異例的な高さは決定的に承認されてゐる。

八

では、いかなる事情が、かかる高價な農地價格と小作料とをつくり出してゐるか？

まづ第一に、地價が小作料を決定するのではなく、小作料が地價を決定するのである。

土地は本來自然物であり、それの生産的利用が剩餘をもたらすことが、土地に價格の生ずるための第一前提である。その剩餘の一部乃至は全部が土地の私的所有者に歸することが第二前提である。この二つの前提のつくり出されてゐない社會では、土地は決して價格をもち得ない。小作料は、さうした剩餘の一形態として、土地價格を左右する最も基本的な要因である。だが詳しく言へば、土地としての土地が價格をもち、商品として賣買せられる場合に、その價格を決定する基本的要因は三つある。

第一、土地の所有そのものによつて所有者が取得する金額、――それの大さをAで代表させる。日本の田の普通の小作料のやうに、米といふ現物で取得される場合には、その數量に米價を乘じたものが即ちAになる。

第二、土地の所有そのもの、故に所有者が支出する金額、――これの大さをBで代表させる。具體的に言へばBは土地所有に課せられる租税その他の公課である。

第三、平均利率、――これをCで代表させる。

しかる時に、土地價格決定の公式は、

$$\frac{A-B}{r}$$ 又は $$\frac{小作料-公課}{平均利率}$$ ＝農地價格

である。従つて農地價格は、他の二要因の大さを一定すれば、小作料（A）が大なるに従つて大であり、公課（B）が小なるに従つて大であり、日の平均利率（r）が小なるに従つて大である。

そこで外國との比較において言へば、日本の平均利率は大きいのだから、農地價格が異常に高くしてゐるものは、先づもつて法外に高い小作料であるといはねばならぬ。

吾々は見た。何が小作料を法外に高からしめてゐるかを説明するであらうが、然しは更に、小作料の高いことと、殆んど小作料を高くしてゐる原因の一つと同一のものがまた農地價格を高からしめてゐることを指摘しておく。それは、農耕地の面積が狹いことである。零細農の生存の餘地がある日本にあつては、農は地を大きく賣れば買手が少くない。従つて一反一反の面積として賣ることになり、土地に餓ゑたる多数の農民をして、競爭的に若干あいまい買はせることとなる。更にまた、外國に於ては、近代的生産力の飛躍的増大により、麥やその他の主要農産物の價格は顯著な下落を來たしたのに、日本にあつては、米穀の國内市場が獨占し、米は未だ主要農産物であり、しかも農業の生産性の増大がなかつたために、國内最近以來——明治年代の終り頃より——米價は継續的に昂騰し、従つて金納に直した小作料もまた不斷に漸増的に高まつた。またこのことは、國が既にさへすればそれには必然に昔々の増大に與れるといふ信念を生み、それの増大に伴ふ地價の増大を目標として、買ひ急ぐといふ投機もまた、近來の土地價格の高さをつくり出した一要素なることをいひ添へておく。

だが、投機的要素を代表する[illegible]を除くしても猶は、日本の[illegible]は依然として[illegible]定する小作料そのものがすでに非常に高いのだからである。では、何が斯様に小作料を高からしめてゐるか？

次にかゝげる數字は、問題の高小作料の赤裸々の姿を見せてくれる。然しも吾々は、それが、地主階級に對して惡意を持つところではない協調會農村課の調査の數字であることを告げ、讀者の信頼を期待しておく。——これは一反步の米收穫高が二石四斗八升九合といふ、上田級に屬する耕地を耕作する小作農の收支計算を一反步に割り當てて示したものである。

一反步の米穀收穫高は……二・四八九石

之を金額に換算すれば……八〇・九三圓

右に對して小作農は一反步につき次の如く支出する、

自給肥料	八・四三
購入肥料	七・八五
家畜飼料	三・六二
諸材料	二・〇三
農具修繕費	二・〇〇
農舍修繕費	一・五二
種子代	一・一一
小作料	**三九・四四**
合計	六六・〇〇

これを見れば、或る意味に於いて代表的な此の小作農は、一反歩につき八十圓九十錢の收入に對して六十六圓の支出をなし、その差額十四圓九厘をもつて手取とすることになるが、殆んど注意すべきことに一言すれば、一、二點が甚だ大きい、小作農の支出總額六十六圓のうち、その六割に當る、四十圓四錢までは實に小作料の支拂ひであるが、實はそれすら尚ほ多額なのであるといふべきである。何となれば、この一反歩につき四十圓四錢の小作料なるものは一反歩の收穫を平均に直した八十圓九十錢の五割分を超過しているが、前掲の農務局の全國平均小作料調査の數字によれば、上田の小作料は收穫の五割二分乃至五割七分四厘であるからである。で、この五分から七分の丁心は協調會調査の丁度であるかも知れぬ。

さて、小作農は、自己の耕作する田畑の一反歩毎に、肥料、農具、種子等の生産手段のために二十六圓餘との資金を投じた。これなくしては生産は不可能である。この二十六圓餘との支出を一反歩當りの收入約八十一圓から差引けば五十六圓が残る。彼が生存することのためには、生産手段のほかに自己の勞働力がある。これは小作農自身が所有してゐる。自然物の土地もまた必要である。その土地は地主が所有している。農業生産者は、自己の勞働力を此の土地に適用して生産するのには地主の許可を得なければならぬ。即ち權力がそれを命ずる。土地を有せざる農業生産者小作農は、地主にその許可を願ひ出で、農業生産に要用せざる地主は所有權を楯に小作料を取立てる。かくして小作農は、地主の私的土地所有さへなければ払はずにすんだ四十圓を支出した。肥料、農具その他の生産手段のために支出した二十六圓を差引いた殘りわれ十六圓のうち、四十圓は地主に取られ、いまやあますところ僅かに十六圓足らずである。問題は、まで、この十六圓が小作農の生存的勞働に對する報酬に當るかどうかである。

吾々は、もう一度協調會の調査に就いて見るであらう。この、吾人の關係に就いて作る調査によれば、米作の一反歩を耕作するためには、[illegible]の勞働、一、十、六、十八日に當る勞働力を支出しなければならぬ

ね。その金額が、一反歩の米作勞働に對する農村普通の報酬であり、日本資本主義の目下の段階における最も妥當な報酬として合理的に近いものである。

しかるに見よ、米作の一反歩を自らの勞働力をもつて耕作した小作農は、小作料を拂つた殘額全部を勞働報酬と見たとしても、普通の勞働報酬に當る三十五圓六十七錢ではなくて僅かに十四圓九十三錢を得るに過ぎない。即ち、小作農が普通の勞働報酬を得るためには、此の十四圓九十三錢に加へて尚ほ彼れの手に殘らねばならぬところの二十圓七十四錢は、地主が取り立てた三十九圓四十四錢の小作料の中へ入込んでゐる。言ひ換へれば、地主が取立てる小作料の約半分は、普通の勞働報酬として小作農に歸すべきものから成る。

で、小作農が、普通の勞働報酬に當る三十九圓四十四錢を得るならば、地主の取立てる小作料は半減して十八圓七十錢となるであらう。更にもし、勞働力を支出するのみならず資本をも支出して農業を經營し商品生産を營むところの此の小作農が支出資本に對する普通の利潤——例へば二割の利潤——を得るならば、それは支出資本（肥料代、種子代、等等）に投じたもの二十四圓九十六錢の二割すなはち四圓九十九錢になるから、地主の取立てる小作料は更に減じて十三圓七十一錢となるであらう。これをもつてしても尚ほ地主の取り分は、金額に直した反當り收穫八十圓九十三錢の約一割七分に當る。そしてこれがまさに、法外でない小作料である。現制度において最も合理的な意味の地代——謂ゆる經濟地代——に近いものである。（讀者は那須氏の言葉を想起されよ——『獨逸にては、……小作料額の收穫高に對する比率は一—二割であつて、我が水田の如く五割ではないのである。』）註

註、日本の土地は賣買價格が高いから、水田一反歩十三圓七十一錢の——地價の安い獨逸と同率の——小作料では地主が引合はぬ、などといふ考へ方ほど地主根性をさらけ出したものはない。獨逸でもどこでも、地價が安いから小作料が安いのではなく、小作料が安いから地價が安いのだ。小作料を引下げて見よ、地價はどしどし下落する。

我々は、関係的方法を、数学の精神に従って研究したが、数学的にこまかいことはいかに技術として[illegible]数学的
に現われてゐるところのものは、現代日本における小作人の経済的関係の代表的なものであることは何人も否め
ない。我々による、それの分析は、次のことを決定的に示した——
現代日本農業における小作料は、一般に、経済的地代を支払ふべき商品生産者としての小作農に対する前資本制
制小作の残存物、當時の封建的搾取の形態の一部分の継続と見なしうる——」そしてこれこそは、最後に高い小作料の全
部をなしてゐる

以上は、日本における小作料の本質についてであるが、[illegible]中世における労働地代、もしくはそれから転化した生産物地代の初期
[illegible]暴力[illegible]搾取[illegible]

二

[illegible]

はあるが、それと共に農家部分は、往昔の高額ないし平均以上の耕作に於ける利用[illegible]に小作料は[illegible]土地定[illegible]
情に基くのである。然るに現在に於ける耕地に對する需要の強度が地價及び小作料額決定に於て、[illegible]作用してゐるか
かは、同一の郡又は村内の一部落に於て人口の多少及び農業以外の產業の發達の程度如何によつて、農地はその地味同
じきにも拘らず其の賣價や小作料に大差あるを見る事實によつて證明せられる。小作人同志の競爭やら、米價の騰貴などが自然と地價を昂騰せしめたことを、我々は忘れてはならぬ」(「日本農業論」六七頁)

小作料の高いのは、耕地に對する需要が強大であるからである。たしかに、それはさうである。だが、それがさうであるのは、同義異語に近いからである。——「本塁打を打てないのは下手だからであり、ホームランを打つのは上手だからである」「猫が鼠より強いのは、鼠が猫より弱いからである。」等、等。

需要の強い村もあれば、弱い村もある。しかるに全國平均の小作料が法外に高いのは如何なる原因によるか？——ではどんな特殊の「需要」が、特殊に小作料を高額ならしめてゐるか？　また、需要は何故に特に強度なのか？

吾々は第一に、全國的な「土地飢饉」を指摘する。人口の多いといふ、繁榮の表現たるべきことがらが、現代日本の農村にあつては一般的な「土地飢饉」を意味してゐる。

帝國農會の發表した「大正十四年度農業經營調査成績表」は、小經營八十六戸の調査結果を平均して、次の如く報告してゐる——

一戸平均耕作面積	一町七反四畝
家族勞働支出の全支出勞働に對する割合	八二・四%
常雇勞働支出の全支出勞働に對する割合	一〇・三%
臨時雇勞働支出の全支出勞働に對する割合	七・三%

自作農家より以上多くの土地を必要とするからだ。また、もちろん、百六十六萬餘戸に達する小作人そのものは、土地の缺乏そのものの結果である。

最後に、經營耕地の分配狀態を一瞥されよ。

經營面積五反以下の農家	一、九五一、一五六戸	三五・二%
〃　五反以上のもの	一、八七七、一八五戸	三三・八%
〃　一町以上のもの	一、一八五、三六四戸	二一・四%
〃　二町以上のもの	三二二、八五〇戸	五・八%
〃　三町以上のもの	一三七、〇八四戸	二・五%
〃　五町以上のもの	七四、九六〇戸	一・四%
合計（總戸數）	五、五四八、五九九戸	一〇〇・〇%

備考、大正十四年の農務局調査

この數字が殆ど確定的に物語ることは、農家總數の少くとも八〇%は、農業勞働によつて最低の勞働報酬を取得するために必要なる土地面積を與へられてゐぬことである。かゝる農家は優に四百四十萬戸餘にのぼるであらう。

かくの如き事態は、必然的に、廣汎な農民大衆を盲目的な土地渇望におちいらしめる。彼等は、あらゆる望みを土地の取得にかけ、「死」をほかにしてあらゆる犠牲をいとはない。それはたしかに耕地に對する需要ではある。が、需要は需要でも、特殊の需要だ。すくなくともそれは飢餓線上の需要である。が、まさにこの特殊の需要なくして、地主は彼等の法外な小作料地價をものにし得るであらうか?!

二

古典的「小農制」――といふのは寧ろ過小農制で、暴力が直接に支配した封建時代から持越して来た日本に於いては、小農をして小作をせしめる代りに、小作者達は、一時に纏つた土地を借り受けるのではなく、たゞ零細な土地片のみを借り足していき、借り足していく。そして、利潤を増さうなどゝいふ、のぞましき要求からではなしに、飢餓線へ、飢餓線へと押しやられる労働報酬を少しでも増さうといふ、せつぱつまつた思ひからのみそれをする。もう一度[illegible]、借[illegible]時に彼は、間断なく小作人同志の競争をする時の彼は、それを作つていく[illegible]増したごとくにすぎないのである。而して[illegible]二、三[illegible]もし、[illegible]がある[illegible]、彼は[illegible]らしく[illegible]封建時代の遺[illegible]、資本主義の[illegible]すればする程、それが農村人を[illegible]商品[illegible]に[illegible]するのであるが、[illegible]自己の商品[illegible]者と[illegible]一[illegible]の商品[illegible]まへば[illegible]ど、[illegible]資本[illegible]然、[illegible]近[illegible]から[illegible]ると、そして農業[illegible]の[illegible]、[illegible]以外に商[illegible]小作料[illegible]成立さる[illegible]經營[illegible]いふ小作料をとることである。従つて[illegible]小作[illegible]資本[illegible]代のみである。まだ小作人に[illegible]利潤[illegible]そこのみである。小作人の労働[illegible]それは[illegible]取るものとなる。もし、それをしも地代と名付くべくんば、それは生きた[illegible]代である。

農村内に於ける農業以外の副業は、謂はゆる商業の発達と共に、商品経済の発達がそれに農業に[illegible]した。

農村外に移住した者並に資本が[illegible]、農本位の家内工業が崩壊したことは、それが農家収入の源泉を失つたは、それ

れば從來の過程を土地に向つて擴大化されたる高利地代に從ふ過程に進行中に、農業以外の資金を農村へ持ち込み、[illegible]き、副業を與へ、收入の新財源をつくり出したことは、土地に縛り付けられた農家をして、高くなり行く小作料を支拂ふことに役立つた。多かれ少なかれ成功的な副業は、農家の家計につぎたしをあたへ、そのつぎたしを以て農家は土地を借り足し、買ひ足すことが出來る。そしてそれは小作料をあげ、地價をあげる。あの大がかりな副業奬勵の運動と、その相當な成功とがなかつたならば、地價、小作料の騰貴は止まつてゐたかもしれぬ。資本主義國による植民地搾取の近代的形態は、植民地産業の開發を條件とするやうに、「近代的」地主階級による農民搾取形態は、農村内に小工業や副業を持込むことを條件とする。それは被搾取者の給付能力を増すからである。たゞ、地主階級の搾取力の根抵としての土地獨占が、獨占としてはヨリ小規模で且つ派生的であるために、地主階級の方がすべてにおいてヨリ親切であるやうである。すでに高利地代が成立すれば、土地の高利價格もまたおのづからあらはれる。そして自ら耕すために一反二反と買ひ足すところの自作農もまた、商品化してゐる土地の、同じ高利價格を拂はせられる。

かくの如き、高利地代と高利價格とが、それ自身いまや「絶望的な」地價・小作料として、いかに農村小生産者達の土地飢饉を擴大強化せしめつゝあるかを吾々はすでに見た。また、いかに、農業生産力の發展を停止狀態に引入れつゝあるかを吾々はすでに見た。それは、資本主義日本における土地獨占、私的土地所有の發展の新段階である。

註、「過小農經營の下においては、かくて、生産そのものには無縁の要素なる土地價格といふものが、生産を不可能ならしめる高さにまで騰貴し得るのである。」（ドンバール）

『土地價格がさうした役割を演ずるといふこと、また、土地の賣買、土地の商品としての流通が、かゝる程度にまで發展するといふことは、資本主義生産方法の下では商品なるものが有らゆる生産物及び生産手段の一般的形態となるといふ、その限りにおいて、資本主義生産方法に發達の實際的結果である。が、他方ではまた、さうした發展は、資本主義的生産方法が制限されてのみ發達して、そのすべ

一の特殊な歴史的規定に照応することのみ存在しうるのである。なぜといつて、農業でもまた、乃至は尚ほいまだ、資本主義生産方法の下に置かれてゐない、耕作者の前資本家的な形態の残存せる生産方法の下に置かれてゐることこそが、まさにさうした分離に依つての一基礎をなすのだからである」（カール・マルクス「資本論」第三巻第二部、三四六頁）。

三

過小農制——代表的には小自作農制——は、農業そのものの発達のための、必然的な過渡段階の一つを代表する。従つてそれは農業の耕作者自身の手に帰してゐる。然る範囲においては、既に小自作農制は破滅の方へ、資本主義的生産方法による農業の発達に従ひ、さうした発展は、マルクスが指摘したやうに、局自の範囲に於てのみ可能なものであつたが、但しこの資本主義制は、小自作農制は必然に没落の運命をもつ。そして、わが国では現代に於ても維持されてゐる。本来それが温存されてゐることの半封建的・寄生地主的形態の下に置かれてゐる。但し、地代の甚だしい高率を伴ひ、そして、小作農そのものには極めて零細な生産物しか残らない。一生産の不可能ないしは高率に基く窮乏化が一層してしまつてゐる。また、かくして今や、自身に内在する一つの矛盾を展開しつくさうとする。

この中にわが日本資本主義においては、特殊の歴史的・社会的・経済的・政治的・自然的・民族的の様々なる要因が、過小農制を生き長らへしめ、その発展を抑へ、進んでは主要な対立する矛盾を、世界市場との対立の面における現代日本の農業の一大特質……、過小農……農業人口の大きさと相対的に……

* * *

だが、過小農制の弔鐘は高らかに鳴りひゞく。

過小農制が桎梏となつて農業生産力が進み得ないといふ現狀は、過小農制そのものが農業生産力を增大せしめて、せしめ盡したことの現はれである。桎梏は碎破されざるを得ぬ。農民が起つた！ 農業生產者そのものが起つた！ 彼等の「小作爭議」が農業生産力を停滯させてゐるのではなく、農業生產力の停滯こそが彼等を起たしめた。彼等は、高利地代の撤廢をめざして起つた、――彼等の生産そのものを不可能ならしめんとした高利地代の撤廢を。――高利地代が、高利地代を否定する。

小作料を引下げ、地價を引下げてゐる農民運動は、同時に地主そのもの、轉形を促した。耕地の「返還」を武器として戰ふ地主等は、同時にその武器を自分自身にも向けてゐる。永きにわたつて遊食し、しかも小作人の勞働報酬の横奪を恣む高利地代で遊食し來たれる彼等は、新しき、餘儀なき耕地經營者たる自己を見出すや否や、生産的資本家としてはたゞ普通勞働報酬の全部を拂ふ時にのみ所要の勞働力を支配し得るのを知る。此の資本主義的に合理的な條件を充たしつゝ、小作人搾取のありし日と同率の收益を得ようとすれば、「返還」の過小耕地の結合と、資本の追投とによつて、勞働の生産性を高めるより外はない。資本主義的生産方法への必然的な發足。

「小規模生産に於いては、私的土地所有の形態たり結果たる土地價格は、生産それ自身の制限として現はれて來る。大規模農業と、資本主義的經營方法に立脚するところの大規模土地所有とにおいても、所有は、小作農業者の生産的投資を拘束することになるから、同樣に制限として現はれて來る。此の投資は終極において、小作農業者ではなく土地所有者の利益となる。これら兩形態のいづれに於いても、共同的な永久的な財產としての土地、即ち人類代々の生存及び再生産上に缺

く、かかる資本主義の下では、[illegible]的な合理的な取扱が行はれ、それに代つて上述の[illegible]取扱が行はれる。――これは、小経営者の場合には、小資本家と土地所有者とを兼ねる限りの[illegible]に於ける[illegible]利用されることを要求する。そして何れの場合にも、市場価格への依存といふことが、さういふ結果をもたらす手段となるのである――

小土地所有は、原始的の[illegible]に伴ふ一切の粗略さ、文明国の[illegible]を生ぜしめ[illegible]かれる[illegible]、及びその[illegible]用もある。彼方には大土地所有の方はまた、[illegible]労働力の[illegible]されて行く後の[illegible]。これが[illegible]論[illegible]して貯蔵される最後の[illegible]であることの、農業それ自身においては、この[illegible]の力を[illegible]るようになる。人口[illegible]、工業的に[illegible]される人[illegible]農業とは、両者相互に作用する。[illegible]はより多く労働力を、従つて人間の自然力を浪費し荒廃せしめるのに反し、後者はより多く直接に土地の自然力を浪費し荒廃せしめる[illegible]、[illegible]の[illegible]にはれて後には両者手を携へて作用し、農村の工業制度も労働者を疲労せしめ[illegible]、[illegible]工業[illegible]土地を[illegible]る[illegible]手段を農業に供給するといふことによる」

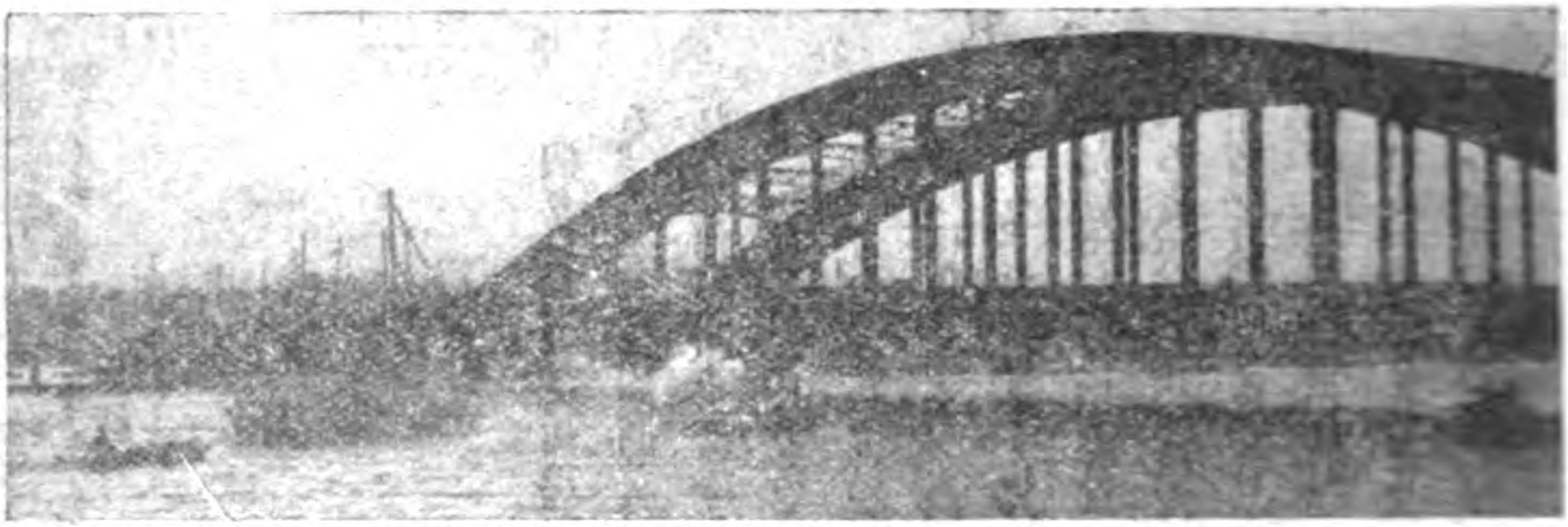
（資本論、第三巻二部四六[illegible]――三四八頁、高畠訳による）

が、それにも拘らず、資本主義の下にあつては、資本主義的生産方法の[illegible]に於てのみ、農業生産力増大への道は開かれる。が、また、それにも拘らず、商工業に於ける[illegible]資本主義的[illegible]の[illegible]、農業における資本主義的生産の[illegible]、それと[illegible]資本主義[illegible]の[illegible]、農業生産力の[illegible]に於ける資本主義の[illegible]なる国内市場の[illegible]、特に[illegible]として、商工業の[illegible]を[illegible]解しつつあることにある。

それと[illegible]資本主義の[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]の[illegible]

基礎とする私的土地所有をば高利地代の確保に於て發展せしめずにすますならば、從つてまた土地所有者たる地主との融合をこれほど緊密ならしめずにすんだならば、此の深大な經濟的矛盾に當面して支配的ブルヂョアジーは、いま地主階級を敵としてゐたかもしれぬ。否な、この慢性恐慌をすら經驗しなかつたかも知れぬ。だが、事實において我が支配的ブルヂョアジーは、地主を敵とすべき恰度その時に、敵とし得ざる立場に自己を見出してゐる。そこに、彼等のおちいつた重大な政治的矛盾がある。

この矛盾は展開せずにはをらぬ。吾々は稿を改めてその樣相と方向とを論究するであらう。(一九二九・一二・五)



復興した七大橋中の雄、永代橋

「案内」といふ言葉から、ありふれた「旅行案内」を聯想されては困る。前人未踏の編輯法と全く新規な寫眞とによつて構成されたメトロポリス東京の紙上建設だ。小説、實話、探偵もの、隨筆――その他在來のあらゆる讀物に飽きた人々に本書を捧げる。そこには時代の尖端に躍るジャズとカクテルと失業と收賄と建設と破壞と光明と暗黑との一切がある。

▽都會人のためにはスマートな尖端的な案内であり、愉快な讀物だ。
▽見物客のためには最少の時間と經費とで滿足を與へる案内書の定本だ。
▽本國を遠く離れた同胞のためには憧れの東京の一九三〇年の顏だ。
▽都市研究家のためには最も全面的に把握された帝都の最新文獻だ。
▽カフエ、ダンスホール、うまいもの屋の手引から花柳界の玉祝儀一覽表まで網羅する。
▽子弟を帝都に遊學させる人はこれによつて學費や下宿代を知るがよい。
▽單に寫眞を見、圖表を見るだけでも湧出する興味と暗示は無際限だ。
▽一家一本。家庭の團欒に訪客の接待に、一面新味な寫眞帖でもある。

殊に歳末年始の贈物として百%の滿足を自信する。

發行所 東京市丸ビル五階 振替口座東京三四番 中央公論社

犬養毅論

馬場恒吾

[illegible]

質はそればかりでない。犬養は故らに自分の[illegible]して、世間の嘲笑を買つた。そして腹の中では世間と[illegible]を[illegible]へ得ぬ事を冷笑してゐたのであらう。二週間して政界引退を發明して、世間も驚き、田中以下の政友會自身も呆然たるを見て、彼れは再び世間の愚昧さを冷笑する機會を得た。それは見様に依つては、社會に投げ付けた諷刺であり、見様に依つては彼れ自身の悲劇であつた。其眞相を摑む事は今になつても尙興味の深きない問題である。

犬養は田中の政友會に參加した事は如何にも出し拔けに民衆を裏切るものなるかの如く思はれた。然るにそれは出し拔けではなかつた。彼れの政友會に近づいたのは其前十四五年間に除々に馴致された徑路であつた。彼れの政治的生涯は前半と後半に分かれる。前半には改進黨に居つて大隈重信と行動を共にし、後半には大隈と別れて終には大隈內閣を彈劾する迄になつた。そして彼れの政治的生涯の前半と後半を分つ時は憲政本黨當時に起つた改革派改革の爭ひであつた。犬養が非改革派の頭であり、大石正巳が改革派の頭であつた。改革派の主張は憲政本黨が大隈、犬養の統率の下に、八ヶ間敷い議論ばかりしては政權に近づけない。從つて黨は細る許りだ。それよりは[illegible]を大にして、大に門戶を開放する。そして何んとかして肥る方法をも[illegible]ないでゐたが、[illegible]これ[illegible]下心さ[illegible]時に大隈[illegible]黨[illegible]視する様子があつた。之を見た大隈は明治四十年一月二十日の黨大會に於て、突如として黨の總理を辭する旨を發表して、黨員を呆然たらしめた。其時の大隈の演說は悲壯を極めてゐる。自分は政治に疲れたるにあらず、政治を捨てるにあらず、政治は自分の生命だ。總理を辭するも本黨を去るにあらず、人は自分に元老になれと勸める。併し今日の政治を紊るものは元老だ。何を苦るしんで元老の仲間入りをせんやと叫んでゐる。越へて二年、明治四十二年の春になつて、改革派は矢張前と同樣の主張を以て、非政友大合同の運動を起した。其大合同には官僚派をも入れる目論見を藏してゐた。犬養は元よりこれに反對した。すると改革派の常議員會は犬養を除名した。黨の決議を無視したと云ふ事を理由にしたのである。犬養は逆襲的に代議士會を開き、大會を開き、犬養除名の決議を否認せしめた。世間は犬養の藩閥官僚に對する非妥協的な態度に同情した。之れが犬養派をして勝たしめたのである。

其後憲政本黨は國民黨となつた。然るに大石一派は桂に接近する意志を最後迄捨てなかつた。明治天皇崩御の後に桂が內閣を組織し、同時に政黨を組織する意志を發表すると、國民黨內

つて行つた。即ち大石正巳、島田三郎、河野廣中、箕浦勝人、武富時敏は犬養を置いてきぼりにして、桂の同志會に入つた。桂としては自分が藩閥官僚の牙城から出て、政黨人となるのだ。何にも藩閥官僚扱ひにしなくてもよいと云ふであらうけれども、犬養から見れば自分の同志が桂に奪はれた事になる。其藩閥から出た桂が憎い。同時に、それに連れられた同志が憎まざるを得ない。だから彼の敵愾心は桂に依つて組織された立憲同志會に集中し、其後身の憲政會や民政黨にも及ぶ。この根本を忘れない所に犬養の性格が現はれてゐる。

大正二年の桂内閣に對する憲政擁護運動には犬養と尾崎行雄が憲政の神となつた。尾崎は其時政友會に屬してゐたが、彼れは犬養よりも先きに大隈伯の下を去つて、政友會に入つたのである。大隈伯は犬養と尾崎とを兩翼として、改進黨時代に彼等は無二の提携をやつた事は[illegible]、後之を云ふ事、而して兩者が提携する事も其頃に盛であつたが、其後二人の性格は異つてゐる。其異るほかは[illegible]あるか、[illegible]人を求めて[illegible]あつた事があ る。[illegible]山林拂下げの運動に[illegible]、何志を上げ[illegible]て、東北[illegible]から[illegible]が[illegible]陳情に[illegible]つて[illegible]る。[illegible]時代[illegible]、尾崎の[illegible]は[illegible]に[illegible]、云ふ事を十分に聞いてやる。[illegible]尾崎の[illegible]を云つて込

へよ、其跡に新聞記者が尾崎に向つて、

「隨分永い時間が取られましたな」

と云ふと、尾崎は例の何處を風が吹くかと云ふ調子で、

「ハア何か述べてゐられました」

と云ふ。蓋し陳情を促すと云ふ事などは上の空で、頭腦の腹案でも考へてゐたのであらう。然し陳情を促す身になると、[illegible]云ふ事が尾崎さんが十分も詳はしく聞いて呉れたと滿足する。其間陳情を促すが犬養にも陳情しに出かけうとし犬養の所に訪ねた。犬養は例の見るといきなり

「君達は山林拂下げの運動に來たのであらう。そんな事は運動したつて駄目だ。目當相になるかね。歸れ／＼」

と云つて取合はない。事實としては、犬養の方が親切になつてゐるのであるが、陳情者はさう思はない。何と云ふ[illegible]な偏屈[illegible]と憤慨して歸へる。さう云ふ風に尾崎犬養の性格は異つてゐる。

併し彼等二人は憲政運動の頭目に押し立てられた。内閣は倒れ政友會は[illegible]として、政友會の[illegible]が[illegible]が[illegible]つた時である。[illegible]の内閣を[illegible]政友會の[illegible]は[illegible]、[illegible]犬養と招かれた。犬養は斷つた。[illegible]尾崎は已に[illegible]つてゐたかつた。犬養は[illegible]政友會の[illegible]、[illegible]。[illegible]政黨化しようとするのであらう。犬養は内閣に向つて

「政友會の意見はもう決定されたのでせう。さうすれば、黨外の私が意見を述べる必要はありますまい」

「イヤ、それがまだ決定してゐないのだ。だから是非君の意見を聞かして貰ひ度い」

「それなら述べませう。西園寺侯は元老として、宮中の重臣として、侯爵御自身の立場がありませう。併し政黨は公けの機關ですから、侯爵御自身の立場とは切り離して考へねばなりません。政黨は主義主張に依つて行動するより外はない」

と云つて、サッサと引揚げて來た。政友會は果して犬養の云つた通りに、總裁西園寺侯の立場とは獨立して行動した。そして桂内閣は潰れたのである。これが犬養が政友會に近づいた第一歩と云へる。

次ぎの山本權兵衞内閣の時、犬養は一時政友會の反對になつた。護憲運動で桂内閣を潰した後に、政友會は山本内閣の與黨になつた。シーメンス事件が起つた後にも、政友會は極力内閣を擁護した。反對黨としては桂の遺産で加藤高明が率ゐる同志會、犬養の國民黨、政友會から脱退した尾崎一派であつた。これが山本内閣を倒した。そして此三派が次ぎの大隈内閣を組織したならば、大隈の改進黨は古しの顏振れで再び一家團欒の光景を呈するのであつた。然るに犬養のみが此團欒の中に入らなかつた。[illegible]

大隈内閣を成立せしむるには山縣公の同意を必要とした。山縣の目的は二箇師團増設を實現する事と、政友會の勢力を打破する事であつた。それを大隈になさしめんとした。井上馨は山縣の意を迎へて、大隈内閣の出生に際しての産婆役を勤めたに過ぎない。此内閣の成立せんとするときに、井上の婿の(故)都築馨六が犬養の腹心の古島一雄を呼びに寄越した。古島が行くと、愈々大隈内閣が成立する事になつてゐるから、是非犬養をも入閣さして貰ひ度い。それを古島から勸めて呉れと云ふ事であつた。そして都築は山縣、井上が大隈内閣を成立せしめた内情を話した。古島は

「そして内務には誰れがなるのだ」

「内務は大浦、外務は加藤、自分も何にかなるかもしれぬ」

「尾崎はどうなるのだ」

「尾崎は望月小太郎を通して井上と充分に連絡が取れて居る。だから入閣する事になつてゐる」

古島はいゝ加減に挨拶して歸つたが、其足で犬養の所に行つて

「大隈内閣は駄目だ。都築が斯う云ふ話しをした。もう筋書も

[illegible]出發[illegible]內閣に入[illegible]何にもなるん。

「[illegible]は內閣に入るまい」

「[illegible]閣民黨[illegible]入[illegible]

中ハ大養が入閣[illegible]入

[illegible]

大隈內閣か內閣[illegible]大命を拜する日[illegible]

田[illegible]大隈[illegible]大命を拜し[illegible]

[illegible]

「天候[illegible]內閣[illegible]入閣[illegible]

[illegible]

「大隈[illegible]入閣[illegible]」

「大隈には大隈の事情があるのでせう。これからは大隈と犬養の直接交渉に致して置いたがよいと」

それで三浦とは別れて來た。

大隈邸から犬養を呼びに來た。犬養が出掛けやうとしてゐる所に尾崎が來た。尾崎は犬養に向つて

「君が内務大臣になる事は、同志會が恐れる。内務には僕がなるか、或は誰れか僕等の信頼するに足る人物を据へるから、君は外務、若しくは大藏で我慢して異れないか」

犬養は

「それは駄目だ。内務は大浦、外務は加藤と決まつてゐる。それに此内閣は官僚の出店で、大浦と加藤が釆配を振るのだ。僕等が入つても何にも出來はせん。君も内閣に入るのはつまらん。兎も角も大隈から呼びに來てゐるのだから、大隈に會つて來る」

犬養は大隈に會つて自分は内閣に入つても異分子であるから、入閣は辭退する。閣外にあつて、内閣を援助すると云つた。それで大隈内閣は犬養なしに成立した。尤も大浦が内務大臣たるに對しては尾崎が極力反對した爲めに、内閣成立の當初は大隈が内務を兼任した。そして後に大浦を内務に廻はしたのである。

大隈内閣の行つた解散に依つて、犬養の國民黨は二十七名になつた。大正三年の總選擧で、三十七名出て、或は國民黨は惨しく分裂させられた。四十二名になつた、それから又、解散になつて二十七名になつたのである。地方の老人、國民黨員は大低大隈の方へ取られた。大隈老人が出るのに、犬養が助けない法はないと云ふのが彼等の感情であつた。大隈内閣が官僚軍閥の出店であると云ふ議論は青年にしか容れられなかつた。大隈黨はもとが國民黨の同志であつたが故に、國民黨の内情に精通してゐた。だから選擧に際しての干渉は非常に利き目があつた。それ故に、犬養が打擊を感ずる事も酷だしかつた。其恨みは骨髓に徹した。犬養は益々大隈を離れて政友會に近づく。

寺内内閣が出來た時、犬養は同志會の後身たる憲政會と一緒になつて、不信任案を出した。そして内閣をして議會を解散せしめた。其の後に犬養は政友會の原など、一緒に外交調査會に入つた。それは犬養が憲政會に不信である如く攻擊される原因になつたが、犬養として見れば憲政會、政友會、誰れか烏の雌雄を知らんやと云ふ氣があつたのであらう。寧ろ感情的には、憲政會よりは政友會が好きであつたらしい。

尤も犬養と原敬とは合はなかつた。原は犬養を評して、犬養は聰明すぎる。だから世間から誤解を受けると云つた。これは總裁のよい批評で、實際は犬養は臨衞院位に入るのがはまり役

[illegible]

田中氏[illegible]政友會[illegible]古島[illegible]

[illegible]犬養氏[illegible]

[illegible]

[illegible]ヤット[illegible]大正十一年[illegible]

[illegible]田中は政友會[illegible]決心[illegible]

[illegible]

古島はこれはいかんと思つた。政界から引退して[illegible]ければならぬ所を最も力にしてゐる。[illegible]話にならないと、それは犬養にも語つたのである。

だが古島としては、犬養をして餘り惨めな最後を遂げしめ度くなかつた。自分の黨派が交涉團體以下になるのは惨めな末路である。だから今の中に政界引退の機會を見付けるのが必要であると思つた。そして大正十四年の議會で、犬養等が主張して來た普通選舉が通過したとき、其機會が到來したのである。

其前に犬養が第二次山本權兵衛内閣に入つたのも普通選舉が目的であつた。山本が大命を拜した頃、犬養は信州富士見に居て、それから東海道列車で歸京する所であつた。古島は沼津迄迎へに行つた。汽車に乘り込むと、犬養は眼をこすりつゝ寢台から出て來た。古島は山本が犬養に入閣を望んでゐる事を話した。

「山本は加藤高明にも高橋是清にも會つた。だが彼等は入りますまい。後藤新平、田中義一、これは入る。あなたには明日十時に會ひ度いと云ふから、僕がよろしいと引き受けて來た」

と云つた。犬養は

「オイ、普選をやらさうじやないか」

「よろしい」

犬養が山本内閣へ入る事は此五分間の立話しで決まつたのでそこで犬養は[illegible]決心がつかなくて、[illegible]それが虎の門事件で辭職するとき、[illegible]であつたのも犬養が已に山本内閣に見切りを付けてゐたからである。

護憲三派内閣で普選が成立したとき、犬養古島の間には先づ犬養の政界引退の決心が出來た。それが引退する前に、假りに一時でも政友會に身を寄せたのは、感情的に憲政會よりは政友會の方が好きだと云ふ行雲流水の心持ちに過ぎなかつた。政界を引退する者に積極的な計畫はなかつたのである。

日本の政治家に舊い型と新らしい型がある。舊い方は人生意氣に動く心持ちで行く、だから感情が強い。新しい方は政治は道理で行くべしと云ふ。それは感情に冷たい。自由黨は舊い方で、改進黨は新しい方だ。犬養は舊い方で、肌合が自由黨的で改進黨的でない。それが遂に彼れをして自由黨の後身である政友會に合流せしめたのである。

犬養古島の胸中では先づ政界引退が決心され、後に政友會入りが餘興として考へられるのであつた。それが世間に發表された順序は、先づ政友會入りが行はれて、後に政界引退が聲明されたのである。古島が世間を欺き、同志を欺き、自分の良心を欺いたと云つたのは、政界引退が胸中に隱くされて[illegible]

點がある。

政友會への合流に關しては、政友會では小泉策太郎、犬養代表としては古島が話を進めた。後になつて小泉は古島に云つた。

「世の中には詐しからん奴があるものだ。吾々は君子の交りの積りで、意氣投合して合同したものだ。所で、此合同を種にして、裏へ廻つて、田中から大金を引出したものがある。つまり革新俱樂部を買込んだ形にしてゐる」

かうして、犬養古島の知らない所に醜い取引が行はれた。そして犬養が身賣りの汚名を蒙つたのである。だから後に犬養が政友會總裁になつた事、餘りに引き合はない立場に置かれた犬養に對して、天が埋め合せをしたのだとも云へる。

原敬が犬養を評して「聰明過ぎる」と云つたのは適評である。だが犬養が政友會入りの時は聰明でなかつた。裏に廻はつて金を取る[illegible]あることを知らなかつた位だ。しかし其聰明でなかつた為めに、彼は今政友會總裁になつた。

政友會總裁としての彼は、黨に向つては、政友會黨員にも少しく料簡の[illegible]があるものは濟の付かない、聰明な頭で自分の物に中々制されるのが厭なのである。此點では犬養は[illegible]の一杯に見られるのである。醜い[illegible]も、はこれを避ける。醜い[illegible]ではないとも少い。困る事がある。政黨には金が入用だ。犬養には金がない。這間に金の話しでも持出さうものならば、犬養の叱言で、幹部に味附がある。あれで顔が[illegible]つて來い」とでも云はれはしないか、それを考へると足がすくむと云ふ話しだ。

大抵の人間は[illegible]で、顔が[illegible]と云ふ連中は、犬養の如き頭の鋭いのは嫌はれる。[illegible]、頭の[illegible]頭の良い人の所に往つて、自分の頭を改良せんと欲するものは寡い。頭の優秀なる所に交往して、[illegible]を見出さんとする。だから智者には友人が少ない。友人となるべき智者は世間には少ないからである。これが智者の悲哀である。犬養の政治的生涯の大半は智者の悲哀が附つてゐる。だから政友會總裁としての彼には疑問だ。因縁の大なる政友會には政治がない。犬養には政治[illegible]が如しだ。若し犬養の政治を政友會の力で行ふとすれば、政界の醜状は目に餘る程どの速力で[illegible]はるであらう。犬養に對する決定的の評價は其時迄保留しなければならない。

金解禁の農村に及ぼす影響

東浦庄治

一

濱口首相に依れば政府が一月十一日金解禁を斷行するの決心をなすに至つたのは「內外諸般の準備全く成り、今や金解禁を行ふも經濟上何等憂ふべき事態の發生せざるべきを確信した」からださうである。而して何が首相をしてかく決心せしめたかと言へばそれは「貿易の入超は激減し、爲替相場は漸騰し、物價は漸落の傾向を示す」と共に「在外正貨は三億圓に達し」「一億圓のクレヂットを與へらるゝ契約が成立した」ことに外ならない。最近に於ける入超の激減、爲替相場漸騰の眞因を知るものにとつては首相の此の聲明は稍々滑稽に聞かれるのであるが、然し私は之れ程正直に勇敢に、舊平價に依る金解禁が大金融資本の利益の爲に行はれるものだといふことを明示して居る文章はないと思ふ。

昨年六月四十三弗臺であつた對米爲替が現在四十九弗にも昇つたことから見て一月十一日頃までには多分平價近くになるであらうとの見込は大體間違ひなからうし、又此の時期になつて解禁すれば內地物價の激變を生ずることもあるまいし、金の現送が盛となつて我が金融界を攪亂する樣な心配もないであらう。物價が下落する、卽ち貨幣價値が昇騰し、金融界に緩潤なくして濟めばまことに金融資本家萬々歲であらう。だがそれだからと言つて彼等と相反した利害の對立を示す所の農民、無產大衆にとつて「何等憂ふべき事態が發生して居ない」と斷言し得る勇氣を持ち合せた人間が今時の世の中に果して幾人存在するであらう。

然し乍ら濱口首相や井上藏相等がかうした聲明を敢てしたのは全國民の利害と資本家の利害とを混同せる現代政治家の定石的認識に基くもので、別に珍らしいことではない。從つて我々は今その聲明の錯誤を一々指摘することに何等の興味をも有せないものであるが只言つて置きたいことは金解禁の準備が資本家階級にとつて好都合に着々と進行しつゝある間に農民と勞働者の利益は着々として侵害されて居るのだと言ふことである。このことは恐らく現在社會の經濟機構を理解す

る者の一様に認めて居る所であると考へる。以下私は此の點から特に農民の打撃が如何に大なるかを論ぜんとするのであるが、既に此の問題は多數の人々によつて各方面から研究されて居る。故に私は一、農産物下落の問題、二、農村負債の問題、及び三、農村失業問題の三點に就いて、稍々異つた角度から檢討して見たいと思ふ。

二

解禁が前提とする爲替關係の變動が農業關係の貿易品に直接影響を與ふることはいふまでもないし、又その點に就いては解禁と農村との關係を論ずる人々が等しく考察を加へて居る所である。貿易關係以外の農産物が不景氣の影響に依つて著しく下落し、從つてそれだけ農村が打撃を蒙ることも同様で、これ亦多くの人々によつて等しく認めらるる所である。然しながらこれ等は一方に於ては消費者たるの立場に於て物價下落の利益に浴するものであるから、財界に相當の物價下落が行はれると農民の購買力は必ずしも減ずるといふ程ではない。農業は依然として成立し得る様に思はれる。然るに我々は金解禁を前提として一層大なる物價引下げ政策が採られ、下落が起つて居るのを見るものだと思はれる。それは、我が國の農業にとつては不利なる一つの事實が一般的に、基本的事情が存するからである。

一、農業に於ける資本の回轉が緩慢な事。農業は有機的生産たる結果、生産の時間が長く、且つ其の期間は一の生産期間の中で、わずかしか流動させられない。即ち今日の農業に於て存在するものが制限く生産物として市場に現はれるといふ如きことは實際に於ては今日の農業經營に於ては見られる所である。從つて一度投下せられたる資本の回收には相當長き時日を要するのが原則である。然るに物價が著しく下落する傾向ある場合に於ては投下せられたる資本が一日も早く回收されるといふことが物價下落による損失をなくする上に最も必要な事なのである。そこで農民は高價なる肥料に依つて生産せる產品が著しく下落せる市場に於て販賣しなければならぬ様に條件付けられて居るだけ、それだけ根本的に不利な立場にあるといふことが出來ると思ふ。

二、資本投下時間の不一致。農業が何時農作物に投下するかであるか、その時間は各作物に技術的に大體一定して居り、その間に於ては延すことは許されない。金解禁が行はれ、將來肥料の價格が低下すること明白なる場合に於ても農民は肥料の購入をその時まで見合せることは出來ない。これは一般工業生産の場合と異る所であると考へる。例へば昨年後半期に於ける肥料購入經費の原因は割高な肥料に依る買付價格にあるといはれてある様に農業に於ては不可能である。

三、生産の縮減。價格低落の場合、資本家は生産を手控へて價格の回復を待つのであるが、わが國の農業に於ては、生産の制限に依るか、あるいは價格の協定に依るの外はない。農業の各分野を通じ、資本家の間に於ける對等なる協定は著しくなつて來て居るのは爲である。然るに農業に於てはその生産者の數の多大なること、農業の經營形態の零細なること、生産者が地方的に分散して居ること、等の條件が統制を困難にするものである。

協定に[illegible]
内に[illegible]するを[illegible]
當り商工資本家の支配下に立たざるを得ないのである。

かくの如くにして農民階級はその生産者としての立場に於ては金解禁に備ふべき總ての能力を完全に奪はれて居る。從つて農民としては「金解禁に對する準備全く成る」所か、來襲する不景氣の御意の儘に翻弄さるゝ外なき有樣である。而も消費者としての農民の立場を考ふる時我々は一層此の感の深きを覺ゆるのである。といふのは過去に於ける物價變動の歴史を通觀するに物價下落の場合に於ける下げ足は、常に卸賣に於て速く、小賣に於て後れ勝であり、その程度も亦小賣の場合に少ない。卸賣物價の下落を口實に減俸案を作成せる政府に對し、「大臣は大根を買はれたことがないであらう」と言つた一官吏夫人の言葉は如實に此のことを物語つて居ると思ふ。そして農民は消費者としては此の比較的高き小賣の顧客であり、生産者としては卸賣よりも更に甚だしい下げ足を取る庭先相場に依る取引人である。此處にも亦重大なる價格問題が伏在するではないか。

以上之を要するに商品價格の下落を通じての農民の損失は一般的、且つ基本的に見て農民の賣るものと、その買ふものとが、農民に不利を導く樣に、時を異にし程度を異にして變動する所にあると解することが出來るであらう。

三

[illegible]
[illegible]
あり、一は農民負擔の問題[illegible]とする。

先づ租税負擔の問題を考へる。[illegible]農民の負擔せる租税が如何に過重であり、又商工業者に比較して如何に[illegible]かといふ問題には觸れないで、物價下落が農民の租税負擔を如何に[illegible]にあるかに問題の重點を置くことゝする。

農林省の「農家經濟調査」に依れば平均約一町七反歩を耕作する六十九戸の自作農家(これは日本の農家としては餘程大きい方である)の大正十五年度に於ける租税諸負擔額は平均一百三[illegible]圓六十四錢であつて其の内譯は左の通り。

農家租税負擔表(六十九戸平均)

國税		府縣税		市町村税		其他	
地租	三三、[illegible]	地租割	四、[illegible]	地租割	[illegible]	農會費	[illegible]
其他	[illegible]	戸數割	[illegible]	戸數割	[illegible]	其他	[illegible]
		其他	[illegible]	其他	[illegible]		
計	[illegible]	計	[illegible]	計	[illegible]	計	[illegible]

備考、最下欄に於ける其他とは、農會費、耕地整理組合費[illegible]税[illegible]すべき負擔とす。

之れに依つて見れば地租及びその附加税が[illegible]十六圓四十六錢、戸數割及その附加税が六十二圓九十一錢で、これ以外の租税は僅かに十[illegible]圓九十七錢に過ぎない。故に農家の負擔する租税の大部分は地租關係戸數割關係のものであると言ふも過言ではない。所で[illegible]

[illegible]なるに、[illegible]決定せる所[illegible]として認むるにいたつて、[illegible]力の[illegible]に[illegible]依せする事之より見たしきものはない。[illegible]は各種の[illegible]件た認[illegible]とするけれども、所[illegible]であつて、地[illegible]の[illegible]に依りその認[illegible]に[illegible]動な生ずる限り[illegible]ずるわけにはいかないものである。かくて[illegible]民の[illegible]する[illegible]は[illegible]の[illegible]人のあしき[illegible]に依る[illegible]力の低下にも拘はらず、依然として[illegible]て行かなければならないことになる。[illegible]者の[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]が其の[illegible]、[illegible]の[illegible]に[illegible]自動的に[illegible]、[illegible]の[illegible]の[illegible]ても[illegible]と[illegible]力との[illegible]に[illegible]するに[illegible]の[illegible]にするものがある。

[illegible]、[illegible]に[illegible]した[illegible]者の[illegible]問題が[illegible]の一つであるといはれる[illegible]の[illegible]と[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]。[illegible]とする[illegible]ないではあ[illegible]の[illegible]とする[illegible]ではあるけれど[illegible]が[illegible]

[illegible]

種別	農家戸数	農家耕作反数	計
自作農（六九町平均）	[illegible]	[illegible]	[illegible]
自小作農（五八町平均）	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小作農（四二町平均）	[illegible]	[illegible]	[illegible]
不明	[illegible]	[illegible]	[illegible]

[illegible]

四

[illegible]

[illegible]百十八[illegible]人口に對[illegible]人口[illegible]。一千六百[illegible]察の不況時代に於ける失業人口に比し其の少きに驚かされて居る樣である。だが都市に於ける此の失業人口の少き事實こそ最も雄辯に語れ[illegible]られたる農村過剰人口問題の深刻さを物語るものである。何となればこれは取りもなほさず失業者が農村に歸り、又兼業農家がその一半の職業を失ひ專業農家となるを餘儀なくされたことを示すからである。

過去に於ける我が農村の人口移動を研究して見ると、農村に自然増加する人口は到底農村では養ひ切れない狀態にあることがわかる。例へば明治四十年から大正十一年に至る十數年間に農家戸數が全然増加して居ないのを見てもこれは明かである。然らば農村に自然増加する人口は何所にその捌け口を見付たかと言へば、勿論それは商工業の發展に伴つて都會に向つて流出したものに外ならぬ。だから農村に取つては都會がその商工業的發展に依つて常に離村農民に席を明けて居てくれることが必要で、これがなければ農村は忽ち人口過剰の惱みを惱まなければならないのである。その證據には大正十二年以來我が國の資本主義的發展が一頓挫を來すと共に、左表に示す如く、農家の戸數ははげしい勢を以て増加し始めたのである。

農家戸數増減表

年次	戸數	前年度との差
大正十二年	五、五二八、〇二〇戸	—戸
十三年	五、五三二、四二九	四、四〇九
十四年	[illegible]	[illegible]
昭和元年	五、五[illegible]	[illegible]
二年	五、五六[illegible]	[illegible]

備考　大正十[illegible]年度[illegible]の數字[illegible]、八[illegible]所に[illegible]増加せり。

即ち大正十三年には四千戸、十四年には一萬六千戸、昭和[illegible]年には七千戸、同二年には六千戸を増加して居る。かく引つゞいて農家戸數が増加したことは過去の歴史に殆んど見ない所であり、從つて農村は茲數年來既に人口増加の惱みを滿喫して居るのである。故に今後將來の[illegible]に都市が單に農村より流出する人口を吸收し得ざるのみならず更にそこに發生せる失業者を農村に押し出すといふことになつたならば農村の過剰人口問題は如何に展開するであらうか。而も既に當局は極力[illegible]に宣傳して地方人の上京を意識的に阻止して居る。他方農村に根強き家族制度は都市の失業者に對してその逃げ場を提供して居るのである。勿論かくして農村に止ることを餘儀なくされ、或は歸村を餘儀なくされた人々が農村に於て拱手徒食に甘んじて居るわけではない。然し何人も知る如く我が國の農家の約七割は僅かに一町歩以下の土地を耕作するものであつて、大抵現在の家族勞力を以てあり餘つて居り、それだけで既に季節的失業問題があり、經營の合理化に依る過剰勞力の利用が重大な問題となつて居るのである。そこへ更に歸鄕人口が増加して來ることは結局家族の不働い勞力の部分的[illegible]を一層大にするの作用をなすに過ぎない。その結果は農家の勞力に[illegible]

[illegible]に於ける自作農が増加することゝなるのである。

[illegible]

[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正十二年	[illegible]	[illegible]
十三年	[illegible]	[illegible]
十四年	[illegible]	[illegible]
昭和九年	[illegible]	[illegible]
十二年	[illegible]	[illegible]

[illegible]

我黨の陣營を見よ

民政黨内閣の政策と主張

濱口雄幸

現代政治の基調　現代政治の基調は眞實の政治、人格政治及民衆政治でなくてはならぬ。眞實の政治とは政黨が一旦責任の地位に立つや在野時代に主張した所の政策を實現する政治を云ふのであつて、嘘のない政治を云ふのである。人格政治とは人格者をして爲政の衝に當らしめなければならぬことを意味する、即ち政治は爲政者の人格の反映でなくてはならぬ。民衆政治とは民衆の爲めに民衆に依つて行はるゝ政治を云ふのである。我が國に於ては、君民一體、君意即民意であるが故に我が國の民衆政治は、天皇統治の下に於て民衆全體の利益の爲に行はるゝ政治を云ふのである。

現内閣の政策は、即ち我が立憲民政黨の政策であつて、吾々は昨年七月九日吾黨が在野時代に唱へ來つた政策の中にて、特に緊急を要するものを選んで之れを天下に公表し、之れが實施に努力しつゝあるのである。即ち左の如し。

政治の公明　政府の公明は立憲政治の根本要件である。而して近年閣の政府が著しく暗黒に陷つて種々醜悪陋劣なる手段に依つて選擧の結果を亂し、民意を無視したることが甚だしい。此際政府を刷新して、政府をして公明に導き、國民思想の最高標的たらしむべきであると信ずる。

國民精神作興　輓近世相の變遷に伴つて國民精神に弛緩を生じ、思想の動搖も亦甚だしい。吾々は經濟政策に依つて國民生活の安定を圖ると共に、國體觀念の涵養に留意して國民精神の作興に力め、以て時弊を匡救せんとするものである。

綱紀の肅正　近時綱紀の弛緩其の極に達しつゝある。之れが爲めに國民思想上に不良の影響を及ぼすこと亦甚だしい。今に於て速に之れを肅正せざれば、邦家の前途誠に深憂に堪へないものがある。吾々は自から深く努めて官紀を嚴肅にし、敢へて犯すなからんことを期すると共に、苟も犯す者あるに於ては寸毫も假借する所なく、其の肅正を期し以て風教の振作、人心の緊張に資せんとす。

對支外交刷新　不幸にも最近に於ける日支の關係を著しく惡化し、兩國の感情は非常なる不愉快な狀態に陷つたことは國人の深く憂ふる所である。吾々は日支の國交を刷新して兩國の親善を厚くすることを目下の一大急務であると信じ、組閣以來之れに向つて大に努力し、今や其の效

[illegible]

[illegible]の縮小

[illegible]

財政の整理緊縮、國債の減額、金解禁の斷行

[illegible]

つて、然し、[illegible]必要なる準備である。[illegible]目的にあらずして、國運の發展と云ふ大なる目的を達成せんが爲めの手段に過ぎないのである。

現内閣は此の方針の下に、昭和四年度の實行豫算を作成するに當り、一般會計及特別會計を併せて、一億四千萬圓を整理節約し、更に同一方針に依り、昭和五年度の豫算を編成し、一般會計に於て歲出を十六億八百萬圓に緊縮し、前内閣の編成したる昭和四年度の公布豫算に比較して、一億六千萬圓を減額することを得た。而して此の豫算には公債及借入金を絶對に計上せず、此の嚴肅なる事實は既往十數年の間全く見ることを得なかつた現象である。

我が國の公債は累年增加して、將に六十億に達せんとする狀況であるが、茲に公債濫發の勢は阻止せられ、加之、明年度より國債の總額は幾分づゝ每年減少することとなり、公債の信用は次第に恢復さるゝのである。

今や、國民の自覺と共に消費節約は全國の都鄙に渉つて、吾々の豫期以上に徹底したるは、吾々の努力の空しからざりしことを證するものであつて、其の財界に好影響を與へたることも尠なしとせず、殊に貿易の入超は激減し、爲替相場は漸騰し、物價は漸落の傾向を示す等、經濟上諸般の狀況は解禁の實行に頗る有利に展開し來つたのである。而して政府及日銀は七月以來正貨の充實に努力した結果、今や我在外正貨の額は三億圓を突破した。更に、國民に充分なる安心を與ふる爲めに、正金銀行は政府及日本銀行の援助の下に、今回英米銀行團より一[illegible]何等憂ふべき事態の發生せざるべきを[illegible]たるが如く、昭和四年十一月二十一日、金の輸出禁止を撤廢する大藏省令を發布し、七年一月十一日以後、金の輸出禁止を解除することとしたのである。即ち、我が財界多年の懸案たる金解禁の問題は、茲に漸く解決を告げ、國民經濟の更生の第一歩に就くを得たるは、國家の爲め眞に堪へない次第である。併しながら、金の解禁は國民經濟發展の行路に横はれる第一の關門を突破し、我國の經濟をして世界經濟の常道に復歸せしめたるに過ぎず、今後益々國際貸借を改善し、金本位制を擁護し、以て財界の回復と其の健全なる發展を圖らんが爲めにて、今日迄の國民的努力を將來に向つて繼續するの必要がある。即ち、政府は引續き緊縮節約の方針を以て財政の基調となし、之れと同時に適切なる方策を講じて、國力の培養に努めなければならぬ。國民が今日の緊張せる氣分を失ふことゝなく、勤儉力行、以て産業、貿易の健實なる發達に向つて眞劍の努力を傾注しなければならぬと信ずる。

若し夫れ金解禁の時期尚早なりとなし、今日猶ほ之れに向つて異聲を放つ者あるに至つては、實に驚く可き時代錯誤と云ふべく、此等の人々が國民に見捨てらるゝの時期は極めて近き將來たらんと思はれる。

金解禁後の對策と産業合理化　金が解禁し財界の安定を圖りたる後に於ける國力の培養に關しては講ず可きもの尠しとせず、産業の合理化の如きは其の一例である。其の目的とする所は「優良なる商品を多量に、且つ安價に生產し、之を廣く内外の市場に販賣するにある」

從業員賃銀下と物價低落論

[illegible]

社會政策の確立

[illegible]

[illegible]一致し、[illegible]

[illegible]せんとするものである。

義務教育費國庫負擔　前に述べた樣に、政府は昭和五年度の豫算に對しては極力緊縮の方針を採つたが、市町村の義務教育費國庫負擔額一千萬圓は之れを豫算に計上することに決定した。之れは民政黨多年の公約を忠實に實現せんとする考なるのみならず市町村をして此の一千萬金の餘裕金を以て家屋稅及戶數割を輕減せしめ中產階級及無產階級の負擔の苦痛を免れしめんとするものであつて、究極する所、社會政策的目的を有するものである。

其他の政策　政府の更新、社會政策的中央地方の稅制整理、義務教育費國庫負擔、農漁山林經濟の改善、金融制度の改善等に至つては、機に臨み事に應じ更に聲明實行する所あるべし。

結　論　現代は政黨內閣の時代である。政黨は政策を以て生命とする、然るに近時政黨の爭が往々にして政策を離れた問題に依て戰はんとするは實に遺憾である。之れ立憲政治の墮落を意味するものであつて吾々を一日も早く政黨が堂々政策の爭ひを爲すの時代の來らんことを希望するものである。而して立憲政治の戰ひの手段方法は何處迄も公明でなくてはならぬ。卽ち立憲政治の武器は言論文章のみでなくてはならぬ。然るに近時往々立憲政治武器が金力であり暴力であり陰謀であるに至つては暗黑政治を物語るものであつて、吾々は在野二ヶ年間此等不愉快なる實例を見せしめられた。今日朝に立つて實際の政局を擔當して居る吾々は、明るい、强い、正しい政治を行ふて我國の爲めに奉公の誠を盡して以て皇恩の萬一に報じ度いと信ずる。

個人として語る

犬養毅

政府といふものはさう特別なものではないので、國民の生活にぴつたり密接してゐるかどうかといふ事が第一要件である。定まり切つた話だが、この定まり切つた事がなかなか行はれてゐない。一體これまでの政府は中產以下、殊に所謂無產階級にその關心が及んでゐるかどうかと云へば、殆んど問題にならない。そこでこの缺陷を直すためには今の政黨の政策の性質を改めて行く事は勿論として、一方には各階級の人間が代表者をしてそれぞれの生活に密接した問題を議會に持ち出せるやうな仕組に選擧法を改正して行かなくては、議會政治として眞の[illegible]が揃はない。從來の方は問ふな、といふやうな選擧法では、片方の階級は自分に密接した問題を持ち出す機會がないといふ事になる。この機會がないと知つた者にどうなるか。[illegible]選擧法の改正、改正といふが、便宜上一つの法規をほかの法規に替へるといふ小細工でなく、この根本の問題が生かせるやうにしなくては本當でないではないか。普選法の問題は一體自分にも大いに責任があるわけで、全然成り立たぬよりは現行のやうな程度でも成り立つ方がよいといふ事で今の選擧法は成立したのだが、さういふ掛りから云つても、これはどうしても完全なものにしたいと思ふ。何も時機がかりしようと云ふのではない。選擧法の問題では[illegible]

強してあるので、自分も賛成の點である。[illegible]改正に
に[illegible]といふのならば、[illegible]のやうな[illegible]が中心になら
なくては嘘である。さうでなくては本末が[illegible]されて[illegible]ではないか。そ
こで[illegible]の意見のいふのは[illegible]賛成するとして、但し實際
[illegible]法の改正をこの議會のうちにちやんと物にして、
[illegible]の改[illegible]法でやらうといふのでは、實際上はこ
の[illegible]限がなくなるといふ結果になる。これで自分は[illegible]とし
一[illegible]だ。これ[illegible]日[illegible]にする期間に入るのは、[illegible]出來ない
[illegible]期間に入るといふ[illegible]になるので、[illegible]賛成
[illegible]が一[illegible]よく[illegible]論と云はれて來たものだが、自分[illegible]
[illegible]である。[illegible]
「[illegible]入れる。
[illegible]といふ[illegible]が一[illegible]來るであらう。

これから[illegible]問題[illegible]。[illegible]
[illegible]か。[illegible]自分[illegible]
[illegible]る。自分の[illegible]
[illegible]である。一[illegible]
[illegible]
[illegible]

ある今日では、この強[illegible]に[illegible]ってゐる。このために日本は列國
から[illegible]される[illegible]なる。[illegible]自分の[illegible]
[illegible]列國に對する日本の[illegible]
戰[illegible]
この[illegible]列國、[illegible]日本に對する[illegible]一[illegible]した
ものにしようといふのである。[illegible]
[illegible]してゐるので、[illegible]日本人[illegible]
[illegible]
のに[illegible]といふ[illegible]
と[illegible]ないので、大戰後自分[illegible]
[illegible]列[illegible]といふ[illegible]にある。

これから、日本の[illegible]
[illegible]

[illegible]

云つても間に合はないではないか

そこで、國民の日常生活に密接した政治を行ふとすれば、減税の斷行は忘れた顔をするわけに行かない。この減税の財源をどういふするかといふ場合に、この不景氣の極では行政組織の根本改革が第一の手段になる。われわれの云ふ軍備の經濟化も勿論この内に含まれるのである。さて、この行政の根本改革だが、これを思ひ切つてやりさへすれば近頃流行の疑獄の種も餘程減るといふのは、一體政府は商賣をし過ぎるのである。これは明治初年に、何でも一番智慧のある者は政府で、すべての新しい施設を政府が民間に敎へた時代の遺物であるが、鐵道、兵器、電話、激しいのは罐詰や羅紗製造までやつてゐる。このほかに事業の認可權を握つてゐる。これが利權の餌になる。餌になるといふのは、政府の手にあるから餌になるのである。一體政治家には、現在惡い性質に出來上つてゐる人間を急にいゝ人間に直すといふ仕事はなかなか出來ない。が、惡い性質の人間に惡い事をさせる機會を與へぬ事は出來る。行政組織の改革にはこの意味も同時に含まつて來るのである。但し、全然民營にすれば資本家のものになつてしまふに定つてゐるから、半官半民といふ所で丁度よい事業が大分ある。認可權にしても、もつといろいろの階級の人間を委員にして認可を公明にしなくてはいけない。疑獄を起す人間の惡いのは論外として、疑獄の起るやうな組織をこの儘に放つて置く事も、政治家として自慢にはならない。

[illegible]

これは私の力で[illegible]

は思はない。社會の行詰りに[illegible]

といふ[illegible]がなく、大體似通つて[illegible]。それと、世の中が政黨をして段々目的に意見を云はせなくてはならなくなつたのである。それを、こつちが既に云つた事だから、[illegible]なぞと考へるのはケチな話である。只自分はかう思つてゐる。[illegible]黨の政策が社會狀態に從つて似合つて來た以上は、殘る問題はただ實行力の如何である。實行これ一つである。つまり模倣した事は眞に立つた場合に必らずこれを實行し、實行する當てのない事は云はぬといふ習慣を互に附ける事である。それで政黨の信用が恢復する[illegible]のである。兎も角も互ひに實行力如何の問題にまでなつて來たから自分としては益々面白くなつた。

中央公論からは政策の說明をしろと云ふが、政友會の政策としては先日大綱を發表したほかにはまだ細密に定つてゐない。黨にもなかなか熱心家がゐて每日一所に研究してくれ、現在仕上げの最中である。そこへ遊說には出る。旁々市中遊で評判を貰つた。これは決して逃げる意味ではない。今までの習慣から云へば、黨が先日發表した程度のもので十分政綱として大きな顏は出來るのであらうが、只それでは新總裁たる自分の氣が濟まぬといふだけである(十一月七日大阪商業會議所にて)

当面の反動時代に於ける

労農党の政策の必然性

大山郁夫

一

我々は今明かに、民衆生活の危殆ともいふべきものゝ前に立つてゐることを意識する。我々は[illegible]。それが如何なる瞬間に如何なる形態に於て[illegible]するであらうかは[illegible]することは出来ないが、しかしそれが時々に[illegible]してゐることを痛感する。そしてこの意識が、我々の[illegible]日本の民衆の――すべてが、一種の不安に[illegible]く[illegible]が、そこには同時に、一種の危機の自覚も認められる[illegible]

[illegible]時代[illegible]、[illegible]ことを[illegible]に[illegible]日本の[illegible]、それは今日に至るまでの間に[illegible]の国民的[illegible]は、[illegible]政局に[illegible]く、日一[illegible]一かといふこと以外に、[illegible]ことは、一つの[illegible]。[illegible]今後[illegible]てゐる[illegible]。我々は今[illegible]

決様の前程としての当面の反動時代に直面してゐるのだ。そして、遠道の[illegible]間に[illegible]て我々と日本の民衆生活の間に置かれてゐたあらゆる社会的勢力は、嘗てその反動時代の大動揺に於てそれぞれその内部に蓄積して来た全エネルギーをいや増しくして大[illegible]に[illegible]して、全面的に[illegible]的に、やがて次に来るべき新時代の[illegible]となるべきことを[illegible]であらう。

私がわが労農党の政策の[illegible]を解説しようとするに際して、特に以上の前置きを述べておいたのは、それによつて当面の問題に対する[illegible]の[illegible]しておかうとする意図からに外ならないのである。

二

わが労農党の[illegible]政策は、[illegible]

[illegible]

問題は[illegible]――かうした[illegible]一[illegible]は、人間の[illegible]のもの[illegible]なくなされたものだ。[illegible]

[illegible]

人に口に[illegible]らない限り、如何なることも自由にいふことが出來る。ブルジョア政黨の『[illegible]』の主張の如きは、さうしたその典型的な一例である。で、或る政黨が掲げる政策が持つ具體的意義の有無多少は、それの實踐に關聯して決定されねばならぬ。それは果して實踐に移され得るものであるか否か？　また如何に實踐に移されようとしてゐるものであるか？　等々が、その最終の尺度であらねばならぬ。かくして問題は結局、當該政黨の本質から見ての、その政策の必然性のそれに歸着する。從つて、またわが勞農黨の政策の根本精神の闡明も、わが勞農黨の本質から見ての、その必然性の問題に繫がつてゐるのだ。

三

そこで、先づわが勞農黨の本質から決めてかゝることが必要になつて來る。

この點に關して、たとへば『勞農黨はその本質に於て無産階級の解放の實現を期する一の政治的結社だ』などゝいつたやうな、通り一遍の概括的な説明を與へるだけでは、無論不充分である。第一それでは、勞農黨を諸他の、無産黨から區別する標識すら與へられてゐない。早い話が、誰が見ても勞農黨とは根本的に立場を異にしてゐる社會民衆黨の如きものでも、さうした文字を、たとへその實踐とは無關係にとは言ひ條、その綱領の上に麗々と掲げてゐるではないか！

わが勞農黨を諸他の無産黨から截然と區別するためには、その本質[illegible]具體的[illegible]上に[illegible]ふ我々[illegible]同盟として、特に當面の[illegible]して、政治的[illegible]を[illegible]行しようとしてゐる問題である。

我々は所謂勞働農民黨時代以來終始一貫して、わが國の資本主義發達の現段階に於ける勞働者農民の戰鬪的同盟の必然性およびその重要性を、意識的に明示的に極力強調して、且つ我々の全活動をこの認識の上に向けて來た。この根本精神は、無論新たに結成されたわが勞農黨によつても、そのまゝ繼承されてゐるのみならず、益々明瞭に規定されてもゐる。從つて、その綱領、規約、政策、組織方針および活動方針の如き重要文書の上に於ても、わが黨が如何に勞働者農民の戰鬪的同盟の基礎の上に立つて全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とのために鬪はうとしてゐるかの一點を中心として、一切の規約がなされてゐるのだ。

かうした規定の具體的内容の一切は、所謂勞働農民黨時代以來の我々の陣營の傳統的鬪爭精神――その具體的表現としての主張および實踐の、當面の客觀的形勢の進轉に照應して發展した姿である。社會民衆黨の如きは、率直に『勤勞階級』の利益を擁護することを標榜してゐる點に於て、餘りにも明瞭にわが勞農黨と立場を異にしてゐる。また、さきの日本勞農黨および今の日本大衆黨は、その表面上の主張に於てわが勞農黨の立場に近きものを多分に示してゐるが、しかし仔細に檢討すればそれは[illegible]、勞働者農民無産市民の聯合[illegible]とする所謂

[illegible]

四

[illegible]

五

[illegible]

つて利用されるだけでなく、それ以上に自己本来の階級的要求を以つて闘しても決定されなければならないものであることは當然である。

當面の客觀的状勢を評價することは、今その場合でない。だが、極めて大づかみにいへば、一方に於て、從前から支配階級によつて着々進められて來た産業合理化政策および帝國主義××××は、金融寡頭の使命を高唱して出現した濱口内閣によつて益々精力的に續行され、その下に勞働者農民無產市民植民地民衆等々の一切の被壓迫民衆の生活と自由とは、刻一刻増大し行く××に晒されてゐる。しかるに他方、無產階級の陣列を見れば、その戰線が餘りにも分裂混亂の慘状を示し、しかもその右翼は次第に支配階級の薬籠中のものとなつて、階級協調主義に急いでゐる。また、その戰鬪的左翼は、全線に亘つて一時は慘憺たる潰滅状態に陷り、今や漸く勞農黨の結成を通じて一條の血路を開いたやうな有様である。

我々の陣營が一個の合法政黨としてそれ自體を建て直したのは、如上の客觀的状勢の下に、それが勞働者農民の戰鬪同盟として持つ當然の任務たる政治行動を大衆的規模に於て遂行しようとする意圖から出たものである。從つて、それがそれ自體の今後の行動を直接に支配するものとして採用した諸般の政策もまた、同じ見地から決定されたものである。そして、さうした政策はまた、名實共に儼然たる一個の勞働者農民の戰鬪的同盟として立つわが黨の行動を通じてこそ、始めて潑剌たる生命力に充ち溢れ、且つその實現の可能性を持つものでもある。

極めて簡潔な言葉に現はれたわが黨の政策の基本項目に通ずる根本精神は、同樣僅かに成り立つてゐるわが黨の綱領によつて更に簡明に要約されてゐる。即ちそれは、第一にわが黨が勞働者農民無產市民その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張のために闘ふことをいひ、第二にわが黨が勞働組合・農民組合の擴大強化をその最も重要なる任務としてゐることをいひ、第三にわが黨が無產階級戰線の統一の實現を期してゐることをいひ、第四にわが黨が全被壓迫民衆の政治的自由獲得のために闘ふことをいつて全體の結語としてゐる。

右のうち、第二の勞働組合・農民組合の擴大強化に關する項目は、勞働者農民の同盟として立つわが黨の内部の鬪爭力の充實のための方針を特記したものである。我々の陣營が先きに田中反動内閣の手によつて與へられた再三の徹底的大打撃の後に、かくも急速に再建の日を見るに至つたことは、一般人の常識では殆んど奇蹟とも思はれることであらうが、しかし、それは畢竟、わが國の資本主義發達の現段階に於ての勞働者農民の戰鬪的同盟の生成の必然性と、その底力の事實上の根强さとを反映してゐるものにすぎないのである。だが、我々は同時に、我々の陣營が今猶ほ右の徹底的大打撃的創痕を多分に保有してゐることを率直に認め、且つ一刻も早くそれから全的に恢復するために努力すべきことの必要を意識してゐるのだ。さらに他方に於て我々はまた、勞働者農民の戰鬪的同盟としてのわが黨が、現在その組織形態の

七

[illegible]政治的自由獲得のための闘争に於いて、また[illegible]言論、集會、出版、結社の自由のための闘争、[illegible]選擧のための闘争、治安維持法を始め一切の無產階級抑壓諸法令の撤廢のための闘争、等々その他無數の政治的自由獲得のための闘争をも、如上の大衆の日常利益の擁護伸張のための闘争との聯關に於て戰ひ抜き、殊に當面、產業合理化および帝國主義戰爭の危機に對する闘争の上に我々の全闘争エネルギーを××しようとしてゐるのだ。そして、かうした方面の活動に於て、わが黨がその大衆的日常闘争との緊密なる聯關に於て、議會への進出を遙かに從前以上に重要視するやうになつて來た理由をも、人は容易に首肯するであらう。

かゝる闘争の必要のうちから不可抗的に產まれて來た諸般の政策を提げて、今やわが勞農黨は當面の反動時代に處して、それが勞働者農民の戰鬪的同盟として持つ重要なる政治上の役割を效果的に果たさうとしてゐるのである。

社會民衆黨の熱望

安部磯雄

私共が直視しなければならぬ、而して何とか解決しなければならぬことは我國民の生活問題である。廣く社會全體を觀察しなくとも、私共[illegible]受けて[illegible]、[illegible]状態によりても[illegible]まる[illegible]。[illegible]表面の人から手紙が來た。其[illegible]いままで何[illegible]ら逃げ出して來たので、何としても此[illegible]に堪へられないから[illegible]ヤツでも送つて呉れないかと哀願するのであつた。

和歌山縣の或[illegible]からは次の如き手紙が來た。

『紀州には德利辨當といふことがあります。それはどんなものかと申上げますと野良や磯仕事に行くのに粥一升を德利びんに詰めて行くから、其所から德利辨當なる名稱が生れたのです。

百姓をしたり、山の木を伐つたり、漁をしたりするのに、まさか、一日中粥ばかりではお腹がすいてやつてはゆけませんが、兎に角粥を喰ふだけは事實です。

五六人の家内の一食に要する米が三合乃至四合、朝と夕は例外なしに百戸が百戸みなそれです。働く人が一人當り五勺や六勺の米を喰ふ、しかも資本家の如くに副食物が澤山あるといふわけではありませんし、まあ、澤庵か梅干位を副へて喰べるが關の山です。

三合の米に水を二升も三升も入れて粥として喰べるのです。水腹も一時と百姓はよく申しますが、水ではない多少の米が入つてゐますもの、ほとんど水に等しいのです。

これが紀州の農、漁村に於ける無產階級の生活の一端です。他は御明察下さい。これに就て次のようなことがありました。

八月末か九月上旬だつたと記憶しますが、濱口首相の「全國民に訴

[illegible]

一　軍備縮小
二　地租軽減
三　労働組合法制定
四　農民救済
五　俸給生活者[illegible]
六　[illegible]
七　政治的自由の伸長

[illegible]

ても國民の多數が生活に窮して居るのでこれ等の救濟をなしたい。

第二に私共が強調したいと思ふことは消費税撤廢である。これにも生活安定の目的が含まれて居ることを考へなければならぬ。一方には漸次消費税の撤廢をなすことによりて生活費の減少を謀り、一方には相續税の累進率を引上げて收入を增加するといふことである。勿論此等は代表的のものであるが、私共は更に戶數割を全廢すると同時に所得税や地租に對しても累進率を引上げることを主張する。現在の税制は比較的富者に輕くして貧者に重いのであるから、私共は共存共榮の原則によりて富者の自覺を促したいのである。各人の富を平等にすることは實行不可能のことであるかも知れぬが、今日の如く富が不平等に分配されて居ることは決して社會全體のために喜ぶべきことではない。これを矯正するためには富者が進んで民衆の生活を安定せしむるために私財を寄付するか、或は租税の形式でこれを國家に納めるか、二者其一を擇はなければならぬ。富者が何時までも現在の位地を維持することが出來ると考へるのは彼等獨特の心理であるかも知れぬが、共存共榮といふ思想は斷じてこれを許さないであらう。私共が税制を改めて富者の負擔を重くすべしといふのは全くこれがためである。

然し生活問題の解決を全部國家に委任するといふことは私共の目的でない。國家の援助を受けずとも大衆自ら其生活の安定を謀り得べき場合に於ては當然これを彼等の努力に放任すべきである。勞働組合や農民組合が公認されることになれば、彼等が自力によりて其位地を幾分か向上せしめ得ることは外國の例によりても見ることが出來る。私共は[illegible]る。生活安定といふ[illegible]大衆[illegible]き[illegible]であるが、大衆自身の力に解決することが出來るやうに[illegible]を開くことは一層望ましきことであらねばならぬ。

農民政策として私共の唱へて居るのは單に小作法制定のみでなく、農民のために金融機關を設けて低利資金の融通をなすといふことである。現在の狀態から推せば自作農を創定すると同時に彼等は多く土地を抵當として借金するのではないかといふ虞れがありはせぬか。更に[illegible]自作農を創定するとしても、四五十億圓の負債を有する自作農に對して低利資金の融通の途を開くといふことは目下の急務である。

以上述べたるが如く、筋肉勞働者に對しては先づ團結權を與へ、然る後所謂社會事業によりて彼等の幸福を增進することが正當なる順序ではないか。更に中等若くは高等の教育を受けた頭腦勞働者たる俸給生活者に對しても同樣のことが言はれると思ふ。彼等に生活の安定を與ふべきは勿論であるが、私共は彼等にも團結權を公認することが先決問題であらねばならぬと信ずる。官吏も教師も會社員も等しく是れ雇人であるから、或程度まで雇主に對抗する手段を有する必要がある。

失業といふことほど現社會組織の缺陷を明瞭に暴露して居るものは他にあるまいと思ふ。人口が過多であれば失業者が增加することは爭はれぬ事實であるが、人口過多を以て失業の唯一原因と見るのは正當でない。天然の資源に富める米國にも失業は絶へない。私共の如き人

日の[illegible]一國[illegible]人口百六十五人に[illegible]

[illegible]人、[illegible]人[illegible]問題に偏して居る。[illegible]

[illegible]政府[illegible]國政府に[illegible]ことである。私

[illegible]問題に對し[illegible]考へ

[illegible]資本主義[illegible]組織[illegible]見出

すことは[illegible]居る[illegible]として[illegible]

中小[illegible]の下で[illegible]へるより外ないのであ

る[illegible]出來るとしても、これに[illegible]

い[illegible]外はないといふ[illegible]

[illegible]する。

[illegible]

日本大衆黨とは如何なる政黨か

麻生久

一

日本大衆黨は、今日の[illegible]に於て、資本主義[illegible]政治的に無産階級の[illegible]中間[illegible]の一切の[illegible]構成分子の[illegible]として其の基礎の上に、資本主義の[illegible]政治的にプロレタリア化し來るところの、小地主、自作農、下級[illegible]中小商人等の中間層の大群が[illegible]とする處の、階級的大衆黨である。

日本大衆黨は[illegible]政黨は、[illegible]其構成分子に於て[illegible]中間[illegible]使命とする[illegible]目的を有する[illegible]日本大衆黨[illegible]今日の資本主義[illegible]小作人[illegible]中間[illegible]資本主義[illegible]政治的にプロレタリア化[illegible]とする所である[illegible]される。[illegible]日本大衆黨[illegible]している。

併しながら、日本大衆黨[illegible]

自覺分子ではない。即ち日本大衆黨こそ[illegible]大衆の政治的、經濟的、社會的利害を代表して、或ひは議會の内部に、或ひは街頭に、或ひは工場に、或ひは農村に、日常不斷の闘爭を行ふ唯一の政黨である。

そこで、日本大衆黨の綱領は次ぎの如く決定されてゐる。

一　我黨は我國の國情に卽し、勞働者、農民及び無產市民の政治的、經濟的、社會的解放の實現を期す

二　我黨は合法的手段を通じて、現在の不合理なる土地、生產、分配に關する制度の改革を期す

三　我黨は無產階級の利害を代表し、有產階級の壟斷する政治的諸制度の徹底的改造を期す

又日本大衆黨は、日本の現下の狀勢に於て階級的大衆黨は唯一なるべきを信じ、無意味なる分裂的狀態を非とする。日本勞農黨、無產大衆黨、日本農民黨、九州民憲黨等、七つの全國的地方的無產黨の合同に依つて成立した政黨である。

由來、政黨の合同は難事中の難事とされる處であるが、合同は勇敢に決行されて日本大衆黨が結成された。たゞ合同後、合同に伴ふ困難は幾何かの波瀾を黨内に生み出したのであるが、合同を破壞せんとする如き傾向は次第に淸算せられ、蠢動したる少數の分子は沒落の過程を辿つて、日本大衆黨の基礎は日一日と鞏固となり、黨勢も亦日一日と伸張しつゝある。日本大衆黨は、今日と雖も尙ほ統一の旗を高く揭

[illegible]

（二）

日本大衆黨の政策は次ぎの如く定められてゐる。

政　策

政　治

一　普通選擧の徹底

二　無產階級運動抑壓諸法令の改廢

三　言論集會結社の自由

四　軍備の縮少、兵役年限の縮少、兵卒の待遇改善

五　學生の軍事教育、靑年訓練所等民衆を××主義化する一切の政策の××

六　戰死、徵兵、廢兵による本人並に家族の窮乏に對する扶助法案の制定

七　植民地の政治的差別の撤廢

八　秘密外交の打破

九　冤罪不當拘束並に官吏の不當處分に依る損害に對する國家賠償制度の確立

一〇　無產者訴訟費用の國庫支辨陪審法の改正其他司法制度の改革

一一　鑛毒煙害土地陷落其他鑛業工業等に依る損害に對する賠償制度の確立

一二　地方自治制の民衆化

時政

一　[illegible]
二　[illegible]
三　[illegible]

經濟

一　[illegible]の確立
二　[illegible]
三　[illegible]
四　[illegible]の確立
五　[illegible]
六　[illegible]
七　[illegible]
八　[illegible]
九　[illegible]

社會

一　[illegible]
二　[illegible]
三　[illegible]
四　[illegible]民衆化
五　[illegible]保險法の改正、[illegible]保險法の制定[illegible]
[illegible]制度の確立
六　義務教育及び[illegible]教育の國庫負擔、教育制度の改革
七　居住權の確立、借地借家法の徹底的改正と公營住宅の建設
八　金融機關の公有化
九　農村文化施設の普及

三

[illegible]

一　[illegible]
一　[illegible]
二　[illegible]
三　[illegible]
四　[illegible]
五　[illegible]
六　[illegible]

二　政界の前途

一　議會の公開
二　機密費の廢止
三　職權濫用・收賄官吏嚴罰法の制定
四　鐵道土木事業の公正

三　失業の救濟

一　欺瞞的緊縮政策反對
二　失業者生活の國家保證
三　失業保險法の制定
四　失業者家賃の國庫負擔
五　職業紹介制度の完備と民衆代表參加
六　整理緊縮に藉口せる一切の賃銀値下解雇絕對反對

四　恩給法改正並に養老保險法制定（但シ草案）

一　恩給法の廢止
二　養老保險の制定
イ　國家保險
ロ　被保險者は年齡滿六十歲以上　但し左の者はこれを除外す
1　年收千五百圓以上の財產收入を有する者
2　六十歲に至る以前に於て十年以上勤勞又は勞働に依つて生計を立てざる者
ハ　保險額は年千五百圓とす

尙ほ、恩給法廢止に至る過渡的政策として恩給法の改正を行ふ。

一　恩給適用年齡を滿六十歲に引上ぐ
二　引下、勤勞その他に依る收入千五百圓以[illegible]
三　恩給の平等により千五百圓とす

五　民衆負擔の輕減

一　中央稅制の改革
中央稅制を根本的に改革し、稅收入の大體を所得稅及び相續稅とし、少くとも年額七億圓は所得稅に依るべし
イ　所得稅、高率累進制を採り五億圓は所得稅收入に依るべし、但し所得額年額五千圓以下は免稅とす
ロ　相續稅、これに依り二億圓の稅收入をはかるべし、但免稅點は所得稅に準ず
ハ　消費稅の徹底的減免
ニ　生活必需品の間接稅廢止
二　地方稅制の改革
イ　家屋稅の減免
ロ　特別稅の根本的改革……特に諸車稅の廢止
ハ　府縣營業稅の廢止
三　富豪附加稅の嚴課

六　團結權、耕作權の確立

一　勞働組合法の制定
二　最低賃銀法、最低俸給制の確立
三　八時間勞働法の制定
四　小作法の制定

五 [illegible]
六 [illegible]

七 軍備の縮少

一 [illegible]
二 [illegible]の內容の公開
三 [illegible]
四 [illegible]所等軍國主義的教育反對
五 [illegible]反對

八 金融資本對策要求

一 [illegible]
二 [illegible]職制の設置
三 [illegible]反對
四 [illegible]
五 [illegible]

九 行政制度の改革

一 [illegible]
二 [illegible]
三 [illegible]
四 [illegible]
五 [illegible]
六 [illegible]

七 陸海軍大臣文官制を制定する事

(以上[illegible]大會に[illegible]決定せる政策[illegible]大會[illegible]提出すべき草案である)

田中反動內閣[illegible]

[illegible]

猫と鼠（アンドレ・ビラボオ）

武林無想庵

どうしてかういふ話がはじまつたかといふと、まアかうです。

この男はモオブルノオと云ひました。今はやめてゐますが、セヴェヌでは中々有力な商人でした。セヴェヌは西の方にある小都會です。かれはひどく勘定高い性格で、かういふのが自慢でした。わたしはつひぞ人に一錢だつて損をかけたこたァありません。だから人に損をかけられるこたァ眞平でさァ。わたしは三十五年商賣をしてゐた、そりやァ商人だから、十フランのものは二十フランに賣りましたよ。しかし一度だつて目方をごまかしたり、わざと勘定をまちがへたり、そんなこたァしたこたアありませんや。借金は誰にでもある筈。一切の骨折には報酬がある筈。一切の損害には賠償が要求される筈。これがわたしのモットーです。わたしはまアさういふ人間ですよ。わたしがまちがつてゐると云へる人が、若しあつたら、それこそお目にかゝりますさァ。」大した男です。併しいつもニコ／＼して、いかにも生きてるのが幸福さうでした。結婚はしてゐませんが、まァ、そんな事はどうでもいゝでせう。

閑話休題。そこでこの冬のある土曜日の晩、かれは活動へ出かけました。セヴェヌでは毎土曜日の晩に活動があります。かれは好奇心で行く氣になつたのです。一遍は目を開かないアメリカのスターを見たいものだといふんです。さう云へば、みなさん、お氣がおつきでせうが、アメリカのスターはベツをかいた子供のやうな目をして、その目はスッカリしまりきつてゐません。さういふわけで、かれはその晩活動へ行つたのでした。と、急に氣分がわるくなつたので、早く家へ歸らうと思ひました。が、家へ歸りついて見ると、大急ぎであつたとはいへ、かれは思はず立ちどまりました。木戸があいてゐたからです。入口の

[illegible]氏には[illegible]顔を[illegible]へた、

「待ちたまへ、[illegible]ました。[illegible]は僕のものだ[illegible]」

さうしてバラドン氏の方へふり向いて、言葉をつゞけました

「さうだよ。これは、君、僕のだよ。僕のうちにあるものは僕のさ。泥棒するものが置いてつたものは、泥棒されたものゝ物だといふことは。そりや、君、きまつてるよ。ねえ、署長さん、君はこのこはれた錠前や戸やガラスを修繕に來る錠前屋や指物師や經師屋に拂つてくれるかい？君はもう一つルイフイリツプの椅子を僕に買つてくれるかい？さうはゆくまい？みんな僕の懐から出るんだらう？そらネ？だから泥棒が置いてつた物は泥棒が僕に辨償しなくちやならない費用の幾分かを補ふことになりやしないかと思ふが、どうだい？……」

借金は誰にもある筈。一切の骨折には報酬がある筈。一切の損害には賠償が要求される筈。さういふモットーをもつてる人間には當然出さうな言葉でした。が、バラドン君は聊か面喰つて、返事ができませんでした。

バラドン君はモオブルノオ氏をよく心得てゐました。二人はふだんお互に君僕で話合つてゐました。さうしてステーションホテルのキャフエで、毎日二度宛酒を飲み合ふといふ間柄でした。泥棒がはいつた時證據物件を押收して行くことはありまへになつてゐましたけれど、法律の本文には果して何と書いて[illegible]

「[illegible]」

[illegible]ノオ氏[illegible]

の出る人間がなかつたら、それは僕のものだ

バラドン君は目を輝かしましたが、相手が當然してゐるので、

「おや、まア、さうして置くさ。」とかれは云ひました。

モオブルノオ氏が泥棒の道具を所有したイキサツはかうでした。

◇　◇

「一切の損害には賠償が要求される筈。」といふモットーに對して、モオブルノオ氏はこの道具を貰はうと思ひたちました。なにしろ、不幸なる冒險の記念物、といふ札をつけて、骨董品の中へ飾つて置ける代物ではなし、又モオブルノオ氏はそんなシャレ者でもありませんでした。キチャウメンな方の人間だつたので、かれはその自分の家を修繕する費用を見積つて見ると、九百二十八フランといふ金高が出ました。だから少くともこの品物から九百二十八フラン取戻さなくてはと思ひました。

事實、その品物はそれ位な値打はありました。その金庫をコジあける機械が、上等な鋼鐵で出來た、見事な美しい、それにもシツカリした、見ばのいゝ品物でした。それから一度目的中の小

[illegible]

ますこするこ[illegible]

するなぞはありますまい。さうなつてこそ、モオブルノオ氏は小さな鞄の中へその道具をつめて、巴里へ出かけました。さうして怪しげな町々をブラついては、胡散くさい古道具屋へはいつて見ました。ところが、髙式なチョビ髭を生やし、短い胴の上へまるまッちい小さな腹をのッけ、又何の心配なく飯をくつてるといふ人間らしい、いかにも善良さうな、真赤な、スベスベした顔をもつてるモオブルノオ氏は、贓物商達に信用されさうな人物ではありませんでした。かれ等はかれを刑事だと思ひました。で、一生懸命に故事来歴を話し、品物を褒め立て、相手にとつて出来るだけ勉強した値段を云ひながら、三十五年間金物屋をしてゐた時より、それ以上の商賣氣で、お世辭をフリまいて見ましたが、どこでもかしこでも、すぐ入口の方へ推出されて、戸を閉めたあとでも、胡散くさゝうな目をして、かれを見送るばかりでした。さうしてモオブルノオ氏はとう〳〵再び重い鞄をさげてセヴエヌへ立歸らなければなりませんでした。

　そこでモオブルノオ氏はスッカリ塞ぎ込んで了ひました。

「もう方法はないか知らん？どうしても賣捌くことはできないか知らん？この入用もない邪魔物を家へしまつて置かなければならないのか知らん？九百二十八フランは永久に取戻すことは

[illegible]んだ、[illegible]一切の損害には賠償が[illegible]といふ[illegible]かういふ人にとつては、とても重大な事でした。いや、全く重大な事だつたのです。この種の偉大なる人間は自分で自負心に滑稽なほど、執着するものです。さうしてかれは[illegible]しできるのは、モオブルノオ氏の真赤な、スベ〳〵した、[illegible]さうな顔は、もうスベつこくもなく、真赤でもなく、健康さうでもなくなつて了つたことです。さうしてかれの小さい腹はもうまるまッちくはありませんでした。それはつまり品物が賣捌ふことができない為でした。どうしたらいゝものでせう？ とさか新聞の廣告欄へもつて行つて、[illegible]安價で譲る。」と出すわけにも行きませんでした。かれは[illegible]ました。スッカリふさぎ込んで了ひました。かれはもう[illegible]長のバラダン君と酒をのみにも行かなくなりました。選挙には[illegible]い投票して了ひました。さうしてとう〳〵脳貧血を起しました。

◇

◇

さてそのあとがどうなつたかと云ふと、つまり、隣斉がモオ

學界論戰レヴュー

A・Y・S

早慶戰の時である。神宮球場はとても駄目らしいんで、仕樣がない、カフエでラヂオを聽くことにした。見ると、客はかりぢやない。とつくに空になつた珈琲茶碗一つを前に置いて、ラヂオを聽いてゐるお客で一杯だ。あの第三回戰の、確か第八回か、エクサイテングなインニングの時である。腰本監督が宮武を退けて水原をプレートに送る。筆者の相客の一人はもう四十を多分に越した、小商店の主人と云つた恰好である。前からの樣子で非常な三田ファンらしい。腰本監督の投手交替に不滿で、宮武に投げさして置けばいゝんだがなあ、とつぶやいてゐる。次のインニングだ。例の大波亂だ。この三田ファン忽ち椅子から跳び上つて、呶鳴つちやつた。水原なんか出すから駄目だ、早く宮武にしろ、腰本の馬鹿。これがラヂオのラウドスピーカーに向つてゞある！

野球事はこんなにも人を熱中させるものだ。それにしても腰本監督たるもの助からない話である。あの寄席、電車の中、カフエーの片隅、要するに多少なりと人のたかる處でありさへすれば、ラヂオで野球を聽いた、いやそれどころか新聞で野球を讀んだだけの連中が、ロールドシーリーズの監督でゞもあるかのやうな偉い自信をもつて、早慶戰の戰跡批評に唾を飛ばしてゐた。と書く筆者もその一人なんだが、……

さて、學界の神聖なる論戰を早慶戰に、荀もスポーツに擬するなぞ以てのほかの不心得である。不心得ではあるが、神聖なる理論鬪爭といふ奴、なんと云つても喧嘩の一種ではあるに相違ないとすれば、これを喧嘩なみに面白がるのは無理ぢやない。論戰を較せると

[illegible]
[illegible]
円から、いま筆者が、求められるまゝ、早慶戰評判記の代りに學界論戰評判記[illegible]す[illegible]る次第。

と云つて、各心様[illegible]ないでもない。學界の論戰と早慶戰と違つてゐるあたりがりよくない。どういふになると何處かどう喧嘩してゐるのか傍の者にさ飲み込めない。論戰のインニングの進行なぞ、とても追へない。そこで、いま此處に附錄品として、どういふことが問題になり、どんな具合に展開し、どこでケリが着いたかを、簡略ながらお知らせいたさうといふんである。これは付錄でせうが、と始めから手前味噌だ。

この際筆者はもちろん評語を挾む。新聞の早慶戰記にだつてちやんと批評がくつついてゐるんだから。しかしこの筆者の評語たる、自分では大いに偉いつもりでも、さつきのラウドスピーカーに呶鳴り込む三田ファン、批評に類するかも知れぬ。そして批評される學界の腰本監督、市岡監督、小川君、宮武君等、助らない譯と悲鳴を擧げるかも知れない。それはどうも仕方がない。

一　河上博士の「最喜筋」と土田杏村氏の「最喜筋」

よつて執筆されたもの[illegible]てゐる――まづかう、頭から一發喰はした。そして、『今日の社會において、國家または資本家から賃銀を受取らずして、吾々はどうして生活してゆけるのであらうか？』と問いて置いて、さらに、『ところで土田氏自身は、ちやんと唯物辨證法を心得てゐられるらしいが、なんと幸運な人であらう。失禮ながら敢て問ふ、氏のがまぐちには、どういふところから、お金がはいり込むのでありますか？』とばかり辛辣な逆襲である。こゝで河上博士は土田氏の云ふ辨證法は『がまぐち辨證法』だと痛罵する。

もちろん杏村氏だつて負けてはいない。今日の社會ぢや喰つてゆくには結局國家なり資本家なりから金を貰はにやならぬことは自分だつて知つてゐる。そんな收入の源泉を問題にしてゐるんぢやない、源泉はどうあれ、收入を得る仕方を云つてるんだ。國家から恩給を貰ふのと、日傭勞働者として賃銀を稼ぐのとは違ふだらう。それを『文筆勞働者』だなんて、チヤンチヤラ可笑しい。これが土田氏の返答だ。こんなつまらぬことはどうでもいゝとして、わが土田杏村氏は大變な宣言をしてゐる。『氏のがまぐちには、どういふところから、お金がはいり込むのでありますか。』との河上博士の質問に對しては『……土田氏は昂然として云ふ『私は[illegible]一個の文筆勞働者として出版者より[illegible]の利益を[illegible]するために買取るところの、彼れの文筆勞働の生產物」（これは河上博士の云つたことだ――筆者註）に對する報酬を收入源として生活するものだ。併し私は自己の生活を支持し私の不完全なる學問研究の資料を支持するために、一熟練筋肉勞働者が受取る報酬以上のものを受取ることを自己の侮辱と感じてゐる。』これは近頃雜誌社や本屋にとつて耳許りな話に違ひない。『緊縮』『緊縮』で雜誌社や出版屋もいろいろ生產費の切下げに苦心するだらう。が、その際この杏村氏のやうな奇特な寄稿者があると聞いたら、みんな杏村氏の處へ驅けつけるだらう。そして尊敬すべき杏村氏を『侮辱』しまいと一生懸命になるだらう。しかし筆者などは尊敬されなくてもいゝから、杏村氏並に稿料を引下げられることは眞平御免だ。

こんな話をながなが書いてゐては切りがない。早く、學界の論戰はスポーツとは少し違ふところをお眼に掛けなくちやなるまい。

[illegible]きつけて、どうだこれで[illegible]とイキリ立つた。例へば、河上博士は[illegible]が人間の意識とは獨立なことを說明してゐた[illegible]地球の存在發展が人間の意識とは獨立なのと同じだと說明してゐるが、杏村氏はこの點を擧げて、河上博士は自然と社會とを同視してゐると云ふ。自然と社會とは異る。地球には――土田氏は論じる――『思想も價値もない』が、社會にはある。從つて地球には『改造』があるが社會にはない』。だからまた自然科學に對して社會科學の特質を無視しちやならんといふのである。

この六ヶ條に對して河上博士は『辨證法的唯物論について』で一々答辯する。一體、土田氏の掲げた質問六ヶ條なるものは、――筆者の見るところでは――唯物辨證法に對する批評的疑問としてなかなかいゝものを、元來の性質から云へば、具へてゐる。充分に論じてあつたら、マルクシスト側の答辯もよほど深い處まで行つて、それこそ『[illegible]的』である。といふより有益なんだ。それを杏村氏はどういふ目論見があつてか、河上博士といふ

[illegible]

これは正しいと承認する。しかし河上氏の『非辯證法的命題』はなんて云つたつて間違ひだとがんばる。なぜつて、この命題の方では『優つた劣つたの對立語』が主體たる日本人の全部に關係しない。日本人の一部たる『長掌筋』なり『長蹠筋』なりにだけ關係して、日本人全體について云はれてない。そこで、つまりこれは『樹木は、花に關しては赤く、葉に關しては赤く無い』といふのと同じだ。こんなものが辯證法的命題でないことはわかりきつてゐるぢやないか。ところがだ、——と杏村氏は云ふ——エンゲルスの命題の方だと『至上的』『非至上的』といふ對立語が主體たる『思惟』の全部に關係してゐる。だからこの方はいゝ。

しかし、とこんどは筆者が一本横槍を入れようと思ふ。エンゲルスの命題は詳しく書くと、人間の思惟は『その素質、傾向、可能性歷史的の究極目的よりすれば、至上的であり無制限的であるが、個々の實行やその都度の實現性よりすれば、非至上的であり制限的である』といふのだ。これは手短かに云へば、思惟は『一面よりは至上的であると見られるが、他面よりは制限的であると見られる』(こいつて杏村氏の言葉を[illegible]借し[illegible]だ[illegible]筆者は[illegible]といふことですね。そこで、わが杏村氏の論法を適用すると、これだつて思惟の『一面』と『他面』とそれぞれ別なものについて云つてるんで、思惟全體に關係してないことになる。エンゲルスの命題も辯證法として落第だ。心細き限りである。

かうして杏村氏は、河上博士の辯證法の鯨をなんとか捕へんものと汗水垂らして大童だが、どうも土田氏の無器用な手つきが滑稽なだけで、さつぱり感心しない。それもその筈さ、前の土田氏の辯證法の說明が簡單で、一とわたりの定義と云つただけの代物で、こんな錐ぢや鯨は刺せぬ。ブルジョア哲學界、その人ありと知られてるか知られてないか知らないが、土田杏村氏も隨分なまくらな哲學の錐を持ち合せてゐるもんだ。

しかし、こんどは筆者河上博士の方に向き直ほるんだが、まくらに書いた三田ファンが投手交替をラヂオを通じて腰木監督に要求した。その傳で筆者もここで河上博士に要求を呶鳴りたい。長掌筋と長蹠筋の例はひとつ他の例と交替させていたゞきたいですな!

まあこれで、やつと長掌筋と長蹠筋から解放[illegible]

そこで[illegible]と思ふんだが、ここにまた河上博士對土田杏村の論爭の[illegible]ひ合ひはなかつた[illegible]題だ。『……土田氏が、ここでは惜しげもなく辯證法に對する自己の無智をさらけ出してゐられるのはたゞかく〳〵の問題である。更に……かゝる疑問を大上段に構へて持ち出すことが、やゝ滑稽であるといふことは、今となつては、土田氏自身も氣づかれたであらう』『今年の京都の夏、特別に暑いせいか、さすが土田氏の頭腦も茲では混亂を極めてゐる』これは河上氏の言葉。しかし土田氏を[illegible]けてゐない迄河上氏の相對命題は、決して辯證法的の命題ではないのである。私の言に信用が置けなかつたら、ロシアへでも電報を打ち、貴下は何れを支持せらるるや』と問合されるがよい。』この文句に註解が要らう。ロシアへ電報でも云々は、嘗つて改造社と五社聯盟とマルクス全集で喧嘩したとき、河上博士の屬する五社聯盟派が、ロシアのリヤザノフに上の何かやうな問合せの電報を打つて、その返事を新聞廣告に載せたんだつた。と確か記

[illegible]

二　人口論には[illegible]口を出す

[illegible]

弘文堂から出てゐたかと思ふと、岩波書店に移りこんどは上野書店になつたかと見るまにまた何處か他の本屋に移つて、なんとなく影が薄いけれど、大正十五年には日本一の河上博士の個人雑誌として、並びない讀者と聲價をもつてゐた。その『社會問題研究』第七十四册で河上博士は高田保馬博士を痛罵した。

これだけではまだおわかりになるまい。高田保馬博士は同じ頃の『經濟往來』で人口問題に關して、外國風にいふとこれがエッセイと呼ばれるものなんだらうが、隨筆風の論文を書いた。そのなかで碩儒高田保馬は斯うやつたもんである。『私は先日近所の町を散歩しながら、町をうろついてゐる一人の乞食を見た。彼は塵箱から芋の皮、魚の頭などを拾つて食べてゐる、しかもその血色は極めて良好、都會人の菜色に比すべくもない。食へないといふのは一定の體面が保てないと云ふことに過ぎない、その生活標準を少しく下げてゆけば、天下到るところに食ふべき途はある』博士高田が云はうとしたことは、人間體面を張るから駄目なんだ、身を落して乞食してもいゝといふ氣になりさへすれば人間到る所青山在りだ、だから人口問題なんか問題にならないといふのである。

この文句が河上博士の頭に[illegible]たから堪らない、いや堪らないといふにも、[illegible]しからう。高田博士は今は九州だが、以前は京都にゐた。博士は京都大學の教授になりたい念願だつたが、河上博士の反對のためにおわやなりそこねた、との噂などの程度に正確だか知れないが、京都で皆一緒の研究會では高田博士は河上博士に始終やつつけられた。この恨返さゞるべからず。爾來、ことあれば河上博士に喰つて掛り、ケチをつけた。河上さんなんてどうも實際は頭の粗雜な人でと、誰れか來れば河上博士の惡口を叩いた。で、河上博士の方でも何をフザけた奴だと思つてゐる。つまり河上博士と高田博士はお互にその不倶戴天の仇といふ奴である。

だから、河上博士が高田博士のあのベラボーな人口論を見たから堪らぬ、口を極めて罵倒した。『……試に高田博士に尋ねるが、氏自身が塵箱から芋の皮や魚の頭などを拾つて常食にされてゐないのは、單に大學教授たるための「一定の體面を保たんとせらるゝ虚榮」からであるか、[illegible]けて置いてから、河上博士は[illegible]者がいかに苛烈な飢餓に[illegible]生活難の事實を否認するは、冷然たる學閥にうたれながら、空を仰いで、天氣時刻、一點の雲なしと斷ずるに等しい』と。名文句である。このやうに火を吐くやうな、骨を刺すやうな痛罵は河上博士の身上である。

それは別として、これで河上博士と高田博士と大戰爭だなと世間の人は思つて、まさか家財道具は纏めなかつたにせよ、大いに眼を見張つた。ところがだ！　ところが、高田博士の答辯はない。大正十五年が暮れてもない。昭和二年の春が訪れてもない。もうみんな忘れちやつた。その昭和二年の九月、雑誌『改造』は高田博士の『人口問題の反批判』といふ論文を載せて來た。これが、實にこれが先きの河上博士の非難に對するわが高田博士の答辯である。ちようどまる一年經つてた。

この論文たるや全く以て雄大なものである。その雄大さは『改造』が九月號、十月號と二號に亘つて連載したことでわかる。もつとも斯く連載したのは高田博士の要求ではな

とつ一博士の學術的名聲よりもつと有名な惡文の行間を具さにくゞつて讀み通めていただけば、筆者の汗言の讀者を惱らざること、正に火を見るよりは明かなんである。

しかし、——全くしかしてある。こゝで吾吾が博士の議論の精緻に感服した夢から醒めて、この雄大なる論文の趣旨を、前の河上博士に痛罵された高田博士の隨筆の人口論議と不圖比べて見ると、吾々は字義どほり驚倒してしまふのである。全く同じだから！　隨筆における高田博士の御意見はどうだつたらう。人口問題なんか問題にならぬ抛つておけばいゝ。喰へないなどは生活標準が高いからだ、身を落して生活標準を下げれば人口過剰なんかないぞ。かうだつた。それでこの大論文の結論の方は？　人口方程式はちやんと均衡を保つてゐる。人口が殖えれば生產力が殖してまた均衡が取れる、だから人口過剰なんか、從つて人口問題なんかありやしない。生產力がうまく殖大しなければ生活標準を下げれば、それで四海波穩かだ。資本主義時代の人口過剰は『生活標準の自動的向上』つまり生活標準の高いせいだ。かうぢやないか。どうです讀者諸君！　此處には一分の隙もありませんよ。

これを云へば隨筆の思ひつきを理論づけるために高田博士はこの偉大な論文を公せられたのである。ハー、成程だから一年も掛つたんだ、實に學者は偉いもんだ、と感嘆する人があつたら馬鹿だ。だつて、逆に考へて見給へ、この大論文のトドの結論が、つきつめれば、あの隨筆にあるべラボーな意見になるんですぜ。なあんだ！

が、論戰の次第に立ち戻つて。河上博士に對する恨に燃えた、いやさうぢやない學者的良心に燃えた高田教授はその獨特の人口理論を徹底させるために『改造』の論文と同時に、『經濟往來』にも尠からざる人口論を投じた。しかしこんどは河上博士は默り込んでゐる。と、橫槍が入つた。那須皓博士の『河上高田兩博士の人口論を評す』『經濟往來』昭和二年十二月號）。これはまた人のいゝものである。そして學者らしいものである。といふのは、那須博士によればみんないゝ所もあれば惡いところもある、マルサス、マルクス、河上博士、高田博士、どの人口論も少しづゝ長所があり少しづゝ缺點がある。この是々非々主義がすなはち學者の本領ださうである。

そして、[illegible]。[illegible]那須博士の[illegible]、これたところ、さすがは學者といふものゝ本領を發揮してお目出度になる。

かういふ紳士こそどんなにしたつて佳いところは微塵もないんだから、答へる方が損である。高田博士も昭和三年『經濟往來』九月號で、河上博士の時とは打つて變つて鄭々と會目遲々と云つた具合に答へる。

この間、本お澤山出すことで有名な經濟學博士永井亨氏も喙を入れる。その他同樣な有象無象我れも我れもと飛び出す。しかし、高田博士の那須氏に對する答辯で人口論々戰は一とまづ靜になつたと見えた。

ところがさうでない。今年昭和四年三月雜誌『社會科學』において前九州大學教授向坂逸郎氏が『貧乏と人口』といふ論文で激しく高田博士に喧嘩を賣つた。向坂氏の場合は、一應は、高田教授が前からの人口論を集めて『人口と貧乏』といふ著書を出した、その批判的紹介といふ體裁だつたが、どうしてそこにはまた大いないわけ因緣があるんである。

前九州大學教授、肩書が示すやうに、向坂

[illegible]國際[illegible]教授[illegible]前[illegible]對立[illegible]人[illegible]と[illegible]高田教授[illegible]高田博士と向[illegible]對し[illegible]

の經濟的な人口論を問題にする。[illegible]例の[illegible]高田博[illegible]上[illegible]式[illegible]いて[illegible]貧[illegible]階級の生活標準を問題にするのである。こ[illegible]向坂氏は[illegible]向坂氏によって[illegible]高田氏の人口[illegible]分[illegible]作用なる[illegible]場合[illegible]ある[illegible]合[illegible]生活[illegible]といった風に述ぶ[illegible]ある。など[illegible]って、[illegible]上層の生活を下層の[illegible]人の生活[illegible]引直して、それに必[illegible]を問題にして見たところで、全[illegible]あるそこで、高田博士の人口[illegible]生活[illegible]こ[illegible]いふことは不平等のないといふことは[illegible]分配の不平等のないといふことは[illegible]ないといふことである。高田博士の人口論は[illegible]何を測定する。こ[illegible]向坂教授は[illegible]高[illegible]人口論[illegible]を缺いた

ものである。そして向坂氏は、これを以て高田氏の自分の人口論を[illegible]人口論と比[illegible]自分の人口論の[illegible]を見てみるといふ點に求める。その高田氏の[illegible]自ら[illegible]こん[illegible]高田教授の[illegible]人口法則を取り[illegible]て、それが[illegible]のやうに、――[illegible]の[illegible]生産力[illegible]增加を說くべき――[illegible]において、[illegible]人口の[illegible]增加を[illegible]人口法則[illegible]を[illegible]高田教授の[illegible]今[illegible]今日人口[illegible]問題[illegible]となる[illegible]ないことを論じた。

この向坂教授の攻擊に對して高田博士は[illegible]今[illegible]ウン[illegible]一[illegible]係[illegible]點[illegible]への[illegible]は高田博士の[illegible]へ[illegible]りてなく、向坂氏の[illegible]今日[illegible]高田博士の[illegible]いてゐる。[illegible]博士[illegible]點つて[illegible]向坂氏こその「人口[illegible]において、[illegible]高田[illegible]マルクス[illegible]立つて[illegible]人口[illegible]に一[illegible]るにま

いておく。

數へて見ると、この人口論の論爭は今までゞもすでにかなりの年月が經つてゐる。そこへ、これから一年か二年か過ぎて高田博士が答へ、向坂氏が反駁する、となると實際何年掛るか判つたもんぢやない。一九三〇年となると、學界の論戰も、コンクリートのビルヂイングの建築と同じく、數年を要するといふ處か。

（三）　立合の長い高田博士

人口論々戰を見た讀者は、高田博士が如何に論戰に氣長であるかを充分に知られたであらう。誠に、テムポの遲いことを倚しとする現代稀に見る處である。何んのことはない、相撲でいへば、立合ひが長いんだ。ヤーと見合つたと思ふと、ゆつくらと水を飲みに立つ。水を飲むどころか、仕度部屋へ歸つて晝寢してゐるんだ。

かうしたことは、今年前の二つの論戰と並んでおそらく最も注目すべきものだつた。高田博士の『資本蓄積論に關する第二論、小產手段と消費資料との關係につき河上博士に答ふ』についても同じことである。これが『改造』四月號[illegible]今年五月。そして[illegible]河上博士に答ふ』だと、一[illegible]いゝ。大正十五年四月の『經濟問題研究』における河上博士の『資本蓄積の行き詰まり』における批評に答ふ』である。ちよつと指を折つて御覽なさい。足掛四年目の答へですぜ。これぢや見物痺を切らす段の騷ぎぢやない！

そのやうに痺を切らしてその揭句が面白くでもあればだが、この論文を讀んで『改造』の讀者、幾萬か知らんが、わかつた人は恐らく百人に一人とはあるまい。常々高田博士の學者らしさは唯一懸つてその論文の難解さにあるのだが、この論文こそは最も高田的である。ゴテイテ、ゴタイタとあれを論じこれを論じ、細かいところばかし突ついて、吾々讀む者は蜘蛛の巢に懸けられたやうな氣がする。氣味惡く頭ばかり撫でゝゐなくちやならん。しかし高田博士の壯烈な氣焔だけはわかる。それは、毎々のことでもう驚かされもしないが、高田博士は相變らず、云はゞ刀を水車のやうに振り廻して——これは劍術の上手な形容ぢやない——とにかく周りの誰れかれの差別なく傷をつけてしまふ。

例へばである、河上博士に斬りつけるのは[illegible]目になつて[illegible]い。だが云ふことは目出たいが、[illegible]て、河上博士がさう（といふのは、この句の前のことを承けてゐる——筆者註）云はれることも自由である。併しながら、若しそこまでゆけば、學問の殿堂であると思ふ。博士の高見如何——下手な文句だが、意氣だけは壯い。河上博士から海を越へて、ツガン・バラノフスキーをやつつけ、當代の最も輝けるマルクス理論家ニコライ・ブハーリンをも滅多斬りにする。「なるほど、ツガンの學說は混亂にみちてる、利刃（もちろん高田博士御自身の刃のことでせう——筆者註）僅かにふるれば直に倒れさうな弱武者ではある、併しながら、ブハーリンが振りかざしてゐる鐵槌の光によりては倒れるものではない」。子供の戰ごつこぐらゐに凄まじい太刀風である。もつとも斯くブハーリンを駁倒される際には、ブハーリンが遙の遠方にゐて、それよりブハーリンがわが高田博士の批評なんか讀む氣づかいはないことは、もちろんちやんと計算に入れられてのことでせうが、これでもまだ足りない。終りの處で、最近にわが高[illegible]

[illegible]

四　文藝陣の[illegible]を

[illegible]

と思ふ。ひとつの動き方だ。

この文壇といふところがまた、仲の悪い人揃ひ[illegible]にも[illegible]作品を[illegible]けなした[illegible]のいがみ合ひ、それから高尚なところで、文學の理論に關する意見の對立まで、いろいろ[illegible]早い話が今年一年でも、横光利一氏や大森義太郎氏らの形式主義の問題、プロレタリア文學の大衆化の問題、それからマルクス主義藝術論と[illegible]について谷川徹三氏と[illegible]氏との論戰、いやなこと、いやなこと！

[illegible]

見てください。『新潮』三月號の「政治的價値と藝術的價値」といふ論文でこの論戰のキッカケを作つた、平林初之輔がゐる。それから、それからが大變だ。青野季吉、宮島新三郎、久野豐彦、大宅壯一、勝本清一郎、川口浩、小宮山明敏、青木壯一郎、細田民樹、岡澤秀虎、中野重治、雅川滉、谷川徹三、三木清。ちよいと考へてもこんなにゐる。そこへもつてきて、これらの人の論文が載つた機關といふか、つまり舞臺の場面がまたあらゆるものを含んでゐる。東京日日、讀賣、時事の新聞學藝欄、『新潮』、『近代生活』、『文學時代』、『戰旗』、『文藝戰線』、『思想』、『社會科學』、等々、一切の文藝雜誌、いやおよそ文藝を論じることの許されたあらゆる新聞雜誌に何がなしこの論戰に關する意見が載つたと云つてもあまり云ひ過ぎではないくらゐだ。

それから、役者の仕草が、レヴイユにふさはしく、色とりどりである。ナニ喧嘩だ、ヨシ來たと云つて手近かにあつた新ダツヂーを摑んでいきなり駈け出した大宅壯一がゐるかと思へば、老女政岡のやうに威儀をつくろつて靜々と乘り出した三木清がゐる。さうかと思へば、中野重治は朗かな聲で唄をうたつてゐるではないか。

一體ぜんたいこの大芝居の筋はどういふんですかつて、讀者？ おゝ、さうですか。說明しませう。

平林初之輔氏はさつき云つた『新潮』の論文でマルクシズム文藝理論に關して、ハムレットもどきに懷疑的な煩悶を漏らす。マルクシズム文藝理論によると、作品の價値はマルクス的な政治上の目的から評價されなければならぬ。すると『古池や蛙飛びこむ水の音』など問題にならない。しかしこの句は棄てがたい。ほんとにどうしたらいゝんだらう。

そこで、わがハムレットの獨白はかうである。『私の主張の要點は、……マルクス主義文學においては、政治的價値が優位に立ち一般の藝術作品としての價値はこれに對して從屬的關係にあるといふ點にある。そしてこの二つの要素、從つて價値の結合關係は、藝術品としての內的な必然から生じたものではなくて、マルクス主義文學の一定の政治的目的から規定されるものであるといふにある』（東日、三月廿八日號、『目的意識の昇華』）これで判るやうに、マルクシズム藝術理論は二元論だといふのが平林氏の第一の主張である。

一般にマルクス[illegible]もつて[illegible]的[illegible]價値[illegible]別々なものがあり、それは『調和し得ない』ものであり、たゞ機械的『權威で結合せしめられ』てゐる。しかも『政治的價値』が主になつて、といふのである。これが平林氏の第一の論點。そして問題の核心であるけど、これだけぢやない。この悩めるハムレットなかなか氣が強い。『現在のマルクス主義藝術論は、一つの政策論であり、政治論であつて、藝術論と名づくべきものでない』。それやさうだらう。『調和し得ないものを無理に權威で結合せしめた』藝術論なんてものは仕樣のない代物だから。

『だから、幾分寄木細工的な臭みある現在のマルクス主義藝術論を解體して、政治的部分と藝術的部分とに還元し、これを明白に規定しなほす必要がある』。平林氏の第二の主張はかうである。

平林氏の云ひ分はわかつたとして、次は、反對論だ。中野重治だか誰だかゞ云つてるとほり、實際隨分多勢の人が寄つてたかつて平林氏を撲りつけた。多勢だからその論調といふ

[illegible]

そろそろここらで總評をやらうぢやありませんか、讀者。筆者ぶちまけて云ふことを許していたゞくと、問題は充分には明かになつてゐないと思ふ。もちろん平林氏の懷疑も懷疑だが、反對論の方も、數ばかしは實に多いが、そして、マルクシズム藝術論は一元論でなくちやいけないといふことを明かにしただけの成績はあげたが、其處んとこをモツト深く掘り下げて、一元論でどう平林氏の提出したやうな事實が說明がつくかといふ、その說明はまだまだ充分ぢやない。

が、それもその筈だ。これらの論爭でいちばん大事な點、藝術とは何ぞやといふ問題がはつきり分析できてないんだから。これぢや雨漏りのする下へたゞバケツを置くだけで、サツパリする筈がない。今に見給へ、この問題もまだ先へ持越されますぜ。

それにしても、藝術理論界といふところはどうも、例へば、マルクシズム內での話だが、經濟學とか哲學とかに比べると理論の水準が低いやうだ。まあこれはマルクシズムの都の新開地、いや田舍だ、まだあんまり開けてゐない。といふのが、筆者のこの論爭についての憎まれ口。ナニ、それは三田ファアンがラウドスピーカーの前で腰本監督を叱りつけるやうなものだつて？　さう云はれると筆者一言もない。で、早く引き下がるとしませう

中間物選集

都會は燃上る熔鑛爐だ。都會は鳴り響く管絃樂だ。都會は速力する飛行船だ。都會は勞働し都會は前進する。都會は過去を知らない。都會は未來を現在の中に持つ。都會は未來だ。また、都會は進歩の原動力としての一切の惡をその體内に持つ。都會は野心的だ。都會は永遠の青年だ。都會。それは凡ゆる意味に於て近代的であり、「**中間物選集**」はそのエッセンスだ。

7・都會の論理

（新刊）

林房雄著

内容

新興變態。明日の女性美。情死を嘘ふ。菊池寛に與へる公開状。諷刺文學論、大衆文學の理想と現實。丸ビル附近。圓タクガール。アルセーヌ・ルパンの論理　其他。

都會の論理！　それは工場の論理である、プロレタリアートの論理である。その論理の下に近代都市の持つ影を凡ゆる角度から批判し觀察したもの。

8・場末風流

（新刊）

小島政二郎著

内容

戰慄の作り方　美女　賢人・なまこ・食しん坊、君は職業結婚をしたか。嘲笑などこれが面白いか。肉彈と停止。作家漫評。若き日の新人　よき時の實驗。

都會の尖端を行く者はその裏街を閑却する。裏街にも都會の眞相はある。殊に東京には江戸風の名殘りがまだ随所に遺つてゐる。それを探ねるのも亦面白いではないか。

中央公論社版　四六判假綴　三百數十頁

中間物選集

1. 巴里を語る（既刊）　柳澤健著

内容　名優ギトリイの死。ヴン・ドンゲン邸の夜會。希臘神殿前に於けるパイヴァ嬢の裸舞。近代を發火せる三人の前首相。日本から歸つた三人。シヤトーブリアンが最後の戀。其他。

2. 山へ入る日（既刊）　石川欣一著

内容　山の秋。山と酒。山と女。山と煙草。ノアの山。可愛い山。初夏の高原。山を思ふ心。山の道具。アルプスの思出。スキー場の親子。日本の味。市街と武士。中年者の幻想。

3. 都會の點描派（既刊）　淺原六朗著

内容　マネキンガール。メモに現はれるカフエ。深夜の乘客。弧を描く街から。都會感情感想。戀をのせたタキシ。秋の望郷。死を思ふ者。煩悶期にある文學。ニヒリズムに就いて。其他。

4. 近代明色（既刊）　新居格著

内容　花に映る人生。春の冷情。留置場小景。言葉の細線。密輸入者の獨白。影の世界。一つの近代型。ステツキガール抗辯。早婚者の手記。乞食と自動車。戀愛の宣傳を排す。

5. 或る斷層（既刊）　ささきふさ著

内容　落葉の墓地。花の毒。思ひ起す。合服と縞ずぼん。ある刹那。犬の病氣。近頃のこと。夜の隧道。赤倉行。初戀。香水。惚れられマニア。好きな男嫌ひな男。お辭儀の日本。

6. 月寒の女（既刊）　下村千秋著

内容　暗い暗黒街。獅子の背に乘つて。良人を用心なさい。薄明に送られて。十一月の夕。狂つた人の狂はぬ言葉。黄金の腦髓。私のノスタルヂヤ。月寒の女。四國遍路の記。

定價各冊八十錢・送料各拾貳錢・朝鮮臺灣各冊十六錢



印刷戰線異狀あり

我社の進出により俄然斯界因襲の夢は破られた。
見よ！
一九三〇年度に於ける一大飛躍を!!

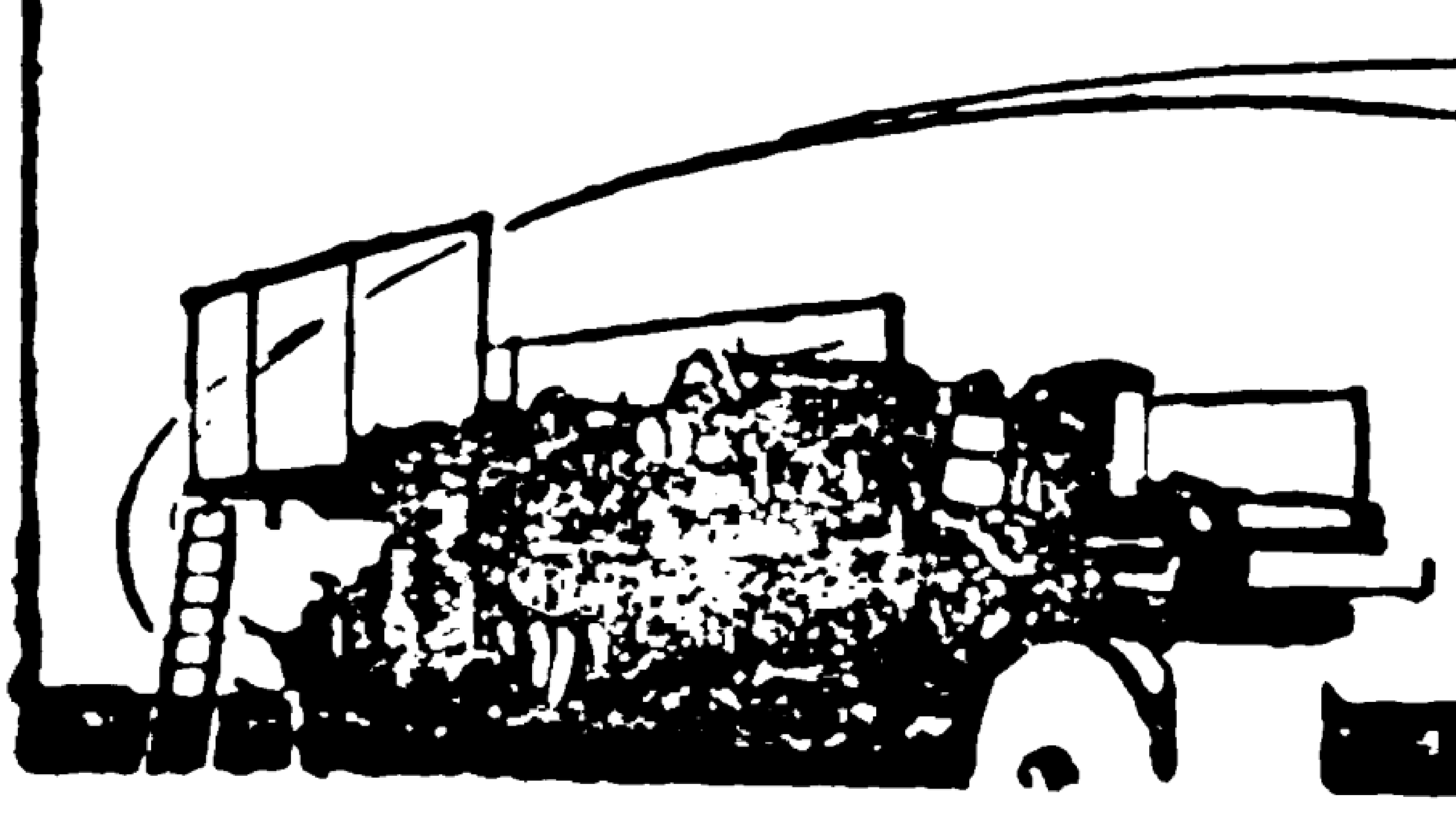
株式會社 有恒社

營業所 東京市麹町有樂町報知ビル内
電話丸ノ内一〇三四番

工場 東京市外大森町谷島九九五九
電話大森一〇八一番

我社の標語！

活版印刷の美化と期日の絶對正確！



娼妓自廢九百八十七人

沖野岩三郎



一、其の由來

救世軍本營の一室で、山室軍平氏は歯切れのよい例の調子で語りつゞけた。

『……娼妓の自由廢業といふ事は、可なり古い歴史をもつてゐる。今から三百年近い以前の正保二年十一月に、吉原の並木屋の遊女で佐賀穂といふのが、自分の思ふ男と結婚したいために、遊廓を脱け出して町奉行朝倉石見守に訴へ出て無事に自由廢業をした。これは個人的の自由廢業の元祖であつたが、次には外部から其運動が實行される時代が來た。それは私の知つてゐる限りでは米澤の城主上杉鷹山侯が領内湯野村の遊女を解放したのが最初であると思ふ。それから伊井直弼侯がまだ彦根に居た頃領内佐野の遊廓に居る遊女を全部解放した。明治維新の際、佐賀藩では蚤娼妓に自由廢業を斷行させた事があり、越後の長岡では彼の有名な河井繼之助が、娼妓の悲慘な生活を實地に調査して、これが解放運動を起して成功したといふ話だ。けれども當時はまだ人間が人間を賣買出來るものだと信じてゐたから、日本中で二ケ所や三ケ所に自由廢業の實例があつたところで、其の意味

[illegible]

國である。しかも其の奴隷は殆んど休暇無しに淫技を受けて居るではないか！其の憐れなる奴隷とは「身代金」といふものに買ひ取られて甚しき不道徳をなさしむる娼妓といふもので、其の數實に數萬に達するではないか。」

この言葉には裁判の當事者も一寸たぢたぢとした。しかし利かぬ氣の大江卓氏は宣言した。「娼妓は奴隷時代の悪風である。日本政府は目下解放の準備中である。娼妓も樓主も國内の陸上に居て逃亡の患はないが、マルヤス號は海上に居て、いつ逃亡するかも知れないから、先づ此の事件から片付けなければならない！」

そんなわけで、時の太政大臣三條實美、右大臣岩倉具視、内務卿大久保利通、司法卿江藤新平等の諸氏が熟議の結果、遂に太政官令第二百九十五號となつて人身賣買禁止令が發布され、娼妓藝妓のみならず貸借關係に因る年期奉公人一切を解放されたのである。それは明治五年十月二日であつたが、此の解放令の出た一週間後の同月九日に、司法省から出た第二十二號布告といふのは、

一、人身を賣買するは古來制禁の處、年期奉公等種々の名目を以て、其實賣買同樣の所業に至るに付、娼妓藝妓等雇入の資本金は贓金と看做す故に、右より苦情を唱ふる者は、取糺の上其金の全額を可取上事。

一、同上娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者にて牛馬に異ならず、人より牛馬に物の返辨を求むるの理なし、故に從來同上の者へ貸す所の金銀、並に賣掛滯金等、一切債るべからざる事。但本月二日以來の分は此限にあらず。

一、人の子女を金談上より養女の名目になし、娼妓藝妓の所業を為さしむる者は、其實際上即ち人身賣買に付、從前今後可及嚴重之處置事。

といふ奇抜なものであつた。そこで從來の人身賣買は跡を絶つことになり、娼妓稼業をするものは「身代金」の代りに前借金をする。そして從來の樓主は單に其の娼妓に座敷を貸すといふので、「貸座敷業」といふ名稱になつたのであるが、實際はさうで無く、其後の娼妓が樓主に對してなす契約といふものは、必ず貸座敷方にて御家則其他一切の習慣を遵守し誠實に業務に從事可致事」といふ一ヶ條があり、其次に「稼業中は揚代金の幾部を以て別途借用金の元利償却に充當すべきに付、一時皆濟の儀は猶豫可被下候事」といふのがあり、其の外に、席料食費物品損料入院費藥價等は總て、其の償却資金から控除されるので、いつまでたつても足の洗はれる時は來ない。だから明治五年の太政官令も司法省布告も結局有名無實の空文になつてゐた。そこで明治八年八月に、太政官布告第百二十八號で、も一度、人身

な居る人は読者も何んと読む風に何は微妙に感覚此の布告様事と布告したが、人身売買は定まらなかつた。此事が最初に私について猛烈な運動を開始したのが、群馬県の片岡小十郎といふ県会議員であつた。此人の運動で、群馬県は向ふ六ヶ年を期して公娼全廃をするといふ布告を出すことになつた。それは明治十五年の四月であつたが、いよいよ実施といふ場合になつて、但書県会はこれを無期延期にしてしまつた。そこで同県の有志が廃娼の大運動を開始して、たうとう明治二十六年にこれを完成したのである。[illegible]それまで十数回の代議数があつたが、明治十五年の布告が出ると直ぐ、同地の有様武太夫といふ人が有志を説いて、遂に廃娼にしてしまつたのである。

群馬県は公娼県となつた。しかし、其他の県にはいろいろな娼妓がある。ひとり和歌山県だけにはまだ遊廓が無かつたのを、明治十六七年頃に県の知事が遊廓を設置を許可してしまつた。そんな次第で法律の力でも習慣の力でも、此の二人の一身は、人身売買を撲滅する事は、なかなか困難であつた所へ、今度は娼妓自身から、これはいけないと思つて、自分から自廃したといふ事例が出て来た。それは名古屋の出来事であつた。

…ソニスト・アレンの教団の宣教師で、ユー・ジー・モルフといふ婦人であつた。此人は今もアメリカのミヤートンで、日本人の為に熱心に盡力してゐる現目下であるが、其頃名古屋市で[illegible]を開いて、青年子弟を薫陶してゐた。教育してゐるうちに、此の青年こそと思はれる役すが、いつの間にか不純な強にあつてしまふ、はては退学してしまふ。モルフ宣教師は其の退学者に就いて精査してみたところ、十人が十人、悉く遊廓へ通ふためにさうなる事がわかつたので、これではならないといつて、熱心に廃娼運動を開始した。其の結果この人は娼妓が廃業を申し出してモルフ宣教師に救を乞うたのである。これが裁判沙汰になつたところ、娼妓が楼主から前借金の返済一理の問題と、[illegible]せられる契約は、民法第九十條の「公の秩序又は善良な風俗に反する事項を目的とする法律行為は無効とす」といふ明文に照して、娼妓の勝訴となつた。これが明治三十三年の所謂自由廃業の最初であつて、此の判決例が新聞紙によつて伝へられたので、私は其頃救世軍大佐であつたが、ここで救世軍[illegible]といふ資格で、ブラード大佐、チュース少佐と二人、名古屋に出掛けて行つて、モルフ氏に面会を求め、詳しい事情を聞き、いよいよ時が来たと思つたのでこんど[illegible]
[illegible]自分の意志で廃業[illegible]若[illegible]
[illegible]救世軍本営に對[illegible]「[illegible]げる」といふこ

とを[illegible]させて[illegible]吉原、洲崎[illegible]のである。それは忘れもせぬ明治三十三年八月一日であつた。救世軍の兵士が手に手に五十部百部で、其の「ときの聲」を持つて賣つてゐると、瞬く間に、それが無くなる。無くなる筈です。それは大抵遊廓側からの買占であつた。

最初は「ときの聲」の買占だけであつたが、果はごろつきを驅り集めて暴行を働かせるといふ騷ぎ、そこへ何を思つたか、當時東都の新聞界で幅を利かしてゐた二六新報が應援に飛び出してくれて、綾衣といふ娼妓を自廢させてしまつた。それ以來毎日のやうに遊廓から助けてくれといふ娼妓の手紙が來る。で、救世軍から助けに行く。毆られる。伴れ出す。奪ひ返される。といふ有樣で、同じ事を幾度も幾度も繰返してゐるうちに、警視廳の方が動き出してくれた。それは當時警視廳の課長であつた松井茂博士が法理上自由廢業の正當なる事を認められたのと、今一つは英國人である救世軍の士官たちが吾々と一緒に自廢運動をするので、遊廓內で英國人が殺されたなら國際問題になる、殊に日本がロシアといふ強國を前にして事をなすには英國との同盟が必要である。此の際萬一の事があつてはならぬといふ意味からも、警察が救世軍を保護したのであるらしい。警視廳內の一部の人たちは唯それだけの理由で吾々の主張がどうの、人[illegible]一遍自由廢業で[illegible]救世軍といふ[illegible]い？」「あれか、あれは社會黨の一部さ」と話し合つてゐるのを聞いたさうである。

社會黨と思はれようが何黨と思はれようが、そんな事はどうでもよい。兎に角吾々が二ヶ月間の奮鬪の結果、三十三年十月二日の內務省令第四十四號で娼妓取締を全國的に統一して、從來の年齡十六歲を十八歲に引揚げ、娼妓自身が廢業せんとする時は、書面又は口頭の申請で直ちに名簿削除をなす規則になつたのである。殊に同規則の第六條には、「娼妓名簿削除申請に關しては何人と雖も妨害をなすことを得ず」といふ明文がある。だから、此の省令發布以後、娼妓の身の自由は保證せられ、悲慘なる奴隸制度は全く絕滅したかといふに、案外千萬にも事實は依然として元のまゝであつた。それには二つの理由がある。第一は娼妓取締規則第五條に、「娼妓名簿削除申請は書面又は口頭を以てなすべし」と規定した次に、「前項の申請は自ら警察署に出頭して之を爲すに非ざれば受理せざるものとす。」といふ添書がある爲である。元來娼妓は一定の區域外へ、濫りに出る事が出來ない上に、樓主の監視が嚴重で、一歩だつて外に出る事

[illegible]

二、一日四厘九毛弱

[illegible]

此時、[illegible]四人は、[illegible]に入院して居て、そこで[illegible]したので、二人[illegible]楼君は洲崎病院に二人を訪問して其の決心をきいた所、どうしても廢業するといふので、伊藤君は早速楼主の所へ電話をかけると、二人の楼主は忽ち二十人ばかりの悪漢を率ゐてやつて來た。そして七時すぎに、伊藤君が二人の娼妓を伴れて警察へ出頭しようと、病院の表まで出たところを、外に待つてゐた二十人あまりの悪漢と、院内に居た悪漢とは伊藤君等二人を挾み撃にして、打つ、蹴る、引倒す、踏む、といふ大暴行が働いた。半死半生の目に會はされた二人の娼妓に、人殺し人殺しと叫びながら近所の交番へ逃げ込んだので、巡査に保護されて直ぐ警察署につれて行かれた。二人は警察署で大體の様子を話して、「早くあの救世軍の人を助けに行つて下さい。もう今頃は多分殴り殺されてゐるかも知れませんから、」と云つたので、警察署では驚いて二人の警官を現場に急行させたのである。

二人の娼妓から引離された伊藤君は、四十餘人の暴徒から滅多打にされた爲、全身に十二ヶ所の重傷を負ふて昏倒してしまつた。暫くして、「おい、しつかりしろ！」といふ聲が耳に入つたので、眼を覺して見ると、カーキ色の制服を着た隊員が自分の上に馬乗りになつて人工呼吸をやつて居てくれるのに氣付いた。[illegible]たのであつた。

此の騒ぎのあつた一ヶ月の後、救世軍の[illegible]伊藤君を訪問すると、頭部へ斜に繃帯した伊藤君は、眼ばかり[illegible]く〱いはせてゐた。

「何の御用件ですか。」と問ふと、伊藤君は吃り〱こんな事を云つた。

「實に驚いた話です。今まで僕の所へ廢業したいからと云つて救済を頼みに來た娼妓の中の百五十八人に、楼主との貸借關係がどうなつてゐるかと訊いた問に對して、正確に自分の借金が何程あるかと答へた者は僅か七十人だけでした。此の七十人を廢業させた際に、詳しく其の貸借關係を調査して見ますと、一人分の前借金は平均三百三十七圓七十四錢で、總計金貳萬三千六百四拾壹圓八拾錢になつてゐました。ところで此の前借金貳萬三千六百四拾壹圓八拾錢に對して、七十人の娼妓が悲しい稼業を強請された歳月は合計壹百八十六年十ヶ月になります。即ち一人前平均二年八ヶ月稼いだのですが、楼主の帳簿では、彼女らが合計壹百八十六年十ヶ月の間働いて、やつと壹百貳拾八圓五拾五錢しか前借金の償却が出來てゐない計算になつて

[illegible]	二	[illegible]	一	[illegible]	一
魚屋	一	[illegible]	一	[illegible]	一
銀行員	二	[illegible]	一	ブリキ屋	一
農夫	二	蓄音機商	一	古物屋	一
豆腐屋賣子	一	劇場道具方	一	桶屋	一
馬丁	一	眼鏡職	一	簞笥屋	一
帽子商	一	[illegible]屋	一	指物屋	一
砂糖屋	一	材木商	一	玩具屋	一
小學教員	一	役場書記	一	小間物商	一
印刷屋	一	旅館ボーイ	一	ヘコヤ	一
製飴屋	一	劔舞師	一	妓夫	一
薪炭商	一	僧侶	一		
藥種商	一	牛肉屋	一		

とあり、其の次に少しく大文字にて、

看護婦の手傳となりし者	二人
樓主に引戻されし者	八人
放浪後料理屋の酌婦に賣られし者	三人
犯罪入監せし者	一人
行方不明のもの	十三人
親元に引渡したるもの	八十七人

と書いてあつた。ずらりと並んだ其の職業別に興味を惹かるゝまゝ繰返し／＼讀んでゐると、伊藤君はにこ／＼笑ひながら、こんな事を言つた。

[illegible]つて[illegible]自然[illegible]心[illegible]つ悲しい事は、子供のできない事です。しかし、[illegible]いふわけでは無く、此の統計中の娼妓[illegible]人は、五ヶ年間も娼妓だつた女でしたが、結婚後間もなく、まる／＼した男の子を産みました。それから工場職工の妻になつたのも、會社員の妻になつたのも、男の子を産み、建具屋の妻になつたのも同じく男の子を産んで、四人が四人とも達者に育つてゐます。此の三百人中に廢業前に出産したものが十八人ありました。ところが不思議にもその中の十七人までが女の子でした。しかも其の十八人の子供は、たつた四人しか育ちませんでした。娼妓稼業中に産む子供が九分九厘まで女の子で、廢業後産む子が、みんな男の子だといふ事に、何等かの理由がありさうに思はれます。」

話してゐる所へ一人の若い士官が來て、伊藤大尉、例の娼妓の歌は出來ましたか。今夜淺草小隊の集會で一つ歌つていたゞきたいんですが……」と云つた。すると、伊藤君は其の統計を書きつけてあるノートブックの最後の[illegible]ジを開いて、

[illegible]では、歌つてみるから、きいてみて、[illegible]批評をして

[illegible]

[illegible]女神の[illegible]

[illegible]

世界[illegible]日[illegible]もとに

戦場[illegible]ばかり。

[illegible]て

[illegible]聞くところ

[illegible]と

[illegible]き。

[illegible]

自由[illegible]

[illegible]め

[illegible]人[illegible]す。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]天下[illegible]

[illegible]天下[illegible]る。

[illegible]人々よ

自由[illegible]

[illegible]

[illegible]に。

[illegible]人[illegible]て来た[illegible]して

[illegible]

[illegible]

三、娼妓優待請願

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「あの記[illegible]……[illegible]……ありません[illegible]……あんな
[illegible]……
納した諸大名は有形無形に、必ず東照權現樣の御功德があつた
に相違ありません。そこで話は斯うなんです。日比谷の警視廳の
表に行つてみると嚴めしい銅像が立つてゐます。あれは警視廳
の初代樣川路大警視殿ださうです。德川幕府で云ふなら差詰め
東照權現家康公といふ所です。そこで川路大警視は日光ならぬ
青山墓地へ葬られたのであるが、まあ、あの墓に御參詣になつ
てごらんなさい。丁度東照宮の前に家來達が燈籠を奉納したや
うに、常夜燈や石の鳥居が奉納されてあります。一番表の方に
ある大きな常夜燈一對には、「品川貸座敷中」と刻んであり、其
の次の石の鳥居には、「洲崎貸座敷中」と刻りつけてあり、其の
中の立派な常夜燈には、「新吉原貸座敷中」と刻みつけてありま
す。警視廳の御一代川路大警視殿と、品川、洲崎、新吉原の遊
廓と、どんな關係であつたかといふ事は、私にはわかりません
が、東照權現樣と大名たちの關係のやうなものがあるのだと、
貸座敷の連中は己惚れてゐるのかも知れません。こんな誤解か
ら、どうぞ自分たちを十分保護して下さいと賴みに出るかも知
れませんが、もう今日の警視廳には、そんな主從關係をもつた
お役人樣は一人も居ないでせうから安心ですよ。」

「文學士[illegible]」
「それなら[illegible]……、[illegible]
聲を出さうと思つてゐるんですが……」
「娼妓優待か？」
「さうです。『娼妓に對して、せめてもに在監囚徒だけの待遇を
與へられたし』といふのです。其の理由は斯うです、
一、懲役人は柿色の御仕着せが、別段借金にもならず、暑さ寒さに
着せて戴けるに、娼妓の衣物は借財のはてまで、高利の借金をしな
ければ着る事が出來ない。
二、懲役人は四分六の食物ではあるが、一日三度づゝ戴けるが、娼
妓は一日二食で、しかも徹夜働かねばならない。
三、懲役人は堅固なる一室を無料拜借出來るが、娼妓は室代を遊客
から支拂ひ貰れないならば、自分の座敷にも入る事が出來ない。
四、懲役人は夜分靜かに眠ることが出來、大祭祝日には教誨師の教
話を拜聽出來るが、娼妓は夜分安眠の時間なく大祭祝日には平常よ
り數倍働かねばならぬ。
五、十八人の姙娠せし娼妓は、みな八ヶ月まで稼がせられてゐるが
在監人の姙娠せる婦人に對しては自動車にすら乘せず、人力車にて
靜に裁判所に通はしむる。
六、在監人は逃走しても四十八時間内に逮捕されぬ時は、同囚の非
心がある、然るに娼妓は自由廢業して眞人間になりたい爲、救世軍
を訪問したりとて七日の拘留處分を受けたる者が數多くある。

[illegible]

これは[illegible]聞[illegible]が、また、こんな事[illegible]

[illegible]して、自分自身を[illegible]かしてゐるより外に[illegible]

[illegible]」

[illegible]る所へ、[illegible]手紙を[illegible]

其の中に[illegible]した。

四、悲劇と喜劇

[illegible]の手紙を[illegible]んでゐた[illegible]時[illegible]には、見る[illegible]

[illegible]そして、[illegible]の手紙を[illegible]前[illegible]て、[illegible]

[illegible]その手紙には[illegible]

[illegible]

此の女は[illegible]

[illegible]一人も[illegible]

此[illegible]

[illegible]

よし子より

[illegible]

[illegible]

言つてゐる所へ日比谷署から電話がかゝつて來た。

受話機をがちりと掛けた伊藤君は、帽子を手に取つて、『君、參考の爲に一緒に行つてみよう！』

『何です？』

『東京驛に誘拐されたらしい三人の田舍娘が泣いてゐたのを伴れて來てあるから、救世軍の方で引取つてくれないかといふんだ。』

『誘拐した男は捉まつたんでせうか。』

『ねえ、行つてみなければ、わからないが。』

本營を出て半町ばかり歩いた時、故郷の郵便局長が四辻の所をこちらへ、やつて來るのを見た。私は今日彼と會ふ約束をしてあつたので、伊藤君に別れて食事を一緒にすべく築地の方へ出た。それから四週間程後に伊藤君に會つて、三人の田舍娘の話をきくと伊藤君は吃り／＼こんな事を言つた。

『三人の娘は奈良縣の月ヶ瀬梅林附近の産れで、都會へ出たい出たいと思つてゐる所へ、四年前に其村から東京へ來て、洲崎の梅川樓で娼妓を勤めてゐるうちに關節炎で片脚の自由を失つた爲、廢業して其所に働いてゐる妓夫の妻になつた女が、千住三の輪の新開地に銘酒屋が五六軒出來たので、郷里から若い娘を

[illegible]

で出させて伴れて來たんだが、東京へ着いた其晩から十圓宛と十五歳の三人の小娘に淫賣をさせたんだよ。たつた四十錢づゝでさ。可愛さうな娘たちは、あまりの意外に驚いて、直ぐさま其の銘酒屋を飛び出さうとしたが、さて途はさつぱり判らず、懐に一厘の金も無いので、可哀さうに三人は十五日間そこでひどい目に會はされたのさ。其のうちにたうとう一人の娘が、そこを逃げ出して東京驛まで辿りついたが、一文無しでどうする事も出來ないので、大聲を擧げて泣き出したんだ。それを驛内の巡査が取調べた結果、また二人が三の輪の銘酒屋に居るといふことが知れ、早速其の關節炎夫婦を呼出し、嚴重に取調べた末、娘たちをも日比谷警察署へつれて來て、僕の方へ引渡してくれたんだ。僕は早速病院へつれて行つて診察を受けさせるともう强度の疾患を受けてゐた。そこで治療を受けさせて、郷里へ送り還してやつたが、關節炎夫婦は誘拐罪で二年と一年の懲役に處せられましたよ。』

『さうですか。上京した時すぐ捉まればよかつたに。』

『それからあの時、今一通の手紙が來てゐたでせう。あれは一寸喜劇でしたよ。』

「どんな事をしたの？」

「淡水縣の生れで、吉原揚屋町のある大きな貸座敷に勤めてゐる「かし九」といふ娼妓から、私は昨年の暮に、父の大病の爲め、段る日掛に數されて吉岡の前借で六ヶ年の契約で、こちらへ來てゐるのだが、來て一ヶ月もたたないうちに身體を惡くしてしまひ、今日はよろしいといふ日も無い有樣故、このまゝ六年もここに居ては生命が無いから、思ひ切つて廢業したい。一昨日午前中に伺ふから是非聞けてくれ」といふ手紙だつたのです。で、昨日外出しないで待つてゐると、いつ迄來たか、待つてゐるとなかなか隣の者でした。併し、なるべく早速同郷の日本堤署へ同行すると、警察署は同じ所で樓主を呼び出して應對させました。樓主が一人の娼妓をつれてやつて來ると、かし九は樓主に對つて、長らくお世話樣になりました。誠に有りがたうございました。私は不幸にして虛弱でございますから、今日限り御暇を頂き廢業を申請致します」と本氣で言ひましたよ。ところが此の樓主も案外わかつた人間と見え、「さうですか」と云つたきり、默つてゐました。然るに樓主が連れて來た娼妓が人の惡さうな顏をして、「旦那、こいつはひどい奴ではありませんか、大金を旦那樣からお借りして込んだ揚句の病氣を種にして、自由廢業するんですから、」[illegible]實に大[illegible]奴です。旦那は[illegible]好きで[illegible]なく、警事[illegible]様にすれば[illegible]して[illegible]置いて。

こんな事になつたのですよ」と云つて、いきなりかし九の首に[illegible]る自分を引きはいて、自由にかたに[illegible]つた[illegible]。でも取りあげなきやあ」といふと、かし九も負けぬ氣で「今日から自由の身になるのだ。旦那でもいゝから」といつて、警官の前で契約を切つたよ。たうとう名譽問題といふことになり、僕と一緒に警察を出して本當の方へ歸りかけたが、その娼妓は[illegible]くどこまでも尾行してゐるんです。もう公然廢業をしてあるのに、怪しからん奴だと思つてゐたが、たうとう本當まで默いて來て、僕がドアを閉めようとすると、無理に身體を斜にして入つて來るので、「君に用はない」[illegible]思議にもかし九が「先生私はあの[illegible]から[illegible]やうに云ふので[illegible]二人は急に顏を[illegible]て、僕の方に頭を下げて「實はお恥かしい事ですが」と來たんですよ。僕は直ぐ[illegible]わかつた[illegible]警察署で樓主を前にあれだけの芝居を打つ[illegible]なら、僕からはこれから[illegible]ない[illegible]歸るわけにも行かないだらうから、これからさきどうするのか」と聞くと、娼妓も[illegible]になつた。「私は今日直ぐ吉原へ歸り、一月ばかり[illegible]が此の冬[illegible]私[illegible]

[illegible]

[illegible]一箇所に一[illegible] 決して[illegible]

さいませんから御安心下さい。」と云つて、二人は手に手を取つて起ち上つたんです。僕も可笑しくなつて、何でもい、無事に廢業出來たんだから、これからは兩人とも眞面目になつて、本道を歩くんだよ。」と說いたら、妓夫君は涙ぐんで、「それはもう百も承知してゐます。維新前は妓夫や傭人が娼妓と關係をすれば、二人は傭人たちの前に引据ゑられて手ひどいリンチを受けたものです。そして丸裸で追つぽり出されたんですから。」と云ふんでせう。リンチといふ言葉を知つてゐる位だから、丸きり無學な男でも無いと思ひながら外へ送り出してやると、出口の所で男がかし九に羽織を着せてやるぢやないですか。樓主の前で怒鳴りながら引き脱いだのを、實は樓主に取上げられないやうに妓夫君が保管して自分の羽織の下に、大事に隱してゐたんだネ。」と云つて、伊藤君は口を開けて笑つた。

「社會の人は、その妓夫君の小さい行爲を大變悪いやうに言つて、樓主の搾取を罪悪だとは思はないんだネ。」

私がさういふと伊藤君は深くうなづいて、

「さうだ。これから後あの二人を導くのが僕の責任だ。自廢といふのは僕達の考へてゐる事業の端緒さ。」と云つて、考へ込んだ。

それは大正三年十月二十一日の事であつたが、それから半年

[illegible]

手内職をして[illegible]

たと伊藤君は答へた。[illegible]其中の一人[illegible]子を産んだ四人の中に、此のかし九がゐるのだと後で聞つた。

其時伊藤君は樓主が、かし九の親の家に差押への執達吏を差向けたが、天井裏の鼠同様差押ふべからざる物品はかりで空しく引揚げた話をして、自作の狂歌だといふのを口吟んで聞かしてくれた。

・差しおさへ無念にらしの玉手箱　あけてくやしきあばら屋の中

此の外に四首の狂歌を紙ぎれに書いて見せてくれた。

「自由廢業の勸」を讀んで廢業せる女に

なさけある勸めを讀んで籠の鳥　けふより自由の空にさえづる

娘を娼妓に賣らんとする親へ

落ぶれて貧苦迫きて困るとも　むすめを苦に沈くは人鬼

娘の廢業を望む親心

悪銭の身につく筈はけしてなし　むすめの噂を聞くにつけても

あはれむべき娼妓よ

人鬼のわなにかゝつて浮ばれず　[illegible]く利増す借金の淵

僕の胃の腑

岩藤雪夫

胃の腑に就いて考へる時、何時も私は自分の生れた當時の民衆の胃の腑を思ふ。

私が臍の緒を切られたのは日本が帝政ロシアに宣戦布告をして間もない明治三十七年の初夏であつた。日本の民衆は戦争の××に苦しんでゐた。

そして胃の腑につめる食物に喘いでゐた私の母は、八ヶ月の月足らずを慈善施療病院で見事に産み落として、産褥熱で死んだ。だから私らすぐさま胃の腑に就いて苦しまねばならなかつた。丁度、當時の全××の貧困大衆が米の飯に苦しんでゐたやうに——

が、赤ん坊の私に飢ゑ死への路を歩ませなかつたのは施療病院の院長であつた。彼は私の隣人の貧しい父の代りに私を行方不明であつた父の同志の家にあづけた。それは中部地方小田原在の小作人で、矢張り生れてから満たされた事のない十一人の胃の腑が米にかつゑてゐた。

地方で活動してゐた父はそれを知つて私の為に毎月二回づつ送つて来た。然しその家は余まりにも人手が足りなかつた。よく私は半日以上にも渡つて放り出されてひい〳〵乳を求めて泣いてゐたさうだ。

私は腐れミルクを飲まされた。米の飯が食へる様になるまで何年、私は腐れミルクで腹を壊した。私の後年的胃腸病の原因は此處から發したらしい。胃の腑が豆みたいに小さいのもその故だ。

腐れミルクの時代が終ると黒麦飯の時代が来た。朝の麦飯の中、十時より三時のお茶うけ、定まつて黒麦飯の塊だつた。

私はさういふものを胃の腑につめ育つた。で私と多くの貧乏人の子供がさうであるやうに食慾が湧かなくなつた。

六歳の年に初めて東京へ連れて行かれた時も、生れて初めて目にしたことのない美しい菓子を片つ端から食道に送り込んだ。そして下痢をした。癒ると又食つた。それはどんなひどい目に會つても少しもこりない支那人の態度によく似てゐた。珍らしい食ひ物は(といつて決して上等なものは食へなかつた)一切合切食つて見ないと寝覺めが惡るかつたのだ。

十五歳の頃だつたと記憶してゐる。

私は鐵工場見習仲間の家に三階を間借りしてゐた。或日工場をひけて歸るとその家の五歳と三歳との二人の子がケチな駄菓子を奪ひ合つて大聲で喚き立てゝゐた。自分の餓鬼の時代を想ひ返した私はすぐさま二人を裏通りの駄菓子屋に連れ込んで、ふんだんに食はせてやつた。みつ豆——乾芋——ミカン水等々……を、

翌日其處の親爺に送風器(ブロワー)みたいに奴鳴りつけられた。二人の子が腹下しをしたからだつた。

私は嘲つてゐた。

「俺の胃の腑だつて他人様の胃の腑だつて變りつこはないんだ。」と思つてゐたから。

聲變りがする十六歳頃は鐵道院の錦糸堀工場の仕上工見習をして六十五錢の日給だつた。その年頃の者は誰でもさうだらうが、自分と

——これこそ俺の生涯の最初で最後の大きな野心だ、これこそ能きるだけ俺は生きて行かねばならない…………——

など、下らない事でもよく考へたがるものだ。けれ共その頃大た苦惱も一箇二錢位の味のいゝ大福餅でも胃の腑に落すと、けろりと忘れて終ふ。私の十六七歳もそんな時代であつた。

鐵道院は、全日給額の内なら何んでも傳票で購入出來た。大人は炭や米を購つた。私達少年工は毎日、日給の半分はパンを買ひ喰ひして、月末にはフランテンになつた。

間もなく酒の味を覺え出すと、餅分は私の慾望から見捨てられた。そして私は矢張りアルコールへの戀の爲に胃の腑をたゞれかしながらフランテンの毎月を繰り返してゐた。

だが、一と渡りの仕上職工になり切つた時分から私に失業と飢餓が時折、襲ひ初めた。何故なら、やたらに職工長と喧嘩したり、その頃の社會主義的出版物を讀んで無茶な宣傳をしたりしたからであつた。

もう當時は私の胃の腑の内面にはニコチンがココア色に浸みてゐた。空つぽの胃の腑が痛んで眠られない夜中に、ふと目を覺して火の氣のない火鉢の灰を引つ掻き廻してバットの吸殻を

一生懸命に探した情ない恐怖のあるのもその少年時代だった。

私はよく、自分が大盗賊になって大銀行に忍び込み金貨を持ち出した夢だの、途上で大きな財布を拾った夢だのを見て、人間の胃の腑の動く方向に漠然として怖ろしさをさへ感じたりした。さういふ矢先に、石炭倉庫に墜落した低脳な人間の胸が密貿易の件で咎められたりしたのが始まって、偶然に組合が働いて中に飛び込んだ。然しその頃の私は未だ稚気を面に浮べてゐる若者にすぎなかった。

皆がこんなふうに言ふ組合の仕事を手伝ってゐると中々思ふやうに内にも外にも自分の行けなかった。それは可成り苦るしい我慢ではなかったが私は不断しれ間の[illegible]へてゐるた。

陸で、私に取って間もない世界には数限のない空っぽの胃の腑が暮しんでゐた。日本ではその空っぽの胃の腑の数に与る××にだした人々が自由中国に[illegible]支人民衆を[illegible]××××××[illegible]間も無く××××であるといふ理由の下に××された。

従て[illegible]水が消えたやうに微力になった。

私は既にもマドロスになって陸から離れた海に、あの青い海を持っては帆船でもいいからと思ったが……

それに私が役に勝手る[illegible]の自由でも持がってゐると空想するのもそのくせであった。

海にはトールドミニ程に[illegible]リックで渡ると異が動いてゐた。そして時には大半洋を跨ぎする位の黒も立った。その黒に浮ぶ××中の人々の××[illegible]国際的資本の色彩の身質いをした船首で少し離い波を食らふとサイドの腐蝕した鉄板にほこぽこ、ぽつり／＼坊みたいな穴が開いた。

船舶は沈み沈んだ、沈む毎にマドロスが溺れた。それは工場の機械に殺されるよりもっと悲惨である。だから海には色々なことがある――

私は海で死ななかった。

然し私の胃の腑は、遂にセーシャカになって終った。胃も腸も人間の役力を失って了ったのだ。

それはかういふ訳だった。

春日丸、[illegible]の航路、付近[illegible]して大きな半洋岸に[illegible]同じだ。

北海の四月、左側はオホーツク海の水山の氷山が浮いて流れ右側は[illegible]の陸で[illegible]の怖ろしい[illegible]であった。

海はねばっこいるい[illegible]だった。船は[illegible]ように走ってゐる。

そして[illegible]の[illegible]した水の一隊に[illegible]ないからなかった。[illegible]水面[illegible]可く[illegible]に[illegible]力が

足りなかつた。

キャプテンは氷山群の横線と直角に航路をとつて太平洋の中央を指してホールスピードで船を走らせた。石炭は最大限度に節約を命ぜられた。ストーヴもたく事が禁ぜられた。

『暖流にぶつかるまで逃げるんだ！』

とキャプテンは船橋(ブリッヂ)で唸つてゐた。

が私達は寒くて我慢がならなかつた。ロープもリギンも結氷して直径五吋位に太くなつてゐる零下十三度の寒気であつた。

船中が氷山の恐ろしさよりも先づ寒さの為に慄えた。すると機関長(チーフエンヂニア)が言つた。

『みんなエンヂン場へ来い、今日は特別だから酒を飲ましてやる』と。

私達は一言で女を口説き落した様に喜んで機関場(エンヂン)へ集つた。

チーフ・エンヂニアは皆に一杯づゝのねばつた鉱石臭い水を飲ました。それは××に××を混じたものであつた。みんなそれを飲んだ。中でも飲ん平の私ともう四人はその××酒を四五杯を腹に流し込んだ。

其(それ)は酒よりもずつと体を暖くする効力があつた。で船中のマドロスは流氷圏内を逃れ去る迄をぬく〳〵と働く事が出来た。

然し船が青森の鮫に入港した時に私達の内の九人が石油××になつてゐるのが発見した。皮下の静脈にこぶ〳〵が出来、食道は[illegible]した[illegible]酒と胃[illegible]で小学校読本にある[illegible]トライキの話みたいに——胃の腑が生きながら[illegible]いといふんだ、ストライキを起された工場の機械が動かなくなつて資本家共が悲鳴をあげるのと同じであつた。

私達九人も悲鳴を揚げて下船した。

それからずつと、私の胃は毎年春の終頃になると痛んで活動を中止したがる。酒を注いでやると少しは動く、私はもう完全なアル中になりつゝある。

胃の腑！　胃の腑！　私は何を怨んでいゝんだか解らない。

船を下りて間もなく又私の飢餓が続いた。

それは或る工場の争議敗北の後だつた。

勝手に一緒になつた私の若い妻は妊娠してゐた。それだのに稼ぎのなくなつた私は毎日妻と胎児の為に何の滋養分を運ぶ事が出来なかつた。妻は近所の縫ひ物をした。私の胃の腑は空つぽだつた。妻の胃の腑も空つぽだつた。胎児のもさうだつたらう——

二人と半人は毎日胃の腑を空つぽにして唾液をのんで生きた。

その年が暮れて、正月の四日に子供が生れた。

男の子だつた、可愛い。だが腹の傍に穴が開いて、大小腸が石のやうに硬く露出して
ゐる。

醫師は云つた。

「母體の營養不良のための發育不完全……××縫合不完全畸形兒……です、非常に珍らしい……」と。

私はこの第一の私の模型の姿に涙をほろほろとこぼした。

醫師は續けて語つた。

「氣の毒ですが、このお子さんは、二十四時間以上の生存がむづかしいです。大小腸の活動機能がありませんから……」と。

それは私の石油中毒を圖したやうなものであつた。

「オヽツ！いまいましい……」と私は呟いた。「いつそ私は此事に[illegible]……」

父も母も子も胃の腑が呪はれてゐた。

それから理由もなく私の子は丁度醫師が言つたやうに二十四時間も[illegible]ない内に[illegible]死んだ。

「何の用、貧の……兒などを産んだ」

醫師は云つた。

妻は、いやだ……と云つた。

私と私の[illegible]が蒲團の中に[illegible]。

そして私は……十日も泣けた。

滿か乳色にこめた夜、私は晴着を着せた子供を抱いて同志と二人で醫師の家に行つた。其夜の月の色白さは今でも忘れない。

誰が私の兒を殺したのか、私は知つてゐる。

誰が私を石油中毒にしたのか、私は知つてゐる。

子兒を抱いて歩きながら私は

「こら坊や、お前の×をきつと取つてやるぞ！」

と幾度も胸の奥で唸つた。

このお話にならない馬鹿な事實が決して私や妻や、私の三十圓の畸形兒ばかりではないといふ事を私は知つてゐる。

私は、若し人間が胃の腑を持つてゐないとしたらどんなに幸福だらうと、時を考へる事がある。[illegible]

私達は早くすべての胃の腑が滿足し得る社會に×へねばならない——

私の石油中毒の胃の腑！

三十圓の畸形兒の胃の腑！

發電所の……の……の胃の腑！

不×××の勞働者、農民の胃の腑！

胃の腑の空つぽな人間が何の遠慮もなく大道に落ちたパンの切れ端が拾へるやうになんなら、……のある所にへ×すればいいのだ。（一九三一・三）

プロレタリア戀愛學

——覺え書風に——

林　房雄

「フランスには何故姦通が多いか?」

「それはフランスがカトリツク教國であるからだ。」——とエンゲルスは答へてゐる。

フランス人が生來浮氣だから、フランスの空氣がドイツより南國的だから、などとそんな風には彼は答へてはゐないのだ。

今日のブルジヨア的結婚には二つの樣式がある。一つはカトリツク式、一つはプロテスタント式。

カトリツク教國では依然として兩親が若い息子のために相當な女を世話する。親の意志で出來あがつた若い一組。——その結果はいふまでもなく、現在の一夫一婦制に内在するあらゆる矛盾の、完全な露出である。夫の側では盛んなヘテリズム(處女誘惑——娼婦買)、妻の側では、×んな姦通。

カトリツク教會は、離婚を禁じてゐる。おそらく、姦通と死につける藥はない、とでも諦めて、結婚の内部に於ける姦通を××するためであらう。

プロテスタント教國では、普通ブルジヨアの息子は、大なり小なりの自由をもつて、自分の階級から女を選擇することをゆるされてゐる。從つて或る程度の戀愛が、結婚の基礎をなしてゐる。そして、さうすることがプロテスタント的僞善から見て、形式上必要であると考へられてゐる。從つてこゝでは、夫のヘテリズムは、カトリツク教國よりもいくらかゆるやかであるし、妻の姦通もそれほど一般的でない。その代りにこの國の家庭では、最もうまく行つた場合にも、外見平和なその實甚苦しい倦怠が支配する。プロテスタント教國のブルジヨアは、この倦怠を俗物らしく「家庭の幸福」と呼んでゐる。

プロテスタント教國の代表はドイツであり、カトリツク教國

の代表はフランスだ。

ドイツの小説では、恋は不和な結婚に終り、フランスの小説では、恋は不満な結婚から始まる。ドイツの小説では、若者が乙女を得、フランスの小説では、夫が角を得る。平たくいへば妻に密通されるのだ。

日本のブルジョアの恋愛並びに結婚の様式は、どちらかといへば、カトリック的である。そこでは、両親の意志が絶対であり、従つて若い當事者同志の恋愛は害であり、強制された便宜的な結婚がすべてである。

そこで日本のブルジョアジーの中のプロテスタント的要素が、反抗の聲をあげた。その理論的代表者が、近代の恋愛觀——（著者厨川白村）であつた。

彼は恋愛なき結婚は罪悪である、といふ標語の下に、若いブルジョア恋愛並びに結婚道徳と大胆な論を行ひ、ブルジョアの若いゼネレーションから圧倒的な支持を得た。

彼は偽ブルジョア道徳の偶像を、徹底的に破壊する事によつて、新時代の生んだブルジョアジーを代表することが出来た。が、彼の結婚論は、要するにカトリック的な恋愛並びに結婚に對するプロテスタント的それの修正にすぎない。

恋愛を基礎にして成立した理解と理智にみちた平和な新家庭、郊外の文化住宅、ドイツ趣味のカーテンとペンキ塗りのアメリカ松、そこを支配するものは、俗物的な家庭の幸福——お互ひがお互ひの生命をすりへらす耐へがたい倦怠！

しかも、注意を要することには、この「平和なる倦怠」は、ブルジョア恋愛の最も成功した最良の場合なのだ。

ブルジョア社會では、婦人にとつて結婚は明かに生活の手段である。したがつて結婚の基礎としての恋愛も、彼女等にとつては生活の手段である。

聰明な男性がそれを欲すると否とにかゝはらず、聰明な女性がそれを欲すると否とにかゝはらず、彼及び彼女は、ブルジョア的生活様式の所持者である限り、男が財産所有者であり、一家の扶養者である限り、そして女が法律上経済上に無能力者である限り、結婚は女にとつて生活の方便であり、恋愛もまた生活の方便となる。

ブルジョア結婚様式はかくして明白な論理に、恋愛の買手、恋愛の仲買業者に、女の結婚に、恋愛の買手に、恋愛の大量生産者、恋愛の[illegible]までに[illegible]

[illegible]

――では現代社會に於いては、どこに一體そんな結婚があるか？――

「それは現代の被壓迫階級、即ちプロレタリアートの間にのみ存在する。」――

とエンゲルスは答へてゐる。

彼は厨川白村のやうに「高い教養」或は「男女の正しい理解」の中にあるとは答へてゐない。

何故か？プロレタリアートといふ階級の間には、ブルジョア的財産が全く存在しない。ブルジョア的な一夫一婦制と、男性の支配は、この財産を安全に保存し相續するために、そしてこの財産の故に生じたものである。

男性支配の保護するブルジョア民法は、只財産所有者のため及び彼等がプロレタリアートと巧みに取引するためにのみ役立つ。民法の使用を受けるには、第一金が掛る。勞働者は貧乏だから、彼の妻に對する關係に就て、民法の適用を受けることが出來ない。だからこの階級の中では、全く異つた個人的並びに社會的關係が支配する。のみならず近代工業が、婦人を家庭から勞働市場及び工場に移し、彼女に獨立の社會的人格を與へ、場合によつては、家族の立派な扶養者たらしめてゐるため、プロレタリアの家庭に於ける男性支配の最後の遺物は、その存在[illegible]

ただ、プロレタリア、家庭に[illegible]熱烈な愛情を計きあつてない、互ひに唯、貞操を守り合つてゐる場合にも、それはブルジョア的意味の一夫一婦制とは決してない。エンゲルスの言葉を借りれば、プロレタリアの結婚は、語源的意味では一夫一婦制であるが、しかし決して歴史的意味に於ける一夫一婦制ではない」のである。

ブルジョア的一夫一婦制は、財産の存續と男性の支配とを前提とする。それには、夫のヘテリズムと妻の姦通が永遠の隨伴者である。しかし、プロレタリアートの場合には、先づ財産がなく、女もまた男子と同資格の勞働人であるがために、戀愛もまた純粹な形で現れる。戀人を選ぶ際に、男或は女は、相手の財産によつて左右される必要がない。嫌な奴と無理に戀愛の眞似をしたり、結婚にまでひきづりこまれたりする必要はなく、裸一貫で愛しあへる。

結婚してから後も、妻は獨立人であるから、愛情が消滅し、互ひの家庭生活が、うまくいかなくなつた場合には、自由に離婚が出來る。プロレタリアにとつては、戀愛及び結婚が罪惡でないやうに、離婚も決して道德的罪惡でない。

しかし、以上のことはもとより個別的な場合によることである。現在のプロレタリアートの男女關係。それは右に述べたやうな新しく價値ある種々な點を明かに含んでゐるとはいへ、それは前半狀態に於ける特徴、ともいふべきものであつて、實際にはあらゆる資本主義による害惡と、前半狀態に於ける混亂を含んでゐる。

また、プロレタリア同志の戀愛に於いては、ブルジョア的な金錢戀愛、賣買結婚がないことは事實である。しかし、貧乏な若者同士の戀愛は、その完成のためには、あらゆる障害をもつ。村の、そして町内の處女が、都會の工場に吸收され、または酒場かカフェー、ブルジョアの家庭等に送りこまれたために、青年がその戀愛の對象を失ひ、止むを得ず不健康な習慣にはけ口を求めるのは、殆んど全國の農村及び工場街の普通の狀態になつてゐる。

同時にブルジョア階級の男子は、プロレタリアの處女を、金錢によつて獲得することを當然の權利と心得てゐる。この金錢的誘惑はプロレタリアの處女及び人妻を、精神的に惡化させる氏へ、そして下女の奉公といふ名の下に、彼女等を婦人としての方面に導く代りに、不當にブルジョア的金錢戀愛の枠内に引こんでしまふ。

結婚した後にも、女は條件の惡い過勞な工場勞働から免れようとし、男はまたブルジョア的偏見から脱しきれないために、妻の勞働を嫌ふブルジョア的な虛榮心から、結婚と同時に妻を家庭にとぢこめてしまふ傾きがある。このために舊い一夫一婦制の特徴である女子虐待が、種々な經濟的精神的條件に加重されて、却つてブルジョアの家庭よりも激しい程度に、プロレタリアートの家庭を支配する場合がある。工場に於けるプロレタリアである夫が、家庭に歸ると妻に對してブルジョアとなり、妻は惨めなプロレタリアとして、二重の條件を強ひられる。といふやうな現象が起りかねない。

不斷の貧乏、專制的な失業、惡い住宅、次々に生れる子供、政府的思想に目覺めたが故に支配階級の壓迫、――これらのものが、不斷にプロレタリア男女の生活を、從つてその愛情をおびやかす。愛する者同士は、これらの外的條件の故に仇同士になり、互ひの愛情を墓にまでもつてゆかなければならない場合にしばしば出くわす。

資本主義社會下に於ては、プロレタリアートの戀愛、結婚、生活は、決してその完全な形で現れることは出來ない。

性生活の貧窮、戀愛不安、性的苦惱、性的無能が生れ出る、

將來の豫想に就ていへば、元來ブルジョア的な一夫一婦制度は、ブルジョア財産と一しよに發生したものであるから、このブルジョア的財産が××されゝば、一夫一婦制もまた、歴史的意味に於て、當然消滅しなければならない。

然らば、次に來るべきものは、「亂婚」か？

僞善的な一夫一婦論者で、しかも、裏面に於ては亂婚の實踐者であるブルジョアと彼の息子及び娘は、亂婚といふと、道德的に眉をひそめるか、または、嘲笑的表情をもつて、にやりと笑ふ。

しかし、お氣の毒ながら、プロレタリアートの社會は、亂婚の社會ではない。

もう一度エンゲルスによれば、それは完全な意味に於ける、即ち充分發展した形に於ける、一夫一婦制の社會である。生産手段が社會的財産に轉化するとともに、賃勞働もプロレタリアートもなくなる。從つてまた、一定數の女子が金錢のために身を任せる必要は消滅し、男子もまた、戀愛なき肉體を金で買ふ必要を失ふ。

男子の狀態が變化し、女子の狀態が變化する。第一、生産手段が共有財産に移るとともに、個々の家族は、社會の經濟的單位たることをやめる。子供の養育及び敎育は、公的事務となる。社會はその嫡子たると私生兒たるとを問はず、すべ[illegible]ての子供の世話をする。だから、現在すべての處女が自分の愛する男に躊躇なく身を任せることをさまたげる、最も主要な道德的並びに經濟的原因がなくなるわけである。從つて社會的には、傳統に囚はれない。自由な戀愛、自由な性交、從つてまた舊い貞操觀、舊い純潔觀、處女の名譽―及び「女性の恥辱」に關して、現在よりずつと寛大な輿論が生れてくるに相違ない。

かやうな新しい狀態――即ち男性支配が除去され、離婚の自由が確立され、戀愛が眞實の姿で作用し始めた狀態を、ブルジョアジーは亂婚狀態といふ。

それを亂婚といふのは彼等の勝手だ。しかしほんとのところは、彼等が怖れてゐるのは、決して「亂婚」ではなくして、(何故なら、彼等自身現在すでに最も悪い意味の亂婚の實踐者なのだから。)かうした新しい狀態をもたらすためには、彼等自身の存在の基礎が一掃されなければならない、といふその事實の方である。

だがしかし、現在プロレタリアートが生活してゐるのは、もう決して純粹な資本主義社會のみではない。といふ意味は、ソヴエート・ロシアの出現と同時に、彼等は、彼等自身の社會へ

[illegible]

させる[illegible]

ソヴェート・ロシアに於ける男女関係、恋愛関係、性関係、両性の関係、結婚、離婚の制度は、たえず吾々の世界のプロレタリアートのみならず、友人前田河広一郎も、同時にプロレタリアート、殊にその[illegible]の思想を如何に好奇心いっぱいに関心をもって[illegible]ゐるに違ひない。

革命の時代、非常な性的混乱がロシヤを支配したのは事実である。[illegible]制度の破壊[illegible]に對する[illegible]主義

日本に伝へられた、種々なソヴェート性的[illegible]一大国[illegible]の[illegible]いくつかの[illegible]的[illegible]観察が表現したものであらう。

革命と同時にブルジョアの性道徳、恋愛、結婚の習慣は、権力を得たプロレタリアートの[illegible]世代によってあらたにブルジョア文化[illegible]されなかったが、しかし、ブルジョアの性道徳に代るプロレタリアートの性道徳につくられなかったプロレタリアの若い男女が直面したものは、決して新しい時代の恋愛や性関係ではなく、古いブルジョア的な無秩序な関係に外ならぬ。ボヘミアン式の自由恋愛、又は両面一[illegible]

[illegible]其の他に関しては、性的衛生まさに恋愛の要求の満足は、一杯の水を飲むやうに簡単な些細な事柄である。といふコロンタイ理論が、マルクス主義の仮面を被つて横行したのもこの時代である。

レーニンはこの状態を「思想上の不健全な暗黒時代」と名付けて、多くの青年が[illegible]正しい方向[illegible]へ入った[illegible]古い関係が破壊され、政治的経済的革命とともに、性的革命、結婚革命が進行してゐるといふことは、プロレタリアートの中に、多くの混乱が起ったことは、一種の[illegible]ことである。

吾々は　レーニンはいつてゐる　プロレタリアの内部に[illegible]的な性道徳論を説教し、而もそれがブルジョアの道徳でもある。押しつけようとするやうな態度をとったことはないつもりだ。しかし、個人は水飲み理論によって代表されるやうな現在の性的頽廃は、それは決して新しい性生活ではなく、純粋にブルジョア的で、まさしくブルジョア的腐敗に外ならない。吾々共産主義者は、もとより、恋愛の自由を主張する。しかし、この「水飲み理論」には、恋愛の自由とは何の関係もない、[illegible]

ない。

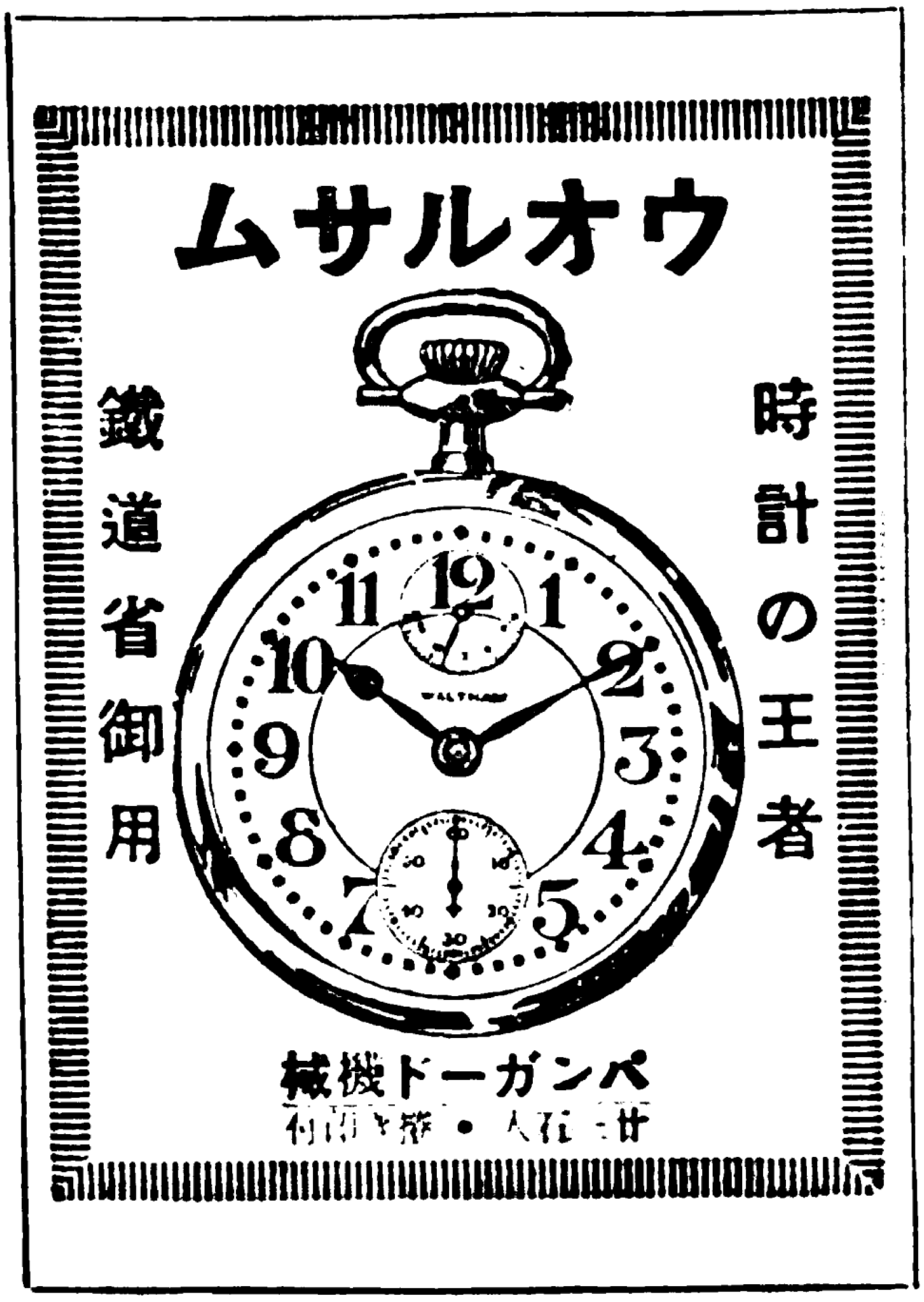
エンゲルスは、原始人を古代人の無秩序な一般的性慾から、一夫一婦制の發生を通じて次第に個人的戀愛にまで發展させられ、高められたことを（ブルジョア的一夫一婦制の缺陷をきびしく指摘しながらもなほ）人類の非常なる進歩として認めた。

吾々は戀愛を、單なる肉慾と區別しなければならない。肉慾は生理學的な個人的なものである。しかし戀愛は、兩性關係は、二人以上の人間の間に行はれる現象で、社會的なのである。單なる生理學によつては解決出來るものではない。ブルジョア唯理說は、この種の誤りをあへて犯してゐる。「水飲み理論」もその現れだ。

たしかに咽喉が乾いたときは、水が與へられなければならない。だが普通の狀態にある普通の人間が、大道で寢たり、汚い泥水を飲んだりするだらうか。外の大勢の人が飲み荒して汚した一つのコップで飲むだらうか。

のみならず、水を飲むことは個人的なことだ。だが戀愛に參加するのは二人の人間で、從つてそこに第三のもの、社會的利害關係、社會に對する義務が生れて來なければならない。プロレタリアの戀愛關係、性關係は、決して單なる生理學的若しくは經濟學的見地から理解さるべきではなく、この社會の組織的見地から理解されなければならない。

さういつたからといつて、わたくしは[illegible]心[illegible]には、レーニンは禁慾主義を說教したのでは決してない。共產主義は完全な戀愛生活からくる力と戀愛の關係を奪らなければならない。たゞ過渡期のロシアに一しきり亂れた性的肥大性が、古いブルジョアの性關係性生活に比して、生活の歡喜と力を減少させる點に於て、五十歩百歩であることを指摘したにすぎない。健康な肉體、健康な精神、吾々は坊主も、ドン・ジュアンも、幸福な中庸人としてのドイツの俗物も、決して必要でない。



革命には大衆の個々人の力を集中し高めることを要求する。革命はダヌンチオの小説のデカダン的ヒーローやヒロインにふさはしい放埒な態度を決して容赦しない。性的生活の放恣は、ブルジョア的であり、崩壊頽落の現象である。

——では新しいプロレタリアートの性関係及び戀愛関係は？——現在の混沌期、過渡期にあるものか、明瞭な形を具へ、充分に姿を伸ばした時の有様は？

この問に對しては、吾々はエンゲルスと共に、かう答へることだけで滿足しよう。それは明かに將來の發想であり、一つの假說によるべきだ。ツヴェート・ロシアの出現以來、それは確かな可能性として、現實性への急速な接近を示しつゝあるのだから

エンゲルスは、「家族、私有財産及び國家の起源」の中で次のやうに述べてゐる。

「目前に迫つてゐる資本主義的生産終止後に於ける兩性関係には、如何なる新しいものがつけ加へられるであらうか。それは、新しき世代——即ち一生の間一度も金やその他の社會的勢力によつて女の肉體を買ふやうな場合に遭遇しなかつた男子、そからまた眞の戀愛以外の如何なるものからも男に身を任せたことがなく、又經濟的結果を恐れて、愛人に身を任せることを拒んだりする場合に一度も出遇はなかつた女性、——が成長したとき、決定されるであらう。かゝるゼネレーションが現れたならば、彼等は現在の個人が認めた義務を勇敢にふり捨て、それを無視してしまふであらう。彼等は彼等自身の實生活を作り、同時にそれに適應する輿論を作り出すであらう。」——（完）

女性文藝陣批判

大宅壯一

一

わが國の女性文藝陣は、今、雜然としてゐる。混沌としてゐる。古い要素と新しい要素とが入り亂れてゐる。「女性的」な比喩をもつてすれば、秋の花がまだ萎れないうちに、早くも春の花が蕾を破り始めたといふ感じである。

すさまじい時代のテンポをよそに見て、一昔前の「美」に限りない憧れを捧げてゐるものがあるかと思へば、大膽に、勇敢に、猪突的に、新時代を目がけて突進して行くものもある。見渡す限り、まだ何等の統一も整理もついてゐない。

すべては、プロレタリア文學運動勃興當時の「文壇」を想はせる。

二

まづ一番古いところでは、樋口一葉の延長線上にある江戸軟派系ともいふべき女流作家の一群がまだ保存されてゐる。長谷川時雨、岡田八千代、大村嘉代子などから、木村富子や紅鶴伯にいたるまで、閨秀世話物作者のほとんどすべてはこれに屬する。

彼等は、ときには小説も書くが、主として岡本綺堂や額田六福張りの歌舞伎臺本を書き、折々帝劇や歌舞伎座で上演される。内容はもちろん、女性の眼に映じた江戸の町人生活の描寫、といふよりはむしろ、從來の歌舞伎劇に現れたそれの複寫にすぎない場合が多い。江戸の消費文化が、女性の眼といふ紗絹(ヴェール)を通して、一層濃艶に現されるところに、現代人の古い要素にアッピールする陶醉的な興味がないでもないが、やがてそれは、歌舞伎劇や久保田万太郎の藝術と共に、亡びて行くべき性質のものであることはいふまでもない。

但し、この中で唯一人、長谷川時雨女史の雑誌「女人藝術」を中心にして、新しい時代に積極的に生きようとする氣魄を示してゐるのは新らしい。彼女の個人的事業などの程度まで成功するかは、今のところ未だ疑問だが、新しいジャーナリズムを代表するすべての要素を何等のこだはりもなしに取り入れて、それらとつながつて進んで行くならば、女の新聞記者といふべき[illegible]、しかも實際上の仕事をなしてゐる。この雑誌も、初めは非常なる好奇心の對象として迎へられ、悪評もされたが何にするやうなところが見えたが、近頃はだんだんと落着いて來て、漸次女性文藝陣の本格らしい活動が見つかつて來たやうだ。

三

次に、[illegible]は少し古いが、圓熟作家の間に位して中堅作家としての地位を確保されてゐるのは、野上[illegible]子と中條百合子の二人くらゐのものである。二人とも、すでに長い間かゝつて鍛へ上げて來た人だけあつて、内容的にも表現的にも、少しも危なげのない點には驚かされない。

だが、中條女史の點になると、野上の方は其の心境から彼女の熱情が[illegible]てゐるだけ、[illegible]、[illegible]なくなつて來る。[illegible]。

[illegible]の不成就[illegible]にされて、個人的の中に深く[illegible]作品[illegible]人間を見るやうな感じしか與へない。彼女も、作家としては、もはや相當の[illegible]に入つた様だ。

それに比べると、目下塗中の中條の方には、遙かに未來性がある。作品はまだ少ないが、「赤い[illegible]」は、觀察の鋭さからいつても、表現技巧の圓熟した點からいつても、久米正雄が四十年に書いた「シン・アミ」などよりも、ずつとすぐれたものだつた。最近接觸した新しい人々を除いた作家の中で、前途に將來を期待しうる唯一の人であらう。

宇野千代も、[illegible]のものには違ひない[illegible]の出來ない所を持つてゐる。だが、最近は、かなり[illegible]的傾向が[illegible]見たしくなつて來た。元來彼女は、どうも[illegible]イトの作家だが、近頃意識的に[illegible]に[illegible]した結果、新しい要素が入り混つて、彼女の[illegible]ヴァンプ的なところを出さうとしてゐるやうに思はれる。[illegible]たしかに時代的に[illegible]したいの[illegible]眺めて見ると、自分の[illegible]がはつきりしてゐるやうな氣がする。

[illegible]、[illegible]、[illegible]として[illegible]、[illegible]

[illegible]の上として[illegible]に[illegible]である。

な通俗作家であるだけに、僅に未亡人といふ言葉がついてゐるだけで あるから、つねに世間からは通俗作家と見られがちだが、誠に高 である。彼女は、今日の女流作家の中では相當達者の方ではあるが、どつちかといへば通俗的である。

四

女流通俗作家の中では、何といつても吉屋信子が人氣の點で第一位だ。人氣のない通俗文學の存在理由はないのだから、やはり彼女が第一人者である點に變りはない。出世作の「海の極みまで」から始つて「地の涯まで」「その他」「までぐづくし」の小說がどこまで續くかと思つてゐたら、突然フランスへ旅立つて、最近歸つて來た。これからまた例の同性愛小說を續々發表するであらう。

その他に、小寺菊子、北川千代子、網野菊等があるが、小寺には艶氣が足りない。北川や網野は少女小說の域から脫することが出來さうにもない。

要するに、これらの人々の讀者は、女學生か、それともせいぜい女學校を出たばかりの若奥樣で、世の中がまだピンク色に見える眼に、甘い涙を注射する程度のものである。

五

新しい女流作家に移る前に、女流歌人の一群に一瞥を與へる必要がある。

元々、わが短歌は、女性的な、といつていけなければ、女性に相應しい藝術樣式だといへる。それによつて、まだ明晰なテーマにまで成長しない刹那的情緒を自由に表現することが出來るから、組織的訓練を經てゐない女性の頭腦には、他のいづれの藝術樣式よりも受け容れられ易い。

古くは萬葉、古今の昔より、短歌の世界では、女性の進出が目覺ましい。現代についていへば、與謝野晶子、柳原燁子、若山喜志子、原阿佐緒、中原綾子、山田邦子、中河幹子、岡本かの子等、女性文藝人の大半は、歌人だといつてもいゝくらゐである。

與謝野は、デモクラシー時代には街頭にも立ちさうな情熱を見せたが、今では文化學院のマネッヂャーとして、ブルヂョアの子弟に最新式の「藝術教育」を施すのに忙しいらしい。

柳原も、戀を得ると共に情熱が失せ、その後小說その他に才筆を揮つてゐるが、さすがに生れは爭はれないもので、プロレタリア的な要素はちつとも出て來ない。せめて中間作家程度

の歌にもつくれないものだらうか。
その外、見返して来たところ、女流歌人と称せられる人々の中には、相当高級的技術をもつたものはほとんどないのは、どういふわけだらう。彼等の技術の内容は、ブルヂヨア夫人のあくびか、せいぜいプチ・ブル的抒情の讃美くらゐのものである。
これは蛇足だが、自分が先月「文藝春秋」に書いた一篇にも話さなかつた話になると、無産派の各者で、全国のブルヂヨア婦人達から生き佛のやうに崇められた九條武子と、自殺してブルヂヨア文學の宣傳者となつた有島武郎との間に、生前かなりな交渉があつたとのことだ。
かういふ風に見て来ると、女と短歌とブルヂヨア文學との間には、何か有機的な關係でもありさうな気がする。

六

短歌などといふ古典的な技術はさておき、今後は一日も早くに、女流近代派の方へ移らう。
この派の代表者としては、ささきふさ、大井さち子等がある。二人とも、小説よりは、ちよつとした気のきいた随筆風のものが得意で、いづれも問題にならない。
ささきふさは、[illegible]てゐる頃、初めて日本に近代的感覺を輸入した人である。近代女性の知的方面を代表しうる人ではあるが、彼女のインテレクトは、皮相的な役にもたたないから、少しも興味がない。細いプラチナの細線では時代を動かすことは出来ない。
大井さち子は、作家としてよりは、新居格がつくつた新造語「モダーン・ガール」の原型として有名である。彼女は感覺的であるといふよりは、感覺そのものである。他のすべての要素は、極度に薄くて鋭い感覺の中に溶けこんでしまつてゐる。いはゞ感覺的自動人形である。それにどこかにアブノーマルな野性味が加つて、彼女の作品を文學的によりは人間的にはつきり浮き上らせてゐたのであるが、最近はその精彩を缺いて来たやうである。それは、彼女が非近代化したといふよりは、一般的風潮がすでに彼女の水準に達して、それを突破し始めたからである。
その外、新しい女流作家としては、戸川静子、小金井素子、渡邊静枝、岡田禎子、若杉鳥子、城しづか、まだ〳〵いくらでもある。
戸川は、いささか低級に甘い通俗的な傾向を示してゐて、作品はいつもよくまとまつてゐる。ただ、作者自身を現はれる作中

人で、ぐうたら[illegible]に腰を[illegible]て、[illegible]てゐるのは、読んでゐてもどかしい。中には目覚しかかつた女性か、途中で腰折れになつて、新時代と旧時代の間を往復してゐる形である。

小金井は、新しい客間の装飾品のやうな、綺麗好みの令嬢か若夫人といつた感じである。一生懸命になつて美しく見せようとしてゐるが、まだパテー・ベービーの域を脱しない。

眞杉は、作家としてよりも、武者小路實篤の第何番目かの愛人として有名である。(なんと女流作家には「作家としてよりも×××として有名な」人が多すぎることよ!) 彼女の作品は、内容的には武者小路、形式的には志賀直哉の影響が目立つ。といふと大變な作家のやうに聞えるが、實はぐうたらな男女が数ケ月同棲して別れる場合に、「別れねばならぬ必然さを、素直に認めたい、二人がよりよく生きる爲めに、以後は唯一の力になり合ふ友達になる爲めに、別れよう。」といつたやうな、武者小路式お筆先で出て来る程度の影響で、娼婦型の大胆さはあるが作家としてはまだ／＼前途遼遠である。

岡田のいつか「改造」に出た戯曲は、思想的にも形式的にも新味はないが、ちよつとまとまつたものだつた。しかし「女人藝術」に出た「終列車」の如きは、全く馬鹿々々しいものである。

[illegible]
[illegible]開業記」といつたやうなもの[illegible]、小山[illegible]のコスモスだ。

これらの作家は、全體として、プチ・ブル的消費生活の上に咲いた草花にすぎない。其中には、或は洋種の、或は[illegible]の、或は濃艶な、或は清楚な、或は可憐な、それぞれの特色を示してゐるが、百パーセントに消費的な、即ち寄生的な[illegible]を表現してゐるにすぎない。

七

前述のプチ・ブル的近代派と、後述のマルクス主義的プロレタリア派との中間に介在するものとして、高群逸枝、望月百合子、伊福部敬子、林芙美子等、女流アナ系作家の一群がある。

男子のアナ系作家の大部分が、或はその「純情」に引きずられて童話に逃れ、或はその「叛逆」がブルヂヨアジーによりはむしろマルクス派に向けられて國粋主義的反動となり、或は組織的な指導精神の喪失と共にナンセンス化して、漸次解消しつつあるとき、女性文藝陣には今なほ多くのアナ系作家をもつてゐるのは異とすべきである。だが、よく考へて見れば、元来ア

八

讀者をこんな〳〵引つぱつて行く力をもつてゐる。あの點で大衆文學を書かせてみれば、きつといゝものが出來るだらう。

最近マルクス派に轉向した人、若くは轉向しつゝある人には中本たか子、戸田豐子、上田文子等がある。

中本は大膽なエロチツク作家としてスタートした。從來のブルヂョア的な、若くはプチ・ブル的な、つゝましやかさや羞恥心を思ひきつてかなぐり捨てることによつて、その存在をセンセーショナルにすることに成功した。從つて彼女の存在理由は、さうした破壞的な方面にしかなかつたが、最近左翼に轉換してからは、植民地を舞臺にして帝國主義の尖端を描くことに、興味を感じてゐるらしい。彼女は、そのひとでのやうな多角的な觸角と牛の胃袋のやうなすさまじい消化力とをもつて、何にでも飛びついて行つて、何とかしてそれを書きこなす不思議な腕と頭とをもつてゐる。『女人藝術』に出た「恐慌」は、この傾向を思ひきつて發揮した大膽な試みで、今のところはまだ整理が足りなくて雜然としてゐるが、小さくまとまりすぎてゐるもの、多い女流作家の中では、未來を期待し得る特異な存在である。

戸田は、大體中本と同じ型の作家である。從つて中本についていつたことは、ほとんどそのまゝ彼女にあてはまる。文章まで中本そつくりである。表現が、棍棒のやうに太くて、大膽で、率直で、物質的で、科學的だ。それはいゝことだが、度をこすと、空想な文字のコンビネーシヨンに溺れてゐるが、……[illegible]ごまかしてしまふやうな結末に陷いつてゐる。例へば、「恐慌のために」本田商店はアッサリ、變化し、消滅した。不燃質建築物は食ひかけのパンのやうに外廓だけを殘して……」といつたやうな表現は面白いが、すぐその後へ次のやうな文句が出て來ると、ちよつと辟易する。

「電線は不消化な纖維のやうに崩壞物の上に沈着し、彌壁した。棧橋は十二支圖の様にあやふやに河面を削伏してゐた。」

上田文子も、最近左翼的な立場を漸次明白に示して來た作家である。左翼文藝陣に女流劇作家がほとんどゐない今日、彼女が萬年博士の令孃としての教養を今後どの程度まで左翼的に生かしうるかは疑問だが、その眞劍さは、彼女のためにこの困難な道をきり拓いてくれるであらう。最近「女藝春秋」に發表した『母』は、今日家庭道徳の基礎になつてゐる盲目的な母性愛は、結局動物的エゴイズムにすぎないことを暴露したもので、テーマは面白いが、全體的にまだ現實的な迫力が足りない。

とにかく、この派の人々の多くは、まだ粗雜であつたり、未完成であつたりして、從來の「閨秀作家」に見られたやうな洗練性を缺いてゐるが、それだけに熱もあれば力もあり、洋々たる未來があるといひうるだらう。

九

最後に、女流文藝界を見渡して問題とする点は、これ等の女流は、殊に日本の女流は、不然といっていいくらゐ[illegible]的学術的[illegible]いが、[illegible]力をもつた評論らしい評論は書く人も見当らない。また専門の文藝評論家といつたものは、全然ないといつていいくらゐである。創作界からこう一寸考へても、全く寡黙の感が深いが、文藝は、女性の問題[illegible]であるのだから、[illegible]山川菊栄[illegible]女性の文藝[illegible]一人[illegible]であらう。女史近代派[illegible]には、随筆[illegible]と、明[illegible]近代派[illegible]人[illegible]一般評論になると、あまりに[illegible]的で、円[illegible]的で、[illegible]りかうな[illegible]何等[illegible]内容[illegible]いものが多い。

女人藝術その他では、時々婦人問題の論争が行はれてゐるが、今日[illegible]中に[illegible]してゐる[illegible]それは[illegible]評論に[illegible]てゐるやうな[illegible]ことよりは、新しい女性の文学が、[illegible]文学[illegible]作品について、どういふ[illegible]婦人が[illegible]評論[illegible]では、[illegible]問題[illegible]

い。今の問題だと、男性が、或はごく少数の[illegible]の高い女性にしか理解されないであらう。

このことは、中本たか子氏の文藝評論についてもいひうる。とにかく女性の評論の多くは、男子には[illegible]いとして、読者に訴へるよりも、むしろ自分の力量を認めさせることに重心がおいてあるやうな感じを受ける。従つて試験論文の域を脱しないものが多い。これは今後[illegible]前進しなければならない悪い傾向である。男子に伍する間に、もつと大人にならなければならない。

一〇

以上[illegible]として、最近の女性文藝界における[illegible]の[illegible]傾向が[illegible]である。一つは甚だしい[illegible]もう一つは著しい男性化である。この二つは或る部分では[illegible]しているが、大體において、前者はブルジョア的[illegible]的[illegible]り的文藝陣営[illegible]常に文藝の範囲内においていひうることで[illegible]女性[illegible]で、[illegible]それもつとも[illegible]において文学[illegible]てゐるにすぎない。[illegible]正しい[illegible]の[illegible]は、後者の中[illegible]である。

文筆懺悔

スタートの後悔

廣津和郎

私は自分の創作家としての生活を顧みて、いつでも思ふのは、最初のスタートが自分としては惡かつたといふ事である。

所謂文壇的に云へば、私のスタートは幸運だつたと云へるだらう。それは或雜誌にそれ程の覺悟がなく書いてゐた評論が、幸運にも世の注意を惹き、それがために小說家としての處女作を發表するのも、當時唯一の檜舞臺だつた『中央公論』に據る事が出來たといふのは、世の文學志望の青年達を羨望させる價値があつたと思ふ。(もつとも、正宗白鳥氏の有力なお力添へがあつたので、瀧田氏が『中央公論』に載せる氣になつてくれたのではあるが)

併し自分として考へると、その處女作たる『神經病時代』をあんな風に書いたのは、後の自分の創作家としての態度に、非常に惡い影響を與へてゐると思ふ。

私は『神經病時代』を書く時、全體を書き上げて、それを何度か讀んで見て推敲する、と云つたやうな餘裕を與へられなかつた。毎日十枚、五枚と、書いたゞけづゝを直ぐ中央公論社の使の人に渡さなければならなかつた。それが作家的修練を積んだ曉なら兎に角、最初の作を發表するといふ場合の新作家としては、隨分無理な行き方である。

さうして出來上つたものが、完全なものであり得る筈がない。

私はいよ／＼雜誌が發行されると、活字になつた自分の作の拙なさに、すつかりしよげ切つてしまつて、頭から蒲團をかぶつて、一日寢てゐた。――その中にポツ／＼とそれに對する批評が出始めた。大體での小說をうまいと云つてくれた人はない。(無論の事だが)併し作家の意氣組、作家の意圖、スケールの大きさ(當時としては)等に對する是認乃至好評の文章が、そこゝに見えた。それでやゝホツとした。

が、其時自分が感じた感情が、其後の作家としての自分に、隨分害になつたと思ふ。と云ふのは、此位下手でも文壇は通る。と云つた樣な、安心の最低標準が、へんに腹の中に出來上つてしまつたことである。

これは甚だ有難くない感情である。併しどうとも仕方のない感情であ

る。彼れの作が生かつたから、今度もそれを欲しいと言ふ衝動の[illegible]作者が、一方では、前きの一つの[illegible]、併しそれと共に[illegible]から促されて催促されして、それでも出すにやれ[illegible]行かなくなつた場合には[illegible]の低い出来ない最低に手を抜いて、それに反省をされば、と言ふかなどの自己の[illegible]、商品の間に合はせる。或る場合には商品的に考へて、一つの[illegible]を飛ばしてしまふ——そしてそれが習慣になる。悪い／＼と知りつゝ、それが習慣になる。

若し一種の[illegible]時代なら、一度も二度も出直す事が出来、その時の自分の力で出来得るだけの努力を[illegible]中にも入ら事が出来ない。その後の自分の同作者が、もう少し[illegible]て来たらうと思ふ。これが自分の同作の力は、[illegible]する事にもなるが、併しそれが[illegible]て、人間の[illegible]問題に[illegible]出来たりする方向に出来たりする事が[illegible]人[illegible]自分の[illegible]事[illegible]と思ふ。

これも[illegible]

[illegible]

作者としても[illegible]分化されてしまつた時[illegible]作者の[illegible]作用するのは[illegible]して来る。

作家になつて作品に[illegible]されてしまつた場合にはそれも最早[illegible]物ではなく、[illegible]物に[illegible]作者の責任も[illegible]つて来る。最早同情する事も出来ない[illegible]事も出来ない。その作の作者であるといふ事も天下に向つて責任をも負はねばならない。

問題となる作者なら、[illegible]事を一度に[illegible]しまつて、人間は[illegible]でも何でも直ぐ気がつくやうにはなたらうが、現實的に同作家の[illegible]つてあるものであれば、一つの悪い作[illegible]悪い厭な作を発表したものが、それが[illegible]物にしてしまつたならば自身の心理に[illegible]出来ない[illegible]であるか[illegible]事も[illegible]と思ふ。[illegible]同作は、その同作家の心理[illegible]

[illegible]

する[illegible]である。——[illegible]といふ[illegible]ではないらしく思へるが、併し自分に取つては、自分の創作家生活について考へる場合、いつでも浮んで來る後悔なので、この機會にこれを述べさせて置いて貰はう。

自分はモデル問題を惹起した事は滅多にない。併し唯二つだけある。一つは『中央公論』に書いた『さまよへる琉球人』だ。自分の知つてゐる一琉球人を自分の見るまゝに書いて行つたもので、それを書いた時の心持は暢氣な位に明るく、別段他意ないものであつたが、それに對しては琉球の青年團から非常な抗議を受けた。それはモデル問題そのものよりも、そこに書かれたやうな一琉球人の生活が、琉球青年全體の信用を現實的に如何に害するかといふ實際問題からの抗議であつた。自分はその抗議文に書かれた琉球青年諸氏の苦しみに胸を打たれた。藩府時代からあのやうに壓迫を受けてゐた琉球は、今や經濟的に瀕死の狀態に追ひ込められてゐる。そこに持つて來て私の書いた小說が、琉球青年の信用をなくなしたら、實際問題として、彼等の前途は益々暗澹たるものになつて行くばかりだ。——さういふ意味の抗議なのである。そこでそれに打たれた自分は、『中央公論』にその抗議の意味を書き、自分の『さまよへる琉球人』を抹殺する事を聲明した。

自分は自分の如きもの、小說すら琉球の青年諸氏にあれ程の不安を與へるといふ事は、琉球の生活が如何に迫つてゐるかといふ事を如實に語るものであると思つて戰慄した。それに較べて、自分の作の動機が如[illegible]る。

もう一つ抗議を受けたモデル小說は[illegible]。併し[illegible]てゐたいから、此處には書かない。

併し全體として、一人兩國に不實なことまで書いたもの、中には、書かなければよかつた（それも強い程度ではないが）と思ふものがかなり多い。殊に友人の事など書いたものは特にさう思ふ。

自分は積極的に友人の非を小說の中であばかうとした事はないが、併し最初自分がモデルにされ、それも內輪の事實が指摘され、明かに惡意を示されたので、それに對抗する氣持になつて書いた「針」といふ小說がある。自分はその中で自分をモデルにした友人の小說家の事を書いたが、併し相手が自分をしたやうに、問題や誇張はしなかつた。けれども明かにその相手に對しての不快が先に立つてゐるので、今讀み返して見て、好い氣持がしない。あゝ云ふものは書かなければよかつたと思ふ。

これは十年前になるが、その時代に私達友人の作家群の中には、友人を小說の中で槍玉に擧げることがへんに流行した。相馬泰三とか死んだ葛西善藏とかいふ連中には、實際かなはなかつた。毎日親しく話し合つてゐるのに、いつの間にか（多分親しく話し合つてゐる間にそれをせつと書き續けてゐたのだらうと思ふが）人を叩きのめすやうな作を書いて雜誌社に渡して置いて、知らん顏をしてゐる。雜誌が發行され、その小說が發表されたのを讀んで、始めて自分がその中にひどい目に會はされてゐるのを知り、昨日會つた彼等の親しい顏付を思ひ出し、何が何やら

女優といふものは、どんなものか研究することが流行であつた。――宇野氏がこれを論じ、[illegible]から、或る人の[illegible]自分等が皆やつてみた同人のなかへ[illegible]、[illegible]、面白がつてゐたが、何が面白いものか、不思議で仕方ない話であつた。

自分の過去を[illegible]の作と、はつきりふふ相當なことに理解したものだが、今考へると、實際イヤな氣持がする。

すべて、只、淺まし

三上於菟吉

病中兄姉ト――

兄がこの病院の仲間入りが僕に聞けたのは、君たちの運動だつたと言へるかも知れません。だけれど[illegible]、僕この處の[illegible]だつたと言へるだらうから――

病中兄姉ト、僕は[illegible]文學[illegible]文學といふものと僕ほど[illegible]がつたものはなく、彼女に僕が[illegible]して、そしてなく[illegible]ものです。[illegible]人がなかつたなら[illegible]文學と人と[illegible]ないものは[illegible]一度もなかつたやうな氣がするのです。

彼女よ！　どんなに僕は君に奉仕しようとあこがれたか！　しかも、何ともけなく僕は君の[illegible]であつたか？　僕は君の眞面目を知らうとして、十四の歳以後、二十幾歳まで、殆んど全力を盡して戰つていゝかも知れない。知るといふことは愛の内だと、ヴインチなどといふ老人は對しこけに教へてくれたのか信じる程に甘い僕は、[illegible]獻身的だつたと言へるのです。僕は彼女をトルストイを、ドストエフスキイを、チエホフを、ゴオリキイを、メンデスを、バイロンを、ブラウニングを、マウパツサンを、フロオベルを、レニエを、マラルメを、その他シエクスピア、ゲエテ、ソフオクレス、アナクレオンからも通じて知らうとしました。他の方面から、ニイチエ、スチルネル、鷗外、[illegible]、[illegible]、芭蕉、そして江戸時代から現代へまで、多少ともさかのぼつたと言へると信じるのです。[illegible]のは少年時代で、[illegible]は、昭和にまで下りました。けれども、僕は、彼女のおもかげの探求に耽つてゐるうちに、いつとはなしに、僕自身の實生活はどんな[illegible]よりも、より文學に深い道へ踏み入らせずにはゐられなくしたのです。

そこで、文學は、酒と同じく、この不幸な男の[illegible]となり、自分自身は[illegible]、昭和二年一月[illegible]として悠々として働らくほかになくなつたのであります。

おゝ、邪險にして、不思議なる戀女よ！　君にまとつて僕が隨從したものがあるか？　それは文學以上だ。僕は一家一門のために全部投げ出してしまつたか[illegible]この文學に[illegible]の床に臥られて、二兩と一錢とを仕送らせねばならなかつたのです。しかるに

[illegible]文壇空虚時代で。おまけに一人の先輩すら（文壇）的に[illegible]出來なかつた僕なぞのことは、作柄といふやうなものは見てくれる人はありませんでした。そこで當然、僕は極端な文學蔑視でした。

――勝手にしやあがれ！　僕あ赤本かきになるんだ！

斷然として、牛込の貸本屋にある講談本といふ講談本を讀むこと約三千冊――この講談本分類、集成については他日説あるべし――ノコノコとして、雄辯社、博文館なぞが得意とするところの通俗もの書きとして門出をしたのであります。

（當時、名聲隆々たりし谷崎精二よ、宇野浩二よ、廣津和郎よ！　永久に、赤本書きの僕を友達としてあしらつてくれたことに對して、死後まで、僕は感謝を拂ふであらう！）

とは言へ、通俗もの書きたるべく立つた僕が、今でも冷汗三斗の感に堪へないのは、自分の生業を輕蔑したといふ一點であります。僕は文學といふ彼女にまだ惚れ溺れて、いかに自分のやり口を呪つたでせう。

（年少の友よ！　人間の眼から、鱗が落ちるまでには、相當の修業を要するものであります。（バイブル參照））

僕は事實、その當時、自分の文字文章といふものは、自分以外に了解の出來ぬものであらねば、値打がないもの〻やうに曲解してゐたのでした。もつとも、この曲解は、先輩どもから植ゑつけられた偏見と言へば言へるのですが、しかし、先輩の曲論を妄信したところに、僕の愚かしさがあつたことを誰れに向つて抗辯出來るでせう！　先輩どもは、文學[illegible]のでした。

しかし、か〻る時機に――一枚一十錢の譯料、六十錢の創作小説――やがて五十錢の譯料、一圓の創作小説といふやうな待遇を、とにもかくにも取引先から受けるやうになり得た時、突如出現して、一枚が十錢時價の飜譯者僕を他店な、一枚六圓までだしぬけに引上げてくれた人に、主婦の友社々長石川武美氏があります。

當時、僕はおそらく二十八九でありましたらう。家道沈衰にかて〻加へて放埒、酒色耽溺に染み渡り、この救拯ない〻ことにして、石川氏からお金を貰つては、淺間しい快樂に溺れたことは、自白するまでもなく周圍が知つてゐます。たゞ、石川氏のこの知遇にむくいるために、物質的だとノラクラな（藝術的）友人は笑つたが、僕が彫心鏤骨したことは、神に誓へる――どうにかして一人でも多い讀者に氣に入られようとして――

讀者に氣に入られるといふことほど、作家が、因襲ある在來に對してつとめねばならぬことがあるか！　作家といつて惡かつたら三下於佐吉のやうな（人間）が！

で、石川氏は、一面から言へば、僕を物的に救濟し、同時に、僕の過去の文學觀から脱離せしめました。つまり、原稿もお金になるものだといふ觀念をハッキリとあたへてくれたのであります。

だから、僕は甘んじて云ふが、文學といふものが、若し、作者自身の不可思議な自尊心を満足させるためのものであるとすれば、石川氏は一

肝臓と膽について

横光利一

といつう言ふ。[illegible]自分の[illegible]

へ[illegible]いつの[illegible]私の[illegible]

が、とにかくそれは他人が私を私だと[illegible]にちが

ひない。私は私の子供に名前をつけることを一年ほど捨てゝおいた。

私はその間子供のことを「坊主坊主」と呼んでゐた。別に不便は感じな

いのだが傍の者が承知をしない。恐らく私の子供も私のやうなことを一

度は考へるであらう。そこで、また私だが、いつたい私の名前は人々が

私だと云ふから、私が私だと思ひ出し、人々の思つてゐる私が、いつの

間にやら私の中の私になつてゐたりしてゐるのだ。私は極力人々の思つ

てゐる私から逃げやうと思ひたがる。すると、人々は私には分らない古

くさい私を頭の中にひつさげて私を追つ馳け廻す。新しい私がいたる所

で古くさい私とぶつつかる。私はその度ににやりとする。本屋へ飛び込

む。すると、棚の中に私がしよんぼりと並んでゐる。私は寒気を感じて

飛び出て来る。思ふに私の一生は私を蹴飛ばすことばかり考へてゐる

一生にちがひない。時に何か私なりに私を持たうと思ふことがある。が

持つたら最後だ。私は持ちかけたものは速刻捨てることばかり考へね

ばならぬのだ。そこで、私は私の価値を考へる。何が価値かと。すると

私はいかにして私を投げ捨てるかと云ふことが——私は今に[illegible]が人

格を変形させる時代が来ると思ふ。これさへ来れば、人々は完全に日々

自分を捨て去ることが出来るのだ。これほどの幸福がまたとあらうか。

しかし、これほどの不幸はまたとあらうか。とにかく、それはどちらであ

らうと私は神さまだけは捨て去ることは出来ない。私の持つてるもの、

私のしがみつくことの出来る唯一の神様。——これだけは、マルキスト

[illegible]

[illegible]

と[illegible]マルキストには[illegible]な

い。いつたい、神とは——[illegible]の価値を[illegible]と云ふ。人は

価値をなしなければ生きられない。ある人々は日々価値をなして行つてゐ

る何個である。私は極力[illegible]を守らうと思つてゐる。これ以外には信じ

ることは何もないやうな気がするのだ。私は唯物論的であることは好き

だ。しかし、唯物論は嫌ひである。私の神を信じるのは、唯心論からで

はない。メカニズムからだ。一と一とを加へると何ぜ二になるかと考へ

てゐる認識論は何の役に立つかと、雨雀氏が云つたのを私は覚えてゐ

る。私は文芸時代へそれと同じことを書いたことがあるので特にこれ

だけは私の記憶に残つてゐる。しかし、私は考へる。一と一とを加へて

何ぜ二になるかと考へることは、神を信じる上に役に立つ。神は一と一

との間により現れない。神社仏閣の本体は一と一との間にある。プレハ

ーノフにした所で、片岡鉄兵にした所で、一と一とが何ぜ二になるのか

知らないだらう。それも知らずに神なんてものはないと云ふのは、つま

り、神を知らんのだ。神を知らぬものが、神なんてないと云ふのは、た

だ、それは威張つたに過ぎぬ。勿論私にした所で、常に[illegible]ものにただ

威張つてゐるだけだ。人は新しいことを書かうとして、威張りたがり、

本当のことなんて、ただ[illegible]だけが一番多く本当だ。だから、[illegible]と云ふも

のは本当以上に大切なのだ。人は、彼以外の彼は——即ち、他人の頭の中

に這入り込んで生活してゐる彼は、[illegible]神に[illegible]する人

は神の国へ[illegible]と気づいた[illegible]。次の新しい[illegible]られる一

[illegible]

い。」（方法論序說）

[illegible]、[illegible]のごときバレッサーがそのやうなことを言ふとしてみれば、われ〳〵もまた馬鹿になるに限るではないか。

文筆懺悔・ざんげの生活

近松秋江

自分が、長い間に書いて來た物で、あんなことを書くのではなかつたと、今日から回顧して、孔あらば、入りたい心地のするものが、私には數多くある。どれも是れも、そんな物ばかりである。

一體自分は、以前から、既に筆を持つて紙にのぞんでゐる時に、非常な懷疑的態度に襲はれてゐる方で、（こんな物を書いてゐて、それでも好いのかなあ）と、幾度となく反省してみる。その卽に筆が鈍るのである。尤もそれは、專ら藝術的立場からの批判であつたが。

何故なれば、私には常に、非常に高い文藝上の理想がある。それは古今東西の、先人の遺した雄著傑作にも、理想的の物が認められるし、又それ等を標準にして、おぼろげながら、前方に、高い理想的な文藝作品が考へられるのである。それは、もつと、どうかすれば、ある程度まで實現しうるもの〻やうに思はれてならない。それが實現出來ぬのが、私の不斷の悩みであり、物足りなさである。

今、そんな標準、理想から後戻りして、自分が、これまでに書いてゐる物について考へてみると、とても、[illegible]だしてゐる。

それとゝもに、自分をして、飛々懺悔的[illegible]しかることは、始めて通俗道德の上から、どうも可けないことがある。

死んだ廣津柳浪氏は、また、ずつと以前、「いくら中學校に行くやうな年頃の子供があつては、女郎屋のことなど書けない。」と洩したことがあつたさうだ。

田山花袋氏は、その柳浪のいつたことを評して、「もう柳浪氏も駄目だ。そんな弱いことをいふやうになつては、おしまいだ。」といつた。

田山氏の意見では、何處までも藝術で實生活を徹底しようといふのである。いかにも勇氣に富んだ修行者の態度といはなければならぬ。が、私自身には、田山氏の勇氣はない、どちらかといふと、柳浪氏の說に同感である。固より通俗道德的な、極めて卑近なことではあるが、しかも自身の現實的生存に直接な問題である。二人の娘が段々成長して、此の親爺が若い時代の小說を、もし讀んでみるやうなことがあつたら、どんなものだと思ふと、今から獨りで一寸赤い顏をせずには居られない。

「まあ、内のお父さん、厭な人……！」と、いふよりも、祭が投して面を掩ふであらうと思ふ。

しかし、それも考へやうで、娘の敎育を十分に仕附けて置けば、氣づかひないかも知れぬ。トルストイ翁の小說には、隨分極端な性描寫があるけれど、今、現に日本に來てゐるといふ、トルストカヤ女史などは、確りしてゐるらしい。でも、ト翁の藝術は堂々たるもので、私の謂ふ所の理想的のものであるから、その點から、いかなる極端露骨な性

描寫[illegible]があつ[illegible]作家が[illegible]して、[illegible]が與へることが
[illegible]。
私[illegible]は、自分の書いた物に自惚れることの出來ない性分である。
それは、私の崇拜する昔の批評家の一人であるところの[illegible]
つて、同じことだ。彼は、自分の書いた物に自惚れるドンキホーテで
はなかつた。[illegible]思ふ。お互が[illegible]の
問題になるくらゐ[illegible]
[illegible]自分の一生の仕事を[illegible]ところが[illegible]
はつた[illegible]
で、トルストイ[illegible]
な、[illegible]において[illegible]しても、他の[illegible]
[illegible]
[illegible]であ[illegible]

[illegible]の價値は[illegible]
いふことになることだ、
[illegible]
[illegible]の中の[illegible]と[illegible]
まんな[illegible]
する[illegible]
人[illegible]
に[illegible]
[illegible]

[illegible]して、人の[illegible]
く問[illegible]
他人の事をいふ[illegible]があるけれども、[illegible]たところ、
合ふまた文士小説家の[illegible]
ある[illegible]
であつたかも知れ[illegible]
でないかも知れぬ
それに[illegible]生活は、文壇の[illegible]以上に[illegible]
生活そのものが[illegible]
者が[illegible]生活をしてゐるといふ[illegible]
活をして[illegible]

[illegible]といつて置いて、自分のこれまで書いた物がなから
すしも[illegible]と思つてゐるのでない[illegible]内に
ついて[illegible]ないことはないと信
じてゐる。小説[illegible]人の[illegible]
合[illegible]
[illegible]
なか[illegible]
小説[illegible]人間の[illegible]
[illegible]

暦の文化史觀

林　癸未夫

太陰暦の生成

更めて說くまでもなく、暦といふものは人類の經濟生活乃至社會生活を整理し、調節し、合理化するためには、必要缺くべからざるものだが、併し人類がいつ頃此暦といふものを實用し初めたかといふことは確にはわからない。多分それは幾萬年かの昔、自然人が文化人への第一步を踏んだ當時からであつたらうと想像されるだけだ。

暦法を大別して太陰暦(Lunar calendar)と太陽暦(solar calendar)とにすることは誰も知つてゐる通りだが、各國各民族の有てもつた暦の歴史を遠く溯源して行くと、どれもが必ず太陰暦から出發したものゝやうに思はれる。そして又それが極めて自然の事であつた。何故かと言へば、月の盈虧ほど誰にもわかり易い時間單位はないからだ。尤も一晝一夜から成り立つところの一日といふ觀念は、時間單位としては月よりも更に原始的であつたに相違ない。だが漫然たる日の累積だけでは未だ暦は成立しない。日の幾何かを結束して上位單位を意識し初めた時に暦の萌芽が生まれる。そしてそれが一月であつた。二十九日半にして朔から朔に復し、望から望に歸る。此自然法則は天文學や數學を全然辨へなくても誰にでもわかる。そこでこれを時間の經過を測る簡易な一單位として採用するに至つたのは當然の事であつた。

既に月を單位化した原始人が、更に其上位單位としての年を發見するに至つたまでには、餘り多くの年代を經過しなかつたであらうと想像される。何故ならば、月を十二回重ねると、氣候草木其他の自然的環境が、ほゞ一巡して前の狀態に復歸する

ことを知るにはさほどの困難はなかつた筈だからである。そこで原始人はおのづから一年といふ觀念を得、それを以て長い時の經過を測る一單位とすることの便利を悟つた。かくの如くにして太陰暦の基礎は出來上つたのである。

太陰暦と一口にいつても種々なる變遷を經てゐることは勿論だが、併し古今東西を貫通してゐる一法則は、一箇年を三百五十四日とし、之を三十日の月六つと、二十九日の月六つとに分割することだ。そしてそれが約二十九日半を一週期とする月の盈虧を基準とするものであることはいふまでもない。ただ最初に於て太陰暦を實用した原始人は、久しからずして一つの難關に打つからざるを得なかつた。それは暦の上の一年と、自然的現象の一週期と、が次第に隔離して行くことを發見したからだ。例へば四月の初めに咲いた花が、今年は[illegible]に咲き、翌年は[illegible]に遅れ、[illegible]、十年二十年と經つうちに、[illegible]秋となり全く顛倒して來る。これでは播種の時期の[illegible]用をなさぬ。そこで[illegible]中の智者達は考へたのである。[illegible]を考へ出したのが閏といふことであつた。閏とは要するに或期間の日數若しくは月數の外に、餘分の日又は月を挿んで暦の進行と自然現象の符合を一致させようとする方法をいふのだ。

この置閏法が、いつ、いかなる民族によつて創案されたかは一向に知る由もないが、恐らくは太古に於ける最大の天文學的數學的知識を與へられてゐたカルデヤ人の祖先によつたらうと私は推定する。が、それはいづれにしても、置閏法こそは初期暦法上の偉大な進步を意味したと同時に、古今東西數千年間の暦法の變遷を支配した原動力であり、又現在の改暦問題を解決する鍵であるとも云へるほどに重要なものだ。太陰暦であれ太陽暦であれ、暦術の巧拙は一に繫つて置閏法の如何にあると斷言してもさしつかへない。此問題には前後で觸れるが、とにかく太陰暦に於ける置閏法は、數個年目に一度づつ、或月（二十九日又は三十日）を重複させて、其年を十三箇月にするといふ方法が行はれたことは、各古代に太陰暦共通で、ヘブライ人、回々人、支那人、[illegible]人等がみなそれだ。といふわけは、彼等古代人は、月の盈虧を基準とする暦法によつて、動もすれば[illegible]ではなく、太陽と地球との關係に對する天文學的知識が[illegible]であつたために、月の日數を増加するよりも、年の月數を増加する置閏法の方がより合理的であると考へてゐたからだ。但し[illegible]中世紀ヨーロッパの諸民族は二千年以上も前に太陰暦を捨てて太陽暦を採用してゐる。

月制もこれに伴つて廢止されたが、回教國では近年まで依然太陰暦を用ひてゐたゝめ、閏月制が永く存續したのである。

だが併し玆に一つ注意しなければならぬことは、閏月制によつて自然現象との一致を圖らうとした後の暦法は、最早純粹の太陰暦ではなくて、暦學者の所謂太陰陽暦（Lunisolar Calendar）に屬するものだといふことである。月は元來潮の干滿以外には地表上に何等の影響をも及ぼすものでない。氣候の變遷、草木の生滅は悉く太陽の運行に支配されるのだから、之等の自然現象の推移に追從しようとする太陰暦は、半意識的ながら太陽暦の法則を受入れて、それとの調和を求めたものと言つてよいのだ。此意味からすれば吾々が文獻的に徴證し得る古代の暦法は、唯一の例外アラビヤ人のそれを除いて、他は皆太陰陽暦であつたと言つてさしつかへなく、純粹の太陰暦は遠い有史以前に於ける其存在を推測し得るに止まるのである。

太陽暦の創案

太陽暦の成立には二つの基礎條件が必要だ。一つは地球から見た太陽の運行が一循環して元の位置に復するまでの時間を、ほゞ正確に測定すること、今一つは新月を月初とし望を月中とする太陰暦の根本法則を排除することだ。そして文化史上此二つの條件に最初に成功したものがカルデヤ人とエヂプト人とであつた。

カルデヤ人はセム人種に屬する一部族で、少くも四千年の昔から、中央アジヤのユウフラテス及チグリスの兩流域即ち今のメソポタミヤ地方に其文化生活を徐々に築きあげた。そして彼等が同地方に覇を唱へて所謂第二バビロニヤ帝國を建設したのは紀元前七世紀の末で、ネブカドネザルのやうな英主を生んだに拘らず、國運早くも傾き、ペルシャ人のために亡ぼされたのが紀元前六世紀の半過ぎであつた。だが併し彼等は[illegible]の特殊の知能に惠まれて、人類の文化に大なる業蹟をのこした。それは天文學と數學とであつた。彼等は此二つの科學的知識を基礎として、今日尚世界の全人類が襲用してゐるところの幾多の法則を創案した。例へば一日を二十四時間として、一時間を六十分に、一分を六十秒に分割したのは彼等だ。圓を三百六十度に分割したのも彼等だ。週七曜に日月及五惑星の名をつけたのも彼等だ。だが彼等の最大の功績は恐らく太陽の一周期が三百六十五日四分の一であることを測定し、それが眞の一年であることを知つたことだ。併し彼等の實用した暦法は未だ完全に太陽暦になり切らず、一種の太陰陽暦であつた。其事はカルデヤの暦法が一箇年を三百六十日とし、これを三十日平均の

十二箇月に分ち、六箇年に一度一月の閏を設けたことでわかる。即ち彼等が一箇年を断然三百六十五日と規定し得ないで、五日の餘りを六箇年分纏めて閏月制を取つたところに、太陰暦の係蹄を脱し切れなかつたことを示してゐる。

そこで完全な太陽暦の最初の制定者たる名誉はエジプト人に與へられなければならぬ。彼等は三十日平均の十二箇月制を取つた點ではカルデヤ人と同様であつたが、併し彼等は閏月制を廢して毎年末に五日の補足日を附け加へ、一箇年を明確に三百六十五日と規定した。しかも此五日の補足日を挿むことは、月初を朔におき月中を望におくといふ太陰暦の原則の廢棄を意味することは勿論である。原始文化人以來永く捨て得なかつた月の盈虚の誘惑を斥けて、太陽一元制の暦法を創めて造つたエジプト人の偉績は賞讃しなければならぬ。

太陽暦の完成――ジユリアス暦

太陽暦を基礎づけたものがカルデヤ人であり、それを創定したものがエジプト人であつたとするならば、それを完成したものは羅馬人――といふよりも古代羅馬の英雄ジユリアス・シーザーであつたといつてよい。

シーザー以前の羅馬暦は極めて不完全な太陰暦で、一箇年を三百五十五日とし、それを十二箇月に分けて、三月、五月、七月、十月を三十一日とし、一月、四月、六月、八月、九月、十一月、十二月を二十九日とし、二月だけを二十八日としたものであつた。ところがシーザーは、エジプト遠征中に太陽暦を知つて感歎措かず、早速之を祖國に採用しようと決心した。併し彼はエジプト暦をそのまゝ模倣せずに、數學者ソシゼネスに命じて研究せしめた結果、重要な修正を加へて、紀元前四十五年に新暦法を發布した。これが即ちジユリアス暦又はユリウス暦と呼ばれるものだ。

ジユリアス暦は彼にカルデヤ人の發見した通り一年を三百六十五日四分の一とする。だがそれはエジプト暦のやうに一月を三十日平均として年末に補足日をおく代りに、大の月と小の月とを設けることにした。乃ち一、三、五、七、九、十一の奇數月を三十一日とし、二、四、六、八、十、十二の偶數月を三十日とした。が、さうすると困ることには、一年が三百六十六日になつて一日多過ぎる。そこでどうしても或月から一日へらさなければならぬ。さて然らばどの月からへらさうかといふ段になつた時、斷頭に上つたのが二月であつた。二月は羅馬の舊暦でも日數が一番少なかつたのだから、これがよからうといふことになつて、二十九日に縮められたのである。

ジュリアス暦の最も珍重すべき點は四年目に一日の閏日法を設けたことにある。エジプト暦は一年を三百六十五日と固定して、置閏をしなかつた。然るに前述の通り、眞の一年には四分の一日即ち六時間といふ半端が附いてゐるのだから、四年目に一日の閏をおかなければ、永く暦の正確を保つわけには行かぬ。そこでジュリアス暦は其點に修正を加へて初めて閏日制（二月三十日）を施行することにした。かくの如くにして太陽暦は一先づ完成されたのだ。

序でに一つの挿話として面白いのは、從前羅馬では七月をキンチリス(quintilis)と呼んでゐたが、それをジュリアスと改めたことだ。ジュリアスはシーザーの名だから、つまり彼の改暦の功績を記念するために、其名を月名の中に取入れたのだ。今の英語のジュライや獨逸語のユウリや佛語のジュリエなどが皆其轉化であることは言ふまでもない。

オーガスタスの修正

シーザーの死後間もなく羅馬の覇權を掌握して、終に皇帝とまでなりすましたのが、オーガスタスであるが、此オーガスタスはジュリアス暦に少しばかり修正を加へた。それは羅馬の言葉で八月をこれまでセクスチリス(sextilis)と呼んでゐたのである。[illegible]自分の名の[illegible]オーガスト[illegible]たことだ。[illegible]オーガスト[illegible]これにあるが、[illegible]にそれだけのことならば、暦の内容には別に變化はなかつたが、當だが、さうは行かなかつたといふのは、皇帝の佞臣どもが妙な事を進言したのである。それはジュリアス（七月）が三十一日あるのに、オーガスタス（八月）が三十日では羅馬皇帝の體面に係はるから、これはどうしても七月同様八月も三十一日にせねばなりますまいといふのだ。オーガスタスも最初のうちは、こんな馬鹿々々しい進言には餘り耳を傾けなかつたらしいが、取巻連中がやいやい言ふものだから、つい其氣になつて到頭八月を大の月に昇格することに決定した。ところがさうすると一年の日數が又一日ふゑるので、どこかで埋合せに一日へらさなければならぬ。そこで同じへらすのなら、どうせ二月は粃物になつてゐるのだから、それがよからうといふので、二月は更に一日削られて二十八日（閏年には二十九日）になつてしまつた。

此外にオーガスタスは今一つの修正を行つた。それは八月を三十一日に改めた結果、七、八、九と大の月が三つ續くことになつたので、これでは少し身が長過ぎて困るといふので、ジュリアス暦で大の月であつた九月と十一月とを小の月に改め、反對に十月と十二月とを大の月に改めてバランスを取ることにし

い時を殘すものゝ暦の通りになつたのだ。

ればトーリヤスの改暦は紀元前九年に完成され、羅馬本國はもとより、其内に於る廣大な版圖内の諸民族に、悉く此暦を使用すべきことを命令したので、支那、日本、其他多少の例外を除いて、これが世界暦たるの觀を呈するに至り、爾後何等の修正も加へられることなしに、第十六世紀の末に及んだのである。

グレゴリー法王の修正

ユリヤス暦に對する二度目の修正は、一五八二年にグレゴリー十三世によつて行はれた。此年は我國の天正十年で、織田信長が殺された年。又第一回羅馬使節伊東中務等の一行が日本を出發して丁度一年を經た年に當る。此暦法の修正は、百年の間法王の諸問題となつてゐたもので、最初にこれを法王に建議したのは、中世に於ける有數な學者ロージャー・ベーコンであつた。それは第十三世紀の中頃のことであつた。爾後歴代の法王中此問題の解決を企てたものは少くなかつたが、容易に實現されなかつたのが、終にグレゴリー十三世によつて斷行されたのである。

然らば何故に此改正を必要としたかといふに、ジュリアス暦では一年の長さを三百六十五日六時間と見做したのであるが、實際はそれが六時間でなくして、五時間四十八分四十六秒であることが確められたのである。其差の十一分十四秒は一年としては實に僅かな相違だが、併しこれが積り積もると、暦の上に大きな狂ひを生ずる。例へば暦の上では三月二十一日に當るべき筈の春分（Vernal Equinox）が、實際にはそれよりも十日ばかり早く起る、つまりそれだけ暦の進行が太陽の進行よりも遅れてゐたのだ。そこで之を匡正するためには、百二十八年目毎に一回閏をぬきにする、言ひかへれば四年目毎に二月を二十九日にするのを、百二十八年目に一度だけ其閏日を廢さなければならぬ。これが理論上正しいのだが、併しグレゴリー暦では之を一般の者に分り易くするため、一つの便法を取つて、百年目毎に一度閏を抜く、即ち各世紀の第一年、例へば一八〇〇年とか一九〇〇年とかいふやうに紀元年數が百で割り切れる年に於て閏を抜くことにした。併しさうすると今度は二十八年だけ早く閏を抜くことになつて、又暦が狂つてくるので、四百年目に一回だけは閏を抜くことを止める。言ひかへれば四百年間に三回だけ閏を抜くことにした。これが即ちグレゴリーの修正である。

そこで當時此修正を發布するに當つて、之を將來に對して實施するのみならず、過去の誤謬も同じ計算によつて訂正しなければならぬといふ理由から、改暦を發表した年即ち一五八二年の暦から十日を抜きさつて、其年の十月四日の翌日を直に十月

十五日とした。これはつまりシーザーの時代からグレゴリーの時代に至る千五百有餘年の間に拔くべき筈であつた閏日を此際一緒にして拔き取つたことを意味するのである。

此グレゴリー暦が現在世界各國に採用されてゐる太陽暦であるが、併しこれが今日のやうに萬國共通の暦法となるまでには相當の難關を經なければならなかつた。何しろカトリック對プロテスタントの宗教闘爭が深刻に行はれつゝあつた當時のことだから、イタリー、スペイン、ポルトガル、デンマーク、フランス等のカトリック教國では直に此新暦を採用したが、國王がプロテスタントであるか、或は國民中に有力なプロテスタント教徒の多い國々では、新暦の正しいことを認めながらも、法王に對する反感に支配されて、之を採用することを躊躇したものが多かつた。でもスヰスやオーストリーでは一五八四年から、ハンガリーでは一五八七年から、ドイツ、オランダ、スエデンの諸國では百十餘年後の一七〇〇年から之を用ひ、最も頑強だつたイギリスでは一七五二年になつて漸く之に改めた。唯獨りロシヤでは世界大戰後までジュリアス暦を固執してゐたので、他の諸國よりも月日が十三日遲れてゐたことは周知の事實だが、これも革命後にグレゴリー暦に改めた。

二つの革命暦

グレゴリー暦は天文學的には格別缺點はないにしても、經濟的乃至社會的には種々なる缺陷がある。今それを詳説することは控へるが、月の分割の仕方や週七曜との關係にいろ〳〵不便不都合があるので、之を改正しようといふ運動が十九世紀の中頃から起つて漸次有力となり、國際商業會議所や萬國天文學會でも屢々協議を重ね、今や國際聯盟の問題として考究されるまでに至つてゐる。だが併し實際にグレゴリー暦の改正を斷行した例としては、これまで二つの革命暦があるばかりだ。

其一つは一七九三年に發布されたフランスの革命暦で、これは大體に於てエジプト古代暦の復活だ。即ち三十日平均の十二箇月を設けて三百六十日とし、別に五日の補足日をおくのである。たゞ此暦の特色は週七曜を廢して十日の旬をおき、一日を十時間に分割したことにある。だが此改暦は國民に喜ばれなかつたので、一八〇五年に至りナポレオン一世は之を廢止して翌年からグレゴリ！暦に復した。

今一つの例は昨年（一九二九）十月一日から實施したロシヤの革命暦だ。これも月を皆三十日とし、五日の補足日をおいたことに於て、フランスの前例を追うたものだが、唯異るところは一箇月を六週に分ち一週を五日として、四日勞働一日休暇の新制を設けたことだ。一體ロシヤは帝政時代にも最後までグレゴリー暦の採用を拒んでさん〴〵列國の外交官、歴史家、貿易商、

太陽暦を採用したのであるから、今のソヴィエト政府も今度の改暦に関しては何ら人に煩へることになるだらう。政府及経済組織を根本的に改造しようとする革命のことだから、暦法の改変くらゐは何でもないともいへるが、併し今日の複雑な国際関係の下に於ては、或一国だけが単独に改暦するのは困難だ。これは必ず世界共通の問題として、協定して各国同時に改暦するやうに話しなければならぬ。

支那の暦法

昔から世界中で支那ほど頻繁に改暦した国もないが、併し又支那ほど終始一貫して太陰暦を固執した国もない。中華民国になつてグレゴリー暦を採用するまでの約五千年間、暦法の歴史は改暦の歴史であつた。たゞ暦の運行と日月星辰の運行との間に於ける誤差を修正されたに過ぎない。

支那上古の暦法に就ては最古の文献は淮南子の天文訓であらう。これによると、支那の暦法は……人のこれと同一系統に属するものと断言することは出来ないが、……古代人の天文観に於ても、東西の思想が一致して居る……古代人は明かに天文に通暁して居り、今日の世界の一層……であらうが、併し暦法に関する限り、支那とカルデヤとの間に一種の連絡の存することは疑はれない。例へば淮南子天文訓の中に「天は三百六十五度四分度の一にして一歳を成す」といひ、又「日月星辰は甲寅の元に始まる。日に行くこと一度にして歳に行くこと……端数の意四分度の一なり。故に四歳にして千四百六十一日を積んで複た故合に合ふ」といつてゐる所から見ると、既に彼等は数千年の昔から一年が三百六十五日四分の一であることを知つてゐたのだ。そして又「天に四時あり以て十二月を制す」……「天に十二月あり以て三百六十日を制す」といひ、「三月にして一時をなし、三十日にして一月をなす」……「四時にして一歳をなす」といひ、自ら外に三十四度有余の八風の循環説から推しても、一年を三百六十日と見てゐたことが解る。そしてこれは前に述べたカルデヤ人の暦法と正に符合するものだ。

併し若し支那の暦法が上記の通りであるとすれば、閏月は六箇年に一度おけばよいことになる筈だが、同じ淮南子天文訓の中にそれとは違ふ文章がある即ち「月は日に行くこと十三度七十六分度の二十八、二十九日九百四十分日の四百九十九にして月となる。十二月を以て歳となる。歳に餘ありて十日九百四十分日の八百二十七なり。故に十九歳にして七閏あり」といふのがそれだ。これを計算で言へば一年十二箇月は三百五十四日強で、太陽暦の一年三百六十五日強に比して十一日弱の差を生ずるから、これを調和するために、十九年間に七閏月を置かなけれ

さはならぬことになるのだが、これでは一年三百六十日と月との間に不調和を生ずる。淮南子などは解釋すればよいので、私にはまだよくわからないが、併し淮南子の編纂されたと推定し得べき年代（前漢の景帝から武帝の間、即ち紀元前二世紀の末頃）から數十年の後に制定された太初暦（その内容は史記の暦書及それに添へてある暦術甲子篇によつてほゞ明瞭にされる）が一年を三十日の月六つと二十九日の月六つとに分けて總日數を三百五十四とし、十九年間に七回の閏月をおいてをるところから見ると、支那の實際の暦法が此方面に向つて進んで行つたことがわかるし、又其後にできた後漢の四分暦でも、南北朝時代の元嘉暦でも、遙に降つて元の授時暦でも、暦法の原則は太陰を基本とし閏月制によつて太陽との調節を圖るといふ建前に異動はなかつた樣だから、支那の暦法としては之を以て正系としなければならぬ。して見れば淮南子天文訓の一年三百六十日は單なる理論上の假説に止つたとも考へられるが、併しそれにしても漢初以前に於ける支那の天文學及暦思想がカルデヤ文化の影響を受けたことを否定することはできまいと思ふ。（尚支那の暦法と古代ギリシヤ暦との類似も、文化史的に面白い研究題目だが今それには觸れずにおく。）

日本の暦法

有史以前の日本人が果して暦法をもつてゐたか、又假にもつてゐたとしても、それがどんなものであつたかは一切分らない。我國に初めて一定の暦法が採用されたのは推古天皇の代であつたと一般に考へられてゐる。それは日本書紀の推古天皇紀中に、百濟の僧觀勒なる者が來朝して暦本及天文地理の書を奉つたので、玉陳、高聰等をして、之を學習せしめ、皆業を成したとあるのに依るのであらう。だがそれから五十年ばかり前の欽明天皇の代には百濟から暦博士や卜書暦本を徴せられたことも見えてをるし、又支那文化の輸入はそれよりも數世紀以前から相當に行はれてゐたのだから、我國の貴族階級が支那の暦法に興味をもち初めたのは、かなり古い時代からであつたらうと思はれる。

推古天皇の代に制定された暦法は元嘉暦（これは支那南北朝の宋の文帝によつて制定されたもの）そのまゝのものであつたと傳へられてゐるが、其後持統天皇、淳仁天皇、文德天皇の代に改暦せられ、更に清和天皇の貞觀三年に改暦して宣明暦なるものが採用された。之等の暦法はすべて支那暦の模寫に過ぎなかつたと察せられるが、併し飛鳥朝以來平安朝に至るまで朝廷に於て暦法を重要視されたことは、大寶令に於て、中務省のうちに陰陽寮を設けて、天文、暦數、風雲の氣色を察らしめ、暦博士及天文博士各一人、暦生及天文生各十人を任用したことに

よつても分かる、又[illegible]の中に[illegible]
期に規定してあるのを見ても明白である。

宣明暦の制定から八百數十年を經た後、靈元天皇の貞享二年に澁川春海の時代」に至つて改暦され、所謂貞享暦なるものが公布された。これは當時の暦學者澁川助左衛門の調製したもので、元の授時暦、明の大統暦を基本として、それに多少彼の考案を加へたもので、例へば二百十日の厄日を設けた如きがそれであつた。近松門左衛門の「暦八卦暦」が此貞享改暦に當つてゐるのも面白い。其後徳川時代には、寶暦四年、寛政十年、天保十三年に改暦され、明治維新に至つてグレゴリー暦に改められたことは誰も知つてをる通りだ。

其等の改暦は、併し、當時の人心に少なからぬ動搖を與へたらしい。何しろ千數百年來踏襲して來た舊式の太陰暦に就ては、太陰暦を廢して、俄に西洋流の太陽暦に代へようといふのだから、無理も無い、一般の農民が驚き怪んだのも無理のない話だ。そこで明治政府も賢明な方法を取り、明治五年十一月九日附を以て次の如き詔勅を煥發せられた。

朕惟フニ我邦通行ノ暦タル、太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ躔度ニ合ス。故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス。置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩アリ。終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル。殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ、率ネ妄誕無稽ニ屬シ、人智ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス。蓋シ太陽暦ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ。日子多少ノ異アリト雖モ、季候早晩ノ變ナク、四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス。之ヲ太陰暦ニ比スレハ最モ精密ニシテ、其便不便モ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ。依テ自今舊暦ヲ廢シ太陽暦ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン。百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ。

改暦の趣旨は之に盡されてゐるが、唯一「中下段ニ掲ク所ノ如キ」とあるのが、大部分の讀者には解しかねるかと思ふから、一言説明するならば、徳川時代の伊勢暦の形式は皆同樣で、一月毎に上段に下を示し、中段に十二直を記してある。十二直とは建、除、滿、平、定、執、破、危、成、納、開、閉であつて、建、滿、平を吉日とし、除、納、開を半吉日とし、定、執、成を小吉日とし、破、危、閉を凶日としてある。又下段には大歳日、大明、天恩、母倉、月德、神吉、受死其他いろ／＼な文字が書入れてあつて、これにも各々吉凶がある。だから此中下兩段の記載が人事百般の行動進退を決する重大要件となつてゐたのであるが、それは勿論「率ネ妄誕無稽ニ屬シ、人智ノ開達ヲ妨ルモノ」だつたので、それを暦面から取除くことも改暦の一つの目的であつたのだ。

右の詔勅と同時に太政官から「今般太陰暦ヲ廢シ太陽暦御頒

行用改候ニ付、來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト定候事」といふ布告を發し、間もなく明治六年の新暦が頒布されたが、それを見ると上段に太陽暦日と七曜とを掲げ、下段に太陰暦日と干支とを掲げ・新舊對照することのできるやうにしてある。此形式は明治時代を通じて慣用されたが、大正になつてから太陰暦の月日を記入することだけは廢された。併し干支が依然記入されてゐることは、本暦でも略本暦でも同樣である。

最後に福澤諭吉先生の『改暦辨』を紹介して此稿を終らう。これは日本紙十一枚に大きな字で印刷した小冊子だが、明治五年の末改暦令の發布と同時に著述して公刊されたものらしい。其冒頭に

此度太陰暦を止めて太陽暦となし、明治五年十二月三日を明治六年一月一日と定めたるは、一年僅に二十七日の相違にて、世間にこれを怪む者も多からんと思ひ、西洋の暦を調て、彼の國に行はるゝ太陽暦と、古來支那日本等に用ひる太陰暦との相違を示すこと左の如し。

とあつて、それから兩暦を比較して太陽暦の正しく且便利なる所以を説明し、最後に

右の次第にて此度太陰暦を改めて太陽暦と爲し、僅に二十七日の差を起したれども、少しも怪むに足らず。事實の損にもあらず徳にもあらず、千萬歳の後に至るまで世の便利を中止したるなり。[illegible]、是に拘らず、[illegible]、何故あつて[illegible]しやと、よく其本を詳来せざる可からず。其本の由縁をさへ辨れば、如何なる新奇なる事にても怪むに足るものなし。此度の改暦にても、其譯を知らずして、十二月の三日が正月の元日になると計りいふて、夢中にこれを聞き、夢中にこれを傳へなば、實に驚くべき事なれども、平生より人の讀むべき書物を讀み、物事の道理を辨じて、よく其本を尋れば、少しも不思議なる事にあらず。故に日本國中の人民、此改暦を怪む人は、必ず無學文盲の馬鹿者なり。これを怪まざる者は、必ず平生學問の心掛ある知者なり。されば此度の一條は日本國中の知者と馬鹿者とを區別する吟味の問題といふも可なり。

と論斷してある。最後の一句、福澤先生の面目を躍如たらしめて、痛快を極めてゐる。

序でに附記しておくが、明治五年の改暦令では「一ヶ年三百六十五日、十二ヶ月ニ分チ、四年每ニ一日ノ閏ヲ置候事」とのみ記されて、百年目に一度閏を廢することを記してなかつたので、明治三十一年に此點を改正した。それは明治三十三年が西暦の一九〇〇年で、グレゴリー暦で閏を廢すべき年に當つてゐたからである。

五行詩模作

堺　利　彦

世の末だ。
世の末だ。
まだ〳〵世の末だ。
おまけ。
公私ともにこの世の末だ。

現代の人間を許すのか、
時代だ、思想だ、悪魔だ。
時に作。
人間が此を許すのよ。
聞くも厭な報道が満ちてゐる。

さゝやかいつ。
日に聞いたふ私だ。
今度こそあいつ。
だいきうた。
明かに来高い要領の出来る。
三五、イヘ、ます。

高きを仰ぐにもあらず。
ノコギリ、カンナ、ボレ、小間に。
只、朝に、只、
一身をささげうつ甲斐い。

従ふ人一、
苦痛を訴へはしなかつた。
修む人一、
死を恐れはしなかつた。
誰がソウよ信ずるか。

恋も、
命の涙。
毎日そこから、
山も見、雲も見、
月も見、涙。
恋ひて、
命の涙。

昨に或夜。
木がらしの闇の中に、
只つた一つの星を見た時。
如何にも私は、
夜毎、日毎、
切望をしてゐます。
嬉しき貴人、あなたは、
引続いの切望をしていらつしやる。

貧乏人の子澤山。
さうおつしやい。
『子寶は國の寶』と説かれた。
その時サンガア夫人がやつて來て、
上陸を禁止されましたつけね。

疲れた、飢えた。
人口過剰は亡國の兆、
一億は人殺しに行く。
生きノイ生きて、
さうおつしやいましたつけね。
其の理論は何と言つてゐるか。
戦争するなく、誰が止めるのだらう。
そして一その儘に終す。

俺達現在の勞働者らし、
賃金がさがるんだらう。

軍隊、因より必要。
安い勞働、同じく必要。
人口增加、從つて亦た必要。
必要は善である。
産兒制限は不善である。

或日、獄中で、
飛行船が見えた。
低い空を悠々と、賑かに通り過ぎた。
跡は然し、雜木林の上に、
晝の月が寂しかつた。

オオ、涼しい峠だ、
下り坂が見える。
一日、一日、あすからは、
ズン／＼とおりてゆく。
あゝ永かつた一年の獄中生活。

自殺は詩的だ、哲學的だ。
萬物の靈長に特有の現象だ。
然し君、賣淫、賣節、試驗、收賄、
及び一切の金もうけ、
金持ち、、

[illegible]、人ごろし、
[illegible]、紳士、淑女、警[illegible]、
騒[illegible]、[illegible]、エヽうるさい、
『何』でたくさん、
スピードの世の中。

昔はソウ云つた。
首きり役の子には片輪が出來る。
今はどうだ。
大根の樣にザク／＼やつて、
月給があがつてゆく。

板塀と金網の、
三角形の運動場、
ツイ何となく、
庭鳥になつた、
心持。

入浴が一等。
日なたぼつこもいゝ。
それから何しろ、
毎晩のかしわ餅。
獄中の冬三樂。

淑女、女房、
[illegible]い女に、
偶然にも、
シャモ籍の脊中合せて、
語つた女囚

必然を承認する、
そこに意志の自由がある。
見よや君、
花は止むを得ざるに咲き、
風は止むを得ざるに吹く。

恬淡、洒落、
平凡、卑俗。
棄石か、
埋草か、
橡の下の力持。

（以上、舊作の燒直しもあり、咄嗟の偶作もあり、たまにはこれでも、推敲を重ねた苦吟もあるが、實は只、『まろめら』の諸作の『五行詩』を見て、ツイ『模作』を試みたに過ぎない。――とし彦。）

五行詩模作

堺利彦

世は末だ。
世は末だ。
この世の末の世の末だ。
お前も、
お前とわしの世の末だ。

嘘の人間を語るのこと、
隣近所、現実に、西洋だ。
昨日も、
人間の夜を語るのは、
[illegible]

さうでもあいつ。
日の暮れぬ間にふんだ。
今度こそあいつ。
だいぶきうらだ、
初めて本當の生活が出來る。
ヨエ、イヤ、ノダヤ。

濁りと泥にもある。
ノロサリ、カヌボレ、小岡に。
只、嗚呼、只、
一日をなげうつ生涯。

俺と共にて、
苦痛と喜びとしたかつた。
俺と共にて、
死を恐れくしなかつた。
誰がソクお信ずるか。

窓で見て、
白い雲、
毎日そこから、
空を見、雲を見、
月を見た窓。

窓ひとつ、
白い雲。

昨日も夜、
木がらしの闇の中に、
只つた一つの星を見た話。

如何にも私は、
夜毎、日毎、
切賣をしてゐます。
嘆し合ふ人、あなたは、
生涯の賣切をしていらつしやる。

貧乏人の子澤山。
さうだつて構はない。
『不當に高い』判決された。
その時サンガア夫人がやつて來て、
上陸を禁止されましたつけね。

廣めよ、殖えよ。
人口過剰で亡國の兆。
可憐な女が嘆き、嘆く。
[illegible]
さうおつしやいましたつけね。

春が來ては何と何つてゐる。
[illegible]
そしてそれは降です。

俺達現代労働者の、
賃金がさがるんだらう。

軍隊、固より必要。
安い労働、同じく必要。
人口増加、従つて亦た必要。
必要は善である。
産兒制限は不善である。

或日、獄中で、
飛行船が見えた。
低い空を悠々と、靜かに通り過ぎた。
跡は然し、裸木の林の上に、
寒の月が寂しかつた。

オオ、涼しい峠だ、
下り坂が見える。
一日、一日、あすからは、
ズン〳〵とおりてゆく。
あゝ永かつた一年の獄中生活。

自殺は詩的だ、哲學的だ。
萬物の靈長に特有の現象だ。
然し君、賣淫、賣節、賣勳、收賄、
及び一切の金もうけ、

不行状で、
冗員淘汰、人べらし、
解雇、侮蔑、浪費、怠業、
馘首、首きり、エヽうるさい、
『首切つてたくさん、
スピードの世の中。

昔はソウ云つた。
首きり役の手には片輪が出來る。
今はどうだ。
大根の様にザク〳〵やつて、
月給があがつてゆく。

板塀と金網の、
三角形の運動場、
ツイ何となく、
庭鳥になつた、
心持。

入浴が一等。
日なたぼつこもいゝ。
それから何しろ、
毎晩のかしわ餅。
獄中の冬三樂。

醜い女囚、
可愛い女囚。
偶然にも、
シヤミ線の背中合せて、
語つた女囚

必然を否認する、
そこに意識の自由がある。
見よや君、
花は止むを得ざるに咲き、
風は止むを得ざるに吹く。

恬淡、洒落、
平凡、卑俗。
棄石か、
埋草か、
椽の下の力持。

(以上、舊作の燒直しもあり、咄嗟の偶作もあり、たまにはこれでも、推敲を重ねた苦吟もあるが、實は只、『まろめら』の諸作の『五行詩』を見て、ツイ『模作』を試みたに過ぎない。――とし彦。)

ウインター・スポーツ

一、ゴルフ漫文

清原 嘯

新年杓子棒の振り初め

屠蘇機嫌で一年始禮に出掛けた留守を幸に娘さんたちが思ふ存分振り廻して見たいと



親父、兄の[illegible]なドライバーを取り出し親父の愛[illegible]牛[illegible]寫し[illegible]運成功[illegible]中[illegible]とは打て中江中[illegible]知ら



高[illegible]散[illegible]の的[illegible]親父品

ボールの恨

甲球「己の主人程己を憎い[illegible]世の中に[illegible]無くなつて仕舞[illegible]可愛い顔[illegible]
乙球[illegible]マーツー[illegible]
甲球「己は[illegible]



新年初失敗

新春五日の休み、當人わク今日は遊ぶ人好い合コウ

ノ、も一つ流行もの出掛けて少くない誠にエウ打ち方、アーエカ打ちと方々やつて見たところ種々調子よく[illegible]



×客がした樣に思つた瞬間世界に一とあつて二とない我が子以上い武器はあはれ首項垂れにけり

プラス・マイナス

長[illegible]婦人のスカートが段々短くなつて膝の上まで[illegible]上に昇らうとして[illegible]男[illegible]



キアデー泣かせ

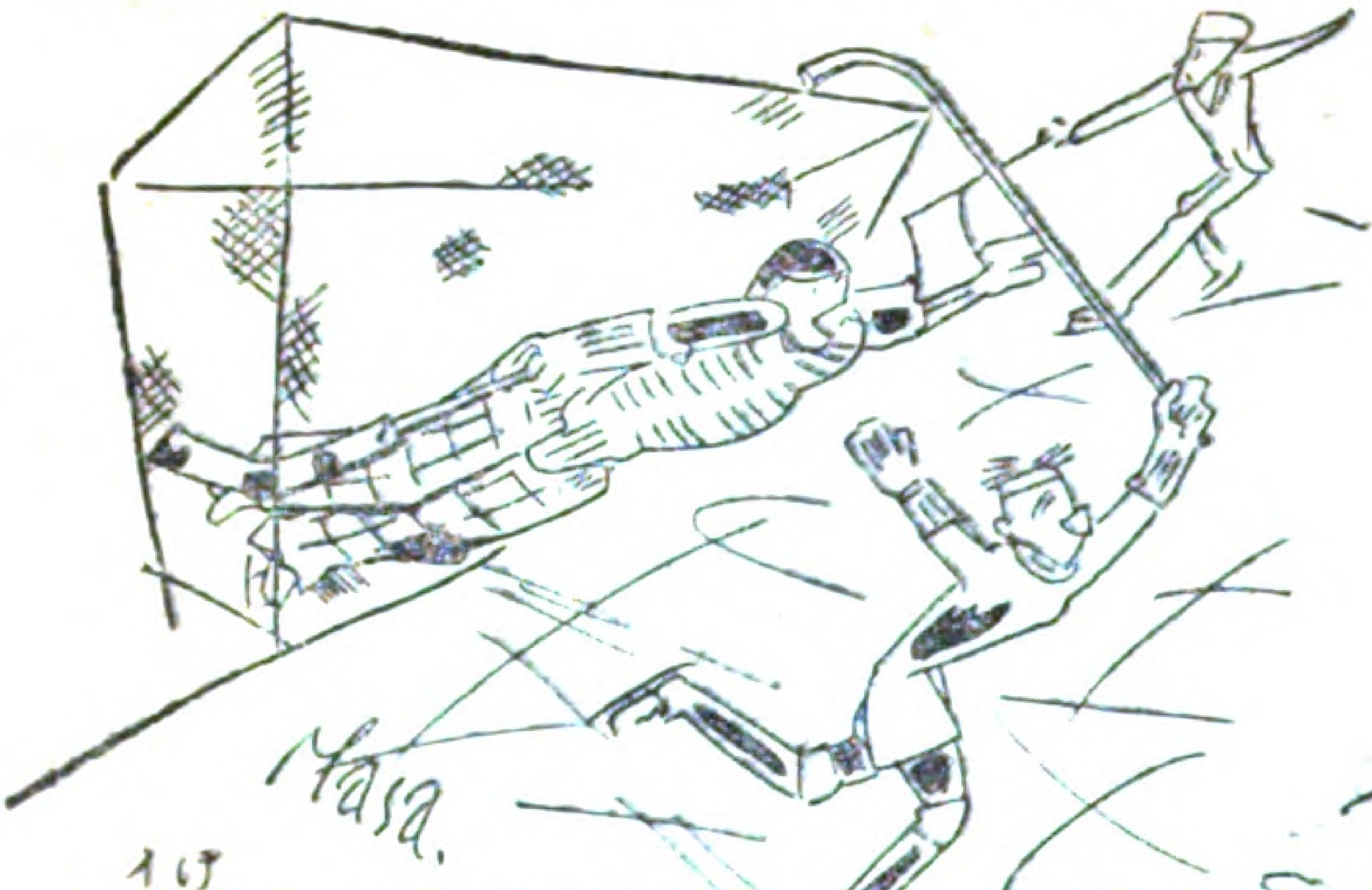
馬鹿力を出して大振りをやる球が東へ行かうが西へ走らうが一向御構ひなく唯距離さへ出れば良いと打ち巻くるゴルファー殿!!





×とも何んと又々トホ[illegible]方向[illegible]ゴルフの御[illegible]結果はキアデー[illegible]一日は[illegible]なかつたと

×四五貫もある袋を背負はされて南へ走つて又球を探して北へ飛んで漸く球の見出せ[illegible]事付けば御苦勞[illegible]もはテツ[illegible]カトツ打ち込[illegible]殿の擧句[illegible]言葉は今[illegible]アーか出





二、スケートの巻

チン没の記

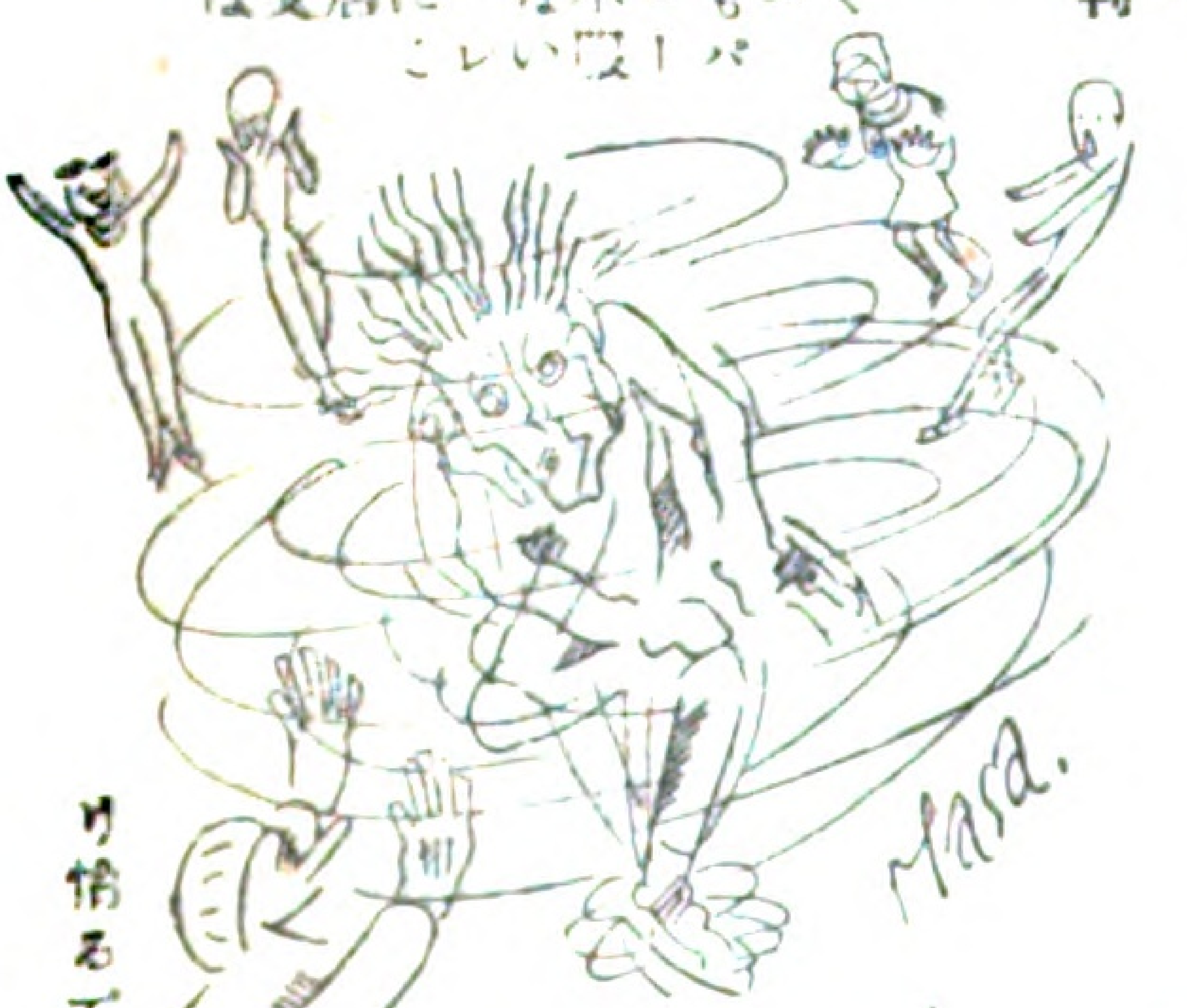
福村曙男（文）
三宅岡也（畫）



新進のスケート選手夜間ひそかに猛練習を企つ月明山間の湖面に映えていとゞ心をそゝる技を磨く事しばし、小用を催すなれど鏡をあざむく氷面にいかにも勿體ない彼は湖岸近く走つて用達に及ぶあゝ好漢湖岸の薄水を忘れたるか忽ちおこる龜裂の音、と共にズンブリー、これチン没にあらずして何ぞや

珍ゴールインと名審判

アイスホッケーの醍醐敵のゴールに攻めよせたフォアワーズは素早くシュートしたゴールキーパア得意の横臥防禦に辛くもパックを脚に受けとめた、ゴールスマンは旗を振つた、不服なキーパア、そんな事は、ないと主張したが見當らない、しツグスカーズの格子の間にこそ挾まつたまゝになつて居る「ゴールスマンの曰く」受けとめた時キーパアの陶笛はインゴールにおりました』



名技風を呼ぶ

↑フリースケーチングの中にジャツクソンヘンス・スピンと云ふのがあるそのスピードも大したもの毛髮が逆立つて面相も自ら怪異となり恰るで暴風の中にあるの觀





親スケート

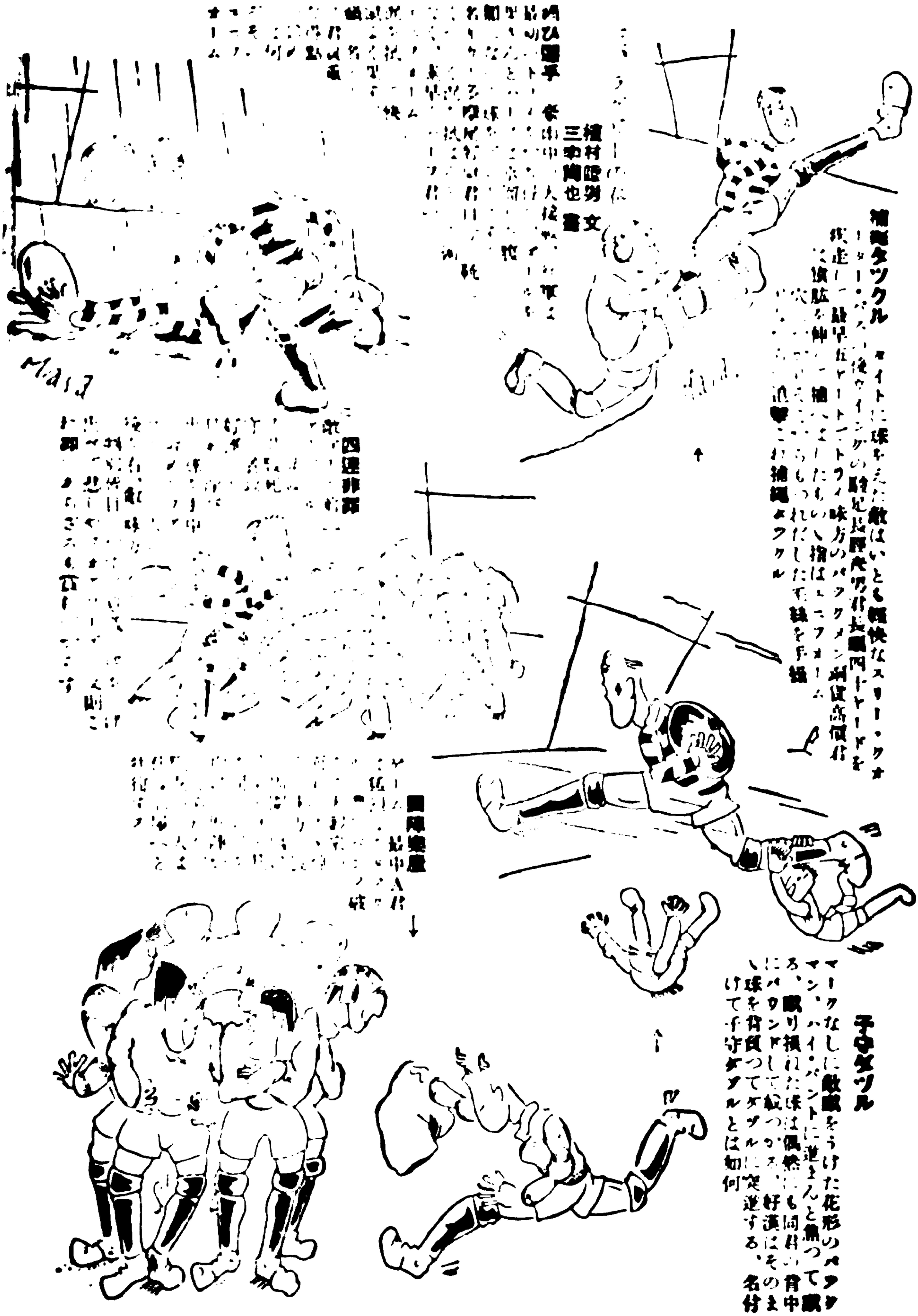
基本練習としてスケートを穿いて立つ事に慣れねばならず、ボーナス

冬休みの家庭奉仕に父子スケートに出掛ける事を思ひ立つた、を利用してスケート二足を買ひ込んで歸つた、子供は歩く丈けでは面白くない遠慮もなく座敷に疊の上で滑る眞似をはじめる、お陰で新年の青疊ブタ〳〵切れてお母さんの涙す事

遠洋航海と腰ぶとん

初めてスケートを試みる人は上手な人に手をとつて貰つて『あんよは上手』をやりやつと轉びつ、まろびつ五六間は動ける樣になると湖水の中心まで出掛けるのだが一間動いて一度位は手をつけるか尻餅をいたゞく、初心者はここで名案腰布團の御採用と云ふ事になる




補助タツクル
ライトに球を蹴た敵はいとも軽快なスリー・クオ
マークなしに敵蹴をうけた花形のバツクマン、ハイ・パントに進まんと焦つて蹴る、蹴り損れた球は偶然にも同君の背中にバウンドして続つづく、好漢はそのまゝ球を背負つてダブルに突進する、名付けて子守ダブルとは如何

四、スキー笑話

森島直三

（一）田口驛や中ノ澤溫泉への下り口は相當の急角度で固く一方は斷崖と難所だ、滑るよりは轉ぶを唯一條件とする己れ達のスキーはこうなると愉快さ餘つて恐怖が百倍だ、然し窮して發明したのが勝五郎式スキーと云ふ





（四）己れの事をそう轉ぶ〳〵と笑つちやいけない、スキーが勝手に轉ぶだけなのだ、よけやうと思ふ方へスキーは勝手に行つて衝突して轉ぶのだ下手で轉ぶわけではないのさ

（二）田口驛から赤倉へ「登らせてもらう時の事」だ一町と行かぬのに己れの足は馬鹿に重さを感じ始めた、己れの足はだん〳〵運轉が利かなくなつた、「不思議の理由は繪の通り」

←





（五）Aさんと[illegible]繪で走らうと云ふ欲い者だ、足・早い者あり[illegible]ちな足が内輪だ、スキーをはくと、二本がどうも平行しない、平行させやうとするとスキーの面が平行にならない、スキーをはきや平地で立つて居ても轉ぶ一の人は天下廣しと雖此の人だとは自慢にもならない。



（三）林檎畑に滑ふ走路を下つて來たと想像し給へ、スキーの奴、どうしたのか左斜め上方の林檎畑の方にスル〳〵と登つてしまつた、之は確にニユートンの法則に反して居る「ニユートンに叱られるぞ」と云つてもスキーは知らぬ顔である

モダァン・ユゥモァ行進曲

布哇の月・水兵！

或は――アメリカ怖るるに足らずか。

久野豊彦

――中食分時――

波頭が散つて白い水仙を立てて、停止してくる一巡洋艦の上から、チラッと、チョルトン君だが。僕んところへ打電してきた。夜明けのことで、僕の家の前で、番犬が、しきりと、吠えてゐた。

「僕と、フジ・ヤマとが見たい。明後日。ヨコハマにつく！」

チョルトン君は、齢、十歳で、パパイアのやうな味のする、小説家志願の男である。女が、とても大好きで、その癖、戦争が大嫌で、これがや――アメリカ、怖るるに足らずてな米国の一水兵である。

蒼い海の上に、シャッポのやうな軍艦が浮動してゐる――。

甲板上へ、僕が訪ねてゆくと、今しも、彼は、大砲の下に跨がつて、こわごわ、巨大な砲口をのぞきながら大砲の咽喉を拭いてゐるところだつた。僕の顔を見ると、チョルトン君は、急に丁寧なとり澄へした。両脚を揃つては、右手で大砲の咽喉をたたきながら、

――僕、いまこれに乗つてゐるところなんです。ちよいと、待つててね！

急に、両手でもつて、チョルトン君が、上衣のポケットを通りまわして、懐中鏡をとりだした。すると、こんどは、けろつと、大砲の上だか何んだか忘れてしまつたやうな顔つきして、夢中になつて、顔と眼をぬりだした。ひとわたり、化粧が済むと、もう一ぺん、会いために、鏡の中で、ニッコリ笑ひながらほし一みてから、

――とても、君に会ひたかつたのよ！

と、甘つたるい声色でぶつたかと思ふと、いきなり、ぴよん、鞠のやうに甲板の上へ飛び下りて跳んでゐた。

チョルトン君は、僕を一月らしい南風の空へ、高く抱きかかへると、何度も、僕のお顔のあたりを接吻する真似をしながら、

――僕は、全く向かうから逃げだしてきた。お隣りに美しい南島があるんですよ。あつちへいつて、日向ぼつこしませうや。

僕を抱かかへたままのチョルトン君は、甲板の方へチャアルストンを躍つてゆく。

――それでなきあ、どうしたつて、今頃、君になんか会へなかつた僕なんですよ。僕は君

に會へて泣いてゐるんです。この通り泣いてゐるんです！

――チョルトン君！　君はうれしくつて泣いてゐるの？

――うゝん！　君に會へて泣いてゐるのさ。

・

僕らの前に、遠く見える富士山の頂を背影にして、これから、チョルトン君の「布哇の月・水兵！」の一番が始まります。

わが親愛なチョルトン君が、地理も分らずに、ホノルルの街を千鳥足に歩るいてゐたのは、椰子の並木に、やや、滿月が傾むきかかつて、時計のやうにぶらさがつてゐる頃だつた。チョルトン君は、並木をぐるぐる廻りながら、どの並木にも滿月のぶらさがつてゐる壯觀を見て、これぢや、どうにも滿月の數が知れないと途方に暮れるほど醉つぱらつてゐた。やつと、並木をゆすぶつてみて、始めて、自分のしたたか醉つぱらつてゐることだけは氣づいたが、しかし、チョルトン君は、背後に引摺る巨大な自分の影までも、(醉酊は、なんと感染し易いものだらうか) 醉つぱらつてゐるとは氣付かなかつた。

どこからか、野生の孔雀が飛んできて、チョルトン君の滑稽な影に戯えかかつた。チョルトン君は――あ！女だつ！と、美しい羽毛から可愛いい夜を想ひだした。すると、チョルトン君の躍りあがつた投影に、吃驚した孔雀が滿月の天の方へ舞ひあがつてしまつた。ぼんやり、女懷しのチョルトン君は月にうたれて、暫く恨めしさうにしてゐたが、やがて、大聲で唄ひだした。

For an Inspiration
watch the birds above,
You'll find consolation
in their song of love

月より他に孔雀の姿は見えなかつた。チョルトン君は、塵に塗れた靴先に瞼を落して、右を引つ込めたが、左が逃げおくれてゐる。左を引つ込めると、今度は、右が取り殘されて。これおや、どうにもと、チョルトン君は後向きのまま、小走りに、あとびさりしだした。

What need are riches and gold
when love is true,
we know from stories of old
[illegible]

チョルトン君の[illegible]に、[illegible]、すでに、「つか[illegible]」[illegible]ひながら走りだした。街角を曲ると、窓邊の闇らしい夜風のなかに、遠く、女の寢ぼけた甘い匂ひでも流れてきさうである。何處かに、大勢、美しい人の住んでる女の寮でもありさうにチョルトン君には思へてならなかつた。見渡すと、遙かの向ふに、紅だの、黄だの、紫、白だのの花々が咲きみだれてゐる花壇を越えて、しほらしくも、宗教の女學校が深い眠りに落ちてゐる。

――ここだッ！

と、チョルトン君は、叫ぶと、花壇を飛び越えた。ここなる女の世界も、また、市街ヌワヌ平地の地つづきなのであらうか、滿月のたかに、ばらばら綠樹の立ちならぶ運動場を切り拔けて、やつとここで、寄宿舍の前まで辿りついた。押したら、入口と出口が入れちがひに出てきさうな扉も、いまは、頑丈な一枚の直線をなしてゐて、ぴくともしない。仕方がないので、窓硝子を押しあげてみると、こんどは難なくあいて、ために、チョルトン

たは、ひとり[illegible]
窓下の[illegible]
ろ押し[illegible]
月光に、一條の[illegible]
[illegible]
一曳いたチャールトンは[illegible]
れが瓦際の[illegible]
頭を振つてみた[illegible]
にチャールトンは[illegible]
き青い髪の毛[illegible]なく、月の光に、白い[illegible]
嵩々[illegible]ゐる
これで、もうたくさんだ。
と、思ふと、チャールトンは、[illegible]
しく[illegible]
――これでも[illegible]チャールトン[illegible]
ば、[illegible]
[illegible]して男らしい中に[illegible]
な[illegible]
すと。
――よろしい[illegible]
一て[illegible]ゐると、チャールトン[illegible]
[illegible]

[illegible]チャールトンは[illegible]
[illegible]してゐたが、こゝにも、なにし
いほど[illegible]、[illegible]の方へ[illegible]
わ[illegible]ゐるうちに、チャールトンは、な
[illegible]
[illegible]
チャールトンは[illegible]
[illegible]
[illegible]
こゝ一歩もいけねえ！
[illegible]チャールトンは[illegible]
[illegible]女のまはりを[illegible]男たち
[illegible]、大のやうに、[illegible]の方へ
[illegible]
[illegible]
チャールトンは、[illegible]
[illegible]満月の方へ[illegible]
[illegible]
[illegible]チャールトンは[illegible]と、後
[illegible]

[illegible]てきて、チャールトンは[illegible]の後姿を追
つかけてゐる。チャールトンは[illegible]、またも、月
[illegible]満月の方へ[illegible]。こん
には、[illegible]、満月ま
でも、髪の毛[illegible]して、[illegible]男のやう
である
――こいつや、どつち向いても[illegible]同じ
ことだ。
後へひつかへしかかると、青い頭が一ぱい
[illegible]がきてゐる。いけねえ！またして
も、頭をかすと、見えてゐるのは満月であ
る。[illegible]行つたりきたり、ぶら
[illegible]てしまつてゐたが、そのうちに、チ
ャールトンは[illegible]の間へ[illegible]と一目
散に[illegible]を越へて、どんどん、
どんどん。ホノルルの夜[illegible]てゆく。
[illegible]
うわ[illegible]の[illegible]、花火のやうに、ぽん
とひらいて――ツイキの[illegible]であるらし
い。
あ[illegible]しくだ[illegible]
チャールトンは[illegible]

ベンチの上に[illegible]

冬の眞夜中だといふのに、サラリーマンらしい男や女たちが霧の中で、きアッきアッと泳ぎ廻りながら、大きなバナナを奪ひあつては喰散ちらしてゐる。

もう、チヨルトン君は、そんな海上の風景なんか透して見る勇氣もなかつた。

——どうでも、しやがれッ！

と、ベンチの上へ仰天すると、お伽噺のやうな、夜の虹の、はづれが、チヨルトン君の脣のあたりへ垂れさがつてきさうである。

——それから、僕は、やつとして、驟雨に起されて二度喫驚しました。

と、今も、チヨルトン君は喫驚したやうな風附をして、話を結んだので、僕はチヨルトン君に云つてやつたのである。

——なに、そんなに喫驚しなくたつて、君の云ふ青々した頭の男つて云ふのは、それあ、日本から布教のために派遣されてゐる尼さんの群なんだよ。

——そいぢや、みんな女だつたのか？

——さうとも！

これ[illegible]、チヨルトン君と別れると、僕は、ふとその足で、[illegible]、自分は、彼女もまた、チヨルトン君に派遣された一人らしい尼さんのと[illegible]

[illegible]

[illegible]ただの[illegible]の中で、[illegible]

[illegible]の木が、益々大きくなりますように[illegible]

ある實景

佐々木味津三

ある一景

——場所は新宿のエム館

ブリタニックの百科辭典に、モダンとは即ちペンキ畫の謂なり、と言ふ説明が附される時があらうとも、新宿のエム館がどんなにすばらしい藝術の場所であるか、それを知らぬ者があるとすれば、迂闊よりもむしろ不埒である。

で、エム館はその日、退却より退却へ——と言ふのが上映中だつた。題名が示すやうにそれは戰爭映畫だつた。

説明は平ノ有聲。

有聲が説明者であつたとするなら、この愛すべき社會批評家であり、人生批評家であり、そしておどろくべき厭世家である其有聲が、その時もウヰスキイを呑んで、説明臺に立つてゐたのは言ふまでもないことだつたが、だから彼はいつもの通りの名舌で、恐るべき語學力を利用し乍ら、スクリーンに就いて、縦横無盡に説明を飛躍させた。

畫は、年取つた醫師に息子があり、醫師のくせに中風で國を擧げての戰爭に出征が出來ないところから、息子を二人分の働きに戰線へ送り、東部のその戰線で、ひどい食糧不足に出會ひ、雨の中のぬかつた泥を、兵士達が

片手でちぎり取つては餓をしのぐために、けだものの如く食ひ食ひ乍ら、食りつゝ、前の敵対してゐる敵に対つて、頑強に抵抗してゐるところだつた。

——まことに何とも悲壮な場面である。

——實にどうも悲壮な場面なのである。

だから、タイトルもそれを訴へてゐるのだつた。

——見よ！　この悲壮！

——見よ！　この壮烈！

有聲もまたかう云つた。

——見よ！　この悲壮！

——見よ！　この壮烈！

そして正に、結局[illegible]たるものの如くに、[illegible]ぶつかる者に大胆もなく強い結果となつて、退却より退却へ、退却より退却へ！とその閒名の小さな通りに追はれていつた。わあ……と云ふやうな叫び聲が、スタリーンの中から聞え、いや、聞えるのではないかと思はれる位に退却が必死となつて、足のもがれた戦友をすら、置いて倒れた敵を踏みつけ、飛びこえ、見を伝つて退却をつゞけた。

こゝで言ふ時、こゝで言ふやうな場面になつた時、少しも説明しないで、場面のまゝに観客へ訴へ、訴へることによつて無数の説明をする方法は、平ノ有聲が創始した名説明方法なのである。

だから平ノ有聲は、その時も黙つたまゝだつた。黙つて畫面の進むにまかせ乍ら、ほどよくウヰスキイで熱した目を、何となく特等席の方へやつた。

と——、一瞬ゐたのだ。

眞正面に、丁度有聲の目の眞正面に、[illegible]その肩にかゝるまし、まさに[illegible]との[illegible]を、[illegible]より[illegible]に移らうとしてゐるセルロイド目鏡をかけツパの[illegible]友だ、[illegible]の一組の戦友が居たのだ。

——有聲は一段と大きく怒鳴つて言つた。

初台、タイトルには畫面にも、何もにもない説明だつたが、有聲は大きく怒鳴つて言つた。

——見よ！　この悲壮！

——見よ！　この壮烈！

——だが、戀は別である。

——接吻もまた別である。

——退却し乍らでも戦は出來るのだ！接吻とても出來るのだ！

一緒に、割れるやうな拍手がエム館をゆるがした。

第二景

——同じ新宿の夜。

「ほら、この通り、いかゞです。ひと塗りつけたら金輪際離れないのがこの接着剤の特長、くツついたかと思ふと、すぐ離れるモダンガアルとはわけが違ふ。ほら、この通り、いかゞです」

その隣でも、メリヤス屋が、巻舌を使ひ乍ら開いて言つた。

「買つたり、買つたり、さあ買つたり。プロレタリヤにはお誂へ向きの靴下が三足たつた三十錢、竹に雀か[illegible]か買ふより、三足三十錢の靴下の方が割りがいいぞ！買はんか！さあ買はんか！」

——全く夜店といふものは、大衆文藝のごとく俗受け限りがない。こう言ふ俗受限りない不調和な騒音の中から生れた調和が、ジャズといふのださうであるから、その時、浜野男爵が、黒目鏡をかけ、コールテンの作業服を着、

まがひもののスネークウッドだ、昔所に於ける的な角度で規則的に振り振り、氣取つてそこを通つてゐたからとて、別に不思議はないのである。なぜかならば、この鼻目がねの近藤男君は、ニウヨーク行進曲だとか、君惚し、と言ふやうな流行歌？――をレコードに吹き込で、九、十、十一月と、三月つゞけてレコードのその印税が月額一萬圓近く宛も懐中にころがり込でゐたからなのだ。――尤も、近藤勇と言ふのはそのニックネームで、女を斬りすてることが實に名人なところから起きた綽名なのだが……。

　で、鼻目鏡の近藤勇君は、これも將來、もう一度ニウヨーク行進曲や、昔戀しい銀座の柳と言ふやうなモダンサノサ節が流行らうものなら、此度一流の名歌手になるに違ひない、弟子をひとり連れて、探偵のやうに目を働かせ乍ら、同じ通りを二度も三度も丹念に往つたり來たりやつた。

　勿論、對手は、このあたりに出沒すると言ふステッキガールを探し出すのが目あてなのだが、奇妙なことにも、この新宿に出沒するステッキガールは必ず二人連れで、同じところを二度も三度も往復に往復してゐる若い女を目標に探したら、間違ひツこない、と言ふことを作家の十方誠三に聞いてゐたからである。

　十二月に這入つてゐたので、夜店の通りはあちらでもこちらでも、人間のもみくちやが出來てゐる程の雜鬧だつた。――しかし、藝術家と言ふものは、たとへレコード藝術家であつたにしても、凡そ女性問題にかけては由來熱心なのが唯一ツの取柄なのである。

　だから、鼻目がねの近藤勇君も、非常なる熱心さだつた。スネークウッドを二十八度から三十二度に、三十二度から四十八度に、だんだん振幅を擴大し乍ら、七週目の往復をまた初めた。

　と――、

「先生！」

　弟子が不意に言ふのだ。

「見つかつたかい。」

「どうもあの二人連がさうらしいですぜ。これで丁度三遍、顏を合はしましたよ。」

　なるほど、さう言はれて見ると、たしかに二遍以上、この同じ通りで見た顏なのである。

　――ひとりはせいぜい十八、否もつとふけても二十二。或は更にふけて二十六七、小間使むら娘らしく少しだぶだぶだが……。

　――他のひとりは二十六七、或はもう少し若くて二十一二。或はさらに若くて十七八。勿論洋裝。尤もお手製らしく少しきつすぎるやうだが……。

　そして二人とも、マルクス以前の倫理學の智識に乏しいやうな目つきをして、ねつとりとこちらを見たのだ。

　――近藤勇君は、鼻目がねをかけ直し乍ら、人込を追ひぬいて、そこの支那料理屋の角のところで、二人に追ひつくと、やゝ氣取り氣味のテノールで言つた。

「どうです？いきませんか」

「まあ！――。」

　すると女共が言つたことである。

「ぢや、やつぱりあなた方がさうだつたのね。ずゐ分探したのよ。一時間いくら？」

「えゝ？」

「一時間いくらなのよ。」

「…………？」

「いやに氣取つてるわね。あなた方オペラパ

……ボーイがゐないのだし

蓄音器といふものは有難いものだ。僕は[illegible]きたいことが出来ても、今は此を[illegible]むことが出来ないと見えて、オペラバックボーイに聞

靴下止が腕時計になつた話

龍膽寺　雄

[illegible]た有名なレコードの演奏は、十一円にも八千円近いレコードの円盤を手に入れたといふ話である。

[illegible]新しい[illegible]を容れて[illegible]取寄せるのです。[illegible]人に、何げない振りのいい男なのですが、[illegible]用事もこれはまた何に[illegible]なかなか[illegible]な男らしいのです。──

それは友達がわたしによく[illegible]話があるので、す[illegible]、なにか[illegible]なかなか[illegible]もで[illegible]ないので[illegible]なり[illegible]行列が一[illegible]して[illegible]ばかりか[illegible]ことだ[illegible]、何[illegible]この[illegible]ない。下[illegible]開け[illegible]下さい。

そら、こんなことが書いてありますから。

・・・

── [illegible]何かソソソソと落ちつかないで[illegible]たんで、すると[illegible]時[illegible]したつもりだつたんだが、[illegible]間に[illegible]付かれて、[illegible]けてから[illegible]ることになつて、[illegible]へ引[illegible]上げ[illegible]時計ビ[illegible]われる[illegible]

[illegible]くなつて、[illegible]五階の窓から十字路の電車通へブラさがつてみせると言ひ出したんだ。

『やれ、やれ！』

W・の[illegible]の一味が泡だらけの赤い顔でおだてる。

『[illegible]週、よせ！』

C・の方の一味が止める。

『[illegible]して』

と、僕はビールの泡を頭からたらしながら叫ぶのだ。

『[illegible]が何と云はうと、僕はこゝからブラさがつてみせる！』

[illegible]僕は、コック部屋から細引を探し出して、そのはしをスチームの暖房へ縛へつけ、みんなのとめるのも振切つて、ヨロヨロと窓へ[illegible]つたんだが、どうも眼がクラクラして、[illegible]人間の頭がウヨウヨ蠢めいて居る下のペエヴメントが、僕の頭の上にあるんだ。

いや[illegible]、もう一[illegible]引つか[illegible]二

[illegible]をぶり、[illegible]パチ[illegible]もう一度これらの[illegible]の風景を[illegible]が、これから手を振つて叫んだわけだ。

『おい、もう一杯！……ナミナミと一杯持つて來い！』

『おいおい。』

と、C・がお尻のところから叫ぶのだ。

『お前、さかさまに降りる氣かい？』

さかさまだつて何だつて、とにかく俺は地べたの方へ、ごくあたりまへにブラさがりたいんだから、その前に天地をひと通り引ッ繰返さなきアならん。ノメノメと蒼空へなんぞブラさがつた日にア、幾ら何でも突飛すぎて、少しは外聞てものもあらア！

お人よしのS・がコップにナミナミと一杯泡をたらして運んで來たのを、一息に干すと、俺は靴へからんだ麻縄をはづして、さてもう一度地べたを見るんだが、今度は變に斜に天地が曲ッちまつてるんで、まゝよ、曲つてるんなら曲つたなり降りちまへてんで、やッきに止めだてする仲間の手を振切つて、ズルズルと紐を繰つて行くと、何と！　酔ッ拂つてもそこは確かなもんで、ちやんと地面へ向い[illegible]一[illegible]いた。

[illegible]と、や、[illegible]何なの[illegible]が、[illegible]なつて[illegible]れ騒ぐわ！

へ、何と凄い放れ業だらう？

と、――不意に何かの出ッ張りに脚が届いたので、紐の手をちよいとゆるめて身を[illegible]らせると、硝子窓を隔てゝ薄暗い部屋の中に、こッち向きに若い女の顔が一つ貼付いてる。待て、こゝは四階だな。さう、何とか云ふけちな商事會社だッけ。

息で硝子が曇ッちまふので、俺は手のひらでクルクルとそこらをぬたくつて、鼻の頭を押付けてみたら、女は眼やに驚いて、しやッくりがとまつた樣にしやちこ張ッちまつてるが、天晴れな佳人で、おまけに一人だ！

で、俺は硝子越しに手を振り振り、演説をはじめたわけさ。

『驚きたまふな佳人。余は今引力に支配されてるだけで、多少は酔つてるが別條はない。は、は！　いや、わが憬れの佳人よ。願はくばそのいとか細き佳がみ手に、わが接吻(くちづけ)を。……と云つたつて、へ！　衛生。硝子が邪魔だ。……』

[illegible]ようと[illegible]仲間の[illegible]に[illegible]つて、その[illegible]と、江湖に靴が掛つて、ガタリと錠がはずれてブラさがつたはづみに、窓硝子が開いて女の手が内からしッかと俺の腕へからんだ。

『まア、危ない！……』

『なに、なに。』

と、俺は靴先でもう一度足場をさぐつて、女に抱かれたまゝ、騎士の様に慇懃深く、彼女の顔に唇を寄せるのだつた。

『わ、わしは、それより、そなたの唇が……』

ロメオとジエリエットの思ひがけない濡れ場のあとで、五階へ俺はもう一度引ッ返してひとはしやぎはしやいでから、すつかりはしやぎ疲れて仲間と表へ出ると、冷たい一月の風がペエヴメントを撫でて、――ゾクゾクと、いや、何とやらん嬉しいので。

仲間と別れて、街角にふと立止まると、さうさう、忘れて居た。買物があるんだッけ。

靴下止と耳掻と。

それから、これは買物だか何だか、床屋！
俺は財布を出して念のため今日の勘定へ小調べてみた。よしよし、ぬかるない、ぬかるない。
それにしても。――四階のあのけちな商事會社に、あんな素晴らしいタイピストが居やうとは思ひがけなかつた。こいつこそ大ぬかりものさ。が、待て。俺の顔には紙がくつついちや居ないかな？
ひと通り買物がすまし。さて、家へ歸らうと、四階町の街で路をめぐらすと、ぱつと醒めず、だしぬけに四ツ角で向き合つて、危ない衝突。
や。や。や！
『さ、さ、ほ、ほ……』
偶然と花の如き微笑。――四階の窓のかが……エヲエット！
拾得よりはまだ胸は騒ぎたくつて。シャッポを、俺は脱いだが、帰りも鮮やかにポッアドつ胸は固まつてゐるので、僅かな顔のあたたりも揺きながら。
『ミ、ゞはすつかり。……のも、随一縛つちまつてたもんですから。今お歸りで、ね……そうですか。お宅はどちらで、お近く。ほう。お近いんですね……ぼうですね。そこらで、御一緒にお茶でも、はア、どう致しまして。光榮で、……では、どうぞ』
『ぬけッくりでいらつしやいますのね。いつも今時分？』
卵子が挾むと、女がなつつこく口を切るのだ。――
『いや』
と、どうにも俺はてれちまつて、
『買物をして、床屋へなんぞ寄つてたもんですから。どうも何ですね。この二三日梅雨に涼いですな。……同じ家の上下に住んでながら、一遍も今までに顔を合はせなかつたなんて。それがまた妙な縁で、こんなに偶然打解けてつき合つて戴けるなんて、何ですね、やはり運命ですかね。運命だとしても、めッたにない素晴らしい運命で。……は、は、明日からは晝へ出るのが樂みですよ』
『あら』
女は爽やかに眼を瞬つて。
『……あたくしこそ』
『僕は素晴らしいことを今ちやッと考へついたんです。今日のお禮にね。……實際、あんな重要をして、あんたにあの所、倒しに會はなかつたら、や、今思つてもゾッとしますよ』
『まア大變。お嫌なんて。……』
『いやいや。ほんの僕の好意なんです。いれて戴かなくつちやア。……實に、實に、あんたは美しいですね。あ！僕は仕合せもんだ。……』
勘定をして、外へ出ようとしたら、不意に女給に呼止められた。
『もし。このお忘れもの、あなたではございませんか』
『や。や』
と、シャッポの上から俺は頭を掻いて、
『有難う。有難う。大事なもんです。……どうも僕はそゝッかしくつて』
女と並んでへエヴェニトを歩きながら、俺は俺なくカフェの卓子へ忘れて來たつた小さな紙包を、カサカサと開けるのだ。
『僕、素晴らしいものを買つたんです。見て下さいませんか』
『まア』
女の眼が次第に好奇心に光るのだ。

『拜見さして、どこで……』

プロオチの代りに小さな寫眞の這入る仕掛になつて居る粋な男用の靴下止。好奇の仕様では途方もなくエロチツクなしろものだが。——大賣紙張りの小箱をウヰンドウの灯影でパチンと開けると、おや、これはまた何と！現れたのは自慢の靴下止ぢやなくつて、金色燦然たる婦人持ちの腕時計。

『あらッ！』

女は躍りあがつて小さく叫び、それからおづおづと手を出すのだ。

『はてな？』

俺はあはてゝ、オ、ヴアのポケツトへ指を突ッ込んだが、中には紙包がちやんと二つ。中味の堅いのは確かに靴下止のあの小箱で。

——

してみると？

あッ、俺はひとの忘れものをさらッて來ちまつた！

女はしかし嬉しげに俺の胸に頰べたをすりつけて、鼻から甘ッたれながらつぶやくのだ。

『まア、こんな立派なものを！……あたくし、でもすみませんわ。こんなものを戴いたりしちや……』

『いや、な、なに』

とどもりながら、しかし、俺は何かなしにエヅメントに暇たとめ、人指し指で小い頭から忙がしく爪を嚙んだが、一二度眼玉をパチパチさせると、女はうッちやつて、だしぬけにそこへしやちこ張つちまふんだつた。

しまッた！

時計で思ひ出したが、——今夜は俺の婚禮なんだ、い、もの忘れて來てのに、何と、これで……ヂーヤに、時計の贈へ通い、世界中と注意に使いて下へおきてしときなが……！

こゝまで、讀んでさすが好奇心の僕も、時然とへエヅな閉ぢるのです。——なぜッて、御承知の樣に、僕はまだ獨身なのですからね。

Wanted : Bald-Heads

石濱金作

1 Wantad : Bald-Heads

「禿げ頭入用」、——禿げ頭なんか一體何にするのかと思ふと

『尊敬すべき禿頭の紳士十二人、目下賣り廣め中の商品廣告のため、簡單な縮人廣告文を禿頭上に記入したし。禿頭紳士等は、劇場音樂會等通例帽子を用ひざる公開の席に、案例を求めらるべし。自信ある士は勇敢に御應募せられよ!!』

だつて。

これが謹嚴なイギリスの、最近の事なんだから笑はせる。ギヤルソンから乞食に至るまで尤もらしい顏付をしてゐるイギリスの事だから、音樂會や劇場の廊下などを尤もらしい顏をして、身には燕尾服かモーニングでもつ

[illegible]

2 四大學教授

[illegible]

といふ事が新聞に出たのは、つい此間の事である [illegible] 九州大學と云ふから [illegible]

[illegible]

なくユーモアである。さてそこらの俗政治家、俗學者、俗文士等。この所でウント一つ [illegible] して安心するがよい。僕でもなんでも、更に [illegible] 通る間はそれでよいのだ [illegible]

僕と云ふ [illegible] ——だん〳〵と哲學者の出てくる世の中だから、今しばらく僕 [illegible]

[illegible]

3 口惜しがる奥さん

[illegible]

貴な家庭の奥さまらしいなんて、いつたい何が作つたのかと思ふと、他愛のない編み物である。

この奥さま同志最近ひどく仲がいゝ。二人ともオキヤンで、ハイカラで、そして不良である。頭の結び方から、着物の柄は勿論、履物まで故意と二人は正に正反對のものを約束して作りあげる。毎日〳〵交代で、二人が正反對の裝ひをして街を驚かせようといふのである。仲のいゝ二人が、持物から服裝まで、同じものにするといふのは舊時代で、新時代はコントラストの魅力を心得てゐるので、正反對のものにしなければならぬ。

さて餘談はさてをき、女なんてケチなものである。こんな不良でハイカラな奥さん同志でもやつぱり女らしい所がある。といふのは例の編み物である。一方の奥さまが氣まぐれに作つたものを、他方の奥さまが、不思議に羨やんだ。しかも若奥さまだのに。

その晩から一週間程二人は外出を止めて了つた。なにをしてゐるのかと思ふと、二人でしきりに編み物をやつてゐるのである。一方の奥さまが、も一人の奥さきに、編み物を習つてゐるのだ。

さて不良でハイカラだから頭がいゝ。すぐ一方の奥さまも編み物を習つて了つた。方法を覺えて了つたのだ。

すると二人は喧嘩して了つた。一方の奥さまの旦那さまが、他方の奥さまの旦那さまより、男がいゝ。いゝ男だと云つたとか云はぬとかいふのが喧嘩のもとである。二人は道で會つても挨拶もしなくなつて了つた。

クリスマスの夜である。宴會とダンスと社交――お金持の閑人にはなりたいものである。

さて兩方の夫婦が會つた。見ると、編み物を知らなくて、一方の奥さまから習つて覺えた方の奥さまの旦那樣が――（えゝ面倒くさい）――兎に角そのいゝ男が、柄にもなくへんに野暮くさいチヨッキみたようなものを身につけて、會ふ人毎に、

『えゝ、これはウチの家内が作りましたんで、自分でわたしの爲めに編んでくれましたので、えゝ、たいへん暖かで――』

するとまた不思議なもので、人々は皆その彼の家庭を羨ましいものと稱讃し、彼を化形[illegible]

口惜しいのは[illegible]奥さまに、編み物を教へてやつた奥さまだ。しかも相手にその編み物で、今晩の家庭は稱讃らしい化形になつてゐる！　何がいゝ男か、ヤボだめ！

それはまアそれとして、あの奥さまと仲のよかつた頃一緒に作つた着物はその晩みな、ズタ〳〵に切つて了つたので、幾分氣ぶんは晴れたが、晴れないのは、相手に編み物の方法を、敎へてやつた事だ。嫌！　もう一ぺん相手にそれを忘れさせて了ふ方法はないものだらうか。

『人間の過去は消し得る。しかし記憶だけは消せない。相手の人間の頭の中にのこつてゐる記憶を、どうかしてこつちから消して了ふ方法はないものか。科學は進歩したといふが、一旦敎へてやつた編み物の方法を、もう一ぺん忘れさせて了ふ位の術が、まだ人類に出來てゐないとは、そも〳〵何の文明ぞや！』

かつて編み物を敎へてやつた仲いよかつた奥さまは、その夜一〳〵と、人智の發達のマドロッコシサを怒じて齒を喰ひしばつた。

だからあ一に二人にものを[illegible]へるものなや
ない。困つてあ[illegible]も[illegible]人ならるいけ、當代
の賢人[illegible]女である。

4 哀れな戀人同志

彼と彼女とは、四疊の[illegible]に人で家を借り出して、同棲生活が始まつた。同棲生活と云つても、男はまだ學校を出[illegible]て[illegible]だから何等[illegible]である。一人であるムサクルシイ家の一ト間を間借りした。

狭くつても不自由でも、室の其の日其の日[illegible]楽しい。[illegible]だから、[illegible]にぶらぶら[illegible]人。何も[illegible]無理はなかつたが、只一つ。

[illegible]ステヒキ手。[illegible]何も不自由はないが、只一つ、大便をする時、何時でもまごまごしてるのを[illegible]せずに、ブーブーと[illegible]大きく一つやりたい。隣の部屋の人に遠慮がなく、[illegible]で堂々と大便[illegible]てみたい。ステヒキ手。

「ママ、そんな事[illegible]出來ない[illegible]わかりませんか。堂々とおやりなさいよ。あたし一二男[illegible]のありませんか。[illegible]でもよかし。

あたしまだでしよう。わたしおならの時いつもつくえを[illegible]叩いて自分の家だけに一軒[illegible]いと思ひますか。[illegible]て」

と、彼女は何か[illegible]て云ふ事に

「わたし[illegible]いつもすぐバタンと戸をしめると、すぐ次にシャーッて一ーあんまり聴こえすぎやうで、わたし隣りのお部屋の人に自分の[illegible]よりがわるいわ。あらいやよ。あなたもそんな風なさるの。男の方つて皆いやだわねえ。」

「アハヘヘ。バタンと戸をしめて、次にシャーッか！[illegible]るほど。[illegible]るほど、[illegible]だなア」

男もそれで無謀になつた。無謀になるだけなのも[illegible]あつた。こんな夫婦は、キャット円滑する。今に大きな所を立て、女を[illegible]もなく[illegible]まア、[illegible]まあお[illegible]話でもないから、この辺で[illegible]

今[illegible]は、これ[illegible]から[illegible]いてゐる！

痩せる秘訣

[illegible]日一回三人に[illegible]。減食は何よりもよい[illegible]であることは[illegible]で[illegible]に[illegible]中略[illegible]である。[illegible]の現代に[illegible]ではない。然しヨーロッパ大戦の[illegible]からチェック、ヨーロッパの[illegible]へ[illegible]チコ[illegible]に[illegible]い[illegible]は、[illegible]に一[illegible]い[illegible]は一[illegible]一[illegible]にれ[illegible]の[illegible]の中[illegible]し、[illegible]に[illegible]。[illegible]の[illegible]は[illegible]。[illegible]一[illegible]てそして[illegible]。[illegible]少し[illegible]。[illegible]みさまある[illegible]となり[illegible]も大[illegible]よ[illegible]不の[illegible]に[illegible]一[illegible]一[illegible]である。

¥1.20

"VALET" Auto Strop Safety Razor

バレーには
トオキーの様な近代味がある

剃刀であり研器ともなる二種の精巧な機構が高速度に働いて感覺に新しい滿足を與へます

× × × ×

一枚の刄が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型 一・三五〇以上各種

C型 一・二〇 一・七〇 三・三〇 四・八〇

替刄及利用ナイフ（刄一枚付）・八〇

販賣所 大百貨店著名洋物雜貨金物店等

取次 中央公論社代理部



Onoto the Pen

オノトの形態美と感覺美

オノトの形態はデリケートな近代人の審美感にピッタリさせ來る手頃の大さ輕さである。

インキの滴出が巧みにペンの走りに伴ふから快よいテンポを以て朗らかに執筆が續けられる。

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆 七圓五拾錢以上

アテナ萬年筆 參圓五拾錢以上

萬年筆用アテナインキ 參拾五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戸 京都 名古屋

横濱 福岡 仙臺 札幌

東京―神田・三田・芝・早稲田・丸ビル

アメリカ通信

世界一の離婚市場

本誌特派員 在リノ市 清澤洌

1 離婚の大量生産

アメリカに今一つの世界ができた。

わたし達がアメリカの道を歩くと、毎日三つばかりづゝ「世界一」に打つかる。これが世界一の劇場であつて、これが世界一の自動車道である。あれが世界一綺麗な工場であつて、これは世界一いゝ氣候である。

『なにしろ世界一なんだぜ、すこしぐらゐ外聞が惡いのは我慢するさ』

そうでも考へてゐはしないかと思はれるほど、とに角世界一まで持つて來ないと、話しはアメリカ人の腑に落ちない。

その世界一揃ひのアメリカに、今度離婚を唯一の産業とする都市が出來た。大量生産の本場であるアメリカの産業が、自動車や機械に限つてゐると思ふなら、あなたは明白に近頃のアメリカを知らない。デトロイトが自動車で鳴るやうに、ヘリウッドが映畫の名所であるやうに、ピッツバルグが鐵で生きてゐるやうに、今、リノは離婚の本山として、アメリカ一流のスピードを以て、離婚製造の車を廻してゐる。

この離婚の王都に、私が鞄一つ持つてついた時は、もう六時も餘程すぎて、四邊は暗くなつてゐた。朝八時にサンフランシスコを出て、目に餘るやうな廣い平原を眺めたのは始めの三四時間だけ。その後は、わたし達を乘せた汽車は、米大陸の西部を南から北に這ふシーラ・ネヴアダの山また山を、這ひ上がるやうに進んで行つた。米国西北部の山は、どこに行つても鬱蒼たる森林ばかりであるのに、この方面は雨が足らないので、坊主頭を蟲が食つたやうな禿山ばかりが續いてゐる。汽車の中には若い男と女の一組が、手提の蓄音機を持ち込んで、ジヤズばかりやつてゐた。

『どこにお出でになるんですか』

私をのせたタキシーの運轉手が、そういつて私を顧みた。

『リヴアーサイド・ホテルにやつてくれ』

『リヴアサイド・・・・？ ヘア』

かれは私の云つたことを繰り返してニヤリと笑つた。

私がリノ行きを決心してから、私は何回この笑ひに打突かつたか知れない。特急列車でシアトルから桑港から來る途中に、私は日本と大

すな商賣をしてゐるニューヨークの米人と仲よしになつた。
「どこに行くんだ」といふから「一寸香港に行つて、そこからリノに行くんだ」と答へると
「リノ？　お嫁を休みに行くんかね」
といつて、かれはニヤッと笑つたものだつた。これから香港に來てからも、リノを云ひ出すと、いつでもこの氣味の惡い笑ひが、私を待つてゐた。
「リバーサイドにはお一人ですか」
シヤフアーは走り出しながらいつた。
「ウン、一人だがどうして　そこが一番いゝホテルなんだらう」
「私はまたお客さまがお泊めになりにお出でだと思つたんで……」
自動車が兩側に空間のないまでに並んでゐるアスファルトの綺麗な通つて、六階建の大ホテルにつくと、案内係の係員がさういつた。
「アパートメントしか殘つてゐませんので……御兩間のお客様にはどうも……私共の同じ經營のホテルが、もう一つありますが、そちらなら空室がありますが」
私は「一人の客」に相應はしいホテルに引きかへした。

2　ビッグゲスト・リットル・シチー

リノの町らしい街の入口には、大きな電燈の文字で、[illegible]は横に流れてゐる。[illegible]
私は一人、町を散歩して、この文字を見ると、アメリカが發見した[illegible]に笑ひ出した。ビッグゲスト・リットル・シチーはいかにもいゝではないか。「世界一大なる小都市」とはなんといふアメリカン・エキスプレッションであらう。
いかにもリノ市はビッグゲスト・リットル・シチーである。その町に二萬にたらない町である。一萬の人口が有する町が、どうアメリカ人の口を借りても、ビッグゲスト・シチー・イン・ザ・ウオールドではありえなからう。併し「世界一」はこの場合是非共必要である。そこで考へ出したのが、ビッグゲスト・リットル・シチー。
が、ビッグゲストが單に最大級の言葉としてだけの意味だと思へば間違ふ。リノ市はいろ／＼な意味で正味ビッグゲストなのだ。それは、快樂の神よ、不幸の神よ、異邦人である私も、こゝへ足を踏み込んだその瞬間から、あなたの前にそう跪づきする。
リノ市といふ小さい町が昨年中に離婚を許可した數が一千九十五件あり、結婚が成立した數が三千七件ある。
「人口が二萬だから十人當りに一人以上の割合ですよ。併しいくらリノ人だつて、そう毎年が靴下のやうに取り代へられるものではありませんよ。……そうだとそれこそリノは天國ですがね」
私と話してゐたある役所の事務員が、よくアメリカ人がやる片目をちよつとつぶつて、そう附け加へながらいつた。
「この内の八割までは他州人です。なにしろこゝではどんなことでも離婚の理由になるんですから。他州で六かしいと思ふものはみんなこゝへやつて來るんです。本年は離婚數は二千五百件は下りますまい。この人々が落す金を考へて下さい」
リノ市では離婚が、どんな理由でも出來るが、たゞ一つの條件があ

る。それはネバダ州に三ケ月だけ定住せねばならないことである。選擧權などを行使するには六ケ月の定住を必要とするが、離婚のためには三ケ月だけで州民としての特權を行使される。こゝに離婚市の種がある。

『あなたと御一緒の汽車でも、若い婦人などが澤山下りたでせう。あの人々は翌日は、まづ役場に行つて居住屆けをするのです。そして三ケ月の後には裁判所に行つて、離婚の訴訟をします。さうなれば後は辯護士がついてゐるから譯はありません』

離婚の卒業證書を得るまでの三ケ月間、この人々は何をしてゐるか。貧乏人がわざ〳〵大陸を横ぎつて、こゝまで來る氣遣ひはない。かれ等は金とタイムがありあまる連中である。

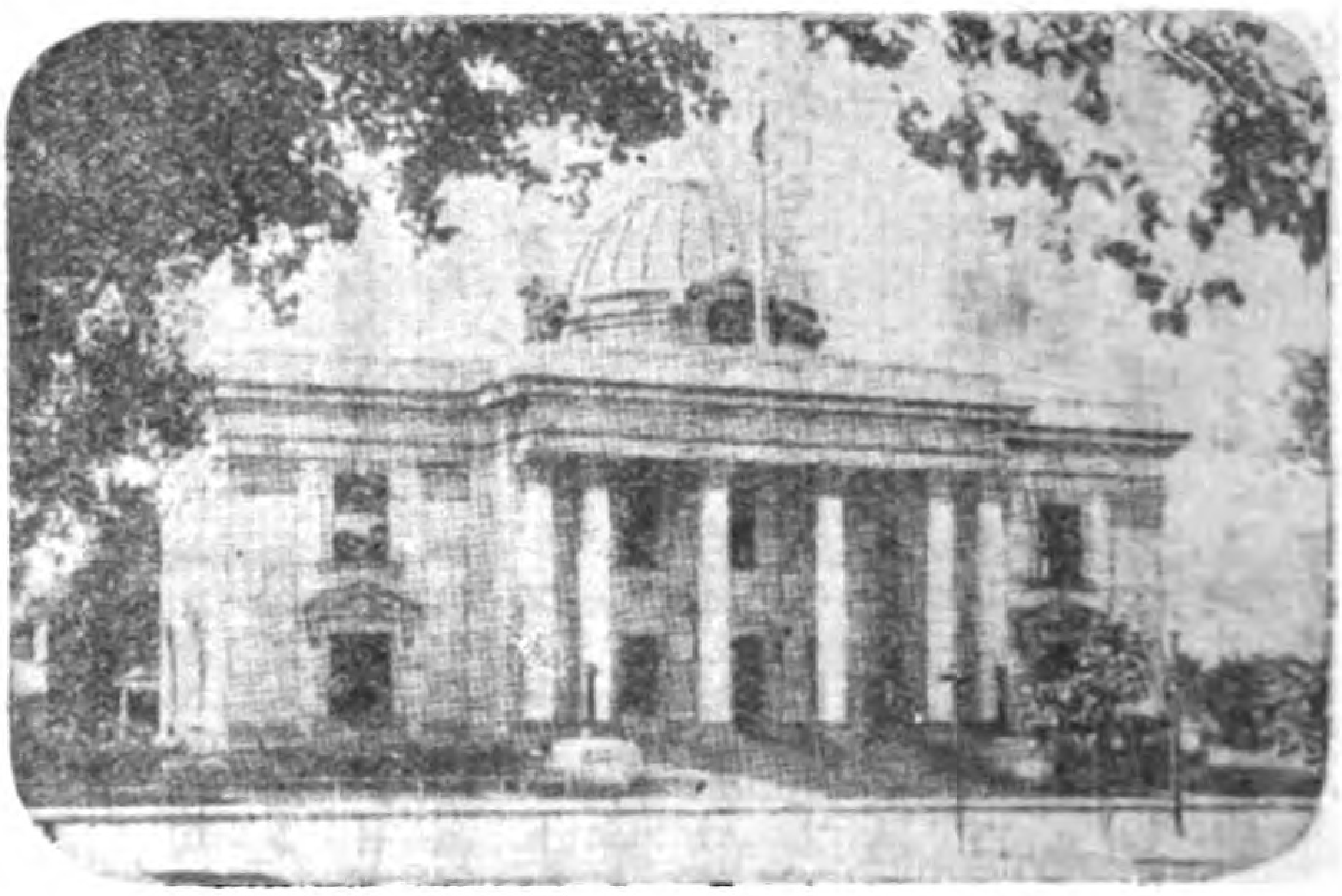
『あのリバーサイド・ホテルなども、三ケ月を暮すために造られたものなのです。その內部はアパートメント式でニューヨークのどんなホテルに行つたつて及びもつきません。一ケ月にアパートメント一つで百八九十ドルから二百ドルぐらゐします。その外に御飯を食ひ、酒を呑み、自動車を使ひませう。リノから離婚を取り去つたら何にもなくなりますよ』

リノが現はれるまで世界一の離婚市場はパリーであつた。米國の金持で家庭爭議を有するものは、みんなパリーに行つた。そこへ國內市場が出現した。內國品奬勵の意味からも、便利のためからも、離婚の本場はリノ市に移つた。

この離婚産業からリノ市がうる收入は、一ケ年三百五十萬ドルを下らない。そしてこれは雪達磨をころがすやうに增えて行つて、昨年は一昨年に比して一百五十萬ドルの增加である。

『この近くにはイリー銅山といふのがあつて相當盛んにやつてゐますが、鑛山は大體に不景氣で自立出來ません。リノの最大唯一といつてもいゝ産業が離婚であることは事實です』

私と語つたリノ・ガゼットの主筆といふ人も、素直にさう承認した。



離婚希望者のメッカ・リノの裁判所

3　公開の賭博場と女の町

鞄をホテルにをいて、私はこのビッゲスト・リットル・シチーにスモーレスト・トラヴエラーとして街の辻に立つた。世界一の氣候は、輕井澤…世界一であらうところの……それに似て、少し寒いが空氣が乾き切つてゐて氣持がいゝ。

私の前をいろ〳〵な人間が通る。

アメリカ印度人のあの銅色の顏が、毛布につゝまれて、いづれは亡滅の道に落ち込むであらうやうに過ぎる。近くの鑛山に働いてゐるであらうところのオヴア・シヤーツを着て汚れぬいた帽子の勞働者がよ

きる。そのすぐ後からニューヨークの社交界にも、そう沢山は見られないであらうレーテスト・ファッションの一對の男女が、飾りつけの人形のやうに一つの影になつて通りぬける。それから昔しの活動寫眞に出て來るカウボーイ姿が續く……

かれ等は何處に行く。ニューヨークとワイルド・ウエストと、社交界と勞働者と、藝術者達と賣淫階級と、アメリカの總ての社會層を、こねて交ぜたやうな群衆は、これからどこに落ち込まうとするのだ。

町の辻には原色のサインで幾つも×××クラブといふ文字が大きく光つてゐる。人群の後について行くと、それは一間の賭博場だ。大きなドルが山のやうにつんで、球場のボーイが球をとりかへるやうな手付きで、ビヂネスを進めてゐる。

「かういふ場處が幾つあるか數へられるもんか。こゝらは新開でさアね」私の傍に腰かけてゐた勞働者が私にさう説明してくれた。

「そら、あの賽子を振つてゐる男があるでせう。あれ等は一日八時間働きで十ドルづつとつてゐるんだ。いゝ商賣ぢやないか」

近くの鑛山に働いてゐるといふかれは、ねたましさうにいつた。賭博場には幾つものゲームがあつて、そのテーブルをめぐつて十名ぐらゐづゝがドルを張つてゐる。

「おれに幾らか張らしてくれないか。倍儲けてあげるよ」

私が默つてみてゐるのを見て、一人の眼の險しい勞働者風の男が、私のところにやつて來ていつた。

「今夜は駄目。この次ぎにやらしてあげるよ」

私はさういつてそこを出た。

そこから私はミネラル・クラブといふサインのある扉を開けた。

「なにか用があるんだい」

先方の小さい穴から目が光つたと思ふと、一人の男が出て來て私に鋭くいつた。

「お酒が呑みたいんだ。ビールがあるかね」

「お這入りなさい」

かれは私が日本人であることを知つて安心したらしい。日本人には、かれ等禁酒法違反者を中に打ち込む役人はゐないのだから。

二重のドアーを開けて中に入ると、中には男や女が醉拂つて呑んでゐた。禁酒以前にあつたと同じ形式の酒場で、そのカウンターの前の金椅に腰かけながらハイボールをあをつてゐる厚化粧の女の目は、もうドロンとしてゐた。

「この間、あの近くの酒場が中央政府の役人の手であげられてから、お客が臆病にするやうになつたんだ」そのあくる日、ある人が私に説明してくれた。「ネヴァダ州には禁酒法はないんです。だから州の警官などはこれに少しも手をつけない。中央政府の禁酒監督の役人が來てゐるが、その方の警官が四五人だけなんですから、どうにもなるもんではありませんよ。それに禁酒の役人には、ちやんと賄賂があがりますしネ。併し役人としても、たまにはあげなければ中央に對して成績が立たないから、差し障りのないところだけを一年に二三回あげるんです」

米國が禁酒國だと思ふ人よ。リノ市に行つて、ビールやワインが大

ぴらに廣告されて居るのを御覽なさい。

　そればかりではない。リノ市には公開の女郎屋がある。町より少し離れた一劃で、その目的を以て行かなければ通れないところである。

『寫眞はとつてはいけません』

　寫眞機を擴げてゐる私に、外に立つてゐた巡査が注意しながら話した。かれは話しながら私のポケットにあつた葉卷(シガー)を一つぬき出して火をつけた。アメリカの巡査と相對して、まづ始めにシガーを出さなかつたのが私の云ひやうのない落度であつた。

『こゝに四五十人ゐようかネ。一週間に一回づゝ檢疫するんだ。これは支那人のルイ・キングといふ人が持つてゐるが、百萬ドルぐらゐの金持だぜ。女一人が一日二弗五十センツづゝ家賃を出すんだから儲かろうじやないか。いゝ男ですぜ、時に貴方(あんた)はどこからお出でなすつた』

『おれは支那人ぢやない、日本人だよ』

『アイ・ソート・ソー。アイ・ソート・ソー』

　かれは遍てゝそういつた。

　支那人は賭博とダウン・ウオールドの天才で、どこに行つても阿片密賣と、賭博場と、醜窟に關係しないことはない。米國から國民黨に行く支那革命の費用は無論清鉄(クリーン・マネー)だと思ふが……。



左は「婦人取引所」の裁判所、右は離婚に
三ヶ月を待つリパーサイド・ホテル

4　家庭は郵便の宛名

離婚の王都を說くためにリノ市に行つた私としては、餘りに酒と賭博と女の辻に立ちすぎたかも知れないが、この町の空氣を一應頭に入れなければ、なぜこの町だけの離婚產業が榮えるかの理由が明瞭(はつきり)しまい。

　今、アメリカの社會を觀察して、最も目につくことは、家庭(ホーム)といふものが、まるでなくなつたことだ。そこに郵便の宛名(メーリング・アドレス)はある。そこに自動車が一時停車(パーキング・ステーション)を停めるところはある。併し昔しの意味の家庭は古腐ちた土壁のやうに壞れ落ちて行つてゐる。

　私が桑港を立つ日の新聞にあつた社會記事が私の頭に甦つた。サクラメント近くのある街の市長が、ある會合から歸つて來ると家に子供一人がぽつ然と遊んで居る。暫らく待つてゐると、夫人が活動寫眞から歸つて來て、直ぐ出かけやうとした。

『どこに行くんだ』

『これから婦人クラブに行くんです』

　夫の聲は險(けは)しかつた。

　二人は云ひ爭つた。と、夫の手が近くのピストルの引金に當つたと

思ふと、それは習慣となつて、夫人は血みどろになつてそこに仆れた。

この記事と前後して、オークランドの離婚事件があつた。デヴイスといふ男が、フロンレンスといふ女と結婚した。その翌日、新妻は離婚訴訟を提起したのであるが、そのいふところによると

「かれは金のあるやうな顔をして私と結婚をしたが、翌朝、パンを買つて来てくれといふと私に金をくれといふ。それからお昼になつても卵位が食へないし、私はそれにまた金を出した。かれは到底私を扶養することが出来ないから、こゝに離婚訴訟を提起する。そして今後一ヶ月に百ドルづゝの扶助料を出すことを要求する」

パンが買へない亭主に、一ヶ月に百ドルづゝのアリモニーを要求するところに、米国離婚の片鱗が見られる。

同じ頃、米国の新聞が報道したものに、パンテージ事件といふのがある。パンテージといふのは米国の劇場王で一億円に近い財産家である。かれは役者志願に自分の事務所に来た十六歳の娘を手込めにしようとして、その娘から訴へられ、一ヶ年以上廿ヶ年以下の懲役に処せられたのだ。

このパンテージの伜が、丁度同じ時に酩酊して自動車を運転し、六木といふ日本人の自動車に衝突し、六木はそのために死んだ。陪審員は罪がこの若人にあることを認めてこれも有罪になつた。

家庭のないところに家庭生活と、性生活がありうるのか。たゞタンゴへ、ダンス場へ、活動へ、それから子供を罰へ。これから離婚が生れなければ嘘だといふのは何になる男女なのだ。

5 離婚は家庭病の薬

「離婚は家庭病のお薬りです。このお薬りだけが悩める男女を救ふから救ふのです」

過去八ヶ年リノの裁判所の判事として、一萬件以上の離婚事件を取り扱つたパートトレット判事は、私にさういつた。

「男が、私はあの女と同棲することは出来ませんといひ、女が私はあの男と家庭を営むことが出来ませんといふのです。さうすれば離婚の外に、どういふ方法がありうるのですか」

判事は[illegible]になつて私の目を見た

この判事はかつて「離婚は家庭の病気を療治するお薬りです」といつたことから、この町では離婚のことを「[illegible]」といふことになつて、今では「[illegible]」といふ代りに、キュアーといふ文字が使はれてゐる。

この判事のいふところは決してリノの特殊な事情ばかりではいはれない。家庭が存在して離婚がアメリカ生活の常住の姿になつたのに、キリスト教のプロテスタントを基とする米国各州の法律は、離婚に厳しい制限を付して居るところが多い。サウス・カロライナ州では離婚といふものを絶対に認めない。同州では離婚して再婚すれば重婚罪で罰せられ、その夫なり妻なりが婚姻には同州の法律に照へられることになつてゐる。

ニューヨークでは離婚の理由は、たゞ姦通だけに限定されてゐる。神の合せたる者、人これを離つべからず。さういふ新教の教約がこれ等の立法の[illegible]た。

煮え立つてゐる湯を、法律といふ蓋で押へつけても、どこからかこぼれる。そのこぼれ場處がネヴアダ州リノである。清教徒の信仰で出來あがつた東部諸州と、それから抗夫と醜業婦とが十年で造りあげたーあるひはあげつゝあるこれ等の州との間には、その程度の差がある

『離婚のことをお調べに態々リノにお出でになつたのですか。リノもいよ〳〵世界的になつたものですネ』

人のよさそうな裁判所の事務員は、そう云ひながら私を見て、帳面をくつてくれた。リノ市で扱つた離婚數は左のやうだ。

一九二八年度　離婚數　二〇九五件、結婚取消し　三七件、

内譯（離婚理由）虐待　一一九六件△對手が逃亡　四四一件△姦通　三△酒呑み　四△詐欺　二△扶助無し　四一△精神病　四一△不能　二

その内離婚事件の原告は女が一千二百九十八名で、男が八百四名である。この八割以上は他州人である。

こゝで忘れてならないことは、離婚の都であるリノ市はまた結婚の樂園であることである。裁判所の前に男と女がたつて、二弗納めれば直ぐ結婚證が下がる。

『カリフオルニア州の結婚法では、ヂン・マリーヂ…即ち酒を呑んで、その晩に結婚してしまうやうなことを禁止するために、三日間掲示をして、その間だけ待つことを必要とする法律があります。つまり月曜日に申し込んで、三日待つて、結婚は金曜日にしか出來ないのです。そんな長い期間（！）待てるもんかといふので、若い連中が中々澤山こゝに來ます』

件[illegible]こゝで結婚がきいつになるかわからない[illegible]

もう多くは後悔[illegible]決定してゐる[illegible]

粉と夢には一生行つきいと思つて乘り込んだものでも、さてこの酒とこのダンス場でいつの間にか人生觀が變つて來る。

『なにしろ一時間あれば、離婚して、また再婚できるのですから』

と、リノ人は自分の産業を廣告するにぬけ目はない。

6 「女取引所」を覗く

離婚を唯一の産業とするリノ市では、名前からが粋なその本職に添ふやうになつてゐる。離婚をキユアーといふのは前にのべたが、裁判所が『女取引所（ウイメンス・エキスチエンヂ）』といひ……それは離婚と結婚の大量生産所だから……その裁判所の前にある公園が『扶助料（アリモニー）パーク』である。三ケ月の長い月日を、指を繰りながらこの公園のベンチにかけて、家庭病患者が何人『女取引所』を眺めいることか。

この神聖なる『女取引所』の一室の傍聽席に私が腰を下したのは土曜日の午後であつた。州によつて黒服を着る判事は、こゝでは平服を着て、商人のやうなくだけ方である。

『あなたは夫を愛さないといはれる。それだのに離婚に反對されるのは何故ですか』

判事は眼の前の婦人にいつた。聞くと夫婦はニユーヨークの者だが、妻君が宗教の狂信家で迚も一緒にゐられない。『死んで結婚してゐるよりも、せめて生きて一人でゐた方がいゝ』そういつて夫が離婚手續に逃げて來たのだが妻君がこれに反對して法廷で爭ふことになつたのだ。

「男女の結婚は神様がたゞ合せ給ふたものなのです。人間が離つわけにはいきません」
「それでは貴女は、神様が自身で貴方がたの結婚を認められたとしよ證據が提出できますか」
『そんなことは出來ません』
「それなら」パーレット判事は一寸威厳をつくつていつた『この結婚は元來は人で結ばれたものですが、その後、方们が失して外にそれてしまつたのです。離婚を許します』
と、憤慨して身體をふるはしてゐる先生を尻目にかけて、盛んに辯護士と握手をしてゐた。
　この辯護士の多いのがリノの特色である。リノには現在二百名に近い辯護士が居るが、いづれも極めて盛況である　人口百人に對して一人の辯護士の居るところは、恐らく世界一でなくてはならぬ。
　では一體、離婚料といふものは幾ら掛るものなのか。
「そんなことをいつたつて、ホツケタイやカラーじゃあるまいし、ダース幾らといふわけにはいきませんよ」と記者と同じで對手は笑ふ。
ある辯護士がいつた。安いのは相手のゐない缺席裁判であるが、そしてこれは一千ドルくらゐでもあるが、いつぱパーヂの大富豪ダレヴァた人は三萬五千ドルを、リノのブラウニ・パー・オート法律事務所に支拂つた。
　映畫俳優のメリー・ピツクフオードが、始めの夫オーエン・ムーアと離婚したのもネヴァダ州だが、大金を拂つたといふだけでその額は分らない。ピツクフオードは三ケ月自分の住んでゐた立派な家を、そのまゝ辯護士にやつてしまつた、といふ話しを聞いたから、リノ人にそれを話すと『その訴訟の後で辯護士が家を買つたのは事實だが、貰つたのではありませんよ。第一ピツクフオードは三ケ月なんてゐなかつたでせう。ゐなくつてもゐたことにさへなれば差支ないのですから』と謎のやうなことをいつた。
　相手が來なければ事は簡單だが、兩者の辯護士が立會ふことになると値段はあがる。二千ドルから四五千ドルくらゐが相場だ。この辯護料プラス三ケ月滯在の費用だ。
　"More and better divorces"
を標語として、リノ市が盛んに廣告してゐるのは無理があるまい。

7　妻君讓權時代

　アメリカの家庭は何故、單なる結婚登錄所になつてしまつたか。それを解くことは他の機會を調べなければならぬ。併しただ機械工業、産業主義が、婦人の獨立を招來して、無慘に昔しの家族制度を破壊することだけは、こゝに明記しておく必要があらう。
　家族主義はその歴史からいつて家長制度である。一人の男が家族の頭となつて權をふるふ組織である。アメリカの男が女のスカートに敷かれてゐても、家庭に這入ると、自然に逆つた性格になつて來る。ヘボロック・エリスはこんな事をいつた——
「男が夫として家に入り、昔しの家庭的主權に腰を下すと、かれは自然に、また無意識的に昔し夫に與へられた役割を演ずるやうになる、古代からの傳統に從つて、またかれが生れる遙か以前に始まつた夫の位置に自から置いて」
　この自からの保証性を感じ、家庭の主人としての男が、その際に

居るべきものだといふ感情は、天が下、比類なき優しきアメリカ人の亭主諸君と雖も持つて居るのだ。

だがかう感ずる男は二つの事實を忘れてゐる。一つはかれ等が社會的に女を特別階級に祭りあげて、なにか生れつき特權でも有して居るやうに思はせてしまつたことだ。社交的に女王のやうにしてをいて、家に歸つた時だけ『おれ主人だぞ』といつても、承知するものではない。

第二は女は、とつくに獨立してゐる。フーヴアー大統領の出身校であるスタンフオード大學で、五百人の女學生に對して『將來何をするか』と聞いてみた。この五百人の内で、結婚するといつたのはたゞ五人だけで、他は悉く『職業』を持つといつた。八十六人が著作家文士希望、七十九名が教師、七十八名が音樂家乃至は役者‥‥妻君饑饉時代が來たのだ。

かうして一度、家庭の巣を營んだものも、外部から押へつける條件がなくなつた以上、直ぐ飛び出すのは當然だ。リノの統計では離婚の最も多い年齢が婦人は三十歲、男子は三十三歲で、離婚は結婚してから七年目か八年目かに多いといふ。

『三四年目が結婚の危機で、この頃から對手の缺點が分るんです。そしてその後は一緒に居らうか分れようかで惱むんです』と係りの一人がいつた。



リノ近くの湖水

それではアメリカの離婚と結婚はどれだけあるか。昨年い（一九一八年度）の統計が、これを書いてゐる時に發表されたが、結婚六件に對して離婚一つの割合である。

アメリカの離婚結婚數

	一九二八年	一九二七年	增減
結婚	一、一八二、四九七	一、二〇一、〇五三	（減）一八、五五六
離婚	一九五、九三九	一九二、〇三七	（增）三、九〇二

結婚は一分五厘減つたのに、離婚數は二分增してゐる。こゝで目立つのは東部諸州に離婚が比較的少なくて、西部に多いことだ。東部ではヂストリクト・オヴ・コロンビアの五十四・五の結婚數に對し離婚數一を少ない方の大關とし、ニユーヨークは二十一・六に對し一といふやうな比率に始まつて米國の平均は六・七結婚對一である。それだのにリノのあるネヴアダ州では離婚一つに結婚一・六といふ比例を出してゐる。

これを外の方法ですれば、このことはもつと明瞭になる。ネヴアダ州の結婚、離婚産業は每年增える一方である。卽ち

ネヴアダ州の結婚と離婚數

	一九二八年	一九二七年
離婚	二、五九五	一、九五三

結　婚　四、一六八　二、三九八

それでは人口あたりはどうなるか。米國で離婚率の多いのはオレゴン州だがそれとの比較はかうなる。

人口一千に對する離婚比率

ニユー・ヨーク　〇・四六
オレゴン　三・二八
ネヷアダ　三三・五二

一千人にあたり三十三人半づゝの離婚が行はれる州なのだ！

8　米國疾病の吹き出し

「君はいつからこゝに居るんだい」

私はホテルで髭を剃らせながら、イタリー人らしい床屋に聞いた。

「もう三年になりますよ。こゝに落ちつくつもりぢやなかつたのですが、ゐてみるとよくなりましてね」

聞くとかれも離婚の目的で來たのだが、ゐて見ると住み心地もよし、どこに行つても同じだからと、そのまゝ居据ることになつてしまつたそうだ。こんな金使いの荒い、そして贅沢な商店や邸宅のある町は外に、たんとはない。

「私だけではありませんよ。お客になるために來て、リノ人になつてしまふ人が隨分あります。サア、人口の半分ぐらゐはそうだといつてもいゝでせうね。學校の先生や、大學の教授などは別ですが……」

「君も誰かに招待されたのかい」

私は笑ひながらいつた。離婚の理由に前にも書いたやうに「招待」が原で、かう自分に見えても皆に虐待された。

ある詩人は「例へば、私が財布を口に入れて運んで行くと門札などといひましたから、その場から切符を買つて來ました」と判事の前で申したてゝ、虐待の理由で離婚が許されたのがある。

その例のリノ・ガゼット紙には、かつて米國の下院議員だつたデビスの息子ノリスが、その妻君に對して離婚の訴訟を起したが、その理由としては

「かの女はいつでも私より偉いと考へて居り、自己中心である。私がフランスから歸つて來た時に群衆の前でキッスすることに嫌だと、私に愛情を示さなかつた」

といふやうなことを並べて「だからかの女は私を虐待した」と離婚訴訟に及ぶ旨を書いてゐた。

今、リノにおける離婚の大量生産の機械は景氣よく廻つてゐる。もつとも冬は寒いので殆んど商賣がなく、毎年は四月から……マーク・トウエーンが讃嘆したその近くのタホー湖の岸辺も美しい頃から開かれ、セージ・ブラッシュといふ灌木の葉が落ち切る十月末まで續くのである。

世界の離婚首都。米國の小パリ。それはアメリカの疾病がこゝに吹き出したのだと解してもよければ、またワイルド・ウエストが切り開いた開拓者魂の最後の横行だといつてもよからう。

ホテルの窓から見下せば、外國人が下宿屋で、銀貨の音のするクラブにあがつて行くのが見られる。（昭和・一一・一二）

新着月評

最も精彩ある批判であり推薦である

矢内原忠雄著　帝國主義下の臺灣

嘉治隆一

一

本書は著者が曾て國家學會雜誌及び經濟學論集に發表せられた二大論文に修補を加へた上で一册に纏められたものである。「帝國主義下の臺灣」といふ書名から既に極めてアトラクテイヴであるが、內容に至つては益々讀者を魅するに足る。

明治初年の北海道開拓によつて內地植民失敗の歷史を有つに止つた我邦は、日清戰役臺灣を得て始めて植民地と呼ぶ可きものを有するに至つたのである。隨つて眞の意味の日本植民政策は臺灣經營に始るといふ可く、而も他の日本植民地よりもその領有が早かつただけにこの土地に行はれ來つた統治政策の變遷は日本の植民政策變遷の一縮圖であると共に、その上には日清戰爭以後の日本の經濟社會發達の跡を如實に反映してゐる點に於て、臺灣を中心とした諸研究は闡明する所頗る多く、その意義亦甚だ重大である。然るに從來、我邦に於て植民並に植民政策に關する研究は決して乏しくないが、多くは泰西の專門學者の學說の受賣り又は燒き直しに非ずんば、單なる植民地事情の羅列に外ならない有樣で、何故に一定に史實に基く、我邦植民地及び植民政策の研究が行はれなかつたか、そして就中、我邦植民地の典型たる臺灣のそれに關する精緻なる調査が行はれなかつたか、寧ろ、不思議に堪へなかつた位である。所が、臺灣領有後實に三十五年を經た今日始めて著者によつてかゝる好著の公にせられた事は近來の快心事であると共に、著者の努力を多としなければならない。

二

著者は本書を二篇に大別し、第一篇帝國主義下の臺灣を五章に分ち、第一章に、臺灣領有の沿革を概說し、第二章には、臺灣資本主義化の經路を土地、度量衡及び貨幣、企業、財政、交通機關等の諸方面から考察した上、之等の諸要素が結合して一歩への結合に臺灣が日本の帝國主義下に於いて占む可き地位を斷定した後、第三章として教化の問題、第四章として統治行政の問題等に觸れ、最後に民族運動として臺灣の社會運動、民衆運動の持つ二重性を說き、目下の所、大工業乏しく工業プロレタリアート少きため、運動は必然的に超階級的全民族的運動たる可きであると斷定してゐる。

凡そ、臺灣の資本主義化はいふまでもなく、最初、內地からの資本投下によつて誘發せられ、之が臺灣島內の資本にも培養せられて企業の勃興を促し、遂に今日の如く、利潤を內地に送り、金融的にも內地や北海道や滿洲等に於ける邦人の事業を助成する結果となつてゐるのである。而已ならず、臺灣に於ける資本の活躍は常に明瞭に政治的權力を後楯としてゐるから、當然、獨占、專賣、財政々策等の問題とも緊密な關係を持ち、經濟と政治との結合の必然性を窺はしむるに充分であると共に、この政治的權力を仲介とする特殊銀行と產業發達との聯合は金融資本の一斷面を我々の眼前に暴露してゐるのであるが、之等、今日帝國主義時代に生活するものが、先づ第

一應は諒解しておかなければならない事柄を本書は帝國といふ體形に結んで我々に見せつけて呉れる。

第二篇は帝國糖業帝國主義と題せられ、第一篇に說かれた所より製糖業だけを取出して大寫しにしたものである。或は第一篇の立論を製糖業に應用して叙述したものといつた方が適當であるかも知れない。而して、糖業の發達は臺灣に於ける資本主義の轉型一であると共に、日本の帝國主義的植民政策の一見本であるのみならず、廣くいへば糖業は世界に於ける植民地的企業の大宗であつたが故に、本篇は冒頭に世界植民地と糖業との關係を說いてゐるのは極めて妥當な研究方法である。

尚本書について重要な點は著者が我邦の臺灣領有を國民主義的活動よりも帝國主義的活動なりやといふ疑問を提供し、而して當時我邦は未だ完全な帝國主義國になり切つてゐなかつたが、既に國際的帝國主義時代の鍛錬を受けてゐたため、イギリスやドイツとして帝國主義的影響を受けてゐた。第一我邦の臺灣領有は一いまだ非帝國主義國の帝國主義的實踐であつたといふと言つてゐる。この點については臺灣に於ける日本國內資本と臺灣資本との結合、カルテル及びトラストの發達等を分析せられた結果、かゝる結論に到達せられたのであると思ふが、之亦大體首肯出來る見解とすべきであらう。

三

次に問題となるのは著者の本書執筆の心構であるが、この點について著者はいふ。

「[illegible]」（序文、四頁）

かくまで科學的な立論を忘れずして而も飛躍なる研究をするに甘んじない著者は[illegible]的[illegible]紀、此の我々の最も賛同せざるを得ない所である。

る。而して、今一つ、本書叙述の形式が極めて特徴のあるものであつて、始に何たの字句と雖も常にその項に關する著者の所謂「一定の理論」を先づ言明し、之を以て科學的事實分析のメスとし、最後にそのメスの鋭利さを裏付ける言葉を以て結んでゐる點は異とするに足る。但しその際問題となるのは「一定の理論」そのものの當否如何といふことであるが、卑見によればこの理論は充分安心の出來る理論であつて、それが從來主として如何なる人々によつて主張せられ來つたものなるかは著者の例に倣ひ茲には指摘せず、讀者の判斷にお任せする。

四

尚、從來、著者によつて公にせられた著述作と本書とは著しい相異點は、著者の常識では到底考へることの出來なかつた一種の宗教味が殆とここには現はれて、終始一貫、經濟的要因を最も重視してゐることであるが、唯一個所、教育問題を論じた所に（二三一頁）

「[illegible]」

の實現に於て一般に示すべき理想である。我々の[illegible]政治を以て世界に冠たる[illegible]たらしめる」

とある點が少々氣になる。之は原住者に味方する宗教が普及してゐたならば、斯も露骨な帝國主義的支配を緩和することが出來たであらうにといふ意味か、或は、帝國主義的支配に苦しめられても教化によつて精神的慰安を與へれば、物質的搾取の幾分を精神的に補償し得るであらうにといふ意味か、何れかに解すべきかと思ふが、假にさうであつたとしたならば、この點著者の一考を煩はし度い。

最後に、こんな蟲のいゝ註文を著者の前に提出していゝものかどうか分らないが、若し幸に之を許さるゝならば、本書二八、二九頁に原始的共産部落制度を有する蕃界が資本主義化することが出てゐるが、この治蕃政策なるものゝ眞相を何等かの機會に今少しく詳細に教示して頂き度いと思ふ。それは臺灣の事情に通じない我々のみならず、廣く一般に經濟史家、社會學者、人類學者、民俗學者等をも裨益する所、尠少でなからうと信ぜられる。妄評多謝。（岩波書店）

東京帝大史學會編
明治維新史研究
尾佐竹猛

昭和年代に於ける學界の新らしい傾向として明治維新の研究がある。必らずしも史學界とは限らず何も現代文化に付き筆を染めんとするものは多少とも、明治維新の回顧的記事をものせざるものは無いといふ勢であり、その趨勢は將來益盛ならんとして居る。この狀勢に乘じ昨年末に突如として彗星の如く現はれ學界を驚動した大著は實に『明治維新史研究』である。この書を手にして第一に感ずるのは、内容の如何よりも時の力の偉大さといふ平凡の眞理である。史學界の權威として高く殿堂に納まつて居つた史學會が街頭に出でてその四十週年紀念出版として明治維新の研究に歩を向けたといふことそれ自體が、一の驚異である。しかもこの書に筆を執るものは專門の大家三十餘氏、まさに學界總動員の觀がある。黑板博士が、その敍に於て、

政治、外交、經濟、思想其他各方面から、我が史學界に於ける權威者の殆どすべての者が、各々その專攻の立場から研究せられた成果を網羅して、そのたゞに我内だけの事象に止まらず、東洋史、西洋史家の立場から國際[illegible]れ迄に於て無いことであつて、[illegible]界のみならず、社會各方面に於ても[illegible]するもの大なるに[illegible]國人も首肯するところであらう。

と云れたのは決して溢美の言では無い。實に維新史といはず從來如何なる問題でも斯く各方面の專門家の研究の集中した書は無いのである、その三十餘家の内には本來は必らずしも正統的維新史研究の專攻者でなかつた人々もあるが、それがその各々別の專門の立場から筆を維新史の方面に集中した、極く平易な言を以て形容すれば、能くも各方面の人士が斯くも氣を揃へて維新史に筆を執つたといふことそれ自身が一の奇蹟である。これは一に史學會といふ大きな背景の力ではあるがこれも時勢の賜である。これが數年前に企てられたとしたのなら、とてもこの十分の一の成果をも得ずしてしかも極めて困難な事業であるのに、今回は易々……勿論編輯員諸氏の非常な努力はあつたのであるが……とこの大事業が出來上つたのは眞に時勢に感謝せなくてはならぬ。しかも平素極めてかゝる方面に無頓着であつた富山房が、非常に乘氣になつて八百四十八ページのこの大著を引受けたといふことも、些細なことのようであるが、これも

[illegible]

明治維新史研究に關する日本文獻[illegible]

[illegible]

木村久一著
『讀書より修行へ』

綿貫哲雄

[illegible]

新刊紹介

産業革命への途 [illegible]

反動の社會學 [illegible]

歐米政治觀 [illegible]

けがれた王座 [illegible]

住宅問題 [illegible]

商品講話上・下 [illegible]

フイリツプ全集第一巻 [illegible]

經の一頃を世に行はれたる「■■への道」の結語である。我等は永遠生命に對する憧憬と解脱への欲求、即ち宗教を求むる切實なる心を感ずるのである。而して「解脱への道」に於ては、我執我欲を否定し、緣起を打破し、現實を超越して眞空觀に、即ち解脱の心境に歸するの道が説かれたのであるが、「眞空より妙有へ」に於ては、此の最後の當體が、決して虚無では無く、實に限りなき自由無礙の心境であり、そこでは一事一物、悉く眞如の相に於て光明を放つと云ふ事、即ち解脱門より却來して現實を肯定し、妙有觀を施設する方面が取扱はれた。而して此書に於て我等は此の眞空妙有こそ、般若、華嚴、維摩、法華等の現典の中心思想であつて、實に大乘佛教の精華として千歳にその光を輝かす所の者であるといふ事を知り得るのである。

第二には人生哲學または社會哲學の經典である。例へば一切の現象は相互依存の關係に於て存すると云ふ思想は、今日に於ても人生觀、社會觀の根柢をなして居るのであるが、それが佛教に於ては「若し之あれば彼あり、之なければ彼なく、之生ずれば彼生じ、之滅すれば彼滅す」といふ緣起觀として説かるゝのであり、而して此の緣起觀に基いて、一物の孤立する者なしといふ事も、「人法無我」の法、曾つ一時代に於て發現せられたるゝのである。蓋し佛教は人生または社會哲學のエンサイクロペヂアであると思ふのであるが此の驚く可く豐富にして幽玄なる思想を此に現代に復活せしめ、此くも流暢なる哲理として、此の一卷に展開せられたる博士の技倆に至つては、實に當代無比と稱す可きである。

第三には求道の指針、處世の指南書である。此の書に於て我等は、人身得ること難く、佛法遇ふこと難し。この生を享けたと云ふ事が既に貴き勝緣に因るのであると云ふ事。一切衆生、即ち提婆も八歳の龍女も遂には凡て成佛す可しと云ふ事。上求菩提下化衆生、即ち菩薩として永遠の佛道を行ずる時に、出家も在家も抜苦與樂、眞に大空寂靜の境地に安住す可しと云ふ事。此觀に依りて法喜禪悅の域に入り得る者であると云ふ事。心の淸きに隨つて淨土亦淸し。而して菩薩の理想が實に淨土の建設に存すると云ふ事。即ちあらゆる實踐の原理を學ぶのであつて、此の一卷は宛然菩薩道全景の展望である。

第四には佛教概論である。而して此の書に於て我等は、佛教の正しき見方と、研究の方法とを學ぶのである。

第五には實に佛教に關する諸研究の發表、

マルクス[illegible]できる(四六判四五一頁、定價一・八〇、[illegible]書店)

空の旅・雲の旅(鈴木文史朗著) 一種の空中及地上風景文學。カメラの妙味ある福位によつて得られた多彩にして珍らしき幾多の寫眞の挿入は、なめらかにして興味豐かな文章と相俟つて心ゆくまで讀者の眸を惹きつけるであらう。(四六倍判一七八頁、定價二・〇〇、新潮社)

勞農革命の眞相(大竹博吉監輯) 一九一七年第一革命直後組織されたリヴォフ臨時政府の外相たりしパ・ミリユコフの著書の翻譯、「ボルシェヴィキはなぜ政權を獲得し維持したか」及び「ボリシェヴィキと第三インタナショナルとの關係」が本書の内容である(四六判四〇二頁、定價二・〇〇、ロシア問題研究所)

室生犀星詩集 主として「抒情小曲」と「忘春詩集」よりとる。氏の代表作の粹を收む(四六判三四一頁、定價一・五〇、第一書房)

新しき價値格學説の提唱(向村消一著) 四六判一六六頁、定價五・〇〇、(希望社出版部)

蟹工船(小林多喜二著) 日本プロレタリア作家叢書の一、(四六判二二七頁、定價・五〇、戰旗社)

イギリス勞働運動史論(高島定吉譯) ロートシュタインの原著、生々とした歷史的著述(四六判二八七頁、定價一・〇〇、叢文閣)

學界に對する偉大なる貢獻である。例へば著者は、悉皆金色願の同中の人人をして悉く同一金色ならしめ、その間に形色の區別なからしめんとの佛陀の本願を、當時の印度の社會状態に根ざす所の人種平等、階級打破の理想の表明なりと見た、その他全篇隨所に著しく現はれて居る此の文化史的解釋の如きは、まさに佛教研究に一新生面を開きたる者と云はねばならぬ。而して「本願四十八願の問題をその道徳的、文化的、宗教的意義に就て」といへる八十餘頁に亘る論文は、曾て哲學會に於て學者の間に問題となし、ついで本誌中央公論誌上に於て始めて世に公にせし者で、まさしく一大新發見であり、眞に誇るに足る可き輝かしき業績として、學界の大なるセンセイションを惹起せし者である。

博士に就て、世人多くは先づその非凡なる學識と語學とを推すのであるが、我等の如き多年の親交に依りてよく其の風格を知る者は、またその豐かなる人間的情味に深く推服するのである。而して「眞實」より他に何ものも[illegible]は、さながら君の信仰であつて、[illegible]在、聖俗共に之を首肯す可く、學者も常人も皆、君の説くところをその中に見出すのである。（甲子時事問題）

巴里のプロフヰル（[illegible]著）巴里の裏面をくゞり入り實際を[illegible]。如何よりも日附十字[illegible]著者の鋭い目を情味を徹底的に示し得て居る。讀んでも深く興味もある。（四六判二六[illegible]頁、定價一・五〇、[illegible]日本社）

會社法概論（田中耕太郎著）最もよき會社法論の一つ。（菊判六九二頁、定價四・五〇、岩波書店）

日本經濟革命史（白柳秀湖著）「奴隷經濟時代」「奴隷經濟の崩壞と封建經濟の發達」「封建經濟時代」「封建經濟の崩壞と貨幣經濟の發達」「貨幣經濟の準備時代」「折衷式貨幣經濟の時代」の各篇に分つ。經濟史的名著にして[illegible]（四六判四〇五頁、定價一・八〇、千倉書房）

西哲叢語（山崎林太郎著）（四六判一八〇頁、定價一・〇〇、[illegible]書房）

太陽のない街（徳永直著）日本プロレタリア作家叢書の一「第一輯」「敗北」「不在地主」などと共に「今日の問題」を取扱ふ小説。（四六判三一一頁、定價一・〇〇、戰旗社）

犯罪と刑罰（風早八十二譯）ベツカリーアの犯罪と刑罰の翻譯である。かゝる刑法學の古典が新人によつて譯出された事を喜ぶ。（菊判二九六頁、定價二・七〇、刀江書院）

國家の正義（[illegible]著）（著者發行の[illegible]）

思想をもつ。（四六判四五七頁、定價一・五〇、第一書房）

共産黨員の陣營より（鍋山貞親著）（四六版一七八頁、定價・六〇、全國農民藝術聯盟出版部）

佐渡おけさ（[illegible]著）郷土藝術叢書の一（四六判八五頁、定價一・〇〇、ロゴス書院）

夕櫻（狩尾光子著）詩集（四六判二二九頁、定價一・五〇、[illegible]書店）

ベツィミンスキー詩集（尾瀬敬止譯）サヴエート詩人叢書の一（四六判一六七頁、定價一・八〇、[illegible]書房）

十三月（竹村俊郎著）詩集（四六版一五六頁、定價一・〇〇、武蔵野書院）

未來（[illegible]著）長篇小説（四六判九六二頁、定價二・五〇、[illegible]）

すぐ役に立つ圖書の整理法（[illegible]三郎著）（四六判五七頁、定價・五〇、[illegible]館書店）

プロレタリア藝術教程 その第二輯。收むる所小林多喜二、[illegible]、岩崎昶、今野賢三、川口浩、[illegible]、外村史郎氏其他の有益な論作。（四六版二[illegible]四頁、定價一・〇〇、世界社）

牛山ホテル（岸田國士著）戲曲集（新四六判二九八頁、定價一・八〇、第一書房）

憲法總論（山崎又次郎著）最もよき憲法論の一（菊判三二五頁、定價二・五〇、丸善株式會社）

都會の類人猿

—世界怪奇實話 三—

牧　逸　馬

1

一九二六年二月十四日に、桑港(サンフランシスコ)サタア街一一三七番居住の Miss Clara Newman といふ六十三歳になる獨身の老婆が、表(おもて)通りの窓に、「貸間あり(ルウム・トウ・レット)」の紙札を出した。

これは、亞米利加の都市の素人家(しもたや)町を歩いてゐると、よく見かける看板(サイン)で、一尺四方程の厚紙に綺麗に "Room to Let" と書いたのを、正面の應接間などの、往來から眼に付き易い窓硝子の内側へ立て掛けて置くのだ。すると、貸間探しの通行人が、それを見て、玄關の鈴(ベル)を押す。主婦か娘が應對に出て、部屋を見せるために、直ちに其何處の何者とも知れない男を、二階なり三階なりの奧まつた個處へ案内する。客は、アメリカで間借りをしやうといふ位ゐだから、學生、勞働者、下層店員、外國人などの、比較的社會的責任の稀薄な、言はゞ風來坊が多い。日中である。家の主人は勤めに出て居ない。のみならず、他人を置いて幾らかの足しにする家だ。未亡人か何かで女許りのところが尠くない。かう考へて來ると、この、「貸間あり」の札で通行人を呼び込む習慣には、早晩或る種の犯罪を助長しなければならない、充分な危險性を約束するものがあつたと言はざるを得ない。

クララ・ニユウマンの絞殺屍體が、姪によつて同家屋根裏の便所で發見されたのは、貸間ありの札を出してから六日目の、二月廿日の夕方だつた。同女は、手をもつて頸部を扼殺され、便器の水中に顏を突つ込んで死んでゐて、しかも明白に暴行を受けてゐた。この、六十三歳の老婆を暴行致死せしめた事實から觀て、檢視に立會つた係官一同は、犯人は變態性慾者に相違

ないといふ當然の意見に一致したのだつた。

時を移さず其の筋の活動は開始されたが、物的證據と目すべき何らの遺留品なく、この捜査は實に困難を極めた。同家は、被害者と姪と女中の、男氣のない三人暮らしで、犯行の推定時間には、女中は買物に出て留守だつたし、姪は、伯母のクララが、貸間の下檢分に來た男を案内して、愛想よく階上へあがるところを、廊下の端の台所の戸口からちらと瞥見しただけで、遠くもあり、ほんの瞬間の觀察に過ぎなかつたので、その人相着衣等に關する記憶は、殆んど皆無といつてもいゝほど、漠然として薄弱なものだつた。他に、依據するに足る手懸りは一つもなかつた。

すると、それから丁度十日經つた一月二十日に、舊港に近いサン・ノゼ町で、再び同じやうな事件が勃發した。被害者は、ロウラ・ビイル夫人―― Mrs. Laura E. Beale ――といふ、矢張り六十三歳の老婆で、これも、貸間ありの札を出して、犯人はそれを見て這入つて來たのだ。クララ殺しで加州中が大騒ぎをしてゐる最中に、全く符節を合するやうな同一事件が再發したのだから、加州民の恐怖と激昂は頂點に達して、なかには、戰慄し、貸間札を引つ込める家さへ出て來た。この時も、死因は絞殺、劇烈な格鬪の跡があり、ビイル方の筋向ひの家の主婦が、犯人らしい男が貸間札を指さして何か言ひながらビイル夫人に招じ入れられるところを見たといふだけで、これも、何ら役に立つ程度の證言ではなかつた。ふたゝび、警察の前には眞つ黒な壁があるだけだつた。たゞ、この二つの事件が、同じ變態者の仕業であることだけは、疑ひを入れなかつた。謎の犯人は、すでに全米の新聞によつて「闇黒の絞殺者」といふ名を附せられ、いたるところでセンセイショナルに扱はれてゐた。

亞米利加の新聞王ハアストの言葉に、新聞雜誌其他の刊行物に市場價値を持たせやうとすれば、それは「犯罪と醜行」を大大的に取りあつかふに限るといふのがある。この、犯罪は解つてゐるが、醜行は何を意味するのかといふと、これは、いはゆるエロティシズムの要素と、好ましくない私事、つまり醜聞の意味だ。ハアストはこの「犯罪と醜行」を社會記事欄の標語にしてゐるので、如何にもハアストらしい、赤新聞的な觀念だが、しかし、現代ジャアナリズムの要諦を最も端的に摑み出してゐる點で考へさせられるものがあると思ふ。とにかくかういふハアスト系新聞が尨大な讀者群を擁してゐる亞米利加のことだ。この「闇黒の絞殺者」の記事は今いつた斷定にも持つてこいなので、それが彼等の上にも驚異と好奇心を喚るやうに、ハアスト系を先頭に盛んに書き立てたものである。

三月餘りは何事もなかつた。が、六月十日である。又もや桑港で同じ犯罪が繰り返された。Mrs. Lillian St. Mary といふ、不思議なことには、三度び六十三歲になる老婆が、自宅の窓へ例の「貸間あり（ルウム・トウ・レフト）」を出してゐるところへ、「彼」――この「彼」が何者であるかは後で捕まつて判る――が訪ねて來て、その部屋を見たいと申し込んだ。後刻、小綺麗なリリアン・聖メリイ夫人の絞殺體は、猛虐な暴行の痕跡と丶もに、階上の一室の寢台の下から發見されたのである。

この時は、被害者の他に犯人を見た者がないので、一層厄介な狀況だつた。全市の刑事と社會部記者が、競爭的に捜査に從事したが、それは、まるで空氣を追ひ廻すやうな、眼當てのない仕事だつたと言はなければならない。犯人は變態性慾者――恐らくは常人に氣の付かない程度の精神異常者――であらうと言ふに止まり、捜査に參加した人々は、相互の影を踏んで鉢合はせを演ずるばかりで、全く暗中摸索の狀態だつた。こゝに一言しなければならないことは、この事件に關して米國各市の警察が受けた苛酷な非難に就いてゞある。あの二月廿日のクララ・ニュウマン殺しを皮切りに、「彼」は、後說するやうに亞米利加中の都會を荒し廻つて加奈陀へ飛んだのだが、アメリカでは、唯一市の警察がすんでのことで「彼」の肩に手を置かうとしただけで、他はすべて失敗に終つてゐる。が、警察が最善の力を盡した事は言ふまでもなく、これには、無理もない點も多々あるので、「闇黑の扼殺者（ダアク・ストラングラア）」は、一つの例外もなく、人口稠密な大都會の眞ん中でのみ犯行を重ねた。都會には、見慣れない人といふものはあり得ない。強ひて言へば、一人の市民にとつて他の市民の全部は日々見慣れない人である。そのために、何ら特別の注意を惹かずに行動することは容易だし、それだけまた、捜査に當


アウル・ネルスン

つて足取りを掴ふのが困難なわけだ。しかもこの特定の場合、「彼」が、その兇行の家から貴重品類を奪ひ去るやうになつたのは比較的後のことで、最初のうちは、凌辱と、單なる血の狂熱のための惨劇に過ぎなかつた一事も、捜査を苦しめた原因のひとつとして考慮に入れなければならない。あらゆる殺人の動機のうちで、かういふのが一番物的の證據に乏しく、足がつきにくいとされてゐる。いま假りに、この「闇黒の絞殺者」と同種の殺人狂が日本に放たれたとして、東京で一人殺し、つぎの晩に大阪へ行つて、着くと直ぐまたひとり殺し、その足で高崎に現れ、次ぎに青森、名古屋、福岡、横濱といつた工合に、大都會だけを毎日選んで出現出没したとしたら、われわれの信頼してゐる日本警察は、この兇魔を射留めるに何日を要するのに、何日、いや、何ヶ月を要することだらう？——無名にして、音なく浮かぶだけではなからうか。

2

間もなく「彼」は姿を失つたものとみえる。リリアン・スメリイ事件から十四日経つて、今度は、南加大小都市サンタ・バアバラ市の ミセス・[illegible] ——四十七歳——が、同じく貸間札によつて「彼」の襲撃を招き、兇行の後絞殺された。

つぎに、四月後、桑港の近接市オウクランドで、ミセス・[illegible]といふ五十二になる女が、前の各事件と完全に同じ情況の下に「彼」のために扼殺されたのだつた。

既に同一人によつて犯された五個の殺人がある。しかも、全部を通して犯人らしい者を認めたのは二回丈で、それも、實におぼろげな説明しか出し得ない。他に、何一つ手懸りがないのだから、警察は、困惑すると同時に躍氣となり、全加州民、殊に部屋貸しをしてゐる女ばかりの家などは、何處の町でも戦々兢々として、「貸間あり（ルームス・ツウ・レット）」の札を出すことも出來ない有様だつた。前にもいつたとほり、殺された五人の老婦人は、すべてこの貸間札を見て這入つて來た「彼」の手に掛つて、その兇悪の犠牲となつたからだ。

が、これで「彼」も當分満足したらしく、その後二個月程は平穏だつた。すると、この自制に耐へ切れず、突如一時に爆發しないではゐられないかのやうに、俄然「彼」は、三日間に三つの殺人をして、潜んでゐた姿を現はした——十月十九、廿、廿一日。場所は、オレゴン州ポウトランド市である。

以前は、風のやうに犯罪地を變へたのだから、各市の警察も手の下しやうがなかつたといふことが、或る程度まで頷けるけれど、今度は、同じ町で、三日繼續して行はれたのである。

これに對して、ボウトランド市の警察が成績を擧げ得なかつたのは、その手配に甚大な落度があつたと責められても仕方がない。

十月十九日の事件は、かうである。Mrs. Beata Withers といふ、最近離婚した許りの、三十五になる美しい女があつた。家を賣る心算で、おもての窓に「賣家（フォア・セイル）」の紙札（サイン）を出したのだが、二三日して、暴行のうへ頸を絞められた彼女の屍體が、十五歳になる息子によつて、三階の物置に放置してあるトランクの中から發見された。のみならず、二三の寶石類、外套一枚、現金數弗等が紛失してゐたことが、子供の申立てにより判明してゐるに係はらず、同地の警察は、何故かそれを自殺として片附け去らうとした。しかも、奇怪にも、同女が死後如何にして自分でトランクへ這入り込んだか、或ひは、生前トランクへはいつたものとしても、其の狹い内部で自らの首を絞めることが出來たか、失くなつてゐる物品は、どうしたのか、何よりも暴行の跡は？　等々、これらの諸點をすこしも説明しやうとはしなかつた。この時のボウトランド警察の出たらめさは、この後長く、ユウモラスな傑作として、盛んにあちこちの新聞に叩かれたものである。

警察の無智に關係なく、事實は事實を重ねて行つた。前述のウイザアス夫人の家から一哩のところに、ヴアジニア・グラント夫人——Mrs. Virginia Grant——といふ五十九歳になるやはり貸間の札を出して住んでゐたが、それが翌廿日の第二の被害者である。グラント夫人は、その客部屋の暖爐の切込の棚から、同じく暴行絞殺屍體となつて現れた。些少の安價な寶石類と、毛皮の外套が盜まれてゐた。より驚くべきことは、これをも警察は、グラント夫人は心臟の故障による自然死であると、悠然として發表して、何ら適宜の處置を採らなかつたことだ。

このだらしのない警察——と言ふよりも、寧ろ事なかれ主義でアメリカ式に横着だつたのだが——の眼を醒ますためには、なほ第三の犧牲を必要としたのかも知れない。引き續いて廿一日、前二者と同じ界隈の、三十二歳の Mrs. Mabel Fluke といふのが、同じく貸間の廣告を自宅の窓に出してゐて、二階階段の上り口で暴行扼殺されてゐた。今度は、被害者所有の薄紫のスカアフが、頸部の肉に沒する程固く捲き絞めてあつて、暴行の痕跡も思ひ切つて露骨だつたので、流石の警察も、かうなるともう事實に眼を覆つてゐることは出來なくなつた。このとき盜まれた物も、前同樣女の外套一枚と屍體の指から拔き去つた寶石入り指輪一個だつた。

當時のモニトバ自由新聞（フリイプレス）に斯うある。

つひとつに審詳すべく要心深い警察當局は、これら三事件が三日に亘つて連發するを待つたのち、おもむろに一つの推定に到着した。それは、ことに依ると、このボウトランド市に、例の闇黑の絞殺者が潜入してゐるかも知れないといふ、甚だ好ましくない假定である。ウイザアス夫人は自殺に相違ない——何ら自殺すべき理由がないなどといふのは、警察に對して無禮である。夫人は、人は何らの理由も動機もなく自殺することもあるといふ一つの新例を創造すべく自殺したのだ。それで宜しい——ダグラント夫人は、彼女自身の心臓が勝手に夫人に背いたため。精神的研究であつて、如何にして心臓が嫉妬の側へ寝返り込んだかなどといふことは、この際問題でない。死骸は既して冷たいものである。冷たいあまりに嫉妬へ突入したのだ。と、こかういふ論調は、如何なる讀者をも首肯せしめるに充分以上だが、世間にして經驗に富む警察は、これをもつて滿足することなく、ここに、この三つの事件の間に種々の共通點を發見するに到つた。それは實に、深い熟慮研究の結果であり、堅忍不抜の美徳を有する古参警察官のみの爲し得るところであると言はなければならない。三件が三件とも、被害者らしく抹殺——警告を——不向きにも——出してゐたこと、時計、指輪、その他の裝身具、及び各一枚の外套が失くなつてゐる點、同じやうに女の絞殺されてゐた事實、何れも正午から午後三時迄の出來事であること等、場合によつては、何うやら似てゐるやうでもあるといふのである。これは全く迷惑な話しだが、新聞煽動を爲した本市警察は、その後、やおら起ち上つて、發狂の當局に警告を發した。闇黑の絞殺者はまだ其地にゐるか何うか、と——

要心深い警察、熟慮研究の結果、堅忍不抜の美徳、新聞煽動を催したなど、この小論は、後話のあひだに、よく警察の無能と無稽味を指摘攻撃して餘す所ない皮肉の名文だ。非常な喝采を博して、いまだに記憶されてゐる所以である。

場面は、彼らを追つて再び桑港へ返る。

また十一月十八日に、ミスタ William Edmunds ——五十六歳——が、彼の下宿で絞殺された。以下、借間札、旅行、絞殺の三項は、この「闇黑の絞殺者」を貫く個々の事件に附き物の、いはゞ必須な條件なのだから、繁を避けて一々言及しないことにする。下つて同月廿四日、今度は、一直線に北上してシアトルである。「四十五歳のミセス Florence Monks が、借間あり、旅行、絞殺——この次ぎから略する——の順で、此時は、其上時價二千八百弗の寶石類が盗み去られてあつた。

便宜のため、ここで今までの殺人表を作つて、ちよつと締めくゝりを付けて置かう。

1 一九二六年二月廿日。桑港。クララ・ニュウマン孃。六十三歳。

2 同年三月二日。サン・ノゼ町。ロウラ・イ・ビイル夫人。六十三歳。

3 同年六月十日。桑港。リリアン・セント・メリイ夫人。六十三歳。

4 同年六月廿四日。サンタ・バアバラ市。ジョウヂ・ラッセル夫人。四十七歳。

5 同年八月廿一日。オウクランド市。メリイ・ネスビット夫人。五十二歳。

6 同年十月十九日。ボウトランド市。ビアタ・ウイザアス夫人。三十五歳。

7 同年十月廿日。同市。ヴアジニア・グラント夫人。五十九歳。

8 同年十月廿一日。同市。メエベル・フルウク夫人。三十二歳。

9 同年十一月十八日。桑港。ウヰリアム・エドマンズ夫人。五十六歳。

10 同年十一月廿四日。沙港。フロウレンス・モンクス夫人。四十五歳。

3

この沙港のフロウレンス・モンクス殺しに關して、ボウトランド市警察のアウチボルド・レオナアド探偵部長が、ボウトランドに於ける三事件の參考證據を得るためにシアトルへ向つた。ところが、こゝに皮肉なことは、この探偵の乘つた下り列車と、犯人を載せた上り列車とが、兩市の中間あたりで擦れ違つてることである。つまり、今度はシアトルに現れたといふので、ボウトランドから探偵が出發する。それと同時刻に、「彼」はシアトルを捨てゝボウトランドへ南下したのだ――これらの動きは、本文挿入の地圖の矢線に就いて見られたい――そして、沙港事件の二日目、十一月廿六日に、探偵と入れ違ひに入市した「彼」は、そのボウトランド市で、ブランシエ・マイヤアス夫人――Mrs. Blanche Myers. 四十八歳――を、くどいやうだが貸間札、凌辱、扼殺の經路でその犧牲者表に加へてゐる。

またモニトバ自由新聞から抜き書きしてみる。

「こんどは、大膽なる警察は卽座に斷定を下した。ブランシエ・マイヤアス夫人の殺害者は、かの闇黑の扼殺者に相違ないと。何故なら――と當局は勇敢に判斷するのである――マイヤアス家の窓には貸間廣告があり、夫人の首には小巾掛けが卷か

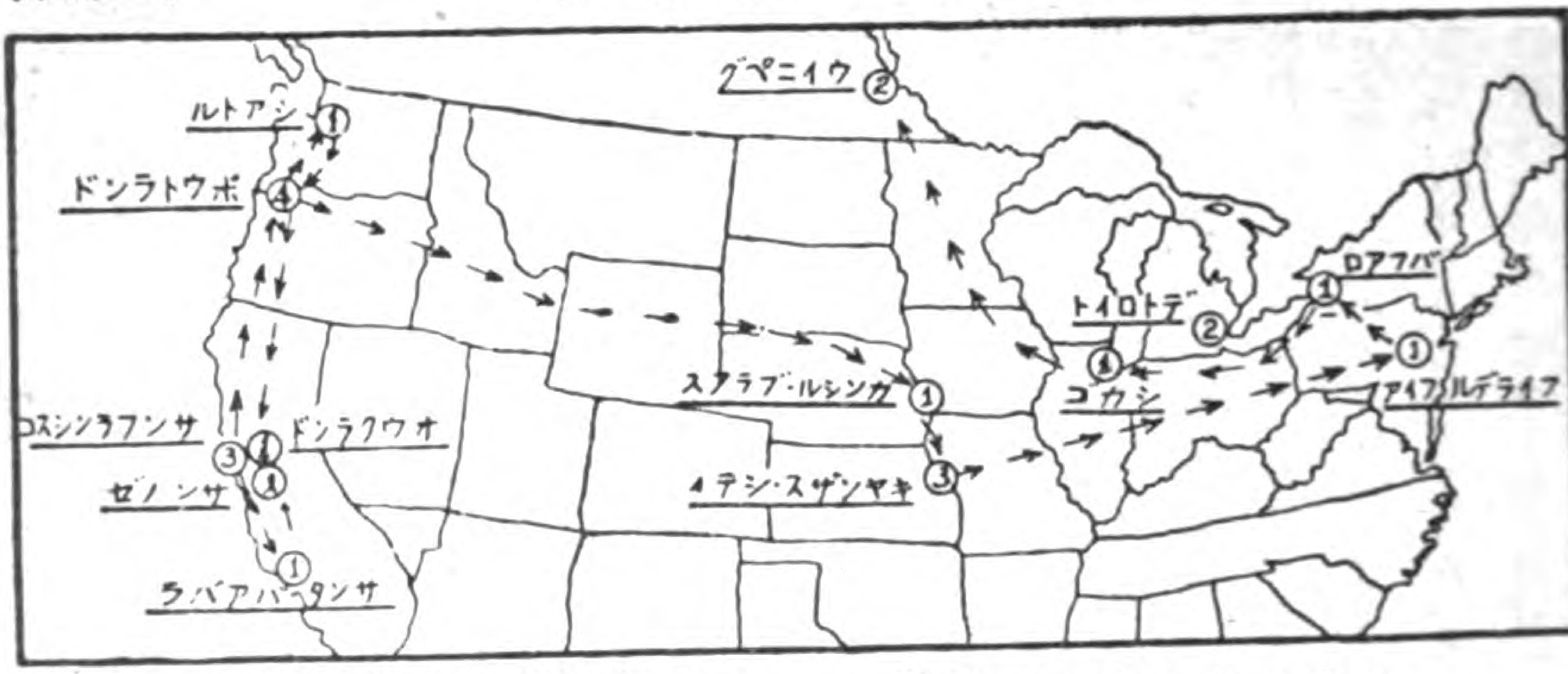
ルーテエブル掛けは多くの場合中子の上に懸るものであるが——夫人の屍骸は、その床間の寝台の下に横たはつてゐた。囲みに、異常なく横たはる時には、人は習慣として、むしろ寝台の上を覗ふのがつねのやうである。

矢の張り警察が跡捜してゐる。

かうなると、いかな警察でも真剣にならざるを得ない。普段呑気なアメリカ西部の警察だけに、一時に憤激して、日夜捜査に拝み出した。すると、この間異常の話題が不出来に数をなして、種々の情報に激して「彼」らしい人物の所在が何となく分明して来る事がないでもなかつた。この時のボウトランド市民の恐怖は大変なもので、未知の家を訪れる臆病の外交員や行商人は、軒並みに、いきなりヒステリックな女の悲鳴を浴びせかけられた。住間を見に来る者には、何処の家でも恐しい警戒の眼を見張つて、なかには、帯に立綱の鈴を押したといふだけで、各所の女から一日に何本となく住進の電話が掛つて来て当局を悩ましたりした。一方、当時きながら大電の警察の努力が報ひられて、そろそろ足が付き出してゐたことも事実である。警察は、何よりも先に、貴石外套等の盗品に眼をつけたのだ。これはこの場合、最も自然な捜査手段で、即ちこの品物を一々詳細に新聞紙上に発表して、何処かで盗品を見た心当りのある者の公助的出頭を促すことにしたのだつた。これが案外速效を呈した。ボウトランド市南區から三人の老婦人が現れて数個の貴石類を示し、次ぎのやうなことを申し述べたのである。

十一月廿五日といふから、モンクス夫人が絞殺された翌る日である。南ボウトランド市に三人の老婆が住んでゐる家へ、貸間札を見て来て一人の男が同居しはじめた。ところが、翌廿六日、マイヤアス夫人事件のあつた正午頃から、出たつきり帰つて来ない。つまり一日しか居なかつたわけだが、その一日の間に、彼は、三人の老婆達に数個の貴石類を安価に売つて行つたのだつた。が、殆んど同時に、新聞紙上の警察の公告によつて疑問の「彼」の臓品のことを知つた老婆達は、薄気味悪くなつて、三人相談の末、品物を持参して警察へ訴へ出たのだつた。

果してそのうちの大部分は、沙港のモンクス夫人の家から盗み去られたものと判明して、ここにはじめて、三人の老婆の供述によつて警察当局に「彼」の人相年齢等が知れるに到つた。これは實に第一の収穫で、當局慈悦と咄喊を極めたボウトランド警察としては、まぐれ当りとはいへ、俄かに大出来だつたといつていい。警察は勇躍した。「彼」若しくは「彼」の屍骸を発見し引き渡した者には、一千五百円を與へる旨、懸賞を公布した。と、ともに、詳細な「彼」の外見をシヂすて、合衆国



ゴリラ・ネルスンの足跡　圖中の數字は其市に於ける殺人數を示す

全體と、加奈陀へ放送した。そして、自信をもつて、「闇黑の扼殺者(ダアク・ストラングラア)」の次ぎの出現をぢつと待ち構へてゐた。全國の警察と民衆も同樣だつた。何處へ出ても、今度こそは捕まるものと決めて、安心と期待に滿ちてゐた。それ程、これは後で判つたのだが、その時ポウトランド市警察の發した人相書(デスクリプション)は驚くべく適確なものだつた。

案の條、間もなく「彼」は現れた。が、生憎逮捕のはうまで、案の條とは往かなかつた。マイヤアス殺しから一月程して、今度は、中西部のアイオワ州である。西部海岸地方に居たゝまらなくなつたものか、「彼」は突然カンセル・ブラフス市に姿をあらはして、四十九歳の Mrs. John E. Beard を、やはり貸間札を見て這入り込み暴行扼殺した。一九二六年の降誕祭の二日前、十二月廿三日だつた。同年二月廿日から、じつに十二番目の殺人である。

と、クリスマスの日だ。カンセル・ブラフスを中心に大騷動を演じてゐる最中、その南のキヤンザス市(シテイ)で、二十三歳のボニ行イ・ペイス夫人——Mrs. Bonnie Pace——が、「彼」のため暴絞殺された。續いて、間髮を入れない。二日後の二十七日に、同市でジヤマニア・ハアピン夫人——Mrs. Germania Harpin. 二十八歳——を暴行扼殺し、生後八個月の夫人の嬰兒の口中に襤褸片を押し込んで窒息致死せしめた。

この、生後八個月の赤んぼを殺したことは、今更のやうに亞米利加中を戰慄させた。「彼」の顏を見覺えることも、證言することも出來ず、殺したところで何の足しにもならない赤ん坊を、「彼」は冷々淡々として殺したのだ。これには、單なる殺人慾のほか何らの動機も認められない。第一級の恐怖が全米を包み去つた。新聞は舉つて「彼」にジヤアナリステツクな異名を與へた。「闇黑の扼殺者(ダアク・ストラングラア)」は前に言つたが、幽靈殺人者(ファントム・キラア)、ゴリラ犯人など——とにかく、斯くして一九二六年は、十個月に十五の

殺人といふ新記録を残して、この個人殺しの上にも殺れて行つた。丁度一週間に一人の割合である。

4

こんなふうに殺人ゴリラは、新聞によつて何よりの特大活字を供したので、新聞は、加害者の判らない女殺しは凡て自動的に「彼」へ持つて行く傾向があつたが、實際は、一九二七年になつてから四月まで、「彼」は比較的長期に亙つて静かに潜伏してゐたのだ。その四月二十七日、桑港の、Mrs. Mary [illegible] といふ六十歳の老婦人が、貸間あり で「彼」を呼び込んで、彼女の上で扼殺された。都會のゴリラ熱は再燃した。驚きは、更に恐るべき態度をもつて人々を狂奔させた。

これがゴリラをも狂奔させたとみえる。「彼」は、今までに數倍した活躍さをもつて、思ひ切りの記録を作り出したのだ。それは、約一箇月後に矢継ぎ早やに四日間に四つの殺人となつて現はれ、西に[illegible]レコードを示すに到つた。紐育州バッファロー市で一人、ミシガン州デトロイト市で二人、市俄古でひとり、これが四日間の出來事である。それから一週間の後、最後に、加奈陀へ這入つてウィニペッグで二人。

バッファロー市では、五月二十日に、三十五歳の Mrs. Jennie Ha[illegible] が殺され、二日後の六月一日には、デトロイト市で、Mrs. Minnie May——五十二歳——と、同居人の Mrs. Atenby といふ二十九の女とが同時に殺され、たつた一日置いた六月三日に、市俄古のメリイ・シイツエマ——Mrs. Mary Sietsema. 二十七歳——が殺された。これらの悉くが貸間廣告を出してゐて、暴行を受けたのち胸部を扼殺されたものであることは、言ふまでもない。

ところが、直ぐそのあとで、「彼」は、致命的な間違ひを仕出來したのだ。それは、市俄古をたつて、加奈陀へ國境を越えたことである。かうしてゴリラは、市俄古の兇行後四五日目には、早くも加奈陀のウィニペッグ市に潜入してゐた。

こゝで、其後の殺人表を整理してみると——。

11 一九二六年十一月二十六日。オレゴン州ポウトランド市。ブランシエ・マイヤアス夫人。四十八歳。

12 同年十一月二十三日。アイオワ州カンセル・ブラフス市。ジョンニイ・ベアウド夫人。四十九歳。

13 同年十二月二十五日。キャンザス・シティ。ボニイ・ペイス夫人。二十三歳。

14 同年十二月二十七日。同市。ジャアマニア・ハアピン夫人。二十八歳。

15 同時に、ハアピン夫人の嬰兒。

16 一九二七年四月二十七日。紐府。メリイ・マコネル夫人。六十歳。

17 同年五月三十日。紐育州バファロ市。ジエニイ・ランドル夫人。三十五歳。

18 同年六月一日。ミシガン州デトロイト市。ミニイ・メイ夫人。五十三歳。

19 同時に、アトセイ夫人。二十九歳。

20 六月三日。市伽古。メリイ・シイツエマ夫人。二十七歳。

加奈陀へ高飛びしたのは、「彼」の運命的失敗だつたと言はなければならない。一つは、その地形、人口の密度等にもよるが、加奈陀の警察制度、及び警官の質と能力は、世界に聞えてゐるところである。少くとも、亜米利加の警察よりは確固してゐるに相違ない。じつさい、結果から觀て、二者の相違を知らせるために「彼」は加奈陀へ飛び込んで行つたやうなものだつた。

六月八日、水曜日のことだ。

午前九時頃である。John J. Hanna といふ夫婦者が、國道に自動車を驅つて、エマアスン町からウィニペグ市へ這入らうとしてゐると、エマアスン町の郊外で、亜米利加の國境の方から歩いて來た一人の青年が、手を上げて自動車を停めた。ウィニペグ市まで乗せて行つて呉れといふのだ。

かういふことは、アメリカや加奈陀の田舎道などでは、よくあることで、同じ方向へ行く自動車が見知らぬ流れ者を拾ひ上げて同乗の便宜を與へる。なかには、默つて歩いてゐるのに、背後から傍へ來るとわざわざ停車して、乗せてつてやらうかなど、言ふ親切なのもある。

それ位ゐだから、ハナ夫妻は、悦んで青年を同車させた。

「歩いちや大變ですね。」

ハナ氏が言ふと、青年は、感謝に滿ちて恐縮した。色の褪せた赤いスエタを着て、灰色の鳥打帽をかぶつた、二十前後の愛想のいゝ男だつた。この邊の農家を、次ぎからつぎと雇はれて歩いてゐる、田園の渡り者に相違ないとハナ氏は思つた。青年は、圓い眼を快活に動かして、始終にこにこしてゐた。よく饒舌つた。

「仕事がなくて困つて、ウィニペグへ出るところなんです。町では、何でもして働く心算です。」

青年は、そんなことを言つて、屈託なさそうに笑つた。

ウィニペグ市の中央で、彼は厚く禮を述べて自動車を下りた。

やがて、メイン街二八二番の、ジャコブ・ガアバアといふ古着屋の店頭に、その青年が現はれた。其處で彼は、身に着けた一

円もの料金を賃の掛りで、その代りに、其の両側の背広の、片側の釦鈕の取れた上衣と、黒地に黄い縞柄のある洋袴とを買つた。直ぐにそれを着し出た。靴まで取り更へてゐた。それは、今まで石炭工場にでも働いてゐたかのやうに、伸び切つて見る自分眺たつた。

スミス街二百番地に、キャザリン・ヒル夫人——Mrs. Catherine Hill, 183 Smith Street——といふ中年の婦人が、素人下宿を營んでゐた。おまけに其の部屋が一つ空いてゐたので、夫人は、何によつてまだその窓に「貸間あり」の札を出して置いたのである。その日の午後、四時頃である。Tench Carter の青名刺を出しながら、貸間が掲げて間を申込んでゐた先刻の青年が來て、ヒル夫人方の玄関に立つた。部屋を見たいといふので、ヒル夫人が案内して、二階の表部屋へ上げた。彼は、その部屋が酷くこの方が気に入つたといつて、非常に喜んだ。そして、早速そこを借りることに決めて、一ヶ月の下宿を払つた。彼は、ウッドカッツ——Mr. Woodcutts——と名乗つて、ウイスベッチ川一つ附した、時計屋ホーフェイスの工場に働いてゐると話した。

「荷物を取つたら、明後日移轉しませう。」

ウッドカッツは附け足した。

「こんな静かな部屋が欲しかつたのです。僕は、高い理想を持つ信心家ですから——」と。

何だか変なことをいつたものだが、ヒル夫人が、このウッドカッツ青年に就いて妙だと感じたのは、彼の眼だけだつた。夫人は、あとで公判廷で述べてゐる。「別に何うといふこともありませんでしたが、たゞ、ちらいと見て直ぐ凝視めてゐるかと思ふと、急に眼を外らしたり、何か探し物でもするやうに室内を見廻したりするのです。」といふまでもなく彼は、その時ヒル夫人に對して起りつゝあつた殺意を、さうして押さへやうと努力してゐたものだらうが、夫人は、可成り長い間、其の無人の一室に彼と話し込んでゐたけれど、結局何ごともなかつたし、それどころか、夫人の受けたウッドカッツの印象は、決して悪いはうではなかつた。

5

ウッドカッツは、ヒル夫人方に一夜を明かした。次ぎの日は、六月九日木曜日だ。ウッドカッツは朝早く起きて何處かへ出て行つたが、その日の午後六時である。同じヒル夫人の家に下宿してゐるコウリー夫人の娘で、Lucie Cossar といふ十四歳の少女が、突如として行衛不明になつた。家中で手分けして捜し

て、それから警察へも届けたが、夜が更けても、ロウラはつひに發見されなかつた。

同じ九日の夕方である。六時頃だつた。William Paterson は、その勤め先である加奈陀太平洋鐵道會社の事務所から、リヴアトン・アヴエニウ一〇〇番の自宅へ歸つて來て、ちよつと變に思つた。何時も玄關へ迎へに出る妻が、その日に限つて姿を見せないのだ。家ぢう何處にも居ない。多分友達の家へお茶にでも行つたのだらうと、パタスンは餘り氣に掛けないでゐた。暫くして五つと三つの二人の子供が、戶外の遊びから歸つて來たので、パタスンは、有合せの物で晩餐を濟まして、子供達を寢かしつけた。十時になつた。それでも細君は歸つて來ない。パタスンは心配になつて、あちこち心當りの所へ電話をかけたが、それでもやうやう、妻がどこへも行つてゐないと判つて彼はほんとに狼狽て出した。警察を呼び出して、交通事故の有無を質ねた。そして、さういふ報告もないと聞いて、改めて二時間ほど、家の隅々まで念入りに捜索してみた。何ら異常ないやうだつたが、只一つ、旅行用のスウツケイスが、何時も置いてある場處から他へ移してあつて、鍵が外れてゐる。調べてみると、入れておいた七枚の十弗紙幣と、身の廻りの細々した物が幾らか紛失してゐて、その代り、臺所の棚にある筈の鐵槌が抛り込んであつた。パタスンは、急に何とも云へぬ不安を感じ出して、居ても立つてもゐられなくなつた。彼は、無意識のうちに膝まづいて、神に祈つてゐた。

『何ごとか、妻の身の上に恐しいことが起つたやうな氣が、段々と胸を打つて來ました。同時に、このとき程私は、自分の無力を知つたことはない。私は寢臺の横の床に跪わつて、力と智慧と導きを上帝に求めたのです。夢中でしたが、氣がついてみると、そこは寢室でした。で、祈り終つて起ち上らうとした時です。ふと見ると、傍らの寢臺の下から、見慣れない上衣の袖が覗いてゐる。つぎに、投げ出された二本の足を私は見ました。かうして、その寢臺の下に、妻の屍體を發見したのです。』

醫師カメロン博士が解剖した結果、パタスン夫人は、午前十一時から午後二時の間に、頸部を手で強扼されて死んだものであることが判明した。凌辱されてゐることはあきらかで、着衣の前半を捲り取つた布地が、屍體の×間に丸めて棄てゝあつた。著しい外傷が、頭蓋と肘と脊部とに認められた。手指の爪が、犯人のものらしい凝血を留めてゐた。相當抵抗したらしい形跡だつた。屍體の脚部には、見慣れない男の上衣が掛けられ、傍らに、血だらけの襯衣一枚と、よごれたハンケチ等が遺棄してあつた。檢視の最中に、醫師がパタスンにペンの借用を申し

込んだので、パタスンは、卿、寝室のドアの内側に掛けて出た看守へのポケットから、萬年筆を取り出さうとして、見ると、その洋服がそつくり紛失してゐた。もう一つ、屍骸の指から、結婚指輪が抜き除つてあつた。

この事件でウィニペッグの警察が大活動を開始したのが翌十日の金曜日で、そして、日曜の午後には、ヒル夫人方の背段使はない一室で行衛不明だつたロウラ・コウワンの惨屍體が發見された。十四歳の少女は、暴行を受けたのち絞殺されたもので、右腕の肉が、犯人の×で×ぎ取つてあつた。

この二事件から觀て、そこには、たゞ一つの推測が可能なだけだつた。殺人コリラが、米加の國境を越えてウィニペッグに來てゐる！　また事實、彼は、かうして米加の國境を越えることによつて、無意識のうちに瞬時、歩は一歩と自由から捕縛への地域内へ踏み込んで來てゐたのだつた。

河岸を變へたのが、逮捕を結果した最大の原因だつた。ウィニペッグ市は、この邊に特有の浮浪人口——放浪者の大群——をあまり寄せ付けない。組織立つた社會と、滿足した市民生活とを持つ町である。見慣れない顔は直ぐ眼につく。おまけに、大平原の中央にぽつんと建つてゐる都會で、四方數哩の間に散在する小町村は、いづれも、何らかの非常時の場合、聯絡に團結して一齊行動を取る制度がすつかり完備してゐた。また開拓者時代の輕馬車氣分が殘つてゐて、氣風の荒つぽい加奈陀だ。往時アメリカ西部で、部落やセツトルメントが、山から山、谷から谷と相呼應してインデアンに備へたやうに、市町村の自警制度が發達してゐるのである。

かういふ田舎だ。こゝへ飛び込んだのは、「彼」の自殺的行爲と言はなければならない。今まで、交通網が蜘蛛の巣のやうに張り渡つて、一夜のうちに何處へでも飛べる米國の、しかも人口稠密な、殷賑な大都市のみを手がけて來た「彼」が、突如この荒涼たる加奈陀の曠野へ迷ひ込んだのだから、大いに勝手が違つたのであらう。これ以後の「彼」の足跡には、明らかに混迷と狼狽が看取出來るのだ。

南加奈陀一帶が、一時に緊張した。ウィニペッグ市は、戰時の戒嚴令のやうな觀を呈した。有名な加奈陀騎馬巡査と、加奈陀太平洋鐵道會社の搜査部とが、警察に助力した。數百の市民が、職を休んで自發的に應援した。本市は、齒櫛で梳くやうに搜索された。過去數時間に入市した者は、到着時間の如何を問はず、確たる反證によつて滿足を得るまで、誰でも一度は追究の的とされた。ホテル、下宿屋、貸間をしてゐる家、それらはすべて、片つ端から嚴重な訊問を受けた。

「彼」自身も、この時はすでに當初の快活と巧妙と用意周到を失ひかけてゐた。神經が、廿二回の殺人の陶醉によつて麻痺されて、一種放心的に大膽な、そしてそれだけ不用意な心狀に這入つてゐたのだ。いはゆる運の盡きといふことであらう。かういふ習慣性犯罪者の落ちて往く心理は大概こゝで、これがその最大の特徴でもあるのだが、逃脫に馴れ、自信を重ねてゐるうちに、過度の安心が注意力を散漫にして、遂に尻尾を出すに到るのである。加奈陀へ這入つてからの「彼」の行動がそれで、一目掌を指すやうな動かない證跡が、續々と擧がつて來た。

6

ハナ夫妻が、エマアソン町からウィニペグまで一人の見慣れない青年を自動車に乘せて來たと、何氣なく話したことが端緒となつた。その時青年の着てゐた赤いスエタ其他は、そつくりガアバアの古着屋から現れた。そして、パタスン夫人の下半身にかけてあつた上衣は、彼がそれと交換に、ガアバアの店から着て出た「片側の扣鈕の取れた紺の兩前服」だつた。彼は、寢室の扉に掛つてゐたパタスンの服と着更へて、其處を立ち去つたのだつた。

二つの慘劇のあつた、六月九日の午後一時半頃だ。メイン街六二九番の古着屋サム・ウォルドマンの店へ、一人の客が來て、着てゐる物を全部、店にある品と交換したいと申し込んだ。浮浪人などを相手にしてゐるかういふ下町の店では、こんなことは珍しくないので、ウォルドマンは早速承知して客の選擇に任せた。客は、店にある品物の中から、茶がかつた外套一枚、洋服上下、靴一足、肌着、ワイシャツ、革帶、ネクタイと、これだけ選んで、直ぐに別室で着更へを濟ました。脱いで殘して行つた衣類雜品との代價の開きは、三枚の十弗紙幣で支拂つてゐる。

こゝで「彼」は、大きな錯誤をした。その、着換へをした部屋に、聖書、萬年筆、加奈陀太平洋鐵道會社の書類等を入れた黄色の紙箱を忘れて行つたことだ。これらは、ウォルドマンが交換に受取つた上着と一緒に、すべて暫時前にパタスン方から盗んで來たので、その箱は、七枚の十弗札が這入つてスウツケエスの中にあつたものだ。

男は、髯だらけの青年だつた。出がけに、鳥渡立ち停まつて、頬を撫でながらウォルドマンに訊いた。

「何處かこゝらに床屋はないでせうか。」

「床屋ですか。床屋なら直ぐ其處にありますよ。」

ウォルドマンは、自ら進んで、メイン街六一二の中央理髪店

ハーシュに歩いて案内して行つた。案内には、主人のニック。ティパアが立つて明りを持つた。ティパアは、客の頭髪が、所にこんな小さな町に向上つゝあるのを発見して、快い不審を抱いた。ここでも彼は、理想化に対して十全な議論が出してゐるなつ

『彼』の中間は段々判明しつゝあつた。ハート夫妻が同車させた青年。ヒル夫人の家に一泊したウッドカッツなる男、ガアパア。ウォルドマンの二人の青年達と、理想師ティパアの取巻つた客。それらはすべて、前年十一月にオレゴン州ポウトランド市の警察から放逐され、想像に甚く貧弱ながらも不来大膽と団結に際服されてゐた一団中の持役の一、客役人ナリラの人間と完全に一致してゐて、ウイニペッグ警察は、一緒にして網によつて、満足のいく所に成果が明らかに来るといふ下記を伏せた。

となると、九日の夕ぐれ、ホファといふ男が、市内電車の中で一人の青年と会話したが、それは、体験の話が出た『彼一』が、夕間が経つて、これから市外へ逃走しようとするところだつた。話題が、何かの拍子に宗教のことになると、彼は言はれた。

「あなたは教会へ行かんですか」

「いや、」ホファは答へた。「教会には往くが、教会の時には[illegible]」

「あなたは[illegible]よ。私は宗教心を持つてゐますが、ときどき大勢の人と一緒に何か[illegible]表はれることは出来ないでせうか。」

「規則的に礼拝に往くのが一番いゝでせうよね」

「いつだつて唱へるものは、教育のある人にとつては一層力があるのではないでせうか。」

「無智な人は皆によ[illegible]」

未明の二人が、電車の中でこんなことを話し合つた。この一話の句は、後でホファが陳述したのだが、彼は、ヒル夫人方に下宿する時、自分は理想の高い信心家であるといつたさうに、その他の場合にも、生活を通じて此の宗教的な片鱗を諸所に見せてゐる。勿論多くは、形式的な頗る珍談なものだが、根が異常な嘘からの昂だつたといふから、始終何かしら悩んでゐなければならない心持ちだつたのだらう。かういふ宗教的趣味状態―妙なことだが―は、この種の異常者によく見る症状で、罪の暗いかげの底に、微かな希望と光明を求めて、それによつて私かに良心を慰めようとする本能の現れかも知れない。

市外の発車で、ホファと『彼一』は、電車を降りて別れたがの時、彼一は、何を思つたものか、[illegible]の手引に[illegible]従つてホファの[illegible]を問ひた

「失禮ですが、これを進呈します。お眼に掛つた記念に。」

ホファはすこし呆れて、固く辭退したが聞き入れられなかつた。無理押し付けに鳥打帽を渡して置いて、「彼」は、持つてゐた紙包みからソフト帽を出してかぶつた。それは、テイバアの床屋を出たのち、シュヴリエといふ附近の帽子屋で購入したものだつた。こんなことまで、警察にはすつかり判つてゐたのだ。

終點は、ヘデンググリイといふ郊外である。「彼」は其處から、Hugh Elder なる男に賴んで、ボルタァジュ・ラ・プレエリの村までエルダアの自動車に乘せて貰つた。名を訊かれて、今度は Walter Woods と答へてゐる。途みち、話しはまた宗教のことになつた。

「そのウッドと名乘る男は、十仙か廿仙で買つてゐる粗末な硝子玉の寶石を、大事さうにネクタイに差してゐました。さういふ安つぽい裝飾が大好きとみえて、カフスにも、同じ大きなのを附けてゐました。元氣のいゝ青年で、しぢう獨りで饒舌り續けました。が、話すことに、ちつとも聯絡がないのです。何らの關係もなく、急に話題が變ります。相手になりながら、私は面喰ひました。何しろ、いま神樣がどうの斯うのと言つてゐたかと思ふと、つぎの瞬間には、もう紐育のコネイ・アイランドが出て來たり、別物へ飛んだりするのです。――とにかく、珍しい話好きな男でした。おもに宗教上の問題を口にしてゐたやうです。」

とは、後日證人として喚問されたヒュウ・エルダアの言である。

十一日土曜日の午後、「彼」は、近くのレヂナ町の Mrs. Rowe 1822 Lorne Street に現れて、貸間札によつて部屋の一覧を乞ふた。この時の變名は Harry Harper だつた。

7

「彼」は其の部屋を借りることにした。そして尙も、間代のことなどを話し合つて、「彼」とロウ夫人は、可成り長い間二人きりで一室に居た。それは、夫人にとつてこの上ない危機だつたが、運好く隣室に、グレイス・ネルスン孃といふ他の女が居合はせたゝめ、夫人は「彼」の毒牙を逃れることが出來たのだつた。が、デトロイト事件のやうに、女主人と女同居人と一度に二人殺されてゐる例もあるから、この時ロウ夫人が無事に濟んだのは、確かに奇蹟だと言つて宜かつた。また同じ日の夕方、その、十八歳になるグレイス・ネルスン孃が、裏庭で「彼」と話してゐるところへ、玄關へ、彼女宛ての小包みが配達されて、

ロウ夫人がグレイスを呼び込んだのも、天の摂理と観るべきかも知れない。これによつて夫人は、無意識のうちに、グレイスの一命を助けたのだつた。

日曜・日、彼は、何となく厳重な捜査が身に迫るのを感じて、ロウ夫人方の自宅に閉じ籠り切りだつたらしい。

一体彼は、子供の頃から一日に何度となく着物を着更へるといふ奇妙な癖があつたとは、彼を育てた伯母リリアン・フェビアン夫人も、一九一九年に受洗して、彼がアウル・フラアといふ名で結婚した看護婦の妻も、等しく証言してゐるところだが、じつさい、この逃走中の彼の行動を追ふと、如何に変装のためとはいへ、不必要と思はれる程たび繁く衣服を取り換へてゐる。全く奇妙な癖だつたに相違ないが、この奇癖のために、罪の発覚者は遂に明るみへ引き出されるに到つた。自惚れ、鼠が猫とも心から、過ぎたるは及ばざるが如く、には、これは日曜日朝だつた。

彼が最初に、確定的に世間の目へ這入つた最初は、例の、ウィニペッグのシュヴリェ帽子店で買つて来たソフト帽からだつた。

六月十三日月曜日、レヂナ町ブロウド街と第十一街の角のフェイギス古着店へ現れた彼は、いきなり帽子の交換を申し込んだ。主人の Henry Fagis が、価格へのため彼の帽子を手に取つて検査すると、それは、三幅色に派出なリボンを廻いたソフト帽で、裏に、「Winnipeg」と店のマアクが貼つてある。

このシュツヴェリ印の帽子に関しては、ウィニペッグの警察から、加奈陀地方の古着古物商全部に警戒の通牒が発してあつたので、フェイギスは直ちに、その客を怪しいと思つた。

「まだ新しい、好い帽子ぢやありませんか、何して取り換へるんです？」

「飽きたからさ。それに、似合はないし――」

「さうですか。それぢやあ何れでもこの中から気に入つたのを選んで下さい。」

フェイギスは、客の前に、古帽子を山のやうに取り出した。

彼は、落付き払つて、あれこれと被つてみたりしてゐた。

「もし其のなかに宜いのがなければ、」フェイギスが言つた。「奥から、もつと持つて来ますよ。」

店主は、何気なく奥へ這入つて、そつと警察へ電話を掛けたのだが、急いで店へ引つ返してみると、客は既に去つてしまつたあとだつた。彼は、フェイギスの態度に不安を感じて、帽子をそのままにして逃げ出したのである。

が、わざと遠くへは走らなかつた。直ぐ近所のフレンド・イングランドといふ古着商の店へ這入つて、そこで、パタスン夫

人の結婚指輪を三弗五十仙で買ひ求めしてゐる。

フエイヂスの店でのことは、「彼」を脅かすに充分だつたらしい。ロウ夫人の家に荷物を殘して、「彼」はその足でレヂナ町を後にした。そして、午前十時には、市外二哩の地點で、丁度來かゝつた Davidson といふ行商人の自動車に乘せて貰つてデエヴイン村まで行つた。こゝで「彼」は、一軒の百姓家の裏口から、青いオウバオウルとカアキ色の襯衣を盗んで、其の場で着更へた。この服裝の青年を、午後ヴアイバンク村へ自動車を走らせてゐたウイルカックスといふ人が、路上で頼まれて同車を許し、三哩南方の途中アルコラ村まで運んでやつてゐる。同夕五時、「彼」はまた Isadore Silverman なる者の自動車に同乘を乞ふて、今度は一氣に三十哩ほど南下した。かうして、國境を破つて再び米領へ逃れ歸らうとしてゐたのだ。

妙なことには、その時自動車のなかで話し合つてゐるうちに、このシルヴアマンと「彼」が意氣投合して、十三日月曜日の夜、それから翌十四日はデロレインで一泊、そして十五日水曜日にボアシヴエイン村で別れるまで、ホテルも同室を取り、二人仲好く旅行してゐるのである。ホテルの宿帳には「彼」は達者な筆で Virgil Wilson と署名してゐる。シルヴアマンは鐵物商で、三日一緒にゐる間、「彼」が何かと助手のやうに立ち廻つたのに對し、宿賃食費等は一切シルヴアマンが拂つてやつた。しかし「彼」は、かうしてこの間何者をも[illegible]、僅かに二日間の自由を延ばしたに過ぎなかつた。

何故なら、この時は既にフエイヂスの訴へによつて、捜査の焦點がこゝら一帶に集められてゐたからだ。道往く人は一人おきに、皆變裝の刑事だつたといふ。

十五日の夕方だ。

ワコパ村——Wakopa——に、Leslie Morgan といふ老人が、雜貨商を營んでゐる。そこへゴリラが出現した。老モルガンの店は、田舍によくある商屋で、片隅にはソウダ・フアウテンもあり、郵便局をも兼ねてゐた。「彼」はこゝで煙草一箱と乾酪を買つたのだが、客の顏を一眼見た老モルガンは、あやふく驚愕の叫びを發するところだつた。「闇黒の絞殺者」の人相は、新聞で、人の噂で、この數日、嫌といふほど聞かされて來て、何時の間にかモルガンの頭の中に、その映像がはつきりと出來上つてゐた。いまモルガンが、何氣なく顏を上げると、その想像と寸分違はない人物が眼前に立つてゐるではないか！　前年來全米利加で二十人、加奈陀で二人の女を殺して、全大陸の警官に追はれてゐる殺人ゴリラ其人である！——と、看破すると、老人は、騷ぐ胸を鎭めて笑顏を作つた。

二三當り觸りのない世間話しを交した。さうしながら老人は何とかして、店の向側にゐる娘に眼顏で報せて、警官を呼び込

まぜこうとする場面を狙つたが、これに氣が付いたものか、「彼」は早々店を出て行つてしまつた。が、モルガンは直ぐさま跡を追つた。ツコパ村からバナマンへ通ずる街道の眞ん中邊で、老人は「彼」に追ひついた。

追ひ着いたものゝ、老人としては、店を出る時、娘にいひつけて置いた警官や附近の追手が駈け付けて來るまで、「彼」を見逃さないように尾けて行くだけのつもりだつたが、「彼」は、暗くなりかけた背後の路上に人の跫音を聞くと、いきなり道の傍の畑の方へ飛び込んで、一散に走り出した。この時は、モルガンの娘の急報によつて、ツコパは勿論、隣接のキラネイ、バナマンの兩村からも夥しい人數が繰り出してゐた。警官、自警團を先頭に、手に手に懐中電燈、ピストル、鐵砲等の得物を持つた群集が、ツコパ街道に途切れもなく續いて、附近は、戰場のやうな騒ぎになつた。女子供は、ツコパの村役場に集合して門を閉ざし、一隊の男達が内外を警戒した。他の成年の男といふ男は全部、總出動で捜査に當つた。捜査は十五日の夕ぐれから徹宵續いた。ウイニペグからは、署長以下大部隊の警官が自動車を飛ばして急行しつゝあつた。

「彼」は、先の第一の女看護人の殺害を思ひ付いたものらしい。反對にツコパへ引つ返して、夫婦を殺す目的で 二三三 二三二 といふ者の家へ忍び入つてゐた。スケイト川の鐵路下に入かゝつたけで、これは失敗に終つた。そのうちに夜が明け出して、もう「彼」は何うすることも出來なくなつた。

アルフレッド・ウッドといふ捜査隊の一人が、自分の傍に、棒を持つた見知らぬ男が一緒になつて歩いてゐるのを發見したのは、翌十六日木曜日の午前四時頃だつた。二三二 二三三 は、その男のかぎ裂きだらけの着衣に不審を抱いて、お前は何處の者かと訊いてみた。

「バナマンに住んでゐる者だ」

男が答へた。ウッドはすこし安心して、いまウイニペグから探偵犬が來ると言ふから、さうしたらゴリラも躊なく捕まるだらうと、打ち解けて話しかけた。それを聞くが早いか、男は、眞つ青な顔をして矢庭に走り出した。ウッドは、はつと氣がついて、大聲を上げて彼を追つた。が、丁度その時、道路の向うから、ポアシヴェインの捜査隊が自動車を飛ばして來て、「彼」は終に、難なく逮捕されたのだつた。そこは、アメリカの國境を去る四哩の地點だつた。

「彼」――隠れもない殺人者　殺人ゴリラ――本名は二三三 二三二。一八九七年五月十二日生。米國人を父に、スペイン人を母に持つ、カトリック教の米國人だつた。

21　一九二七年六月九日。ウイニペグ市。ロウラ・コウワン　十四歳。

22　同日、同市、パタスン夫人、二十六歳。

アウル・ネルソンは、翌年一九二八年一月十三日午前七時五十二分、ウイニペグ刑務所の絞首臺上で絶命した。三十一歳だつた。

8

アウル・ネルスンは、加州の Napa 町で生れた。父親は鐵道從業員だつた。母は廿歳の時、彼を生んで七個月目に死んだ。翌年父も死んだ。それからずつと伯母の Mrs. Lilian Fabian に引取られて育てられた。彼の少青年期に就いて、フエビアン夫人は言つてゐる。

「アウルは、子供の時から、着物を着更へるのが何より好きで、始終着換へてばかりゐました。新しい服を買つてやると、それを着て出て二三哩で賣り飛ばして、何處かで汚ない古服と着更へて歸つて來るのが常でした。物の長短損得を比較することが出來ず、從つて價値判斷が付かず、責任觀念が稀薄なやうでした。一度などは、戸外で出會つた屑屋に、いきなり自分の着てゐた毛の襯衣を脱いで賣つて、寒さに顫へて歸つて來たことがあります。十七八の頃の眞冬でした。

何時も上を向いて威張つて歩く癖がありました。町を歩く時は、空を白眼んでゐるやうに見えましたし、家の中でも、天井を睨め付けるやうに、頭を背後へ反らしてゐたものです。三十歳に近い頃ではありませんが、家が厭くなつたといふこともなく、二三日も二三週間も、時によると二三個月も何處かへ行つてゐたり、さうかと思ふと、或る朝ぶらりと裏口から這入つて來たりしました。その間、どこで何をしてゐたのか話さうともしませんし、訊いたこともありませんでした。機嫌の好い時は、よく面白い事を言つたりしたりして皆を笑はせました。その中でも、アウルのお得意の一つは、重い樫材の椅子を齒でぶら下げて部屋ぢうを歩き廻ることでした。」

「何か食物に異常性は認められなかつたか。特に何んな食物が好きだつたか。」

と、ネルスンの精神鑑定をしたウイニペグ市立病院のアルヴイン・マザアス博士に訊かれて、フエビアン夫人は答へた。

「食物には別にこれといふ好き嫌ひはありませんでしたが——ただ食卓で、口に出來ないやうな不潔なことを言つて、皆を嫌がらせるのが大好きでした。そして半日も便所にゐたり、暇さへあると一人で地下室に這入り込んでゐました。」

「身を飾ることが好きだつたさうだが——。」

役者のやうな氣障な風體が二三日續いたり、突然大學生風に扮つたり、身なりは眼まぐるしく變りました。しかし大體、浮浪人を氣取つた、粗野な無精ななりをしてゐました。それが

器財が存在[illegible]る[illegible]した

裁判は、[illegible]の[illegible]の裁判所で、一九二七年十一月二日になされた。[illegible]ホルムスンは、前後を通じてただ十二語しか発言しなかった。その十二語は、

I swear to you that I have never committed murder; never, never, never!

だ。ハートレー、ヒル夫人、その他目撃者、理髪師ディパー、ホーアン、エルガー、ロー夫人、フェイザー、シルヴァーマン[illegible]計四名の証人が法廷に立って、悉く彼に不利な証言をした。彼は沈痛な面を粧って、始終黙々と聴いているだけだった。その態度は、まるで大芝居の主役を勤める名優のようだった。

一年中に[illegible]で、北米と加奈陀に[illegible]の、二十一人の女を殺害した[illegible]一人の男である。警察を翻弄しつくした最近の大事件である。[illegible]の[illegible]時代の[illegible]リ[illegible]一を髣髴しようと、刑務所から裁判所までの沿道には、好奇な市民の群集で動物のような人間を[illegible]。[illegible]道の両側から、アメリカのも、裁判の傍聴人は、顔を押し合って行った。殺人者を見る人々は、裁判所が何[illegible]して[illegible]の時へ[illegible]。ホルムスンの到着を待った。ホルムスンは、濃い灰色の背広に、襟に水玉模様のある黒[illegible]ネクタイを結んで、靴を綺麗に光らせて、四名の[illegible]者の中央に坐って自動車で来た。そして、この、[illegible]のような間[illegible]いて、[illegible]れる[illegible]ものは[illegible]、[illegible]にも[illegible]室の際に関係あるやうにした。それ以後、彼は何よりも群集を恐れて、裁判所への往復の護送自動車の乗り降りに、自分に向けられる夥しい視線を極度に嫌悪した。閉廷間、別室に入れられると、彼はコパー・逮捕されて以来監禁されてゐるヱヤハタン監獄の[illegible]を[illegible]っていった

お、[illegible]かった！　何うもえらい騒ぎですね

群集の大部分は女たちだった。彼女らは、その程同性を殺戮した殺人狂に、幾分か病的な興味を感ずるらしく、いはゆる怖いもの見たさで、女性の群集は日増しにふえて裁判所の内外を埋めた。コロラス・ガヤムの一団が裁判所の入口の扉の[illegible]に陣取ってゐた。彼と視線が合って、其の女達が大[illegible]をあげた時、彼は、[illegible]を[illegible]突っついて、[illegible]に笑した。

ホルムスンは、一九二九年八月九日に、[illegible]ルゥス郡刑務所に[illegible]、[illegible]のセント・メリー病院の一看護婦と、アルン・ノラアという[illegible]を[illegible]している。その[illegible]女、[illegible]ら[illegible]して同棲した。

ホルムスンとは六月[illegible]した[illegible]、[illegible]深くて、[illegible]間[illegible]、[illegible]者[illegible]日[illegible]を[illegible]寸[illegible]しました。[illegible]の[illegible]二三一[illegible]をしても、[illegible]

顔をした位ゐです。しまひには、他の男が見えないやうに、私の眼をつぶしてしまふと言ひいひしました。」

では、そんなに妻を愛してゐたかと言ふと、さうでもない證據には、看護婦をして無職の彼を養つてまで與れた彼女を、ネルスンは間もなく捨てゝ失踪してゐる。

『そのほか、何處へ行つても、近所の人が自分の惡口を言ふといつて、二三日で移つて歩いたり、それから、何かにつけて、よく聖書の句を普段の會話に挾みました。實際、聖書は暗記するほど讀んでゐて、お祈りもしてゐたやうです。』

亞米利加各地の警察からも確たる證據が山のやうに呈出されて、ネルスンは問題なく死刑を宣告された。直立して判決文の朗讀を聞いてゐた彼は、流石に烏渡顔色を變へたやうだつたが、直ぐ平靜に返つて、獄舍へ下げられた後の彼の最初の言葉は、「I ask for better food.」だつた。

一九二七年四月廿七日に殺された市府のマコネル夫人の良人ヘンリイ・マコネル氏と、ウィニペグのヒル夫人方で虐殺された十四歳のロウラ・コウワンの兩親コウワン夫妻とが、面會を願ひ出て特に許可された。

マコネルは、老妻――マコネル夫人は六十歳だつた――を殺行絞殺した犯人は、老人の諦めから一種奇妙な親密を感じ出したものか、彼は、新聞記者に圍まれて、獄中のネルスンと握手したのかして、態を變した。それとも、わざと騷がない態度に出て、犯行の模樣を語させたやうとしたのかも知れない。夫の慘死の狀況を、想像に止めて置くのは、老マコネルにとつて除りに重い心の負擔だつたのだらう。いつそ詳しく聞いて、彼はすつぱりしたかつたに相違ない。しかし、ネルスンは、固くマコネルの手を握り締めたきり、何も言はなかつた。

コウワン夫妻は、夫人のはうがネルスンに會ひたいと言つて肯かなかつた。夫人は、十四になる愛娘をあんな殺し方をした男を、よく見度いと思つたのだ。いくら停めても承知しないので、コウワン氏が附添つてネルスンの獨房の前に立つたのだが、案内の看守に呼ばれて起つて來たネルスンを見ると、夫人は、

「――この人ですか!」

と言つたまゝ、よく見ることも出來ずに泣き崩れてしまつた。コウワン氏は、夫人を支へながら、一種異樣な眼でネルスンの顔を凝視めてゐた。ネルスンは、無關心に、しかし充分禮儀深く、頭を下げて言つた。

「あなた方は親切な方です。」

昨年十一月十三日死刑の時は、ネルスンは狂氣のやうに、殆んど絞首臺へ駈け上つた。そして、鉛色の朝空を背景に、それが癖の、頭をすこしうしろへ反らして立つた。七時四十一分に踏板が落ちた。監獄醫マッカァサァ氏は、十一分間脈搏を數へて、七時五十二分に完全な死を宣した。

興業に掛けられた「西部戦線異狀なし」

近頃、小説の脚色されて舞台へ掛けられるのが一つの流行であるが、面白い傾きがある。新派劇ではそれが今日まで殆んど全部であるやうな状態であつたが、築地小劇場や新築地劇團、心座等いふやうに、高級な藝術的な劇場にあるものが、次々とその方法を採るに至つたら新しい現象である。殊に築地小劇場と新築地劇團とは分裂以後、事ごとに對立的存在を示し先にゴルキーの「母」を一方が脚色上演すると他方も負けずに忽ち競演して大いに世評を湧かせたことがある。今また「西部戦線異狀なし」を同劇團が取上げ、然も同時上演にといふことは大いに新劇の興味を唆つた。然も新築地の方は、兄築地がロマンチツクな「眠れる都市」を舞臺に据えてゐるのに對して「西部戦線異狀なし」五幕二十八場の一本立てにしてゐるから、その意氣込みもまた特に著しいものがあつた。新築地、脚色者は高田保氏であり、氏は嘗てもゴルキーの「母」の脚色に好評を博して最適任者だといふことが出來る。その上氏は自らそれが演出にも當つたのだ。

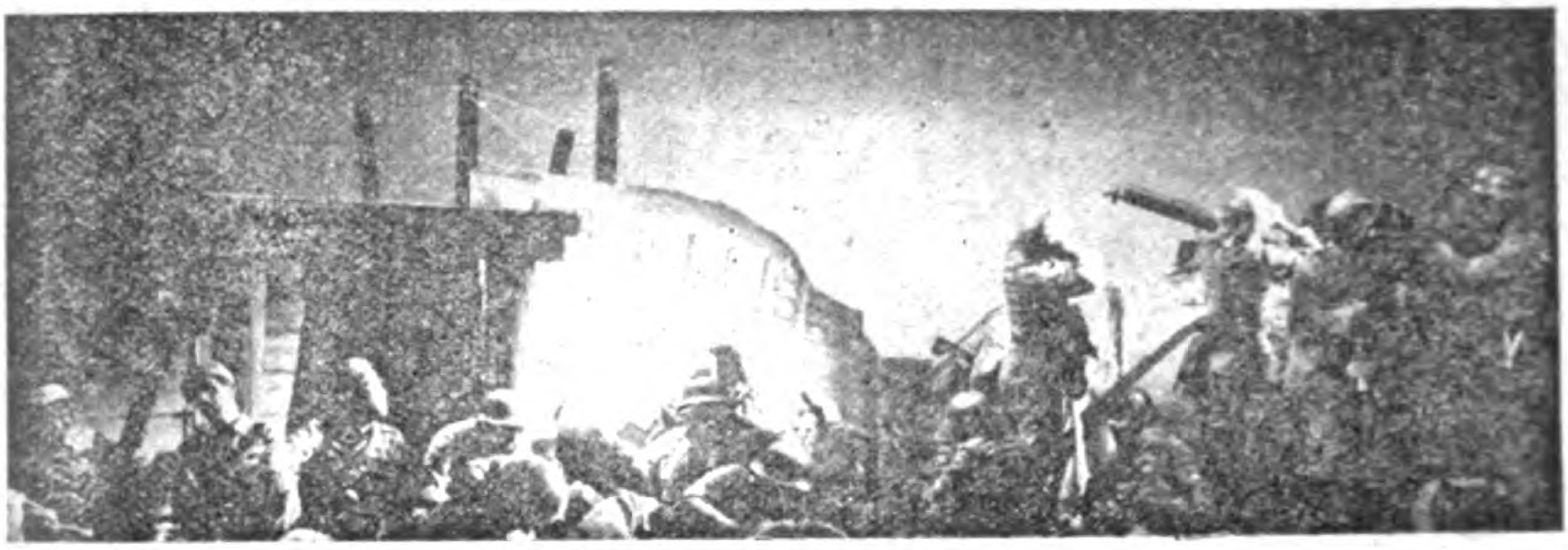
今度酒の蓋切つてみる時になつて、脚色者として最適任者だといふことが出來る。その上氏は自らそれが演出にも當つたのだ。

一體「西部戦線異狀なし」は、一九二九年度の出版界を斷然リードしたものだから、既に多くの人が讀んで知つてゐると思ふが、終始一貫したプロットがある譯ではなく、戦線の斷片的描寫であり、一人の人間の偶發的記録である。で、脚色は甚だ困難である。下手すると其の連絡がない、退屈なものに陥り易い危險がある。多くの場面に一々シーンを變へるのはよいが、その一定の筋の緊張のない限り、そいつはナンセンスが非常に退屈な、無意味なものとなる譯である。だが高田氏は流石にその間を巧みに處理した。二十八場といふ文字通りいろ〳〵割し、然も緊密に統一によつて七八十個所のカットに分つたものだから一時間水も洩れぬわけである。

一高田氏はこの問題をどうやつてのけたかを劇の進行につれて見てみよう。

新築地は帝國劇場で幕を開けた。帝劇なら開き、装置その他劇的構成上の條件は充分といつていゝ。それが前においても高田氏は縦横の才を揮つた。幕が上ると舞臺は後部に塹壕が流時に間間する。多くの兵士のうめきが聞える。上部へスクリーンが降り、西部の戦地の寫眞が映る。カイゼルの肖像が進んで一登場し、陣地を檢閲する。某隊長は、將校もまた中隊各々で分列させてゐると上申する。人間を邪魔なる××だと思つてゐるのだ。カイゼルが退場すると今度は生きた兵士の閲兵となり、喇叭吹奏裡に一齊に式は終る。……これがプロロオグである。

プロロオグの幕が下りると直ちに第一幕に入る。營舍前の空地である。多くの兵卒が休んでゐる所へ食料車が來ると皆が一齊に車を圍ふ。此處に兵士が如何に餓鬼にとりつかれてゐるかが語られる。「野戦病院」の場では、母を思ひながら死んで行く兵士と、兵士を診ることも少ない醫員、看護婦とが演ぜられ、次に前線へ向つて進行中の輸送自動車が照出され、多くの兵士が丸太のやうに積込まれたまゝ戦線へ戦線へと向ふ。照明弾が射ち上げられる。砲彈が爆發する。自動車は怒ら



本郷座……「西部戰線異状なし」

破壊され硝煙は舞臺を覆ふてしまふ。此處で高田氏はフットライトの場所に仕掛けたスチーム管の栓を抜いてスチームの白煙を濛々と立てる。然も銃聲は絶えない。炸裂する砲彈敵機の唸り、味方の掩護砲撃――かうして西部戰線に於ける流血と叫喚の物語は次々に展開されるのである。

第二幕――A虱取り。B塹壕小屋の夜。C家鴨料理。D塹壕小屋の夜。E鐵條網。F整列。

第三幕――Aパウルの家。B酒場にて。Cケムメリヒの母を訪問する。D書齋での話。E街路で逢つた人。

第四幕――A行軍の影。B樹にひつかゝつた死骸。C佛軍の塹壕。D塹壕の中。E戰時病院。F醫局。G病室。

第五幕――雨の西部戰線。

かうして全幕を終るのだが、最も劇がクライマックスに達すべき第五幕は、その筋といふ偉大なる演出家によつて全く臺詞なしの默劇にされてしまつた。だが、これを観るほどの観客は、その聲なき言葉の中に、言葉以上のあるものを讀み取つて、拍手と聲援と、足踏み鳴らしてインターナショナルの歌は歌はれ、そのために毎夜數名の檢束者さへ観客の中から出るやうな騒ぎであつた。

築地小劇場の方もこれと大差なき構成の下に脚色されてゐたが、これは才人村山知義氏の手によつて全く一篇の戯曲と化し、前者が臺詞よりも集團的動作に重心を置いたに反し後者に臺詞に重きをおき、一場一場を獨立さしてもいゝほどに充分な劇的效果あるものにした脚色法だつた。加ふるに俳優が老巧なので、ユーモアある臺詞が數段と生きて舞臺に動き、観客席からは笑聲や聲援が間斷なく湧いた。然も多くの映畫を挿入して劇的效果を高めたが、小屋が假建築の本郷座なので、裝置や配光には帝劇に一歩を譲らざるを得なかつた。だが便所の場ではクサヤの干物を燒いて人糞の匂にかへるやら、煙硝を客の近くで焚いて硝煙の香を劇場中に立ちこめさせるやら、細かい所にまで大いに神經を働かせてゐたのは、うれしかつた。

以上は、十一月末の兩劇團の興行であるが、この他に新築地は十二月中旬を五日間新橋演舞場で再上演し、明石潮とその一黨は淺草の公園劇場で十二月上半期を上演してゐる。原作が如何に世界的に賣れた本だからとはいへ同じものをこんなに一時に上演することは珍らしい現象である。中には「東部戰線異状あり」だの「全部戰線異状なし」だのと、或はレヴユウになり或は映畫になりして一種の流行を形づくらうとしてゐるのは何たる「異状あり」ぞやである。

だが終りに筆者は決然としてかう云はう。それが「西部戰線異状なし」の全てではない、といふことである。

臺灣日日新報

●每號總督府府報、臺北州報臺北市報を附錄として添ふ

●南支及南洋に通信機關を有し報導迅速

臺北市榮町四丁目三十二番地
株式會社臺灣日日新報社

基隆市（停車場前）
同　基隆支局

臺中市寶町
同　臺中支局
電話一〇七番

臺南市錦町二丁目七十七番地
同　臺南支局
電話二〇番
振替口座臺北二二〇番

東京市京橋區銀座三丁目十七番地
（勢木ビル二階）
同　東京支局
電話京橋一四九番
振替口座東京二六〇二番

大阪市西區靱南通り二丁目
（ユタカビル二階）
同　大阪支局
電話長土佐堀七四三番
振替口座大阪三三三五番

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

伊藤式家庭ストーブ

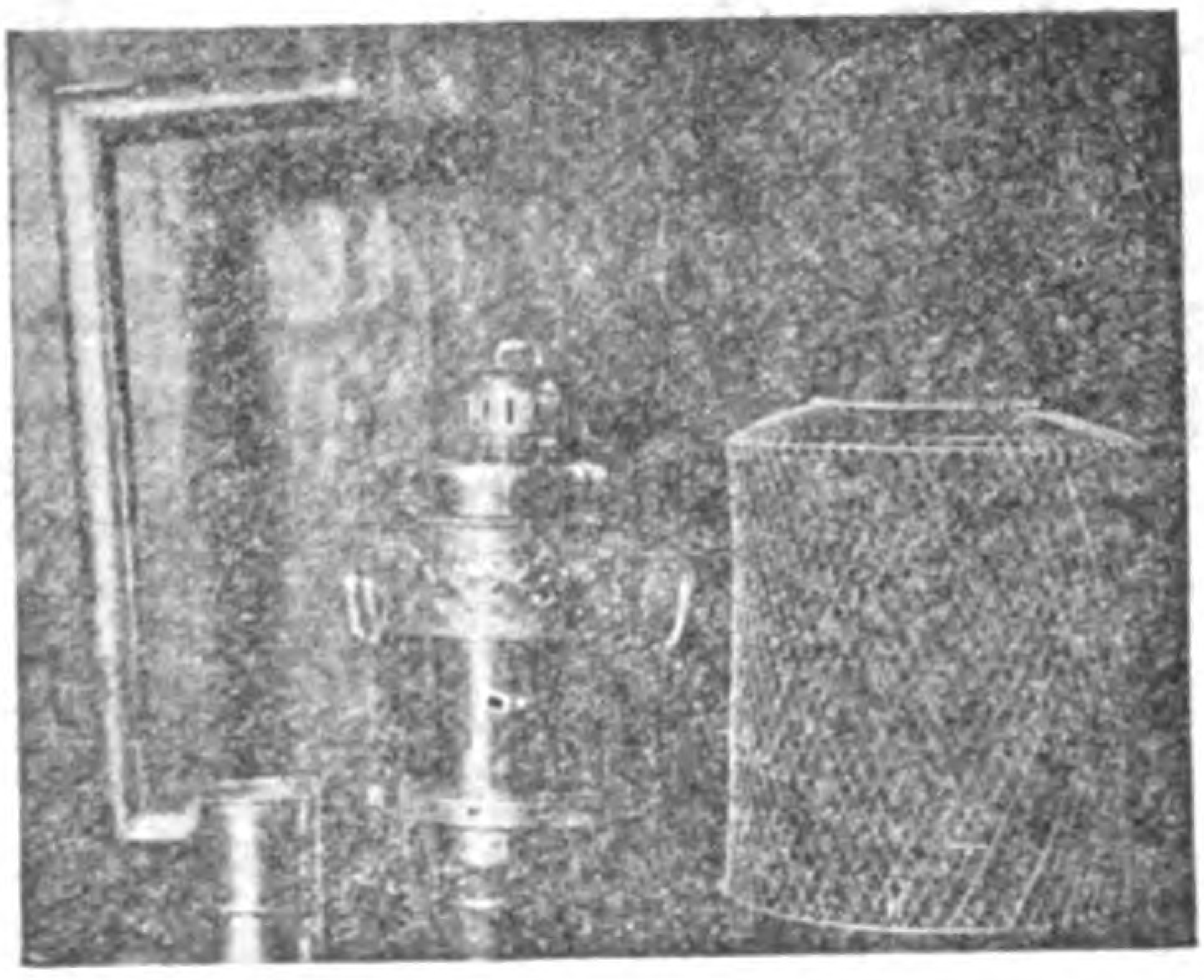
◇外觀、構造共に從來の如く單に外來品の直譯的でなく、使用材料に至るまで全く發明者伊藤氏の創意に出でた世界最初の輕銀製ストーブはこれ！

◇完全燃燒による燃料の經濟、人體に最も恐るべき一酸化炭素を極度に消滅し、煉炭を使用しては煉炭特有の惡臭を除去する事が出來、火勢の調節も保燃時の伸縮も皆自在に適溫と適濕とほのかな火光の快感とは、期せずして一家の和樂となりませう

◈本年度特價　九圓八十錢　（荷造費三十錢）
外綱　二圓　（荷造費三十錢）

◆特別希望の向には、排氣筒の用意も出來ました。輕銀製長サ五尺五寸まで伸縮自在、荷造費共三圓十錢。

◇カタログをお請求下さい。　運賃全部先拂



古書賣買のお取次

主として地方在住の愛書家諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案内係」を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。

古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。お問合せだけで御返事致しかねる樣な種類のものならば、一應御送附下されば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して、お返事を申上げます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知をきを願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、其他の破損等詳細にお書添へを願ひます　但古文書、錦繪の如きは、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛名は「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

昭和五年新春の 御新調は

◇新春の晴着のお支度は出來ましたか？只今代理部は大繁忙を極めてをりますから、お急ぎの御注文はお早く願ひます。

◇型は常に紳士的な正しい流行を選び、生地の選擇にも品質本意を旨と致しますから居ながらにして東京型の洋服が得られます

◇見本請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添附ノ事。

背廣服　A 三十八圓　B 四十五圓　C 五十五圓

オーバー　D 六十圓　E 七十圓





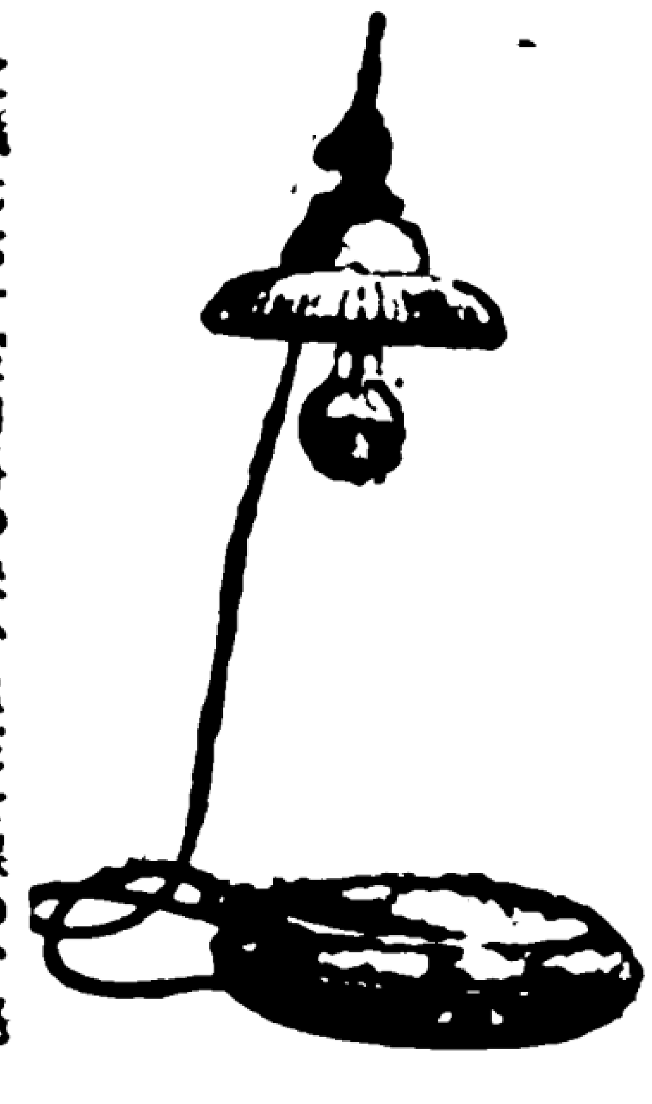
洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へることは經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上、お年令をお申聞け願ひます。

代理部では、その種類のお年令向きなものをお見立てして、明確な圖入りの寸法書を添へてお送り致しますから、これによつて各部分の御寸法をお送りになれば、約二週間で居ながらにして、シツクリとお體に合つた服がお手に入る譯けでございます。

中央公論社代理部
振替東京七八四七五番

最も安全な
電氣湯たんぽ

電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに度々時毎に湯を取換へる手數も要らず、熱湯を用ふる危險もなく、常に適氏七十度内外の快い温度を保つ、絶對安全、使用法簡便、堅牢な、療養に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ重寶な品です。



定價（二燭用ソケット及びカバーつき）四圓二十錢
送料　東京市内十二錢　内地四十五錢
領土七十五錢

洋服カバー

防水防塵防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。
改正定價　大一圓　小六十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に液體的工程と化學的處理とを施したものでありますから、織物固有の染色を損ずる事は決してありません。
この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを寄せ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用をなして居ります。
家具類、特に漆塗の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。
定價（金屬製容器入）　一圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ　ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。
洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指端で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには何とも云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛先は絹の様に軟くなり、日々濃艶の美を増します。
定價　婦人用紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ　シャンプー

理想的洗髮液スマドレ、シャンプーは短時間に頭肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や斷毛を直す事は全く不思議な位で、スマドレヘヤトニックと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界的逸品です。
日々忙しい社會に立つて、婦子の髮を整へる事が、重寶な裝備の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、極もさつぱりとした髮で、自備共に氣持ち良く會話する事をおすゝめ致します。
定價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。
此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお註文下さい。
定價（春、夏、秋、冬）各二圓
（四季組合せ、又八四個一七圓五十錢）
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日せきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、喘にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。
御所々から御家の纏つた註文がありましたが、今後十個以上纏つた御註文には[illegible]割引を致いたします。
定價　一圓　送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

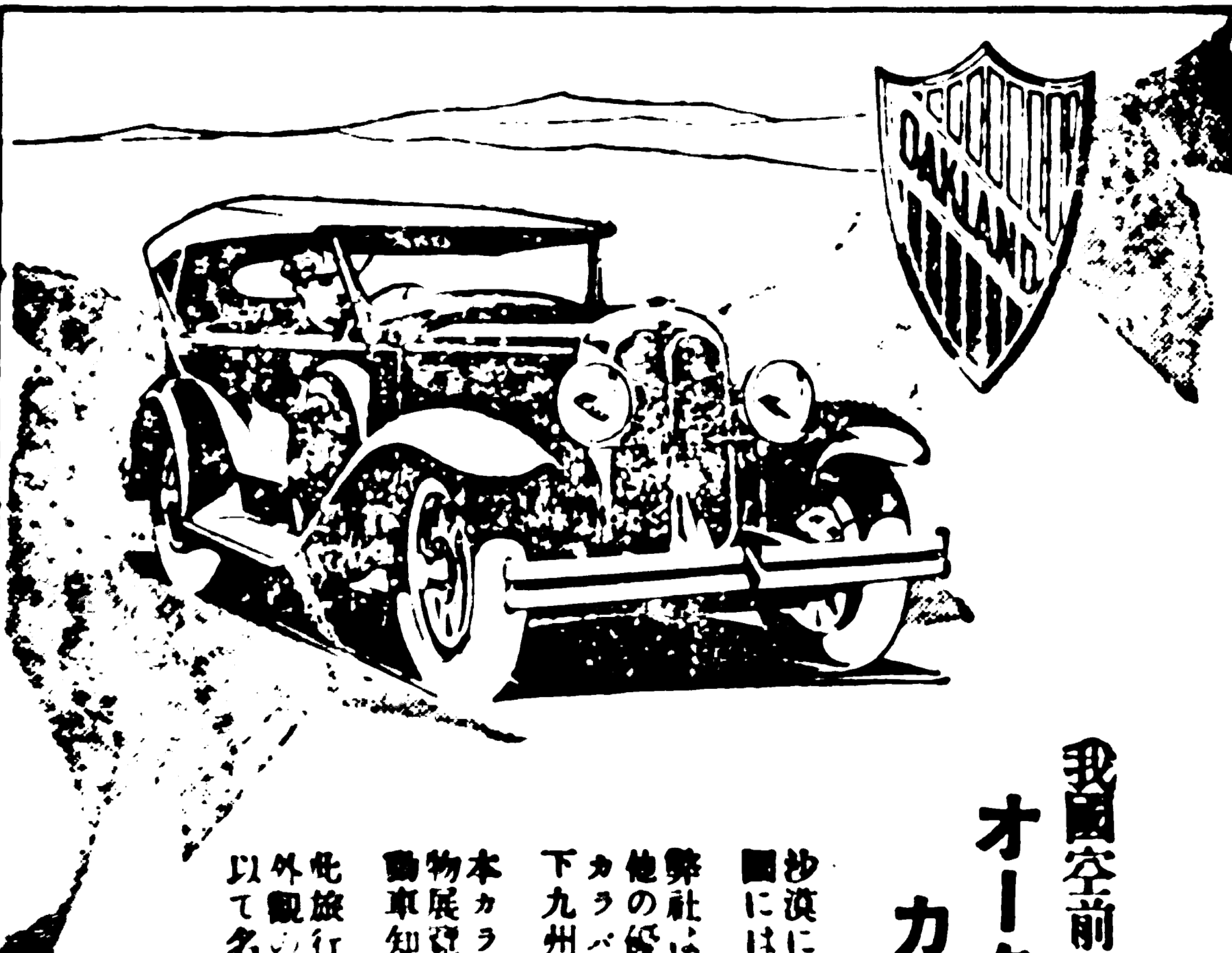
草津温泉の精

本劑は古來有名な草津温泉の有效成分を凝めたもので、天然物其まゝではありません。化學的操作が加へてありますから不純物なく、所謂湯の花に比較して數倍の効能があります。
本劑約二〇乃至九〇匁は約一石の新鮮な温泉となり、浴後の皮膚はサラッとしべたつくやうなおもなく、又衣類を汚す事もなく、風呂釜の痛むこともなく、木製品は却つて丈夫になります。
其他含嗽料としてはコップ一杯の水に一、二滴を、頭部洗淨用には約一合の水又は湯に十滴乃至二十滴を用ひます。
定價　大形（二〇回用）　二圓
特大形（二〇〇回用）　六圓
送料　東京市内十二錢　内地二十七錢
領土五十五錢

御注意

◇御送金には振替のお利用が一番安全ですが、地方によい郵便より四日乃至十日以上遲れますからお急ぎの御註文は振替で必ず御指定に願ひます。
一、新作は六日に一切の事務を開始致します

中央公論社代理部


OAKLAND

文藝時評

正宗白鳥

西洋文明の現代は、ニューヨークに於て最もよく現はれてゐる。古代文化の跡の最も豐富に殘つてゐるのはローマである。「よく伊太利を見、ことにローマを見たるものは、かつて不幸に陷ることなし」と、ゲーテは、ローマの古美術に接して驚嘆してゐる。「太陽よ、汝留つて汝のローマを見よ。より偉大なる何ものをも、汝は見たることなく、また見ざるならん」といふ、ローマに捧げられた最大級の頌德表には、歷代の歐洲人が皆喜んで署名せんとしてゐたらしい。「ローマは一週間見物すると分つた氣がする。一月ばかりゐると、少し分らなくなる。半年足を留めてゐると、全く分らなくなつてしまふ」とも云はれてゐるが、そのローマを、私は一週間足らずの間に、素通り同樣に一通り見物した。

宏壯なるヴアチカン宮殿に珍藏されてゐるだけの彫像繪畫古書などを見ても、ローマには、古來の美術品が濱の眞砂の如く存在してゐるのに驚かされて、「これぢや、手が着けられない」と、はじめからガツカリした。西洋の美術について極めて淺薄な豫備知識しか有つてゐない我々東洋人は、これ等のものを、どれだけ鑑味し得られるかと迷つた。案内者を手頼りに、あちらこちらの寺々に詣り、博物館を訪れて、由緒のある古名匠の遺物に、次ぎから次ぎへと接してゐると、興味を覺えるよりもうんざりした。頭腦に異樣な壓迫を感じた。ところが、ある日、心當てにしてゐた博物館へ行きそこねて、異つた所へ紛れ込んだが、其處には新畫展覽會が催されてゐた。「伊太利に來て新畫を觀るなんかは時間潰しだ」といまいましく思ひながら、兎に角室内に足を入れたが、何氣なしに觀てゐるうちに、次第に面白くなつた。連日觀續けて來た古名畫からは得られないやうな親しみを感じた。林檎がころがつてゐる。魚が置かれてゐる。花瓶が在る。自動車や

街車の通つてゐる賑やかな街路も描かれてゐる。どれも技術は下手ではなからうけれど、異国の自然と人事の光景を捉へたものでも、我々でも直ちに記憶することが出来るのである。伊太利のことだから、宗教画も多かつたが、それも普通の絵などすべてが、昔の名家の遺業を観馴れた目には、稚拙なものであつた。耶蘇の磔刑でも聖母でも、聖書のなかの人物や事件が、思切つたポンチ絵にされてゐるのである。耶蘇がヒョットコの相をしたり、マリアがへそをかいたりしてゐる。

そこで私は考へた。伊太利のやうな名画に富んでゐる国で、新たに絵画に志す青年は、却つて幸福ではないので、あたり前の道を踏んでゐては古人に追ひつく望みがないから、殊更奇を衒するやうになるのであらう。未来派といふものが起つたのも、さもあるべきことゝ思はれた。しかし、いくら未来派などが出て来て、功名心に富んだ一部の青年が騒立てようとも、ヴァチカン宮殿などの名画大作は微塵動きもしないのである。

伝統の力は強い。私は帰国の途中、鹿島丸の図書室で、何月號かの中央公論を披読した時、柳澤健君の感想に、興味を寄せたのであつたが、佛蘭西その他欧洲の国々では、伝統を重んじる。自国の過去を假設して、新奇の名に雷同することはない、といふのが、一篇の眼目であつたと覚えてゐる。日本では、明治以来、外国の新しい思想や芸術で、次ぎから次ぎへと生半可にしてゐることは、識者の注意を待つまでもなく一目瞭然たる事実なのである。

しかし、西洋にかぶれること、新奇の流行を追ひ廻はすことも、一概に非難すべきものではないやうに思はれる。その欲望があつてこそ、日本は他の亜細亜諸国と異つて、今日の大をなしてゐられるのである。世界の歴史に於て、近代の日本のやうに、世界の文化を急速に取入れた国がどこにあるだらう。近頃のニューヨークは、最近二十年の間に、過去の二世紀間に成就した以上の変化を示してゐるといはれてゐるが、江戸から東京になつた日本の首都の変化の激しさはニューヨーク以上であらう。たゞ、ニューヨークは、自己独自の面目を発揮して来たのに対して、東京は、西洋の模倣を目標として変化したのが違つてゐる。文明のおくれてゐた日本が、文明の進んでゐる西洋に接して、敏捷にその模倣を企てゝ来た

のである。明治前後の先覺者と云はれてゐるものは、要するに、人一倍敏感に西洋模倣を感じた人といふに過ぎないのである。森有禮にしても、馬場辰猪にしても、あるひは、眞山君の描いた坂本龍馬にしても、福﨑先生などの指摘する横井小楠にしても、西洋の男女同權とか、代議政治とかを聞嚙り生嚙りして、衆に先立つて、その必要を感じたくらゐが、先覺者といはれる所以であつた。代議政治が、西洋のやうな素質のない日本では、どんな風に發展して行くかといふことについては、彼等先覺者といへども先覺し得なかつたのである。

すべてが模倣である。しかし、世界の場末に孤立してゐた日本が、俄かに世界に接觸した上は、外國の事物に對して、ゆつくり構えて深い批判をめぐらしてなんかはゐられない譯である。ことに、日本の傳統といふものが、敏感な青年には、どれほどの價値があるかと疑はれるのも、無理がないやうにも思はれる。

文學だけについて云ふ。私は、傳統を重んずる心から、日本の古來の文學が、傳統的にどれほど保れてゐるか、新たに考直さうと思つた。それで、歸朝後一ヶ月ばかり、狹苦しい故郷に蟄居した間に、古ぼけた二階で、日本の代表的古文學を取り留めなく讀直して見たが、傳統の味はひでは、我々にさへ手頼りない感じがした。外國の文學では得られない親しみがあつても、愛惜の思ひを寄せるには、それがあまりに稀薄であつた。「より偉大なる何ものをも、見たることなく、また見ざるならん」と云はれるほどの傳統の輝きを、私はそこに見ることが出來なかつた。伊太利の若き美術家のやうに、傳統の壓迫を感じないで、身輕に進んで行けさうに思はれた。明治以來、文壇の流行が目まぐるしく變遷したが、時が經つほど偉大を加へるやうな作家はなかつたのである。必しも後進の輕薄で前代の作家を無視したとばかりはいへないやうである。西洋では傳統を尊重するのに、日本では傳統を輕視するといふ非難も、文學の方面だけについて云ふと、必しも當を得てゐないのである。

自分に獨創の力があるなら、日本の文壇では、自由にその力を伸ばし得られる筈である。

過去一年間、私が日本にゐなかつた間に、プロレタリア文學と名づけられる新文學が、ますます威力を揮つて天下を獨占し、在來の文學は片隅に押やられ、氣息えんえんとしてゐると傳へられてゐる。田舎に隱居してゐる私には、其眞相がまだよく分らないのであるが、二三の雜誌と二三の案内者によつてさういふ傾向について教へられた。そして、これからその流派に屬する新しい作家の小さい作品を讀んで見ようと思つてゐる。ローマで見た青年畫家の新作品のやうなものであるか、あるひは、二十年來の日本文學の殼を脱した、新しい筆の力と、新しい觀察が現はれてゐるものであらうか。

私は、手許にある十二月號の二三の雜誌を讀んだし、海外旅行中、あちらこちらで、をりをり中央公論と改造とを讀んだ。異郷にあつて日本の新聞雜誌を手にするを懷しく思はないことはないが、私は、自分の現在と拘はりが薄いやうに思はれて、そこに出てゐる小説なんかしみじみ讀む氣がしなかつた。でも、そのうちの幾つかは通讀して、佐藤春夫氏の「陣逕」、小杉天外氏の「鎭西守護職」と、里見弴氏の「大地」の一部分だけは、今でも多少思浮べられるほどに記憶に殘つてゐる。「陣逕」は、我慢して二三枚讀みかけてゐるうちに、ふと心が捉へられて、讀終るまでは、ホテルの長椅子から身を起すことが出來なかつた。毎日歐洲の都會の街路を歩いて、種々雜多な男女に行會つても、彼等が何を考へてゐるか、どんな生活を營つてゐるかは、さつぱり分らないのであるが、その土地の名家の小説を讀むと、そこらの男女の生活の内面が、我々異國人にもいくらか分つて來るのである。「陣逕」に描かれてゐる男女も、ありありと私の眼前に現はれた。私は暫らくそれを眺めた。老年無氣力の強くなつてゐる私をも動かす力をこの小説は有つてゐた。十二月號中央公論に掲げられてゐる徳田秋聲氏の「[illegible]」には、[illegible]如く刺激性を帶びた女子の環境や行動や思想が、詳かに書かれてゐるのであるが、私はたゞの記録文を讀む以上には感じられなかつた。記録文としても空々しくて、「陣逕」を讀んだ時ほど、[illegible]なかつた。以前人が[illegible]といつたことがある」

小杉天外氏には、[illegible]つて、氏が老いてなほ創作慾の衰えないことを知つたのであつたが、その時氏

は、新たに戯曲に筆を採つてゐると云つて、抱負の一端を洩らしてゐた。「筑前の義興」は、あの時の製作であらうと察せられたので、私は久振りで氏の筆力や心境を窺はうとして一讀した。そして、氏もなか〳〵アジをやつてゐると微笑された。昔氏はゾラに傾倒してゐたらしく、世相の寫實には骨を折つてゐた。あの寫實の努力を續けて、今日の世相をいき〳〵と寫し出したら甚だ面白いのであつたが、氏は、うつり行く文壇の波に押流されて、あの寫實の努力は中絶されたらしい。昔氏を小田原の閑居に訪づれた時、氏は「コブシ」といふ長編小説を讀賣新聞に連載してゐる最中であつて、話題は自分からその小説に連關したが、「世の中のことは、つまりこのコブシだ」と、氏は華奢な手で拳固をつくつて云つた。このコブシの主觀をもつて現代の世相を批判的に描出すのも面白いと思つてゐる。しかし、氏は文壇人としては、あまり運命に惠まれなかつた。あの寫實の努力とこの主觀の力とを合體させて、天分を發展させるやうな境遇に置かれなかつた。新戯曲「義興」は、劇的效果を有つてゐる。そのうちで、青年と老人との考へ方に對して現代風の理解があるのが、最も私の心を惹いた。今の知識階級から見て譯の分つたやうな言ひ方がされてゐたと、私は薄々記憶してゐる。しかし、私は、そこに、義興なんかについて力の弱さを覺へた。コブシの意氣がない。

新潮十二月に出てゐる眞山青果氏の「江藤新平」にも、義興同樣に、今の知識階級の同意しさうな現代的聰明さがある。天外青果兩氏の如き年長者でも、知らず〳〵時代に歩調を合せるところのあるのを見て、私は感慨を催した。夏目漱石氏の如きも、最後の長篇「明暗」に於て、プロレタリアらしい男を一人出して、プロレタリア的咲火をちらしてゐた。

船の中の書庫に、大佛次郎氏の「赤穗浪士」の上卷が藏されてゐて、それを、多くの乘客が面白がつて讀んでゐたので、私も借覽した。私はさして面白いとは思はなかつた。しかし、この頃來訪の雜誌記者に訊くと、大佛次郎氏は、現代第一の人氣作者で、「赤穗浪士」は、その代表作であるさうだ。私は、そのうち書物を手に入れて全部を通讀したいと思つてゐる。デューマの「モントクリスト伯」(日本譯では巖窟王)は、今なほ佛蘭西文學中での、最大なる大衆讀物の一つである

らしいが、あれを讀むと、佛人に對する理解が一歩進められるやうに思はれる。復讐心と貪食慾、それがいかに強烈にあの小說に現はれてゐることか。私は、ある趣味の深い案內書を手にして以來、古代巴里の跡をよく訪ねた。そしてかの大革命の古跡をも巡覽して、帝王貴族僧侶に對する民衆の憎惡の念、復讐の慾の強さに戰慄を感じた。巴里では、寺院にでも、大學にでも、議事堂にでも、市廳にでも、その他到るところの大建築物に、「自由、平等、博愛」の三語が刻まれてゐるが、そのうちには、「憎惡、復讐、階級慾」の文字が潛んでゐるのを、私は空想しないではゐられなかつた。「モントクリスト」にも、表面に爆發が現はされてゐないこともないが、それは復讐慾に比べると、影のやうなものである。そこで私は赤穗浪士の復讐慾と、巖窟王の復讐慾との相違を考へた。濃淡強弱の相違をも思つた。これについては、他日、「赤穗浪士」を通讀したあとで論述するかも知れない。

谷崎潤一郎氏の「蓼喰ふ蟲」を、秋の夜長のつれづれに讀んだ。その夜は私に取つては、快い一夜であつたと云つていい。私は京都郊外の或寺のあたりを散步して、近年になく、日本の秋をしみじみと味つたが、「蓼喰ふ蟲」にも、さういつた味はひがある。日本の傳統的情緖や、洗煉された傳統的文藝は、今の文壇では、殆んど缺けてゐるらしいので、この作品などは默殺してゐるのであらう。將來かういふ作家は現はれなくなるかも知れない。永井荷風氏の「雨瀟々」が連想されるが、あれよりものんびりしてゐる。それに、この「蓼喰ふ蟲」には、傳統的の風流の餘韻が見られるはかりではなくつて、四十前後の男女の、風變りな心理と行動が、默然として語られてゐる。作家の谷崎式持味よりも進んだところがある。風變りではあるが、そこに描かれてゐる心境は私の心にも響くのである。ストリンドベリなどでも取扱ふ題材と云つてもいゝのだが、谷崎氏は、それを露骨に敍述しないで、日本の所作事見たいな態度で現はしてゐる。この作者は、これまで[illegible]兒を幾分書いて來たが、今度の遊蕩兒には諧味がある

十二月號改造所載の「大地」は、この一個だけ切取つても、一箇の好短篇として推賞に價ひしてゐる。これには、男兒

式の遣取りやいやみが影を潜めてゐる。妙な破目になつた夫婦と書生との對座の光景は、作者得意の技巧を存せずして、却つて、目に見える如くうつされてゐる。こゝに描かれたるところによつて、作者の說明せざる夫婦二人の心理をも、私は自在に想像することが出來た。

私は、異鄕にゐて、小山內薰氏や內田魯庵氏の逝去の報を聞いて、身邊の淋しさを感じた。先頃故鄕の二階で、少年時代に愛讀した明治二十年代の「國民の友」の綴込を讀んで、あの頃の日本を追想したが、魯庵氏が新進の批評家として活躍したのも、二十年代であつた。氏は、當時流行の淚香の探偵小說と浪六の俠客小說を、淺薄卑俗なものとし、文學の外道として、痛快にこき下してゐた。後年魯庵氏の筆に見るやうな婉曲な皮肉なんか云はないで、眞正面から堂々と切込んでゐる。それに對し、石橋忍月氏が浪六辯護の文を、「國民之友」に寄稿してゐるが、その辯護は徹底してゐなかつた。魯庵氏に刄向ふ力はなかつた。ところが、爾來世はかはり、文壇の風潮も幾度か變遷して、今では、浪六の俠客小說など、同じ系統に屬する大衆小說や探偵小說が、一代を風靡し、名實ともに文壇の重な部分を占領するほどの勢ひとなつたらしい。魯庵氏自身さへ晚年には、大衆物なんかをうれしがるやうになつたらしくも思はれる。流轉の生涯である。……それは兎に角、明治文學史の裏表に最もよく通じてゐた魯庵氏から、私はもつと聞きたいことがあつたのだ。(十二月八日)

此頃の感想

田山花袋

プロレタリア、リアリズムの問題が一番私の興味を惹いた。何故なら、それは若い時代の常に過ぎる關門であるからである。それは私達がわかい時分に味つた新しい運動に甚だしく似てゐる。更に言ひ換へれば、此處からのみ新しい文藝が生れて來さうな氣持がするからである。

ただしこれが何ういふ風に發達して行くか。中途で火のやうに消えてなくなつて了ふか。それとも立派な容積がそこから浮び上つて來て一代の好尚を支配するか。それはこれから先きのことだが、兎に角面白い。現代の缺陷に向つて瞭大なメスが振つて行かうとする形には深い共鳴を感ぜずには居られない。何を描いても明朗な進出　それは今までの沈滯した空氣を一掃する上に於て非常に役立つであらうといふことはそれははつきり指さされる。

しかしかういふ空氣は、いやな空氣だ。それは一半は社會の問題から、一半は作者の倦怠からいつとなしに醸されて來る。また作家がある位置を得ると、それに滿足して、いやにそこにこびりつくやうな態度を取る。從つて藝術にもつとも必要な清

陰的な氣分と言つたやうなものがなくなる。そこにマンネリてふが出來て來る。そしてその安きに馴れて、いつの間にか藝術が自分の把握した指の間から滑り出して亡くなつて了つてゐることを知らずにゐる。今の文壇に於ても、私はさういふ人達を澤山に見出す。四十から五十に至る間の作家の中に最も多く見出す。これは或はその生活態度または年齢の關係などに由ることが多いのであらうと思ふが、一面あまりに所謂世間の情僞に通じすぎて、利害とか名聲とかいふことにのみその心を纏縛させ過ぎることもその大きな原因の一つであらう。

△

此頃雜誌にしても、新聞にしてにも、作者の舞臺に當る場所が甚だしく汚されてゐるのを感ずる。第一、通俗雜誌は馬鹿に多い。次に、女の雜誌――古い低級な趣味がわるく文藝を墮落させる。現に今日謂ふところの戀愛物はさうした雜誌の低級な趣味から要求されて生れ出て來たものと言つて差支ないであらう。おもしろければ好い。賣れれば好い。原稿料が多く取れれば好い。さうした形の上に醸された一つの墮落した文藝と言つて然るべきであらう。

作者がさうした空氣に妥協して、つまらぬ綴物に筆を執るのは、金にはなつても、實は自己の文藝の墮落へに向つて仕事をしてゐる樣なものである。更に言ひ換れば、さうした雜誌の編輯長と作者とが互ひに相恐つて藝術を墮落させ、趣味を平凡化させ、作者の向上心を失はせしめてゐるやうなものである。これこそ金のためにお互ひに馬鹿々々しいことをしてゐるものである。從つて、さうした作品には一つとしてすぐれたものを見出すことが出來ない。そこにはたゞ空疎と平凡と氣障な展開とを見るばかりである。そしてそれが映畫と結び附いて更に一層の墮落を示すやうな形になる。

△

大衆物の中からも何等かすぐれたものが出て来さうなものだ。最初は私もかう豫想した。ところが、今になつて、それは全く勘違ひであつたといふことがわかつて来た。大衆物はすぐれたものになつては駄目なのだといふことがわかつて来た。その例に引いてわるいが、大佛次郎の「由井正雪」などを讀んでゐると、中でもことにさういふ氣がする。作者が骨を折つて本當のものにしやうとしてゐるところがわるく目に附く。またその爲めに面白さもなくなり、さうかと云つて藝術的にも別に好くなつてないやうなところがある。或は骨を折れば折るほどつまらないものになるのではないかといふ疑さへ起つて来る。「大閤記」なども歴史ばなれして来ないと、馬鹿々々しさが一層眼に立つ。

七

平林たい子の「樋口一葉論」を一讀して見た。たしかに好いところがあり、すぐれてもゐる。たゞしクラシックな批評したものとしては、あゝいふ風にはせずに、反對にその今と違ふところにその當時を發見すべきではないか。その當時の風俗と思想と道徳とを發見すべきではないか。またさうした道徳から今日の道徳に進んだ道程に、もつと多くの注意を拂はなければならないのではないか。また然し、それはそれとして、私はあべこべに、今の女頭にあるなし道徳の何んたるものであるかをその中に發見して、一種不思議な心持に打たれた。

八

新聞の小説は退屈まぎれに常に手にした。「面白い脊中」「不壊の白珠」それから今度の「由利旗江」。「不壊の白珠」は半分ぐらゐはかなりに惹かれて讀んでゐた。[illegible]つたが、終末に近づいて、あまりに馬鹿々々しいのに、讀者として腹が立つたくらゐだつた。いくら勝者にするにしても、あれではあまりに淺薄だ。片山氏は中でもことに拙い。玲子も馬鹿々々

しい。かういふ點になると、やはり心境小說に主たる重點を持つたものでなければ駄目だといふ氣がする。「由利旗江」は作としては幼稚なところがある。又、讀物らしい匂ひもする。テンポもまだ早いといふわけには行かない。それにまだ未完だから十分には言へないが、「不壞の白珠」などと比べると、そのナイイヴな點に於て、またそのスタイルの新しさに於て、調子が何處までも眞面目である點に於て、ずつと本物であるのに氣がつく。或はこの作者は脚本よりも小說の方が好いか知れないなどとも私は思つた。

△

朝日の夕刊では十一谷義三郎の「時の敗者」を讀んだ、私は變な氣がした。あゝした努力の拮据は別として、また好し惡しも別として、唐人お吉に對する作者の考へ方があまりに若すぎはしないかと思つた。またその一方では昭和の戲化と言つたやうな氣がした。あゝいふものも好いかも知れないが、近代的ロマンチシズムとしてはやはり物足りない。然し此作者には特色があつて好い。また本式に骨を折つてゐる形が好い。たゞ心配なのは、目ざすところが難かしいので、終にはそれに勞れて了ひはしないか。もつと本道を眞直に出て行く氣持はないのかしら?

林房雄のものは、これまでに「朝日」の夕刊のと日の出を舞臺にしたものと、二つしか讀んでゐないが、何方もいやにガラガラした、乾き切つたものである。曾て此人が評論で近松秋江を味噌にこき下したことがあるので、えらいことを言ふ人だと思つてゐたが、この二つの作ぐらゐの腕前では、さう威張つて、思ひ上つてもゐられまいと思ふ。それに、全體としての調子が何處となく卑しく、人間の本當らしいことには、ちつとも目をくれてゐないのが馬鹿らしい。しかし作者はそこが新しいのだと言ふかも知れない。

現代を書くといふことが、作をする上に於て非常に必要であるのは言ふ迄もないが、一寸擬つた白球一本、都何奴間抜一またはー寸面白い立派な私の現代描写ではない、私には満足出来ない。新しいといふ色々を書いた人を見て呉れ！といふ様な感じしかしないのは出来ない。何かその現代を書くなら、もつと実際の方面に深く入つて、地主と小作人といふことを書くも好いだらうし、郊外生活といふ、いなかはそれを探くるのも好いだらうと思ふ。エミイル・ゾラのルーゴン・マツカルの大規模がいまないにしても、もつと切実に現代と相觸れたものを書くが好い。さういふ作はしかし、今聲つた作家には望まれさうもない。むしろプロレタリア・リアリズムの大旗をかゝげた連中のうちからでも、一人でも二人でも好いからさういふものを書ける作家が出て来れば好いと思つてゐる。

△

一

私も今では、作品そのものの骨牌となつたからといつて、単にそれだけの理由でそれを非難すべきものではあるまいと思つてゐる。骨牌でも何でも好い。むしろその中に盛られた、面白さ、本当さ、如何を問ふべきであらうと思ふ。私たちのやつてゐる時分には生活といふことがやかましく言はれて、常に実際に関することを目的としたものだつた。求めてある時は、作物の敘畫にも必要で、背景があつた、関係のあつたことも、必ずしも要求ではなかつた。細叙などをつけられたものもあれば、空想的に扱はれたものもあつた。私は一頃は一概に排斥したが、中から何が出て来はしないかと期待を以て迎へられたといふことがあると聞いた。

若い時代といふものは、藝術思想がイデオロギイにならない粗なものである。また理論的に排斥したのでなければ排斥し

たやうな感じがしないものである。その結果として、熱情があつても細い感じだとか、氣分だとかいふもの、上に置かれたものではなくて、大抵一つの理屈または議論の上に燻されたやうな場合が多いものである。

私達もさういふ場所から次第に抽象を離れ、把握を離れ、もつとぐつと細かい人生の空氣の中に入つて行つたことを思ひ起す。何うしてそんなつまらない理屈に滿足してゐたらう。現實はもつと活潑なものである。一つの型のなかになどはまつてはゐられないものである。かう思つてさうした混沌とした雜多紛々の中に入つて行つたことを思ひ起す。要するに、人生とか、社會とかいふものは一つの味でしかない。その味を味得することこそ人間には大切である。それを議論したり把握したりするのは、たまたまその人の人生に對する心境の幼稚と空疎を裏切るもので、頭の好いものなら、若い時でもさういふ風に斷定的な物の見方や言ひかたはしないものである。

△

人生の味、感じ――さういふ空氣の中にゐて、それにぴたりと觸れるといふこと、そこに凡べてがありはしないか。ひとつの言葉、ひとつの文章の中にもそれが躍然として出て來るやうでなければいけないのではないか。

社會が、境遇が、人間を善くもし惡しくもする。それがエミイル・ゾラの作意の重要なる特徴の一つである。結果として、かれの作品は煩瑣な記實に墮ち、何枚ものかさね着の着物にわるく包まれて、その人間の本體が却つて不明瞭になり勝ちであるのを當時の批評家は皆な攻撃した。つまり人間がはつきりと出て來ないといふのである。また、社會的には面白く、群團的には意味が多いが、本質的にはその感じが少しも出て來ないといふことを言ふのである。そして多くの場合、これをロシア文學――ゴンチャロフ、トルストイあたりの直情徑行、天衣無縫のリアリズムと比較することを常とした。成ほどさういふ違ひはあると私は今でも思つてゐる。すなはち、今の文壇にゾラが蘇つたのは、さうした抽象的なところ――むしろゾラの缺點の部分が蘇つたのであるといふことを考へなければならない。

もう一つの重要なファクターは、社会悪、人間悪へ貌いとなすことが示される結果として、その時代に常に新鮮あり、まだ重要なることは、その内面には、常に正義といふことが尚ばれてゐることが必要である。これが要求されない時代に向つ所謂あらう。まだこれらについて然るべき説明の形を取つてゐるとはいへ、しても行かないのであらう。

△ 然し同じやうなことは云はない。ある作品が、内面的要求によつて優れて居ないと云ふ、もひとつの道理ある主張であらう。しかし、さうした作品が生れ、大衆にその上に向上させて行くなる時が来ることを私達は努めて見なければならない。新興派が文化思潮にさういふものがあるとしても、作品は自ら明るい空の下に出て来るものであつて、それを正面から眺めすまでは、私には未だ人々の氣をそそるやうな所がある。

△ 水上瀧太郎の一月に、新作を読んだ所、その上私は省みてプロレタリア・アリズムの徒然に面白さがあれる時代に、人を喜ばせて居ることに、思ひ設けして居る。その不可思議な面白さに、眺めて居たのである。私は、或るありの小説が、或る程度はこの意識ではつきり手法で、自由主義的な、一種抽象的、作中の人物、心の中の、或る年月が次第にことを四代目の作

△ 階級闘争なる言葉が叫ばれ、階級闘争なる時代に、読者は眼前にある問題へ、我々は決してその時流に乗じて十分にそこに入り込むことは出来ない。新聞には雑誌にも常に一つの自由を与へなければならない。然しながらねばならない。

一つの時代氣分と言つたやうなものがなければならない。今の新聞雜誌などに出てゐるものは、たいてい、その十中八九は空々たり、また漠々たりであるやうである。今の時に於て私は第一に通俗雜誌の多いのに驚く。

△

人生にはやつぱり若い時代と年寄の時代とがあつて、それがてんでにそれ相應な理由と價値とを持つて互ひに相對抗してゐるやうな場合が多いのに私はよく出會す。そしてそれは到底互ひに妥協し得られるものでなくて、常に兩々相對して進行してゐるものであることを私は常に痛感させられる。年寄にも曾て若い時代があつたし、若い人達もいづれは年寄になるのだから、何等かそこに理解のつきさうな途がありさうなものだとこれまで思つて來たが、結局駄目なものだといふことが此頃になつてわかつて來た。それは結局人間には完全な統一がないといふところに根ざしてゐる。また人間の大部分はすべて刹那的であるといふところにも繫がつてゐる。世間には矛盾といふ言葉があつて、いざとなると、頻りにそれを攻撃されるが、誰か自分には矛盾がないと立派に言ひきることが出來るであらうか。翻つて考へて見ると、過去はすべて矛盾だらけであると言つて然るべきである。

東洋の學問が舊式だと言つてヨウロッパの學問に熱中した身が、再び東洋の思想に共鳴したり、シエクスピアよりも孔子や老子の方が面白いといふやうになつたり、昔、一生懸命に、時には寢食を忘れて近代文學のはしりをさがし廻つたものが、今では誰も知るものもない許鄭の學に頭をつゝ込んだりして、この結果が何うなるか未だにわからないといふのは心の上の不思議な現象のひとつであると言つて然るべきであらう。これを思ふと、何が何だかわからなくなる。若い時代も年寄の時代もあつたものではない。一體さういふことを言ふのからして間違つてゐるといふ氣もして來る。

△

結果は不可抗力であつても、やつぱり一つの敗北であるといふことを今度ほど痛感したことはない。

△

ヨオロッパに遊んだ連中に文學者の多かつたことは、思ふに二三年來めづらしい現象である。その人達の書いたものを見ると、やつぱり文學者だけあるといふ氣がして面白いものが多い。第一指に正宗白鳥のものを數へたい。純粹な日本人が見たといふ感じの多い點に於て、少しも外國と妥協しないといふ點に於て、またいかにも遊覧者といつたやうな點に於いて。次に、私は久米正雄の、モン・アミ、を舉げたい。勿論それは作そのものについてゞはない。作は何かといへば露式なセンチメンタルなものであるが、あの氣分、—巴里に銀座の延長だといつたあの氣分が面白い。あの作ほどはつきりと巴里を銀座式に感じさせるものを今まで私は見たことがない。それに今度の調子の明るいのが好い。流石に久米氏だといふ氣がする。

病中に此外洋畫家がたづねて來つて、巴里のことをいろ／＼と聞かせて呉れた。それは何んだか私の無聊を慰めたことだつた。私は曾て「新潮」でだつたか、巴里通の或畫家に見たことがあるので——そこに其調を訪問した畫伯に照明することだつた。から話を持ち出して、あゝいふ通の或もつと畫山ぐらいし見せて呉れないかと私は言つた。それにしても小説の面白い。かれの達だつて、いろ／＼なことを聞かせたが、思ふに自分の思ふまゝに振舞つてゐるのが愉快だ。一同の、生活それは出來ないが好いことだ、こんなことを私は無想に言つた。かれもまたかれがデカダンの標式的作品に於ける、いかにもといつた答へないであらう。

△

死ぬか生きるか——それがまだ緊密に私の身心をめぐつてゐる。今年もまた、冬が來て庭を埋めた落葉の上に朝霜が白く置いた。

編輯者雜記

×

わが親愛なる愛讀者のために、昭和五年の新春を祝福します。而して、わが中央公論社の發展のために祝福を垂れ給へ。

×

昨年は五百號記念號を發行して大いに氣勢を擧げたばかりでなく、それを機會に進出した出版計畫のいづれもが的中して、先づ我社の首途を祝福してくれた。今年はそれらの事業完成の上に祝福あれだ。

×

アラビアンナイトの完譯は前景氣素敵だ。豫約全集物は已に多過ぎるほど出てゐるのだから、その上に我社が出版するにはするだけの理由も意義もなくてはならない。生じつかなものなら今更云ふ必要もないのだから「千夜一夜」は[illegible]大いなる確信の下に發行したのだ。幸に豫期以上の歡迎を受けて嬉しい。

×

が何といつても、我社は中央公論誌が主力だ。雜誌と出版と、兩々相對峙して斯界に雄を誇らなければならない。無論それは自信を持つてゐるのだが、去年一年だけの本誌讀者の激増に見てもわれらは心丈夫だ。われらの努力は酬いられつゝあるのだ。

×

この新年特輯號の編輯陣を見られよ。積極的なわれらの努力は酌んで戴けると思ふ。

×

谷讓次氏の長篇小説「大陸」は素晴しい作だ。今後一年に亘つて毎號連載するつもりだが、曾ての日本にその片鱗だに見えざりし世界的作品だ。

×

島崎氏の誠實さに[illegible]された讀者の心を自らさけさしむるであらう。武田、小島氏などの尖鋭分子は共に四・一六事件に[illegible]せる事件を取扱ふて鮮やかだ。

×

正宗白鳥氏は歸朝された。歸朝後初めての創作を得たのも嬉しい。それに、今後毎號本誌のために「文藝時評」の筆を執られる事になつた。一世を風靡した氏の文藝時評だ。從横無盡に、おゝ、今度こそ何處迄縱横無盡し、だ。わが讀者は喜んで期待して欲しい。

×

生死の境をいききされて居た田山氏も、病癒れるを幸ひ、特に本誌のために自ら筆硯をかして、率直痛快な現文壇縱横論を寄せられた。

×

濱口、犬養、大山、堺などの各政黨總裁[illegible]類を列べられたことも、何でもないやうなことで、本誌の信用を毀損するものだ。同時に本誌記者の[illegible]一試し[illegible]い。

×

公爵[illegible]氏の論文は實に堂々たるもの[illegible]だ。記者こそは[illegible]の核心を突いて、軟[illegible]反省を促さねばならぬ。[illegible]日本の[illegible]的[illegible]

[illegible]

×

[illegible]

[illegible]へるだらう。其他、[illegible]の話、學界[illegible]

[illegible]讀者[illegible]本誌[illegible]

[illegible]ないのである。

殊に本號特別附録「世界新學説」の紹介に[illegible]現代[illegible]

[illegible]

×

[illegible]

[illegible]でも、本誌の[illegible]は甚々野心的である。本誌の[illegible]本誌の[illegible]讀者[illegible]文化[illegible]

[illegible]

×

われらは、讀者と、今日を共に語り、明日を共に語りたいと思ふ！

われらの[illegible]語る[illegible]責任[illegible]であるのである。

お知らせ

當社電話番號左の通り[illegible]

丸の内（23）五三五　五三六　五三七

右の内　五三五を代表番號として宮内交換をいたします。右御承知下さい。

中央公論社



夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第三章

一

『蜂谷君。近いうちに、自分は江戸から相州三浦方面へかけて出發する。妻の兄、妻籠本陣の壽平次と同行する。此の旅は横須賀在の公郷村に遠い先祖の遺族を訪ねるためであるが、江戸をも見たい。自分は長いこと籠り暮した山の中を出て、初めての旅に上らうとしてゐる。』

かういふ意味の手紙を半蔵は中津川にある親しい學友の蜂谷香蔵宛に書いた。

「君に悦んで貰ひたいことがある。自分はこの旅で、かねての平田入門の志を果さうとしてゐる。最近に自分は佐藤信淵の著書を手に入れて、あのすぐれた農學者が平田大人と同郷の人であることを知り、又、いかに大人の深い感化を受けた人であるかをも知つた。本居、平田諸大人の國學ほど世に誤解されてゐるものはない。古代の人に見たやうなあの直くな心は、もう一度この世に求めらるべきではないか。どうかして自分等はあの出發點に歸りたい。そこからもう一度この世を見直したい。」

といふ意味をも書き添へた。

山家のやうな狭い片田舎には半蔵の江戸行の噂が村の隅までも直ぐに知れ渡つた。半蔵が幼少な時分からのことを知つてゐて、長い旅を案じて呉れる乳母のおふきのやうな婆さんもある。おふきは半蔵を見に來た時にいつた。

「半蔵さま、男はそれでもいゝぞなし。何處へでも出掛けられて。まあ、女の身になつて見さつせれ。なかなかそんな譯にいかすか。俺も山の中にゐて、江戸の夢でも見ずかい。この恵那の田舎には、お前さま、せめて一生の中に名古屋でも見て死にたいなんて、そんなことをいふ女もあるに。」

遠いところを戀ふるものは森の谷間に働く者にもさかんだつた。噂に聞く大江戸――そこにある風俗、そこにある繁華、そこにある町、一切が遥かにはなれてゐた。恵那山の麓に住むものは、おふきのやうな婆さんですら遠くにあるものの、憧憬をもつてゐた。

江戸へ向けて出發する前に、半蔵は平田入門のことを一應父に話して置かうとした。平田篤胤はすでに故人であ

つたから、半蔵が入門は先師没後の門人に加はることであつた。それにしても彼を、[illegible]、また同門の人達と交際する上にも多くの便宜があらうと考へたからで。

父、吉左衛門はもう長いことこの倅を見まもつて來て、行く／＼馬籠の本陣を繼ぐべき半蔵が家業を忘れるばかりに平田派の學問に心を傾けて行くのを案じないではなかつた。しかし吉左衛門は根が好學の人で、自分で學問の足りないのを嘆いてゐるくらゐだから、

『お前の學問好きも、そこまで來たか。』

と言はないばかりに半蔵の顔を眺めて、結局子の願ひを容れた。

當時平田派の熱心な門人は全國を通じて千餘人に上ると言はれ、南信から東美濃の地方へかけてもその流れを汲むものは少くない。篤胤の遺した仕事はおもに八人のすぐれた弟子に傳へられ、その中でも特に選ばれた養嗣として平田家を繼いだのが當主鐵胤であつた。半蔵が入門は、中津川の宮川寛齋の紹介によるもので、いづれ彼が江戸へ出た上は平田家を訪ねて、鐵胤からその許しを得ることになつてゐた。

『お父さんに賛成して頂いて、ほんとにありがたい。長いこと私はこの日の來るのを待つてゐたやうなものですよ。』

と半蔵は先輩を慕ふ眞實を顔にあらはして言つた。同じ道を踏まうとしてゐる中津川の蜂谷香蔵も、さぞ彼のために悅んで呉れるだらうと父に話した。

『まあ、何も試みだ。』

と吉左衛門は持前の大きな本陣鼻の上へ皺を寄せながら言つた。父は半蔵からいろ／＼と入門の手續きなぞを聞いたのみで、さう深入りするなとも言はなかつた。

安政の昔は旅も容易でなかつた。木曾谷の西のはづれから江戸へ八十三里、この往復だけにも百六十六里の道は踏まね

ばならない。その間、峠を四つ越して、関所を二つも通らねばならない。吉左衛門は関西方面に明るいほど東の方の事情に通じてはゐなかつたが、これでも木曽街道筋の問屋の一人として江戸の道中奉行所へ呼び出されることがあつて、そんな用向きで二三度は江戸の土を踏んだこともある。この父は、いろ／＼旅の心得になりさうなことを子に教へた。寿平次のやうな好い連れがあるにしても、若い者二人きりではどうあらうかと言つた。遠く江戸から相州三浦までも出掛けるには、供の男を一人連れて行けと勧めた。当時の旅行者が馬や人足を雇ひ、一人でも多く連れのあるのをよろこび、成るべく隊伍をつくるやうにしてこの街道を往つたり来たりするのも、それ相応の理由がなくてはかなはぬことを父は半蔵に指摘して見せた。

「獨り旅のものには宿屋でも断られるぜ。」

とも注意した。

かねて妻籠の本陣とも打合せの上、出発の日取りも旧暦の十月上旬に繰りあげてあつた。いよ／＼その日も近づいて、継母のおまんは半蔵のために青地の錦の守り袋を縫ひ、妻のお民は晒木綿の胴巻なぞを縫つたが、それを見る半蔵の胸には何となく前途の思ひが騒がしく迫つて来た。遠く行くほどのものは、河止めなぞの故障の起らないかぎり、假令強い風雨を冒してまで予定の宿までは辿り着けよといはれてゐる頃だ。道中半分に出来る旅ではなかつた。

「佐吉さん、お前は半蔵さまのお供ださうないい。」

「あい、半蔵さまもさういつて呉れるし、大旦那からもお許しが出たで。」

おふきは誰よりも先に半蔵の門出を見送りに来て、本陣の囲炉裏ばたに近いところで旅じたくをしてゐる下男の佐吉を見

つけた。佐吉は雇はれて來てからまだ年も淺く、半藏といくつも違はないくらゐの若さであるが、今度江戸への供に選ばれたことをこの上も無い悦びにして、留守中主人の家の爐で焚くだけの松薪なぞはすでに山から木小屋へ運んで來てあつた。

いよ〱出發の時が來た。半藏は青い河内木綿の合羽を着、脚絆をつけて、すつかり道中姿になつた。旅の落し差を紺更紗の袋で鍔元を包んで、それを腰にさした。

『さあ、これだ。これさへあれば、どんな關所でも通られる。』

と吉左衛門は言つて、一枚の木札を半藏の前に置いた。會所から出して呉れた關所の通り手形だ。それには安政三年十月として、宿役人の署名があり、裏に馬籠宿の燒印が押してある。

『このお天氣ぢや、明日も霜でせう。半藏も御苦勞さまだ。』

といふ繼母にも、女の兒のお粂を抱きながら片手に檜木笠を持つて來てすゝめる妻にも別れを告げて、やがて半藏は勇んで家を出た。おふきは、眼に一ぱい涙を溜めながら、本陣の女衆と共に門口に出て見送つた。

峠には、組頭平助の家がある。名物栗こわめしの看板をかけた休茶屋もある。吉左衛門はじめ、組頭庄兵衛、その他隣家の鶴松のやうな半藏の敎へ子達は、峠の上まで一緒に歩いた。當時の風習として、その茶屋で一同別れの酒を酌みかはして、思ひ〱に旅するものゝ心得になりさうなことを語つた。出發のはじめは誰しも心がはやつて思はず荒く踏み立てるものである、兎角はじめは足を大切にすることが肝要だ、と言ふのは庄兵衛だ。旅は九十日路のものなら、十日かゝつて行け、と言つて見せるのはそこへ來て一緒になつた平助だ。萬福寺の松雲和尚までが禪僧らしい質素な法衣に茶色の袈裟がけで、わざ〱見送りに來たのも半藏の心をひいた。

『夜道は氣をつけるがいゝぜ。成るべく朝は早く立つやうにして、日の暮れるまでには次の宿へ着くやうにするがいゝぜ。』

この父の言葉を聞いて、間もなく半蔵は佐吉と共に峠の上から離れて行つた。この山地には俗に「道をしへ」と呼んで、螢の形したやさしい虫があるが、その青と紅のあざやかな色の背を見せたやつまでが案内顔に、街道を踏んで行く半蔵達の行く先に飛んだ。

福島宿の本陣には寿平次がこの二人を待つてゐた。その日は半蔵も休息日ときめて、一夜を寿平次の家に送つて行くことにした。寿平次を見る度に半蔵の感ずることは、よくその若さで本陣庄屋問屋三役の事務を処理して行くことであつた。寿平次の部屋には、先代からつけて来たといふ控帳がある。諸大名宿泊の折の人数、畳数から、入用の風呂何本、火鉢何個、燭台何本といふやうなことまで、事こまかに記しつけてある。當時の諸大名は、各自に寝具、食器、風呂を携帯して、本陣へは部屋代を払ふといふ風であつたからで。寿平次の代になつてもそんな面倒臭いことを一々書きとめて、後日の参考とすることを怠つてゐない。半蔵が心深く眺めたのもその控帳だ。

「寿平次さん、今度は僕は佐吉に供をさせます。そのつもりで馬籠から連れて来ました。あれも江戸を見たがつてゐますよ。重い荷物はあれに担がせて下さい。」

この半蔵の言葉も寿平次をよろこばせた。

翌朝、佐吉は誰よりも早く起きて、半蔵や寿平次が眼をさました頃には、一足の草鞋をちやんとそろへて置いた。自分用の草鞋、天秤棒まで用意した。それから両掛の荷を肩にかけて、主人等の支度の出来るのを待つた。寿平次は留守中のことを脇本陣の主人、得右衛門に頼んで置いて、柿色の地に甲斐絹の裏のついた合羽を身につけた。同所の道中手形も半蔵と同じやうに用意した。

妻籠の隱居はもう好い年のおばあさんで、孫にあたる壽平次をこれまでに守り立てた人である。お民のなくなつた母の母で半藏にして、壽平次に迎へた嫁のお里にはまだ子が無いことなどをかこつて見せる人である。隱居は家の人達と一緒に門口に出て、壽平次を見送る時に言つた。

「お前にはもうすこし背を呉れたいなあ。」

この言葉が壽平次を苦笑させた。隱居は背の高い半藏に壽平次を見比べて、江戸へ行つて恥をかいて來て呉れるなといふ風にそれを言つたからで。

半藏や壽平次は檜木笠を冠つた。佐吉も荷物を擔いでその後についた。同行三人のものはいづれも輕い草鞋で踏み出した。

二

木曾十一宿はおほよそ三つに分けられて、馬籠、妻籠、三留野、野尻を下四宿といひ、須原、上松、福島を中三宿といひ、宮の越、藪原、奈良井、贄川を上四宿といふ。半藏等の進んで行つた道はその下四宿から奥筋への方角であるが、かうして揃つて出掛けるといふことが既にめづらしいことであり、興も三人の興で、心づかひも三人の心づかひであつた。あそこの小屋の前に檜木の實が乾してあつた、こゝに山の中らしい耳の尖つた茶色な犬がゐた、とそんなことを語り合つて行く間にも樂しい笑ひ聲が起つた。一人の草鞋の紐が解けたと言へば、他の二人はそれを結ぶまで待つた。

深い森林の光景が開けた。妻籠から福島までの間は壽平次のよく知つてゐる道で、福島の役所からの差紙でもある折には半藏も父吉左衞門の代理としてこれまで幾度となく往來したことがある。幼い時分から街道を見る眼を養はれた半藏等は、馬方や人足や駕籠かきなぞの隱れたところに流してゐる汗を行く先に見つけた。九月から殘つた蠅は馬にも人にも取

りついて、それだけでも木曾路の旅らしい思ひをさせた。

「佐吉、どうだい。」

「俺は足は達者だが、お前さまは。」

「俺も歩くことは平氣だ。」

壽平次と連立つて行く半藏は佐吉を顧みて、こんな言葉をかはしては、また進んだ。

秋も過ぎ去りつゝあつた。色づいた雜木の葉は谷に滿ちてゐた。季節が季節なら、木曾川の水流を利用して山から伐り出した材木を流してゐるさかんな活動のさまが諸所の街道から望まれる。小谷狩にはやゝ遲く、大川狩にはまだ早かつた。河原には役を執る人々の群の影もない。木材、木片の作業もまた始まつてゐない。諸役人が沿岸の警戒に出、どうかすると、隣國までも持ち出して、諸木流材を取締らうとするやうな時でもなかつた。半藏等は路を行く道の最も狹い時期を通り過ぎた後だつた。氣の置けないもの同志の旅で、三人はときどき路傍の草の上に足を休めた。小松の蔭に休んでゐる木曾川の中洲を前にして休んだ。對岸には山が迫つて、河水、樹の直立した森林がその斷崖を覆ふてゐる。尖つた三角を並べたやうに重なり合つた木と木の梢の感じも深い。眼前の岩から岩を溢れ流れて來る大きな河の水は青緑の色に光つて、激いたり溢れたりしてゐる無數の白い花崗石の間に躍つてゐた。

その年は安政の大地震後初めての豐作と言はれ、馬籠の峠の上のやうな土地でも、一部落で百五十俵からの前收があつた。木曾も美濃から先は、それらの自然の惠みが乏しくて、田畑としてもすくない。中三宿となると、木曾の谷の地勢も狹まつて、僅かの河岸の傾斜、僅かの崖の上の土地でも、それを耕地に宛ててある。山の上にも成長し、樹木の半分を埋めるやうな三人には、そこの河岸に家を並べた石垣、樹がある。ここの崖の上に枝の細い樹があると、指して言ふことも出來た。土地の人達が路傍に設けた祭壇もまだしばらしい。あるところの石垣の上には彼等の祀あり、あるところには

下は二十三夜もしくは馬頭觀音などの祭壇であつた。

この谷の中だ。木曾地方の人達が山や林を力にしてゐるのに不思議はない。當時の木曾山一帶を支配するものは尾張藩でなく、尾張藩で、巣山、留山、明山の區域を設け、そのうち明山のみは自由林であつても、許可なしに村民が五木を伐採することは禁じられてあつた。言つて見れば、檜木、椹、明檜、槇、𣜌の木の五種類が尾張藩の森林保護のもとにあつたのだ。半藏等は、名古屋から出張してゐる諸役人の心が絶えずこの森林地帶に働いてゐることを知つてゐた。一石栃にある白木の番所から、上松の陣屋の邊へかけて、諸役人の眼の光らない日は一日もないことを知つてゐた。

しかし、巣山、留山とは言つても、絶對に村民の立ち入ることを許されない區域は極少部分に限られてゐた。自由林は木曾山の大部分を占めてゐた。村民は五木の嚴禁を犯さないかぎり、意のまゝに明山を跋渉して、雜木を伐採したり薪炭の材料を集めたりすることが出來た。檜木笠、「めんぱ」、お六櫛、諸種の塗物——村民がこの森林に仰いでゐる生活の資本もかなり多い。耕地も少く、農業も難澁で、さうかと言つて塗物渡世の材料も手に入れがたいところでは、御免の檜物と稱へて、毎年千數百駄づゝの檜木を申し受けてゐるやうな村もある。どうして、山や林なしに生きられる地方ではないのだ。半藏等の踏んで行つたのも、この大きな森林地帶を貫いてゐる一筋道だ。

寢覺まで行くと、上松の宿の方から荷をつけて來る牛の群が街道に續いた。

『半藏さま、どちらへ。』

とその牛方仲間から聲を掛けるものがある。見ると、馬籠の峠のものだ。この界隈に顏を知られてゐる牛行司利三郎だ。その牛行司は福島から積んで來た荷物の監督をして、美濃の今渡への通し荷を出さうとしてゐるところであつた。

その時、壽平次が尋ね顏に佐吉の方をふりかへると、佐吉は笑つて、

『峠の牛よなし。』

と無造作に片付けて見せた。

「寿平次さん、君も聞いたでせう。あれが牛方事件の張本人でさ。」

と言つて、半蔵は寿平次と一緒に、その荒い縞の廻し合羽を着た牛行司の後姿を見送つた。

下民百姓の眼をさまさせまいとすることは、長いこと上に立つ人達が封建時代に執つて来た方針であつた。しかし半蔵はこの街道筋に起つて来た見のがしがたい新しい現象として、あの牛方事件から受け入れた感銘を忘れなかつた。不正な問屋を相手に血戦を開いたのもあの牛行司であつたことを忘れなかつた。彼は旅で思ひがけなくこの人たちに声を掛けられて、最下層に黙つて働いてゐるやうな牛方仲間が笑へなかつた。

木曾福島の関所も次第に近づいた。三人ははら／＼と落ちる木の葉を踏んで、更に山深く進んだ。時には岩石が路傍に迫つて来てゐて、高い杉の枝は両側から覆ひかぶさり、昼でも暗いやうな道を通ることはめづらしくなかつた。谷も尽きたかと見えるところまで行くと、またその先に別の谷が展けて、そこに隠れてゐる休茶屋の板屋根からは青々とした煙が立ちのぼつた。桟、合渡から先は木曾川も上流の勢に変つて、山坂の多い道はだん／＼谷底へと降つて行くばかりだ。半蔵らはある橋を渡つて、対岸の方へ通ふ山道の分れるところへ出た。そこが福島の城下町であつた。

「いよ／＼関所ですかい。」

佐吉は改まつた顔付で、主人等の後から声を掛けた。

福島の関所は木曾街道中の関門と言はれて、大手橋の向ふに正門を構へた山村氏の代官屋敷からは、河一つ隔てた町はづれのところにある。出女、入鉄砲と言つた昔は、関東に対する鉄砲の輸入と、出てくる女の通行をここで取締つ

た。殊に女の旅は厳重を極めたもので、髪の長いものはもとより、さうでないものも尼、比丘尼、髪切、少女などと通り者の風俗を區別し、乳まで探つて眞僞を確めたほどの時代だ。これは謀叛を防ぐ精神から出たことは明かで、一面には江戸を中心とする參勤交代の制度を語り、一面にはまた婦人の位置のいかなるものであるかを語つてゐた。通り手形を所持する普通の旅行者に取つて、何の憚るところはない。それでもいよ〳〵關所にかゝるとなると、その手前から笠や頭巾を脱ぎ、思はず襟を正したものであるといふ。

福島では、半藏等は關所に近く住む植松菖助の家を訪ねた。父吉左衞門からの依賴で、半藏はその人に手紙を屆ける筈であつたからで。菖助は名古屋から與の降い婦人を後妻に迎へてゐる人で、關所を預る主な給人であり、砲術の指南役であり、福島藩でも指折の武士の一人であつた。ちやうど非番の日で、菖助は家にゐて、半藏等の立ち寄つたことをひどく悦んだ。この人は伏見屋あたりへ金の融通を賴むために、馬籠の方へ見えることもある。それほど武士も生活には骨の折れる時になつて來てゐた。

「好い旅をして來て下さい。時に、お二人とも手形をお持ちですね。こゝの關所は堅いといふので知られてゐまして、大名のお女中方でも手形のないものは通しません。兎に角、私が御案内しませう。」

と菖助は言つて、餞別のしるしにと先祖傳來の秘法による自家製の丸藥などを半藏に呉れた。

平袴に紋付の羽織で大小を腰にした菖助の後について、半藏等は關所にかゝつた。そこは西の門から東の門まで一町程の廣さがある。一方は傾斜の急な山林に倚り、一方は木曾川の斷崖に臨んだ位置にある。山村甚兵衞代理格の奉行、加番の給人等が調べ所の正面に控へて、その側には足輕が五人も詰めてゐた。西に一人、東に二人の番人が更にその要害の好い門の側を堅めてゐた。半藏等は門内に敷いてある米石を踏んで行つて、先着の旅行者達が取調べの濟むまで待つた。山緒のある婦人の旅かと見えて、門内に駕籠を停めさせ、乘物のまゝ取調べを受けてゐるのもあつた。

半蔵等はかなりの時を待つた。そのうちに、

「髪長、御一人。」

と乗物の側で起る声を聞いた。乗物で来た婦人はいくらかの袖の下を番人の娘に握らせて、例のやうに通行を許された。半蔵等の順番が来た。調べ所の壁に掛る突棒、さす又などのいかめしく眼につくところで、階段の下に手をついた。かねて用意して来た手形を役人の前に取出して見せるだけで済んだ。

百助にも別れを告げて、半蔵がもう一度関所の方を振返つた時は、いかにすべてが形式的であるかをそこに見た。鳥居峠はこの関所から宮の越、藪原二宿を越したところにある。風は冷くても、日はかんかん照りつけた。前途の遠さは曲りくねつた旅路に行き悩んだ時よりも、反つてその高い峠の上に御嶽遥拝所なぞを見つけた時にあつた。そこに木曾川の上流とも別れて行くところがあつた。

「寿平次さん、江戸から板橋まで何里とか言ひましたね。」

「十六里さ。わたしは道中記でそれを調べて置いた」

「江戸までの里数を入れると、九十九里ですか」

「まあ、ざつと百里といふものでせう。」

供の佐吉も、この主人等の話を引き取つて、

「まだこれから先に二宿もあるら。江戸は遠いなし。」

こんな話をみんなにしながら、三人とも日暮れ前の途を急いで、やがてその峠を降りた。

『お泊りなすつておいでなさい。奈良井のお宿はこちらでございます。浪花講の御定宿はこちらでございます』しきりに客を招く聲がする。街道の兩側に軒を並べた家々からは、競ふやうにその招き聲が聞える。半藏等がお鳥居峠を降りて、その麓にある奈良井に着いた時は、他の旅人等も思ひ〳〵に旅籠屋を物色しつゝあつた。

半藏はかねて父の懇意にする庄屋仲間の家に泊めて貰ふことにして、壽平次や佐吉をそこへ誘つた。往來の方へ突き出したやうなどこの家の低い二階にもきまりで表廊下が造りつけてあつて、馬籠や妻籠に見る街道風の屋造りはその奈良井にもあつた。

『半藏さん、わたしはもう胼胝をこしらへてしまつた。』

と壽平次は笑ひながら言つて、草鞋のために水腫れのした足を盥の中の湯に浸した。半藏も同じやうに足を洗つて、廣い圍爐裏ばたから裏庭の見える座敷へ通された。きのこ、豆、唐辛、柴栗などが障子の外の縁に乾してあるやうなところた。氣の置けない家だ。

『靜かだ。』

壽平次は腰にした道中差を部屋の床の間へ預ける時に言つた。その靜かさは、河の音の耳につく福島あたりにはないものだつた。そこの庄屋の主人は、半藏が父とはよく福島の方で顔を合せると言ひ、この同じ部屋に吉左衞門を泊めたこともあると言ひ、そんな縁故からも江戸行の若者達をよろこんで款待さうとして見れた。ちやうど鳥屋のさかりの頃で、木曾名物の小鳥でも焼かうと言つて見れるのもそこの主人だ。鳥居峠の鶫は名高い。鶫ばかりでなく、裏山には駒鳥、山郭公の聲が聴かれる。佛法僧も來て鳴く。こゝに住むものは、表の部屋に向ふの鳥の聲を聽き、裏の部屋にこちらの鳥の聲を聽く。さうしたことを語り聞かせるのもまたそこの主人だ。

半藏等は同じ木曾路でもずつと東寄りの宿場の中に來てゐた　鳥井峠一つ越しただけでも、親達や妻子のゐる木曾の西

のはずれにはほかに遠くなつた。しかしそこは何となく氣の落着く山の湯で、旅の合羽も脚絆も脱いで置いて、田舎風な風呂に旅の汗を忘れた時は、いづれも活き返つたやうな心地になつた。

「こゝの家は旅籠屋を勤めてるだけなんですよね。本陣問屋は別にあるんですね」

「さうらしい」

半蔵と寿平次は一風呂浴びた後のさつぱりした心地で、奈良井の旅籠屋の奥座敷に互ひの旅の思ひを比べ合つた。朝晩はめつきり寒く、部屋には胡桃が出来てゐるくらゐであつた。寿平次は下女が提げて来て呉れた行燈を引きよせて、そのかげに道中の日記や覚書を取り出した。贄川で求めた草鞋が何文、峠の茶屋での休みが何文といふやうなことまで細くつけてゐた。

「寿平次さん、君はそれでも感心ですね」

「どうしてさ」

「日記の方でもわたしは君の机の上に載つてる帳面を見て来ました。君にはさういふ綿密なところがある」

どうして半蔵がこんなことを言ひ出したかといふに、本陣庄屋問屋の仕事は将来に彼を待ち受けてゐたからで。二人は十八歳の頃から、既にその見習ひを命ぜられてゐて、福島の役所へも出張したし、諸大名の送り迎へもしたし、二人が少年時代から受けて来た家庭の教育はすべてその準備のためでないものはなかつた。半蔵がまだ親の名代を勤めないのに比べると、寿平次の方は既に青年の庄屋であるに近かつた。

半蔵は言ひ出した。

「旧家の主人といふものはなかなかにつらいね。家を傾けまいとすると、世間に後れるといふやうなところもあるのも。殊に本陣の格式を守つた

いといふのが、あの人の本意なんでさ。阿爺ももう年を取つてゐますからね。」

「半藏さんは溜息ばかり吐いてるぢやありませんか。」

「でも、君には事務の執れるやうに具はつてるところがあるから好い。」

「さう君のやうに、むつかしく考へるからさ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に參加すると想つて見たまへ。兎に角、働き甲斐はありますぜ。」

圍爐裏ばたの方で燒く小鳥の香氣は、やがて二人のゐる座敷の方まで通つて來た。夕飯には、下女が來て廣い胡坐敗の上を取片付け、そこを食卓の代りとして與れた。一本つけて與れた銚子、串差にして皿の上に盛られた軟、すべては客を扱ひ慣れた家の主人の心づかひからであつた。その時、半藏は次の間に寛いでゐる佐吉を呼んで、

「佐吉、お前もこゝへお膳を持つて來ないか。旅だ。今夜は一杯やれ。」

この半藏の『一杯』が佐吉をほゝゑませた。佐吉は年若ながらに、半藏よりも飲める口であつたから。

「俺は圍爐裏ばたで頂かず。その方が勝手だで。」

と言つて佐吉は引きさがつた。

「壽平次さん。わたしはこんな旅に出られたことすら、不思議のやうな氣がする。實に一切から離れますね。」

「もうすこし君は樂な氣持でも好くはありませんか。まあ、その盃でも乾すさ。」

若いもの二人は旅の疲れを忘れる程度に盃を重ねた。主人が馳走振りの鶫も食つた。燒きたての小鳥の骨を嚙む音も互ひの耳には樂しかつた。

「しかし、半藏さんもよく話すやうになつた。以前には、ほんとに默つてるたやうですね。」

「自分でもさう思ひますよ。今度の旅ぢや、わたしも平田入門を許されて來ました。吾家の阿爺もあゝいふ人ですから、

快く許して呉れましたよ。わたしも、これで嫁でもあると、家はその嫁に讓つて、もつと自分の勝手な方へ出て行つて見たいんだけれど」

「今から隠居でもするやうなことを言ひ出したら、半蔵さん——君は結局、宗教にでも行くやうな人ぢやありませんか。わたしはさう思つて見てゐるんだが。」

「そこまではまだ考へてゐません。もし宗教に行くとしたら、百姓の宗教でせう」

「百姓の宗教は好かつた」

「わたしは十六の歳から村の子供を教へて見て居ますがね、百姓の性質の中にはなかなか美しいところがありますよ。今は武士も濁り、儒者も濁り、僧侶までも濁つてしまつた。割合に濁らないのは下の方のものばかりです」

「わたしもそれは思ふ」

「その意味から言つても、問屋はかりふんしる役人相手の仕事は好かない。わたしはもつと上に立つ人達のことはあきらめてゐます」

問答話に夜はふけて行つた。ひつそりとした裏山に、奈良井川の上流に、そこへはもう中木曾の冬がやつて来てゐた。山氣は二人の身にしみて、雪例もまた近いかと思はせた。

追分の宿まで行くと、江戸の消息はすでにそこでいくらか分つた。同行三人のものは、諏訪下の方から和田峠を越え、千曲川を渡つて、木曾街道と北國街道との交叉點にあたるその高原地の上へ出た。そこに住む追分の名主で、平田派に名を連ねた文太夫に、かねて寿平次が先代には懇意にした間柄で、その人の話から江戸行の若者等の消息を聞き得たのであつた。

名主文太夫は、野牛だ、樹材樹に、猫縒で、氣質氣質の人に交つた十一ヶ村の森林を跋渉つてゐるやうな人であつた。その地方にある山林の枯痛み、風折れ、雪折れ、あるひは枝卸しなどの見廻りをしてゐるやうな人であつた。半蔵らはこの客好きな名主の家に引き留められて、佐久の味噌汁や堅い地大根の澤庵などを味ひながら、松、落葉松の山林の多い淺間山腹がいかに郷里の方の谿と相違するかを聞かされた。融原と、焼石と、砂と、烈風と、土地の事情に精通した名主の話は盡きるといふことを知らなかつた。

しかし、そればかりではない。半蔵等が追分に送つた一夜の無意味でなかつたことは、思ひがけない江戸の消息までもそこで知ることが出來たからで。その晩、文太夫が半蔵や壽平次に取り出して見せた書面は、ある松代の藩士から借りて寫し取つて置いたといふものであつた。嘉永六年六月十一日附として、江戸屋敷の方にある人の書き送つたもので、黒船騷ぎ當時の樣子を傳へたものであつた。

『この度、異國船渡り來り候につき、江戸表は殊の外なる儀にて、東海道筋よりの早注進矢のごとく、依て諸國御大名ところ〴〵の御堅め仰せ付けられ候。然るところ、異國船神奈川沖へ乘り入れ候おもむき、御老中御屋敷へ注進あり。右につき、夜分急に御登城にて、それ〴〵御下知仰せ付けられ、七日夜までに出陣の面々は左の通り。

一、松平越前守樣、品川御殿山お堅め。

一、細川越中守樣、大森村お堅め。

一、松平大膳太夫樣、鐵砲洲及び佃島。

一、松平阿波守樣、御濱御殿。

一、松平雅樂守樣、深川一圓。

一、立花左近將監樣、伊豆大島一圓。松平下總守樣、安房上總の兩國。その他、川越城主松平大和守樣をはじめ、高

右門に二番方の者があいたち出張、御大名数を出され、公儀御目付役、戸川中務少輔様、松平十郎兵衛様、右御両人は異国船見届けのため、陣場見廻の仰せ付けられ、六日夜亥時頃ハ御出立にこれあり候。さて、この度の異国船、国名相尋ね候ところ、北亜米利加と申すところ。大船四艘右船、尤も船の中より、朝夕一両度づゝ大筒など打ち放し申し候よし　町人並に近在のものは武役に遣られ、海岸の人家も大方はつゝ散じて諸家様のお手の場所となり、民家の者ども妻子を引き連れて立ち退き候もあり、米穀日に高く、日も当てられず、實に戦闘の習ひ、是非もなき次第にこれあり候。八日の早暁にいたり、御触れの文面左の通り。

一、異国船万一にも内海へ乗入れ、非常の注進これあり候節は、老中より八代洲河岸火消役へ相達し、同所にて平日の出火に紛れざるやう早鐘打ち出し申すべきこと。

一、右の通り、火消役にて早鐘打ち出し候節は、出火の通りの相心得、登城の道筋その他相固め候やう致すべきこと。

一、右に就いては、江戸見本まで早鐘打ち出すべき場合もこれあるべく、尚右以上の面々に於いては早鐘相鳴らし申すべきこと。

右のおもむき、御用番老中より仰せ渡され候。取りあへず当地のありさま申し上げ候。以上。

實に、一息に、かねて心に掛つてゐたことが半藏の胸の中を通り過ぎた。これほどの實感も、木曾の山の中までは届かなかつたものの、答よくなくとも、半藏が狹い見聞の世界へは、突然として降つたやうにして入つて來なかつたものだつた。あの黒艦の出現が、一度江戸の城に傳へてからの混亂、狼狽、そのものとも言ふべき諸大名がおびただしい通行、それから引き續きこの街道に起つて來た種々な變化の意味も、その時思ひ合はされた。

「壽平次さん、君はこの手紙をどう思ひますね。」

「さあ、わたしもこれほどとは思はなかつた。」

半藏は壽平次と顏を見合せたが、激しい精神の動搖は隱せなかつた。

四

郷里を出立してから十一日目に三人は板橋の宿を望んだ。戸田川の舟渡しを越して行くと、木曾街道もその終點に盡きてゐる。そこまで辿り着くと江戸も近かつた。

十二日目の朝早く三人は板橋を離れた。江戸の中心地まで二里と聞いただけでも、三人が踏みしめて行く草鞋の先は輕かつた。道中記の賴りになるのも板橋迄で、巣鴨の立場から先は江戸の繪圖にでもよる外はない。安政の大地震後一年目で、震災當時多く板橋に避難したといふ武家屋敷の人々も既に歸つて行つた頃であるが、假小屋の屋根、傾いた軒、新たに修繕の加へられた壁なぞは行く先に見られる。三人は右を見、左を見して、本郷森川宿から神田明神の横手に添ひ、筋違見附へと取つて、復興最中の町に入つた。

「これが江戸か。」

半藏等は八十餘里の道を辿つて來て、漸くその筋違の廣場に、見附の門に近い高札場の前に自分等を見つけた。廣場の一角に配置されてある大名屋敷、向ふの町の空に高い火見櫓までがその位置から望まれる。諸役人は騎馬で市中を往來すると見えて、鎗持の奴、その他の從者を從へた馬上の人が、その廣場を横ぎりつゝある。遽かに講武所の創設されたとも聞く頃で、旗本、御家人、陪臣、浪人に至るまでも稽古の志望者を募るなぞの物々しい空氣が滿ち溢れてゐた。

半藏等がめざして行つた十一屋といふ宿屋は兩國の方にある。小網町、馬喰町、日本橋數寄屋町、諸國旅人の泊る定宿もいろ〳〵ある中で、半藏等は兩國の宿屋を選ぶことにした。同郷の人が經營してゐるといふだけでもその宿屋は心易く

思はれたからで、おやうど。日本橋から有明まで、は船で行かれることも少くて、見たる人があつて、三人とも腕の利く綱い
た仕事の下を船で行つた。晴に聞く浅草橋まで行くと、前近に見たやうな見附の門はそこにもあつた。両国の宿屋は船の
着いた河岸からこちや／＼とした狭い小路を通り抜けたところにあつて、十一屋とした看板かけした旅籠屋だ。また昔
前のことで、大きな風呂敷包を背負つた男、軸面をぶらさげて行く小僧、頭の上に深く顔をつゝんだ女なぞが、その辺の町
中を往つたり来たりしてゐた。

「背さんは木曾の方から。まあ、ようこそ。」

といつて迎へて呉れる中年のかみさんの声を聞きながら、半蔵も寿平次も脚絆の紐を解いた。そこへ荷を卸した佐吉の側で、二人とも長い道中の後の棒のやうになつた足を洗つた。

「[illegible]」

二階の部屋へ案内された後で、半蔵は寿平次と顔を見合せて立つたが、まだ二人とも脚絆をつけたまゝだつた。

「ここまで来ると、さすがに陽気は違ひますね。宿屋の女中なぞはもう袷を着てゐますよ。」

と寿平次もいつて、その足で部屋の内を歩き廻つた。

半蔵が江戸へ出た目的は、木曾の山の中から [illegible] 人、木曾 [illegible] の武居拙蔵、さういふ人は [illegible]、[illegible]、[illegible] もあつて、しばらく逗 [illegible] 、[illegible] 小屋に [illegible] が、頭に [illegible] 、数年前の [illegible] の方へ [illegible] といふ [illegible] が残つてゐた。

半蔵もまだ若かつた。[illegible] 、さうした方面の人の [illegible] に心を [illegible] かれた。それにも

際して彼の注意をひいたのは、幕府で設けた蕃書調所なぞの既に開かれてゐると聞くことであつた。古賀謹一郎、杉田成卿なぞの蘭學者を中心に、諸人所藏の蕃書の翻譯がそこで始まつてゐた。

この江戸へ出て來て見ると、日に日に外國の勢力の延びて來てゐることは半藏なぞの想像以上であつた。その年の八月には三隻の英艦までが長崎に入つたことの報知も傳はつてゐた。品川沖には新たに御臺場が築かれたとも聞く。外國御用掛の交代に、江戸城を中心にした交易大評定の噂に、震災後めぐつて來た一週年を迎へた江戸の市民は毎日のやうに何かの出來事を待ち受けるかのやうでもあつた。

兩國へ着いた翌日、半藏は壽平次と二人で十一屋の二階にゐて、遠く町の空に響いて來る大砲調練の音なぞを聽きながら、旅に疲れたからだを休めてゐた。佐吉も階下で別の部屋に休んでゐた。同郷と聞いてはなつかしいと言つて、半藏達のところへ話し込みに來る宿屋の隱居もある。かみさんの實父らしいその話好きな隱居は、木曾の山の中を出て江戸に運命を開拓するまでの自分の苦心なぞを語つた末に、

『あなた方に江戸の話を聞かせろと仰られても、わたしも困る。』

と斷つて、何と言つても忘れがたいのは嘉永六年の六月に十二代將軍の薨去を傳へた頃だと言ひ出した。

受賣りにしても隱居の話は精しかつた。ちやうど亞米利加のペリイが初めて浦賀に渡來した翌日あたりは、將軍は病の床にあつた。強い暑さに中つて、多勢の醫者が手を盡しても、將軍の疲勞は日に日に増すばかりであつた。將軍自身にも最早起てないことを知りながら、押して老中を呼んで、今回の大事は開闢以來の珍事である、自分も深く心を痛めてゐるが、不幸にして大病に侵され、如何ともすることが出來ないと語つたといふ。就いては、水戸の隱居（烈公）は年來海外のことに苦心して、定めし好い了簡もあらうから、自分の死後外國處置の件は隱居に相談するやうにと言ひ置いたといふ。亞米利加の軍艦が内海に乘入れたのは、その夜のことであつた。宿直のものから、唯今伊勢（老中阿部）登城、唯今備後

「老中牧野登城」と上申するのを聞いて、将軍は直ぐにこれへ呼べと言ひ、「備前、備前。」と呼び求めた。その時将軍は既に気が切つてゐた。極度に悩んで、精神も次第に朦朧となるほどだつた。それでも人に扶けられて、いつものやうに正しく坐り直し、肩衣を着けた。それから老中を呼んで、二人の言ふことを聞かうとしたが、亜米利加の軍艦がまたにはかに外海へ出たといふ再度の報知を得たので、二人の老中も拝謁を請ふには及ばないで引き退いた。翌日、将軍は休息の部屋で薨した。

十一屋の隠居はこの話を日頃出入りする幕府奥詰の医者から聞いたと半蔵等に言ひ添へて見せた。更に言葉を継いで、

「わたしはあの公方様の話を思ひ出すと、涙が出て来ます。何にしろ、あなた、初めて異国の船が内海へ乗り入れた時の江戸の騒ぎはありませんや。諸大名は火事具足で登城するか、持場々々を堅めるかといふんでせう。火の用心の御触れは出る、陣笠や具足の値は平常の倍になる、海岸の方に住んでるものは、みんな荷物を背負つて逃げましたからね。わたしもこんな宿屋商売をして見てゐますが、世の中はあれから変りましたよ。」

半蔵も、寿平次も、この隠居の話を聞いた後で、更にも何も江戸の空気の濃い町中に来て旅の身を置き得たことを感じた。木曾の山の中にゐて想像したと、出て来て見たとでは、実に大した相違であることを気附いた。

「半蔵さん、今日は国へ手紙でも書かう。」

「わたしも一つ、馬籠へ出すか。」

「半蔵さん、宿はそれぞれの宿占を連れて、明日平田先生を訪ねることにしませうよ。」

取りあへず二人は相談をして、この日一日は二人とも休息することにした。旅に限りがあつて、さう長く江戸の逗留は

豫定の日取りが許さなかつた。またこれから先に日光行、横須賀行も二人を待つてゐた。

壽平次は手を鳴らして宿のかみさんを呼んだ。もうすこし早く二人が出て來ると、恵比須講に間に合つて、大傳馬町かなにに立つべつたら市の賑ひも見られたとかみさんはいふ。芝居は、と尋ねると、市村、中村、森田三座とも狂言の替り看板が出たばかりの頃で、茶屋のかざり物、積籠、提灯、つみ物なぞは、あるひは見られても、狂言の見物には月の替るまで待てといふ。當時賣出しの作者の新作で、世話に碎けた小團次の出し物が見られやうかともいふ。

「明日の顔見世は明けの七つ時でございますよ。太夫の三番叟でも御覧になるんでしたら、暗いうちからお起きに成らないと、間に合ひません。」

「江戸の芝居見物も一日がゝりですね。」

こんな話の出るのも、旅らしかつた。

夕飯後、半藏はかねて郷里を出る時に用意して來た一通の書面を旅の荷物の中から取り出した。

「どれ、一つ壽平次さんに見せますか。これが明日持つて行く誓詞です。書式があつて書いたものですよ。そのつもりで讀んで見て下さい。」

と言つて壽平次の前に置いた。

誓詞

「この度、御門人の願ひ奉り候ところ、御許容なし下され、先師御門人の列に召し加へられ、本懐の至りに存じ奉り候。然る上は、專ら皇國の道を尊信致し、最も敬神の儀怠慢致すまじく、生涯師弟の儀忘却仕るまじき事。

公の御制法に相背き候儀は申すに及ばず。すべて古學を申し立て、世間に異様の行ひを致し、人の耳目を驚かし候やうの儀これあるまじく、殊更師傳と僞り奇怪の說など申し立て候儀、一切仕るまじき事。

先師御前に於いては、秘伝口授など申す儀、付てこれなき段、堅く相守り、右様の事申し立て候儀これあるまじく、すべて諸方へ出精を致し古学の名を穢し申すまじき事。

先師御歿後の今日たりとも、学の兄弟相替らず随分睦まじく相交り、互ひに古学興隆の志を相励み申すべく、我執を立て争論など致し候儀これあるまじき事。

右の條々、謹んで相守り申すべく候。若し違乱に及び候はゞ、八百萬の天津神、國津神、明らかに知ろしめす可きところ也。仍て、誓詞如件」

安政三年十月

信濃國、木曾、馬籠村　青山半蔵

平田鐵胤大人　御許

「これはなかなかやかましいものだ」

「まだこの外に、名簿代を出すことになつてゐます。行年何歳といふことから、父は誰、職業は何、誰の紹介といふことまで書いてあるんですよ」

その時、半蔵は例の大気を気づかひ顔に門の方へ立つて行つた。隅田川に近いことを思はせるやうな、何となく水邊らしい夜の町の空がその門の外に見えた。

「半蔵さん、」と寿平次はまた側へ来て、吸ひ直した相手の顔を眺めながら、「君の誓詞には、古学といふことがしきりに出て来ますね。一体、国学をやる人はこんなに古代の方に目標を置いてかゝるんですか。」

「そりや、さうさ、君」

『でも、こんな時世になつて來て、さういふ古學はどんなものでせうかな。』
『そこですよ。外國の刺激を受ければ受けるほど、わたし達は古代の方を振返つて見るやうになりましたよ。それが、わたしばかりぢやありません。中津川の香藏さんだつても、さうです。』
『過去はそんなに意味がありますかなあ。』
『君のいふ過去は死んだ過去でせう。ところが、篤胤先生なぞの考へた過去は生きてる過去ですよ。明日は、明日はッて、みんな明日を待つてゐるんだけれど、そんな明日は何時迄待つても來やしません。今日は昔、瞬く間に通り過ぎて行く。過去こそ眞ぢやありませんか。』
『君の言ふことは分ります。』
『しかし、國學者だつて、さう一概に過去を目標に置かうとは言ひませんよ。中古以來は濁つて來てゐると考へるんですよ。それが、おもに支那の深い影響ですさ。でも昔、篤胤先生あたりまでは支那から傳はつて來たもの、影響を考へて見るだけで濟みました。それだけでは濟まされないんで、今のわたし達は苦しむんです。』
『待つて呉れたまへ。わたしはさう精しいことも知りませんがね、何か斯う、平田派の學問は偏り過ぎるやうな氣がして仕方がない。』
『今に分りますよ――偏り過ぎるか、偏り過ぎないか。』
『兎に角、古い青山の家に半藏さんのやうな人が生れて來たのは、不思議でもないかも知れませんね。』
どうやら定めない空模様だつた。さびしくはあるが、さう寒くもない時雨の降る音が戸の外にして來た。

江戸は、初めて来て見る半蔵のやうなものに取つて、何程の広さに伸びてゐる都会とも、ちよつと見当のつけられないやうな大きなところである。そこに住む老若男女の数を精しく正確に計算せられたこともないといふものもあるし、およそ二百万の人口はあらうといふものもある。半蔵が連れと一緒に、この都会に足を踏み入れたのは武家屋敷の多い方面で、その辺は割合に人口も稀薄なところであつた。両国まで来て初めて町の深さに入つて見た。これも僅かに江戸の東北にあたる一つの小さな区域といふにとどまる。

数日の滞在の後には、彼も佐吉を供に連れて山下町の方に本田家の訪問を済まし、浅草方面は猿若町の芝居見物などに出掛けて行つて来た。その頃になると、彼はあちこちと見て廻つた町々の印象から、八百八町から成るといふこの大きな都会の輪郭をいくらか彷彿することが出来た。町中にある七つの橋を左右に見渡すことの出来る一石橋の上に立つて見た時、国への江戸土産に、元結、油、楊枝の類を求めるなら、親父橋まで行けと十一屋の隠居に教へられて、あの橋の畔から鎧の渡しの方を望んで見た時、眼に入るかぎりの無数の町家がたて込んでゐて、高い火見梯、低い軒、深い暖簾から、到るところの河岸に並んだ白壁の土蔵の眺めまで――そこから来る色彩の黒と白との調和も江戸らしかつた。

しかし、世は封建時代だ。江戸城の関門ともいふべき十五六の見附をめぐりにめぐる内濠はこの都会にある橋々の下へ流れ続いて来てゐる。この外郭には更に十ヶ所の関門を設けた外濠がめぐらしてある。何程の家族が住み、何程の土地の面積を占め、何程の空閑と閑地を持つかと思はれるやうな、譜代大小の大名屋敷が要所々々に配置されてある。そこには外様大名の屋敷も置いてあるといふやうな意匠の用心深さは、日本国六十余州の縮図を見る思ひもある。いつて見れば、ここは大きな関所だ。町の角には必ず木戸があり、木戸の側には番人の小屋がある。あの木曾街道の関所の方では、そこにある役人が一切の通行者を監視するばかりでなく、役人同志が互ひに監視し合つてゐた。どうかすると、奉行その人ですら下役から監視されることをまぬかれなかつた。これを押しひろげたやうな膨大な大規模が江戸だ。

個人の自由は全くこゝに認められなかつた。

よく見れば、江戸は最早天保年度の江戸ではなかつた。文化文政のそれではもとよりなかつた。紙、織物、漆器、陶金屬の類を應用した諸種の工藝の見るべきものもないではないが、安政時代を誇るべき意匠とてもない。試みに半藏は壽平次と一緒に、兩國廣小路附近の繪草紙問屋の前に立つて見た。そこで賣る人情本や、敵打ちの物語や、怪談物なぞを見ると、書物としての形も小さく、紙質も惡しく、版畫も粗末に、一切が實に手薄になつてゐる。怪奇なものはますく怪奇に、繊細なものはますく繊細だ。尖つた神經質と世紀末の機智とが淫靡で頽廢した色彩に混じ合つてゐた。二人は兩國から日本橋へ出て、橋の畔にある名高い立場の茶屋、豆絞りの手拭を賣る評判の呉服屋、茶色の暖簾の掛つた藥種屋なぞの前を歩いて見た。鎌倉圓覺寺の教導で、九十五歳に近い身の戒を破つた老僧が引出され、巷に面を晒されたといふいとをしくもにがくしい話なぞがそこに殘つてゐた。

「江戸はどうなるでせう。」

兩國の宿屋の方に歸つてから、半藏はそれを壽平次に言つて見た。

豫定の日取もいつの間にか盡きた。いよく江戸を去る前の日が來た。半藏としては、この都會で求めて行きたい書籍の十が一をも手に入れず、思ふやうに同門の人も訪ねず、賀茂の大人が僑居の跡も見ず仕舞であつても、せめて平田家を訪問して、こゝろよく入門の許を得、鐵胤はじめその子息さんの延胤とも交りを結ぶ端緒を得たといふだけにも滿足して、十一屋の二階でいろくと荷物を片付けにかゝつた。

半藏が部屋の廊下に出て見た頃は夕方に近い。

「半蔵さん、けふは両国の町へ買物に出て、それは好い娘を見て来ましたぞ。」

と言つて寿平次は国への江戸土産にするものなぞを手に提げながら帰つて来た。

「僕にはかなはない。直ぐにさういふところへ眼がつくんだから。」

半蔵はそれを言ひかけて、思はず顔を紅めた。二人は宿屋の二階の欄に身を倚せて、眼につく風俗なぞを話し合ひながら、しばらくそこに旅らしい時を送つた。髪の結細といふものにしても、紅い鹿の子の帯なぞをしめた若いさかりの娘の洗練された風俗も、かうした都会でなければ見られないものだ。国の方で木枯れた笛なぞを吹いてゐる年頃の女が、ここではなやかな撥音を鳴らしてゐる。渋い柿色のけいし一を小脇にかゝへながら、唄の稽古にでも通ふらしい小娘のあどけなさ。中幅子の襟のかゝつた着物を着て水茶屋の暖簾のかげに物思はしげな女のなまめかしさ。幽暗に調和した江戸趣味は、最早行くところまで行き尽したかとも思はせる。

やがて半蔵は佐吉を呼んだ。翌朝出掛けられるばかりに旅の荷物をまとめさせた。町へは鮨を買ひに来た、髪を買ひに来たといつて、物売りの声がする頃に間口をたてゝゐるのも佐吉だ。佐吉は、山下町の方へ本陣家まで供をした折のことを思ひ出して、主人と二人で附近の東叡山にある小料理屋へ出掛けようとしたことや寿平次の話した末に、そこの下足番の客を呼ぶ声が高い調子であるには驚かされたと笑つた。

「へい、いらつしやい。」

と佐吉は木訥な調子で、その口調を真似て見せた。

「あの、へい、いらつしやいには、俺も弱つた。そこへ坐らせられてしまつたに。」

と、また佐吉は笑つた。

「佐吉、江戸ともお別れだ。今夜は一杯飲んでもやれ―」

と半蔵は言つて、三人して宿屋の夕飯の膳に就いた。佐吉がそこへかしこまつたところは、馬籠の本陣にでもゐるやうだ、どんどん焚火をしながら主従一同食事する時と少しも変らない。膳には刺身もついた。木曾の山の中のことにして見たら、深い森林に住む熊、鹿、猪なぞの野獣の肉を食ひ、谷間の土に巣をかける地蜂の子を賞美し、肴と言へば鹽辛いさんまか、鰯か、一年に一度の鹽鰤が膳につくのは年取りの祝ひの時ぐらゐに極つたものである。それに比べると、こゝにある鮪の刺身の新鮮な紅さはどうだ。その皿に刺身のツマとして添へてあるのも、繊細を極めたものばかりだ。細い紫色の海髪。小さな莖のまゝの紫蘇の實。黄菊。一つまみの大根おろしの上に青く置いたやうな山葵。

「かう三人揃つたところは、どうしても山の中から出て來た野蠻人ですね。」

赤い襟を見せた給仕の女中を前に置いて、壽平次はそんなことを言ひ出した。

「こんな話があるで。」と佐吉も膝をかき合せて、「木曾福島の山村様が江戸へ出る度に、山猿、山猿と人にからかはれるのが、くやしくて仕方がない。ある日、口の悪い人達を屋敷に招んだと思はつせれ。そこが、お前さま、福島の山村様だ。これが木曾名物の焼栗だと言つて、生の栗を火鉢の灰の中にくべて、ぽんぽんはねるやつをわざと鐵で掻き廻したげな。」

「野性を發揮したか。」

と壽平次が吹き出すと、半蔵はそれを打ち消すやうに、

「しかし、壽平次さん、かう江戸のやうに開け過ぎてしまつたら、動きが取れますまい。わたし達は山猿でいゝ。」

と言つて見せた。

食後にも三人は、互ひの旅の思ひを比べ合つた。江戸の水茶屋には感心した、と言ふのは壽平次であつた。思ひがけない屋敷町の方で謠曲の聲を聞いて來た、と言ふのは半蔵であつた。

その晩、半蔵は壽平次と二人枕を並べて床に就いたが、夜番の拍子木の音なぞが耳について、よく眠らなかつた。枕も

そこにあるしよんぼりとした行燈のかげで、敬義学校の中川の写本を探つて見て、また安心して前田をかへりみながら、平田篤胤の訪れた日のことなぞを思ひつゞけた。あの篤胤が古学の階段に踏めと、はかれて来たことを思へた。世は濁り、江戸は行き詰り、一切のものが実に紛然として互ひに叫びを挙げてゐる中で、どうして古代復帰の夢なぞをこの地上に実現し得られようと思へた。これは書物を教へる人が深山にあつて、しかも学ぶに難い時世もあつたらしいと思へた。

――自分のやうな愚かなものが、どうして生きようぞ――

そこまで思ひつゞけて行つた時は、冷い涙が彼の頬から耳の下を伝つて、枕紙の上に流れた。

翌朝は、成るべく早く出立しようといふことになつた。時が来て、半蔵は例の青い合羽、寿平次は樺色の合羽に身をつゝんで、すつかり支度が出来た。佐吉は既に草鞋の紐を結んだ。三人とも出掛けられるばかりになつた。

十一屋の隠居はそこへ飛んで出て来て、

――オヤ、これはどうも、お粗末さまでございました。どうかまた、お近いうちに――

と手を揉んだからいふ。江戸生れで、まだ木曽を知らないといふかみさんまでが、隠居の側に来て、

――ほんとに、木曽の方はおなつかしい――

と別れ際にいひ添へた。

十一屋のあるところから両国橋までは、ほんの一歩だ。江戸の名残りに、隅田川を見て行かう、と半蔵が言ひ出して、やがて三人で河岸の物揚場に近く出た。早い朝のことで、大江戸はまだ眠りから覚めきらないかのやうである。ちやうど、潮なき流れて来る隅田川の水に乗つて、川上の方角から橋の下へ降つて来る川船があつた。あたりに碇つてゐる大小の船がまだ半分眠りを見てゐる中で、その船の上へ活気をこき入れるものは、その船頭の掛声だ。十一屋の隠居の話で、半蔵等はそれが埼玉川越の方から伊勢町河岸へと急ぐ仲船であることを知つた。

「日の出だ。」
言ひ合はせたやうなその聲が起つた。三人は互ひに躊躇して、本所方面の初冬らしい空に登る太陽を迎へた。江戸はあるが、さうまぶしく輝かない。木曾の奥山に住み慣れた人達は、谷間からだん／＼空の明るくなることは知つてゐても、こんな日の出は知らないのだ。隅田川もさうだ。間もなく三人は千住の方面をさして、静かにその橋のたもとからも離れて行つた。

六

千住から日光への往復九十里、横須賀への往復に三十四里、それに江戸と木曾との間の往復の里程を加へると、半藏等の踏む道はおよそ二百九十里からの旅である。
日光への寄り道を濟まして、もう一度三人が千住まで引き返して來た頃は、旅の空で舊暦十一月の十日過ぎを迎へた。その時は、千住から直ぐに高輪へと取り、札の辻の大木戸、番所を經て、東海道へと續く袖が浦の岸へ出た。噂に聞く御臺場、五つの保壘から成るその建造物は既に工事を終つて、沖合の方に遠く近く姿をあらはしてゐた。大森の海岸まで行つて、半藏はハッとした。初めて眼に映る黒船――徳川幕府が阿蘭陀政府から購ひ入れたといふ外輪型の小蒸汽船がその海岸から望まれた。
到頭、半藏等の旅は深い藍色の海の見えるところまで行つた。神奈川から金澤へと進んで、横須賀行の船の出る港まで行つた。客や荷物を待つ船頭が波打ち際で船の支度をしてゐるところまで行つた。
「何だか遠く來たやうな氣がする。郷里の方でも、みんなどうしてゐませう。」
「さあ、ねえ。」

「わたし達が帰つて行く時分には、もう雪が村まで来てゐませう。」

「さうだとも。きつと、今頃はサヨリ飯でもたいて、こつちの噂でもしてゐるだらうよ。」

二人はこんなことを語り合ひながら、金沢の港から出る船に移つた。

海は動いて行く船の底に躍つた。最早、半蔵はこれから訪ねて行かうとする横須賀在、公郷村の話で持ち切つた。五百年からの歴史のある古い山上の家族がそこに住むかと語り合つた。三浦一族の子孫にあたるといふ山上家の遠祖が、あの山上の家から分れて、どの海を渡り、どの街道を通つて、遠く木曾谷の西のはづれまで入つて行つたものだらうと語り合つた。

当時の横須賀はまだ漁村である。船から陸を見て行くことも生れて初めてのやうな半蔵には、その辺を他の海岸に比べていふことも出来なかつたが、大島小島の多い三浦半島の海岸に添うて旅を続けてゐることを想つてみることは出来た。ある岬の外まで行つた。海岸の方へ伸びて来てゐる山の懐に抱かれたやうな位置に、横須賀の港が隠れてゐた。

公郷村とは、船の着いた漁師町からも物の半道と隔つてゐなかつた。半蔵は横須賀まで行つて、山上の噂を耳にした。公郷村に古い家筋の人のあることは、土地の漁師にまでよく知られてゐた。二人がはるばる尋ねて行つたところは、木曾の山の中で想像したよりは人里に近いところだ。長閑なことも想像以上だ。ほがらかな鶏の声が聞えて、漁師達の住む家々の屋根からは静かに立つ朝の煙を見るやうな仙境だ。

馬籠本陣名主青山半蔵へ、四月十九日、古刀銘一口、其外陣屋山中役所。達磨の掛物一幅、但し光琳筆。

山上家の寶物。七郎左衞門は公郷村の住居で、[illegible]、二人[illegible]。

待ち受けてゐた。

『もうお客さまも見えさうなものだぞ。誰かそこいらまで見に行つて來い。』

と家に使つてゐる男衆に聲を掛けた。

半藏等が百里の道も遠しとしないで尋ねて來るといふ報知は七郎左衛門をぢつとさせて置かなかつた。彼は古い大きな住宅の持主で、二十疊からある廣間を奧の方へ通り拔け、一人一人隱れられるほどの太い大黑柱の側を廻つて、十五疊、十疊と二部屋續いた奧座敷の内をあちこちと靜かに歩いた。そこは彼が客をもてなすために用意して待つてゐたところだ。心を籠めた紀念の二品は三寶に載せて床の間に置いてある。先祖傳來の軸物なぞは客待ち顏に壁の上に掛つてゐる。

七郎左衛門の家には、三浦氏から山上氏、山上氏から青山氏と分れて行つた詳しい系圖をはじめ、祖先等の遺物と傳へらるゝ古い直垂から、陶器の類まで、何百年となく保存されて來たものはかなり多い。彼が客に見せたいと思ふ古文書なぞは、取り出したら際限のないほど長櫃の底に埋まつてゐる。あれもこれもと思ふ心で、彼は奧座敷から古い庭の見える方へ行つた。松林の多い裏山つゞきに樹木をあしらつた昔の人の意匠がそこにある。硬質な岩の間に躑躅、楓なぞを配置した苔蒸した築山がそこにある。どつしりとした古風な石燈籠が一つ置いてあつて、その蔭には圓く厚ぼつたい『つはぶき』なぞも集めてある。遠い祖先の昔はまだそんなところに殘つて、子孫の眼の前に息づいてゐるかのやうでもある。

『まあ、客が來たら、この庭でも見て行つて貰はう。これは自分が子供の時分から眺めて來た庭だ。あの時分から殆んど變らない庭だ。』

こんなことを思ひながら待ち受けてゐる處へ、半藏と壽平次の二人が供を連れて着いた。その時、七郎左衛門は家のものを呼んで袴を持つて來させ、その上に短い羽織を着て、古い鈴なぞの正面の壁の上に掛つてゐる玄關まで出て迎へた。

『これは。これは。』

七郎右衛門に驚きに近い[illegible]の[illegible]漲つ[illegible]居つた。

「こゝ、お供の衆、[illegible]上つて下さい。」

と彼の家内までそこへ出て[illegible]へる。案内顏に主人[illegible]て、[illegible]次の[illegible]、[illegible]

奥の方へ通つた後で、[illegible]二人の[illegible]。

やがて、[illegible]主人と半蔵との一別以來の挨拶、半蔵の[illegible]挨拶[illegible]主人の引き合せで、娘[illegible]

の家の人が半蔵のところへ挨拶に來るとも知れなかつた。これは倅、これは[illegible]、これは[illegible]、と主人の引合せがあつた。

挨拶には、まだ若い[illegible]が眼を[illegible]しながら、[illegible]ここへ[illegible]出て來た。

「[illegible]さん、[illegible]揃つて居ますよ。」

こゝ七郎右衛門の[illegible]が先の半蔵を驚かした。

[illegible]のあの[illegible]が、間もなくそこに[illegible]

白いおばあさんの[illegible]、[illegible]來た。

「おゝ、おゝ、[illegible]」

とおばあさんは半蔵の前にも[illegible]挨拶[illegible]。

「おばあさん[illegible]受け下さい。」

とまたおばあさんは[illegible]、三[illegible]

「[illegible]」

さういふ七郎右衛門の[illegible]

それも、[illegible]

宅へ一晩泊めて頂いた時に、隣に宝殿のある事が分りましたよ。まあ、わたしに三つの引出、窓に松竹梅とござる。さうなんだつたら、わたしは知らずに通り過ぎてしまふところでしたし、わざ／＼御主人が訪ねて来て下さるなんて、こんなめづらしいことも起つて来やしません。斯うしてお盃を取りかはすなんて、何だか夢のやうな氣もします。」

「そりや、お前さん、御先祖さまが引き合せて下すつたのさ。」

おばあさんは、おばあさんらしいことを言つた。

相州三浦の公郷村まで動いたことは、半藏に取つて黑船上陸の地點に近いところまで動いて見たことであつた。その時になると、半藏は浦賀に近いこの公郷村の舊家に身を置いて、あの追分の名主文太夫から見せて貰つて來た下紙も、兩國十一屋の隱居から聞いた話も、すべてそれを胸に纏めて見ることが出來た。江戸から踏んで來た松並木の續いた砂の多い街道は、三年前丑年の六月に亞米利加のペリイが初めての若船を傳へた頃、早飛脚の織るやうに往來したところだ。當時木曾路を通過した尾張藩の家中、續いて彦根の家中などがおびたゞしい同勢で山の上を急いだのも、この海岸一帶の持場々々を堅めるため、あるひは浦賀の現場へ馳けるためであつたのだ。

さういふ半藏はこゝまで旅を一緒にして來た壽平次にたんと御禮を言つてもよかつた。もし壽平次の誘つて呉れることがなかつたら、容易にはこんな機會は得られなかつたかも知れない。供の佐吉にも感謝していい。雨の日も風の日も長い道中を一緒にして、影の形に添ふやうに何くれと主人の身をいたはりながら、こゝまでやつて來たのも佐吉だ。お蔭で半藏は平田入門のこゝろざしを果し、江戸の樣子をも探り、日光の地方をも見、いくらかでもこれまでの旅に開けて來た耳でもつて、七郎左衞門のやうな人の話を聽くことも出來た。

半蔵の前にゐる七郎左衛門は、來てゐる間に[illegible]の最期へ[illegible]あるといふ人でも[illegible]

「[illegible]七郎左衛門のところへ[illegible]に來たといふ[illegible]ゐる人でもあ[illegible]

山[illegible]を[illegible]人、[illegible]七郎左衛門の[illegible]

「あなた、茶室の方へでも御案内しませう。」

「さうですなあ。」

「おふるい方が落ち着いて好くはありませんか。」

「いろいろお話を伺ひたいこともある。—[illegible]何、[illegible]にある古い系圖でもお目に掛けよう。」それから茶室の方へ[illegible]案内することにしよう。」

さう七郎左衛門は答へて、一丈も二丈もあるやうな巻物を[illegible]数[illegible]小箱から取り出して來た。その長い軸を半蔵の[illegible]半蔵の前にひろげて見せた。

この山上の家がまだ三浦の姓を名乗つてゐた時代の遠い先祖のことがそこに出て來た。三浦の祖で鎌倉將軍に仕へた三浦忠通といふ人の名が出て來た。[illegible]城を築き、この[illegible]を領してゐた三浦小太夫といふ人の名も出て來た。[illegible]四年の八月に、八十九歳、[illegible]三浦大介[illegible]といふ人の名も出て來た。寛[illegible]元年の六月、[illegible]將軍[illegible]て[illegible]、[illegible]といふ人の名も出て來た。元[illegible]年[illegible]て、

「半蔵さん、御覧なさい、ここに三浦[illegible]とありますよ。この人は從五位下だ。[illegible]を攻め、[illegible]、先祖[illegible]を復すといふべしとしてありますよ。」

「[illegible]」

[illegible]も半蔵も[illegible]に[illegible]、その新しい系圖に見入つた。暗い中世の[illegible]動かぬ物でも見るやうに

そこに展開した。

「つまり三浦の家は一度北條早雲に滅されて、それからまた再興したんですね。」と七郎左衛門に言つた「五十町の田地を貢つて、山上と姓を改めたともありますね。昔はこの邊を公郷の浦とも、大田津とも言つたさうです。この半島には古蹟といふところがありますが、三浦道寸父子の墓石なぞもあそこに殘つてゐますよ。」

やがて半藏等はこの七郎左衛門の案内で、茶室の方へ通ふ庭の小徑のところへ出た。裏山つゞきの稻荷の祠などが横手に見える庭石の間を登つて、築山をめぐる位置まで出た頃に、壽平次は半藏を顧みて言つた。

「驚きましたねえ。この山上の二代目の先祖は楠家から養子に來てゐますよ。毎年正月には楠公の肖像を床の間に掛けて、鏡餅や神酒を供へるといふぢやありませんか。」

「わたし達の家が古いと思つたら、こゝの家はもつと古い。」

松林の間に海の見える裏山の茶室に席を移してから、七郎左衛門は浦賀の番所通ひの話などを半藏等の前で始めた。二千人の水兵を載せた亞米利加の艦隊が初めて浦賀に入港した當時のことがそれからそれと引き出された。

七郎左衛門の話は精しい。彼は水師提督ペリイの座乘した三本マストの旗艦ミスシッピイ號をも目撃した人である。浦賀の奉行はそれを知つて、直ぐに要所々々を堅め、こゝは異國の人と應接すべき場所でない、亞米利加大統領の書翰を呈したいとあるなら長崎の方へ行けと諭した。けれども、亞米利加が日本の開國を促さうとしたは決して一朝一夕のことではないらしい。先方は斷然たる決心をもつて迫つて來た。もし浦賀で國書を受取ることが出來ないなら、江戸へ行かう、それでも要領を得ないなら、艦隊は自由行動を執らう。この脅迫の影響は實に大きかつた。のみならずペリイは測量艦隊

を放つて浦賀附近の港内を測量し、更に内海に向はうとし、遂にそれを強行して觀音崎から走水の附近にまで達した。浦賀奉行とペリイとの久里濱に於ての會見がそれから開始された。海岸に幕を張り、弓矢、鐵砲を用意して、五千人からの護衛の武士が出て萬一の場合に具へた。なにしろ先方は三千人からの水兵が上陸して、列をつくつて進退する軍樂から打ち出す大砲の響は近海から遠い山々までも響き渡る。かねての約束の通り、奉行は一言も發しないで國書だけを受取つて、兩方何も會見の式を終つた。その間約半時ばかり。ペリイは大いに軍容を示して、日本人の高い鼻をへし折らうとでもかんがへたものか。押迫がましい傲つた態度がそれからも續きに續いた。一個艦隊は小柴沖から羽田沖まで進んで、はるかに江戸の町々を望み見るところまでも乗り入れて、それから談判の折に、萬一國書を受けつけないなら非常手段に訴へるといふ意嚇を施した。それはかりではない。日本で開國を肯じないなら、武力に訴へてもその態度を改めさせなければはならぬ。日本人はふるつて國法によつて防戦するがいい。米國は必ず勝つて見せる。就いては二本の白旗を贈る。戦に敗けて講和を求める時にこれを掲げて來るなら、その時は砲撃を中止するであらうとの言葉を殘した。

「わたしは亞米利加の船を見ました。二度目にやつて來た時は九艘も見ました。左様、二度目の時なぞは三ヶ月もあの沖合に掛つてゐましたよ。その間、あなた、日本の國論がどうあらうと、こつちの言分が通るまでは動かないといふ量見で一箇村でも動かない。戦といふ構へで。」

これらの亡くなつた人の話は、半蔵にも、壽平次にも、容易ならぬ時代に際會したことを知らせた。當時の青年として、この不安はまた當然の焦慮でもあることを思はせた。同時に、この仙境のやうな山間の寒村へも、さうした世界の新しい潮が遠慮なく打ち寄せて來ることを思はせた。

「時に、お話はお話。宿上の一宿にも、この宿下の一宿にも、ただわたしはお話し方が耳に入つて、また御家も立ててあげなさつた」。

さう言ひながら、七郎左衛門はこの茶室にある爐の側に座り直した。そこにある低い天井も、簡素な壁も、静かな窓も、海の方から聞えて來る濤の音も、すべてはこの山上の主人がたましひを落ち着けるためにあるかのやうに見える。水屋の方には既にいろ／＼支度させてあつたと見え、七郎左衛門自身に古い茶器なぞを取りに立つて行つて來て、また二人の客の見てゐる側で、古代紫の袱紗なぞを取り出した。

『なにしろ青山さん達は、お二人ともまだ若いのが羨ましい。これからの時世はあなた方を待つてゐますよ。』

七郎左衛門は手にした袱紗で夏目の蓋や茶匙の塵を掃き／＼言つた。匂ひこぼれるやうな青い抹茶の粉は茶碗に移された。湯と水とに對する親しみの力、貴賤貧富の外にある寂しさ、澁さと甘さと濃さと淡さとを一つの茶碗に盛り入れて、泡も汁も一緒に溶け合つたやうな高い茶の香氣を嗅いで見た時は、半藏も壽平次もしばらくそこに旅の身を忘れてゐた。

母屋の方からは、庭づたひに風呂の沸いたことを知らせに來る男があつた。七郎左衛門は起ちがけに、その男と壽平次とを見比べながら、

『妻籠の青山さんはもうお忘れになつたかも知れない。』

『へい、手前は主人のお供をいたしまして、木曾のお宅へ一晩泊めて頂いたものでございますよ。』

その男は手をもみ／＼言つた。

夕日は松林の間に滿ちて來た。海も光つた。いづれこの夕燒では翌朝も晴だらう、一同海岸に出て遊ばう、網でも引かせよう。ゆつくり三浦に足を休めて行つて呉れ。そんなことを言つて客をもてなさうとする七郎左衛門が言葉のはしにも古里の人の心が籠つてゐた。まつたく、木曾の山村を開拓した青山家の祖先に取つては、こゝが古里なのだ。裏山の崖の下の方には、岸へ押し寄せ押し寄せする潮が全世界をめぐる生命の脈搏のやうに、間をおいては響き碎けてゐた。半藏も壽平次もその裏山の上の位置から去りかねて、海を望みながら松林の間に立ちつくした。

七

問せ　當時亞米利加とも濠洲をも含めた廣い意味での歐羅巴　支那でもなく朝鮮でもなく印度でもない異國に對する

この國の人の最初の印象は、決して後世から想像するやうな好ましいものではなかつた。

もし當時の所謂黑船、或ひは唐人船が、一本の白旗をこの國の海岸に殘して置いて行くやうな人を乘せて來なかつたならば、もしその黑船が力に訴へても開國を促さうとするやうな人でなしに、眞に平和な好い使節を乘せて來たなら、古來この國に住むものは、寧ろ異邦から渡つて來た人達を征服する民族でもなかつた。むしろそれらの人達を歡んで迎へた筈の歴史をさへ持つてゐた。支那、印度は別としても、この日本に關するかぎり、もし眞に國際間の義務を教へようとして渡來した人があつたなら、歡んでそれを學ばうとした筈に違ひない。又、これほど深刻な國内の動搖と混亂とを經驗せずに濟んだかも知れない。不幸にも、歐羅巴人は世界に向つての土地侵略者として、先づこの島國の人の眼に映つた。人間の組織的な意志の擬人化、人間の合理的な利慾のためにはいかなる自然の原始力をも克服し盡さうといふことを勇猛な目的と決定するもの――それが黑船であつたのだ。

當時この國には、紅毛といふ言葉があり、唐人といふ言葉があつた。當時のそれは割合に輕い意味での異邦人を言つた南國の人といふほどにとどまる一種の可笑味をさへ含んだ言葉でさへある。黑船の載せた外國人があつてこそ、この國に住むものの眼に映つたやうに、決してそれほど未開な野蠻人をば意味しなかつた。ばかりか、この國には室町時代の末つ方以前に、既に歐羅巴人が渡つて來て、二百年も交易を續けてゐたことを忘れてはならない。この來た歐羅巴人の中には南蠻人もあつたが、主として阿蘭陀人であつた。彼等紅毛人は長崎商館の夫々として待遇されたことのあるやうな人はあつてはなかつたらしい。彼等がこの國に來て求めたものは利得で、僅

額の小判十五萬兩ではきくまいといふ。諸種の毛織物、器械、精巧な時計、びいどろ、ぎやまん、武器、その他、天然及び人工に係る珍品を歐羅巴からも亞米利加からも東印度地方からも輸入して來て、この國の人に取り入るためにはいかなる機會をも見逃さなかつたのが彼等だ。自由な貿易商としてよりも役人の奴隷役ひに甘んじたのが彼等だ。港の遊女でも差向ければ、異人はどうにでもなる、さういふ考へを役人に抱かせたのも、又、その先例を開かせたのも彼等だ。

この阿蘭陀人が先づ日本を世界に吹聽した。事實、阿蘭陀人はこの國に向つても、歐羅巴の紹介者であり、通譯官であり、歐羅巴人同志としての激しい競走者でもあつた。亞米利加のペリイが持參した國書にすら、一通の蘭譯を添へて來たくらゐだ。この國の最初の外交談判もおもに蘭語によつてなされた。すべてはこの通り阿蘭陀人を通し、阿蘭陀の言葉を通してゞあつて、直接に亞米利加人と會話を交へ得るものはなかつたのである。

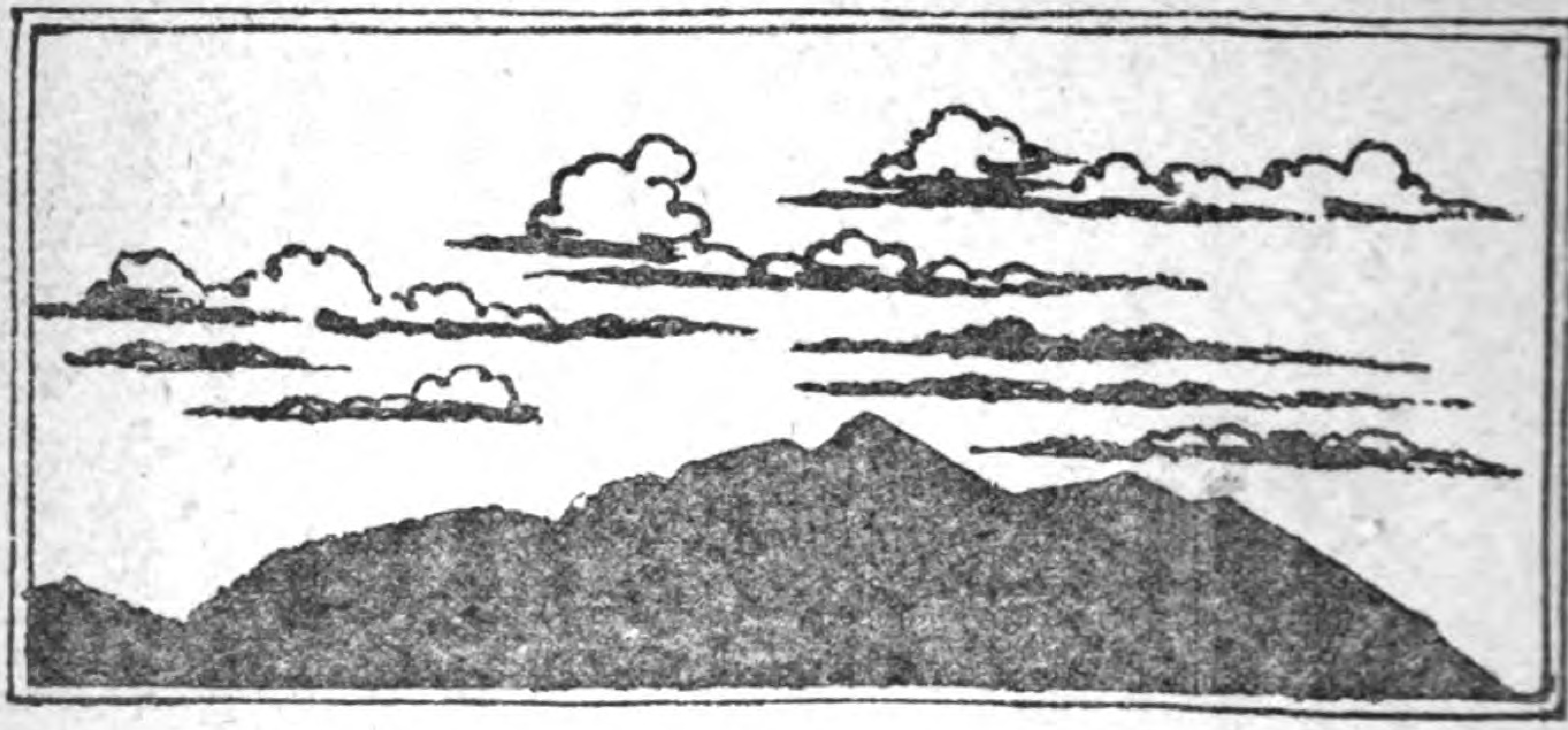
この言葉の不通だ。まして東西道德の標準の相違だ。どうして先方の話すこともよく解らないものが、亞米利加人、露西亞人、英吉利人と阿蘭陀人とを區別し得られよう。長崎に、浦賀に、下田に、續々到着する新しい外國人が、これまでの阿蘭陀人の執つた態度をかなぐり捨てようとは、どうして知らう。全く對等の位置に立つて、一國を代表する使節の威儀を損することなしに、重い使命を果しに來たとは、どうして知らう。この國のものは、歐羅巴そのものを靜かによく見得るやうな先づ最初の機會を失つた。迫り來るものは、誠意のほども測りがたい全くの未知數であつた。求めらるゝものは幾世紀かゝつて積み重ね積み重ねして來たこの國の文化ではなくて、この島に産する硫黄、樟腦、生糸、それから金銀の類なぞがその最初の主なる目的物であつたのだ。

十一月下旬のはじめには、半藏等は二日ほど逗留した公郷村をも辭し、山上の家族にも別れを告げ、七郎左衛門から記念として贈られた古刀や光琳の軸なぞをそれ〲旅の荷物に納めて、故郷の山へ向はうとする人達であつた。おそらく今度の歸り途には、國を出て二度目に見る陰暦十五夜の月も照らさう。その旅の心は、熱い寂しい前途の思ひと一緒にな

て、若い半蔵の胸にまじり合つた。別れ際に、七郎左衛門は街道から海の見えるところまで送つて來て、下田の方の空を半蔵に指して見せた。最早異國の人は相本の板畫などで見るやうな、そんな遠いところにある人達ばかりではなかつた。遠く相模灘をへだてた下田の港の方には、最初の亞米利加領事ハリス、その書記ヒュウスケンが相携へて既に踏みた、陸に上り、玉泉寺を假の領事館として、赤と白と青とで染めた星條旗を高くそこに掲げてゐたのである。

（第一章をはり。次回四月號に）

附記――この作、年四回の發表方法を選ぶことにした。一氣に讀まれるといふ讀者もあるが、部分々々でもいくらか纏まつたところまで纏めたものを發表した方がよくはないかと思はれるし、それが細部の調べ物にも助けとなつて自分の[illegible]に集まつて來る稿を三月事を片付けながらの執筆であるし、今の自分には一ト月も續けて出し切れない。それを四回ぐらゐに分けて一回づつ書くやうに取り計ることにした。隔月にも書けないが一ト月目づつ取りかかることが望みである。新年は例によれば一月、四月、七月、十月に連載の豫定。



ある日本宿

正宗白鳥

四晩ぶつ續けて汽車の寢臺で夜を過した私達夫妻は、身體も心持も可成りに疲勞してゐた。車窓の外は、果てしのない荒野で、山も樹木も見えなかつた。車の内には、白人の乘客と黑人のボーイのほかに、黄色の東洋人は我々二人きりであつた。一月半ばかり、米國西部のカリフォルニアをうろついてゐた間は、桑港でゝも、ロスアンゼルスでゝも、あるひは、南端の小都會サンデゴのやうな所でさへ、日本人に接觸することは容易であつて、此方から求めなくつても、いろ／＼な在米同胞が我々を歡待して呉れたのであつたが、これから後は、次第に日本人の仲間を遠ざかつて行く譯になつてゐた。ロスアンゼルスを立つ時、停車場まで見送つて來て呉れた數人の知人のうちのある夫人は、手製の日本料理の折詰を、私の妻に渡して、「これを召上つたら、日本の食物に未練をお殘しにならないで、こちらの食物にお馴れ

に[illegible]なかつた。私達は、[illegible]下の方の町[illegible]、[illegible]人つてゐる、上官の[illegible]打ち[illegible]、料理をしていて、吹きまくる[illegible]、郊外の野原へ撤退した。汽車の[illegible]ほうそくもないし、二度々々食堂へ行くは煩しくもあり不経済でもあつたので、なるべく小さな町に汽車が停つた時には、私は、停車場近くの食堂へ出かけて、林檎やバナナ、サンドヰッチなどを買つて来た。ある[illegible]間から、[illegible]としての[illegible]時間のウヰスキーを一瓶[illegible]てゐた。私は二人で寂しい酒は、[illegible]飲み得ないので、[illegible]にされてしまつた。[illegible]

る高野の果には、夕陽を反射した雲が燃えるやうに輝いてゐた。冴えない[illegible]の[illegible]ない大空に[illegible]してゐた。

合衆国中部の大部分であるシカゴ、汽車はもう[illegible]ニューヨークへ向ふ[illegible]てゐたが、それ等の大都市についても、私達は満足な予備知識を有つてゐないので、限界のない不安に襲はれることもあつた。カリホルニア附近の日本人のことは、南部中部の興味ある[illegible]旅することもあつたが、ニューヨーク人たちのいふ所では、西部やロスアンゼルスが[illegible]大きくしたやはり町である。東方よりも欲望が多くつて、物価が高いだけの相違があるんです。ただから、あなた方は西部地方を通つてゐるらしかつて、四日間にも汽車に乗つてゐたやうだ[illegible]、ある自分は私達に[illegible]した[illegible]ンルは又[illegible]日の目を見ないやうな不経済な[illegible]ホテルドアッツの[illegible]遠くて外へ出てはいけなかつた。私達は[illegible]、[illegible]全[illegible]時には、[illegible]間でも、自[illegible]中に[illegible]ある[illegible]世界の[illegible]?[illegible]、[illegible]中に[illegible]た。私は[illegible]現に、この大[illegible]、[illegible]、[illegible]日[illegible]つて[illegible]、[illegible]シカゴの数千人の[illegible]、不[illegible]で、[illegible]つ[illegible]てゐた

[illegible]、[illegible]時に

[illegible]、[illegible]て、[illegible]の中では、[illegible]

してゐるらしかつた。九州の青年が大阪や東京にあこがれるのと同じ道理であつた。それに、桑港上陸の際に、シカゴから送られた二通の手紙を私は郵船會社から受取つてゐた。その一は、一面識のある横崎といふ人の寄越したもので、何れの時刻を電報で知らせてくれたら停車場へ出迎へよう宿屋の周旋もしよう。……此方のオペラは一月十九日で終ることになつてゐるから、それまでに來た方がよからう」と書いてあつた。他の一つは未知の人からので、シカゴは、米國文學の中心地で、種類のちがつたいろ〳〵な文學者が住んでゐるから、君をそれ等の人々に紹介してもいゝ、といふやうなことが書かれてあつた。私は、横崎の手紙だけは、鞄に收めてゐたが、他の一通は、受取つた時に走り讀みしたゞけで、何處かへ紛失させてゐた。好意のある未知の人の姓名をも明かに記憶に殘してはゐなかつた。

成るべく人のお世話にならぬやうにと心掛けてゐた私は、横崎に電報を打つたりなんかしなかつた。會へたら會つてもいゝくらゐに思つてゐた。そして、ホテルは、シカゴ第一と云はれてゐるブラックストンを自分でひそかに選んでゐた。

汽車は朝の九時頃にシカゴに着いた。薄暗い重つ苦しい雜踏した停車場の中に身を置いた時には、早くも、西部地方でも感ぜられなかつた壓迫を覺えた。直行列車の乘客は、無料の乘合自動車で市中へ送り出されるといふことだつたので、私達は、自動車の戸を開けて現れたホテルのボーイに鞄を持たせて、玄關へ驅込んで、帳場の前に立つた。

私達は行先を運轉手に告げてそれに乘つたが、ホテル・ブラックストーンは、停車場の近所に控えてゐた。

「我々は、二つの寢臺のある靜かな部屋を要す」と、例の直譯的英語で云ふと、

「あなたは、部屋をお申込みになつてゐるのですか」と、一人の事務員が忙しく訊返した。

「ノー」

「今日はすべての部屋が豫約されてゐるのです。客部屋は一つもありません」

私は當惑した。朝から全部塞がつてゐる筈はないと思ひながら、押問答をする氣力はなかつた。

「では、この近所にいゝホテルはないだらうか。」私達は長旅に疲れてゐるまゝたふと、

この町はメンの大谷があつて、どのホテルも立派であるさうだが、私の方でいゝホテルへ御紹介しようと云つて、[illegible]

目は番附にドレーキといふホテルの名が書いて、私に渡した。

「これは一流のホテルであるか」

「然り、このホテルと同じ系統の最上のホテルです」

「おや、そこへ案内して下さい」

「宜しい」

事務長が側のボーイに目顔で知らせると、ボーイは敏捷に私達の鞄を提げて、戸外へ出て自動車を呼んだ。戸外の寒さは言語に絶してゐた。空は晴朗として、四个個の氷に化してゐるやうだつた。常に南国と云はれるカリフォルニアの砂地で、毎日のやうに暖かな日光が溢れてゐた私達は、気候の激変に打挫かれさうであつた。かういふ寒空に命を断たれるのは、旅人として如何ばかりか佗しいことであらうかと、私は寒気と同時に自分達の身の上を考へたが、しかし、さほど淋しがるには當らなかつた。ドレーキ・ホテルへは、自動車で僅か五分くらゐを費しただけであつた。恐しく寒かつたさつきのホテルよりも、割合に明るくつて、こゝの方が気に入つた。案内された部屋へ入つて、温かいコーヒーを一杯飲んで、快いクッションに腰をおろし、暫く休んでゐると、段々と気力が回復した。室内は温か〳〵と温かいし、外界の寒さは遮られてゐるし、アメリカのホテルのいゝ設備してゐることを、この時私は痛切に感じさせられた。

かういふいゝ部屋を得たとなると、今直ぐに寝台に横たはつて休息する必要はなかつたので、私は、ホテルの實費できめ[illegible]の案内書を求めて、まづ、讀んで見たりしてゐる[illegible]ふ、[illegible]鞄から手紙を[illegible]使用した[illegible]一緒に渡す[illegible][illegible]私[illegible]何人かの私の

ず、容易なことではあるまいと思はれた。

でも、試みにボーイに向つて、封筒を見せて「このＮＩといふ町はどの邊にあるか」と訊くと、ボーイは一瞥して、

「ＮＩは直ぐ近くです。十分以内で歩いて行けます」

横崎はそんな近い所にゐるのか。どうせ場末町に住んでゐるのであらうと像想してゐたのに、大都市の中心らしいこのあたりにゐるのかと、私は意外に感じるとともに、今直ぐに訪ねて行つて見ようと思立つた。

で、出來るだけ厚着をして、外套の襟を立て、、酷寒の街路へ踏出した。一月の下旬で、日本でも大寒の季節に當つてゐるのであるが、私は生來知らなかつた寒地の光景に、今日はじめて身を置いたのであつた。道路はすべてでこぼこに氷つて、家の前の人道には、砂がまかれてあつた。これは靴の辷らないための用意であつたが、不馴れな私は、氷辷りをやつてゐるやうで危なかしかつた。全身の注意を足の先に集めて、一歩々々踏締めて進んだが、どうかすると尻餅をつかなければならなかつた。耳朶や鼻の先は感覺を失つた。

自動車の頻繁に通つてゐる大通りを横切るには、餘程の警戒を要するので、道の角のあるビルヂングの軒下で風を避けながら、隙間を狙つてゐたが、そこへ、意外にも、日本人の顔がヌッと現はれた。その顔も私を見つけると「オー」と叫んで足を留めた。…萎びた頬に老ひの現はれてゐる體格だけガッシリした男であつた。

「あなたは横崎勤一といふ人を御存じぢやありませんか」と、私が訊くと。

「いや、知らない。僕は日本人とは殆んど交際をしないからね。……君は、いつアメリカへ來ましたか？」

「先月のはじめに桑港に着いて、今日此處へ來たのです」

「僕は二十年もこのシカゴにゐるんだが、この頃の日本の樣子はどんな風ですか」

「さうですね……」

「僕は、××といふこの土地の新聞の探訪記者をしてゐる。一度訪ねて來たまへ。大きな新聞だ。」

さう云つて、彼は私に名刺を渡した。Ｎ――といふ町の方向を細かに私に敎へもした。

私は、この底の知れないやうな大都會で、西洋新聞の探訪記者が勤めてゐるその男の生活を小説的に考へた。そこの一隅の漠然たる人間の中で、日の輝く限り遠く見渡してゐると、灰色の大地の間に、頑強な建物が次ぎから次ぎへと、根深く据ゑられてゐて、そのあちらこちらには、人間ならぬ化物が住んでゐるやうにも空想された。明るい温かい西部の都會はカラカラと乾いて、雑踏で、底がないやうだつたので、私は、今日はじめて西洋の本當の大都會を目睹した氣がした。ホールドアップの本場らしい街景に刺戟はしなかつた。強盗殺人陰謀の巣窟として一見すれば見られないこともなかつた。

Ｎ――町へ行つても、機綸の居所が果して分るか知らんと、私は氣遣ひながら、電車に市中見物のつもりでそちらへ向つた。十分の路程に數十分を費して、やうやく目ざした町に辿りついたが、町に入ると、家の番地は、完全に順序が立つてゐるので、同じ人の居所は直ぐ目前にふれた。いささかの思ひなしか、何處でも住んでゐるやうに思はれる町の氣味の悪い家であつたけれども、私が扉を開けて家の中へ入ると、いゝ氣持に温かつた。狭い廊下は、ごた/\と物で置かれた事務室みたいで、この家は何をする家やら、私には見當がつかなかつた。その部屋のカウンターの前に禿頭男が立つてゐたので、私はその側へ行つて立つた。私の方へふり向きもしないさきに、その男は、ニコ/\頷いた。

「ミスター機綸の部屋は、階の突當りだ」と敎へてくれた。

私は暗い陰氣な狭い階段を上つて行つた。それは、この國へ來て以來はじめて上るやうな階段で、ミスフルニツクの住居の隣室が開かれた。廊下を下つてゐると、向ひの部屋の扉が開いて出て來た質素な裝の若い女が、私の方を見送つて、隣りの部屋へ入つて行つた。私は、キューキニーと云つて、直ぐ前の戸をノックした。すると思ひがけず、内から開いて、人の好きさうな男が出て來ながら、私を押しのけるやうに丁寧に迎へた。

で、私は、遠慮しないで戸を押して入つて行つた。見ると、横崎らしい男、寢床の端に掛けてゐて、訝しさうに私を見上げた。寢床の上には紐を渡して、七八本のネクタイが行儀よくぶら下つてゐた。横崎は、一目で私の顔が分つたらしく、

「こんなところをお目に掛けて」と苦笑しながら、寢床から起上つて、

「いついらつしやいました」

「今着いたのです。ホテルを極めると、直ぐに出て來ました」

「停車場へお出迎へするんでしたのに。……この部屋へ入つて來た日本人は、あなたがはじめてなんですよ」

横崎は侵入者をいやがつてゐるらしいので、

「女中が、開けて入れと云つたものだから」と、私が言譯をすると、

「泥棒に取られる物もないし、訪問者もありませんから、戸に鍵を掛けたことはないんですよ。」

「ホールドアップの本場にでも、こんな氣樂な人もゐるんだな」と、私は心の中で思つた。

「ホテルはどちらです？」

「ドレーキホテル」

「ドレーキは品のいゝホテルですよ。」

「君が用事がなければ、僕のホテルに行きませんか」

「えゝ、伺ひませう。ある所へ勤めてゐるんですが、日本から友人が來たと電話で知らせとけば、一日くらゐ休んだつてかまひません。……今ちよつと湯に入つて來ますから、そこに腰を掛けてゐて下さい。こんな汚い安下宿ですが、風呂にもいつでも入れるやうにしてゐます」

横崎はさう云ひながら、寢衣のまゝ、隣りの浴室へ行つた。私は、堅い椅子に腰をおろして、晝間でも夕暮のやうに思

これる[illegible]と宇門か、概略、あつて見える位[illegible]する人[illegible]

ゐ[illegible]は、東京の西北[illegible]、[illegible]全[illegible]、[illegible]防[illegible]論

[illegible]れで、除[illegible]部分があつて、[illegible]れて、自由に[illegible]出来るやうになつてゐるのは、日本[illegible]

富士[illegible]の[illegible]ことである[illegible]、分[illegible]合せの[illegible]

「[illegible]お待[illegible]した」

彼[illegible]、[illegible]の[illegible]一部[illegible]、[illegible]てゐる日で私は[illegible]、[illegible]

で私[illegible]るのが[illegible]てゐるらしく、[illegible]で、[illegible]のホテルに[illegible]

の二階[illegible]

彼れは、[illegible]に[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]

ある。彼れは[illegible]

一月[illegible]

[illegible]

「こん[illegible]ないか、[illegible]住事があるんですか」

「[illegible]、[illegible]は、[illegible]

一[illegible]ね

「日本人[illegible]

[illegible]、[illegible]日本人は[illegible]」

一般は日本人、[illegible]、[illegible]は、[illegible]、[illegible]れるので、その[illegible]によつて、外国に住む日本

人が他の外國在住の日本人を侮蔑してゐるらしいことが推察される。日本人同士で侮蔑し合つてゐるくらゐだから、白人が黄色のジャパニースを侮蔑するのは當然であらうと、私は人間の心理について考へた。

「こんな他郷に、五年も一人で暮してゐちや、心細くはありませんか」

「馴れゝばさうでもありません。しかし、私はいつ何處でぶつ倒れて死ぬかも知れませんから、その時の目じるしに、この髯を生やしてゐるんです」

横崎の細い顔には、うすら髯がしよぼ〳〵と生へてゐた。

「こんな髯のある日本人は私一人でせうからねー」と、彼れは淋しく笑つた。

あるカッフェーの前で、彼れは足を留めて、「私は毎朝こゝでコーヒーを一杯飲むことにしてゐますから、突合つて下さい」と云つて、私を誘つた。朝と云つても、正午に近かつた。

二人は一杯のにがいコーヒーを啜りながら、知人の噂をしたり、日本と米國との生活の相違を話したりした。横崎は、僅かに口を糊して孤獨の生活に耐へながら、ある學問を研究してその結果を英文で書いてゐるのであつた。

「會社で不斷は、獨逸文や佛文の校正も手傳つてゐます」

「僕も外國へ來てからは、語學の必要を痛切に感じてゐますよ」

「私は、三月もかゝつたら、歐洲語の一つを手に入れることが出來ると確信してゐます」

「シカゴにゐる日本人で學問に關係した人間も、多少はゐるのでせうか」

「知識階級の人はあまりゐませんね。大抵は勞働者です」

「僕に手紙を寄越して、シカゴは米國文學の中心だから紹介しようと云つた人がありますが、僕はその手紙を無くしました。あなたは、その人が誰れだか、心當りはありませんか」

ございます、ボカンとな……シカゴには、日本料理の部屋のうちに、[illegible]

た人間が自由に活躍してゐますが、しかし、ここふうの中心にまるではどんなものですか

暫くして、我々は、そのカッフエーを出て、私達のホテルへ行った。[illegible]に入って[illegible]に休息してゐた

西洋料理のまづいことも、我々の話題となったが、横崎は、この上町にも、[illegible]日本館があるから、そこへ案内しようと云った。……これから、市中見物がてら、大通りを歩いて、[illegible]のサンドキッチで午後を[illegible]して、博物館でも見て、オペラの切符を買って、それから日本館へ行くことに、今日の我々の行動は確定された。

そこで、横崎は、山村といふ日本館へ電話を掛けて、晩餐の[illegible]、[illegible]ゐるらしい。しか分らないとか、料理は何も出来ないと云ってゐたやうであった。で、横崎は、もう一つの日本館へ電話を掛けたが、そこの返事も思はしくなかった。山村さんは宿屋ですもの[illegible]で、一人の客の食事も[illegible]ことはありませんと云って、他の宿へ押付けたさうな口吻であった。[illegible]日本の[illegible]で行くと云ったが、何處[illegible]見たさうなものだと、私は、ロスアンゼルスあたりのものでなしに[illegible]に思った。[illegible]を食ってゐるのであらうかといふ、わざわざそんな日本館へ押掛けて行って食事をする[illegible]思った。しかし、横崎は案外本気であった。山村といふ家へは、晩になると、いろいろな日本人が[illegible]から、一度行って見ないと云って、殊にの料理が喰へようとしなかった。

間もなく、私達は、横崎に導かれて宿を出て、シカゴの目貫の大通りへ向った。[illegible]ブロードウエー、ロスアンゼルスのブロードウエー、サンデーゴのブロードウエー、米国内部の都会の大通りは、[illegible]歩いて知ってゐたが、これ等とこれとは、同じ大通りでも、[illegible]あった。[illegible]しい。ガッシリした大建築が[illegible]んでゐるのだ。殊すに[illegible]ついてゐるので、ロスアンゼルスの[illegible]類[illegible]建築とも[illegible]の

土地に、自然に對抗して毅然とした人間の住所を建設した人間の負けじ魂を私は、このブロードウエーで目前に見るやうな氣がした。へなへなした物はどちらにも存在しなかった。人間だってへなへなした者は、かういふ土地では生存を續けられさうではなかった。さう思って見ると、横崎の體力を缺いた華奢な姿がいたいたしく思はれた。

「もう少しです」と、案内者に勵まされて、私達は疲れた足を進めて、やうやくサンドキッチ店へ着いた。店は混雜してゐて、座席は一つも空いてゐなかった。しかし、折角苦勞をして來たのだから、立ってでも食べることにしたが、給仕女はじめ、お客までも私達の方へ目を注いだ。我々が極まりを悪がってゐるとでも思ったのか、横崎は、

「私が大髭を生やしてゐるから、珍らしがって見るんです」と、慰め顔で云ったが、無論さうではなかった。

名代の店ほどあって、そこのサンドキッチは可成りうまかった。私達は空腹だったので、二人前平げた。甲斐々々しく働いてゐる色の白い目の碧く澄んだ生氣のあふれてゐる給仕女の美しさに、妻は驚歎した。職業婦人らしい女が簡單な午餐を食べに續々と入って來たが、どれも皆擧動がきびきびしてゐた。

妻は、踵を靴で擦りむいて歩行に惱んでゐたが、横崎は「博物館は直ぐそこです」と云って、私達を引張って行った。

一週一度の有料日であるためか、あるひは、この土地の人間は美術なんかに興味を有ってゐないためか、館内に人影は稀であった。たゞ、歐洲歸りらしい日本人夫婦に行會ったのは珍らしかった。レンブランドをはじめ、歐洲の大美術家の名畫に、私ははじめて接したのであったが、どうせ本場へ行って見られるのだからと思って、素通りした。……この人口三百萬の大都會で、遊覽客を引きつける名所と云っては、この博物館と、マーシャルフィルドといふ米國第一の百貨店と、オードトリアムといふヲペラ劇場と、それから、屠殺場（ストックヤード）との四つに過ぎなかった。

「オードトリアムは、二三日うちに閉場して、それから改築に取りかゝるのです。費用が千六百萬ドルださうです。最終興行で、切符は無論賣切れてゐるでせうが、私の佛蘭西語の先生が、切符を持ってゐるでせうから、よく頼んで融通して貰ひ

ませう」

横崎は言ふので、博物館を出ると、また私達が歩いて、ブーラ劇場と同じ構内の外国の休憩所へ行った。そしてやうやく手に入れた二枚の入場券は四日目の夜のであった。また時鐘は十時過ぎたので、横崎のための案内で、私達は捜れた足を引摺って、また大通へ出で、シカゴ劇場へ入った。巨大な劇場であったが、客種の粗末だといふ有様であった。そこで、蒸暑い映畫の美人の裸体を見て、日を暮らして、戸外へ出ると、私達はへと〳〵に疲れてゐた。

翌晩の八時出した。今度は宿の車に乗ったが、日本宿の在所は脇街の場末であるらしく、随分の時間がかゝった。

[illegible]に於ける日本宿の見すぼらしさは、西部旅行中によく知ってゐるので、今更らしい感慨を催しはしなかったが、私達は日本の誇るべき、渡米以来、あちらこちらで、いやでも目の先へつきつけられるやうな気がした。見苦しいことはの一つ、それは、周圍に比較して云ふことなので、山村屋だって、中央の筋端にホテルなどとは格段にちがってゐる。

シカゴの日本人のうちにも、數十萬ドルの資産を有ってゐる者が二人ありますよ、と、横崎は云ってゐた。

私達は、山村屋の隣りの間口の広いサロンへ入った。その狭い店間には、十数人の日本人が、日本語で賑やかに話してゐた。禁酒の禁は名目に過ぎないのであるが、私達が入って行くと、話の腰が折られたやうに、皆が口を噤んだやうになった。横崎は私達を皆んなに紹介したが、親しみをもって私達の方へ近づく人はなかった。ロスアンゼルスあたりの歓迎振りと違ってゐるので、私は居心地が悪かった。何時までたっても、一人二人と部屋を去って、閑散になったための周圍の人に向きなくなった。横崎は、宿の人に何ふたか奥の部屋へ行って、容易に戻って来なかった。私は、サロンにゐた日本人中の誰一人も云ふことも少く、遂には他の部屋へ行った。私は所在ない思ひをして、こんな家へ来るのぢゃなかったと後悔してゐた。が、暫くして、商用が済んだらしく、横崎が帳場へ現はれて、私の側の椅子に腰を下ろした。日本の宿屋らしい一ゐるころの首領は、私に向って、郷里を聞いた。首領の名は中村と云った。

奥からの知らせによつて、私達は食堂へ行つたが、そこには、日本の學校の寄宿舎の食堂のやうな長いテーブルが置かれて、大きな飯櫃と、野菜の煮付を盛つた大皿などが載せられてあつた。宿泊客や、食事だけの來客が、兩側にずらりと並んで、手盛りで食事をするのであつた。主婦は、在米日本婦人の多くが田舎びてゐるのと違つて、灰汁抜けがしてゐて、口も輕かつたので、私達の心もいくらか寛いだが、お客の多くは顔付も話し振りも汚なかつた。シカゴの町のやうに重苦しくくすぶつてゐた。さつさと食事を済ませた客の引揚げたあと、主婦は私達を捉へて頻りに東京の噂を聞きたがつた。東京の女の風俗、三越や白木の變遷、帝劇や歌舞伎の光景は、日本で田舎落ちをした東京生れの婦人と同様に、文明國の大都會に來てゐる関東生れのこの主婦の心を惹くのであつた。

「芝居だつて百貨店だつて、日本はアメリカに比べると、そりや貧弱なものですよ」

「でも、よぼ〳〵にならないうちに、日本へ歸つて、さんざ見たいものを見て、食べたいものも食べたいと思ひますよ。このまゝ死ぬるなら死にきれませんわ」

「いつから此方へゐらつしやいます？」

「私ども、前の天子様の御大典のお祭さへ拝観しなかつたんですもの。日本の水の味さへ忘れましたよ」

後に立つてシガーの煙を吹いてゐた筋骨の逞ましい主人は、「奥さん、日本のいゝことをあんまりお話にならないやうにして下さい」

「なぜ、いけませんの？」

「此女が里心を起していけません」主人は厳つい目をして云つて、「私は、日本のやうな天災の多い國はきらひですよ」

座はそれで白けた。

私達は、疲れてもゐたので、いゝ加減で切上げて暇を告げたが、食卓を共にした人のなかには、自分の自動車で、ホテル

まう私達の前へ現れた日は、翌日、その日の中で、公園をドライブして、[illegible]

来した。ホテルの入口で桟橋と同日の間行を約して帰つた。

外国に於ける日本人の生活が、水に浮んだ油のやうに融和したいことは、西部到る処十分によく目につくのであつたが、此度でもそれが皆なに感得された訳ではない、日陰の生活の一片が私の目に映つた。

ホテルに帰つて食堂を覗くと、食堂前に[illegible]の囲く桟光が輝いて、タキシードの食後[illegible]が行はれ[illegible]、[illegible]についてゐた。耐寒の季節にまで、初夏の空気までに室内を温めて、それを[illegible]で冷やして、アイスクリームを飲んだり氷水を飲んだりするのが、米国人の性癖のである。さういふ事やら食堂を覗いて、ふつ／＼あの西瓜は日本から[illegible]

[illegible]

「[illegible]聞きましたが、[illegible]、[illegible]を待つてゐました」

[illegible]

「えゝ、日本飯が食べたくなると、時々行きますよ。あしこの夫婦はちよつと面白いところがあります」

「あしこの主人は永住でもしさうな風ですね」

「さうでもないんでせうが、……あの人は、ある富豪の家に長い間雇はれてるんですが、その富豪が死ぬると、何萬ドルか、遺産が貰へる筈になつてるので、それを當てにして待つてるんです」

「その富豪は死にかゝつてるんですか」

「いや、さうでもなさゝうです」

「あしこに集まる日本人は、どういふ種類の人でせう。横崎君やあなたのやうな知識階級の人は、外にはゐないらしいですね」

「横崎さんは、風變りな面白い人ですが、先頃ちよつとしたトラブルを起したのです。それで日本人仲間から敬遠されてゐるんですよ」

早瀬は、それを話したさに、わざ〳〵私を訪ねて來たのではないかと邪推せられるほどに息込んで云つて、「あなたはそれをお感じになりませんでしたか」

「さう云へば、昨夕我々が入つて行つた時に、皆んなの態度がそつ氣なかつたやうでしたよ」

「此方でしくじると、懸り合ひをつけられないやうに、傍の者がみんな警戒するんです」

「他郷に來てゐて、日本人に疎外されるやうになつちや心細いですね」

「どうせ外國に來てゐて、几帳面な生活はしてゐられませんよ。……大抵の者が勝負事に手を出します。何ヶ月か方々へ出掛けて稼ぎ溜めて來ては、賭博をやります。持つてる者を取られてしまふのはお極りなので、一文なしになるとまた何處かへ稼ぎに行つて、相當の金を手に入れる。それを持つてきた取られにやつて來る。さういふことを繰返し〳〵して四

[illegible]

ワシントン公園やジャクソン公園を一巡して、初夏の新緑の頃の風致を、私達は想像した。シカゴ大學の校舎も大學のなかにくつきりと強い線で描かれてゐた。

「シカゴの氣風が殺伐なのは、屠殺場があるためなのです」

「時々市中の空氣の臭いことがあるが、あれは屠殺場から來る臭ひなんだね」

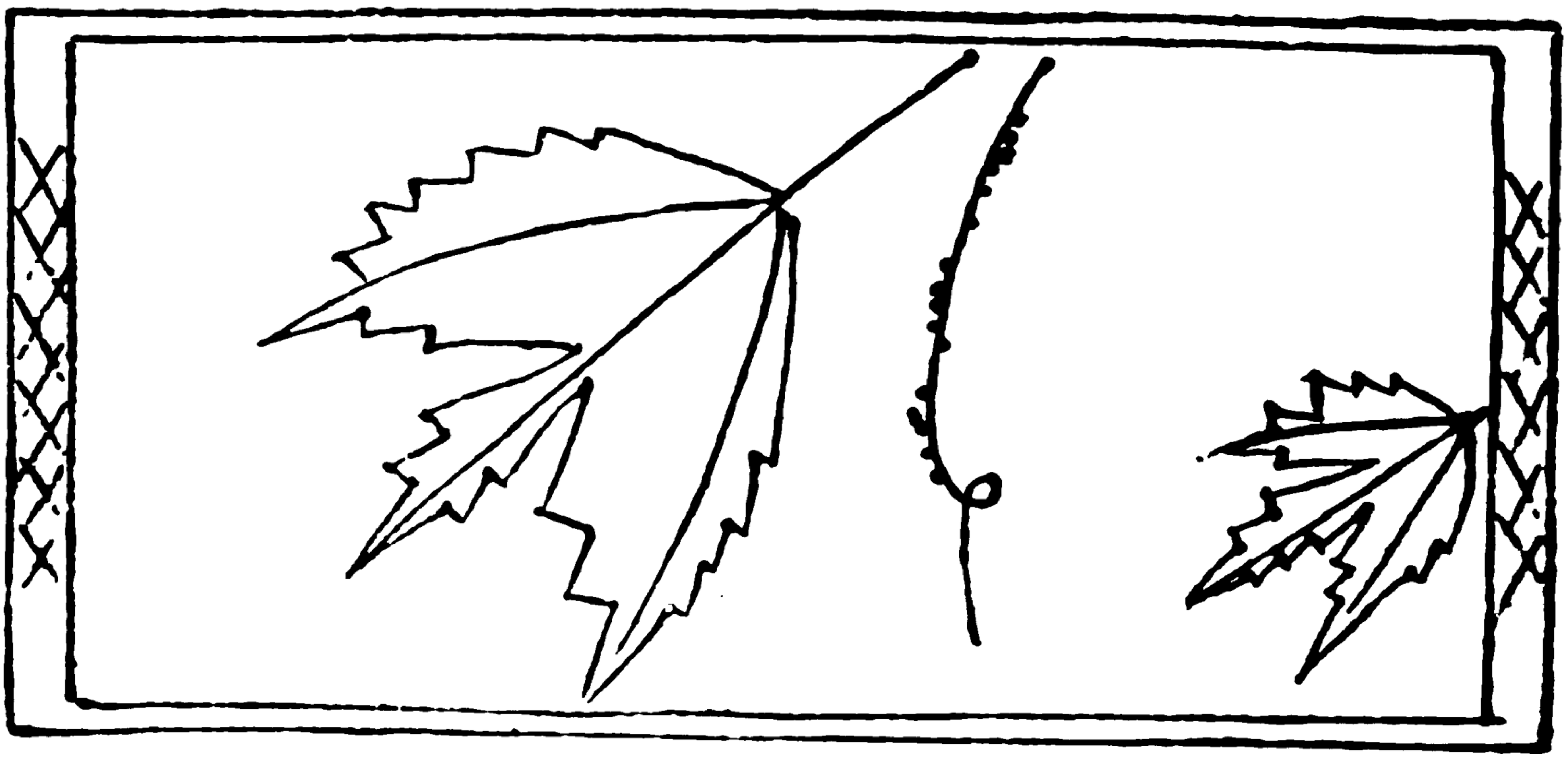
午後の縱覽許可の時間の來るのを待つて出掛ける筈になつてゐるストックヤードの噂が自動車のなかではじまつた。

屠殺場、百貨店、オペラ劇場。日本から渡來して、まだ旅馴れない私の目には、どれも／＼巨大で、小人島から大人島へ渡つたガリヴーの物語が思出されるのであつた。そして、たゞの漫遊客である私達にも、大海の一粟の如き在外日本人の生活が、とぎれ／＼に映つて行くのは面白かつた。ある時には、仕組まないのに自から筋が運ばれるのであつた。――豪奢をほこつた見物人で滿ちてゐるその夜のオペラ劇場で、私達は、近所の椅子に日本人夫妻のゐるのを見つけた。「あれは支那人かも知れない」と、私達は噂してゐた。ところが、シカゴを立つて、ナイヤガラへ寄つて、ニューヨークに着いてから間もなく、ある夜、領事館へ招かれて行つた時、相客の一人に、何處かで見たやうな顏があつたので、不思議に思つたが、その人は、シカゴの領事のK氏であつた。オペラで見た日本人は、このK氏であつたのだ。話してゐるうちに、氏は、同じ領事館にゐるI氏が、私の到着を待つてゐたことを話して、「I君は失望したでせう」と云つた。その時、私は何氣なく聞流したのであつたが、何日か經つて、日本人倶樂部へ行つた時、偶然、ニューヨーク發行の日本字新聞を見ると、そのなかに、「シカゴ通信」として、I氏の口から話されたらしい私に關する記事が出てゐた。

「文學者といふものは禮を知らぬものである。此方から好意を寄せた手紙を出したのに、返事も寄越さない。シカゴへ來て、領事館と目と鼻の間のドレーキホテルに泊つてゐながら、領事館へ顏出しをしないばかりでなく、來着の通知さへし

ない。岡本の田舎で世界旅行をするのもいいが、聞いたこともない田舎者であるから、といふ意味のことが長々と書かれてあつた。あとでは、悉皆に紛失した所持品は見付けてあつたのだと、私は忘れて心に掛つてゐた疑問を明かにした。

シカゴの領事館は、私は外形だけでも知つてゐた。ある人に連れられてシカゴの町を宛てもなく歩いてゐた時、彼れは、これがトリビユーンといふシカゴの大新聞社だと云つて足を留めて、この建物の中に、日本の領事館があるのです。トリビユーンは猛烈な排日派なんですが、その排日派の新聞社の建物へ、領事館がなへ間借したのです。親交を取るためなんでせうが、さういふ見え透いた小細工は、アメリカ人には喜ばれないのですと云つた。そして、彼れは、門へ来てゐながら、私を領事館へ連れて行かうとはしなかつた。



轉戰十日間

小島勗

南は海、三方は山に圍まれた下縣の一端――H街である。

雨だ。街は煙つてゐる。しかし橋や川や警察署の火の見櫓などは朧乎見えてゐる。街の向は海だ。水平線は少しも見えない。唯、海岸線と街の右側に突出てゐる岬だけが微かに解る。

藤岡はそこまで來て街を一瞥した。脱走して來たのである。街から約八丁。藤岡は追跡されてゐるのである。

彼はそこ迄無我夢中で逃れて來た。右側は山の斷崖。左は麥畑。その中を細い路が通つてゐる。彼はそこで小さい物置小屋を見つけた。そして、その斷崖とすれすれになつてゐる物置小屋の軒下に身を潜めた。

しかし「これからどうしたらいゝか？　何處へ脱走したらいゝか？」危險は迫つ

てゐるのである。

昨夜　勝岡はくゝ選擧演説のために街頭宣傳に立つた。無論立つ心算はなかつたのである。彼は數ヶ月前に出獄したばかりで、しかも入獄中に前から悪かつた肺炎を一層悪くしてゐた。で、實は保養旁々勞働組合と農民組合の組織を手傳ふといふ位の程度で、本部の方の仕事も當分解いて貰つてゐたのである。しかし應援演説も斷り、街頭の宣傳も斷はるといふ譯には行かなかつた。凡ゆる人々が動員されてゐたからである。聯合支部からは十二名の闘士が應援に來た。中央からは新の執行委員が來た。街は殺氣立つてゐる。警戒は嚴重であつた。

無論、彼は危險は承知してゐた。彼は數日前から全縣下を通じて一齊に××と檢擧の手が下されてゐるのを知つてゐた。（しかし此處にぐづぐづしてゐれば、自分も危險だと思つてゐた。農民組合の仕事を片づけて置いて一寸此處を立たなければならないと思つてゐた。それに病氣の爲めもある。——死ぬのは早い！今後の闘爭のためだ——一時遁かれるより他に途はない！）彼はさう思つてゐた。そこへ丁度　明日の四時頃　長い間患つてゐた同志の危篤の電報が來た。彼は××から××縣へ遁かれやうと思つてゐたが、危篤の電報を受取つたので、すぐ郷里へ歸り（それから××縣へ行こう）と決心した。昨夜彼は演説會へ迚も出られない事になつた。彼は母親のことが氣に掛かり乍らも（電も何、演説會だけは濟まして立たう）とさう決心して街頭に出たのである。

所がこれが失敗の元であつた！　組合の連中と宣傳に行つて歸つて來ると、宿屋の附近に隠れて待ち構へてゐた私服が不意に二十名ばかり躍り出して來て彼等を取巻いて終つた。勝岡は彼等の姿を見るや否や脱走しやうと思つたが、その時はもう一行は捕まへられてゐた。結局、こゝで彼と山田と小林の三名が檢束された。三名は自動車の中に詰め込まれた。彼は隙を探した。どうしても逃げなければならぬと思つた。しかし隙は無かつた。運轉手の傍に一人、中央に三名、外の兩側

に二人、部合せ名の正服が取り巻いてゐるのである。彼は殊に妥協條件付ならいた因を持つてゐることを思ひ出した。（いけない！）と思つたか、それは素早くクッションの中へ捻ぢ込んで了つた。そして隙があつたら警官共をつき伏せて逃げやうと思つてゐた。が、結局留置場へ叩き込まれたのである。

一體これは演説會の打ち壞しのための檢束であるのか？　それとも今度の暴動の檢舉であるのか？、若し後者だとすれば――！（兎に角、遁れなければならぬ！）彼は警察署の門をくゞつてからも絶えず注意を怠らなかつた。事務所――小使室――刑事部屋――鐵扉――廊下。何處にも逃げる隙はない。無論留置場の中は絶望であつた。それに廊下には四六時中正服が見張つてゐる！　彼は一晩中考へ明かした。父親の顏、母親の顏、弟の顏が浮んで來る……彼は幾度も便所へ行つた。しかし少しも隙はなかつた。

朝。洗面の時間。彼は洗面の前に便所へ行つた。それから洗面に行つた。「機會」を多く作るためだ。斯うなつたら偶然の機會を覘ふより他にはない！　彼は無謀に近い計畫を實行しやうと思つてゐたのである。

無論便所から脱出る事は絶對に不可能であつた。洗面所の窓も絶望であつた。傍には正服が控へてゐる。出口は何處にもない！　若し脱走口があるとすれば、留置場の出入口になつてゐる廊下の鐵扉以外にはない！　しかもそれには萬に一つの僥倖――偶々開き忘れられてある樣な――を覘ふより外ないのである。朝から三度そこを往復した。そして三度目に機會を掴んだ。廊下の方は洗面でごたごたしてゐた。見張はその方に氣を奪られてゐた。丁度正面の鐵扉が半開きになつてゐた。誰もゐない！　番人は丁度出入口の扉のそばにある携帶品保管室に這入つてゐた。（機會だ！）彼は全身を緊張させた。孰れにしても死を覺悟しなければならぬのである。突嗟に鐵扉の内に辷りこんだ。携帶品保管室は無事に通り過ぎた。抜け道はその携帶品保管室の直ぐ隣にある小使室か事務室かこの二つの外には無い！　小使室に一瞥を與へた。小使がゐる。絶望だ！　もう事務所へ出るより外は無い！　彼は思ひ切つて進んだ

事務室にはＭがゐる。彼はＭへの電話を掛けるか！しかし横断する時、彼は気がついた。彼は遽に自分が何かの様にそこを通り過ぎる事を決心した。其時、見付けた其の辺へ逃亡する機構がある。見付かるな！誰か中に止めて忘れたのだ。恐らくそれが近い。机が並ぶ数歩の間だ。彼は椅子の間を通つて入口から外へ脱出した。

右へ行くか。左へ行くか。彼が路次へ入らなければならぬ！彼は左へ曲つた。事務所へ背を向けて裏の川縁へ出ると、右手にはよく橋がある筈だ。その橋を渡らうと思つてゐたが、川縁まで出た時、橋の向ふ側に交番があることを思ひ出した。左へ折れなければならぬ。彼は交番の前裏の路を曲つて、狭い路を行つた。（可愛い！）交番を一廻りした所にある。焦るな！」彼は自分自身を叱りつけ作の川縁に行止まつてゐる狭い道を進んだ。

大橋を渡る。しかし其の小さい橋の際には交番はない。彼は素早く橋を渡つて裏の通りへ出た。右は街、左へ行くより外はない。彼は左の道を探つた。此の路を真直ぐに行けば街端れへ出る。街を出離れると畑の間を通つて行けば山へ出る。街を離脱するには路次の間を行けば好い。しかし彼は大胆に、その通りを真直ぐに、早足に進んだ。路次をねり歩いてゐて時間を費す余裕がない。警察署内は最早騒ぎ始めてゐるに定まつてゐる。今は迅速に街を離れる必要がある！

彼は右を睨けてゐる心算であつた。しかし物が出ない！疲労してゐる頭は思ふ様に働かぬのだ。早かれ遅かれ、内が落ちてゐるからだ。しかも今彼は此の事を探つてゐない。昨夜は不眠で一夜を過ごしたのだ。焦る。咽喉が渇く。一町が一町に一分が、一時間に感じられる。

自転車が来た。自転車は依然行く。土蔵の前を通つてゐる間が続く。在る。所々に畑がある。彼は何時の間にか町の外れ、町の外へ出て来た。漸くに！それから山へ出る道を一本路が、畑地の中を行く。も…に在り行く。を出外れた。彼はそこで大きく呼吸、畑の中に出た。ほかに水を出して彼はそれを…下を

突込んで兩手で水を掬ひ上げた。無我夢中で飮んだ。（捕つたら捕れ）と云ふ氣持ちと（大阪に　　　　　　冷部にかまへる）と云ふ氣持ちで　　　。そして彼はその路を採つて進んだ。

街端れへ出た。家が疎になつた。農家が見えて來た。田舍道。麥。山道。彼はそこ迄來て初めて雨が降つてゐることに氣付いた。霧雨である。しかし冷たかつた。着物の裾が濡れて脚に捲きついて來る。彼は裾を端折つて歩を緩めて、緩い傾斜を登つた。兎に角、此處まで來れば追跡者は尠くとも二三丁前から解るのである。

しかし、一刻も早く安全な場所を求めなければ——。彼は片側が斷崖になつてゐる山道の曲り角に小さい物置小屋を見つけて、兎に角、一息つくために、その小屋の背後の陰になつてゐる簷下に身を潜めて、はじめてほつとしたのである。

しかし（これからは——？　何處へ——？）兎に角、金を拵へることが必要なのだ。この道を行けば山の中へ這入り込むだけである。しかし、無論、引返す譯には行かない。もう警戒網が張られてゐる！

彼は小一時間も考へ盡くした末、街から約一里半程西北へ入つた高原の部落に農民組合があることを思ひ出して、そこへ行く決心をした。そこの農民組合の結成のことで近々會ふことにもなつてゐたのである。彼は路を左に採つた。そこへ行くにはどうしても街の西裏側へ出なければならぬからである。しかしそこ迄は畠の中を通る路だ。農家が疎にある。桃畑がある。蜜柑畑がある。雨が梨の花を煙らしてゐる……

彼は下駄の歯に膠着く泥濘に足を奪られ乍ら、その畠の中の路を通り、街の西裏側を通り、街から海岸線に沿つて××へ通ずる國道へ出た。丁度そこから七丁程いつた所に休憩所がある。そこから右へ這入る狭い路が村へ通ずる路だ。そこからは人家がない。唯、茶屋さへ注意すればいゝのだ。幸、茶屋には誰もゐない。彼は店の者に氣つかれない様に素早くそこを通りすぎて部落へ出る道に這入つた。

此處まで來れば危險は比較的少ないのである。しかしその代り路は恐い泥濘であつた。路は約七八丁は深い谿だ。それから十二三丁の坂道である。殊にその坂道は、急勾配の黄色の粘土の坂道で、非常な難路であつた。それに雨は着物を通して浸み透つて來る。手や足は冷く痺れて來る。下駄の鼻緒も切れて了つた。疲勞と空腹で、もう一歩も足が出ない樣な氣持である。しかし、兎に角、その坂道も登りつめ、畑、大根、竹林、桐、低い松並木等の植つてゐる高原の部落の緩い傾斜路を十丁ばかり下つて、やつと農民組合長の岩本の家に着いた

兎に角、第一の難關は突破したのである。しかし、難關はすぐ次にも控えてゐた（岩本に全部打明けていゝか何うか？打明けた際に果して岩本が受入れてくれるかどうか？　どう話したものだらうか？）といふ問題である。藤岡は岩本とは旣知の間柄ではない。組合のことで二三度話したことがあるきりである。それに岩本は年齡も上だ。組合長といつても地方農民は斯ういふことに對しては極度に要心する。彼は路々そのことを考へてゐた。

しかし――この杞憂は、後で案外取越苦勞にすぎなかつたことが解つて來た。彼は、岩本が滿更何の樣子を知つてゐて「昨晩は隨分ひどかつたらしいですね――」など云ひ出したので、すぐ（これは打明けた方がいゝ）とさう決心して、昨晩からの事情を話し、――斯ういふ譯で、今朝から食事も採つてゐないし、それで、お腹が空いてゐるから御馳走になり度いこと、脫走に手傳つて貰ひ度い――といふことを話すと、岩本は直ぐ快諾した。鷄小屋の鷄をつぶして鷄料理を拵へてくれた。それから「什麼危險を冒しても手傳つて逃がして上げませう」と云つてくれた。そして「これには私の弟もゐますから、何なりと遠慮なく用事をいひつけて下さい」とも云つてくれた。弟にも紹介した。

で、彼は早速密書を作るために同志宛に手紙を三本書いて（若し裁判に行つた所で余が出來れば、外へは行かなくてい。から、兎に角、此の三本の手紙を持つて、街へ行つて下さい」と弟に頼んで、それを持つて行つて貰つた。余は出來た彼はすぐ脫出する心算であつた。

所が、岩本は頻りに止めた「此の街へ這入ると丁度袋の中の鼠で、警戒が嚴重だと迚も出られる所ではありません、兎に角、私にも考があるから今日は緩り泊つて明日お立ちになつたらいゝでせう」と云ふのである。

彼は焦つてゐた。しかし、さう云はれてみると、成程準備も要るのである。彼は泊ることにきめた。そして、夜、岩本と二人で脱出の相談をした。岩本は詳細な地圖を書いて、脱出の道筋を教へてくれた。そして「着物もそれではいけないから」と弟の着物を作り變へさせてくれた。床に就いたのは二時頃であつた。中々眠られなかつた。またしても母親の顏が浮んで來た。父の顏が浮んで來た。弟の顏や、善良な弟の嫁の顏が浮んで來た。

翌日。五時頃、彼は眼をさました。が、その時はもう岩本の弟と村の二人の青年が街からZへ出る道の要所々々の樣子を見に行つてくれてゐた。街は嚴重な警戒裡にある！ 加之、街から各所に通ずる要所々々にもスパイが張つてゐるらしかつた。矢張、岩本に教へられたやうに山道の間道を通つて街からZへ通ずる馬車道へ出るより外なかつた。然し――要心の上にも要心の必要がある！ で、間道から馬車道まで、三名が一定の間隔を置いて見張ることになつた。馬車の乘場は一番警戒を要するのである。で、そこには岩本の弟が警戒に立つことになつた。愈々脱出である。彼は着物と帽子を取り變へ、商人風の扮裝を拵へ上げて岩本の家を立つた。今日も雨である。しかし、今日は傘があつた。危險率は却つて多かつたが、なにかしら勇氣が出て來た。間道の泥濘も左程苦にならなかつた。彼は道で二人の青年に別れて、一時間後に、間道と馬車道の交叉點迄來た。岩本の弟が居た。眼で別れを告げた。そして、丁度そこにやつて來た馬車に乘つた。

しかし――。彼は馬車へ乘り込むと同時に全身に鋭い衝激を感じた。丁度一番奧の座席に座つてゐる鳥打の男が斜にじろりと胡亂(うさん)臭いといつた一瞥で彼の方を瞶めたからである。スパイだ。彼はその男の風貌を一瞥してすぐ直覺的にさう感じた。(いけない！)しかも、丁度座席は、その男の傍に一つ空いてゐるだけである。悪い。しかし座らぬ譯にはゆかぬ。

彼は背筋に悪感を生じ乍ら、そこへ腰を降した（もう駄目なつたら、大胆に構へるより外はない）彼は固唾に咋嗟した。彼は一瞬じ相手の様子を観察した。眼が汗んでゐる。鋭い。顎骨が出張つてゐる。口に髭がある。不節な感じが野卑た。彼は決心した。大胆に——細心に——機械的に——と。相手は故意にか、或は意識しないでか、煙草をふかし乍ら窓外に泥甲眼をやつてゐる。彼は商人風を装つて「一寸燐寸を貸して下さい」と口を切つてみた。男は袂から燐寸を出して渡した。気が付いてゐるのかゐないのか、兎に角、相間は特別注意を払つてゐる様子もない。彼は幾らか安心した。そしてその間に問はれたら仕向は商賈に、職業は生糸の仲買人にしやうと考へた。そして相手の敵心を挿くさせるために天気のことや、景気のことや、必要もない出張前口を話しかけた。が、男は言葉の裏面もたさうに「フム、フム」とよつた返事をするだけである。

しかし、その間にも馬車はのろのろと進行した。坂道へさしかゝつた。車体が傾になつた。隣席の男の体が彼に掛るやうになる。彼は緊張と肉に溢れた重さで自分の体が小さく窮えるのを感じた。異常な神経が起つて来た。しかし——彼は余裕を取返すために、強いて話しかけた。——もう大根も随分大きくなつてゐませうな。ほう、甘酒ですね。なにしろ雨が続いたので——しかし位いですな——などと。そして——兎に角、一旦車の坂道を登つてしまつた。

馬車は峠を越した。降り坂にさしかゝつた。彼が降りた所に煙草屋がある。そこへ馬車は止つた。馬を休めるためである。が、此処で先刻の男が降りた。向側の隅中どこにゐたもう一人の百姓風の男も降りた。隣席は空になつてその空席を占領した。いざといふ時の用意に、降口の近くに居る必要がある。恐しも、スパイは降りたのだ。

喇叭が鳴つた。馬車が動き出さうとしてゐた。その時一人の中折を冠つた男が這入つて来た。そして先刻彼が座つてゐた座席に坐つた。男は坐席に着くや否や馬車の中をじろりと一通り見た——中折の一瞬間は一目してさう感じた。しかし今度は同僚である。否、向側なので特典に合ふ悪い。太つた、眼のどんよりと濁つた三十五六の無精髭の男である。無精し

てかどうか解らないが、始終じろじろ車内を見廻してゐる。藤岡はその男の注意を避けるために、向側に坐つてゐた商人風の男に話し掛けた。所が、この男は、非常に話好きな男で、最初は受け答へ程度の話の交換であつたのが、終ひには一人で喋舌り出した。今年は桑の出來が惡いから百姓達は困るだらうとか、自分は前に東京で商賣をやつてゐたが、東京の好況時代の景氣は素晴しかつたものだとか、何時になつたら此の不景氣が直るだらうとか、引つきりなしに話しかけて來た。で、藤岡は、唯、相槌を打つ位の程度で微塵も出さずに向側の男に氣を繰られてゐないといふことを示さうとする自分の目的だけは達することが出來た。

それに馬車は降りで、前よりもずつと速い。十二丁の坂道も、もう半分は通り過ぎてゐる。所々に五六戸づゝ一團になつた樣な部落がある。途中、向側の男の隣に座つてゐた百姓風の男が或る部落へ降りた。例の男が座席を一つ出口の方へ詰めた。（これは逮捕の用意と見られないこともない！）しかし、間もなくその男も隣席の男とボツボツ話し初めた。彼は愉快になつた。

もう路の三分の二は來てゐるのである。馬車は平地を走つてゐた。間もなくZへ着く。しかし——彼は此處まで來してZ驛で降りる危險に始めて氣付いた。驛には無論もう警戒網が張られてゐる！　降りやうか？——否——切符はもう驛まで買つてある。手前で降りて馭者に怪しまれたり、隣席の商人に何處へ行くなど、聞かれては面倒だ。それに田舍の純朴な馭者のことである。賃銀を割戻すなど、云はないものでもない。（介はない！　行け！）

馬車は止つた。驛の入口まで十間。果して——！　正服一人に私服らしい男が居る。（いけない！）彼は馬車から飛び降りると、駈けるやうに驛前の通りを突切つて、第一の角を曲つた。一軒の雜貨店へ入つた。そして齒磨と齒磨粉を註文しながら扉の陰になるやうにして、出來るだけ手間を取つた。それから十分ばかりグヅグヅしてその店を出た。一つ街角を曲つた。そして今度は蕎麥屋へ這入つた。此處でも二十分許り時間を過ごした。そして其の間に逃亡の計畫を立て直した。

彼は此処から汽車でA町へ出て、そこでA町の農民組合の支部長である森山に會つてH町の農民組合の情勢を報告した上、自分は當分この縣下を去らなければならぬから、誰か代りの者をやつてくれる様にと頼んで置いて、それから自分の村へ立寄り、そのまゝ縣外へ逃がれやうと思つてゐた。或は——否——無論、家の方には當局の手が廻つてゐる——が、しかし、それにしても隣村に極く親しくしてゐる友人があるから、そこへ行つて様子を探つて貰つて、假令母親に會へないとしても、弟にでも會つて、よく家のことを頼み、會へない事情を話して、父親にも詫びて貰つて、それから脱出しやうと思つてゐた。(が、この様子では、迚も此処から乗り込むことは不可能である!)

彼は次の驛まで歩いて行くことにした。そして、さう決めると、停車場を出て街の裏通りを迂廻し、次の街迄歩いて、そこからまた鐵道線路に傳つて[illegible]歩いた。そして、晩方の五時頃、A町の街外れの工場地帯にある組合の同志の家に着いた。この同志は或る事件で未決に這入つてゐて、今は妻君一人であつたので、此処はまづ安心出來るし、それに森山と會ふにしても、直接行くのは危險であるので、この妻君に連絡を取つて貰つて、それから會はうと思つたのである。

で、彼はそこへ着くと早速妻君に組合の事務所に行つて貰つた。森山はゐた。是非會ひ度いといふ返事であつた。途中も心配することはなささうであつた。彼は早速森山を訪ねることにした。

森山は此処の農民組合の支部長で、縣でも有數の闘士である。藤岡は彼にも云つた様に保養かたがたH町の組合の組織を手傳つてゐたので、その状勢を報告して事務所を引繼いだ上、此処を脱出しようと思つてゐたのである。

所が森山に會つて聴いてみると、今度の弾壓は豫想以上に酷いものであつた。縣の中心になつてゐる此処のA町も、B町もおもだつた連中は大抵やられてゐる。幹部は殆ど檢擧されて連絡は少しも取れず、この儘では折角組織された細胞も潰され

になつて了ふより外ないやうな狀態に立至つてゐる。森山の話では縣の聯合支部長の佐川も書記長の部山もやられたらしい。それで——「いま、全縣の農民組合と勞働組合の連絡を取つて、戰線の再建をやるには、どうしても君に起つて貰はなければ困るから、是非やつて貰ひ度い」といふのである。そのためにも、森山は彼の脫走の噂を聞いて隨分心配してゐたらしい。それに森山の話では「丁度、溝口鐵工所でも爭議が起りかけてゐて、至急人を派遣してくれと云つて來てゐる」といふのである。

藤岡は決心した。村へ立寄ることも、そこからすぐに脫出しようと思つてゐた計畫も、放棄しようと。無論森山は彼の母が危篤だといふ事を知つてゐない。知つてゐたら恐らく賴みにしないであらう。しかし——打開けても仕方がない、今は、戰線の再建が必要なのだ。若し自分が幾らか役に立てば——それだけでも止まらなければならないのだ。それに溝口鐵工所の爭議もある！　森山は表面に立つてゐるので無論這入り込む事が出來ないのだ。

「よし、それではやる事にしやう！」

「賴む！」

そこで二人は××後の戰線確立と今後の運動方針に就いて色々協議した結果——第一に至急全縣下の對策協議會を持つこと、各地支部を再編成して支部の×××を至急再建すること、犧牲者救援の運動を起すこと、各支部から至急溝口鐵工所の爭議の應援を派遣すること、各支部は近づいてゐるメーデーに對する準備を速急に始めること、××後の動搖に備へるために徹底的に鬪爭を開始すること——等を申合せて、藤岡はまづ溝口鐵工所へ行き、それからすぐこの方針に基いて運動を開始するために、全縣の運動の中心になつてゐるBとCに行くことにした。

話は決つた。

「それではお互にこの難關を切り拔けて行こう。」

「覚悟は出来てゐる！」

「途中気をつけて――！　油断するな！」

不意に堅い手が彼の手を握つた。言葉が出ない「同志」の感じが深く溢れて来る……。

決心は決つた。俸岡は一件困難な活動に這入り込まねばならなくなつた。

彼は、その晩は、知人の須田の家に泊ることにした。色々活動に取掛るとすれば、此の服装ではなにかに不便でもある。（一切の準備は須田の家で整へて貰はう。須田は此処の組合員で、森山の話では、今度の××で検挙されてゐる――が、しかし、着物位はどうにかなるだらう。）そう考へて彼は街から七丁許り出外れた須田の家に行つた。須田の家は代々小作農なのである。

彼は行くとすぐ「斯う斯ういふ譯で逃亡して來たから、宜しく頼む」と告げた。須田の所はそうした點で遠慮する必要はなかつた。母親がよく出迎へて、非常に喜んでくれた。そして早速奥の間に招じ入れて呉れもした。「お前の様子を見て此れは只事ぢやないとすぐさう思つたよ。しかしまあ、お前の顔を見て、わしも安心した。兎に角、今晩は泊つて行つて――丁度あれの妹も子供を連れて來てゐるし、今に何か祝ひ物でもこしらへてやるからな」そう云つて力をつける様にと、勵ましの言葉を繰返して出してくれた。そして彼の着物の事を頼むと、これもすぐ快く引受けて、

「そんなことだつたら、何も心配することはないだ。それよりか、そんな酷道な様な格好では歩いて行けるもんぢやないでな。まあ〳〵今夜は緩り泊つて、明日になつて行くことにしな。それに、富次からも手紙が來てゐるし、話も聞いて貰いたいでな。はあ、こりや富次からの手紙だ。富次も最初の中は外へ出ることが気になつて、殊に前の晩にや、ちつとも眠れなかつたさうだ。近頃は落付いて眠られない様になつたつて云つて來てゐるで――それでまあ、わ

しも幾らか安心してゐるだが——。子供が大好きな子だで、さぞ生れた妹の兒の顔ア見度いだらうと思つてな」

さう云ひ乍ら老母は彼が手紙を受け取つて讀む間中、彼の傍を離れなかつた。そしてそれから——彼が床に就いてから——隣室で、須田の妹と一緒に着物を縫ひ始めた。藤岡は明日からの鬪爭のことを考へ乍ら、二日間の疲勞を回復するために、よく眠らうと思つて意識的に努力してみた。が、矢張、中々眠れなかつた。暗く、物憂げに點れる洋燈の下で、母親の床を圍んで項垂れてゐる弟や父親の顔が浮んで來る。いまはもう死ぬばかりになつて自分を待ち侘びてゐる母親の窶れた顔が浮んで來る……

翌朝。彼が立つ前に、老婆は徹夜して拵へ上げた着物を彼の前に持つて來て云つた。

「之れは家の富次の着たものだでなあ。富次だと思つてやつておくれよ。」

着物は上着の半纏と百姓の穿く様な股引である。上衣も股引も表と裏と別々の色地だ。それに、鳥打も、足袋も、揃つて用意してある。

「いゝかな。上衣も股引も斯うして、裏表別々に拵へて置いたからな、逃げる時には裏返しにして、何處か、汽車の中だつたら洗面所か便所に行つてやりや一寸様子が變るで、逃げるには都合がよくなる譯だで——決してこせ〳〵周章てないやうにな——それからこれも富次の冠つてゐた帽子だが、これは懷へ入れて置いてな。これもいざと云ふ場合に、冠つてゐるのと變へるといゝ。」

彼は母親の云ふ通りに、すつかり服裝を變へて須田の家を立つた。

幸、雨は小降りである。目的地は滿口鐵工所だ。彼は計畫通り次の小さい驛まで歩き、そこから汽車へ乘つた。そして

溝口鐵工所のあるNの一つ手前で降りて、そこからNまで歩いた。Nへ着いたのが十時。

彼は組合の事務所を避けて、研究會で二度程顔を合せたことのある或る組合員の家を探し、そこから連絡を取つて貰つて組合の若い闘士に會ひ、爭議の状況や爭議の經過を一應詳しく聞いた。組合員の話では此處でも組合の主だつた指導分子が檢擧されてゐるので、爭議は一定の見透しも計畫もなく、日々の情勢に支配されてゐる。組織的な計畫的な戰術を進てることに慣れてゐない職工達には方針が立たないのだと。會社はこの弱點を利用して、産業の合理化を行はうとしてゐるのである。組合の主だつた指導分子の引つこ拔かれた弱味につけ込んで、豫てから計畫してゐた整理を斷行しようとしてゐるのである。そしてその前提として各職場から戰鬪的な一不穩一分子を××き出したのだ。第一職場がまず動揺した。賃銀の値下げが行はれた。更に第二の馘首が行はれるといふ噂であつた。動揺が各職場に起り、不穩な空氣が日一日と強まつて行つた。怠業が始められた。

藤岡は早速爭議の對策を立てゝ、組合員と一緒に××の監視網に在る工場に忍び込んで、各職場から××××を一名宛村井食堂の陰に呼んで貰つて爭議の××を與へ、それから組合支部に取つて返して、不斷下の對策協議會の件、檄判者援の件等の打合せをし、そしてそれから直ぐその晩ここを立つた。

途中は無論危險を避けるために、要心に要心をして、汽車も目的地のBの一つ手前で降り、それから徒歩で迂回してBの町外れの藤田といふ農民組合員の家を訪ねたのである。彼はそこへ行つて一應Bの情勢を訊いてから、町へ這入らうと思つてゐた。

所が、行つて見ると、藤田は既に檢擧されてゐた。父親も留置されてあつた。而かも、弟も拘引されて歸つたばかりだといふのである。父親は[illegible]て。

「今度彼の事が來たら息子の×をとつてやる。なあに、俺方、二ヶ月や三ヶ月放り込まれたつて、そんなことは何とも思つてるやしねえ」さう云つて藤岡に啖呵を洩した。殊に家宅捜索の××に憤激してゐた。この篠田の父親は非常に性氣質の父親で、最初は篠田が農民組合の仕事をする事を非常に嫌つてゐた。篠田が運動で拘留された時など親子の緣を切るといつて怒つた。が後には段々變つて來た。殊に篠田が選擧で立候補した時から急に變つた。篠田に就いて話す時の話し振りが、まるで違ふ樣になつた。そして息子の選擧以後は、自分も組合に加入して、そこの組合の有力者になつてゐたのである。

しかし此處では事情は少しも解らなかつた。彼はすぐ街へ這入る決心をした。仕事は山程あるし、それに連絡を取つた上、一刻も早く縣下を出る必要がある。彼は篠田の弟に頼んで、街の工場地帶にある勞働組合員の榎本の家まで、途中危險であるかどうかを探つて貰つた。そして早速その晩の內に榎本の家に行つた。榎本の家は四十近くになる兄夫婦と母親と榎本の四人暮しである。が、行つて見るといろ／＼組合の事や運動のことを聞かうと思つてゐた榎本はやられてゐて、兄夫婦と母親きりしかゐない。しかし母親は非常に喜んで、すぐ藤岡を引き入れて、脱ぎ捨てた下駄迄隱してくれた。藤岡が逭れたと云ふ噂を聞き知つてゐて、非常に心配してゐたのである。尤も母親の話ではこの噂はもう夙つくに組合のもの達にも知れ渡つてゐた。で、彼女は、早速床を敷いて、それから――

「いゝかな下駄はこゝの裏口の棚に置いて置くからな、いざと云つたら、こゝから持つてお行きよ――それから逃口はこつちにあるから、それも忘れないでな。丁度隣が空家になつてゐるで、空家を拔けて裏通りへ出りや捕まるやうなことはないだらうで――」と、彼に一々委しい注意を與へながら、それから――

「家の勝治も、もう一週間にもなるが、いつ歸されるやらうな。始終のことだで、別に驚きはしなかつたゞが、××の衆達も、全く甚いことをするもんやな。」など、話したりした。

しかし、此処でも街の様子はよく解らなかつた。で彼は、早朝、早速篠田の弟を呼んで貰つて、篠田の弟に事務所へ行つて貰ふことにした。

篠田の弟の話では事務所には柿沼の女房が頑張つてゐた。主だつた連中が悉皆やられたので、事務所へ詰めかける者が誰も居なくなつた。柿沼もやられてゐた。

柿沼の女房は、最初は柿沼が運動に熱中して、金も米も入らなくなる様な状態になつて來ると、よく事務所に來て（米が無いのに一體どうしてくれる）と泣き込んで來たものであるが、そのうちにはさうした苦勞にも慣れて、今では夫の柿沼を運動に追ひ出す位になつた。子供は三人――七つになる女の兒と九つと三つの男の兒であるが、藤岡はよく、この子供達を知つてゐる。

非常に賢い子供達で、殊に九つになる男の兒は組合の若い連中などが集つて××歌を歌つたり、騒いだりしてゐる時は、平氣でよく眠つてゐるが（スパイだ）といふと何時によく眠つてゐる時でも、すぐ眼を醒まして、歸る迄暫くチロチロ睨めてゐる。そして歸るとすぐ安心した様にすやすやと眠る不思議な子供なのである。組合員が始終出入してゐる故か、自然いろいろなことを覺えて、彼が入獄してゐた時なども、女房と一緒に刑務所の前を通ると「藤岡さんが這入つてゐるんだね」さういつて、それから組合員達のよく歌ふ「いまに見ろ、××に××××させん」といふ歌の文句で「いまに××××いてくれるんだね」さういつて母親を暗然とさせたさうである。

藤岡は、いまもその話を思ひ出し乍ら、柿沼の女房へ手紙を書いた（運動本部は何處にあるか？同志は何處に居るか？事務所には誰も居ないさうだが、どうかもう少しの間頑張つてゐて貰ひ度い）と。そしてそれから（子供達は達者でゐるかどうか）と。そしてこれを篠田の弟に屆けてもらつた。返事が來た　それには斯う書いてある（あなたの無事を知つて非常に心強く感じました。本部は何處にあるか解りません、同志の居所も知らないのです。子供達は丈夫ですから安心し

て下さい。米も二三日分位は殘つてゐます。私は力を落しません。出來るだけ頑張る心算です。どうかあなたも注意してやつて下さる樣に――）と。

藤岡は此の返事で、此處の××が如何に甚かつたか略々想像が出來た。縣下第一の都市で紡績工場、木材工場、鐵工場等幾十の工場がある上に、全縣の運動の總本部があつただけ、それだけ彈壓も激しかつたのであらう。が、それにしても彈壓後の組織はどうなつてゐるか、各班の連絡はどうなつてゐるか、これは、此の返事では矢張少しも解らないのである。對策協議會の件もある。溝口鐵工所の應援の件もある。犧牲者救援の件もある。兎に角速急に狀勢を知る必要があつた。彼はもう一度篠田の弟に連絡をとつて貰つて、今度は勞働組合の幹部の久慈の家に行つてみた。

が、行つて見ると久慈もやられてゐた。妻君と子供だけであつた。久慈は知識階級出の運動者であるが、此の妻君は女工出で、もと紡績工場に出てゐた。非常に美人でしつかり者であつた。今度の事に對しても覺悟をきめたらしいのである。しかし矢張、藤岡に會つた時には、「どうでせう？ 長いでせうか？」さう云つて心配してゐた。そして藤岡が「運動を彈壓する方針らしいから或は長くなるかもしれない」と言ふと、「私もさう思ひます」と云ひ乍ら、「就いては、自分も今後の生活のこともあるし、斯麽では差入も充分出來ないから、當分子供を實家へでもやつて、工場にでも這入り度いと思つてゐます」と、しんみりと彼に打開けて云つた。

が、聞いてみると、彈壓のためにやられたのは篠田や榎本や久慈の一家ばかりではない。×××のために一家の生計が立たなくなり、妻子が路頭に迷つてゐるやうな悲慘事は到る所にあつた。勞働組合と農民組合の幹部達は大抵やられてゐた。それに連絡は少しも採れてゐない。何處に中心があるか、何處に移動本部があるか、少しも解らなかつた。連絡を採る必要があつた。戰線を再建する必要があつた。協議會の件、犧牲者救援會の件等の仕事もあつた。

藤岡は此處に五日止つた。無論此等の仕事が此の短い期間に果せるものではない。彼は仕事を組合の者に託してここを

立つた。

先にも仕事はある。それに此処に何時迄も止まつてゐるのは危険でもあつた。殊にいつでも争議が起りかけてゐる。至急来てくれといつて来てゐるのだ。

所が来てみると街は——いま、争議が起りかけてゐる北葛飾の外に、田沼時計工場、北林鉄工、長田鉄工、南新宿の外に、大小無数の工場からなつてゐる工場街であるだけに——××も實に峻烈を極めてゐた。彼が連絡を探らうと思つてゐた同志は殆んど全部やられてゐた。残つた同志は何処に居るか解らなかつた。事務所には二十二になる青年部の坪井が一人ゐるきりであつた。坪井は毎日々々幾度となく刑事達がやつて来る組合事務所に一人で出かけてゐるといふ話であつた。到る所に悲惨な話があつた。

或る同志——樋口といふ男で、その地方の新聞の配布を担当してゐたが——此の同志の家には病気の老母が一人で食ふものもなく床に就ききりになつて呻吟してゐた。尤も貯えも樋口が運動のために一切を擲げうつてゐた為め、一家の状態は悲惨を極めてゐた。六畳一間きりの薄暗い部屋に洗濯物も出来ない老母が、時には——樋口が検束をくつたり、拘留をくつたりしたやうな場合は——一日も二日も食ふものもなくて寝てゐるやうなことがあつた。

樋口は今度の検挙にも何故か免れてゐた。しかし、最後まで頑張らうと思つてゐた。仕事を後のものに托して、愈々といふ時になつて逃げ様と思つてゐた。そしてやられた。母親一人になつた。米はなくなつてゐた。あつたとしても自分で炊くことが出来なかつた。が、誰も行つてやる事が出来なかつた。行つた者は片つ端から××された。救援部もどうすることも出来なかつた。

しかし、運動のためには一切を捨てゝ顧みなかつた樋口も、決して昔の冷やゝかな理智的な男であつたのではなかつた。或る同志が差入に行つた時、樋口は同志のことを訊ねた末、唯一言「母親のことを宜しく頼む」と云つてホロリと涙を落したさうであるが、その時は差入れに行つたその同志も思はず誘はれて涙を落したさうである。

しかし惨事は此の樋口一家ばかりではなかつた。労働組合の赤松の一家は、赤松が検挙されると、後妻に来た妻君が何処かへ逃げて行つたので三人の子供達は置き去りになつて食ふものも食へずに泣いてゐるやうな仕末であつた。藤岡も知つてゐるが、赤松の先妻は實にいゝ妻君で同志が困つて食へないでゐるやうな時は、いつも氣持よく飯を出してくれるやうな妻君であつた。が、此の妻君は病氣で死んだ。そしてその後へ今度の妻君が来たのである。赤松は子供達のためだから是非貰へとすゝめられて、此の妻君を貰つたのである。が、此の女は女人女で、それに普段から子供達にも冷酷な、仕様のない女であつた。

しかし、子供達をさうして放つて置く譯には行かなかつた。仕方がないので組合の者達は、赤松の出て来るまで、代る代る順繰に廻して子供達を養つて行くことにしてゐた。

それから、藤岡の良く知つてゐる高木の妻君は夫が検挙されたので封筒張りを始めてゐた。高木はもと、大工をやつてゐたが、その後掃除人夫になり、最近では組合に這入つて闘つてゐた。一ヶ月三十圓の収入でやつと一家五人の口を糊いでゐたのである。

妻君は彼女の留守中に高木が引張つて行かれたといふことを知ると非常に怒つて「家の米櫃をどうしてくれるんだい」と××へ怒鳴り込んで行つた。實際一家五人もの家族を抱へて、女一人でどうしてやつて行けるか？　無論、救援会や組

合の者などにいつまでも厄介になつてゐる譯にはゆかない。彼女は、早速自分は甘酒賣りを始め、十二になる男の兒を商屋の小僧にやり、そして殘つた四人の兒を抱へて鬪つて行く決心をした。しかし、それでも子供達は食つたり、食はなかつたりであつた。學校へ行く兒があつたが辨當がなくて出席出來ないことがあつた。(今日は休めよ)と云ふと子供もおとなしく家にゐた。近所の者が(今日はどうして學校へ行かないんだ)と云ふと(辨當がないから休むんだい)と答へて一人で遊んでゐた。

しかし斯うした慘狀は到る所にあつた。加之、斯うした狀態の中にも、一般的な經濟界の狀勢が此處にも影響して、各工場からは續々失業者群を排出してゐた。殊に組合の幹部や指導分子は片つ端から馘首された。北濱紡績の爭議もそれと同樣な事情から起つてゐた。會社では成年工を解雇して、青少年工を雇入れ始めた。成年工達は爭議に勝つた經驗があるので、青少年工より戰鬪的であつたからであつた。爭議は成年工の間から起らうとしてゐた。會社では××の保護のもとに工場の動搖を嚴重に警戒し作ら、一方では御用組合を組織しようとしてゐた。

學園に戰線の再建の仕事の外に、此の爭議の對策や、犧牲者救援のことなどで、此處でも不眠不休の活動を續け作ら數日間奉仕した。彼は此處の仕事を一通り濟まして、それから一刻も早く縣外へ逃れやうと思つてゐたのである。

が、此の計畫も放棄しなければならなかつた。濱口織工所の爭議が危いから至急來てくれといふ電話が掛つて來たからである。それに永野を中心として行動の組合が活動してゐるといふことであつた。無理に金を拵へてもう一度濱口織工所へ行かうと思つてゐた。

が、此の決心も斷念しなければならなくなつた。恰度、明日立たうといふ前日、彼はある知合の醫者の所へ金を借りに行つて貰はうと思つて同志の家を訪ねて行つた。街端れの小さい路次である。所が彼が同志の家を出て、第二の路次へ曲

らうと思つて何氣なく振り返ると、後から和服を着た一人のスパイが跡けて來るのに氣付いた。（いけない！）さう思つて足を早めて急いで路次を曲り後から跡いて來るスパイをまいて了はうと思つた。が、その時彼は、自分の行手の曲角にも、もう一人の男が立つてゐるのに氣付いた。後からは足速にもう一人のスパイが近付いて來る！距離は縮るばかりだ。彼は突嗟に思ひついて一軒の長屋に飛込んで「一寸御免下さい」とさう云ふなり下駄を持つてその家の座敷を通り拔けて勝手口から裏の路次へ脫出した。驅け出して第一の曲角を曲つた。次の路次へ這入つた。無我無中で路次から路次へ拔けた。そして大通りに出るや否や通り掛つた市内電車へ素早く乘り移つた。

もう此處に止つてゐる譯には行かなかつた。彼が街へ入り込んだことを嗅ぎつけたことは暸かであつた。同志の話によると街の要所々々にスパイが張つてゐるらしいのである。もう一刻も速く逃れるより外なかつた。溝口鐵工所の爭議も斷念するより外なかつた。それに、もう體も悉皆駄目であつた。彼が最初此處へ來た時でさへ知合の醫者は、「そんなことをしてゐると死ぬぞ」と彼に注意した位である。

彼は脫出に肚をきめて、その晚、警戒裡にある街を脫し、街から三つ目の驛のTまで步いた。Tには親友の栗林が居る。彼はそこで旅費を作らうと思つたのである。

彼は夜遲く、十一時頃、辛つと栗林の家に着いた。そして栗林の家に着くや否や極度の疲勞で上り口の障子の傍に倒れる樣にぐつたり橫になると、その儘覺えもなく、一時間許り眠つた。栗林も母親も非常に欣んで、なにくれとなく世話を燒いてくれた。旅費の事も心配しなくともよかつた。栗林は彼が言ひ出さない前に（金が要るだらう）と云つて出してくれた。

翌日。安全を期するために、晚方彼は立つことにした。が、愈々立つといふことになつた時、栗林は初めて手紙が來てゐると云つて彼に弟からの手紙を渡した。母親の死亡の通知であつた。栗林は彼の心的打擊を考へて、立つ時までそれを知

らせなかつたのである。實際この通知は、彼にとつては、非常な打撃であつた。しかし、もう遅い！　要は何、いまは一刻も早く逃れることにしよう。彼は身仕度を整へて柴林の母親に別れを告げた。柴林は二里もある××迄送つてくれた。彼が幾度も斷つたにも拘らず。またいつ逢へるか解らないんだ。それに、そんな所で捕つたら、それつきりだ。俺がついて行けば――捕つた時には、後は、俺が引受ける。お前はかまわないから逃げてくれ。さういつて肯かなかつた。

雨の晩であつた。××で柴林と別れて、それから三里の國道を行き、そこから二時間許り汽車に乗つて、それからまた歩く心算であつた。雨は傘の柄を傳つて流れて來た。路に添つた松並木が、海から吹いて來る風に凄じい音を立てゝ鳴つた。深夜材木工場の丸鋸が木を裂く時のやうな淋しい音だ。歩く人は一人もゐない。唯、時折、自動車がサッと前燈を輝かして、流れる水の中を疾驅して行くだけであつた。俊岡はその度に提灯の燈を消して松並木の陰に身を潜めた。

××へ着いたのが十時。俊岡はそこからBの一つ手前迄の切符を買つた。驛は森閑としてゐた。客席も疎らであつた。ホッと一息ついた。何か――彼が席へ着いてホッとすると間も無く――前の列車からひよつこり彼の見知つてゐる刑事が入つて來た。その刑事も彼を見知つてゐる筈であつた。彼はハッとして立上ると、反對側の入口から、轉げる様に線路へ飛び降りて走つた。汽車は動き出してゐた。刑事は氣が付いたか？　自分が飛び降りた時に振向いて飛び降りたか？　或は氣が付かなかつたか？　それとも氣が付いても飛び降りる氣が無かつたか？――孰れにしても、ぐずぐずしてゐられる時では無かつた。要は何、汽車に乗るのは危い。彼は××迄、山越えすることに決心した。途中、或村で蠟燭三本と提灯を買つた。開拿で、汽車の中へ置き忘れて來て終つたからである。田舎道を夜更けに提灯も持たないで歩いて、怪しまれては困る。

山道は闇黒であつた。雨は益々激しくなつた。溪流の響が聞える。呼吸が苦しくなる。泥濘で路は歩き惡い。歩いても歩いても、同じ坂道である。彼は幾度も闇の中に轉び込んだ。そして幾時間かの後、やつと山の頂に達した。

が、それからまた二里半の降り坂である。しかも、降りは更に歩き惡い。滑る。轉ぶ。着物は濡れた上に泥だらけになる。烈風が傘を捲き上げる。蠟燭が消える。そのうちには提灯も役に立たなくなる。しかも氣は急くばかりだ。山を降りて十町程行くと、路が二股になつてゐる。一方は×縣へ出る路、一方は僅十五町程で自分の村に達する路である。彼はこの豪雨を利用して、一寸でも家へ寄らうと思つてゐた。が、體が衰弱してゐる上に空腹と疲勞で、脚が思ふやうに進まぬのである。それに路は難局だ。到々、路の半分も行かないうちに夜が明けかけて來た。もう家へ寄ることも斷念しなければならなかつた。そこから縣の境迄十五里ある。彼は人家の少い間道を選み乍ら、一睡もしない體に鞭打つて、休みなしに歩いた。途中、農民組合員の家が一軒ある。それ以外には身を憩める處がない。しかも、そこ迄はもう四里半もある。

彼は午後二時頃、辛つとその組合員の家へ着いた。この山田と云ふ組合員は、一度組合の事務所で挨拶を交した程度の知合に過ぎなかつたが、彼が行くと非常に欣んで迎へてくれた。それに母親も醇朴な人の好ささうな母親で、一度も會つたことがないのに、「昨夜の雨で悉皆泥塗れにして了つたから」と着物のことを賴むと、直ぐ承知してくれた上、「那なんか言はなくてい丶だよ。家のこれだつて、いつか、何處かで人様の厄介になることもあるだらうし、わしはたゞさう思つてやつてゐるだけだで——」など丶言ひ乍ら、それから頻りに泊つて行く事を勸めた。そして彼が斷つて出掛ける時など「それぢや、途中氣を付けてな、これでいつ遣へるか、多分もう斯の處へおいでの事もあるまいと思ふが、——達者でやつてくれる樣にな」など丶言ひ乍ら戸口へ出て見送つてくれた。晩方であつた。

藤岡はそれから、三日三晩山徑を歩いた。山田の家を出た時は一寸雨が歇んでゐたが、出掛けるとすぐ又降り出し始めた。夜中に眠るところが無くて、山の上の妙見堂に一夜を明かした。そして、そこで貰つて來た握り飯を食つた。握り飯は濡れてボロボロに崩れてゐた。二日目の晩は途中で買つた堅麵麭で飢を凌いだ。麵麭も濡れてグシャグシャになつてゐた。この晩は或る農家の庇(ひさし)の下で雨を避けて眠らうと思つたが、寒くて一睡も出來なかつた。山は險しくなつた　山間に

ある村の家數も少くなつて來た。桑の木も、畠の野菜物も段々小さくなつた。山々は鬱蒼とした常緑樹が多くなつて來た。縣境が近くなつた。そして——彼は三日目の朝方、やつと縣の境に達した。

雨は歇み、霧が谷間を深く罩めてゐた。しかし、空氣は清澄であつた。足下には、いま通つて來た山々が連つてゐた。空が明るくなり、太陽は昇らうとしてゐた。樹は水を含み、緑の匂が四周に滿ちてゐた。彼は三日三晩の豪雨の中の脱走に身も心も疲れてゐた。がいま、この縣境に達して十日間の挑戰の跡を振返り、遙かに自分の歩いて來た山野を見渡した時には、肩に重荷を卸した時のやうな安心と新しい希望の湧いて來るのを感じた。そして冷氣に震へる胸に例の空氣を一杯吸つた。

しかし、——ここには慘敗の苦々しい經驗があつた。彼は勝つたのではなかつた。争議は壞滅しやうとしてゐた。××は戰線が破壞されてゐた。そして再建の仕事は果していつのことか豫想が出來なかつた。彼はいまこそ、過去數ヶ年になかつた重い負担を持たなければならなかつた。職場には父親と母が恐らく淋しく同志の位牌を守つてゐることであらう。

彼はそれらの一切を新しく、痛切に感じながら、レーニンのいつた言葉——彼は貧しくして彼は富めり、彼は力弱くして彼は力強し。あゝ偉なるくくくよ——を思ひ出した。再建の仕事はいつか？——否——明日は、——再び新らしく、力強く、蘇生するであらう。……彼は力強くして彼は力なし、彼は貧しくして彼は富めり——彼は繰り返へした。そして彼を育て、彼の養つた彼の郷土をもう一度振返つて、向ふへ、霧の深い縣境の山の彼方へ降りて行つた

——一九二九・十一——



闘争する二十三人

金子洋文

1

寢轉んでゐるもの、また、郷里に手紙を書いてゐるのも居た。外に面した椽側にはみ出て猥談に醉つてゐた七八人の仲間は、眼下の街路を横ぎる女を見る度に、年齢と貧富の差別を問はず、それが女である故に呼吸を止めて緊張した――。

（吾々プロレタリアは……………）

二木はシャツ一枚で反對の椽側を往復し乍ら報告演説の稽古をしてゐた。しかし彼は何も考へてゐるんではなかつた。街路を隔てゝ燒いてゐるパンジユウと、烈しい戰ひを繰返してゐたのだ。

函館へ荷物のやうに投げ出されてから三日になる。期節外の歸航に、旅館は不審を持つたが、第一日は飯を食はしてくれた。が、二日目に郷里の組合本部にうつた應援と無心の電報が不用意だつた。彼等二十三人の懐中には、七十五錢の電報料さ

八無い事が旅館に知れたのだ。

さて、八疊二つふさいでゐた室から八疊一つに追ひ立てられた。次に宿料をその日／＼に支拂つてくれと番頭が捻ぢ込んで來た。

三木が笑つて答へた。

「そんな無情なことをいふものぢやないよ。」

「しかし私の方でも……。」

「君はアリつて會社を知らないのか。」

「何ですか、それは……」

「有名な商事會社さ、我々はその社から一人平均三十圓から五十圓の金がとれるんだ……だから心配なからう。」

「そんなら何も郷里の方へ電報をおうちにならなくても……。」

「金がなくては運動できんぢやないか。我々はしつかりした組合をもつてるんだ。金はふんだん……と言ふほどでもないが貯へてある。五千百金さ、君とこの宿賃などは迷惑かけないよ。」

然し、作治の番頭には、運動も組合も無意味に等しい。彼は理解されない言葉に不快と侮辱を感じて荒々しく梯子を踏つて去つた。それから食料が杜絶えたのだ。

その夜のうちに同宿に親娘の組合をもつてゐる人間が四人、飛び歩いて合計十三圓也を借りて來た。一人五十錢宛を分配して殘つた金で組合へ再び電報を發した。

「カネ、ツクツテスグオクレ、ミキ……」

その返事を示して番頭に安心させたがその金は來なかつた。食料杜絶で二十三人は本山の若くまでたつぷり三食を空腹のま

ま忍ばねばならなかつた。

2

不意に裏二階の廊下から人々の爭ふ聲がした。

續いて器物の毀れるやうな物音、階下に向つて呼ぶ聲、梯子段を飛び上る足音が聞えて來た。

越前谷はゲラク町の女將テルミヤとのローマンスを半ばにして、打切らなければならなかつた。二木はパンジユウを思ひ切つてその方へ驚きの視線を向けた。そこへ同じ仲間の慶助が狼狽した顔をもつて來た。

「おうい、大變だよ。」

「どうした、誰か喧嘩したのかい。」

「喧嘩じやない。大次郎が毆られてゐるんだ。」

人々はそれ〴〵叫び聲をあげて立上つた。大次郎は二十三人中の最年少者で百姓の若者に相應しくない弱い身體を持つ男だ。

「待つてくれ、騷いぢやいかん。」

慶助は手をあげて制止した。

「二木、來てくれ、大次郎がお客の御膳を盜んで食ふのを見つかつたんだ。」

人々は言ひ合したやうに心に冷たいものを感じた。二三、口の中でぶつ〳〵言ふ者が居たが力なく腰を下ろした。慶助の後から二木と、小野が飛び出して行つた。

三人は揉み合ふ爭ひと梯子段の口でぶつかつた。腕力の強い二木は大次郎の襟頸をとつて引きずり下ろさうとする若い

番頭の横面をいやといふほど殴りつけた。

「何する貴様等……。」

オチンスキーの漁場でならした彼の拳はまたゝく間に番頭二人の胸を取押つた。そして蒼ざめた大次郎を恩助と小野の二人に引き渡すと、自ら番頭の一人を引づつて帳場へ下りて行つた。

室に入つて来ると大次郎は女のやうに泣きつゞけた。その弱々しい様に腹を立てゝ、京次郎がどなりつけた。

「大次郎貴様組合員のくせに何て恥つさらしのことをするんだ。……貴様、おれ等がカムチャツカで生命をかけて闘つたのを忘れたか、戦闘は未だ、継続してゐるんだぞ、意氣地なしめ……。」

京次郎は、カムチャツカの咽喉がまだなほつてゐなかつたので後末の方はしやがれて聞きとれぬほど低かつた。軽の重い石川が傍からいつた。

「京次郎お前戦へつてゐるのか。」

「うん、、、」

京次郎はきよとんとした表情でふり向いた。このうん、、の意味は秋田弁でがス、、（身をかはされた意味よりもつと複雑だ）喰はされた時の「何さ」に通じてゐるのだ。

偶像を思はせる黒い石川の顔と蒼白に近い京次郎の顔面の対照の面白さに人々は軽く笑つた。

すると、京次郎はむきになつてまたどなりつけやうとした。

「まァ京次郎さ、」年長者の小野が傍から押へながらいつた。「お前もさうだらう――、俺もさうだ、腹立いて仕方がねえんだ、唯、今朝から何も食はねえんだ、それでも今夕、本山君が来るだらうと思ふから辛抱出来るのさ……もし金の都合がおそくなつて本山が今夜来なかつたらお前どうするつもりだ。」

「おらよりお前どうするんだ。」

「おらは覺悟をきめてゐるよ、夜こつそり海岸へ行つて干烏賊でも盗むつもりだ。」

京次郎は鼻で笑つた。

「おらあ、もつと、うまい考へを持つてゐるよ。」

「何んだ。」

「何んだ。」

すると、忽ち持前の單純な善良さにかへつて彼は得意さうに言つたものだ。

「おらあ、向ひの親爺に談じてパンジユウを借りるつもりだよ。」

「パンジユウを？」

人々は手まはしの早い彼の考へに眼を見はつた。

「だから、おらあ、さつき、親爺と顔を合はした時、顔を下げておいたんだ。」

人々がどつと笑ひ出したので京次郎は再びむきにならうとした。

小野が言つた。

「それぢや同じぢやないか。」

「何が。」

「腹へつてゐるからパンチユウが氣になるんだ。お前が大次郎だつたらどうする、やつぱり盗んで食ふだらう。」

これは否めなかつた。第一皆の眼がことごとく是認してゐるし、また、誰よりもまつ先に平氣でやつてのける彼なのだ。

「そりや、盗んで食ふかも知れんさ、しかしおれは見つかるやうなへまはしないよ。」

「困るぢやないか、太次郎は運が悪るかつたんだ。」
「困るもないよ、京次郎はうまいことをいふ時の習慣で頭をぐつと反らしのんだ。宿屋を追ひ出されたらどうする。盗んだ上に系図をたくつたんだ、出て行けといふにきまつてゐるぞ。」
「そりやさうだ……」
彼等はおどついて同感した。
太次郎の宿へ出たいといふ宿を追ひ出されては、寒い晩に両宿の街をうろつくこともできなかつた。
皆がだまつた。
一晩、宿屋へ夜明しすることを考へた一人が独語した。
「誰かちよい〳〵見に来てゐるしな。」
談話は三人々の間隙に、特徴に、ロダンが加へた。
その瞬間、彼等は急に圧き込まれてゐる自らを感じた。
漁師のイチニスキーが帰然された時以上の悲つなさだつた。
階下から帰つて来た宗次の顔を見ると京次郎はまつ先に聞いた。
「出て行けといはれなかつたか。」
「いや、女将に訴へるといふのさ、系図をたぐるとは言はなかつたが、請許がないもやつたよ。」
「それで、ここにゐてもいいのか。」
「いいとも、出て行かれちやア宿屋は一文にもならんぢやないか、本山が来るまで訴へるのを待つてもらつたのさ……よ、
小使〳〵」

狼狽てゝ二木が出て行つたが誰も口をきく者が居なかつた。何かしら自分等の興奮りに不安を感じたのだ。彼等に出て行かれては丸損の宿屋のことも、木山の來ることもまるで忘れて話し合つて居たのだ。

一人が立つて椽側に出て行つた。

「京次郎、パンジユウの親爺がこつちを見てゐるよ。」

誰も笑はなかつた。

他の一人が言つた。

「大次郎、お前、盗んだお膳をすつかり喰つちやつたのか。」

大次郎はうなづいた。

「うまいことをしたな。」

それから人々は、自らを意識したやうにそれぐ動き出した。

3

彼等二十三人は秋田の百姓だつた。

彼等は郷里に、日本でも有數な強い農民組合をもつて居た。そしてこれ等の二十三人は幾多の烈しい爭議の中をくゞつてきた前衛分子だつた。

三月前組合本部へアコの漁業會社から三人の船頭がやつて來た。

船頭は言つた。

君等を望んでゐるアコの漁業會社は、陋劣苛酷な見本の漁業資本家ではない。ソビエート社會主義共和國の國營に等し

い漁場だ。労働時間は八時間、八時間以上働くと割増金が出る。祭日、日曜は休み、九一金（これは全漁獲の九分を賃銀として労働者がうける漁場の約束をいふ）は勿論、設備食料等の待遇は、××漁場などとは比べものにならぬほどよい。「アコ」では秋田の農民組合のやうに訓練された人々を望んでゐる。だから団体契約を結んで行つてもらひたい。——

そして、一人あたり百二十円を前金として渡された。

この金額は貧窮にある彼等を喜ばすに十分だつたが、そのことよりも、プロレタリアの×へ、新しい、正しい、労働條件の所へ行くといふことが、彼等に深い感動を与へた。彼等は迎へられる国賓のやうな感激と輝かしい夢を抱いて郷里を出発した。

九月二十日午後四時半、二千五百噸の多聞丸は、その船腹に二百九十人のプロレタリアと材料食料品を満載して函館の港を出帆した。

これ等の団体人は、宮古、津軽、函館、秋田、の各地から狩り集められた寄合の衆だつた。

三十二人は×××と、労働歌と、百姓の歌を唄ふことを忘れなかつた。また与へられた絶好の機会をのがさなかつた。

一本は減つてしまつた隙のない甲板の暗い板を気にしながら、しばしば団体演説を始めた。

船員が禁止して歌と団体を止めやうとしたが無駄だつた。ド方猛烈な彼等も結ばれた腕の前には拍手をふることが出来なかつた。中船頭の大将が×××を止めやうとして困れ人に突かかつて以来、船頭たちは、表甲板から殆んど姿を見せなかつた。

咽喉、万歳、×××、煽動的団体演説の日を繰返して船はカムチャツカに向つて進んだ。そして六日後、作業地のイチンスキーに着いた時、二百九十人の労働者は三十二人を中心として完全に結成されてゐた。

イチンスキーの漁業場は、茫漠とした砂地だつた。七八丁隔てて、河が流れ、その対岸は赤い泥の平地だつた。

雪がまだ殘つてゐた。そして、海水は氷のやうに冷たかつた。

その浪の中へ裸體のまゝ飛込んで、彼等はまづ荷上げにかゝらねばならなかつた。

殆んど徹夜で四日間の作業の後、彼等は何を知つたか、それ等の苛酷な勞働に對して一錢の勞働賃銀も支拂はれないおそろしい事實だつた。

郷里でファンタシイされた彼等の夢は、一枚一枚皮膚をめくりとられる痛さとともに剝脫されて行つた。

國營と言つたのは嘘でネップ・マンの個人經營だつた。勞働時間は無制限で、割増金は皆無、九一金等、食料は握飯と鹽のみで味噌さへ出ない。

寢起きする場所は、荒むしろを敷いた犬小屋同樣で、浴場食堂の設備なく、飲料水が惡いので病人が續出する有樣だつた。

六日間の航海で繰返された×××、宣傳演説は、決して無用でなかつた。

希望條件が要求書となり、それが決裂して七月十一日、彼等は爭議團を編成して、ネップ・マンと鬪はなければならなかつた。

二十三人の鬪爭力は露領カムチャツカに於いても少しも怯まなかつた。ソビエート社會主義聯邦を新らしい××と思ひロシアのプロレタリアを××と信ずる彼等も、ネップ・マンは世界の資本家と同樣にプロレタリアの敵だつた。彼等はしば〳〵國語の相違からくる高利貸根生を發揮するネップ・マン一流の卑劣なトリックにつまづき乍ら鬪ひつゞけた。そして八月二日午前四時十分、百五十一名の出稼人はカムチャツカの海にプロレタリアの萬歲を殘して歸路についたのだ。(この特殊な日露の爭議についてはいつか機會を見て書くつもりだ。)

木山の持つて來た金は、三十一人の歸國の旅費に充たなかつたが、兩三日の飢をしのぐに足りた。一日五十錢の食料は彼らの戰鬪力を呼び起すに十分だつた。

交渉委員は五名だつた。三木、小野、高山の三名に、木山と、兩船一般勞働の笹山が加はつた。

要求條項	
一、五月廿日ヨリ九月廿日迄百五十一名、賃銀要求額	三八、七七六円 一七〇
内譯	
一名ニ付キ月額三十五圓ノ四ヶ月分	一三九 九二〇
四ヶ月間中、一週一日ノ休養日追加十六日分	一八 六五〇
五月廿日ヨリ七月十一日マデ毎日十七時間以上勞働シタルヲ以ツテ之ヲ規定時間外九時間ノ殘業トシ基本的五十圓ノ月給ヲ以テ支給	九三 六〇〇
二、今漁期間中過酷荷役ノ荷物ハ千噸トシ一噸ニツキ十錢支給	九、七四八 〇〇〇
三、今漁期間中ニ於ケル慰勞金一名ニツキ七十圓支給	一〇、五七〇 〇〇〇
四、食料ノ不完備不完全ニツキ健康ヲ害シ船中ニ於テ一ヶ月間療養スル必要ニヨリテ損害額	七、五五〇 〇〇〇
五、下船中ニ於ケル一切ノ費用ノ支拂	一、〇〇〇 〇〇〇
總計	六六、九四五 六七〇

會社側を代表して交渉に當つたのは、四十を二三越した年輩の背の高い男で、始終左右を見るくせがあつた。

彼は要求書をつきつけて、三木が説明し、非難し、抗議する間に十數度も左右の通譯や書記と囁き合ひ、二十度近く無意味に首を左右にふり動かした。

「我々當人一同に關する一切の責任はアコ株式會社にあるものと信ずる。我々の要求は會社の違約、不正行爲、恥知らずによる非常識である。」

三木が大きく叫んだこの結びの文句だけは、彼はことなつた意味を帯びて超えて感じたらしかつた。彼は眼を暫く閉ぢ、

眼をすえて、二木の顔を眺めてゐた。

暫く通辯と話し合つた後、彼は卓子の上に手を組んで、半ば身體を乘り出してしやべつた。

通辯は言つた。

「一體九一金とは何を意味するものか。」

二木が說明しようとした時、木山が抑へた。

「罠があるらしいぞ。」

五名は顔を見合せた。

然し、兎に角答へないわけにはいかない。小野が代つて穩かな調子で說明した。

「九一金といふのは漁業主が漁夫に與へる賞與の事です。これは北海道の鰊漁場の通り言葉で纏め、漁業主は全漁獲の一割を骨折料として漁夫に與へたものですが慾が出たものか九分を漁夫に與へ、一分を自分でとるやうになつたのです……
……」

それで止めやうとすると二木が小野の尻をつゝいて言つた。

「不文律だと言へよ。不文律だと……。」

小野は狼狽もせず平氣でつゞけた。

「これは日本の漁場に於ては不文律でありまして、日本の漁夫を使ふ以上は九一金を忘れてはならない事になつてゐるのであります。」

「さうだ〳〵。」

「即ち、漁が多くあることは漁業主にとつては何よりも歡びでありますから、隨つて九一金もまた喜んで出すべきもの

と思ひます。

代表者のフリノフスキーは答へた。

「それは日本漁場の不文律であるかも知れないが、ロシアのあづかり知る所ではない。」

はたして罠が用意されてゐるのだ。

本山は諒解を示し乍ら質問を出した。

「然らばアコ株式会社はこれまで日本漁夫を雇つた時九一金をどう処理してゐたのですか。」

フリノフスキーの答へは意外だつた

「それは労働賃銀からさつぴいてをります。」

本山が味方にいつた。

「畜生ッ、九一金のことを知つてやがるくせに質問してゐるんだ。」

「太てい野郎だ」

大きな図体の、須藤は憤慨した。

本山はいつた

「貸與金を労働賃銀からさつぴくといふ計算法はありますか。」

この本山の質問は可なりひゞいたらしく、フリノスキーは少し顔を赤らめて右に座つてゐる書記に顔を向けてさゝやいたが、然し平常にかへつて鮮かに答へた。

「わかりません。」

「ネップ・マン奴ー」と、本山は大きく叫んで

「それで日本の漁夫は承知しましたか。」

「なんですか。」

「賞與金を勞働賃銀からひく不思議な計算法で日本の漁夫が承知したかときいてゐるんです。」

「承知しました。」

「馬鹿野郎。」

と、二木がどなつた。

「承知したんでなくて泣き寢入になつたんではないですか。」

フリノスキーは無言で頸をふつた。

突然、二木が昂奮して卓子をたゝいた。

「然らば、ソビエート・ロシア社會主義聯邦において勞働者を搾りとれと言ふ不文律があるのか。」

フリノスキーがそれに答へる前に、人々は二木を制止しなければならなかつた。

「それでは九一金以來の要求條項に對しては異議ありませんか。」

「いや〳〵。」彼は強く頸をふつた。

「私の方では前借として渡した金のうちから幾分返濟してもらふ勘定になつてゐます。」

そして彼は書記を別室に命じた。

歸つて來た書記の手にしてゐるのを見て、カムチヤツカ行の三名はおやつと、聲をあげたほど驚いた。行衛不明の彼等の賃銀手帳が眞新しいまゝに、書記の手に運ばれて來たのだ。

三人はその眞新しい手帳の色に、彼等の常套的な陥穽をまざ〳〵と見た。賃銀手帳に勞農ロシヤの勞働法によると勞働

を始めて三日内に労働者の手に渡すべき筈のものだ。彼等がイチンスキーに於てそれを要求した時、貨物の底にあるからと言つて、一週間あまりもかし、その後には船に乗つたまゝ浦塩に出航した。[illegible]、船中では左右にして渡してくれなかつたものだ。その筈である。貯銀手帳は会社の金庫の中から一歩も外へ出てゐなかつたのだ。

二木は火のやうに怒つてどなり罵りつゞけた。

しかし、マリノフスキーはその怒りを待ち構へたやうに平然とつゞけた。

「貯銀手帳に就て[illegible]近づいて来たものであるが、それには[illegible]働いてゐない。

随つて一錢も支払ふことはできません」

交渉は四日も続けられた。[illegible]マリノフスキーは平然と[illegible]。

みんなきいて下さい。[illegible]貴

「よし諸君、我々は[illegible]ソヴエート・ロシアは[illegible]。その××は世界の××である。我

代表は××の労働[illegible]の[illegible]。我々は[illegible]誰でも知つてゐる[illegible]

なのです。[illegible]××××となつた……」

人々は指をかんで[illegible]。二木は昂然としてつゞけた。

×××の宣言が絶たない限り、ここでいきたい[illegible]。プロレタリアの魂を汚辱する為に生きてゐる問題だ。貴様はこの宣言を

一貴様等は、否に、貴様等は、[illegible]の奴、プロレタリアの魂を[illegible]プロレタリアが[illegible]。貴様の[illegible]

後に貴様の一同[illegible]

一下[illegible]

我々はこの寫眞に見る露國政府の様のやうにソビエート共和國が赤い、共同で信ずる、どこかが現はれるのを……」

二木の言葉は昂奮のあまりしどろもどろであつたが、壁を指して語つた瞬間は涙をさそう凄さがあつた。しかし、そのまゝ決裂しては百五十一名の人間が郷里に歸れないばかりか餓死しなければならなかつた。

木山は巧にその場を救ひ出した。彼は小野と高山に言ひつけて二木を外へ出しておいてフリノスキーに言つた。

「兎に角、あなたの希望のやうに裁判所に訴へるにしても、今明日中に埒のあくものでありません。我々は現在、旅館の拂ひ、歸る旅費を持つてゐないのです……兎に角今日は一日ひきあげて熟議の上明日また來ますからあなたの方でも考へておいて下さい。」

そして、フリノスキーが諾否を與へぬ間に笹山をさそつてさつさと出てしまつた。

交渉が救ひ難い點まで來てゐることを誰も感じた。鐚一文も出さうもないのだ。しかし、問題は出さうもない、あるよりも身の處置にあつた。その處置をつける金丈は死を決してもアコ會社からとるより外に途がなかつた。

彼等の考へは一つしかなかつた。ストライキの最初の方法であり、最後の手段……大衆を動員することだ。

數人は忽ちのうちに各所の旅館に報告を兼ねて、翌日の準備に飛びまはつた。その潑溂とした自由さと敏捷さは小作爭議の場合と少しも變りなかつた。

翌朝、午前九時、百五十一人の百姓は、花園旅館の前に勢揃ひした。全體を三十名宛五つの部隊に別ち各部の前後に二十三名がそれぞれ配置された。そして、いざの場合は、それぞれ分散、集合の用意が十分打合せられてゐた。

函館街はまだ十分潮の冷さを失つてゐなかつた。彼等は一般勞働組合から持出した四旒の組合旗をひるがへしてうごき出した。

桃色の砂原は立上り、勞働歌が高らかにうたひ出された。見上げる空は晴れて碧かつた。右折して東に進行すると函館の山々が鮮かな緑を持つて迎へた。

時ならぬ行列は進んだ。メーデー歌はいつか、×××にうつり、その闘爭たる生活の行進に結びた窮乏の實感はふるひ出した。

街の人々は群がり集った。

おどろき、奇異の眼をはり、さゝやき合った。そのさゝやきが次第に大きくなり、ストライキだ。暴動だ。と口々に、所々に飛び散った。

彼等の行列はくね／＼右折に左折した。それは交番を避ける為だったが、××町にあるアコ会社へ行くまではどうしても二つの交番を過ぎねばならなかった。彼等はその危険を予期してゐた。一つの交番は××町の中央道路と行列が交叉する所にあった。そこまで進んだら彼等は直ぐに中央道路を行進するつもりだった。

その危険區域に來た。警官の警笛がなった。彼等は歌を止めて小學生徒のやうに一二々々と叫びながら走った。交番の巡査が狼狽て、飛び出して來た。彼は口に何か叫んだが、人々はかゝはらなかった。

その關門を過ぎると彼等は勝足をゆるめて再び歌をうたひ出した。ブルジョアの櫛比してゐる××町はこの異様な行進に狼狽し驚愕し呆然自失した。

市民は群り集った。市中はます／＼混亂が増して紛亂した。そして行列が××町まで進んだ時、先頭にたった人々は數名の巡査が多くの××をぶらさげて接近してくるのを見た。

二木は叫んだ。

「散れ！　アコ会社へ」

「アコ会社へ」

「××だ！」

「アコ会社へ」

「××だ」

各部隊は忽ち崩れた。後方と左右の道路へ……………そして××が電車から飛び降りて、怪我をして、彼等を家へやうとしたが、その場面には既に一人の百姓も殘つてゐなかつた。

6

警官は何事の示威であり、何處へ散つたかを詮索してゐる間に、人々は微笑しながらアコ會社へ集つて來た。彼等は少しも騒がず會社の周圍をとりまいて胡座をかいた。それが三十人となり、五十人となり、百五十人と增加して行つた。そのさまは漁夫等が會社へ金をもらひに來て待ちぼけを喰つてゐるに酷似してゐた。

しかし會社の内部はさうでなかつた。フリノスキーは狼狽して警察に援助を求めた。二十名に近い警官は今度はトラックにのつて駈けつけた。しかし靜かに胡座をかいて賃銀の支拂を待つてゐると言ふ人間に解散を命ずる事が出來なかつた。交渉は續けられた。

しかし、要求條項は全く新たなものにかはつてゐた。

我々は正しい我々の要求に對しては、君と爭はうと思はない。

我々はソビエートの××た勞働裁判に持ち出さう。

然し今、我々には宿料がない。郷里へ歸る金がない。それをつくり出す手段は一つとしてない。否、アコ會社あるのみだ。

それを出して貰ひたい。

出さなけや我々はアコ會社の前で餓死するより他にない。

會談に二時間費された。

その間、しばく〳〵開けはなたれた窓から怒嗟の聲が聞えて來た。

メーデー歌を歌つて止められ、革命歌をうたつてとめられ、ある時は突然叫び出した「我々プロレタリア……」ののしられた議論が湧きあがつて来た。

交渉はおはつた。

フリノスキーは背後のレーニンの冷たい眼と、群集のざはめきと、しぼりとられる二本の戦線におそれを抱き始めた。若し、之が総動化した組合数千余の指導と示威、アコの漁場が没収されねばならぬのだ。

遂に彼は否をならした。

「前借と旅費を出しませう。持つて行きなさい。」

通訳はわざとそんな口調で傳へた。

戦闘は、一先づ終つた。

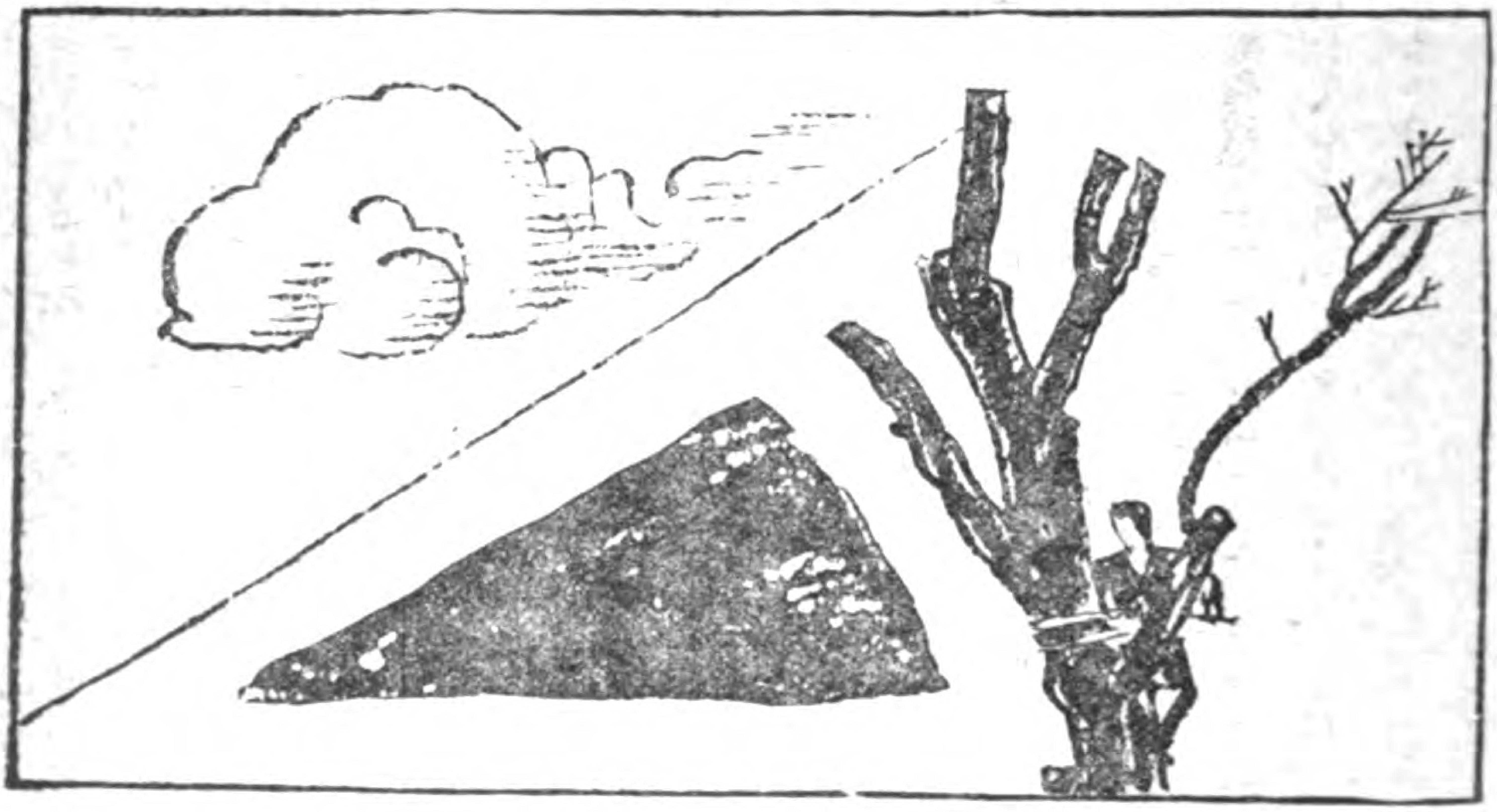
しかし、十分に終つたのではなかつた。その翌日北海道労働組合の上部で開かれたカムチャツカ漁業出稼者大会は開會も十分にして解散を命じられた。彼等二十三人は、木を握つた十数名の××に向つて論壇に飛び上つた。そしてことごとく××されて豚箱に叩き込まれた。

しかし、作者はこの状況を密かに語ることを避けて次のごとく結びたい。

労農漁村十二萬、都市十二萬、商作同盟、高等々、洋務の機場に働く無数の何物でもない商人な命様が、両端には行はれてゐる悲しい事實を見ねばならなかつた。

たゝき込まれたのは、かつきり二十三人である。

（一九二九・一一月）



脈打つ血行

武田麟太郎

1

工場から押し出されて來る勞働者の群れは暫くの間、この町通りに、ひつきりなしに續いてゐた。からの辨當箱を抱え込み、聲高にしやべつてゐるのがゐる。ナッパを着、外套もないので寒々と兩手をヅボンにつゝこんで、板裏草履の音を立てゝゐるのもある。キャッキャッと叫び聲をあげながら、赤い毛絲の肩掛に胸を押へて、表紙のちぎれた婦人雜誌を持つた女工たちもまじつてゐた。――それらは、ぞろ〳〵と續き、やがて、不規則に重なりあつたバラックとバラックとの間に、消えて行つた。居酒屋ではコップ酒をあふつてゐる中年の勞働者。ガアド下の燒鳥屋の、風にバタバタするのれんの下にはゴム靴が四つ並んでゐる、その間に大きな野犬良が首をつゝこんで尾を振つてゐた。草もない野つ原の水溜りを避けながら、鼻

々ラシの子供をせをつた若い女房が走つて來る。寄切屋の小僧が皺だらけの反物を新聞紙に包んで、彼女に渡した。時々、打ち水はシバシバ凍りついて、路は固い。風の中に、安來節が向店から木柝を鳴らして客を呼んでゐる聲が傳つて來る。町通りは恐ろしくさびれきつた。——その中を村木は歩いて來た。

ラヂオ屋の店さきに、暫くJOAKの講演に耳を傾け、それからその中へはいつた。ラヂオ器具の間から、禿げ頭が出た。こゝの主人だ。このラヂオ商人はこの頃、政黨同盟員として熱心に働いてゐる。村木は二階の上に通された。逢ふことになつてゐる東京××組合本部の岡部と太い首をした彼は和服の股をひろげて、炭火に跨つてゐた。彼のうしろに、岡部に劣らず大きな男が、詰襟服を着て、眼がねを光らせてゐた。村木君と岡部は云ふ。實はこの原君に當分宿をかして貰へないかな。原は今まで無政府主義の組合にゐたが、その運動をやつてゐるうちに、××××の×しさを知つた。そこで、こちらの組合へやつて來たんだ。」と岡部は紹介した。

原と村木は暫くはにかみ合つた。村木は、「いゝ、今、ぼくひとりだから」と承諾する。二人が暫く見てゐるうちに發見した。原でも、人を見る顔の中に、村木の親しい弱い顔の中に、幼年時代の顔が殘つてゐるのだ。原の方から云ひ出した。

「きみは村木君ぢやないか――東村の村木、木村だ。ぼくは山本――山本守一ですよ」

さうだつた。二人は幼な友達であつた。同じ村に生れ、小學校の同級生だ。奇遇である。

しかし、二人が[illegible]についての話をする時はなかつた。二人は時計を見て、[illegible]の家に移つた。そこにまで來る同志たちの相談事である。[illegible]間に、小さい[illegible]が明るい影を壁につくり、煙草が隣に吸はれ、吸ひ殻が[illegible]投げこまれる。煙草が[illegible]部屋を[illegible]、[illegible]ロシアのクロ[illegible]赤い[illegible]時計を見、イライラする。それから、[illegible]は

極めて落ちついて、答辯し、説明した。こんな場合は速くなつてはいけないのだ。散つて行くやうにも眼立つたらう、深夜歩きは、徐行にとがめられて、とんでもない危險にあふ恐れもある。——だが、遂に散會の時が來た。

村木は小さいので原の肩までしかない。ならんで歩き出す前に、白い息を夜の空氣の中に吐きながら、お互のポケットを調べた。何もない。誰何されても大丈夫だ、歩き出した。多くの眠つてゐる家々の裏を通り拔けて土手に出る。河は流れ、枯れ葦が風に鳴つてゐた。暗い。暗い。道もはつきり見えぬ。こゝへ來て、やつと二人だけの話ができるのだ。話をはじめた。この奇遇があるまでの十年間、彼等は何をして暮して來たのだらう。橋の袂へ來た。しかし、對岸に赤い燈の交番があるので渡らない。原は澤山の話があつた。——

彼等の生れた田方村は細長い半島の南西の端にある。崖を背負つて、三十戸たらずの傾斜した村落だ。漁船は砂濱にあり、村の小學校は海から風と光とを受けて、ガラス窓をキラキラさせてゐた。學校は教室が一つなのだ。山一つ越えた宿場の瀬良村學校の分教場格になつてゐる。二つのボールドが鈎の手にあり、各々上級生用と下級生用とになつてゐた。敎へを年々つゞけてゐる菅野先生。上級生は少しだ。大きくなつた子供を學校に通はせて置く餘裕は、この村の住民たちにはない。子供たちは船の手傳ひをし、縣廳所在地の町に賣られ、遠くは東京までも少年工として勞働に出る。——原も、母と妹とを殘して東京に出た。洋服仕立屋の見習。飛び出して木型職人。飛び出して自由勞働。食へない。職がない。無政府主義者の組合にはいる。暴行罪で二ヶ月。再び自由勞働の生活。まじめに考へ出す。まじめになると、こちらの組合へ行きたくなつた。永い間、考へてたうとうやつて來た。——「俺はどうかして、勉強して、黨員になりたいのだ！」一九二九年二月。去年の×月の傷手以來、再び活潑な運動を工場の中に根深くはじめた××××黨はちよつと物を考へる××者たちのあこがれの的になつてゐた。その表面には見えず、しかし生き〳〵と脈打つ大動脈のやうな組織の同情者と協働者は、勞働者町の中では實に容易に××れたのだ。それは、それに對して反對と憎惡を表面してゐる社會民主主義者の

霧合の中にも增え出してゐた。今、彼も亦、それに對して燃えるやうな眼を輝かし、胸をドキドキさせる。——
汚水の陸橋を渡つた。ゴトリゴトリと枕木を踏み、遠い青いシグナルを見る。越えて、再び少さな運河に沿つた。油の
やうな河には汚穢船が眠り、工場のトタン塀には、薄暗い軒燈に照らされた「貼紙嚴禁」の木札と犠牲者救援會のポスタ
アが見られる。工場と工場との間を通る。——

村木は村の眞宗布教師のせがれだ。小學校では賢いので、菅野先生に可愛がられ、それから僧侶養成の上級學校にはい
るために、上京した。卒業後はどこかの寺の住職になれる。だが、彼は段々深く、僧侶になる道をにくみ出し、わかつた
學問をした。その學問は僧侶が眠りこませようとする被壓迫民衆をめざめさせるものだ。學校から追ひ出された。——

ガラス戸をあけ、ボール紙の裁斷機のある板の間を通る。そこの二階に村木が下宿してゐる。赤ん坊が母親の乳房の上で
泣いてゐた。階段を昇り、スヰッチをひねると、小さい部屋が現れた。兩側は一間しかなかつた。だが、うまく都合す
れば、二人位は充分寢れる。二人ともそんな寢方には慣れてゐた。疲れてゐる原が眼かねをはづし、蒲團の中へもぐりこ
んだ。きみはまだ起きてゐるの？「今晩けだ」村木が答へる。彼は生活[illegible]のために「室内遊戯必勝法」を書き出した。机
の上には二三枚の原稿用紙が置かれ、ペンが[illegible]下には[illegible]原稿[illegible]頭がだるくなる。きみはマア
ヂャンの遊び方を知つてゐるかね　「判らん」。
事實、村木は今書いてゐる遊戯については何一つ知らない。トランプも花合せもマアヂャンも撞球も。しかし、彼は
それらの方法を讀み、[illegible]秘訣をもつて[illegible]。出版屋にとつては書き手が誰であらうとも構はないのだ。この本は
[illegible]興味のない原稿を作ることほどはかどらぬものは
ない。しかし、一冊いくらの[illegible]

菅野先生は初年級のボールドを離れると、三四五六年用の方へやつて來た。四年生のためには大名と云ふものを說明せねばならぬ。大名と云ふものはお互ひに勝手に戰爭をして領地と云ふものを分けあつて、そこの百姓から作つた米をとりあげる。一種の××でした。これが今は華族さんになつてゐます。算術。汽車が一時間に何マイルと云ふ應用問題が出る。あゝ、汽車よ。それから都會。先生は東京に行つたことがある。東京は美しい處であらうか。先生はそこで疲れた暮しをしてゐる人々のはなしをする。金持は貧乏人を使つて、食べ物や必要な道具を作らせる。貧乏人は働いてもうまいものも食へず、必要な道具も買へず、相變らず貧乏する。それから六年生のために身體のソシキの說明。誰の身體もこんな風になつてゐる。どんなにえらい威張つてゐる人も、この肛門から大便をハイセツするのです。

菅野先生はこの窮乏してゐる田方村に生れた。小さい時に上京して、郵便局に働きながら苦學をし、正教員の免狀をとつて歸つて來た。彼の教へることには、幼稚ながら、苦しい生活が教へた反抗の學問が含まれてゐた。

子供たちは耳を傾けてゐる。子供の原や村木もゐるわけだ。その時、突然、藤山イナ子と云ふ女生徒が泣き出した。先生が驚いて教壇から下りる。うつぶしたまゝ動かない。やがて事情が判明した。母親がゐないので、呼びにやられた父親が着更へのものを持つて來、彼女をつれて歸つた。村役場と兼用の小使が教場の床板の血を洗ひ潔めた。

イナ子はその日から、スが日の顔を教室に出さなかつた。額際の生えあがつた父親が彼女に一張羅の着物をきせた。用意ができると、山を越え、隣村から乘合に乘り、輕便の三等の切符を買ひ、縣廳所在地に賣りに行つた。十年前の山の樹が鬱勃とした春の氣を孕んでゐる三月はじめのことだつた。——

それから生活は種々な處へイナ子を押し流した。彼女は今東京にゐる。東京のビルディングの事務所に働いてゐるの

た。窓から午后の陽が射すので、ブラインドをおろさうとした時、彼女は建物の下に、黒い群衆の争ひを見た。ストライキ団の旗をたてた労働者たちだ。彼等の群が、その中に飛び込んで検束をしようとする警官たちと闘ひ合ひ、小さくはねかへりながら、彼女の耳にはいつて来る。分明した。それは彼女のつとめてゐる会社の分工場の職工たちだ。彼等は分工場の[illegible]をキツカケに日頃の不平をぶちまけて、争議を起してゐた。けふは本社までデモを行ひに来たのだ。エレヴェーターも、階段の要所を、守衛のサアベルによつて固められてゐる。社員たちの間に大きな動揺が来た。彼等は仕事に手もつかずに立ちあがり、窓に重なりあつてこの連中を眺めた。その時、遂に三人の荒くれ男たちが警戒を突破して、事務所の中に飛びこんで来た。

「社長に逢はせろ！」

給仕が走る。おルスですよ　ゐないなら、課長を出せ一給仕が走る。大へんお忙しいので」

しかし、頑丈な男たちは課長室に入つて来た。新しい要求をつきつけて、すぐに回答しろと云ふのである。すでに争議団員全部は解雇されてゐる。それを取消せ。

「何分熟考いたしました上で、御返答致しませう」いつだ、いつだ」

「さあ、期日のことは――」落ちついて云ふ。

一人が、テーブルの傍まで迫いた。[illegible]の上には、いかめしい警官の何個かのうちに、争議団員は、今晩のストライキのために特別に作られた歌をうたつてゐた。

夜通し[illegible]。次の日は、朝から工場閉ざかれ、ストライキのサツシユ工場はすべて分つた。しかし、そこには一語も休業[illegible]つてゐる。新聞が載せてゐる[illegible]は、彼女をチラチラ見て、何も答へてくれないのだ。争議団[illegible]石炭[illegible]、織物組合[illegible]彼女[illegible]た。[illegible]スト

ライキの事なんか知りませんなァ、といふ。なんですか、あんたはそこの人とどんな関係がおありなさるのか。冬の日はこの閑散な家を照らしてゐた。

その日は遂にムダに暮れた。汚れた町を、元氣を落して彼女は歸る。おなかが空いたので食堂にはいると、勞働者の臭いにほひにムッとした。下宿で又、一晩中考へた。

翌日、たうとう見つけた。普通の家だ。二階に多くの旗を立て、爭議團本部は湧いてゐた。「本社の事務所に來た人におはせて頂戴ね」かう彼女は切り出した。ナッパ服たちはこの白粉を塗つたスガ目の女にびつくりする。何者だらう。事務所に行つたのは八十七人全部だよ」

「ちがふのよ。三人で課長さんをトッチメに來たでしよ。そのうちでいちばん背の高い――」

「グリグリ頭のかね。――伊藤君！」

呼ばれたグリグリ頭が、手拭を首に卷いて出て來た。御用は？

「わたし、お願ひがあるのよ」彼女は見廻す。男たちが眼を見はつてゐる。「ちよつと、表まで出て下さいな」

「困るな。忙しいのだから」「でも、ほんのちよつとよ」

表へ出た。子供が繩飛びをしてゐる。角の產婆の家から產婆が出て行く。表通りの吳服屋では乳を出した朝鮮女が白い布切を買つてゐる。アヅキ屋にはいり、イナ子は田舍しるこを食ひ、爭議團員へのお土產に大福を一圓だけおごつた。話がつゞいてゐる。

「さあ、とにかく俺はかまはないのだが――」と伊藤は迷惑な顏で云ひ澁つた。

「ねえ、いゝでせう、いゝでせう。いいのよ。いゝとおつしやいよ」

「俺は元來をんな好きだから、いゝのだが。今は困る。とにかく、ちや、暫くこちらの手傳位をしてゐて下さい」

そこでスガ目のイナ子は爭議團本部で働くことになつた。伊藤の妻になるためだ。

夜になつて二人の男がやつて來た。大きいのが阿部で、小さいのが村木だ。イナ子は見てゐるうちに、びつくりした「あつ、お寺の坊ちやんだ！」

3

傾斜した川ケ村の中央に「旅人宿」がある。然し、こんなところへ旅人はめつたに來ない。大低、地酒を時たま飲みに行く場所になつてゐた。井上はこゝのせがれだ。彼は東京に出て、映畫俳優をしてゐた。家の方では、彼からの送金を待つてゐる。しかし送金どころではなく、井上は苦しい暮しをしてゐた。いつまで經つても研究生の名優だ。月手當十九圓。もう一人の仲間の肥つちよの北村と、小さい部屋を借りてゐた。會社の方では技術によつて、次第々々に昇進させ、月給を增さうといふ。何ごとも諸君の藝術のために忍んで下さい。あゝ、藝術のために！　井上は暇をもらつて歸つて來た。

川ケ村は彼が東京へ出た時から大分變つてゐた。交通の不便と山間の土地のないために人々はます／＼没落へと進んでゐた。それに村人の唯一の生活を保證する網と船とが二人の山村の手に納められようとしてゐる。米櫃はからだ。村には原始的な協同組合のやうなものがあつた。そこに網と船とがあり、組合員が納入するものはこれに依つて收穫し、利益を分配してゐた。しかし資本主義の觸手はこの村にも來、人々は組合費の捻出にも困り出した。すると、[illegible]の手から組合株（一つあい、收穫の所有權）を擔保に、時價の借金をさせる男が出て來た。人々はいよ／＼この金を借りねばならぬやうにも動きがとれないのだ。少しの金でも借りる間はよかつた。それが今度は、[illegible]協同組合の[illegible]にまで、網元が自由にしてゐる、になつた。[illegible]

らないのだ。魚類に待ち構へてゐるトラツクに積みこまれ、山を越えて持つて行かれた。如何にくらしをたてゝるか。なものは都會へ逃げ出し、老ひさらばへた者は、その仕送りによつて、わづかに死ぬ日を待つてゐた。

原こと山本幸一の家では中風の老母が、頽れた縁側でボロを纏つて、日向ぼつこをしてゐた。妹のヨシ子はゐない。町の製絲會社で働いてゐる。彼女は三年の年期を終へて、一度母の側に歸つて來た。しかし、村の生活は、製絲會社の地獄よりひどい。彼女は他の村娘四人と一しよに再び資本主義と搾取と虐使の中へ飛び込んで行つた。辛うじて生存するために。——母親のたよりないひとり暮し。古いカサカサの乾魚が軒端で風に吹かれてゐる。彼女の身體は次第に衰弱の度を加へる。

村へ歸つた井上がこの老人に呼びとめられた。

「さあ、東京と云つても、こんな村にゐるちや分らんほど廣いんだからね。幸一君がどこにゐるか——逢ふことなんかないよ」

「さうかの。ぢや、お手數かけてすまんが、會社のヨシ子に歸るやうに手紙をかいて下さらんか。歸つて貰はにや、不便で、不便で——もう、としよりの病氣と云ふものは——」

——手紙を書く。ヨシ子や。母は死にかけてゐるのぢや。はよ、歸つて下され。

菅野先生はとうの昔に首を切られてゐた。彼は危險思想の所有者なのだ。縣視學がさう云ふ。病氣をした。幼少の頃からいぢめて來た身體は（いたはることができなかつたのだ）今になつて、彼をいぢめ出した。胸を波はせて、烈しく咳をする。安靜が必要だ。先生をしてゐる頃から一しよに住んでゐた女に日用品いろ〳〵屋を經營させ、その奥の間に寢てゐる

た。夾竹桃が花をつけ出した。

先生は井上に桑村—即ち村木—のことをきく。もとより井上は知らない。彼にしろ、原にしろ、この村に警察から、しよつちゆう身許調べの照合が來るので何をしてゐるかはウスウス理解される。先生はもつとはつきりした事を知りたい。彼の××が蒔いた種が成長してゐることを信じたかつたのだ。

村の駐在所から、わづかに殘つてゐる青年たちへ動員令が來た。京都の本山から高僧たちが派遣されて、瀬良村で、近村の青年全部を集め、思想善導講演會が開かれるからだ。駐在の大々的な後援なので、この村の青年たちも、それを聞きに行かねばならぬ。井上にも行けよといふ。

「こんな馴氣なんですぜ。山を超へられませんよ」

駐在所は催促する。ぢや、歸つて來た時はどうして越えた理屈である。しかし、あの時は魚を積む空のトラックにのせて貰つた。夜の山道を提灯を持つて行けるものか。

その日、隣村の小學校の講堂では、わざ／＼据けられた大きな佛壇がきびしく飾れ、敷かれた席の上では若ものたちが十人ばかり坐つて、緊張をしてゐた。井上のことも話される。トヤマといふものは、小作や漁をするのとちがひ、ぼらぼらと遊んでゐて、いゝ金になるさうな。おきみ婆さんの伜が好みの時。同へ出て選擧をやつて出世をはげんでゐる山崎のこと。肺病といふ病氣のはなし。如何にいゝものを食はせても、摂が多いから肺病になるんだ、と一人が説明する。これはうそださうだが、働けないは熱をといつてゐるかも知れぬと反駁する男。——俳々、高僧たちは來なかつた。忙しい時間をとられた上で一ぱい、われらの十字も行かように！——疲れた表情に眠氣をさへ覗かせ、時間はどん／＼經つた。

都便からトりでから乘つた高僧たちの自動車は、山道で故障を起した。沖樹下は中山嶺を出して、中台の下にもぐり

込み、中々出て來なかつた。故障はどうにもならぬ。自動車は動かない。高僧たちはイライラした。もう西行も通らぬ。あすの朝まで待つか、歩いて行くか。歩いても夜中までかゝらう。遠い山の端の最後の殘光も消え、すでに迫つてゐた濃い夜の氣はすつかり彼等を包んで了つた。お互ひの顔も見えない。高僧たちは憤つて、運轉手を（運轉手はこの車の持ち主ではない）足で蹴つた。寂しく靜かな山道で、肥えた僧侶たちの大きな影がヘッドライトの前で揺れてゐた。

製絲にゐるヨシ子からは何とも云つて來なかつた。彼女自身も姿を見せない。井上は再び手紙を書かされる。返事がない。老母は一日々々と衰へた。遂に老人は云つた。

「町の警察に頼んで、歸つて來るやうにさとして貰ひたいのだがな」

一つの望みをかけた。町の警察では下手な文章で書かれた、娘の歸宅方說諭願ひを見て笑ひ出した。探訪に來た新聞記者が何ですか、とたづねる。はゝゝ。婆さん、可哀さうに。はゝゝ。幾ら手紙を出しても、娘の手に渡つちやゐないんだ。はゝゝ。渡るものかね。製絲會社の寄宿舍では手紙は一つ〳〵開封され、タメにならないのは、讀ませないのだからな。その日いゝ種がなかつたので、新聞記者が早速これを記事に書いた。不孝娘母のキトクを見すてゝ歸らず――新聞は村役場へ一つ配達されて來る。讀んだ井上が驚いて母親にきかす。老母は泣いた。おゝ、わたしは何の因果ぞ。揃ひも揃つた不孝な子供を持ちました。――それでも娘は歸つては來なかつた

夏にならうとしてゐる。海は終日鉛色に曇り、沼からは蚋が湧き村中に一杯になつた。その中で宮野先生は次第に瘦せ、井上の脚は恢復した。事實上の網元に對する怒りは家々の間に、自然發生的に滿ちて來た。

本社の女事務員が争議団に働いてゐることが分ると、イナ子は首になつた。これは勿論、後明したことであるが、彼女は伊藤と一しよにされ[illegible]で行けると思つてゐた。[illegible]ないのだ。伊藤は組合の力によつて関係してゐることで、[illegible]工場を休んだ。しかし、そのサッシュ工場は彼を××することは出来ない。ストライキに勝つた後、その工場では組合は公認され、工場委員会は改選の結果、左翼で占領して了ひ、彼等の力が強くなつたからだ——しかし、支拂ひは僅かである。この新な労働の生活をしながら、彼女は夫の古いレインコートを着、長靴をはいて泥濘の町を行つた。食つて行けるか××を叩きつぶさうとする意欲が切実に彼女に来た。そして、それは叩き×××るのである。白粉気をなくした顔は元気に充ち、不規則な生活にも係らず、頬は健康のために輝きだした。彼女はしかし、この異様な服装をすぐによさねばならなかつた。詛はれた風采をして、呪はれた仕事をすることになつたのだ。草木のない町から、遠く海の見える工場町へも行くことがあつた。彼女の知つてゐる海は美しかつた。こゝのは何と云ふ泥色であらう。

春の中ば、風が吹いて来た。ずつと以前から不在してゐた伊藤はその網の目から逃れた。けれど、再び公然と姿は現さないだらう。×月××日。

ボール紙の[illegible]けれ[illegible]ますと、四人の男が枕許に立つてゐた。昨夜来、寝床の中で書いた原稿がちらばつてゐる。宇内運動法、[illegible]出版法の引受、[illegible]の原稿だ。何、何、と四人のスパイがとりあげた。[illegible]——！[illegible]び出したのです。娘はすぐに小作を見つけて、これはいゝ獲物とばかり、飛びかゝらうとしました。けれどもいきなり役つてはいけない。目かゝすることは控に通つてゐるやうに見せかけてからにしようと思つて（この悪ものめ！　お前はその汚い目で、この静かな宿の娘を泥みかき廻はし、わたしの大事な飲み水を濁して了つた。無礼なことをしたからにはお前の首を引き抜くから）とどなり——」何だ、おときはなしぢやないか。きみ一人か、原はどこへ行つた。それから、村

木は四人に圍まれてヅボンをはいた。何で行くのだ。泥醉狀行によつて保護檢束を加へてやるのだ。——家宅搜索がつゞいてゐる。

原は訪ねて行つた勞働者の家に泊つてゐた。彼はその勞働者の働いてゐる工場へ紹介してもらふことになつてゐた。髮を短くし、田舍織の和服を着て、出かけ、試驗を受けた。その川べりにある小さいが政府から特別の補助金の出てゐる鐵工所へはいらうと云ふのだ。新しい世界戰爭の來るのを充分知つてゐる××は、その用意のために、こゝでも重器の部分品を製作してゐた。それは從事してゐる×××にはちつとも知られてゐなかつた。こゝに原の×くべき場所がある。やつと、期限つきの臨時工として採用さるゝことになつた。紹介してくれた温厚な勞働者の家に歸り、夕飯を御馳走になつてゐると、本部の太つ首の岡部がのつそりはいつて來た。彼とは今夜、こゝで打ち合はせすることになつてゐる。しかし、彼の告げたのは、今朝の變事だつた。暫く潛まねばならぬ。岡部は各工場のフラクションとの連絡のために、原は工場の門の中に×れて働くために。×月××日。それから、時間は流れた。

井上は再び東京に來た。あひかはらず映畫俳優として働くのだ。何時かスタアになる日があるだらう。彼がもどつて來ると、撮影所は彼を新しい研究生として待遇した。鏡前がビリに落されてゐる。ロケーションに出た。河原での亂鬪だ。すでに夏前の日はあつかつた。朝早くからした化粧は、主演俳優の遲着のためにくづれて了つた。ピンツケが顏の皮膚の上でピリピリする。かゝつて行き、バツサリ斬り倒されて、礫の上に身を投げる。痛い。——一休みが來た。午后は彼には船から水の中へほうりこまれる役がついた。五十錢の臨時收入だ。だが、撮影所はこれを現金でくれずに切手でくれるのだ。晝飯として餡パン袋がバサバサと分配される。食はうとして開くと、騷ぎが起つた。袋の中からビラが飛び出した

つた。

――スタアが參觀して、ひどい搾取の下に働いてゐる映畫俳優諸君！　諸君は默つて行けるか。僅少ッぽちの給料しか拂へないといつてゐる會社では今度、三割の配當をやつてゐる。その金で月給をあげろ。俳優幹事の不當な役付反對だ。昇進制度を改革しろ！　幹事の公選！　監督連中の藝術制作を名とする我々を非人的存在として酷使することに反對だ。八時間勞働にしろ！」

白いビラはカメラの上にも小石で押へて置かれ、ぬいだ監督の鳥打の中にも見出され、レフにも糊ではりつけてあつた。

撮影は中止だ。その騷ぎの中に、見物のうちからスバシコイ男が現れて、ビラと同樣の演説をはじめた。一群の捕手たちは、彼をとりかこんで喝采した。「映畫從業員組合にはいれ！」

その夜、井上は同宿してゐる同じ俳優の北村と一しよに深夜喫茶へやつて來た。そこに井上の愛人がゐるのだ。彼等は、途中で、けふの事件についていろいろ話しあつた。あれに書かれてあるのは實に見事だつた。我々は實際撮影所の惡を見すごしてゐる。しかし、組合にはいるにもすこし考へなければね。井上の愛人の存在は、兩腕に深い刺物の跡の傷をこしらへて、稼いでゐた。彼女は十七歳のころここに勤め、すでに四年經つ。田舎から來た時の子供じみた身體つきは、今は太々しく成長してゐた。

も少しで借金がぬけたら、自前で働いて、五分々々の分け前にして貰はう」と井上に語つた。

「一寸話。いつまでも出てゐられやしないし、いい加減にするつてことも考へなくちやね。」「お前さんもしつかりして呉れないと困るよ」と圓顔の女はいつた。しつかりしなければならぬ。女と別れての歸途、疏水に沿つた工場から殘業をすませて出て來る勞働者たちに出逢つた。その中にこちらを見る顔があつた。子供の時に見知つた顔だ。本當にさうだつたらうか、りますまいか。大きな聲を出して呼んだ。「山木君！」

呼ばれた若者は逃げるやうにと振りかへつたやうであつた。しかし、彼は足早に薄暗い工場の塀に沿つて逃げ、消え、やがてどこかへ折れて了つた。たしかに彼だつたが、

井上は肥えた北村に云ふ。「あれは俺と一しよの村の男で——さうだ、主義者なんだ。ひよつとすると、けふの脱出者は組合と關係があつたかも知れん。惜しいことをした」

ふと、彼の眼底に、中風の山本の老婆、どうしても歸つて來ぬ「不孝娘」——それから自分の教へた子供たちに期待してゐる菅野先生がうつゝた。歸つて、婆さんに手紙を書かう。「幸一君は無事にゐますぞ」

黨との關係が不明なので、村木は住所不定で二ヶ月くりかへされた後、檻から出た。世の中はすつかり夏だ。厚い冬服の下で背すじには汗が流れ、虱はゾロゾロと首へ這ひ出た。ボール紙屋の二階を簡單に整理し、出來かけてゐる童話の原稿を赤本屋へ持つて行つた。しかし、もうその本は他に執筆させてすでに出版されてゐる。同志と連絡を取る必要がある。しもたやの美しい壁にビラが醜く張りつけてあつた。書いてある。「勞働者をしぼりあげて發狂ひをしてゐる××のおやぢをやつゝけろ。××鐵工所爭議團」これは原がはいるはずになつてゐた工場だ。ストライキをはじめたのだな。あすこは××の特別の庇護があるから、干渉は恐ろしく烈しいだらう。原がゐるにちがひないアジトはどこだらう。——この塀一面ビラを張られた家に鐵工所主人の妾が住んでゐる。彼女は病氣になつて了つた。表面上爭議團本部になつてゐるところへ村木は來た。スガ目のイナ子がゐる。「伊藤君はまだやられてゐないらしいね」「えゝ、さう」と云つて、彼を片隅に連れて行つた。

「あなたに逢ひたがつてゐるのよ。こゝにゐますわ。あなたに要事があるらしいの」

伊藤は郊外にある小説家の家にゐる。小説家と云ふものには××主義運動の同情者が多い。しかし、今まで少しでもその同情を表明した者の家は近頃は、嚴重に密偵されてゐる。黨員が利用するからだ。今、伊藤のかくまはれてゐる小説家は明治文學界に活躍し、道德家としても聞えた、もう六十ばかりの高名の人であつた。村木は笑つて出かけた。郊外へ來

て、彼は樹々の青さの傍らに眼が奪はれて、閉めたりすつかり見た

5

彼には心配する位のこともなかつた。映画従業員組合へ入り所のはよくにあつたのた。彼は撮影所の同僚の家へ行はかる懇談会に招かれた。喉業をいただけで、会費は要らない。といふので、肥つちよの北村と出かけた。少し早いか、幹部係が現れた数人のの部長をさして行つた

部屋は狭くてガヤガヤした。その壁にもたれた小さい男が、はいつて来る彼等二人をチラと見あげた。彼だ。彼があの仙で演説をして逃げたのだ。懇談会は始まる。こんなにいろんな集つた機会に、日頃の不平をぶちまけようではないか。不平か、不平なら、いくらでもあるのだ。第一は役の振りあてのことだ。俳優監督の野郎、入社の時に五十圓、折々の送りもしなければ、一生涯端役だ。早くいへば、役をつけて貰へない。会社の重役の華族様の肝入りで、会社の放蕩息子が入社して一躍、スターとして宣傳され、頭の悪い大根ぶりを発揮することなんか、きつぱりだ。技術を勉強してゐるいを認める制度を作れ。あの監督は六時間も七時間もぶつとほしで撮影をつゞける。芸術家ぶるもんだか、然し、乱用する我々は！集合時間が厳守される。要る時間をきいて行つて、四つばかりの衣裳のまゝ、夜までも待たされることは反對だ。小さい男が不平を話さする。問ふ我々はこの要求を持つてゐることを、ここにゐる從業員の間にも××し、さういふ一致した同意を得て、会社にのぞつけても、会社に行けぬためには、××つて行かねばならぬ。今夜のこの集合を幸ひに、これを映画従業員組合の撮影所支部として、今後、引続き定期的に集つて、会合を行なはうではないか。

但彼には、と云つて、我々は何をなしたければならないのた

町は毎日雨が降りつゞき、家々の床下にまで、塵を浮べた汚水が流れて來た。降りしきると、ゴムの長靴の中まではいつて來る。イナ子はその中を歩いて、彼等の町から出て行つた。都會の眞中へ來ると、雨水はうまく排出されてゐた。郊外では驟雨の音に圍まれて、青い原つぱの眞中に小說家の邸宅があつた。そこに伊藤がゐる。ゆつくり見廻して、中へはいり案內を乞ふ。足首から脛まで水に洗はれて白つけてゐる。二階の一室では伊藤が大きな聲で歌をうたつてゐた。活動する男がぢつと靜止してゐるほどの苦痛はない。鬱結したものは七月の長雨に誘はれて、彼の口から迸り出た。彼が鶴見にゐた頃、琉球人から教はつた、蛇皮線に合はせて歌ふ勞働歌が思ひ出されて來たのだ。

汗水ゆながち
働らつぬ人ぬ
心うれしさよ
他ぬ知ゆみ
ゆ　やさつさ
ゆ　やさつさ

幅廣い顏を陽に焼いた彼等は、あの工事のすんだ後はどこへ流れ行つたらうか。何處へ流れようとも搾られるものゝ窮乏にとりつかれてゐるにちがひない。

その時、襖を開いてイナ子が閾の上に立つた。彼女は腰帶の中からレポを取り出して、この愛する男と面會する。

××鐵工所のストライキはまだ續いてゐた。同じ地方の、××部分品を製作する工場のゼネ・ストへの空氣はたかまつて來た。官憲の眼を逃れて、アヂトは幾度も移動しなければならなかつた。その家の一軒で、原は同じ工場の矢野と云ふ

男から信頼を受けた。彼は今度の争議に最も勇敢に働き、今日まで争議団から一人の裏切者も出ないのは彼の手腕であつた。矢野は呼び出した。

「きみは××××党の組織について如何考へてゐるかね——」

深夜、疲れた荒くれ男たちは充分でない睡眠の下で、脱ぎもしないナッパ服を亂してゐる。それを避けて、便所の横手で矢野は小聲でいつた。「僕は××××党が聲ばかり大きくて、事實何もしてゐないやうに思はれるのだ。しようとする意志は充分あるのかも知れぬ。しかし、党は我々の地方の工場にまで手をのばしてゐるだらうか。さうする力は三・一五やこの間の事件のため、すつかりなくしたのではないか。ぼくは原則としては、×××××の××を承認し、我々の××はそこにまで認められなくてはならぬと思ふ。しかし、党が極度に微弱な時に、のんべんだらりとして、党が立ち直つて我我を動かしに來てくれるのを×つてゐるわけには行かぬ。これまで、我々は待つとしてゐることは××ないのだ。我々は自發的に××せざるを得ない。我々は先づこの地方の党の小地區と同じ組織のものを××し、活動しつゝ、×の強大になり、我々の方にまで力が伸びるやうになるのを待ちたいのだ。その時になつて、合流して我々は×の手足となる。我々の××××はコミンテルンの指令による××××の××××にあり、それを小規模ながら××して行くのだ。だから、決して××と對立するものではない。僕はこちらの工場細胞がきみをこの××のメムバアに××した。事情をこのやうに話した上は、是非××に加つて貰つて、××に××を展開して行きたいのだ——」

原は恐ろしく動揺した。×は彼の年來のあこがれの×ではないか。唯今の勞働者としての最高の××である××として列せられることを日頃××しながら闘つて來た。だのに、今、×に代位する組織から加盟の誘ひを受けた。もしも、これが×と原則上少しも違はぬものならば、××それに××××ではないか。しかし——と彼は思ひつゝ、質問する。間に挾まれて、爭議の下にひそんでゐる夥しい數が彼等を喚びに來る。それを傾しく手で拂つた。しかし、一時的にし

ろ、局部的に×に代位する組織と云ふものがあり得るだらうか。×は政治権力といつたもの、下部的組織にあつてこそ、そいつは統一のもとに目的に向つて進んでゐる。今、君の云ふやうな分散的な××で、極度に集中的な組織を有つてゐる階級の協力の××に肉迫できるだらうか―

矢野はあくまでも、党の徹底的な衰弱をタテにとり、それが××するまではこんな組織は不可避だと云つた。争議団員の一人が小便に立つて来る。「降りやがるな」と云ひながら、レンジ窓から、密談する二人を見てゐた。原は答へる。とにかく、ぼくとしては充分考へねばならん―すると矢野は「云ふまでもなく誰にも相談してくれるな。あくまでも××だ」と云つた。そして寝た。

原は眠れなかつた。党は潰滅に帰したか。党員は絶無の状態に置かれたか。工場の中で活動を休止したか。×の外部勢力は立つて闘争してゐないか。太つ首の岡部やガリガリ頭の伊藤が動いてゐる党員だとは云へないか。全労働者の中にコツソリと持ちこまれて来るあの煽動は×の仕業でないのか。党は彼等の云ふ程、無にひとしくなつてゐるか。××××××。××××××。唯、それが益々巧妙に触知されないほど、××の中で×いてゐるのだ。それは今、大へん弱らされたが、眼に見えぬ大動脈のやうに、ひそかに××××脈×つてゐる。この大動脈なくして、これにのみ×××あらずして何の××ぞ。彼は矢野の顔をのぞく。この男は今はよく眠つてゐた。「こいつ、巧い解党派のマツシ者かも知れんぞ！」

6

たうとうアヂトがかぎつけられた。七人しかゐなかつた。そこへ官吏は大勢でやつて来た。同志たちはお互ひに連絡する場所を示しあはせて逃げた。原は屋根を傳つて、その上で闘つた。人間と人間とが食ひあふ―上の上へ落ちる。一人の×××は気絶した。その×の上で、原は他の四本の腕を防いだ。洋服が破れる。彼の脚が一人を蹴つた。耳のうしろから

××やつのもの××××を××された。瞬間、卒倒したが、無意識のうちにたちあがり、その×××を板壁に押しつけ、壁へ×きこんだ。バリバリと肉の×れる音がした。彼は逃れた。組合員の製油会社の職工宅へとびこんだ。そこには、夫婦と子供たちとが一つの蚊帳の中に縮まあつて寝てゐた。彼等は驚き、原を安静にさせた。原は口も利けずに、眠りに落ちた。

田方村では夏の漁期をひかへて空気は険しくなつて来た。降らうとして降らない空気が狂風に煽られて来る。住民たちは、人々寄りあつては、ひそかに協議をしたりした。網と船とはもとの×××の下に返せ！ 俺たちが得た魚は××いものだ！ 高利を取消せ！ しかし、確固たる指導者がゐないので、事實上の網元を襲ふ以前に、既に係から、生臭いトラツクで××が押はれて来た。住民たちは、暫くなりをひそめた。官憲は、これにはきつと共産主義者が関係してゐるのにちがひないと思つた。それはここへでも出かけて来て人民をそそのかして了ふ。××は自発的なものではない。中央から姿を消した原の作家が宣伝煽動をつづけた。警察は帆の中にシツカリと一枚のハガキを拾ひ上げてしまつた。それは竹下から来た。「……先生、[illegible]！」と書いてある。それから、隣に宿屋の先生。[illegible]

ひたつ彼は学者館に来い間感ぜつてゐるし、妹をわかした。店の商品を置いてある部屋がガヤガヤして、最初に買物に来た客たちうと思つた。客は女がかれる時にはみな置いて品物を持つて歸ることになつてゐる。その次には茶碗になかかないといふ男が来た。代々の鏡を鏡の段も強くひつぱつた。この先には鈴がつけてあつて店の間へ度を呼ぶことになつてゐた。鈴が盛んになつた。すると、彼の部屋にガヤガヤと××男がはいつて来た。「え、うるさい。死にそこないのアラワクリスト先生。おい、山本辛一つて男から、何か手紙が届かれたらうが」——先生は眼を閉ぢた。原の身の上に何か起つたにちがひない。頭の上で××たちは活動した。

スガ目のイナ子が捕へられた。「旦那さんの居所はどこだ」「行衛不明で分んないんだよ。」「親切氣があつたら、探しとくれよ」「このアマ強情だな。な、おとなしくして云つちやへよ。あんな亭主を牢にほうりこんでも、お前の器量なら幾らでもカケガヘがあるからな。この×だつて、は、、」四角い顏におきまりのチヨビ髭をのばしたのが彼女をおどした。しまひにはみんなで彼女を×にして了つた。「夏向だ。さ、××××になれ」×の×を掴んで引きづられた。身體中、冷い汗が出て、床下の泥にまみれた。留置場へもどると、頭の毛の×××が熱を持つて、ズキズキと痛んだ。しかし、彼女は平氣な顏をしてゐようと決心した。そこで平氣な顏をしてゐた。はいつて二日目位から彼女は嘔吐をはじめた。身體が弱つたのかしら。この嘔吐は看守をいやがらせた。絶えず便所に出してくれとどなつて、その中でゲエゲエと云つた。別に何も吐かない。辨當すらもいつもの半分も食つてないのに。これはアレの特徴だ。手洗ひの水をガブガブと飲んだ。××室にひつぱり出されて、このアマめ！　とどなられた。金縁眼がねをかけ、皺の肉の紫色に厚い男が白い上つぱりを着て立つてゐる。「お醫者さんだ。お前の身體がどうも怪しいので診て頂くのだ。ちつとしてをれ！」×××××摑まれて、彼女はムリヤリに診察された。「たしかに姙娠です」××××は「さあ、さあ、奥樣」と彼女を引き起して、狹い室につれて行つた。「さあイナちやん。四月以來逢はないと云ふ亭主の子をどこで孕んでいらつしやつたかね」「え、、どうだ」イナ子は困り出した。「キリストのお母さんぢやあるまいし、夢を見てハラムわけはない。どこで逢つてゐたのだ」「そうにちがひない。××××は強情な奴だと、次第に表情を硬くして、再び彼女を××した。たうとう彼女は口を開いた。「へつ、莫迦にするない。男ひとりぢやあるまいし。わたしをそんなに身持のいゝ女だと思つてるのかい。いくら惚れた亭主でもゐなくなりや、別に男がほしくなるんだよ」――留置場の片隅で彼女ははじめて泣いた。××よ。いつまでも無事で働いてゐるておくれ。

白い看護婦たちが二三人づつ連れ立つて、病舍と病舍との間を歩いてゐる。早田患者の病室から村木が出て來た。頃の××××××は腸をわら、遂に頭を犯すやうになつた。そこでたうとう此處へ運れて來たのだ。世の中から消え失せた生活をしてゐる彼は、今はなかつた名前で、この病院の奥まつた一室で、他の六七人の患者と並んで、××用として取扱はれてゐた。もう三日もすぎ、容態は惡化するばかりだ。比較的、氣は確かだ。しかし突發的な熱が出た。その時には譫言をいふ。これに村木はハラハラした。醫者はこの腸膿傷は手術切開によるより他ない、と言ひ出した。しかし、これも大に危險なのだ。うまく行くか否かは十中の一だ。その代り成功すれば實に好い頭になるのだ。若い醫者はこれを村木に伸べて「あなた方の仕事がやつて行くには、實に適當した頭になるのです」と云つた。あなた方の仕事、何を意味するのか、村木はその何も知らないはずの純情らしい醫者の顔を見た。俺たちの仕事！――氣の確かな時に、本人の承諾を求めた。よし、やつてくれ――頭は答へて云つた。田方村の方へも知らすことはできない。生命をかけて彼は明日手術を施されることになつた。

村木はその夜、仕事があつて、連絡する途中に市電に乗つて遠く工場町に出かけた。そこで不覺にも見知り越しのスパイに目をつけられた。彼は走つた。うしろから、「泥棒！泥棒！」と呼ぶ。夕涼みに家の外に出てゐた人々が彼に迫つて來た。とらへられた。スト騷をしたイナゴの隣りの監房に入れられた。スパイは村木を×つて「××××××候補者頭を――」のゐる場所について、訊れと云つた。「知らない」頭が××候補者になつてゐる！こんなことは誰も、恐らくは商人も知らないはずのことだ。たのに、この反動側のスパイはさうした確證を握つてゐる。

彼は手錠の儘に手押車に乗せられて、長い廊下を行つた。その前に彼は不充分にしか力の入らぬ手で、遺狀を作つた。

便所の時間に、イナ子がたづねた。「原さん、あひかはらずやつてる?」「いや、今、肺病で入院してゐるのだ。今回は——

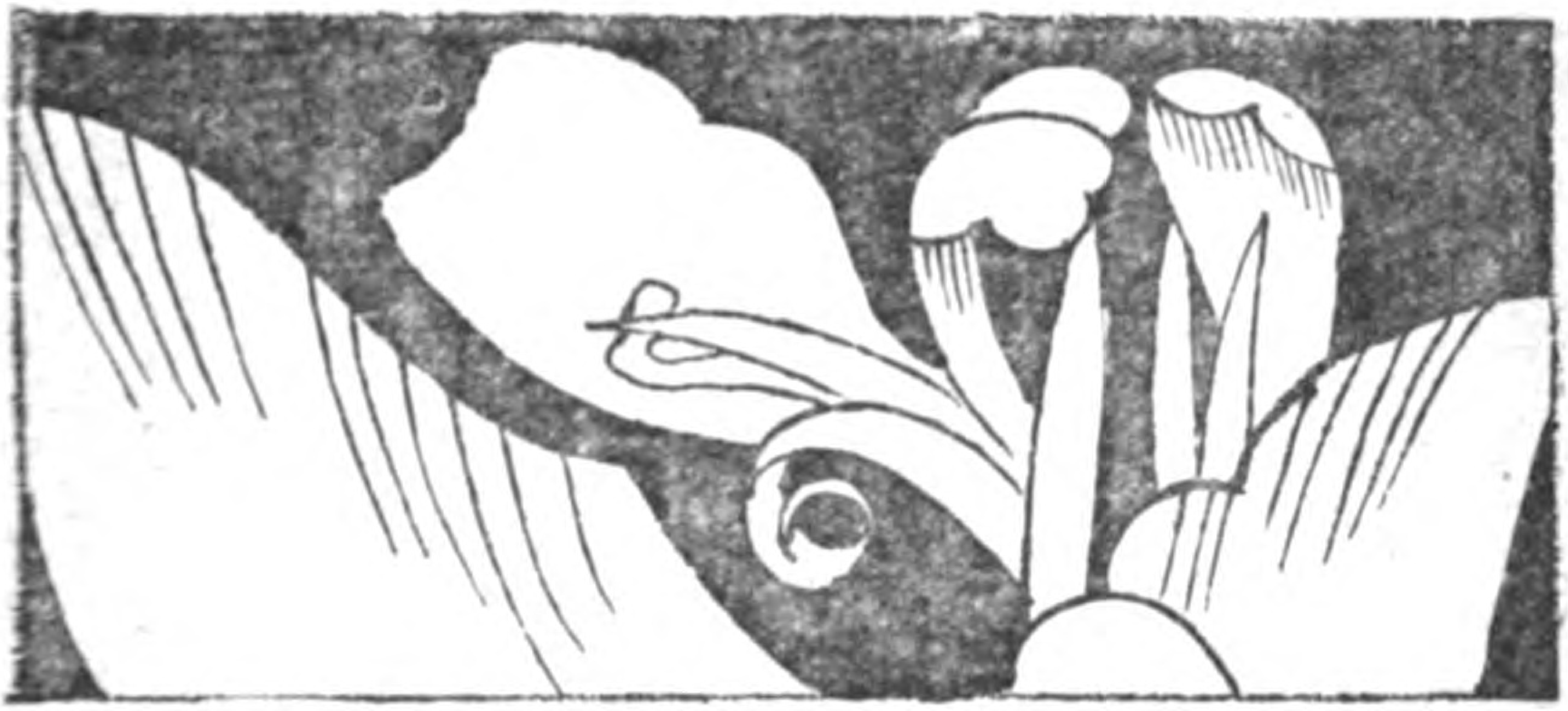
——村木は云へなかつた。彼のエネルギッシュな體軀よ、再び立ちあがれ!××であらうとして苦闘して來た原よ、今君は××に列せられようとしてゐる!

原は遺言狀に書いた。「同志諸君、永い間お世話になつた。最后に諸君の健闘を祈る。俺は死んでも地獄で闘ふ。俺の解剖費は組合でつかつてくれ ××の日を×たずに死ぬのが殘念だ。×××××!東京××勞働組合萬歳! ×××××萬歳!」白い封筒に入れ、看護婦にあづけた。「いつも來る男に渡して下さい。あなたにも大へんお世話になりました。ありがたう」それから手術臺にのせられた。——

外事係りが大きな支那人の首を摑んで監房へやつて來る。支那人は檻の格子へ幾度も頭をぶつゝけられた。村木は彼をどこかで見た樣な氣がする。コツンコツンとあちらから相圖して來た。——きみは勞働運動をやつてゐるのか、さうだ」と村木が答へる。俺は實は中國の黨員だ。日本へ逃げて來てゐたが密告された。よつて今、蔣介石の手下に引き渡される。すると首がはねられるのだ。日本の××よ、最後まで×つてくれ給へ。

彼の地で捕へられる日本の××と引きかへに彼は渡されるのだらう。この支那人の一個の生命に、日本人の一個の生命が×されてゐる。萬國のプロレタリアは××運命にあるのだ。

原の死骸は永い間、死體室に××されてゐた。引取人がないのだ。調べた結果何者とも判明しないので、學生たちで解剖した。それから燒いた。看護婦の手箱の中に、白い封筒がいつまでも殘つてゐた。隣では支那人がゐなくなつた。遠い夜空で紫色に電光がはためいてゐる。暗い監房の中で、村木とイナ子とは隣あつて坐つてゐた。彼等は雷鳴のなかに、脈打つ大動脈の血行を聞いた。確かに聞く。それは彼等だけが聞き得るものであつた。（十二月六日、市谷セネストの朝。）



みをつくし

久保田万太郎

□

兼　吉。　「兼床」といふ土地でも古い理髪店の主人。
おさき。　兼吉の女房。
兼太郎。　兼吉の子供。
喜和藏。　煙草入職人。（おさきの父）
おさよ。　おさきの妹。
吉　松。　兼吉の弟子。
外に、客、醫者、醫者の抱車夫、等。

（一）

東京淺草阿部川町附近。

□

大正の末。

その一

「寝床」の、天井でも、壁でも、はしらでも、疊でも、押入でも、箪笥でも、茶箪笥でもすべて古び切りくすぶりつくした感じの薄暗い茶の間。――臺所につゞく。

十二月中旬の曇つた午後。

……喜和蔵、長火鉢のまへに膳をひかへて一人ちび／＼酒を飲んでゐる。――おさき、それに關係なく、やや離れた位置に胴着の綿を入れてゐる。

……いゝ加減もう喜和蔵は醉つてゐる。

間。

喜和蔵。おい……

おさき。…………………（無言）

京和蔵。おい……

おさき。…………………（無言）

京和蔵。おい。おさき……

おさき。（邪慳に）何ですよ。

京和蔵。お代りだ。お銚子の……（空いた銚子をふつてみせる）

おさき。（にべもなく）いけませんよ。（綿をのばしつゞける）

京和蔵。いけねえ？

おさき。………………（無言）

京和蔵。なぜ？

おさき。………………（無言）

京和蔵。なぜいけねえ？

おさき。幾日だと思つてゐるんですよ、今日を？

京和蔵。何い？

おさき。平常とは違ふんですよ。――明後日はもう市なんですよ。観音さまの……

京和蔵。だからどうだといふんだ？

おさき。（おろ／＼するやうに）何だといふんですよ。

京和蔵。何……

おさき。大ていになさいよ。ほんたうに。(捨臺詞のやうに捲立てゝいつて相のおもはず潤んで來る眼をわきへそらす)

間。

……喜和藏、未練たらしく、膳の上の銚子をそつちこつちふつてみたりする。——が、完全にどれも空らになつてゐる。——手もちない感じ。……

喜和藏。おさき……

おさき。…………………(無言)

喜和藏。おい……

おさき。…………………(無言)

喜和藏。おい、おさき……

おさき。何ですよ。(と、また、邪慳にさうはいつたものゝまへよりやゝ弱つ氣になつてゐる)

喜和藏。お前、俺が、知らねえと思つてるのか、それを?

おさき。何をですよ。

喜和藏。節季だつてことをよ。

おさき。知つてたら、お父さん。——うちはお茶屋でもお料理屋でもないんですからね。——だのに數日中……

喜和藏。そ、さうぢやァねえ、それをいふんぢやァねえ……

おさき。ぢやア何を…

京和藏。だから、節季だから…明後日はもう市だからそれで今日出て來たんだ。――ぐづ／＼しちやアゐられねえから
それでかうして出て來たんだ。――だから、何も、飲倒しに今日は出て來たんぢやアねえんだ…

おさき。それなら、それで、否無しく切上げたらいゝぢやアありませんか、あたしのつけて上げたゞけで…

京和藏。だから切上げたぢやアねえか…このうへ飲まうといはねえぢやアねえか。…そんならいゝんだらう、そんなら…

おさき、大きな聲なしてお店へ聞えるぢやアありませんか。――だから醉ふと…

京和藏。いつ醉つた？――たれがいつ醉つた？…

おさき。（ふり切るやうに）あゝもう好ござんす。（下を向いてかまはず縫をのばす）

京和藏。好かアねえ。――ちツとも好かアねえ。――そつちはよくつても此方は…

おさき。…………………（無言）

京和藏。おい…

おさき。…………………（無言）

京和藏。おい、おさき…

おさき。知りませんよ（下を向いたまゝで）

京和藏。何だ、知らねえ？

おさき。お歸んなさいよ、もう…

京和藏。おさき…

おさき。歸つて下さい、早く……

間。

喜和藏。……よし、歸(けえ)る。――歸(けえ)れなら歸つてやる。(やゝ接穗(つぎほ)なく煙草入をしまひかける)

おさき。…………………(無言)

喜和藏。おさき、たのまア、その代り……(手を出す)

おさき。………………(無言)

喜和藏。たんとのことはいはねえ。……三兩でも五兩でもいゝんだ……

おさき。………………(無言)

喜和藏。ねえ。……ねえ、おさき。……どうにもこゝんところ遣ッ切りがつかねえんだ。――たのまア、助けてくれ……

おさき。………………(無言)

喜和藏。ねえ。――ねえ、おさき。――おい……

おさき。………………(無言)

喜和藏。駄目か？――いけねえか？

おさき。………………(無言)

喜和藏。もしいけなけりやア一兩でも二兩でもいゝ。――ねえ。――ねえ、おい……

おさき。………………(無言)

京和藏。いけねえか?　――聞いちやアもらへねえか?　――え、?……

おさき。うちにはお金の成る木はないんですよ。

間。

京和藏。……さうか。――ちやア仕方がねえ。(やゝてれかくしのかたちにいひながら立上る。)

おさき。…………………(無言)

京和藏、そのまゝ、おきらめて再び口をきかず。ふら〳〵と店のはうへ出て行く。――おさき、無言をつゞけて顔も上げない……

間。

……吉松、ぐッたり眠つた金太郎(三つ)を背中に乗せて臺所のはうからぼんやり入つて來る。

吉松。お內儀さん……

おさき。(やゝ狼狽して、顔をたげる)何だい?

吉松。寝てしまひました、金ちやん……

おさき。あゝさうかい。――待つておくれ、いま下ろすから……

　おさき、しごとを片附け、押入から蒲團を出して敷く。吉松から粂太郎を下ろしてその上に横にする。……

おさき。いゝよ、お前、お店へ行つて……

吉松。…………(うなづいて去る)

　粂太郎、眼をさましさうにしてぐづる。――おさき、とも〴〵横になつてねかしつける……

　……遠く往來のはうから聞えて來る廣告屋の口上。

　間。

　……粂太郎、眠りつく。――おさき、それをみてそッと起上る。――そのまゝぢッと寂しくその寢顔をみまもる。

　――眼を拭ふ……

　間。

　――口上を終つた廣告屋の遠ざかつて行く囃子の音。……

……俊吉、陰氣な顏で、臺所のはうから入つて來る。

おさき。あゝ、お歸んなさい……

俊吉。(口の中で)たゞいま……

俊吉、帽子を取り外套をぬぐ。おさき、立つて側へ行きそれらをうけとる。――すべて無言……

俊吉。ねたのか、坊主?(といひながら長火鉢のまへにすわる。)

おさき。えゝ、いましがた。――すみません、そこ、散亂つてゐて……

俊吉。かまはない。

おさき。すぐ片附けます。

……おさき、外套を釘にかけたあと、散亂つた銚子だの何だの、始末をする。

俊吉。來たのか、お父さん?……

おさき。えゝ。

俊吉。いつ?

おさき。あなたがお出になるとすぐ……

兼吉。けど、それッきりしか飲らなかつたのか、お父さんは
おさき。え〻。
兼吉。すくないぢやアないか、今日は？——え〻？……
おさき。え〻。
兼吉。どうしたんだ？……
おさき。…………（それにはこたへず膳をそのま〻下げようとする）
兼吉。い〻、それは。……どうせいま飯をくふから、俺が……
おさき。まだ、ぢやア、喰らないんですか、お前？……
兼吉。喰はないんだ、まだ。——すんだのか、お前は？……
おさき。い〻え、あたしも……
兼吉。そんなら、お前……（といひつ〻鐵瓶を下ろして）何だ、まるでこれ、火がないぢやアないか。
おさき。あ〻すみません、うつかりして……（いそいで火鉢のそばへよる）
兼吉。い〻や、俺がつぐから。——とつてくれ、その炭斗を……
おさき、炭斗を取つてわたす。——兼吉、うけとる……
兼吉。酷いぜ、外の今日の寒さつてものは。——凍りつくやうだ……

……寅吉、炭をつぐ。

やゝ長き間。

おさき。（突然）あなた……

寅吉。えゝ？（何げなく顔を上げる）

おさき。お願ひです、離縁して下さい。

寅吉。離縁？

おさき。お願ひです、どうぞ離縁して下さい、あたしを……（といふと一しよに泣く）

寅吉。何をいふんだな、藪から棒に。……

おさき。いゝえ……いゝえ、すみませんから……すみませんから、あたし……

寅吉。何が……何がすまない？……

おさき。いゝえ、あたしの……あたしのやうな……あたしのやうなものがあなたの……

寅吉。…………（無言）

おさき。あたしさへゐなければ……あたしのやうなものさへゐなければあんな……あんなお父さんに何も……

寅吉。何かいつたのか、お父さん？

おさき。いゝえ、さうぢやアないんですよ、今日に限つたことぢやアないんです。……けど今日といふ今日……今日といふ今日しみ〴〵さう思ひました。いゝえ、すまないと思ひました。あたしさへなければ、あたしといふものさへなけれ

ば、これッばかりだつてあなたのそんな……

兼吉。………………(無言)

おさき。あなたのいゝ顔してゐるのをいゝことに、いつも來ちやア好きなことをいつてお酒は飲む、お小遣はねだる。――そんなことつてあるもんでせうか？そんなことつて出來るもんでせうか？……それを、いゝえ、どうしてまたあなたが音無しくそんないふことを聞かなくつちやアいけないんでせう？

兼吉。親なら仕方がないぢやアないか。

おさき。親なら？

兼吉。さうぢやアないか、お前の親なら俺にとつたつて親だ。……あたりまへぢやアないか、さうするのが……

おさき。だつて、あなた……

兼吉。出來れば、俺は、もつとしたいんだ。もつといろ／＼役に立つて上げたいんだ。……出來ねえから、俺は、情けないと思つてゐるんだ……

おさき。そ、そんな……そんな優しいことをあなたがいふから餘計……

兼吉。(遮るやうに)けど、おさき……

おさき。え、？

兼吉。かういつちやア可笑しいが、俺は、あのお父さんが好きなんだ。お父さんて人が好きなんだ。……親だから仕方がない、さうするのが至當だといふかけにいつもその「好きだ」がものをいつてゐるんだ。……いくらだから無理をいはれても、わがまゝをいはれても、何とも思はないんだ、俺は。……ほんたうに俺はさうなんだ。……

おさき。………………(無言)

實治。一つには、早くわかれし、男親つてものゝ味を俺が知らないからかも知れない。――それと、もう一つ、俺にはあのお父さんて人がいゝ人にみえてしやうがないんだ。正直ないゝ人にみえてしやうがないんだ。――それァ酒は飲む、ばくちは打つ、まるで稼業には身を入れない。……でも酒を飲んでも、ばくちを打つても、いくら稼業に身を入れなくつても俺にはあの人がさうみえてしやうがないんだ。正直ないゝ人にみえてしやうがないんだ。――さう思はないか？――さうみえないか、お前には？……

おさき。それは悪い人ぢやァありません。

實治。さうだらう？

おさき。悪い人ぢやァありませんけど、あんまりだらしがなさすぎます。いかにもだらしがなさすぎます。……死んだおつ母さんでもそのためにどんなに泣かされたか知れないんです……

實治。つまりはいゝ人だからだらしがないんだ。

おさき。だ、そんな……

實治。いゝえ、さうだ。俺にいはせればさうだ。……お父さんがもつとすゝどく出来たつてゐれば、酒を飲んだつてあんなにすぐ酔やァしない。ばくちを打つたつて始終さう負けてばかりゐるやァしない。稼業にする仕事のそんな贅澤な選好みなんぞしやァしない……

おさき。……………(無言)

實治。(やゝ寂しく)よく似てゐるんだ。……俺によく似てゐるんだ。……よくだから分るんだ。俺に……

おさき。だつて、あなたは……

實治。(寂しくうなづいて)それは俺は酒も飲まない。ばくちも打たない。稼業にも身を入れる。……けど……けど、さ

うなんだ。矢つ張さうなんだ。……つまりはみんないくぢがないんだ。

おさき。…………………（無言。――ソッと眼を拭ふ）

粂吉。實は、いま、組合へ行つた歸りに政のところへ寄つて來たんだ。――おれッきり當人からも、うちからも、何ともいつても來ないし、葉書をやつても返事もよこさないし、もしかまたぶり返しでもしたんぢやアないかと思つて、ついでだから門まで寄つてみたんだ……

おさき。…………………?

粂吉。と、當人、居ないぢやアないか、うちに。……どこへ行つたと訊くと、いま公園へ活動をみに行つた。……おふくろが出て來て平氣でさういふぢやアないか。……

おさき。と、快いんですか、もう、そんなに?

粂吉。いゝも惡いもない、體のことなんぞ、おふくろ、噯びにも出しやアしない。……

おさき。それは、また……

粂吉。可笑しいから訊いてみた。……あのおふくろのことだからべら〳〵訊きもしないことまで饒舌つた。その口でみると、先方ぢやアもう家から暇を取つたつもりでゐる……

おさき。暇を?

粂吉。さうなんだ。

おさき。どうするんでせう、暇を取つて?

粂吉。店をもつんださうだ、自分で……

おさき。そ、そんな分らない……

豊吉。と思ふのは俺たちがうかつなんだ。……政のやうに立廻るのが當世なんだ……

おさき。いくら當世だつてあの人の……

豊吉。……そんなことの出來る義理ぢやアないとは俺にしたつてさう思ふ。――あの男だけだ、ほんたうに俺の仕込まうと思つて仕込んだのは。――人間も悧巧で見込があると思へばこそ其氣にもなつたんだ。――あの男だけは、一生、どんなことがあつても俺の味方だと思つてゐたんだ。――と愚痴をいつたら切りがない……

おさき。………………（無言）

豊吉。でも、おさき、愚痴はいつでも俺には腹は立てられないんだ。……意地を燒くことは出來ないんだ。……そんな目に逢つてお前は口惜しいと思はないか？　情けないと思はないか？……自分で自分に訊いてみた。……情けないとは思つても口惜しいとは思へない。……政は政、俺は俺、その情けないと思ふ裏ですぐもうさう音を上げてゐる俺なんだ……

……

おさき。（遮るやうに）そ、そうなんです、お父さんて人もさういふ人なんです。

豊吉。だらう？　――だから……

おさき。……（無言）

豊吉。何でもすぐあきらめてしまへる人間ほど駄目なものはないんだ。

おさき。え、……（寂しくうなづいてさしうつむく）

豊吉、だからへんなことなんぞあんまりいはないでくれ。――お互に十九や二十の若い身そらぢやアないんだ。――でなくつても、今日は、天氣はなつおやァゐる、くさくくしてたまらないんだ。……

おさき。（半ば口の中で）え、、すみません……

間。

……吉松、顔を出す。

吉松。親方……

粂松。………………？（顔を上げる）

吉松。上總屋の旦那がおいでになりました。

粂松。晋さんの手はあいてるか？

吉松。えゝ。

粂吉。ぢやァ懸つてもらへ。すぐ行くから……

吉松、去る。

粂吉。さ、稼ぐんだ、早く飯にしてくれ。

おさき、無言、立つ。——やゝ力のない足どりで臺所へ行く……

間。

……粂吉、茶簞笥から箸箱を出したり長火鉢の抽斗から海苔を出して燒いたりする。——おさき、臺所からいろ

く運んで來る。――座敷の隅のお櫃入からお櫃を出して來たりする。

間。

二人、膳にむかふ。

寅吉。（茶碗を取上げて寅太郎のはうをみて）みろ、坊主を。――何にも知らずによくねてゐるんだ……

おさき、さういはれてみるつもりもなくうッかり寅太郎のはうをみる。――と同時に、茶碗も箸も捨て、急に寅太郎の布團の端に泣きふす。……

寅吉。馬鹿、何が悲しいんだ。何が悲しくつて泣くんだ……

……おさき、泣く。

寅吉。泣く奴があるか。……馬鹿、泣く奴があるか。……そんな馬鹿、泣く奴があるか……

……さういふ寅吉の聲もだん〳〵濡れて來る。――おさき、え堪へぬさきに泣く。（終）

その二

「鏡床」の、鏡でも、椅子でも、流しでも、壁にかけた油繪の額でも、棚に載せた香水の瓶でも、すべて古び切りくすぶりつくした感じの薄暗い店さき。

四月の末の曇つた夕方。――棚の隅の花瓶にさした櫻がその薄暗い中に眞つ白に咲いてゐる。(「その一」のおくる年のこと)

……學生風の客、椅子にかけて知惠の輪の案じにふけつてゐる。吉松、そばにそれをみて立つてゐる。――閉めた硝子戸のそとに醫者の車の待つてゐるのがみえる。

間。

吉松。出來ませんか?
客。もう少しだ。
吉松。わけないんですよ。
客。だからもう少しだ。

間。

……二人とも無言。

客。出來た……

吉松。ね、そら。——わけないでせう、出來れば……

客。出來れば何だつてわけはない。(といひながら椅子を下りる)なか〲歸らないんだな、醫者?……

吉松。え〻。

客。何をしてゐるんだ?

吉松。毎日長いんですよ、來ると……

客。よつぽど惡いのか、お內儀さん?

吉松。え〻、さうらしいんです。

客。この間來たときまで何ともなかつたんぢやアないか?

吉。え〻、何ともなかつたんです。

客。どうしたんだ、一體?

吉松。丹毒になつたんです。

客。丹毒?

吉松。怖いんですつてね、丹毒つて病氣……

客。ほんの小さな、それこそみえないやうな傷からでも入るんだ、黴菌が…。
吉松。さうなんですつてね。
客。どこから入つたんだ、お内儀さんのは？…。
吉松。頸(えり)から入つたんです。
客。頸から？
吉松。髪をとかすときうツかりそこを櫛で引ツ搔いたんです。
客。櫛に、ぢやア、黴菌がついてゐたんだ。
吉松。さうなんですね。

……そのとき、兼吉をさきに、醫者、奥から出て來る。——あとに、宗和謙、とぼ〳〵した感じに従ふ。

客、吉松、いそいで口をつぐむ……。

兼吉、硝子戸をあける。盆に菓子包と一しよに載せた心づけを車夫にわたす。——そのあと、醫者、外へ出て車に乘る……。

……誰も無言。

間。

實吉、硝子戸を閉める。——そのまゝ、京和藏と一しよに、すぐまた奥へ行く。

客。眞つ青ぢやァないか、親方の顔……

吉松。えゝ、昨夜で三晩ねないんです。

客。一人でやつてるのか、親方?

吉松。お内儀さんの妹さんも來てゐるんですけど、實ちやんがゐますから……

……おさよ、顔を出す。

おさよ。(呼ぶ)吉ちやん……

……呼んですぐかくれる。

客。さア、歸らう、俺も……

吉松。君さん、晩には歸つて來ます、いま用で淺草橋まで行つたんですから……

客。明日でもまた出直して來るよ……

客、歸つて行く。——吉松、客を送り出したあと奥へ行く……

……硝子戸の外を通る花見歸りの笑ひさゞめく一ト群。

間。

……吉松、奥から出て來るとそのまゝ下駄を突ッかけてそゝくさと外へ行く。

間。

……兼吉、喜和藏と一しよに出て來る。——ともに、ぼんやり、疲れ果てたものゝやうに腰を下ろす。

……二人とも無言。

間。

兼吉。……駄目なんでせうか？——どうしてもゝう駄目なんでせうか？

京和藏。…………………(無言)

實吉。このまんま死なしちやア……このまんまいまおさきを死なしちやア、お父さん……

京和藏。…………………(無言)

實吉。可哀想です。――あんまり可哀想です、それぢやア……

京和藏。…………………(無言)

實吉。さう思ひませんか？――さう思ひませんか、お父さん？……

京和藏。實さん。……しッかりしてくれ、實さん……

實吉。………………

京和藏。お前がたよりなんだ。――俺はお前だけがたよりなんだ。――たのむ。――たのむから、實さん……

……二人、泣く。

……硝子戸の外を通る花見歸りの群。(終)

(ある長篇戯曲の一部)(昭和四年十二月)



大陸（長篇小説）

谷譲次

1

「トロツキイは、チヤアチルは間違つてゐると言ふのだ。

チヤアチル氏の華麗なる近著世界危機と其の餘燼（アフタマス）において最も注意を惹く個處は、彼のペンによるレニンの肖像である。今週の週刊ジヤン・オ・ランドン誌は、レニンの腹心であり前軍事委員長であるムシユウ・トロツキイがチヤアチル氏に與へた、活潑な、そして攻撃的な回答を公開してゐる。これは彼が追放地コンスタンチノウプルに着いて三日目に書いたものだ。生きてゐる人間のなかで、トロツキイほどレニンをよく知つてゐる者はない。トロツキイの過去の行動や現在の信念などは何うでもい丶。とに

か、彼はしきはきした執筆家だ。全階級を通じて知識人は、この單に通り過ぎてしまふものでない興味と重要性の論爭への寄稿を歓迎するだらう。」

倫敦の新聞にこんな廣告が出た。公衆は、長い間評判を聞かされてゐた幽靈が、日光の中へ進み出て來て演說をはじめたやうな氣がして、そつちへ注意を向けた。これを機會に、舌を奪はれた筈のトロツキイが原稿生活を開始した。資本家の新聞は、他界からの通信として、暫く彼にいひたいことをいはせてみやうと重役會議で決議した。「宣傳」は困るが、曝露」は嬉しいのだ。トロツキイはサウエイト政府と喧嘩して拋り出されてゐるのだから、その論說は實行に移された共產主義の缺點を衝いてゐるだらうといふのだ。各社の記者と欧羅巴特派員が、カフス・ボタンの行商人や男爵樣に化けて、コンスタンチノウプル行きの近東特急に乘り込んだ。いふまでもなく、窓からでも何處からでも這入り込んで、トロツキイの咳拂ひを日逐に記し、暗合通報で本社へ速報するためだ。そのなかには、若しスタアリン派の悪口を書けば三年間の生活を保證するし、サウエイト制度が狂人の惡夢であり到底長續きしないものであることを書けば一生の生活を保證するといふ社長の申出を運んで行つたものもあつた。このカレエ・コンスタンチノウプル間の直通列車は、世界で一番ブルジョア的な觀の一つだ。サウエイトのプラウダ紙は、トロツキイはブルジョアの資金と和解したと報道して彼を責めるのに利用した。これは、多作の戀愛小說家のやうにあちこちの刊行物に現はれる彼の寄稿とその原稿料を意味したのだ。トロツキイは息子の名で、コンスタンチノウプルから資本家の新聞團を通して聲明書を發表した。幽靈みたいな「トロツキイの息子」は起ち上つていつた、

「この攻擊は、父を知る凡ての人をして確實に微笑せしめるだらう。僕は特に明言することが出來る。父はこの原稿料から私的安樂と利益を引き出さうといふ意思は毛頭ないのだ。これは排他的に、反スタアリン運動の意見を說明する文書の出版資金に當てる計畫だ。父はその着手として、特に重大な性質を有するレニンの一著述を最近出版するつもりでゐる。これはスタアリンによつて露西亜國内で頒布することを禁じられたものだ。それから、ボルシエヴイツクの歷史も出版す

る。これも現在のサウエイト幹部が『人民』に讀ませたくないので發禁を食はした代物だ――ロイテル電。」

トロツキイは椅子から立つて窓のところへ行つた。この椅子は、荒削りにも何にも斜に斧の跡を見せてゐる不格なやつで、塗料の代りに手垢が仕上げを濟ましてゐる。第一釘を打ち込んだだけで上から木鋲を塡めてないから、すつかり釘が浮いて、腰掛けたり起つたりする度びに、宗教好きな老婆みたいに卑屈な嘆聲を上げるのだ。トロツキイはその音が大嫌ひだ。彼は椅子を憎んだ。これはいはゆる農民手工藝といふ猪小才な流行の產物にきまつてる。農民にこんなことを敎へてすこしの閑暇さへ横領してしまふやつの目的は解つてるのだ。實に考へ拔いた轉換策であり慰撫策だと言つていゝ。が、こいつは先日まで彼のゐたオデッサ地方から輸入されたものだ。若し彼がそのことを知つたら、農民藝術といふ餘計な傾向はまだ土耳古へまでは來てゐないと安心したに相違ない。

そこはコンスタンチノウプルのサウエイト領事館内商務官事務所の一室だ。トロツキイの新しい幽閉所だ。此少の好意と澤山の埃のほか何もない。床板は彼の重い長靴を我慢して泣いたし、壁には、一月以來めくつてない暦と、ジエルサレムの自動車道路圖と赤と黑の棒の何處かの國の輸出入統計表とがぶら下がつてゐるだけだ。何處の國のかトロツキイは傍へ寄つて見たことがないから知らないのだ。猶太麵麭みたいな、不潔な色をした家具が散らばつてゐた。非常識に天井が高いので、トロツキイは來た當座二三日帽子をかぶつて暮らした位だ。野外にゐるやうな氣がしたのだ。しかし、窓はもつと廣い視野を享樂してゐた。そこには先づ、圓滿な人格のやうに何方からでも同じに見える回敎堂がある。土饅のやうな支柱が譯の判らない示威行列をしてゐる。全く笑はせる。そのコンスタンチノウプルの回敎堂は無邪氣な威張り屋だ。自分に似てるやうな氣がする。これだけは死んだウラジミルに見せても、何でもかんでも直ぐさま其のてつぺんに赤旗を立てなければならないとは言はないかも知れない。窓の直ぐ外には鈴懸の樹があつて、マルマラ湖からの風に動いてゐるのだ。その向うにボスフオラスの水が見える。石油みたいに感傷を除去した色だ。トロツキイが背伸びすると、彼の鼻眼鏡に、金

の角」一河に架かつてるガラタの橋が映つた。變な恰好の荷車が渡りかけてる。安全地帯に群集が立つて待つてゐる。牛車も往く。輜重部のやうに何臺も續いてる。これは、アントリア地方の百姓が出稼ぎ先から歸つて來たところなのだ。二頭の牛の首の兩側に棒を立て、綱を渡し、それに拇指程の小さな鈴を澤山付けてるから直ぐ判る。百姓自身は、自分を牛から區別するために希臘土産の色絹の飾帶(たい)をしてゐるのだ。土耳古女(トルコをんな)の女中が這入つて來て、トロツキイに湯が沸いたが今はいるかと訊いた。この女はクリミア戰爭當時の壞れた佛蘭西語を話すのだ。それはい・が、その用向きは實に愚劣な間違いやうに聞こえてトロツキイは不機嫌になつた。彼は振り向きもせずに自分は午後の三時に入浴する習慣ではないと答へた。それはまるで其處の窓からコンスタンチノウプル全市へ宣言してゐるやうに見えた。

僕はレウ・ダウイドウオツチ・トロツキイの顏が大好きだ。彼はケルソン縣の猶太人殖民者ライバ・ブロンスタインの伜だ。オデッサの大學で理論よりも行動を學んだ男だ。サウエイト國家に發足を與へるために組織的に外國と戰爭するのだとは云ひ出した程の樂天家だ。發足だつてしよつちう使つてるうちには肉と癒合して身體の一部になるだらうぢやないか。失敗を豫想することは彼には出來ないのだ。恐らく失敗に直面してもさうとは氣が付かないだらう。共産黨の政治家である以上に博奕打ちだからだ。各國の放浪生活が彼の闘爭精神をひそかに賭博趣味で裏打ちしてゐた。詰らないことで不愉快になる癖があつた。それは虚榮心の強い藝術家のやうにといつてもい・が、むしろ我儘な少年といつたはうが適切だ。この病人のやうに白つぽい街も商務官事務所の幽閉所も初めから氣に入らなかつた。癇にさわると彼の頭は昔から分解作用を始めるのだ。夢遊病者のやうに別のことを考へて紛らした。二三度食事を無視した。サウエイト領事と商務官はこれをハンガア・ストライキと呼んで心配した。モスクワへ電報を打つて指令を求めた。スタアリンはやつてるなと微笑して、暗殺するか何處かい・ホテルへ移すか何方かにしろと命令した。その結果五週間ほどして、トロツキイはコンスタンチノウプル一流のトカトリアン・ホテルの豪奢な一室に移された。

市俄古評論の記者フロイド・ロイドがトロツキイとの極秘の面談に成功したのはこのトカトリアン・ホテルの彼の寢室でだ。この面會はロイドのやつがホテルの支配人に青い亞米利加の札束をうんと握らせたのち、やつとのことで特別の形式の下に行はれた。ロイドは給仕人の制服を着て空氣のやうに扉の隙間から滑り込んだのだ。トロツキイは支配人の處置を喜ぶかのやうに派出な部屋着の奧から微笑してロイドを迎へてゐた。彼はロイドの知りたいと思つてることをよく知つてゐて、早速それに觸れた。

『君、英吉利ほど嫌なところはないね。』とトロツキイが言つた。『社會の平均が取れ過ぎてるためだと思ふんだが、ことに産業狀態は、まるで一本の鉛筆の眞ん中を指の腹へ載せて左右のバランスを取つてるやうなものだ。そりやお表面は平穩無事だが、ちよつと左右どつちかに風でも當らうもんなら直ぐぐらぐらつと來るぢやないか。いゝ氣に滿足してるから可笑しい。英吉利が風を避ける唯一の途はサウエイト・ラシアとの喧嘩を投げ出すことだね。』

ロイドは相手があんまり要領がいゝので魔誤々々した。

『そこへ行くと亞米利加は解りが早い。露西亞へ色眼を使ひ出した。英吉利は氣をつけないと、今に自分の立つてる地面が陥沒するんだ。二人目に來るやつは麵麭の屑にしかありつけないにきまつてるよ。』

トロツキイは寢臺に腰かけてゐる。領事館における五週間の幽閉はロイドのいはゆる腕力派共産主義者を却つて快活にしたやうだ。彼の周圍には一人の看視人もなく、ブルジョア的調度と夫人の心遣ひとがあるだけだ。彼の健康が話題になつた。追放以來病人だと聞かされてゐたロイドに、口鬚も落して、剃刀のあとの青い、活氣に滿ちたトロツキイは意外だつたからだ。ロイドがその通りに言ふと、トロツキイは笑つて、元の追放地トルキスタンから此處までの冒險的な護送旅行を文學的言辭を加へて語つた。彼は饒舌ではないが、話し好きだ。久しぶりに何を言つても自分だけの責任なのが彼の心持を輕くしてゐるに相違ない。身體は何ともないが一度掛りつけの獨逸の醫者に診て貰ひたいと思つてゐる。そのこと

でいま通商條約を交渉中だといつた。ロイドが訊いた。
「世界の自餘の資本主義國家はサウエイト・ラシアに對して何ういふ態度を採つたらいいのですか。」
「私の意味する資本主義國家の代表は英吉利だが、これがまた完全な盲目と來てる。しかし、露西亞に關する限り、英吉利も近いうちびつくりして眼を開けるだらう。その時はもう遲い。日本と亞米利加が先廻りして露西亞に好意を見せてるからだ。早く知つた者ほど早く怖がらないでもいい、やうになるわけぢやあないか。共産主義をこわがるやつは、恐ろしいものに出つくわした時眼をつぶる子供のやうなものです。徒ら自分だけ眼をつぶつて見ないやうにしても、恐ろしい物はそこにあるのだ。しかもその子供は、眼をつぶつた儘、恐ろしいと信じてゐるものへ組付いて行く。その恐ろしい物といふのは何かといふと、自分の影なのだ。襲はれるだけで手應へがないから、そのうち眼を開けて見て、びつくりするだらうが、例へば英吉利と露西亞が仲直りしたところで、僕は英吉利へ行き度いなんて言ひ出しはしないつもりです。露西亞が僕を追ひ出したやうに、英吉利だつて何處の政府だつて僕を拒絶する權利がある。君、僕を見給へ。サウエイト・ラシアはもう僕の存在を必要としないといふのだ。だから僕は出て來たよ。」
「デニキン將軍らの白系運動の際に英吉利が緣を引いたといふ事實については何うお考へですか。」
「考へるも考へないもない。あの血だらけな革命に英吉利は大分兵隊と金を出してる。これは露西亞のはうの貸しになつてる筈だ。だから露西亞だけが債務者にしようとするのは毒蛇さ。」
「これから土耳古を去つて何處へ行きますか。」
「獨逸からまだ返事が來ないんでね、この頃の倒閣騷ぎのためだらうが、早晩旅券の裏書をして呉れることと思ひます。この間ロウテ紙が僕に同情のある論說をしたので、依賴してやつてあるんだ。佛蘭西とチエッコ・スロヴアキアと和蘭と三國の政府へ入國許可の運動をしてるといふのは、あれは嘘です。君、僕が今英吉利へ渡らうとしたら何うだらう。何時か

下院で僕が英吉利へ來たいと言ひ出したら何うするかといふ話が出て、滿場大笑ひをしたといふ噂を聞いた。それから、ずつと考へ續けてゐるんだが、何がそんなに可笑しいのか僕にはそのユウマアの點が未だに解らない。一九〇二年に僕は倫敦にゐたことがあります。毎日大英博物館へ通つて大いに愉快だつたと覺えてゐる。今でも時々思ひ出して、あの博物館へだけはもう一度行つて見たいやうな氣がする。」

トロツキイは鼻眼鏡を外して、寢具の端で拭いて掛け直した。彼は、チヤアチルの著作に出てゐるレニンの批評が餘程氣になつてゐるのだ。すこし昂奮した口調で言つた。

「チアヤチルか。あいつはお化粧をした驢馬さ。あんなやつにレニンが解つて耐るもんか。あれは全部貴婦人相手の出鱈目だ。」

「雜報の讀者を代表してるものですから、散漫なことばかり伺ひますが、すると、實際的な政治運動はもうすつかりお止めになつた譯ですか。」

「止めざるを得ないぢやないですか。しかし、いま自傳を書いてゐる。それは、勿論政治的なものです。」

から笑つて、傍の卓子のはうへ手を振つた。そこには、書類の書抜きやら新聞雜誌のスクラツプのやうな物が雜然と散らばつてゐた。

「これからはペンでやつて行く心算です。世界中到る處から何か書けと言つて來てゐる。」

こゝで切り上げて、給仕姿のロイドは部屋を出ようとした。外から誰かが叩戸してゐた。扉は、ロイドが這入ると同時に、トロツキイ自身の手で鍵が掛けてあつたのだ。その音を聞くと、トロツキイは戸の内側へ進んで、最初は露西亞語で、次ぎに佛蘭西語で激しく訊いた。

「誰です。何の用です。」

トロツキイは用心深い。閉つた窓でないと決して開けないのだ。刺客は名刺で先觸れしないでやつて來る場合が多い。

領事館の窓から遠くに見えたコンスタンチノウプルの雜沓が、トカトリアン・ホテルの眞下にある。街は珈琲館と水汲女で取引場のやうに喧噪をきわめてるのだ。白い頭巾を卷いて裾の長い黑衣を着た神學校の學生達が、路傍の樹陰で終日土耳古將棋をさしてる。不必要な服裝だ。しかし基督教の坊主ほど物欲しさうに見えないのは奇妙だ。これはきつと彼らが資本主義の郊外市場侵略に無關係なせいだらう。珈琲館には眞鍮爐と、三口で飲める小さな土燒きのコップと、燈心草を張つた腰掛けと、空間と色彩とが充滿してる。こゝで珈琲を啜ることは專門の技術を要する一つの式だ。一つのコップに三時間かゝる。我慢をしてる。これがまた恐ろしく混み入つたポイントの取り方で、一般に數學に長けた東洋人の頭にだけ呑み込めるのだ。今はこの珈琲館で[illegible]と水煙管賣りが何か言つて笑つてるのがトロツキイに見える。水煙管は眞赤な銅と金箔張りの硝子壜から出來てる。珈琲館の土間には眞ん中に飲料水の噴水があつて、隅には床屋の設備がしてある。煙管の頭へは木炭を入れるのだ。人夫などはこの炭火を手で摑み出して歐風の紙煙草を吸ひつける。彼らはまるで火箸みたいな手をしてるのだ。噴水は坂の途中に湧いてゐるし、水を汲むには、スタンダアド石油會社の空罐にペンキで彩色したものを使ふ。石の塀が丘を這ひ上つてゐる。どの塀にも鐵柵を嵌めた窓が無數に開いて、風通しはいゝが、これは通行人に私生活を見せることの好きな、東洋に共通な特質を示すものだ。

トロツキイはホテルの椅子は身體を動かしても悲鳴を上げたりしないので我慢出來た。しかし何と言つても長らく莫斯科で坐りつけてゐた軍事委員長の椅子と來たら一番だ。すくなくともこれよりはもうすこし坐り心地も宜かつた筈だ。

トロツキイは自分が育てた赤衛軍の若い兵士達の顏を思ひ出したのだ。

　サウエイト共和國はブルジョアの××を踏みつけて秩序を×××すことによつてのみ達成される。だから共產黨の戰鬪分士は共產黨の出生と同時に最初から軍隊として組織されてゐなければならない。それもブルジョアの軍隊に輪をかけた嚴正な軍隊であることが必要だ。さうだ。赤衛軍を見るがいゝ。あれは初めおれが兩手を揉んでふつゝと吹いて地面へ落した種のやうなものぢやないか。いや、この右腕を捥ぎ取つて土に植えた苗木だと言つていゝ。それが成長したのだ。ケレンスキイをやつつけたのもあれだ。恐怖時代を作り出して、その恐怖時代を押さへつけたのもあれだ。××とその取卷きなんか、あれの前には他愛もない感傷でしかない。赤衛軍は根本の性質から言つてプロレタリアの、そしてプロレタリアだけの快活で健康な軍隊だからだ。勞働者か農民でない者はサウエイトに投票する權利がないやうに、赤衛軍の入隊資格は勤勞者のサウエイト市民に限られてゐる。だから何のために銃を取るのか皆知つてる。兵列の陰にだつて白つぽいやつなんか一人だつてゐやしない。みんな入隊を許可されることをプロレタリアの光榮ある特權にしてる。何といふ明かな事實だ。かういふ軍隊がブルジョア國家の何處にあるか。しかしおれが出て來る時默つて目送してゐたのは何ういふ譯だ。このおれは赤いドン・キホウテだとでも言ふのか。やつらの眼付きがそんなやうなことを言つてゐたぞ。全くおれはあんまり政治家だつたかも知れない。が、だ。プロレタリアのなかで政權ごつこの好きなやつが共產黨員になる。これは初めからきまりきつてることぢやないか。それなのに、若い兵隊達はさうは思つてゐないから仕末が悪い。一體あいつらは言はれたことをその通りに覺え過ぎるやうだ。しかしそれでいゝ。「教育」もあれでいゝのだ。いや、すこし文字に傾き過ぎてはゐないかな。自分の名前を一々他人に書いて貰はなけりやならないのはそりや確かに不便だ。が、大體文盲といふものは石塊のやうに愉快な物なんだ。それが段々減りつゝあると言つて赤衛軍の幹部は威張つてる。馬鹿なことだ。赤衛兵（クラスノアルメイツイ）は軍事教練といつしよに同じ程度に重要な體育と信條の教育を受ける。信條の教育だ。すべての子供も兵隊の年齢に達する前にこれに似た初步の訓練を經なければならない。それから林檎みたいに紅い志願兵だ。こいつにまた體育と政綱を押

つかぶせる。プロレタリアの兵隊は清潔な野獸人であることが第一だ。腕力は面白い。政綱とは政治的解釋だ。いはゆる共產主義理想のレコウド吹込みだ。ほんとのことをいふとスタアリンのお說敎なんだ。五月蠅くて誰も聽いてやしない。おまけにそいつが志願兵時代から滿期まで續く。道德か何ぞのやうに兵營全部に行き渡る。將校も兵士も洒落た共產主義理論で腹がふくれて上着の扣鈕が合はなくなつた。おれまで押し出してしまつた。すると對外文化協會なんかがしたり顏でメガフォンを口に當てる。サウエイト・ラシアは帝政時代の無學者を全滅させたぞ。もう無學者はゐないか。ゐるなら早く赤衞軍へ這入れ。

もう沢山だ。對外文化協會なんて、かうして國境外にゐてあれのいふことを聞くと、まるで露西亞こそは地上の樂園ちやないか。いひ過ぎると却つて嘘つてことが露れるものだ。

トロツキイはひとりで苦笑してるのに氣がついて、それを拭き取るために顏へ手をやつた。

考へてみると、赤衞軍の敎育もすこしは役に立たないこともない。それは講演と倶樂部の談話と文書によつてされるのだ。やつらは倦きることを知らない器具のやうにこれをやつてる。おかげで田舍から出て來た兵隊は赤衞軍へ來て生れて初めて近代的敎養といふやつにお眼にかゝる。二年の兵營生活の後そいつらはみんな近代的敎養ある×××××として百姓の間へ歸つて行く。每年何萬といふ布敎師が田舍へ食ひ込んでつてる譯だ。これがサウエイトの白血球だ。腕力ある腕と政治的訓練を經た口とでサウエイト政府につつかへ棒をしてる。コンミユニステイツク意識のはつきりしたサウエイト市民である譯だ。それはいゝが、赤衞軍の政治本部PURは凡ての隊へ政治細胞を出してる。おれは革命の時おれが考へ出したものだ。何しろあの時と來たら大急ぎで軍隊を編成しなくちやならない。ところが共產黨のなかに軍事專門家と

言つたら數へる位しかゐないのだ。皇帝の部下の將校を雇つて來るのが唯一の方法だつた。仕方がないからさうしたのだが、そこでPURを作りポリトコムを置いて、赤衛軍部內の組織者としたのだ。帝政派上りの士官を見張らせたのだ。あの時の赤衛軍の闘爭精神はこの內部的プロパガンダが成功したためだと言へるが、今はそれ以上に「赤い司令官會議」まで出來て、立派に目的を達した譯だ。もうポリトコムの用はない。あんなものを殘して置けば中央サウエイトの少數幹部に自分達の宣傳に利用されるだけだ。それに都合がいゝから殘してあるのだ。が、「赤い司令官會議」は純粹のプロレタリア出だけだぞ。あれはおれの分身なんだ。議論しなくてもおれの言ふことがよく解つてる。ところが、やつらはこの機關によつて各地の赤衛軍の間に政治的なそして經濟的な聯絡を計らうとしてる。つまり政治屋が赤衛軍の元締にならうといふのだ。飛んでもない。革命當時は相手が政治的仇敵だつたからあれでよかつたのだ。いや、必要だつたのだ。それを今になつて赤衛軍のあらゆる構成を政治的な一つの椅子に集めやうとする傾向は何を意味してゐるか。いつたい誰がその椅子に肥つた腰を戳つけやうといふのだ？　馬鹿！　若しその必要があれば、おれこそ其處へ座るべき人間ぢやないか。

不平を言ふのは負けた證據だ。成功した陰謀は單なる不平から生れた例はない。トロツキイは兩手の親指を帶革へかけて寢室のなかを歩き廻つてゐる。ナポレオンは室內の散歩によつて樂しい野心に耽つた。トロツキイは赤いナポレオンだ。

赤衛軍はもうおれのものぢやない。それはそれでいゝ。子供が親に惡體をつくほど一本立ちになつたのだ。だが、國民軍は何うだ。あの處女林のやうな國民軍のなかにはまだおれを覺えてゐるやつもあるだらうな。國民軍は地方に散らばつてゐるんだ。それだけスタアリンから離れてゝ、きやつの飛ばす唾の泡が掛からないわけだ。國民軍は三週間づつ家庭から引つこ拔いて來て銃を持たせる。だから始終顏が變つてゐるし、政治屋が出張して政綱の讃美といふやつをやるひまもない。

赤衞軍の除隊になつた者も自動的に國民軍へ編入されるが、これは國民軍の數から見ればすこしのものだ。直ぐスタアリニズムを振り落して純粹な共產主義細胞となつて吸收されて行く。これはいいことだ。サウエイト・ラシアは×××の行程上の一單位としてだけ初めて意義がある。おれ達の仕事はサウエイト・ラシアにおいて濟んだのぢやない。ほんとはこれからはじまるんだ。何うしてそれを始めるか。そこでおれはいつた。サウエイトの注意を外へ向けるために近所の小國をやつつけてしまへ。このことは自分達の力強いことを自覺させるためにも、一時に工場を動かして自給自足の經濟力を實現してみるためにも、絕對に必要なんだ。するときやつらは農村がついて來ないと吐かした。まるで何處の國の政治家でもいひさうなことぢやないか。やつらのいふやうにそれ程サウエイト意識が普及してるなら、百姓は戰線へ馬鈴薯を送るためにきつと奮起するにきまつてる。百姓はいつだつて都會勞働者の尻押しをするものだ。革命の時におれ達が一番心配したのも百姓だつたが、あの通り立派に一緒に歩いたのだ。おれは只赤い十字軍を起して國內の生產を刺激しやうとした。やつらは一體レーニンを聖書か法典のやうに色いろに解釋したがる。それによつておれのことを危險人物と決めた。かうなるとブルジョアの政治家と何處が違ふ。平時だつて赤衞軍の救助は農村がやつてるのだ。あらゆる社會機關、工場、勞働組合、政治團體が物質的に文化的にその地方の赤衞聯隊を補助してる。そのなかで農村の助力が一番大きいことは事實だ。農村と赤軍は實に緊密に仲よくやつてる。このことは誰よりもおれがよく知つてるのだ。

おれは共產黨青年同盟のことを考へる。あれは主として海軍をシエフストウオしてる筈だ。「赤い騎隊」は共產黨青年同盟の手で出來上つた。政治部の調查では三分の一は海員出だ。もうすこし軍略があつてもいい。これから飛行機と軍事科學だ。ＯＤＶＤ——空軍の友達——は全國に三百萬以上の會員を持つてるぞ。國防化學會は百萬の維持者から成り立つ。これらはすべて軍事以外に市民と技術との關係を作る。ほんとのサウエイト人は軍隊を大事にするのだ。革命で得た自分達の正當な權利を保護してくれるものは軍隊だからだ。ＯＤＶＤは醵金を募つて何百といふ軍用飛行機を建造する。それらが活動

して旅客航空路を開拓する、ドブロクキムは研究の結果を農園と工場に應用する、かうしてこそ赤衛軍は階段から軍事と人民をつなぐ主要な存在になる。おれはさうしやうと思つてゐたのだ。

トロツキイはもう一度苦笑した。暗くなりかけたので、戸口の壁のところへ行つて電燈のスヰツチを捻つた。

莫斯科とコンスタンチノウプルの時差は約三十分莫斯科のはうが進んでる。モスクワではもう眞つ暗になつてゐた。大雪だ。人に途轍もないことを思ひ付かせる莫斯科の夜だ。こゝの闇黒は濃い褐色をしてる。レニンスカヤ郊外は工場地域だ。元のシモノフスカヤだ。パロストロイの機械工場をはじめ工場が集まつてる。河の線に少年が立つてゐた。親無し兒と呼ばれる一人で、夕刊賣りだ。

『トロツキイがブルジョアの犬になつた！　トロツキイがブルジョアの犬になつた！』

少年は叫びつゞけた。工場の門を出て來た勞働者達が、一人の買つた新聞を取り卷いて街燈の下に輪を作つた。新聞はプラウダ紙だ。共産黨中央執行委員長エミリアン・ヤロスラウスキイの論説が出てゐる。彼はトロツキイはプロレタリアとしての良心をブルジョアの黄金に換へたと言つて攻撃してるのだ。そこには、トロツキイの寄稿の載つてゐる亞米利加の新聞面の縮寫が寫眞版になつて出てゐた。ヤロスラウスキイはトロツキイを政治的社會的の生ける死人と斷定した。最高の價額で共産黨とその幹部とサウエイト政府に關する醜悪な噓言を賣り歩いて金儲けをしてる背教者と罵つた。彼は言つた。

サウエイトの敵が爭つてこの背教者のいはゆる眞相なるものを大金を出して買ふ理由は、彼らがその反サウエイトの宣傳價値を知つてるからだ。彼らはトロツキイはこんなことを書くだらうと期待した。トロツキイはまたその期待通りのも

のか書いてゐるのだ。可哀さうなトロツキイ！ 一文無しの浮浪人がブルジョアの旦那様に身賣りしたつてわれわれはあんまり責めてはならない。飢の爲に思ふだけだ。トロツキイだつてかうまで膝を曲げて元の敵の御機嫌を取り結ぶまでにはよくよくのことだつたらう。彼はこんなことをいつてゐる サウエート政府の運命的な崩壊が急速に實現することを希望してる人々には慘酷な失望があるだけだと。何と高慢ちきな言ひ廻しだ！ 兄弟！ これでみてもトロツキイは反動家になつたことが判るぢやないか。彼はブルジョアの鼻息を窺ひ、彼らと一しよになつてサウエイト政府の崩壊は運命的なものだと言つてるのだ。運命だから崩壊は避けられない。たゞ急速に望んでは失望するが早晩事實となつてあらはれるにきまつてる。トロツキイの擁言だ かういふ議論ならブルジョアの新聞が何處迄出しても買ひたがるのに不思議はないわけだ。トロツキイは益々調子に乘つて、日ト盛んに反サウエイトのプロパガンダに熱中してる。しかも露西亞共産黨員は勿論、國外の勞働者と兵士と農民の兄弟達は、トロツキイを危險なる政府側害謀として驅逐した政府の處置を適宜と認める點で完全に一致してるのだ。かうして資本家の新聞が彼を歡迎してるのが何よりの證據だ。これだけでも彼の正體は判明した。第一トロツキイなんかを大威張りして何か書かせてゐる新聞てのものが、如何に則例なく無恥であり無反省なセンセイション搜しに發狂してゐるに過ぎないか今度のことでよく判つたわけだ。

喧嘩は政府に任せとけ。金儲けは別だ。ここに帝政時代に投資してあるおれ達の金は何うして呉れる。英吉利の商人は生は何時だつて拔目がない。役人がサウエイト・ラシアへ出掛けるのは宜くないが、金持は影響を受けないから差しつかへないのだ。第一人間が行くんぢやなくつて財布が行くんだ。金を持つて來る見込さへあるところへは出來るだけ大きな財布を持つて行け。

本月はどうすると氣候がよくなつた。ドウツア商人が荒れなくなつて、英吉利人は好物の旅行を思つた。各方面で産業を

代表する英吉利の資本家が八十五人、黄金色の行列を仕立てて莫斯科へ押し出した。この關係會社の資本金を通算すると三億磅だ。目的は何か、もういゝ加減懲りた頃だから轉んだやつを起してやれ。ついでに新しい海外市場といふやつを拓いて、北の方へもすこし貿易船を動かしてやらなくちやならない。政府は横を向いて微笑して、それから知らん顏した。サウエイトはお行儀が惡い。赤化といふ泥靴で人の應接間へ這入つて來やうとするやつだから當分認めることは出來ないのだが、金儲けか。そんなら行つて來い。よく觀て來て、「狀態」を報告するのだ。それが滿足なら外交のはうも考へ直さう。英吉利の「外交」といふやつは何時だつて「利益」と「宣教師」のうしろからのこのこ顏を出す。

百五十の會社がモスクワ行きに參加した。これは歷史あつて以來の大仕掛けな商業十字軍だ。英露協會理事ヴイクタア・ジョウンスが音頭を取つた。この計畫は英露協會が間に立つて纏めたものだ。一行は三月廿五日に倫敦を發つた。誰も細君を伴れて行きはしなかつた。共産黨の天下なんて魔窟みたいなものだらう。何をし出來すか知れたもんぢやない。あの氣違ひみたいな髯だらけの過激派がうようよしてるところだ。無禮を働いて巡査を呼んだとしても、その巡査がまた共産黨員では貴婦人は何うして保護を求めたらいゝのか。きつと朝寢床で飲むお茶さへないに相違ない。着物を見せに行くにしたところで、相手が女工や女共産黨員では始まらない。夫人連は一せいに辭退した。主人たちは胸のかげでにつと笑つた。何故つて、露西亞は「婦人共有」といふ素晴しい幻想を實行してるつて言ふぢやないか。そこへ夫人同伴は誰が考へたつてちよつと困る。伴れてつた細君を早速共有されちまふのも閉口でないことはないが、それより、いやに頸の骨の眞つ直ぐな英吉利女といふやつは、燈臺みたいに監督の眼が屆くのだ。その監督がついて來ないといふのだから、彼らは「共有」するであらう雪國の情を豫想して喜んだのだ。「羅馬では羅馬風に」だ。先がさういふ制度なのだから、これには何らの道德的辯解を必要としない。彼らはさう考へた。夫人連もその良人の樣子から感づいて、婦人共有といふサウエイトの噂を思ひ出して心配になつた。しかし不潔な過激派に「共有」されることは何う考へても嫌だつたから矢つ張り行かないこと

二八二

仕度が大變だ。何しろ過激派は何一つ見ても商賣を止やしてる。サウエイト・ラシアには剃刀がないにきまつてるから、個いつは、ジレットの奴を買つて行かう。それから風呂もないに相違ない。バス・タブとタオルと石鹸を忘れるな。

一行は三四週間滞在の豫定だ。莫斯科へ着くと、各代表はそれぞれの商業方面に自由行動を取る。一箇月間を調査して企業上の可能性を發見しやうといふのだ。一行は機械工業の混成旅團だつた。トロツキイの忠告に従つて許す限りの好意をポケットに用意した。必要に應じて到るところで振り撒かうといふのだ。飛行機、農業機械、橋梁と建築、起重機、軌道、水力工事、印刷機、鋼鐵、アニリン染料、ヨウクシヤア毛織物工業などが參加してゐた。一行は特別列車に上機嫌を積んでドウヴアへ向つた。オスタンドに上陸して直ぐモスクワへ行く。それが木曜日だ。三日休んで月曜日から調査にかゝる。最大の問題は英吉利の資本家が此の露西亞に投資した儘になつてる借金のことだ。資本使節の代表者は連絡船のデツキ・サロンに新聞記者を集めてこの點は樂觀してると言つた。いくら赤らくじやらのサウエイトだつて借りた物を知らないとは言やしまい。たゞ取れるか取れないかだが、向ふの財布に應じて取れるだけは取つて來て見せる。

國際的金貸しの近代的プロレタリアのところへ借金の催促に出かけた。彼らは資本帝國主義の闘士なんだ。ちよつとさわれは他人の財布のふくらみ工合が判る。紳士はこれからだ。

同行の記者團に中間的評論のフロイド・ロイドがゐた。

甘酸つぱいお客様だ。莫斯科はこれを何う迎へやうとしてるか。

初の歓迎だ。英吉利から露西亞へ來たお客様は以前にも來た。彼は英吉利へお持つてきたお土産なのだ。が、今度のは來たんかちやない。商業に手を付けてやらうといふ掛引だ。うんと利用しておれ。それには先づ嬉しがらせる必要がある。

る。英吉利人は羊肉が好きだ。羊を殺せ。オペラを見せてやれ。祭典のやうな大歌劇の準備が出來上つた。これは速く行はれる筈だ。

人民委員會は財政委員長ブリユハノフの名において集まつた。今のやうな有様ぢや英吉利資本團の協力は到底望めないといふのだ。急に五千萬留の內債を募集することにした。利子をつけるやうな罪惡はしない。それは資本主義經濟の不當利得だからだ。但し富籤債券にする。これは國家企業に個人の資本を誘き出すために絕對に必要なのだ。サウエイト・ラシアに個人の資本といふものがあるのか。ある。無いやうで實はあるのだ。みんな隱して持つてる。政治警察ＧＰＵはこの個人の隱してる財產を探し出して沒收するのに何時も大繁忙を極めてる。その私財を今度はこんな方法で國家事業に吐き出させやうといふのだ。利子はつけないがその代り富籤にする。やつぱり不勞所得を餌にする撞突だ。おまけにこの公債は一切免稅だ。買ふやつは匿名で買ふのだ。この點を保證しないと誰も怖がつて手を出さない。若しＧＰＵが債券の買ひ手を嗅ぎつけても、その金は何處から來たか何うして持つてゐたか決して察べないことにする。眼をつぶるのだ。私有財產をちよつぴり認めるのだ。本能だから仕方がないのだ。それにその個人はそんなに大事に隱してた金をサウエイトの事業に注ぎ込んだ愛國者ぢやないか。特權は例外を命令する。理論を實行しやうとすれば「特別の場合」といふやつが縱出して例外が網のやうに穴をあけるだけのことだ。別に矛盾だの破綻だのといふものではないと言ふのだ。融通といふものなのだ。

人民委員會がさう發表した。

五千萬留の公債のうち、百留每に富の當り番號をつけて發行する。年に四回抽籤する。最高の拂戾し額は十萬留だ。一割の利子をつけたのと同じ政府の負擔になる勘定だ　一割の利子だ　ほかの國の何處にこんなぼろい國債があるか。英吉利の資本家よ、安心するがいゝ。黴の生えた證文なんか犬にやつちまつて新たにどしどし投資することだ。

英國新聞代表の一人に若いパアリングトン・クウパアがゐた。彼はオックスフオウド時代の同期生俱樂部に手紙を書かうと思つた。莫斯科の革命廣場に面したバルショイ・モスコフスカヤ・ホテルだ。倫敦で賣り出したら素晴しい價格を呼ぶ骨董みたいな机が置いてある。それが彼に手紙を書かせるやうに誘惑したのだが、机は、さわるとぐらぐらする。クウパアは横から透かして見て、一本の脚が短いことを發見した。クウパアは埃及煙草の空箱を色いろに折つて、脚の底と床の間へ挿し込んだ。そしたら動かなくなつた。彼はこの机は露西亞そのものだと思つた。歴史とブルジョア藝術の見事な產物を跛足の理論が支へてゐるのだ。クウパアは自分の機智がうれしかつたので机のことを手紙の冒頭に書いた。この手紙は書記のソルトンが俱樂部の告別板へピンで留めるだらう。みんな讀むだらう。

僕は旅行記の形式で途中から書いて行かう。波蘭と露西亞の國境だ。汽車はゆつくりと眼に見えない國を乘り越えてゐる。窓には僕らの顏が並んでゐる。みんな初めての露西亞入りに胸をときめかして外の景色を迎へてゐるのだ。僕ははつきりと自分達の使命の重大なことを思ふ。僕らの調査の結果は何うだらうか。交渉はうまく、成立するだらうか。こんなことを考へてゐると露西亞の役人が這入つて來て、旅客の番號のはいつた切符を渡して行つた。彼らは立派な英語を話す。われわれの氣の點ではいくらか安心していゝわけだ。もう何も考へることはない。汽車は國境驛のネゴレロイへ這入つた。

い、景色だ。これ以上の風景は想像することが出來ない。サウエイトの手で停車場が新築されてゐる　それは建築學の實行だ。全部松材の丸太で出來てゐて好い感じを與へる。僕らはここで乘換へなければならない。驛內食堂に集まるやうにといふことだ。一同は食べ物のことで散々おどかされてゐるので、皆これ食堂の隅の食品臺のほうへ素早い一瞥を投げた。すると何うだ。驚いたことには此處には世界の文明國でお眼にかゝるのと同じ肉、野菜、菓子の類が相當に體裁を調へて整

然と並んでるではないか。こんなにびつくりしたことはない。これではまるで文明國だ。と同時に、僕らにとつてはこれこそ最大の安心だつた。

ポウル・ロビノウヰツチといふ人がネゴレロイまで公式に迎へに出てゐて、こゝで簡單な歡迎の挨拶があつた。ポウル・ロビノウヰツチはサウエイト・ユニオン西部商業會議所の代表ださうだ。これがまた意外なことには、趣味と教養のありさうな人物で、まるで紳士だ。服裝だつて僕らと同じなのだ。とてもコミユニストとは見えない。信じられないかも知れないが事實だ。僕だつてこれは實に意外だつたのだ。

旅劵の檢査などは勿論單なる形式に過ぎなかつた。僕らは午後七時にいよいよ露西亞の汽車に乘り込んだ。するとここにもう一つの意外が待ち構へてゐた。それは寢臺車だ。停車場の印象が好もしいものだつたやうに、この寢臺車も充分僕らを喜ばせた。何て立派な設備と行き屆いた掃除だ。君らも知つてるやうに露西亞の鐵道については非道い冗談が澤山言ひ觸らされてる。そのすべてが嘘であることを僕は發見した。僕はこんな乘り心地のいゝ汽車に乘つたことはない。

晩飯に食堂車へ出かけた。贅澤な食器と家具と料理がまた僕らを驚かした。それらは僕の經驗した世界の何處の食堂車のものよりも優つてゐるのだ。そして僕が世界中を旅行したことは君らも知つてる通りだ。

寢臺は僕らの熟睡をあつためて呉れた。莫斯科へ着いたのは翌朝の十時半だ。これは時間表よりも六分早い。正確に着いたとは言へないのだ。しかし汽車が走り過ぎて豫定より早く着く分には、同じ不正確でも愉快な不正確だ。列車の不正確と言へば遲延に決まつてる文明國なんか恥ぢるがいゝ。このとほりサウエイト・ラシアは萬事が能率的なのだ。若々しい力が到るところにあふれてる。僕らはそれを固體のやうに皮膚に感じるのだ。停車場前の廣場には約四十臺のタキシーが列を作つてる。僕らを見るために可成りの群集が出てゐた。警官が通路をあけてくれた。群集は多勢の外國人を見て、よろこんで、心から歡聲をあげた。眞率な好い人々だ。

が、自動車が走り出すと、僕らの心は暗くなつた。空虚な影が僕らの上に落ちて來た。みんな何か不幸のあつたあとのやうに黙り込んでしまつた。莫斯科の街は何故かう荒涼としてるのだらう。荒涼といふよりそれは悽惨と言ふべきだ。恐しい惨劇の直ぐ後へ來たやうな氣がする。ドライヴといふものは多く氣のひらくものだが、僕はこんな陰氣なドライヴは初めてだ。しかもそれが交通に長いのだ。行つても行つても同じやうな淋しい町が續いてる。自動車は葬列のやうに往還く走る。まるでこれから返した許りの荒蕪地か彈丸の跡の生々しい戦線でも視察してるやうなこゝろもちだ。

やつとホテルに着いた。僕らは人心地がついた。部屋は快活な感じがして仲々よく出來てる。食事も悪くない。サアヴイスは問題だが何しろ量が多いのに閉口だ。食へなければ残すのはお互ひに無駄だから半分にして呉れといふつもりだ。

街の中の連中は市街の空氣ほど押しても悲觀に傾いてゐる。どうも眞劍に相手取れない財政状態だといふのだ。さういつたものでもあるまいが、何故あゝ町が疲弊して見えるか。このことが問題に上つた。第一に商店が貧弱だからだ。何故貧弱か、一番さきに眼に付くのは建物が破損したまんまになつてることだ。じつさい何れもこれも泣き出したいほど情ない外觀だ。何うしてだらう？　理由の一つは簡單だ。大部分が漆喰で出來てるからだ。石材はすくないのださうだ。漆喰は直ぐ駄目になる。おまけに革命後あんまり手入れをしないらしいのだ。しかしよく訊いてみると、石屋とペンキ屋の手を入れれば、何んな大きなビルディングでも忽ち元の通りに修繕することが出來るといふから、漆喰も便利なものだ。それなら何故しないのかと僕はすこし皮肉的に訊いてみた。すると政府はさし迫つた新しい工事に忙しくて古いものを直したりする余裕も暇もないといふのだ。何うもサウエイト・ロシアは古いものを大事にしないやうだ。

このことは道路についてもいへる。實に恐れ入つた道だ。それなのにそれを修繕する意思はないといふのだ。この悪道は凡て帝政時代の遺物でサウエイトには責任がないといつて済ましてる。だから決して部分的に直さうとはしない。直す位なら全部を近代的に改装するといふのだが、これは大變な事業だ。が、その方針で着手してることは事實で、僕がそ

の工事を見たいと言つたら案内者をつけてくれた。そこは郊外に近い區域で、其處には完全な最新式道路が出來かけてゐた。政府はもつと先のほうまでやるつもりだつたのだ。ところが、支拂日に金の拂へるところまでしか工事してはならないのだから、それでは進むわけがない。この點で僕ら一行のなかの道路の專門家と政府の當事者との間に色いろ相談があるやうだが、要するに金がない。或る期間の支拂延期を第一條件に認める契約を結びたいといふのが向うの肚だ。かうなると道路ばかりぢやない。今度の交渉のすべての問題は信用の一點にかゝつて來る。あれもしたい。これもしたい。が、金のはうは當分待つてくれ。何處へ行つてもこれを聞かされるのだ。

ホテルには達者な通辯が二三人ゐる。僕らのために政府が臨時に任命した學生ださうだ。着いた日の夕方だ。僕がその一人を捕まへて晩餐にはデナア・ジヤケツか尻尾（ティル）か何方を着ることになつてゐるかと訊くと、彼は顔中に笑ひを擴げて答へた。

「どちらでも何卒御隨意に。但し露西亞では何方も着ません。」

そこで僕らも思ひ切つて背廣のまゝ食堂へ下りて行つた。平服とソフト・カラアで晩餐の卓子に就くなんて、實に奇妙な感じだ。君らには想像も出來まい。もつと驚くことがある。オペラさへ普段着の儘でいゝのだ。しかもステイト・オペラだ。舞臺の衣裳は綺麗だつたが、見物はみすぼらしい。しかし充分清潔でお行儀はいゝのだ。勞働者が仕事着のまんまで來てる。お神さん連中は前掛けを外しただけだ。誰でも氣輕に觀られるのだ。僕みたいな無精者は着更へなくてもいゝから助かる。觀覽席を見ながら僕は考へた。みんなひどい着物を着てる。英吉利の紡績工場は遊んでることはないのだ。モスクワだけでも二百萬の人間に着せることが出來る。買込み一つだ。何よりも安くなくちやならない。

こんなことを考へて、次ぎの日羅紗問屋へ行つてみた。丁度チエツコの製造元から外套地の荷が一箱屆いたところだつた。二十枚分位しかなかつたが、それを七八十人の洋服商が喧嘩のやうにして買つてゐるのだ。かういふ光景は何處でで

もし見られる。煎じ詰めるとこれらの問題の解決はサウエイト・ロシアの對外的信用如何による。僕らの一行に組合代表が加はつてゐないことを先方では遺憾がつてゐるが、これは僕も悲しい省略だつたと思ふ。露西亞の支拂ひに關して僕は前から露西亞と取引關係のある二三の國の資本家に會つて訊いてみた。彼らは異口同音に答へた。革命以來露西亞は一個も勘定を缺かしたこともなければ一日だつて拂ひを延はしたこともない。これは結構なものだといふのだ。これは共產黨と無賴漢を同一語のやうに考へてゐる人には意外かも知れないが、若路以來商事に正確な彼らのやり方を見て來た僕は、べつに不思議に感じなかつた。しかし僕らとサウエイトが相互に滿足な利益を感じて取引きを開始するまでには、他にも僕らが考慮に入れなければならない問題が澤山あるのだ

サウエイト・ロシアはいはゆる「五年計畫」といふものを樹てゝゐる。五年間に工場を整頓し、道路を完成し、住宅問題を或る程度まで解決して、產業的に獨立しやうといふのだ、しかも、二三得意の方面では世界各地の市場へ輸出するところまで進出してゐやうといふのだ。五年だ。かなり先が長い。この間に僕らがサウエイトに機械と原料を供給することにしたところで、途中で有力な競走者が現れて引つ攫ふにきまつてゐるのだ。が、これは大して心配するに當らないかも知れない。その頃は露西亞の產業も自力で步き出して、購買力も增してゐるに相違ないからだ。

國家工業局局長ムッシュウ・キニコフが僕に[illegible]な提議をした。この機關は全サウエイト機械シンヂケイトと共に凡ての機械の購入を監督してこれを配給するのが役目だ。彼はいつた。三つの條件の下にやつて行かうといふのだ。一、僕らが工場設備と機械を正價で賣り込む。二、僕らが或る工場なり製造所なり炭坑なりを拾ひ上げて、與へられた條件內で僕らの手によつかり準備して引き渡す。彼らはこれに對して一定の期間を置いて支拂ふ。三、これらを準備して引き渡す代りに僕らが自ら經營する。これは一つの設置許可の形式だ。損益の責任は僕らにある。その利益によつて當時僕らに補償しやうといふのだ。これらの何れがいゝか、それには慎重な研究が必要だ。僕はまだ考へてゐない。たゞ一つ確定してゐること

がある。それは早く決めなければならないといふことだ。

クウバア達の資本使節が歌劇を見物した晩だ。彼らには何か見せて置けばいゝ。何か見てさへゐれば彼らは何も考へずに何時間でも消すことが出來るのだ。

莫斯科の共產黨本部に今にも反スタアリン派のクウ・デタアが始まりさうだといふ情報が飛び込んだ。いはゆる「信ずべき筋」からだ。街に放つてあるＧＰＵの密偵からだつた。スタアリンの御世に面白くないやつは共產黨內部にもうんとゐるのだ。そいつらだつて銘々立場は違ふが、集まれば馬鹿に出來ない力になることは解つてる。何時集まつて爆發するかも知れない情勢だつたのだ。神經過敏といふやつが人民委員會の上に擴がつた。モスクヷの街には秘密のうちに戒嚴令が落ちた。赤衞軍の長靴が辻に立つた。兵士達は手と鼻を赤くして煙草を喫んだ。矢鱈に唾をしては雪の上に赤色の穴を開けて樂んだ。この瞬間にも喚聲があがりさうな緊張だ。

クレムリンでは共產黨最高幹部の秘密會議がある。室內の空氣は憂鬱と失望と悲觀とで呼吸が困難だつた。彼らは自分達の革命がうまく往つたことを知つてる。だから他人の革命もうまく往くに相違ないことを思つて恐れるのだ。慘敗が眼の前にぶら下つてるやうな幻想が來た。そんなに急迫してるやうな氣がした。ブハアリンと他の二人はすつかり參つてしまつて、ヒステリカルに沸泣し出したのだ。彼らは自分の頭髮を掻き毟つて卓子に噛み付かうとした。ほかのメンバアが抱くやうに支へて三人を室外に連れ出した。スタアリンはほきんと音をさせて指を折つて默つて見てゐた。ブハアリンの泣聲を扉が斷ち切つた。

これだけのことを探り出したのはフロイド・ロイドだ。彼はこれを聞くと直ぐポウランドの國境へ向つて出發した。車中でそれを原稿にした。すこしおまけをつけたことは勿論だ。莫斯科に反スタアリンの有力な革命が起つて市街戰が始まりかけてゐると書いた。スタアリンは馬車屋に變裝して亡命の準備中だと書いて、これは消した。與太が過ぎると眞實を傷けるからだ。たゞ遠くに小銃の音がしてゐると結んだ。彼はこの原稿の市場を考へた。持ち込んで高く賣れるところだ。確かに資本家の新聞ではない。やつらは自分の通信網を威張つてゐて、外部からの持込みなんか仲々受けつけないのだ。單に噂としても介錯りして即座に肥つた小切手を投げ出すところでなくちや困る。ロイドは普通の乘客に紛れて外交の行嚢文書を運ぶ密使のやうに原稿を折鞄へ入れて食堂へも便所へも提げて行つた。彼は高く買ひさうなところを思ひ出して伯林で下りた。

露西亞社會民主黨の本部は伯林にあるのだ。これは面白い亡命者の寄合世帶だ。ここの機關紙がフロイド・ロイドの原稿をセンセイショナルに發表した。無論無記名だし、取引きの時も種の出所なんか訊きはしない。値段はかなり纏まつた額らしい。ロイドは巴里へ來て遊んでゐるのだ。

フロイド・ロイドといふ名前は僕の記憶の底のはうにあるのだ。僕が市俄古にゐる頃だ。無政府主義者の中央郵便局爆破事件といふのがあつて、大（ビッグ）ヒル・ヘイウッドが犯人だと目睨まれた。彼はオハイオのトレドあたりを逃げ廻つてゐたが、ひよつこり市俄古に舞ひ戻つて露西亞入りの準備にかゝつた。ここへシンクレアがやつて來て面會をしたのだ。ウイバシュ街のＡＩＩノマルがメエテー・アイアンウオノカアス・ニウ

ニオンの二階だつた、

僕は雨の中を聽きに出かけた。辯士はジヨン・リイドとシンクレアだつた。僕が大ビルを見たのはこの時が最初で最後だ。彼は潜行中のくせにチエアマンになつて木槌でこつこつやつたりした。警官は多勢來てたが、それを見て知らん顔をしてた。

その時シンクレアの話しが何だつたか僕はちつとも覺えてゐない。が、僕の横に据わつてそれを速記してたやつがロイドであることは思ひ出すことが出來るのだ。僕達はその晩から一寸仲好しになつて、ロイドは僕んとこへ遊びに來たこともある。二人で支那飯を食ひに行つて歸りに馬鹿つ票を買つたりした。

外國人相手の巴里の女は六つの種屬に別れてるのだ。散歩街の貴婦人、巴里に住んでる英吉利とアメリカの女、ホテルの社交廊の常連、賣春宿の連中、キヤフエの「主婦役」、素適に甘い女の旅行者たち、この六つだ。いや、女の客を取る男を入れると七つになる。ジゴロといふんだ。

ファブル聖マルタン街のピギヤル劇場で開演中の女優が全部逮捕された。裸體のまんまで舞臺から拘引されたのだ。「私の女フライデイ」といふやつをやつてゐたのだ。「フライデイはロビンソン・クルウソオに出てくる從僕のフライデイだ。こいつを女で行つたのだ。裸體が惡いんぢやない。いつそすつかり裸體なら差しつかへないのだが、フライデイは孤島に生きてるのだ。木の葉や海草をほんのちよつぴりくつ付けてる。動くとちらちら見えて却つていけない。再三止めたのだ。それでもやつてるから捕縛したのだ。女フライデイが何十人も警察へ行列した。

ラ・プテイ・シヨオミエへ行く。美少年が女裝して給仕に出てる。スカアトを××××だ。エロテイシスムに形を變へた道徳への反逆だ。女はみんなスカアトでも何でも取つちまふがいゝ。

ラ・トロイカは露西亜風のキャバレだ。露西亜の踊子と唄うたひの間を卓子へ泳ぐのだ。こゝの仕組みはすべて國際なのだ。三鞭以外のものを注文する氣なら注文してみるがいゝ。耳の上を毆られるだらう。シャンパンのコルクを抜くと各地方の衣裳を着た露西亜人の一隊が押し寄せて來る。先頭のやつが酒杯を捧げる。それで飲んで直ぐ足許の床へ叩きつけて割るのだ。こいつがこゝの古例だ。踊りは、突伏するやうな苦しめるやうな、ヴァレンシアだ。拂はどうせ舞臺用の紙幣なのだ。

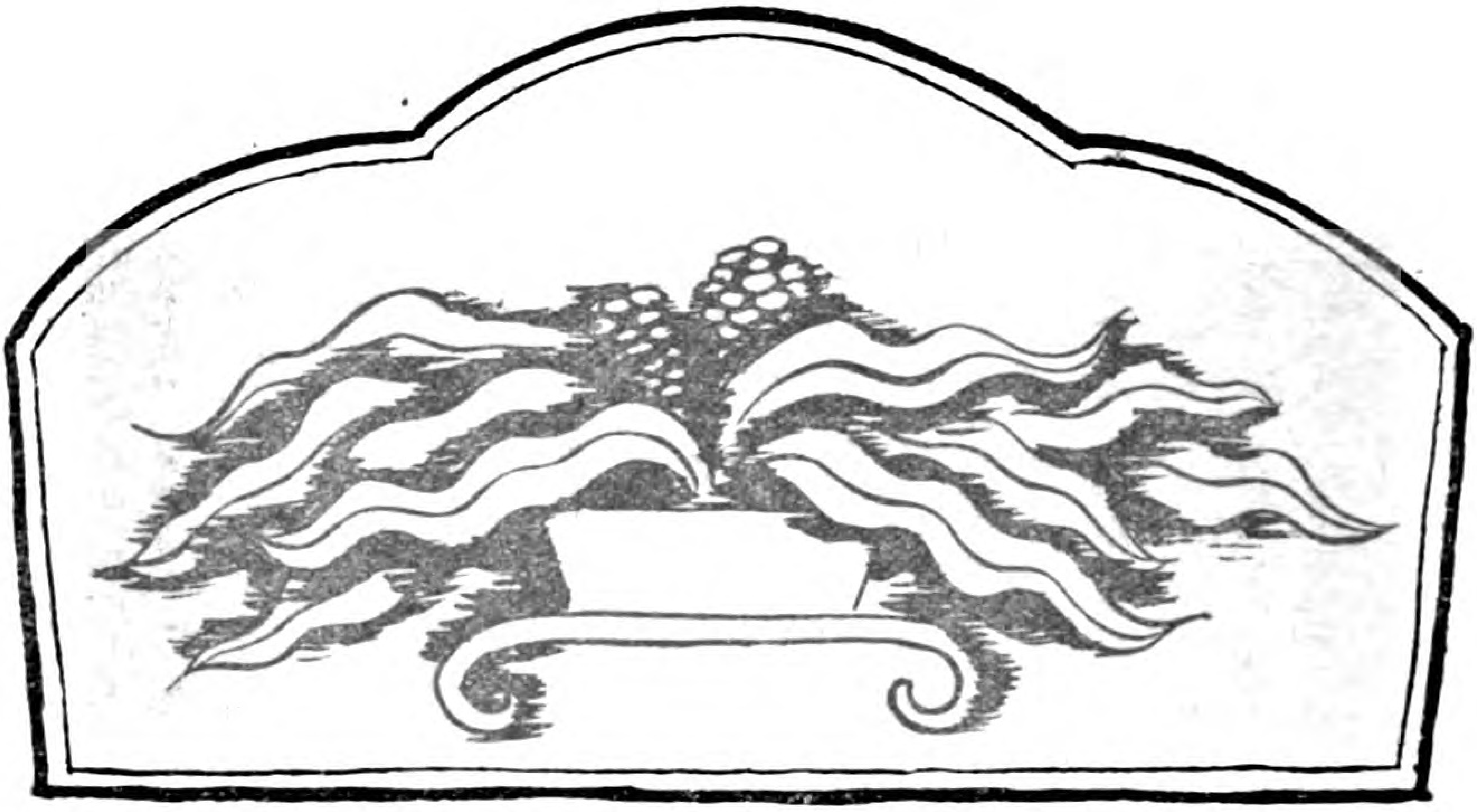
ケエ・ドュ・パッシイに人眼に付かない珈琲店がある。窓に貼紙が出てる。かう書いてある。向側よりはこちらのはうがいゝ。向側を振り返るとセエヌだ。誰だつて河へ這入るよりは珈琲店へ這入るはうが増しだ。

フロイド・ロイドは其處の張出しで僕とアパレテイフを前に据ゑてトロツキイのことから饒舌り出してゐたのだ。

「するとトロツキイは口髭も剃り落したといふのかい」

僕が訊いた。

（未完）



世界新學說

（特別大附錄）

グロースマンの帝國主義論

森　谷　克　己

資本主義の經濟的特殊性は何か？　帝國主義段階にまで發展した資本主義の一特徴として一獨占―此に根源を有する寄生的乃至停滯的な傾向を認めたレーニンは、早くも一九一六年に書いてゐる。――まるで豫見でもしてゐたかのやうに明確に。曰く、「金融資本は支配を求めて努力するが、自由に向っては努力しない。ピンからキリまでの徹底的な、政治上の反動は、帝國主義の一特徴である。斷取側も巨大なる仕掛けの略收制の公行――」と「流れに抗して」五〇二頁）。我々は、今日特殊されるる日々の出來事が然るかな性格に照應するならば、經濟上に、政治上にイデオロギー一般の上に、帝國主義日本の資本のもつ一寄生性が一層なく發揮されつゝあることを容易に看取しうるであらう。

だが、[illegible]一八四八年――六八年間は、――と、「帝國主義と社會主義の分裂」の筆者は述べてゐる――且つそれ以後も部分的に、帝國のみが獨占を享有してゐた。……その他には比較的豐富な植民地乃至全世界的獨占を有した國が存しなかったのである」――第十九世紀の最後の三分の一期間は新しい帝國主義時代への推移を形づくるものであった。獨占の享有者は、一ケ國の企業者ではなくして、二三の少數強大國の金融資本となったのである」――一八八九年――一九一四年の期間中に、帝國主義は、アメリカならびにヨーロッパにおいて、およびついでまたアジアにおいて資本主義最高段階として完全に成熟を遂げた。米西戰爭（一八九九年）、ボーア戰爭（一九〇〇年――一九〇二年）、日露戰爭（一九〇四年――一九〇五年）、および一九〇〇年頃のヨーロッパにおける經濟的恐慌――それらこそが、世界史上の新しい時代の最も重要な諸々の歴史的境界をなすものである」（「流れに抗して」五一一頁、「選集」三二七頁以下參照）

第十九世紀末葉より現世紀初頭にかけて帝國主義が全世界に成熟した。成熟した帝國主義のもつ矛盾を帝國主義國と從屬國といふ對立に求めたカウツキー（「ノイエ・ツァイト」三十二年度九〇九頁）に對立しつゝレーニンはこれを常に帝國主義國と植民地（および半植民地）との對立に比し帝國主義國家間の對立激化にもあることを認め、帝國主義の本質を把えて明確に規定した（この場合ブハーリンがローザをもカウツキーと同列におかうとするならば、それは成心をもつものと言ふべきである。「帝國主義と資本の蓄積」參照二二五頁參照）ローザは、舊資本主義諸國からの新領域への資本支配の擴大と、およびかゝる新領域爭奪のための舊資本主義諸國の經濟的ならびに政治的競爭戰とに、帝國主義の本質を認めたのである。論集第六卷、三九八頁、邦譯「資本蓄積論」下三頁參照）。レーニンは述べていふ、――「帝國主義とは、資

資本主義の一つの特殊的歴史的段階である。これは三つの特徴を有する。即ち帝國主義は、(一)、獨占的資本主義であり、(二)、寄生者的換言すれば停滯的な資本主義であり、(三)死滅しつゝある資本主義である。』(『流れに抗して』五一〇頁)

帝國主義面相の特徴をこれほどしつかり把へたものはない。彼は、かゝる三つの特徴を『資本主義最後の段階としての帝國主義』のうちに、さらに『ブルジョア的統計の總括的記錄とブルジョア學者達の告白』を利用しつゝ肉太い線で以て巧みにスケッチした。帝國主義＝獨占的資本主義は、そのうちに孕む矛盾を(國内的にも止揚せず却つて一層激化したが)世界的規模において擴大再生産した。帝國主義本國と植民地半植民地の對立(ソヴェート聯邦をも含めて。なぜならば、これは被抑壓民衆の××だから)と帝國主義諸國家間の對立の銳化を招來し、××による解決を必然的たらしめてゐる。一九二七年コミンテルン執行委員會は、戰爭の危急を訴へて言ふ、――『資本主義は最近數年間にして或る種の安定をかち得るに至つたとは言へ、それは極めて相對的な安定さしかなかつた。一方に於ては帝國主義國家間の相對的安定、そして他方では帝國主義國家とソヴェート聯邦および解放を求めて鬪爭しつゝある半植民地諸國(支那)との間の相對的安定の時代は、愈々益々公々然たる好戰的な葛藤により斷ち切られるであらう。この葛藤は、かくの如き均衡狀態の終焉を宣言し、以て新たなる帝國主義戰爭の近づきつゝあることを證明する。』(『コミンテルンと戰爭』獨文、八〇―八一頁)

一九二五年の初頭コミンテルンは、直接的な高潮の狀勢のブルジョアジーによる克服過程の明瞭に認められるやうになつたとき、この新しい狀勢を呼ぶに『資本主義の安定』なる語を以てした。だが、その言ひ表しは、戰後資本のもつ一般的危機を誤認せしめ易いのみでなく、理論的にも正確でない。ヴアルガは、それゆゑに『安定』に代ふるに『××の波谷』なる表現を以てすべきであるとなす(『マルクス主義の旗の下に』獨文、一九二九年、第二册、二〇九頁參照)。それは兎に角、資本主義のもつ諸矛盾は、帝國主義段階においては世界的規模において擴大再生産され、國内的の對立と共に列强と列强、[illegible]ソヴェート聯邦と帝國主義列强、の對立の激化となつて現はれる。そこには理論上安定は存しないのだ。高潮の波が歐洲から退いたとすれば、今やそれはたゞ東洋に移つてゐるといふだけのことだ。

夙にレーニンは、帝國主義のもつかくの如き性質を强調した。彼は、それを決死的矛盾において把へ、且つ猛烈なる筆致で描いた。そして帝國主義はカタストロフイの前夜であると結ぶのである。

だが、いつたい何が獨占を生ぜしめ、何が資本を輸出せしめ、何が資本を狂奔ならしめ、何が資本の寄生者的生活を可能にし、そして何が必然的に資本の崩壞を齎すのか? 帝國主義階段は、――と細川嘉六氏は言ふ(『マルクス主義講座』第十一卷)――結局において戰爭による帝國主義的侵略のやり直しによるほかは彼等の資本主義制の存續を支持し得るものではない。だが、何故にさうであるのか? 『堆積する資本家的矛盾』は、何故に『帝國主義戰爭』による解決の外よしなきか? 何故に『獨占制の矛盾の增大』は『結局世界戰

争のカタストロフィの[illegible]か？

帝国主義の[illegible]。ローザのいはゆる、帝国主義の内部的経済的限界乃至ブハーリンの帝国主義の経済的根拠、は何か？ ローザによれば、それは資本主義國内における剰余価値の實現の不能といふことであり、レーニンにおいてはブハーリンに擬れば、[illegible]い分け前を[illegible]資本の前におかれてゐる剰余利潤である。

資本主義は何故に崩壊するか？ ローザにおいては、資本制的経済的限界が、資本主義的生産の[illegible]の段階において[illegible]資本主義が[illegible]小路に陥るからである。尤も、といふことは、帝国主義段階においては、資本の『発展のための決戦が[illegible]の目的物となれる[illegible]が発展の[illegible]へと押し[illegible]――かくて帝国主義的國家自體における[illegible]と[illegible]のために[illegible]的な[illegible]の[illegible]をつくり出す[illegible]外に存在する[illegible]の[illegible]的[illegible]の[illegible]。[illegible]。レーニン（およびブハーリン）によれば、『帝国主義戦争と帝国主義的武装平和てふ一切の忌はしい苦悩に充ちた幾つもの結着を通して』の流れに抗して』（五二二頁）、『戦争により生じた一般的窮乏を土台として発生する革命的危機』のために大衆の蹶起を介して體制は崩壊する（『帝国主義論』序文を照）。すなはち既に現實に世界大戦てふ資本制的擴張再生産の進行した結果『一九一八――一九二〇年間のヨーロッパ経済における具體的事情は、かゝる崩壊期がすでに始つてゐること、生産関係の資本制的體制に再び[illegible]が続けてゐることを明かに示してゐる。……個々に分裂した資本主義社会を[illegible]國一致の[illegible]一般に適用してゐる場合にのみ存在することができる。即ち、この計画における最も重要な生産力たる労働階級が資本主義的職能を果すことを暗黙のうちに「同意」してゐる間だけ××することができる。ひとたびこの××條件が消滅するときは資本主義のその後の存在は不可能になる』（『過渡期経済学』四三頁）。だが、既存の荒[illegible]、[illegible]たいそれによつて資本制制度への必然性が説かれてゐることになるであらうか？

かゝるときに、グロースマンは問題とするのである。かれが問題の取扱方はその著『資本主義體制の蓄積と崩壊法則』の緒言に明かである。曰く、――『私の諸研究の結果は一面になつてゐる。即ち、まづ第一に、マルクスの『資本論』の根抵となれる方法が再構成されたこと、第二にかやうにして得た基礎の上にマルクスの理論體系中の重要な分野が本質的に新たなる解明を加へて叙述したこと、これである。かくして新たに得た諸々の認識の一つが、本書に述べるカール・マルクスの経済恐慌體系の支柱たる崩壊理論である。ここ数十年この方激烈なる論争の中心となつてゐたにもかゝはらず、これまでは、嘗てそれを再構成し、マルクス理論の全體のうちに[illegible]上げようとするの企図がなされなかつた』。すなはち、彼の理論においてはマルクス『資本論』の根抵となれる方法に[illegible]を握つてゐることが必要である。けだし『いかに興味ある材料を集めたる結果と雖も、上にて[illegible]れた道程の[illegible]に[illegible]されないならば、すでに[illegible]価値だつからである。

されば今一つの面目に着目せよ、資本の全現象を價値法則から一貫して闡明し、資本の帝國主義段階をもそれからして理解せしめようとしてゐる點である。『私は、經驗的に確認されうる、且資本主義最近の發展段階の顯著な諸徴表と考察されてゐる（そして帝國主義論の諸著書のうちで數へられてゐる獨占組織、資本輸出、原料產地分配をめぐる鬪爭、等々の如き）世界經濟の諸傾向たるや、すべて、いかに、第一次的の根源たる資本蓄積の本質から生ずる第二次的の表面的諸現象たるものであるかを論證するに止めた。この關係を確認してこそ、資本主義の全現象をば、特殊な追加的理論の援助に俟つことなく一つの原理卽ちマルクス價値法則から一義的に闡明し、且つまた資本主義最近の帝國主義段階をもそこから理解できるものとなすことが可能となるのである。斯なることにより初めてマルクスの經濟學體系の巨大なる完璧性が斷揚されるに至ることは、特に強調することを要しない』

かやうにして、彼が資本蓄積の客觀的經濟的限界を論證したことは、彼の一大功績でなければならぬ。『內容から言へば、本書に取扱へる問題たるや、中心的な問題、言ひかへれば資本主義の問題である。卽ち、排他的な、且つ自分自身をのみ頼りにしてゐる一般的な經濟體制として完全に發達せる資本主義が、再生產過程をば不斷に擴大する基礎の上に無限に展開しうるや、或ひは然らずしてかくの如き擴張には例へば何らかの踰越すべからざる限界が存するや、否や、の問題が研究されてゐるのである。』勿論、彼は、價値法則に基き否定的結果に到達した。

これまで凡その左翼マルクス主義者は資本體制の崩壞を帝國主義戰爭に繫らしめた。だが、『帝國主義的世界戰爭は最高の發展形態に於ける恐慌に外ならぬ。だから帝國主義論は恐慌論の發展でなければならぬのである。』（久留間鮫造『序論』大原雜誌第八册）しかるに從來の恐慌理論とは如何？　曰く、『恐慌は生產諸部門間の不均衡から生ずる』曰く『恐慌は大衆の過少消費を原因として生ずる』或は曰く、『恐慌は、大衆の過少消費を條件とし、生產諸部門間の不均衡を原因とし、かつ信用關係網を媒介として週期的に勃發する。』（林要『社會思想』第八卷第十一號、八九頁）尤も林氏には最後的究極的なものがさしてよられる。だが、『國際戰爭』により『生產力がその浪費的方面を著しく暴出する』といふこと、『大衆の過少消費が極度の產業合理化のため尖銳化されること』とは、如何やうに結びつくのか？　猪俣津南雄氏の理論とは如何？　曰く『恐慌論にあつては資本家的競爭が重要な役割を演ずる。競爭は、生產技術の改良を促し、勞働の生產性を大ならしめると共に、資本の有機的構成を高度化し、可變資本――賃銀として支拂はれる資本部分――を相對的に減少せしめる。……かくして社會的生產力は、不可避的に、階級社會の限定された消費力以上に增大する。此の階級對立に根ざす矛盾撞着は、恐慌となつて周期的に爆發する。』『帝國主義研究』ただそれだけだ。

價値法則を一貫せしめるグロースマンは、斯の如き理論を如何に批判し、止揚したか？　茲では私は、對立的立場にある他の諸說の一斑を描くに止める。それによつて、彼の所說の特異性を浮彫せしめようとするのである。讀者は、近刊『資本主義體制の崩壞法

問題に就いて見られたい。彼は、一般にマルクス的回顧し、この方面の從來の全理論を一切檢討し、吟味し、批判し、止揚してゐる。いはゆるブルジョア理論家は勿論ツガン、バウエル、カウツキー、ヒルファアディング等々より、ローザ、ヴァルガ、ブハーリン、レーニンに到るまで悉く批判にのぼる。

彼は、たしかにマルクスの諸基本概念に新たなる説明を加へ、蓄積＝崩壊の理論の再構成してゐる。これは、アンチ・マルクス主義の徹底的克服を意味するのみならず、從來の「正統」マルクス主義的理論以上に出でんとしてゐたマルクス主義的理論の批判と整理でもある。果然、彼の前掲書が現はれるや、社會民主々義に相ついで泥を浴いた。即ち崩壊の理論を抛棄し、その客觀的必然性を否定し去ることによつて相見えたいつてゐる 獨社會民主黨機關紙「戰鬪」一九二九年六月、ヘレーネ・バウエル「社會主義月報」一九二九年七月號。コンラード・シユミット「獨社會民主黨機關紙・社會評論」（一九二九年十月號、アルフレクド・ブラウンホールの「月刊」を見よ。ヘレーネは結論［illegible］

マルクスから言へば、一種の資本家的經濟破綻ではなく、プロレタリアートの組織的な××である。それゆゑに、グロースマンの用語に從へば、マルクスこそは決定的に「新・崩壊派」なのである。蓋し、彼は、勞働者階級の解放は何ものによつても阻止されざる諸結およひ剩餘價値の變たるものの所産ではなくて勞働者階級自身の所産たるであらうといふことを信じてゐたからである。（前掲、二八頁）

ブラウンタールが「社會主義」冒頭の論文「崩壊理論の崩壊」に說くところも亦同方向出である。曰く「見渡し得られる一切の發展に見るところに、人は、つぎの如き結論を抽き出さずにはゐられないやうに思ふ。即ち利潤率の低落といふことは、こゝ十數年以來それに反對の作用をなす諸傾向――資本集積の形態をとつてゐる組織上の合理化と結合つてゐる技術上の合理化の尖銳化――のために進行を止められるに至つたといふ結論これである。こゝにおいて、これから先の將來に對しては何らの危ぶむべきことではないわけである」。卽ち確認さるべきは、つぎの一事のみである。グロースマンの崩壊理論が價値にとつての決定的な前提卽ち利潤率がよし間斷を伴ふとは言へ持續的に低落するものであるとの假定たるや、根據なきものであるといふこと、之である。それと同時に、必然的にまたグロースマンの抽き出す諸結論すべてもが崩れる」。（前掲、三〇二頁）だが、我々には、資本家社會の價値法則の作用が前提する以上「社會的必然性を意識して「勞働者同盟せよ」とよぶことが出來」るのであらう。（櫛田民藏、大原雜誌第七冊、三三五頁）

序にグロースマンの人となりについて私は彼の地から次の如き情報を得た。氏はユダヤ系のポーランド出、戰前十年ほどポーランドの勞働運動に從事した關係から、戰前よりポーランドでは有力者であつたが、當時むしろローザの政策に反對でレニンに組みしてきた。（ローザはポーランドの民族解放問題において絶えずレニンと對立してゐた。で、グ氏は今もなほレニンが正しくローザは誤つてゐたと主張してゐる）。經濟學の專門部内では統計學が專門として十數年前にオーストリア人口に關する統計の大著あり（本語では無題）、一九一三年には佛語でシスモンデイ論を公け

にし、今度の書がマルクス研究の第一書達て、段々とそのマルクス研究を公けにしてゆく豫定である……』彼は現在フランクフルト大學の講師をつとめ、且つグリユーンベルヒ教授編輯の『社會主義および勞働者運動の歷史のアルヒーフ』にも關係してゐる由。彼が同誌第十三年度(一九二八年)に載せた、フリッツ・ステルンベルヒとの『帝國主義論』に對する批評『帝國主義と社會革命に關する一箇の新學說』は帝國主義論上重要なものであるが、本稿の豫定紙數の關係上觸れぬこととする。なほ彼は、近くその蓄積＝崩壞論に對し向けられてゐる諸々の批評を反批判する由である。この問題の論戰の高まることにより、人は二者擇一の前におかれ脫落すべきは脫落するであらう。彼の前掲書は邦譯と殆ど同時的に佛譯、ポ譯、露譯も出版され、特に露譯にはプハーリンが序文をかくとか、徹底的に批判されたプハーリンの批評こそ興味はある。

最後に、グロースマンの全理論を貫く精神はつぎの如く要約されよう。

聖なるイリアスの×ちてゆく日
屹度一度はその日がくるであらう

「イリアス」訳

(突然の依頼であつたことゝ限定紙數の關係とで内容に深く立ち入り得[illegible]ておくことを斷つておく——一九二九年十二月一日)

マンハイムの歷史主義

藏内數太

一

一の思想や觀念内容に對しては、それが眞理か否か、またはそこに主觀的に如何なる意味が思はれてゐるか、を問題とする態度の外に、その思想を一の存在として、別の存在から解釋する態度があり得る。前者は思想を内に於て見るものであり、後者はそれを外から見るものと云へやう。外から見るとは、觀念的内容を、それに對し云はゞ一定の距離をとつて、他の存在領域と關係せしめ、又はこれの現はれとして、把へることであるから、それは一定の精神史的發達を條件とすることが考へられる。内に於いて見る場合は、思想は多く、その直接の支持者たる個人の事柄として問題とされるから、かゝる個人より個人へ書物より書物への聯絡を辿る處の觀念史が、其處に對應する。しかしここに於いても、思想を傾向や立場に於いて問題とすれば、これらは思想家の個人的範圍を出でたるものであり、所謂「固有名詞」の持つ意味は從つて少くなる。卽ち個人の代りに社會、集團が思惟の背後に考へられて來る。かくて觀念的なるものを、かゝる社會的領域に關係づけるならば、そこに一の外在觀が生れる。思惟の社會的領域への關係づけは、現代の意識を特徴づけるものゝ一である。かゝる關係づけは、それが方法的組織的になされてゐる場合は、今日謂ふ處の知識社會學である。

社會的說明は、例へば世界觀的立場に就い

てもなされるが、亦近代の一般的な科學的思惟方法の發達に就いても行はるべきである。概念や認識範疇の發生に關する佛蘭西社會學の見解や、名目論的考方の發達を中世的全體的共同社會の分解より說明することや、また近代の經濟生活に於ける諸技術の思惟に對する作用の考察等が、この關係に於いて注意される。然し合理的科學的思惟の發達の社會學的說明に於いても、か〻る思惟方法を唯一の正しい、人間に普遍的に要求せられる處のものとして、前提する態度と、これもまた一の歷史的形態に過ぎないと認める態度とは、根本的に對するものである。科學を自然に對する西洋人個有の特殊的態度より導く見解の如きは、この後者の態度に屬する。ここに知識社會學に於ける、佛蘭西的個別的と獨逸的傾向上の興味ある對立の問題が現はれるのである。そしてまた知識社會學的問題たる佛蘭西的、また獨逸的、兩方的、思惟と存在的思惟との對應的問題となるのである。しかし此處には立入らない。

獨逸に於いて一般的に知識社會學を論じてゐる者として、代表的に二人を擧げることが出來る。それはマックス・シェーラーとカール・マンハイムとである。合理的思惟の發達の說明が、佛蘭西社會學の好んだ問題であつたとするならば、ここに於いては事情が異つてゐる。シェーラーに於いては、科學的知識と共に、形而上學的及宗教的知識とよばれるものが、知識社會學の中に包括されてゐる。加之科學の歷史性が強調せられてゐる。マンハイムに於いては、思想に於ける歷史的可變的な立場が問題とされてゐる。そこにこの兩者が結ぶ共通なるものがあるのであるが、しかしこれと、其他若干の類似點を注意しても、一の根本的なる見地に於いて兩者の間には、對蹠的な差違が存する。これは彼等自身が意識的に、また第三者が比較に於いて各々に示してゐる處のものである。それは前者が、思惟と社會的存在との關係を論じ作らも、歷史的變化の彼岸にある絕對的法則の世界を信ずるのに對し、後者があくまでも、思惟に於ける見地の歷史的制約を主張することである。一口にして云ふならば、前者を形而上學的傳統に立つのであり、後者を歷史主義の方法的主張者である。

ここに歷史主義の社會學者マンハイムの所說を概觀しやう。

或る知的形象の社會學的考察は、次の諸條件の配合に基づく。第一に思惟が思惟を超越し、相對化することである。近世に於けるか〻る相對化には、階級意識の發生が結合してゐる。暴露に於いては、觀念內容の背後に於いてこれに結合してゐる處の存在に、注意する。か〻る背後の存在が人格であり、觀念內容が例へばこの人格の利己的目的の手段であるといふが如きことを暴露するのは、彼の所謂心理學の暴露であるが、觀念態の暴露はか〻る倫理的人格に關係せしめてではなく、社會的經濟的條件に相對化するものである。か〻る關係領域の成立は、知識社會學の基礎的一要件である。何が故に社會的・經濟的關係平面が、採用されて來たかと云へば、これは今日近代人の生活の體驗中心が、實に社會的經濟的なるものに存するによると說く。ここに歷史主義の立場が明瞭に示されてゐる。第知識社會學の條件のいま一つに、思想に對する全體觀の成立である。即ち個々の思想體系を、直ちに社會的平面に關係づけないで、一

較的な思惟の立場を問題とするといふことと
である。

かくして從來觀念に想定されてゐた所の靜態性は、現實的なるもの〻動態の中に解消され、思惟の內容も形式も、社會の全體過程と運命を共にする。これは事實に於いて證明されてゐる。歷史主義のこの見地は、事實の觀察を認識論の中に引き上げたものに外ならない。

マンハイムのこの主張は、史的變化の彼岸にある處の、統一的眞理組織を前提とするシエーラーの立場と、根本的に異るものであるが、なほこゝに注意すべきことは、シエーラーは一の時代、民族の精神的特性、その各種の生活表現に於ける型の統一を重んじてゐるのに對し、マンハイムは一定の社會に於ける思惟の諸立場をば、背後の社會層に關係づけるのである。卽ちマンハイムに於いては、知識社會學的所與は、社會內部に於ける思惟の諸見地の存在であり、これをばその基づく處の思惟要求又は世界要求を通して特定の社會層に關係づける。そしてこの現實的存在の歷史的推移に關係づけて思惟見地の變化を見んとするのである。思惟の歷史的變化の背後には、社會的な構造が存する。同一の概念でも一の社會的存在圏域から他のそれに轉移される時は、社會生活にとつて全く異つた意味を、有つて來るものである。

マンハイムの右の如き知識社會學的根本見解は、具體的には保守思想の研究に於いて示されてゐるが、そこでは先づ保守的思惟を以つて十九世紀前半に於ける一の歷史的立場として、單に反射的に古きものに執着するが如き、いはゞ生物學的範疇に屬する處の行動形態と區別し、而してかゝる意味の保守思想の共通な志向として、具體的なもの、要求、社會的當爲に對する態度、現在を過去の終結點として見るに止まること、有機的團體の強調等を擧げてゐる。吾々はこゝに、反對の急進思想に於ける抽象的唯理主義を、豫想することが出來るのであるが、興味ある對立は歷史に關する二者の把へ方である。歷史に對して冷淡なる十八世紀的革命思想に對して、十九世紀は一の史觀に基づく革命思想を生んでゐる。こゝに於ける史觀と前の保守的思惟の過去に對する偏向との對立は、マンハイムの歷史主義的歷史によつて、必然に歷史主義に陷するであらうか。私はここで彼の歷史主義に關する論文に溯つてこれを述べ、更に歷史主義の根本的主張を見よう。

マンハイムは、トレルチの「歷史主義とその諸問題」に於ける見解を發展せしめたりと信じてゐる。まづトレルチの說く如く、認識論的立場の歷史的社會的制約の主張をその出發點とする。カント主義に於ける「認識論的主觀」は、歷史に關する命題に於いては、存在することが不可能である。そこでは對象の捉へ方が已に、具體的な世界要求によつて決定されてゐる。歷史文化に對する綜合的把握は觀者の歷史的「現在」によつて制約せられてゐるからであると。かゝる反カント的立場に於いては、シエーラーも同樣である。彼は人類の精神構造の複數性をば、與へられたる出發點と主張する。然しシエーラーに於いては、普遍的絕對的なるもの〻實現が、將來に豫定されてゐる。反對に歷史主義に於いては、無限に變轉する處の立場しか承認されない。然し歷史主義者にとつては、立場は歷史的な必然性を有し、把握に於ける價值尺度は、歷史的

に基礎づけられてゐる。從つて單なる相對主義ではないと主張する。

然らば種々の見地より作られる處の種々な歴史觀の内容は、それが相互に於いて、如何に關係づけられ統一されやうか。ここに辯證法的發展としての序列が、要められて來る。即ちここに合理化的、概念的發動に對して、他方に非合理主義的、直觀的、歴史學派的點即が對立する。この二つの方法の調和に關して、マンハイムはトレルチの與へなかつた處の解決を試みんとしてゐる。即ち辯證法的體系化把握と歴史學派的直觀把握との夫夫の權利の問題である。マンハイムによれば、この二つの把握の仕方は、それぞれ別な文化に對して妥當するのである。

文化には科學の如き合理的同質的分岐構造をもつものがある。そこでは後の狀態は常に前の狀態に優つてゐる。これに反對に藝術の如く、製作者の心的狀態に非常に制約されてゐるものがある。かかる文化に對しては、それに直觀的に深い理解をなせるもののみ以つてこれに與らんとするのみである。アルフレッド・ウエーバーの合理的文化と非合理的文化との區別に於いて結局この二種の文化に注意してゐるのであるが、マンハイムは辯證法的に把握される文化を、その中間に置くのである。例へば哲學の如きはそれ自身辯證法的合理的に發展する。そこでは後のものは前のものを新しい體系の中に再構成してゐる。かかる歴史的存在に就いては、辯證法的把握が適當とする。哲學的實在論の必然的な受容が歴史主義は主張しながらも、そこに一定の體系が存することによつて、無限の相對主義に陷入らないと、マンハイムは論ずる。

この相對主義の問題は、歴史主義に關する議論の中心をなすものであるが、今は只マンハイムの所説の主要なる點を紹介するに止める。個歴史的なるものゝ三の運動形式に關して、シエーラーの類似の見解と比較することが望まれてゐるが、これも別の機會にゆづる。

ホルモーン學説の現況

宮川米次

ホルモーンの作用に關する學説を述べるに先立ち其の發見の端緒をなした臨牀研究を一寸述べて見る必要があると思ふ。一九〇二年英國倫敦大學教授ベーリス及スターリング氏の二大家が約十八時間絶食させた犬に於いて、麻醉させて開腹術をなし、兩側の迷走神經及び腸に來て居る腸間膜の内臓神經を切斷し、空腸の殘りの腸管に連絡されて居る局所神經の支配よりは除外せられた狀態に於て、十二指腸の表面に開口して居る膵液の輸出管に小さい管を入れて膵液を集める樣にした。次いで十二指腸の表面に約〇・四パーセントの稀鹽酸を一〇乃至二〇㏄注いだのに膵液の分泌が著るしく盛つて來たのを認めた。

其所で同氏等は十二指腸の粘膜を剝離して之れに〇・四パーセントの稀鹽酸を加へて、尤

分離して後に、エッキスを作つて、此の物質を前の様に手術した犬の靜脈に注入して見たのに、是れ亦著るしく膵液の分泌が盛んになつて來たのを認めた。同氏等は此の二個の事實から、十二指腸の粘膜組織内には一種の物質があつて、それは酸によつて始めて活動性のものに變じて、血行内に這入ると神經の支配を待たずに膵臓の腺細胞に作用して膵臓の分泌を促すものである、生理的の消化時に膵液の盛んなる分泌を來すのは、胃の鹽酸に依つて、酸性を帶んで居る食べ物が、幽門を通つて、十二指腸に這入ると丁度前の實驗と同じ様に十二指腸の粘膜に作用して、其時にある特殊の物質を賦活し、それが血行内に吸收せられると其所で膵液の分泌を促す様になるのであるといふ學説をたてた。此の特種の作用のある物質に對して同氏等はセクレチンと命名した、そして此のセクレチンは十二指腸の粘膜組織の内ではプロセクレチンなる形になつて居て、活動性を帶んで居ないが、此れを酸で所置すると變形して「セクレチン」となり、賦活せられるのであるといふのである。是れと同様の實驗が相次いで色々の人々に依つて遂行せられ、新しい神經だけでなく、そして、膵臓の神經も切斷して、其の支配を除外してもセクレチンの刺戟、分泌促進の働きは完全に現はれることが明らかになり、其の上にセクレチンは獨り液の膵分泌だけを催進するのではなくて、唾液も、胃液も乃至膽液の分泌も促進する作用があり、其の本態はコリンであらうと言ふ研究迄現はれて來た。又胃粘膜組織にはエドキンスの研究で同様の性狀のものがあつて胃液分泌を促す作用を有して居り、之れを胃セクレチンと命名したのである、近來の研究によると、此の物はセクレチンと同一物であらうと言ふ様な意見も出て來て居る。

ベーリス及スターリング氏の所見は今日諸學者の追試に依つて何等誤りはない事實であつて、同氏等は此の様な特種の刺戟作用をなす物質に對してホルモーン Hormone と命名した、其の字義は興奮せしめる、又は刺戟するといふ様な事柄でギリシヤ語の ὁρμάω から出て居り、英人は語尾にeを附し獨人はeを略して單に Hormon と書いて居る、此の名稱はスターリングが一九〇七年、以上の事實から推論して作つたので、此の他に同じ様な提稱もあるが、如何にも呼びよい爲めに此の名が今日一般に使用せられて居るのである。然し其の字義と實際、及び發見者の考へたのと全然一致して居るとは申されない所が出て來た、爲めに他の名稱が紹介せられたが尚使用せられるに至らない、例へばシエーファー氏は所謂ホルモーンの中には臓器の機能を刺戟し、亢進させる性質のものと却つて其の機能を抑制し、緩和させる性質のものとがあるから、一様にホルモーンと呼ぶのは適當でない、前者に對して之れをホルモーンと呼び、後者にはシャローン Chalone なる名稱を與へたい、そして此の兩者を總稱してオータコイド物質 Autacoid Substance（治療劑の意）と言ひたいと言ふ意見を發表したが、殆んど誰れも用ひない、又一方にはホルモーンを產出する所は通常内分泌腺である、即ち輸出管に依つて其の產生物質即ちホルモーンを外部に送り出さずに、直ちに血管内に入れると言ふので、唾液腺から唾液が出たり、胃液腺から胃液が出るのとは非常に趣きが異つて居るから、此の内分泌物を明瞭ならせる爲めにイ

シクレート(内分泌物)といふ、唾液、胃液の様な外分泌物(エクレート)と截然と區別したいといふ提案は何人の首肯せざるところで、廣くホルモーンなる名稱に對して採用せられて居る。内外ホルモーンの生産せられる場處、内分泌腺の本來の場所である副腎、甲状腺、副甲状腺、腦下垂體、松果腺の様な腺器官が主なものである。だから、ベーリス、スターリングの發見した、セクレチンは十二指腸の如きは、實に例外に屬する腺器官である事が問題になつて來て居る爲めに、内分泌物なる分際に決して限るべきではないと思はれる。然し此の問題の興るのは、外分泌の方の腺器官は、内分泌腺たらざるものであるかといふ事を考へるが、それは何れも同じ様に發見、胃液は夫々腸臓、膵子が作る外に特有のホルモーンが作られて其の作用に依つて夫々其の作用が完全になり、再生産も亦個々で行はれるのである。膵臓は消化液を作る外に、其の内にあるランゲルハンス島からはインスリンなるホルモーンが作られ、糖分の同化作用に必要な働きをなして居る。若し其等の働きが衰へると忽ち異狀になるのである。其の意味で、セクレチンは、胃の「セクレチン」の如きも同様に分泌のものである。其他の臓器例へば睾丸、卵巣、副腎の如きからも夫々特有な刺戟性作用のある物質が出來て、血液の内に送られ夫々特有の作用を營して居るが、之れは上述のホルモーンとは聊か性質が相違して居るから、私は此種の物質にはアウトホルモーンといふ名を與へて居る。之れを要するにホルモーンは内分泌腺でなければ出來ないといふ考へは誤りであるとは近時益々明瞭となつたのである。

ベーリス、スターリングの發見を誘發せし研究

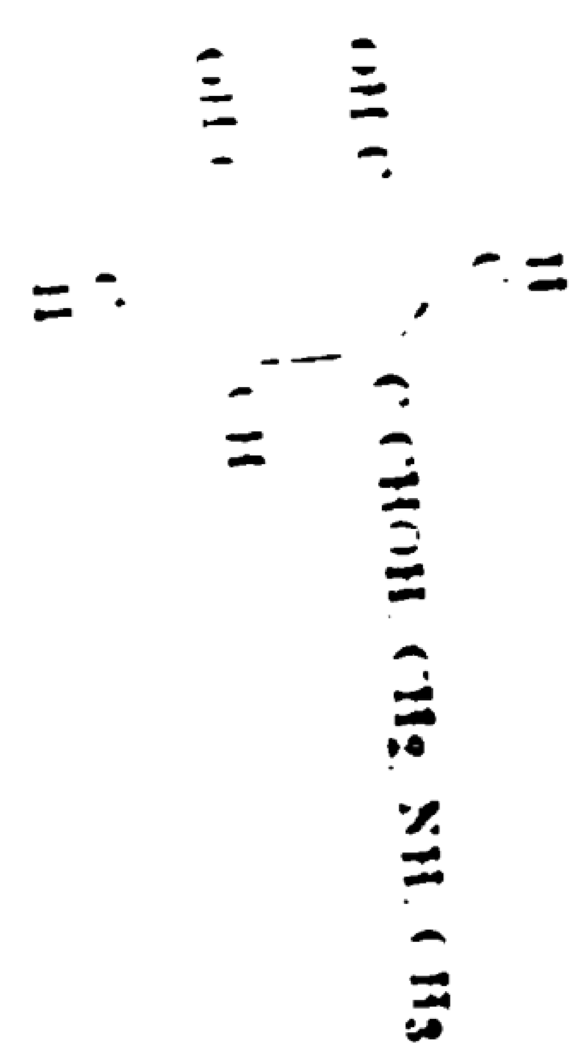
大事のなるは決して一朝にしてなるものではない、特に自然科學の研究に於てはそれである。ダーウヰンの進化論、ニウトンの引力說の如きも、之れに先きんじて可なり興味ある數多の前驅的研究もあるのである。ホルモーンの發見に於ても全くそれと同様であることを茲に一言して見たい。一八四九年獨逸ゲッチンゲン大學教授ベルトールドは雄鷄の睾丸を剔出すると雞冠は萎縮し、鷄性を失す性慾も、同性に對する闘爭も現はれない。丁度中性の鷄が出來るが、若し此の鷄に一度剔出した睾丸を頸部の皮膚にかへ移植してやると、雞は元の如く恢復して、全く普通の牡鷄の性狀を現はして來る。卽ち、性慾があるし雌には關心になり、同性に對する闘爭性も現はれて來るといふ風になるので、睾丸からは神經との連絡は斷たれても、一種の物質が出で、血液の内に流入つて第二次性の發育をさせる作用がある。此の際外分泌の有無は關係がないといふ事が知られた。之れに極めて類似した實驗が、其後四十年にして、佛蘭西の大生理學者、ブラウン・スカール氏に依つて行はれた。卽ち犬の睾丸を剔出して、其の搾液を自體に注射して見て其の反應を見たのに、當時七十二歳の老翁が、忽ち元氣を回復し、食慾も復され、性慾が異常に高まつて、枯木に芽が出た様な感がしたと言ふて居る。此の現象は、自個體の睾丸は既に老廢して居るが爲に、完全なる新たな出さしむべき物質の生成がない、此の時に當つて、之れを外部から補給すると、脫落して居た働きが喚起せられるのであるといふて、此の事實を生理學會に發表したのである。之れを傾聽した人々は共に同情に其の大發見を讃し、元氣を取り戻した老人共の如くなつたと共に、今

日の所謂、腦下垂體は、ホルモーン作用の發見の端緒をなした。吾々の體内で内分泌なる機能があると喝破したのは、同じく佛の生理學者クロード・ヘルナール氏で、肝臟に於ける色々の實驗的成績の結果、肝臟は外分泌物として、膽汁を作り之れを十二指腸に送り、内分泌物として、グリコーゲンより、葡萄糖を作り、それを血液内に出すと言ふて居る。此の事實は今日も亦正しいが、グリコーゲンから血糖が作られることを今日は内分泌作用とは言はないが、然し内分泌なる事實は此種の事に依つて伺はれると思ふ。丁度ベルトールト氏の實驗に見る樣に、移植せられた睪丸から、或種の物質が分泌せられて、外には出ずに直ちに血行内に送られるといふのと其の軌を一にして居ると思はれる。是等の基礎的のものと共に、吾々の體内には、外界に何等の交通のない臟器が澤山ある。唯だ血管から榮養をとり、神經によつて支配せられて居るが若し此種の臟器から物質が出來るとすれば、其の產生物質は勢ひ血管内に直ちに吸收せられなければならない。これに屬するものは、甲狀腺・胸腺・副甲狀腺・副腎・腦下垂體・松果腺等がそれである。これと同時にこれ等の臟器からは内分泌物が出るであらうかと想像せられる研究は澤山に現はれた。又一方には甲狀腺の機能の異常がある樣に思はれた病氣が一八三〇年ダブリンの醫師ロバード・グレーブスに依つて知られ、獨逸では其後十年メンゼブルグの醫師アドルフ・バセドウ氏に依つて同樣な意見が發表せられ、一九五五年にはロンドン醫師のトーマス・アヂソン氏に依つて、皮膚が青銅色に變化する病氣が記載せられて、それが副腎に病氣がある爲めであることも明瞭にせられ、上記の輸出管を持つて居ない臟器は、吾々の體内へ、極めて重要なる作用をなして居ることが、總ての研究者に依つて注意せられる樣になつた際、丁度一八八九年には獨逸のメーリング、ミンコウスキーに依つて眞性糖尿は膵臟の機能脫落に依つて起ることを、犬に於ける實驗に依つて明瞭にした。之れに次いで一九〇二年にはベーリス、スターリング氏のセクレチンの發見となつたのである。此の樣に其の歷史の跡を尋ねて見ると極めて興味深かいのである。一旦此の種の發見があると一般研究者の興味を喚起して多くの新發見が追隨せられるのが常であるが、ホルモーン研究界に於ても全くそれと同樣で、色々な新らしい業蹟が撒ぜられて來て、ホルモーンの生物學的の作用に就ても、發見者の考へとは可なりの變遷を經て居るのである。

ホルモーンの種類 非常に澤山のホルモーン乃至ホルモーン類似作用を爲す物質が記載せられて居る、其の内で、完全に純粹に分離し得て居るものはアドレナリンであつて、サイロキシンも略ぼ純粹と言ふてよからう、近時極めて有名になつたインスリン、ピツイトリン、メンホルモーン等は前二者に較べて見ると未だ純粹と言ふ域には達して居ない。其他のものに至ると、其の作用上からホルモーンの存在を認識して居る程度のものである。

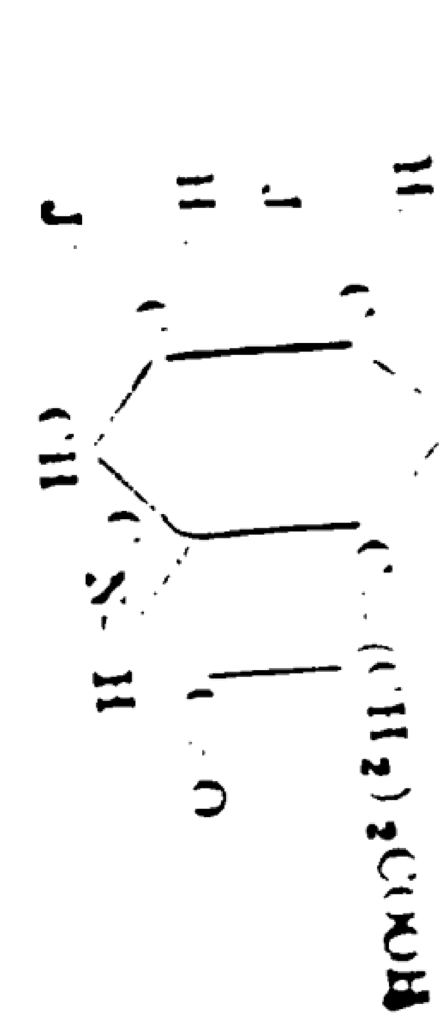
アドレナリンは副腎の髓質から分離し得らるもので、其の作用は交感神經の末梢部を刺戟する事にあるのである。此の爲めに生物學的には色々な現象が現はれるが、其の中でも最も大切なものは血壓が高まる事であり、健康體では、此の種の物質に依つて血壓の降下を防いで居る一原因をなして居ると思はれる

のである。副腎に此の様な物質が含んで居ることが始めて知つたのは、英國の生理學者オリーバーとシェファー氏で、副腎エッキスには血壓を高める作用あることを發見したのである。之れ一八九四年のことであるが、越えて七年、吾が高峰讓吉博士は牛及羊の副腎より、終に此の有效成分を純粹に分離することが出來た。其の物は Methylamino äthanol brenzkatechin



であつて、其後色々の方面から研究せられて終に此の物は人工的にも合成することが出來る樣になつたのである。即ちこの物はプレニツカアヒンの溶母體で、コロイド狀で、結晶さ[illegible]の内分泌物即ち膠質より出るホルモーンはベーリス等のホルモーン學説の發表に先きんじて既に分離せられたので、然かも人工的に直ちに合成せらるゝ樣になつたのである。此のアドレナリンの生理的の作用が一言申して見やうなら、上記にも言ふた樣に交感神經の末梢部を刺戟する作用がある。爲めに內臟其他の器管は其の働きが鼓舞せられたり、或は抑制せられたりするが、然し解説の困難な樣な現象も現はれて居る。例へば血管は緊張して血壓は高まつて來る。消化器の內で幽門は緊張し、胃腸管の運動は抑制せられて便秘するが、幽門、廻盲瓣の閉鎖が強くなり、氣管枝の筋肉は弛緩し、腎臟に對しても血管が強く收縮する。眼球の瞳孔は大きくなり、肝臟內のグリコーゲンは葡萄糖化して、血中に送り出される樣に作用するから、一時に多量のアドレナリンが用ゐると、血糖が正常以上に高まつて來て、終には尿中に糖が出る樣になる。此の外倘色々な現象があるが、何れもアドレナリンが夫々の臟器に刺戟作用が及ぼした結果に外ならない。

[illegible]パセドウ氏以來既に認められて居た。此の物の分離には色々の人々が苦心して居る。パウマン氏はヨードチリンなるものとし、オスワルド氏はヨードチレオグロブリンなるものとし、一九一四年以來ケンダル氏は此の分離を企て終に三個の沃度を有する[illegible]



の樣な構造式のものが分離して之れにサイロキシンなる名稱を與へ、人工的にも合成することが出來る樣になり、其の生理的作用も、上記の人々の發表して居る物質と類似の作用があつて、恐らく甲狀腺ホルモーンの略ぼ純粹に分離せられた形のものと云ふてよからうかと思はれるが、然し到底アドレナリン程に確實ではない。甲狀腺內分泌物の生理的作用は極めて多種多樣であるが、一般に交感神經を刺戟し、物質代謝を亢進させる作用がある。之れが核に一々述べることを避けるが、若し[illegible]のために）又は其の機能が減退したりすると身心共に發育が著るしく惡るくて、所謂粘液水腫と云はれる恐ろしい病氣になつたり、非常に[illegible]して。所謂[illegible]と云はれる[illegible]

にしたら、此の時に甲狀腺ホルモーン」を與へてやると、極めて徐々ではあるが、次第に其の病的狀態より回復して、健康體になるが、此の製劑を與へずに置くと間もなく元に戻るのであつて。此のホルモーンなくては到底回復は出來ない病氣である。如何に此の「ホルモーン」が全身の機能と關係があるかが伺はれる。之れと反對に甲狀腺の機能に異常があつて、恐らく其の分泌等が高まつて來たとしたら、如何なる結果が現はれるかと言ふに、それは前に言ふたグレーブス、バセドウ氏病である。甲狀腺は非常に大きくなり、心臟の働きは高まつて來て、脈搏が常に高く、眼球は突出し、手又は足が震へる、一寸した事に非常に驚き容易に汗が出て、且つ體が次第に瘦せて來、稍々ともすると尿中に糖が出て來る。是れは中年の婦人に多い病氣で、一般に非常に神經質である、其の狀態は粘液水腫症と殆んど反對であつて、此の治療の爲めには甲狀腺の一部を手術して取つたり、エッキス光線等で萎縮を計つたりする、それで屢々可なり輕快し、殆んど治癒するものがある。以上に依つて甲狀腺ホルモーンの作用の極めて大體は伺はれたらうと思ふ。

インスリンの發見、之れはアドレナリンの發見以來ホルモーン學界には特に盛んなる注意を喚起せられた事柄である。膵臟は、消化液として極めて重要な作用をする膵液が外分泌として十二指腸の表面に送り出されることは、古くから知られた事柄であるが、之れと同時に糖の代謝に對して極めて重要なる作用のあることも古くから注意せられて居た。即ち一八九九年フオン・メーリングとミンコウスキー氏は、犬の膵臟を全部剔出すると極めて重症の糖尿病の起ることを認め、次いでミンコウスキーはヘドンと共に色々の實驗をなし膵臟を剔出した犬に、膵臟を移植すれば本病が起らないし、又膵臟を完全に體外に取り去る樣な手術をしても、糖尿は起らない、爲めに膵臟には外分泌の外に內分泌作用があり、然かも其の物質は糖尿の發生と重大な關係があることが知られた。其の外に膵臟にホルモーン分泌作用があると思はれる觀察は他に澤山あるが、終に其のホルモーンを分離したのは最近のことである。膵臟の內で內分泌を營む細胞は何にかと言ふに、それは外分泌をなす腺細胞の間に介在して居るランゲルハンス氏島の細胞の作用によるので、面白いことには、膵液の輸出管を結紮すると、腺細胞は萎縮し頽敗して終ふが、此のラ氏島の細胞は依然として殘つて居る。それは丁度、睾丸の輸精管を結紮すると、精子を作る睾丸細胞は間もなく變性して、頽敗消失するが、其の間にある間質細胞は內分泌を營む細胞であつて此の際變性、萎縮はしない、なぜかと言ふに、たとえ輸管を結紮しても是等內分泌を營む細胞にとつては、其の內分泌物は血管の內に直接這入るから、其の輸出口は閉塞せられては居らないのであるからである。此の樣な事實を膵臟に認めたのは、一九〇二年ソボリエツ、一九一二年スコット氏等の業績で、是等の事業を利用して一九二二年トロント大學のバンチング及ベスト氏が牛の膵管を結紮して、ラ氏島を殘し、是れを材料として、終にインスリンなるホルモーンを分離したのである。此のインスリンを人體及動物體に用ふると、血糖は著るしく減少する、重症の糖尿病者も一時的ながら必ず輕快するといふ事實が實際に示

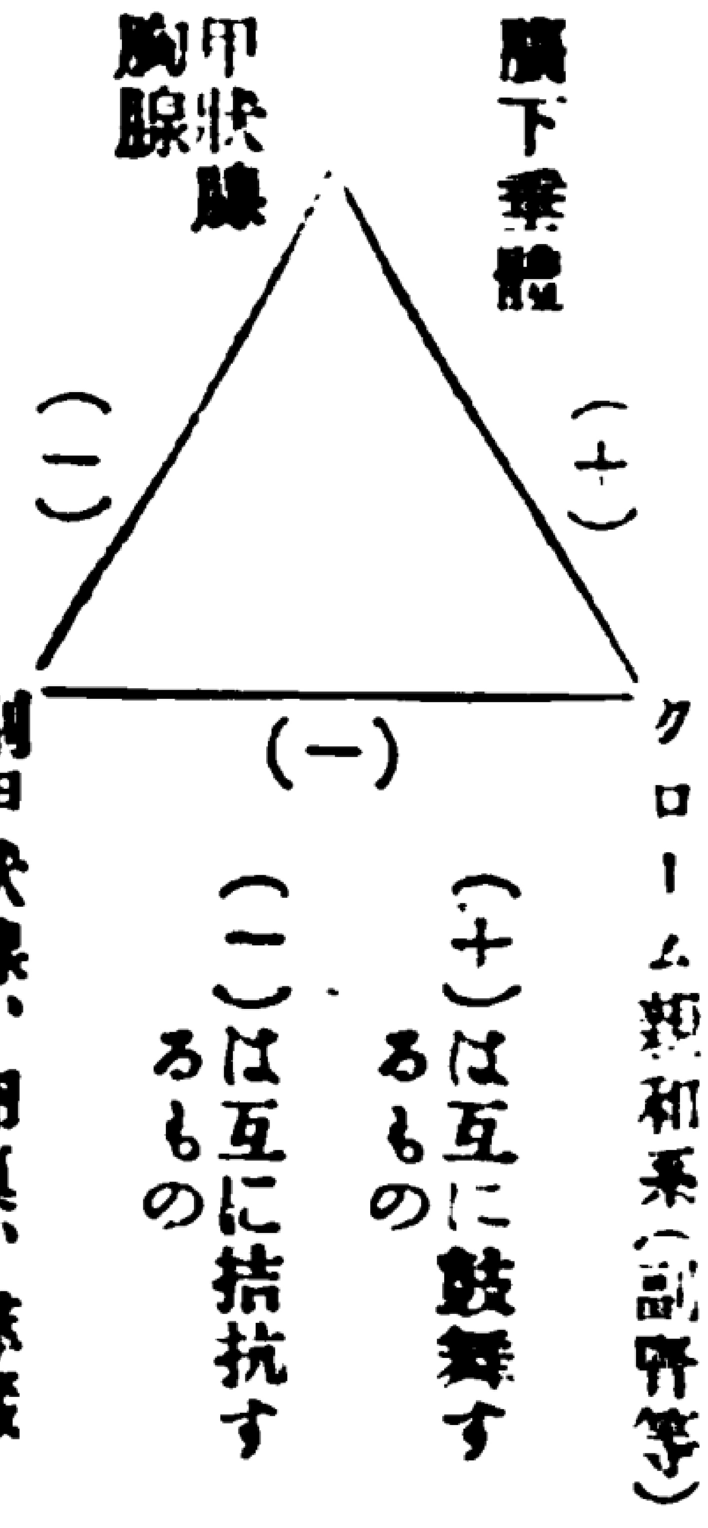
り、並に尿崩症の發生と膵臓、特に其ランゲルハンス氏島の機能との關係が明瞭となつて、高糖血も漸々消散に屆くることが出來るに至つたのである。以上の作用の外にインスリンには生體内で種々の働きもある樣であるが、未だ充分に解らないし、亦其の構造も到底上記の物の樣に明瞭には未だなつて居ないから、此の邊で記載を止める

以上の外に腦下垂體からはピツイトリンが出るし、其の前葉からはテセリンなるものが出ると云はれる。卵巣からは、其の成熟卵胞水から、所謂性ホルモンが出て來て、雌性の發情を亢進させる作用がある。卵巣の黃體からは、發情を抑止し、則るに、妊娠に關與する樣に、生殖器を變化せしめる作用をするホルモンが分泌せられ、之れに私は黃體ホルモンと命名した。睾丸から出るホルモンの研究は其の歴史が極めて古いに係はらず[illegible]たるものである。男性の性の特徴を完全ならしむる作用のあるホルモンが間質腺から出來るとされて居る。松果腺よりのホルモンは[illegible]生殖器を抑制する作用がある。特に生殖腺の發育を抑止して居る。丁度腦下垂體のホルモンと拮抗作用をして居る。即ち腦下垂體のホルモンには性的早熟を作る樣な作用と共に身心共に巨大發育を促す働きがある。若し此の働きが病的となるとアクロメガリー、又は巨人等が出來る。上皮小體即ち副甲狀腺は石灰質の新陳代謝に關係し、グアニヂンを無害にして以てテタニーといふ痙攣性疾患の發生を防止する樣なホルモンが出來る。胸腺ホルモンは、身體特に骨の發育を促し神經機能を高め、生殖器の發育も促す樣な作用があるが、然し、吾々の身體の發育を分けて成長と分化とに分別して見ると胸腺は正に成長を促し、分化を抑止する樣な作用がある。即ち幼年時間に出來る限り大きく、然かも、早く熟成しない樣な作用があるのに、甲狀腺は丁度それと反對に、分化を促進させ、早く老いさせる樣な作用がある。即ち此の兩者は丁度[illegible]拮抗作用をなして[illegible]和してこそ、吾々は幼年時より、完全なる發育、[illegible]かへると成長に伴ふ分化があるのである。

ホルモン作用に關する近時の見解　以上に依つて極めて大體ホルモンの種類と其の生理的作用の一般が知られたと思ふ。そこでこれが、此の生體に於て如何に作用してゆくかに就ての近時の見解を少しく申して見やう。

上にも申した如く、ホルモンは血管内に進入して夫々其の分泌した臓器と異つた臓器に對して刺戟を及ぼして居る。丁度セクレチンが膵臓細胞に、アドレナリンが交感神經末梢部に、インスリンが[illegible]、肝臓等に作用する樣に、所謂遠隔作用をなして居る。之れが私の發見したアウトホルモンと其の作用が異つて居る重要な點である。即ち後者はそれを成生した臓器細胞を刺戟するので、肝臓のアウトホルモンは肝臓を、心臓のアウトホルモンは心臓を刺戟する樣に、所謂同樣の細胞に對する刺戟作用である。今玆にアウトホルモンに關して詳細に記載することを避けるが、ホルモンもアウトホルモンも、何れも、神經細胞を受けずに、直接に夫々の細胞に刺戟[illegible]へるものと[illegible]へられる。ホルモンには互間には其の作用の間に互に相助けるものと其反撥するものとがある。即ち協力するものと拮抗するものとに區別することが出來る。フアルタ・エッピンゲル・ヘス・ルデンゲル。

アシユネル氏等の樣式を示すと下の樣である。



此の圖で示すことに依つて可なり總ての現象が說明出來るが、研究は微に入り、細を穿つ樣になつて、漸く此の樣式だけでは說明が困難な事柄が多くなつて來たから、新らたなる說明方法を見出さなくては、到底此の複雜な生活現象が說明出來なくなつて來つゝあるのである。

ホルモーンは上記の樣に夫々自己の特別な親和性のある臟器細胞を刺戟して居る。インスリンは肝細胞、アドレナリンは交感神經の末梢部、セクレチンは膵臟腺細胞、性ホルモーンは雌雄生殖細胞を刺戟すると言ふ風に作用して居るが、然し一個の臟器細胞は二重、三重にホルモーンに依つて影響せられ、或は互に促進し、又は拮抗して居るのである。

又茲に興味あることはホルモーンの作用は其の作用を現はす環境の反應の如何に依つて其の結果に强弱の差異が現はれて來る。卽ちH·OH′イオン濃度に重大な影響のあることを、ツオンデック、ウコオ、ベルンハルト、ライター氏等に依つて知られた。

尙前稿に附加しなくてはならないことは、ホルモーンと內臟神經、卽ち交感神經と迷走神經との關係であつて、アドレナリンは度々言ふた如く交感神經を刺戟する。迷走神經の生理的刺戟をなすものは今日尙不明の裡にあるが、アセチールコリンの樣な物質が重要なる作用を呈して居るといふ業績が、澤山報告せられて居る。コリンは副腎、腸壁等に多量にあるものである。又內臟神經の作用に對しては、カリウム、カルシウムが非常に重大なる關係を持つて居ることは、一般に認められて居る。故に間接にホルモーンの作用が亦カリウム、カルシウムに依つて影響せられることになるといふことは前者に於ても明かであるが、茲にとであり、私の實驗でも、ツオンデック氏等の實驗でも確實に影響があることを認めて居る。茲に於て、ホルモーンは夫々直接に自個と特別に親和性のある細胞に作用するには相違ないが、其の際他種のホルモーンに依つて或は促進せられたり、又は拮抗し抑制せられたりすると同時に、其の溶液の性狀に依つても亦影響せられるし、又他面カリウム、カルシウムの如き內臟神經の興奮と重大關係のある物質の多寡に依つても、影響せられることが知られて來た。爲めに其の作用は極めて複雜なものと言はなければならない。之れなベーリス、スターリング氏のホルモーン發見當時の作用機能を考察したのと比較すると隔世の感がある位に複雜したものとなつた。然し日進月步の吾が醫學界に於て然かも特に難解な生物學的の機能の重大な關係のあるホルモーンが、世に判然と紹介せられてから僅かに三十年であるから、今後益々研究せられて、新知見が加はつてゆくことは疑はない。

ハイデッガーの存在論

三木清

一

マルチン・ハイデッガーはまた将来の人である。彼の独自な哲学が初めて瞥見せられた著作『存在と時間』は一昨年（一九二七）公にされたばかりであり、それも初めの半分が出来ただけである。しかし彼の著作家的活動は今日までの所で見出し得たものの如くである。今年（一九二九）フッサールの七十歳の祝賀論文集のために彼は「根拠の本質について」という論文を書き、また最近には「カントと形而上学の問題」という書物を発表した。このように極めて活潑に開始されたばかりの彼の活動の行方をここに俄かに見定めて、その業績を評價するということは、もとより我々に許されてゐない。年齢において壮なる彼に我々はあらゆる可能なるものを期待し得るであらう。

南ドイツのシュワルツワルトの田舎で人となった彼は、郷里に近いフライブルクの大学で彼のアカデミックな経歴を始めた。彼の就職論文は「ドゥンス・スコトゥスの範疇論及び意味論」（一九一六）といひ、リッケルトに捧げられてある。その当時リッケルトはフライブルクに於て教職にあった。リッケルトがハイデルベルクへ移った後、ハイデッガーは次第にその影響を脱し、更に多くのものをフッサールから学んだ。その後彼はマールブルク大学から招聘されて数年間かの地にあったが今はフッサールの後を継いで再びフライブルクの人となってゐる。ハイデッガーはフッサールの弟子である。しかし二人の間の関係はアリストテレスがプラトンの弟子であるといふ場合と同じ意味のものであらう。二人はその間の差異にも拘らず、その類縁に於て。その初期の研究に於て全く並行した経路を示してゐる。フッサールは数学から哲学へ来た人である。これに反してハイデッガーは、そのドゥンス・スコトゥスの論文がすでに示してゐるやうに、むしろ神学から哲学へはいった人であると見られる。アリストテレスやトマスは彼の少年時代からの書物であったといふ。この点に於てはハイデッガーはドイツの古典哲学の伝統を継ぐ人である。ドイツの多くの哲学者たちは、フィヒテやヘーゲルはもとよりディルタイに至るまで、神学の研究から哲学の領域へ進んだのである。フッサールとハイデッガーとの出発点に於けるかくの如き相違はまた彼等の哲学そのものにとって重大な関係をもってゐるであらう。我々はハイデッガーの存在論がフッサールの現象学の関聯としてもしくはそれの継続として取扱ふべきではないのである。後者に於ける基本概念は殆んど凡て前者によって、或ひは新しい意味のものに特化されるか、或ひは全く排除されてゐる。

二

ハイデッガーの哲學を全體として特色づけるものは哲學に於けるギリシア的なものに對する抗議である。卽ち彼はひとりの哲學上のプロテスタントである。そしてこれはまた宗教上のプロテスタンテイズムとつながりのないことではない。從來の哲學は、神學もまたその主要なる傾向に於て、ギリシア哲學の決定的な影響のもとに立つてゐる。プロテスタントとしてのハイデッガーの仕事はそれ故に勢ひ破壞的たらざるを得ず、彼の存在論の方法はかゝる破壞の爲に仕へる。ギリシア哲學に於ける最も根本的な概念はロゴスである。ロゴスは二重のものを、卽ち、一方ではエイドスといはれるもの、事物の永遠なる本質を、そして他方ではヌースと呼ばれるもの、換言すればそれに於てこの永遠なる本質が純粹に且つ根源的に、與へられるところの直觀を意味する。ロゴスの概念はいはゆる理性の概念として近代哲學へ傳へられ、これを支配してゐる。フッサールの現象學と雖も、この意味に於て、ひとつのギリシア的な、いな、極めてギリシア的な哲學であるとみられ得る。本質の概念は彼の現象學にあつて重要な位置を占めてゐる。しかもそこでは本質は——事物の本質といへば近代の科學的意識にとつては「法則」を意味するのに反して——事物のイデア的統一であり、プラトンのいふが如き「自體」である。本質はもとより現象學に於て純粹に内在的に見られ、かくてノエマとして特性づけられて、作用の意味に於けるヌース卽ちノエシスとの分つべからざる聯關におかれる。フッサールの純粹意識はノエシス・ノエマの構造を有する。彼の現象學は本來理性の現象學である。理性は新カント學派、就中コーヘンなどに於て、純粹に論理的なものと解されたのを、フッサールはそれを再び存在論的なものに戻した人であるともいへよう。

今や理性の批判が到る處に行はれつゝある。ニイチエは先づこれをアポロ的なものに對する批判の名に於て遂行した。彼に於ても見られる近代自然科學、殊に進化論の世界觀への影響はこの批判にとつて決定的なものであつた。マルクス主義もまたこの傾向に屬するであらう。人間はロゴス卽ち理性を有する存在である、といふ、從來の殆ど凡ての哲學にとつて根本的な、そしてなんら吟味されることを要しない自明な前提となつてゐた問題が今や根柢から動搖させられつゝあるのである。自己のうちなる、神的な、永遠な理性に對する信仰にして自明なものであり、絕對的なものである限り、人間は自己の存在の確實性をみづからに於てもち、從つてこの存在そのものについて具體的に、根源的に問ふことをしない。しかるにひとたびこの信仰にして動搖させられるならば、彼は自己確實性を失ひ、自己の現實の存在について、その狀況についてどこまでも問ふことを餘儀なくされる。かゝる傾向はケルケゴールによつて始められた。現今注目すべき神學上の運動を展開しつゝあるバールト一派のカルヴイン主義者たちはこの人につながつてゐる。これらの人人は考へる、人間は神的な、自己確實な存在でなく、却つて神學上原罪と呼ばれて來たものが彼のこの世界に於ける現實の狀況である。彼等は人間を神の位置に据ゑるあらゆる思想に決定的に反對する。ハイデッガーの哲學は實にこのやうな傾向に屬してゐる。それは理性なき現象學と見られることが出來る。人間はロゴスを有する存在である、といふ命

題に於て、彼はロゴスを理性と解せずして、却つて現實の人間の言葉と解する。自己確實性をもたぬ人間の唯一の根源的な態度は自己の存在そのものについての絶えまなき問である。このやうな問こそハイデッガーの哲學の出發點をなすものである。

三

かくてハイデッガーの存在論にとつて存在とは人間が意味する。「事象そのものへ」といふ現象學本來の要求は最も現實的な存在としての人間への接近を要求する。しかもハイデッガーは人間の本質を問題にするのでなく人間の現實を分析しようとするのである。現實的存在は世界に於ける存在として規定される。世界といふのは我々の出會ふものの一般のことであつて、世界があるといふことは我々がそれとの交渉に於て世界をもつといふことである。從つて世界は有意味性を擔つてゐる。人間は世界に於て如何にあるのであらうか。現實的存在としてあるのである。現實的とに自己を示すかぎりに於て開示せるものといふ意味である。人間の自己開示はその[illegible]に於ては狀態性である。狀態性といふのは普通に氣持または氣分といふのと同じで、世界に於て在ることはいつでも或る氣持によることである。かゝる狀態性のうち重要なものとしてハイデッガーは恐怖を擧げてゐる。しかるに人間の自己開示はいはゞ對自的である。これが理解と呼ばれるものであつて、理解に於て現實的存在は自己自身への關係をみづから含んでゐる。理解はそれぞれ狀態的な理解である。世界に於て在ることの狀態的な理解は話として言表される。話に於て人間は自己を共同世界即ち世間に向つて傳へる。かくて言葉に於て現實的存在の自己開示は公共的となる。

このやうにハイデッガーの存在論は現實的存在の自己開示――これが現象の本來の意味である――の過程の敍述である。この過程の根本となり、人間の存在の動性の源泉であるものはハイデッガーによつてゾルゲ(關心)と呼ばれる。在るものは凡て關心に於て現實的となり、關心に於て顯はにされた存在である。關心のうち最も根源的なものは死に對する關心である。而して死は現實的存在の終末としてこの存在そのものに屬する。死の關心に於て如何に交渉するかに於て人間の存在はその存在性が最も顯はにする。ハイデッガーは關心の構造からして時間性を解明しようとしてゐる。そしてかゝる現實的存在の具體的な動性としての時間性にあつて最も根本的なのは未來である。死の根源性のために人間の根本的狀態性は不安でなければならぬ。そこでまた生の自己開示の過程は生の自己逃避の過程として現はれるであらう。

こゝにハイデッガーの存在論の特色は明かである。それは終末觀的なもの、換言すれば生の終末としての死からの生の解釋である。彼の現實的存在即ち人間はかくてキリスト教的な人間である。我々は彼の哲學の先蹤をアウグスティヌスやパスカル、またはケルケゴールに於て見出すであらう。ギリシア的なものから本來のキリスト教的なものへ還るといふこと、それがフッサールの現象學からハイデッガーの存在論への轉向である。まさにそこに現代の理性の哲學一般に對するハイデッガーに於ける新しきものが横たはつてゐる。

この點を忘れてみるとき、彼の現實的存在は

社會性をもたず、彼のいふ歴史性もまた主觀的であつて客觀的ではない。こゝに彼の存在論とヘーゲルの現象學との相違がある。そしてヘーゲルの現象學は、理性の現象學であるが故に特に現代的であり得ず、ハイデッガー！の存在論は主觀的個人的であるがために優れて現代的であり、得ないと許され得るであらう。

三つの新建築理論

コルビユジエの建築機械論
グロピウスの國際建築論
ヒルベルスアイメルの都市計畫論

板垣鷹穗

序 現代建築思想の基調

十九世紀は繪畫の全盛期であつた。然し二十世紀は、恐らく、建築にとつての盛大な復興期となるであらう。フランス大革命から歐洲大戰に至る一世紀餘りを、唯だ歴史的回想の眠に過して來た建築思想は、大戰以來急激に、その過去の消極主義を棄てゝ、徹底した積極主義を標榜しはじめた。その基調は何であらうか？ それは——

先づ、精神史的自覺として理解される。

前代の歴史的消極主義に對する積極的な合理論が擡頭して來た。十九世紀の初頭にギリシヤの神殿を摸倣した寺院や、帝政ローマの面影を偲ぶ凱旋門が出來てから、中世寺院風の議事堂と、ルネサンス時代の宮殿めいた畫廊と、ブルボン王朝の榮華を追想する劇場とが建設された。かう云つた歴史主義の夢が、歐洲大戰によつて破られ、「現代」を自覺した新たなる造營に導かれて來た。建築に於ける「現代」の表現が此處に覺醒する。

次に、經濟組織の基礎からも考へられる。

フランス大革命によつて支配權を獲得したブルジョワ階級は、十九世紀の後半以來、所謂「資本主義膨脹期」の時代を招致した。そして、その造形的表現としての建築に向つて、多くの新なる課題を提供した。事務所ビルディング、デパートメントストーア、銀行、工場、ホテル、劇場、映畫館、etc、etc……。クリスト教の文化が幾多の大伽藍を建設させたように、又、王權中心の時代が宮殿建築の勃興を誘つたように、資本主義膨脹期は、その機官としての特殊な建築を要求する。高さを誇るスカイスクレーパーや、廣さを誇るデパートメントストーアは、かゝる時代の必然的な特産物である。

更に、機械文明と連關して解釋される。

十九世紀の後半以來、資本主義と密接な因果關係を保ちつゝ長足の進歩を遂げた機械文明は、建築技法に新なる解決を與へ、機械文明だけの要求する新しい課題を提供した。而かもその上に、建築の形態そのものすら、機械的建造物に接近させやうとした。

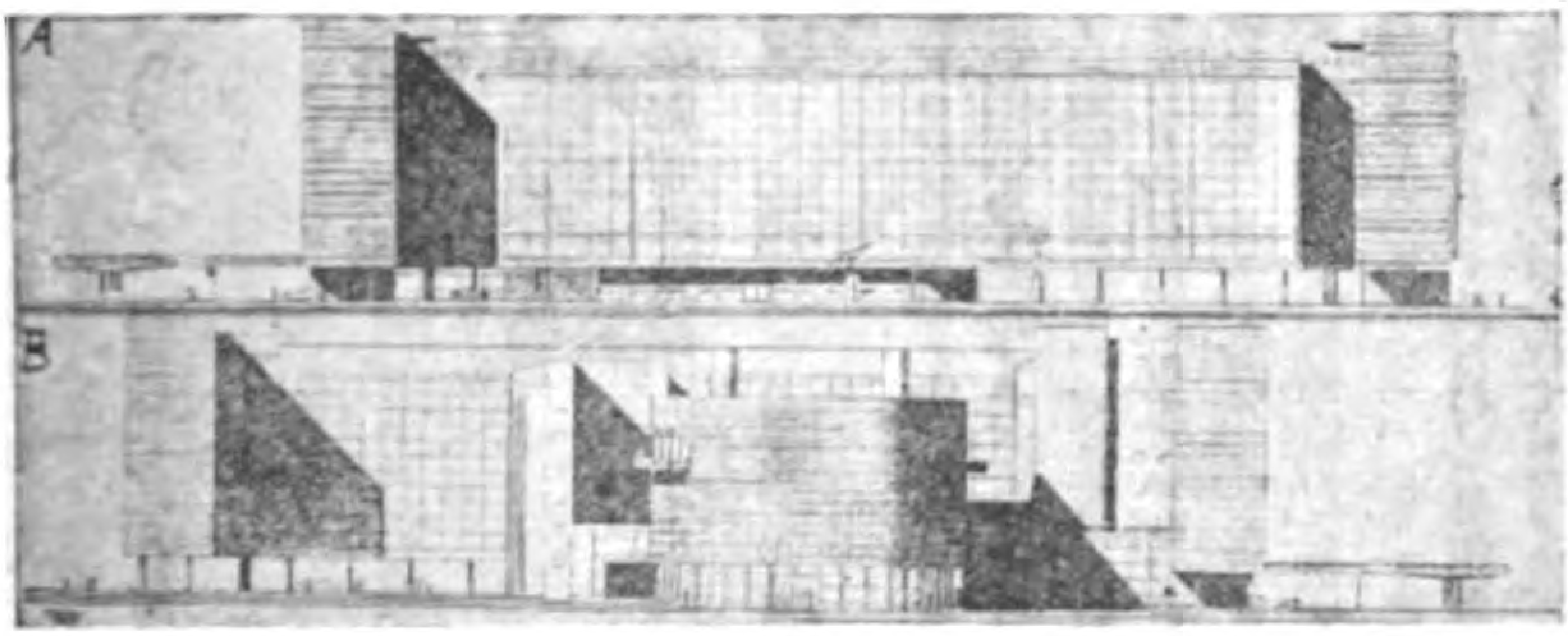
石材と木材と煉瓦とを棄てゝ、鐵とグラスとコンクリートとへ材料の革命を行つた現代

建築は、鐵コンクリート構成技術、グラス鑄造法、建築體組立法などの採用によつて、全然新しい樣式を創造するに至つた。グラス面の廣く水平に列つた明快な外觀は、かゝる技法を前提してゐる。

また機械文明は——新裝鮮かな工場建築を創造した以外に——運輸交通の諸機官の要求する停車場や格納庫の設計に新しい課題を提供して、建築家と工學技師との提携を密接にした。

その上に、機械建造物それ自身の形態すら建築家にとつては新しい暗示であつた。空間の節約上、集合住宅の設計には大汽船のプランが應用された。かつては、豪奢な帆船が宮殿建築を摸倣したが、今では反對に、住宅建築が汽船を摸倣してゐる。

かくて誘發された新興の建築運動は、多くの建築思想家を養ひ、種々の建築理想論を創案させた。その多面的な現象の中から、最も興味ある最少限度のヴリエテを描かうとするならば、ル・コルビユジエの建築機械論と、ワルテル・グロピウスの國際建築論と、ルードウイヒ・ヒルベルスアイメルの都市計畫論とを組み合はす他はあるまい。そして、その何れもが、等しく濃厚な合理主義の色彩に彩られてゐることも、現代の所產としては當然であらう。



Le Corbusier 消費組合本部

1 コルビユジエの建築機械論

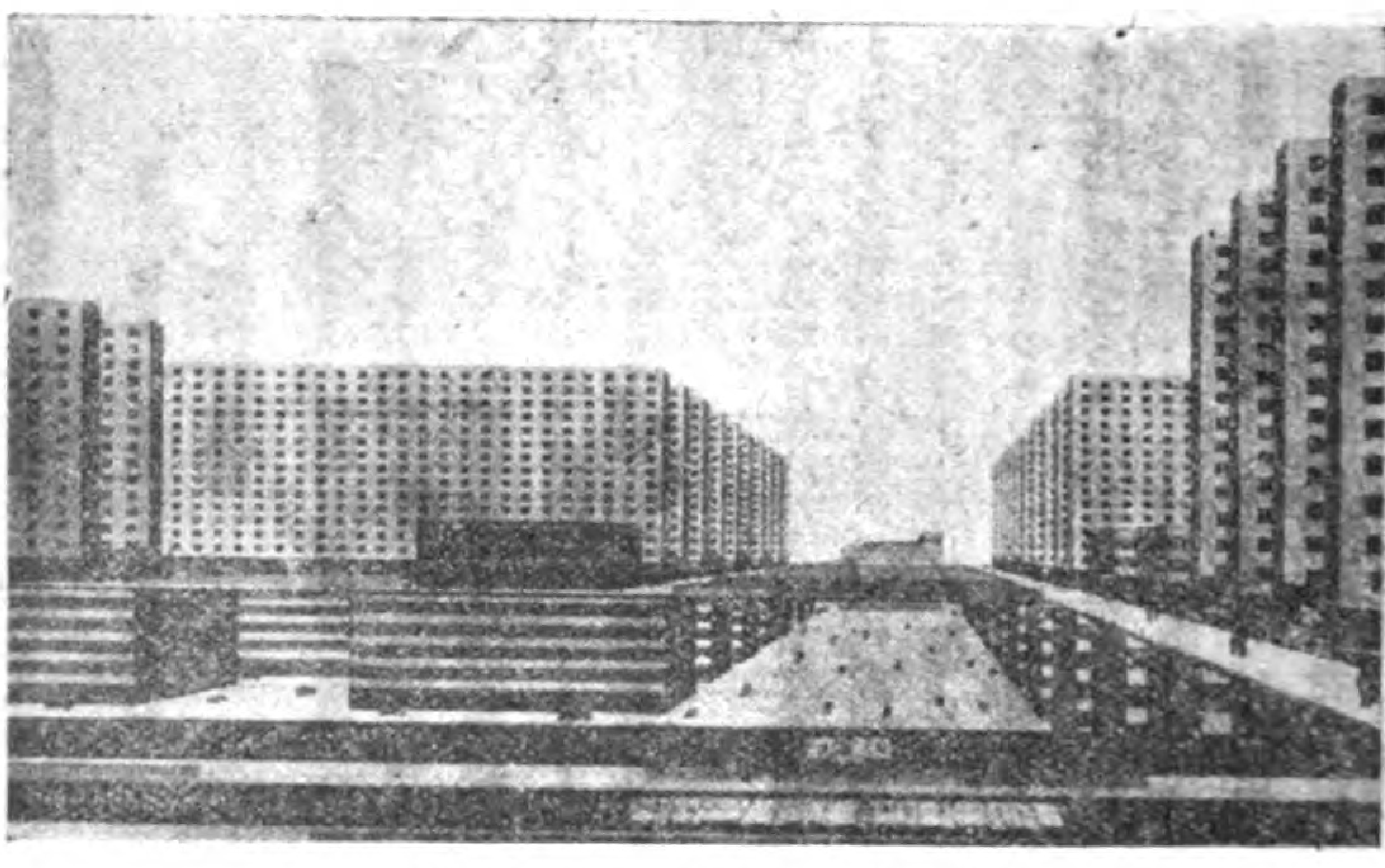
「基本的形態と云ふものは常に美しい。何故ならば、それ等の形態は常に明快だから。然るに今日の建築家は、かゝる單純な形態を、もはや造らうとしない。けれども機械技師達は、計算を基礎として、幾何學的形態を利用してゐる。そして、吾々の眼と精神とを幾何學によつて滿足させてくれる。彼等の製作品は、かゝる意味から、偉大なる藝術への道の上にあると、云へやう。」etc、etc……
……。

かう云つた意味のコルビユジエの言葉を、彼の設計になる幾多の、單純で明快な、滑らかな壁と晴やかな窓とより成る住宅建築に結び合はせて考へるならば、彼の製作意圖は充分に理解される。そしてその上に、コルビユジエの構想とシユプレマテイスムの思想との間に、一脈の相通する關係が想像されて來る。單純な幾何學的形態に「造形的なもの」の本質的表現を認めようとするシユプレマテイスム

と、コルビユジエの形式感とが、何處まで深く關係してゐるかは別問題として、歷史的諸樣式の應用を否定する彼自身、現代的感覺を表現する形式主義の半面を、ひそかに包藏してゐることは認めなければならぬ。

然し、彼の言葉——それは濃厚なレトリツクに彩られてゐる——は、何處までも徹底した合理主義の立場をはなれない。世界的流行語になつて彼自身すら驚いてゐる「家は住む機械である」と云ふ言葉は、合理主義の簡明な標語に他ならない。そして、彼の建築論に多く散見する機械に對する讚辭も、かゝる建築思想の發露以外に何の意味もない。

「航空機の發達にとつては、極めて有益な戰爭と云ふものがあつた。然し建築には、これに類する機會が與へられなかつた」と云つて建築界の無自覺さを指摘してゐるコルビユジエは、現代の社會思想に就いて全然無自覺である。そしてまた、彼の讚美してゐる機械そのものに關する理解も、それ程深いとは考へられない。「自動車の形態が、自覺ある目的意識の下に形成されたスタンダードを基礎として發達したように、今後の建築も亦、同樣の道を選んで進まなければならぬ」——と云ふ程の意味で、コルビユジエは機械を引合に出すのである。



Hilberseimer 都市計畫

コルビユジエの理論の最も光彩ある發露として、目下建築界の注意を集めてゐるモスコウの消費組合本部の設計は純粹に科學的な基礎の上に——一切の傳統から離れて——考察された新しい試みである。暖房、冷却、換氣等を、窓も開かずスチームも使はず、唯だ通風裝置だけで解決するために、人體の生理的條件が精細に計量され、最新科學の成果が應用されてゐる。この大膽な建築の、全部グラスで張つた巨大な外觀を仰ぐ時が來てこそ、彼の說く建築機械の理想が、實現し得るものと云へよう。

2 グロピウスの國際建築論

「建築の本質がその技巧を決定し、技巧が更に形態を決定する——と云ふ法則を、過去の時代の形式主義は反對に考へてゐたが、今や新しい造形的精神が、本質を自覺し機能を生かす基礎條件の上に擡頭しはじめた」——と云ふグロピウスの力强い希望は、「國際的建築」の理想に於て結晶する。

グロピウスの考へに從へば——解決法の相異と云ふ點に建築家の創意を認める事は、個性の強調を高唱する必然的理由にはなり得

ない。然るに、現代の特質なる、統一的世界用の發見を求める意志は、むしろ反對に個性的制限を去つて客觀的な方向に向ふ欲求を前提してゐる。世界的な交通と世界的な技術とによつて、建築は統一的になる。そして、國民性や個人性の限界を越へて、あらゆる文化の領域に進出する「建築は常に國民的であり、また常に個人的である。然し、三個の同心圓――個人と民族と人類と――の中で、最後の、そして最大の圓が、同時に他の二つをも包含する」――と。かゝる意味からグロピウスは「國際的建築」と云ふ言葉を使用するのである。

この「國際的建築」と云ふ言葉は、多くの建築家と建築批評家によつて極めて多様に解釋され、それに伴つて、しばしば誤解が起り易されてゐる。解釋の相異から來る混亂しない論議は別として、此處に現代の建築理想の、最も重要な目標を認めることは許されやう。現代美術の發祥地として知られてゐるデッサウのバウハウスの、あの簡潔な建築こそは、恐らくその設計者グロピウスの名と共に、建築史上の意味深い標石の一つとなり得るであらう。そして、彼の唱導に基く國際建築論も、建築思想の歴史を回顧するものにとつて、忘れ難い追憶の礎となり得るであらう。

3 ヒルベルスアイメルの都市計畫論

現代的大都會は、資本主義經濟組織の特產物である。從來の合理化を行ふ資本主義は、他の半面に於て、大都會そのものを極端に非合理化してしまつた。現在のニューヨーク市に窺はれる交通整理の如き、その最も性格的な示例である

そこで、この非合理的な大都會を合理化さうとする理想都市の計畫が、現代の建築家達によつて様々に考案されはじめた。ルネサンスの昔、都市そのものが一つの國家だつた時代には、幾何學的の理想都市が考案された。然し今では、資本主義的社會組織の要求する理想都市が作られつゝある。從がつて、此の場合に於ける合理化は、事務所と通勤者の住居との間の、交通上の關係を重要視する。即ち、ラッシュアワーに於ける交通整理と云ふことが、都市計畫の骨子になつて來る。

交通整理に重心を置く理想都市論者の一人として、最も徹底した合理主義を標榜するヒルベルスアイメルは、コルビユジエの稍々空想的な理想都市案を否定する。コルビユジエは、現在混沌としてゐるものを幾何學的に整理した。全體として、程度の上の「改善」は行つたが、然し其處には、何等の根本的な「改革」もない。從つて、交通整理の如きも、單に從來のものを「組織立て」たと云ふ丈で、新たに「構成」したのではない。「交通問題の解決は、交通能力を向上させることによつてゞはなく、むしろ、交通を出來るだけ不必要にすることによつて達せられるのである」――と、彼は云つてゐる。

そこでヒルベルスアイメルは、彼の所謂「交通を出來るだけなくすために」、立體的な都市計畫を考案した。即ち、事務所を下層に有し住宅を上層に有する高層建築を基礎として、通勤交通の方向を上下の關係にする。一つの建物の上層に住んでゐる通勤者は、その同じ建物の下層にある事務所に通ふ組織である。そして、通勤以外の交通は、三層の道路によつて整理される。上層の、住宅の存在する部

分に歩道を設け、下附の、事務所のある部分に車道を設ける。そして更に、地下には、遠方に通ふ高速度の交通機関が設けられる。etc. etc……。これこそは、眞に將來のメトロポリスであり得よう。

* *

若し長時間のヴァリエテが許されてゐたならば、いくらでも、興味深い學說や提案を紹介することが出來たらう。然し此處に、兎も角も、合理主義の基礎に立つ現代の建築理想論の、最も性格的な發露の大體を、窺ふことは許されやう。

附記。本稿中に引用した建築家の言葉は、主意だけをとつた紹介であつて、飜譯ではない。原文の中に使つてある文字の中で強調しなければならぬものだけは、勿論そのままを譯すようにした。

進化說非難の趨勢

小泉丹

◇

進化說は、今日では普ねく學界に認められてゐるであらうか。思想界、特に宗教界で、これに異論を立てる傾向は無いであらうか。●我國では、一般の知識階級の態度は、甚だ高い權威を進化說に認めてゐるといつてよいやうに自分は思ふ。我國に進化學說が紹介されたのは當時の事情から見れば、相當に旧いことである。明治十年頃からモールスは開成學校(帝國大學の前身)で學生に此を講じ、學外でも此を說き、石川千代松氏譯で明治十六年に出版された『生物進化論』といふ小冊子がある。明治十年は一八七七年であるから、ダーウヰンの『種の起原』第六版刊行後五年、『人類の由來』刊行後八年、ハツクスリーの『自然界に於ける人間の位置』刊行後十三年、ヘッケルの『自然創造史』刊行後九年である。歐米の生物學界では大體に於て異論が無くなつてゐた頃である。我國に移入された時期は、進化學說の情勢の上で、適切な頃であつたといつてよからう。我國の生物學者で、進化說に對して異論に傾いた議論をした人はなかつたやうである。(生物學者の數が至つて少數であつたのではあるが)。何れにしても、我國の生物學界に於ける進化學の討議は至つて寂寞なものである。歐米では、久しい間宗教家側の進化說に對する態度は肉薄戰の觀があつたやうであるが、此方面に於ても我國に於ける情勢は、微温的なものであつたやうに感じられる。自分は二十年來キリスト教の文書にまるで遠ざかつてゐるので、その方面の近年の形勢に就いては全く無智であるが、約三十年以前頃の形勢はまことに中途半端なものであつたやうである。明治三十六七年頃、海老名彈正氏が仙台の高等學校の講堂で講演をされた節に、進化說と併び立つ宗教こそ眞の宗教であるといふことが叫ばれたことがあつたが、此は當時としてはこの上もない大膽な言論で

あつて、自分達當年は、「四斗樽の底がすつかりとぬけた」やうに、深刻痛切に感じたものであつた。前にいつたやうに、自分は現在の情勢にはまるで不案内であるが、特に文章を書き、パンフレットを印刷し、著述を公にして、進化說に異議を立ててゐるのは、自分の目の及んでゐるところでは、石川三四郎氏の著作がある位のもののやうである。一方にはカトリック教側で進化論の罪悪をパンフレットとして公刊してゐるといふ有様である。

我國では大體の傾向がさうであるやうに、思想界や論界は、新らしいもの好きであり、流行を追ひ、時勢に乘る傾向が相當に強いのである。進化說などは我國に於ては人氣を集める本質を缺いてゐるのかも知れない。

歐米では如何であるかとみるに、情勢は可なりに著しく違つてゐる。生物學界に於ても思想界や論界に於ても、進化說に對する異議が相當に盛んである。恐らく多くの人々は案外に感じられるであらう。

生物學界では、隣近の間にアライシマンといふ獨逸の學者が提出した異論が相當に有名である。少しく新らしいところでは同じく獨逸の學者のラインケなどいふ學者がある。

思想界に於ける進化說に對する異論は近年に於ても意外に盛んなものであつて、後に述べるやうに、反進化說專門の雜誌すら刊行されてゐるといふ有様である。數年前には北米合衆國で普通學校に於ける進化說教育禁止法が行はれ、スコープス事件と稱するものがあつたり、政治家のブライアンが活躍したことがあつたのは、承知してゐられる方々も少なくないであらう。

自分は、この短い文章で、右の思想界、論界に於ける、進化說非難の形勢に就て、概觀を試み、其等の言論の一斑を紹介してみようとしてゐるのである。

◇

自分は數年前に、マツカンといふ人の「ゴツドーかゴリラか」といふ著述（McCann, Alfred W.: God or Gorilla. New York 1922）を讀み、昨年またチエラースといふ人の『理性と進化』といふ著作（Nelson, George A.: Reason and Evolution. Philadelphia, 1927）を讀んで、この方面の消息に興味を感じてゐたのであつた。自分は、生物學關係の教師を仕事にしてゐる身分で、目の屆く出版物はその方面のものに限られるのは止むを得ないことであり、進化學に交渉の深い單行書は生物學以外のものも勉めて逃さないやうにすることを心掛けてはゐるけれども、評論や論壇雜誌、思想關係の雜誌、特に宗教雜誌などは、到底あさる手段もなければ、餘力もなく、また時も充分にもたない身分である。それで、この方面に於ける進化說の情勢などは、遺憾ながら、まるで不案内であつた。ところが、先頃、不圖有難たい著作を手に入れることが出來た。其はフエルプスといふ人が亞米利加で編纂した『進化論抄』とでも譯すべき著作である。（Phelps, Edith M.: Selected Articles on Evolution. New York 1926）此には、進化說反對の文獻の多くが出してあつて、其等のうちの數篇の拔抄が採錄されてゐる。此書のおかげで自分は、簡單に、此方面の大勢の一斑を窺ふことが出來た。其後又、英吉利の一書家のサー・アーサー・ケースの小著（Keith, Arthur: Darwinism and What it Implies. London. 1928）を手にして、また二三の文

獻を知ることが出來た。先づ右のフェルプスとケースの二書にあげられた文獻を概觀してみよう。

フェルプスは、單行物(大小を含めて)として三十六種、雜誌掲載の文章として二十七種をあげてゐる。其等のうち、發刊年時の不確かなものを除いて、年代別にしてみると左の通りである。

	(單行物)	(論文)
一九二五年	八	一五
一九二四年	三	七
一九二三年	三	三
一九二二年	六	二
一九二一年以前	一一	〇

右の表で年を溯るに從つて漸次に數字が小さくなつてゐるが、新らしいものほど集めるに便利であつた結果と認めるのが正當であらうから、一九二五年の狀況を土臺にして大體を想像して大過はあるまいと思はれる。(スコープス事件に關係のあるやうなものは、この表の數字には加はつてゐない)。フェルプスの集めてゐる文獻は、悉く英語で書かれたもので特に合衆國のものが多い。この點も考慮に入れて大勢を推斷することが必要である。

次に、右の著作及び論文の著者作者を調べてみると、大抵は一人一篇で、ごく少數の人のみが二つあげられて居り、唯二人だけ多數の著作があげられてゐることがわかる。其はブライアンとプライスとである。ブライアン William J. Bryan はよく名の知れた政治家で、大統領選擧でも有勢であつたが當選するには至らなかつた。我國にも來遊して人氣を集めたことがある。此ブライアンの書いた論文が六篇、單行物が四通り紹介されてゐる。何れも一九二二年から一九二五年の間に公にされてゐる。プライス George McCready Price は、ユニオン・カレヂの地質學の敎授で、その著作は、單行物が七種、論文が一篇紹介してある。その發表年時をみると、一九〇六、一九一三、一九一七、一九二〇、一九二三、一九二四、一九二五(二篇)となつてゐて、多年根氣よくその態度を表明してゐることがわかる。

次に、論文の掲載された雜誌を調べて見る。前記の二十七篇の論文は十八通りの雜誌に載せられてゐる。其を通覽すると、直ちに目につくことは、キリスト敎の雜誌の多いことである。雜誌の種類だけで區別すると、正しく相半ばして、宗敎雜誌九通り、非宗敎雜誌九通りである。(自分は英米の雜誌のことは不案内であるから誤りがあるかも知れない。但し若し誤りがあれば、宗敎雜誌の數が增すことになる)。併し論文の數からいへば宗敎雜誌に載せられた方が著しく多い。卽ち二十七篇中十六篇がそれである。雜誌の名を一々列ねることは略して、多數の論文が掲げられたものを二三書き出せば、Baptist Monthly Magazine (三篇)、Catholic World (四篇)、Princeton Theological Review (三篇)、等である。右のフェルプスの集めた文獻には Nineteenth Century に載せられたものが一つあり、ケースは、この雜誌で公にされたものの二篇に就いて評論文を書いて、同誌上に載せた。其が前記の單行書の一章として公にされてゐる なほフェルプスは、嚴正ファンダメンタリストの刊行雜誌には、多くの論文の記事が見られるといつて、其に關するものとして六種を紹介し、ファンダメンタリスト文獻

の出版機關五つをあげてゐる。讀者のうちに、セントルイスに本部のある National Anti-Evolution Society といふのがあり、Anti-Evolutionist といふ機關誌を發行してゐるとのことである。

序に書き添えて置くが、昨年から合衆國で進化說專門の小雜誌が刊行され出した。月刊で、名は Evolution といふ。

以上の吟味によつて、英米に於ける現時の進化論反撥の情勢が明瞭する材料が得られると思ふ。これは直ちに情勢を表はすか如何かの問題である）次に自分は、其等の論說の内容の一斑を吟味して、其所の着眼の點が何に存すべきであるかを考へた。自分の手許にある多數の資料を以てすれば、先づ二人の著者の所說を代表的なものとして選ぶのが適當であると思はれた。其は、前にあげた「理性と進化」の著者のチエラース、博物學の教授で多年その研究を公表し來てゐるプライスがそれである。先づチエラースの所說に就て述べて見よう。[illegible]

◇

チエラースは、先づ緒論として、最初に「科學とは何ぞや」といふ命題に就て私見を揭げた上で、進化說は科學として認めるべき事が疑はしく、其方法が科學的であることが疑はしいといひ、引力の法則の如く確定されるものであるや否やが疑ふといつてゐる。進化說が theory ではなくて hypothesis である、evolution theory といふのは過ぎた名である、といふ言葉は少なからぬ人達にいはれてゐる。何れにも理はあらう。併しながら我々としては、其が何であつても、我々の討究の對象としての價値を左右するものではない。唯少しでもよりよく hypothesis である點を除き去ることを勉めるべきだけである。併し對象の性質上、引力の法則と同一見地の theory とされなければ、進化說を認めないといふのは無理であらう。

チエラースはまた、進化說を高唱する人達には、唯物論者であつて、宗教を排擊せんが爲めの目的に其に力を入れてゐる者があるといつてゐる。即ち進化說といふものに熱心なのではなくして、他の目的の爲めに、其に熱心な人達が多いといふのである。我國では、このやうな現象は明らかでないやうに思はれる。キリスト教の社會的存在の性質が歐米諸國とは違ふのであるから、このやうな點も違ふのは當然であらう。英米で、右のやうなことが實際であるか否か、自分にはまるで不案内であるが、面白い言葉ではある。自分は、かねがね社會主義文獻中に於ける進化說の取扱ひ方に就て疑問を懷いてゐるものである。この方面にも、進化說を討究することよりも、利用することに忙しいやうな樣子が見えるやうに自分には感じられる節がある。

チエラースはその著の一章で「進化に反對な本質」を說いてゐる。其を以下にあげて見よう。第一にいつてゐることは、進化說者の討論そのものが進化說の不成立を自ら立證してゐるといふのであつて、進化說の主張者が、種々樣々な學說を立て〻、而して互に自說を高唱して他說を排擊してゐる。從つて其等の歸着すべき點がない。この現狀は進化說の不成立を證明してゐるものでなくして何ぞや、と、いふのである。以下[illegible]數多くあるが、其等

がまちまちであつて、多くの學説が、相互に反對なものを伴なつてゐることが、進化説を非難し、或は其に不滿足な點として、しばしば出される言葉である。併し、チエラースの右の批評は、甚だ亂暴なものである。茲で具體的にいふ餘裕はないが、進化説に於ける異論は、進化の要因及び其の過程に關したものである。生物の進化の要因には多數なものがあり、その過程にも類によつて(類といふ文字を廣い意味に用ひて)、さまざまであつて、其等のうちには相反するものがあると想像するのが當然であるから、其等に關する多數の解説が提案されることは至極當然のことなのである。チエラースは、進化學界の趨勢を理解してゐないか、或は曲解してゐるのである。

次にチエラースのいつてゐることは、進化説者は、生物の由來に就て、事實を自分に都合のよいやうに勝手な解釋をしてゐる、といふことである。そしてバーバンクの仕事を例に出してゐる。バーバンクに就ては承知して居られぬ讀者もあらうから、説明を必要とすると思ふけれども、その餘裕がないのは遺憾である。簡單にいへば、この合衆國の偉大な栽培植物の改良家は多年に亘つてその試験園囿に於て、驚くべき新奇なる植物品種を作り上げたのである。例へば刺棘の無い大きい「しやぼてん」(家畜の飼料にする)、種核の無いすもといふやうな實用的なものを作り出し、また、「シャスター・デージー」といふ觀賞花卉の優品なども作り出した。此は花の純白な點に於て日本の「はまぎく」の特質を表はし、姿の上品な點に於て亞米利加の「デージー」の美質を發揮し、花が大きくて、全體が強健である點は歐洲のもの丶性質を享有するといはれるものである。生物はかくの如く人爲的の技巧によつて變化せしめ得るものであるから、自然界に於ても生物は變遷し來つたものであると見るべきである、といふのが進化説の土臺の一つであるが、此に就いてチエラースは異議を出していつてゐる。曰く、バーバンクの得てゐる結果は、彼の想知と力と練達に於ける優秀の賜であつて、そこには異常な要因が働いてゐるのである。自然界にはそのやうなものを求めれば、其は唯(「nater の仕事のみである。要するに、これは人爲淘汰は認めるが、其に基いて自然淘汰を認めようとするのは正しくないといふ議論である。而して此はダーウィンが「種の起原」に説いたその學説の主眼の點であつて、今日では既に論じ盡くされて、行きつくべきところまで行いてゐると思はれる點である。

續いてチエラースは、次のやうにいつてゐる。人爲的に變遷せしめたものは新らしい「種」の階級のものと考へるけれども、其等は「變種」の階級のもので、「種」ではない。よし一歩ゆづつて其を「種」の階級のものであるとしても、進化説者の主張には不足である。如何にバーバンクが新らしいものを作り出したにしても、「種」以上の階級の境を突破した程に新らしいものは得られてゐないではないか。「屬」の新らしいものが、在來の「屬」のものから作り出されてゐないではないか、といふのである。この點は、暫くダーウィンの「種の起原」以來議論されてゐることであつて、説明は充分に下されてゐることである。

もう一つの異論として、次のやうなものがある。卽ち、生物には「先祖返り」といふことがある。家畜が自然生活に歸ると原始に復歸

するト認められる。亞米利加のモンタナ等のロッキー山地方に行つてみると「馬」といふ動物が棲息してゐる。此は馬が野棲になつて原始に復歸したものである。ところでその「馬」は、やはり馬であつて、馬以外の何物でもない。進化說者のいふ史にその源である動物の形態に復歸はしない。其は狼にならないことは勿論「馬」にも「馬」にもならないではないか。この議論にいたつては甚だしい突飛なものである。

なほ一二の重要でない異議を揭げた後にチェラースは、次のやうな二つの疑點を述べてゐる。その第一は、重要な器官で、其の進化過程の全く知られないものが二つあること。即ち脊椎動物の脊椎骨及び哺乳動物の乳房がそれであること。第二は、動物の各綱級の中間が全く缺けてゐることであつて、進化說者達は、「アミーバ」、「ポリープ」、甲殼類、軟體類、節足類、魚類、爬蟲類、鳥類、獸類、猿類、人類といふ系列を說いてゐるが、其等の一々の間の連鎖が缺けてゐることから來る問題に解答してゐないことである。

此等の點は、進化の假說の上で、最も著名の深い點であつて、各類の間の連鎖の知られぬこと、各類の系統が知られぬ間の明らかに結びつけられてゐないことは、いふまでもなく進化說の弱い一面である。生物學者として進化說を非難する態度をとつた、有名なフライシマンの議論でもこのやうな點に重きが置かれてゐるのである。併しながら、此等の點の知見が完備せざれば、進化說は是認するわけには行かぬといふのは極端であらう。

以上は、チェラースの著書における異論の概要である。なほブライスの所論の一班を紹介する豫定であつたが、約束の紙面が滿ちたので、其に及ばずして筆を止める。以上で現時の進化非難說の有樣に關係する資を供し得たことになれば、幸甚である。

マックイヴァの主權論

加田哲二

一

主權とは國家のもつ最高の權力であると考へられてゐる。國家をもつて人間の共同生活と同一視し、これに對する最高絕對の支配者と考へる國家主義者も、また人間の共同生活の一部分の團體として考へてゐる個人主義者も、國家の主權は絕對最高不可分のものだとしてゐる。而して、主權はたゞ國家だけそれが存するものと考へられてゐるのである。勿論これは考へられてゐるだけではない。各國の憲法が實にこの最高絕對な主權の存在のための規定であるといつていゝのである。故に主權に對する懷疑的態度は、一の危險な思想として排斥されて來たのである。

然るに最近の社會思想、政治法律に關する思想では、この危險な思想が擡頭したやうに見えるのである。それは國家に關する考察

の態度の變遷によつてゐる。國家は一つの大なる支配統制の機關として、人類史上に大きな役割を勤めて來たのはいふまでもない。支配階級はその支配抑壓の機關として國家權力を用ひた。而して、古代の都市國家から封建的貴族國家へ、それから近代資本家的代議國家への變遷において、社會生活を統制する實權を握つたのは、實に國家であつた。故に我我に與へられてゐる我々の祖先の歴史は、最も外觀的活動の顯著な政治——國家——の歴史であつた。この國家の歴史は國家禮讃の歴史であつた。何となれば、一社會の支配的思想は、マルクスのいふやうに、支配階級の歴史だからである。而して、支配階級の統制機關としての國家が支配階級のための歴史家竝に理論家によつて、禮讃せられ、全能とせられてゐることは些も不可思議ではない。

勿論古來からの思想史を通觀すれば、その國家觀において、國家を全能的全一的社會體として觀察してゐない思想がないではない。殊に中世思想家の間にあつては、教會、職業團體の國家に對する獨立性を主張することによつて、現在の社會機能學說に近い立場を採るものがある。乍併、近世的大國家の成立以來國家の全一性、從つて、主權の絕對性に關する理論は甚だ多い。それは數百年に渉つての國家思想に對する指導的精神であつたといつてい丶のである。

この間にあつて、國家の全一性と主權の絕對性とに對して、多くの人々の反省を促さうとしたのは無政府主義の國家論である。乍併、この國家論は多くの反省を社會思想上に促しながら、自らへの積極的な國家觀に理論上到達することが出來なかつた。無政府主義者は體系的知識よりも本能的直感を重んずる。その當否は措いて、彼等はこれがために、甚だ不利益な立場にあつたことは否定し得ない。無政府主義の國家觀によつて、反省したのは、マルクスの國家觀である。乍併、それは、まだ國家の主權の問題にまでは立ち入つてゐないのである。否寧ろそれを下部構造から上層構造に對する說明の當然の歸結として詳細には論じないのを常としてゐる。

二

社會思想史上で國家の主權の問題に立ち入つて論及し始めたのは、ギルド社會主義者の一群と見て差支へない。而して、法律上に於て、國家主權の問題を再吟味し、その絕對性の××に到達したものとして、クラッベ、デュギイ、スペインの思想家ラミロ・ド・ミエツ、アメリカのロスコウ・パウンドなどを數ふべきであらう。

今、作者の主題となつてゐるアアル・エム・マッキイヴァの如きもその一人である。マックイヴァは社會學的見地から、主權の絕對性の××に到達した。彼は、スペンサア以後の最大の社會學者としてのホッブハウスの死後（本年六月二十二日歿）、英國における最も顯著な社會學者としてその存在を明瞭にしてゐる。彼の國家觀もまた英國における國家觀の發展を社會學的に基礎づけたものと見ることができるのである。個人主義的自由主義國家觀は、フエビヤニズムの集產主義的國家觀とその勞働黨の實踐的要求によつて崩壞した。このフエビヤニズムに對する反動がサンヂカリズムであり、ギルド社會主義である。それは一の社會化された個人主義である。マックイヴァの國家觀はこれに近い立場をとり社會

學的基礎をこれに加へたものである。

マックイヴァの主權論を語るには、その國家觀に對し、多少の知識を缺く事は出來ぬ。彼れによれば、國家は全體社會ではない。家族、教會、學校、會社とその性質を同じくする團體に過ぎないものである。即ち全體社會を構成する一團體が國家であつて、それは團體の特質である特殊目的の具現であるに過ぎない。團體はある特殊の目的のために、熟慮的に組織せられる。國家も、その目的のために殊更的に組織せられたものに過ぎない。その目的とは何であるか。マックイヴァに從へば、地域的に定められた社會秩序の一般的外的條件を維持することである。即ち全體社會を構成する人格を秩序づけ、擁護することが、その積極的任務でもあれば、消極的任務でもある。

三

マックイヴァの主權論は彼の國家觀の必然的結果である。從つて、從來の主權者のやうに、主權は國家成員の生命財産權利義務に對する完全な支配であるとする考へ方に反對する。ホッブス、オオスティン、ベンタム及びその學徒は主權を實にかくの如くに解する。彼等は主權とその作用の下にある人民の關係を奴隷とその所有者のやうに考へるのである。併し、マックイヴァに從へば、それは實際政府生活の實相を明かにしてゐるものではなくて、主人と奴隷との世界を考へてゐるに過ぎぬ。

國家の主權は全體社會の主權ではない。全體社會の一部としての國家の主權に外ならぬ。故に、國家主權が×××を有するごとくに考へることは、その本質を明かにする所以ではない。國家とその性質を同じくする他の團體を見るがよい。その大小を問はず、すべての團體は一定度の、國家におけると同樣の主權を有してゐる。一例として、株式會社を見る。株式會社はこの會社を維持する意志と利益とに結合せられた株主總會を有する。これが會社の一般的意志で、國家の一般的意志に相當する。併し、この種の意志は、一團體の成員に共同目的を維持し、承認し得るに過ぎない。それは、其政策を指揮決定する事は出來ない。そこで、株主は重役を選定する。これが選定するものは、支配的集團であるか、若く多數である。これは勿論一般的意志とは別な多數意志である。併し、この多數意志は、黨派的關係から發生するものであるが、この關係の基礎をなし、これを調整しつゝあるものが一般的意志である。會社の場合に、政策の制定、發展、遂行に重役會が必要であると同じく、國家の場合では、それは政府に相當する。この場合、我々は從來、主權的議會とか、「主權的××」とかいふ言葉を使用してゐるのであるが、その何れの場合にも、この主權的なるものは、その權力を、それを選擧し、または承認する廣汎な意志から獲得する。故に、それは、公民の精神である一般的意志に依存する。

一般的意志は國家の意志でも、國家のための意志でもない。それは國家を維持するところの意志である。それは、愛國心や忠誠の感情の中に現はれる。多數の決定または組織せられた政府を承認せんとする心持ちに現はれる。勿論かくの如き性質の意志は、平凡な日常生活の過程の中に埋もれてゐるので、政府的行動の明白な原理では

意味の、不斷に直接に立法に携はるやうな「一般的意志」ではない。乍併、マックイヴァのいふ一般的意志は組織せられてはゐないが、現實的實在的なものである。勿論現在の國家的範圍内には國家生活に直接意識的に參加してゐない人も多い。殊に、××國家の如きにあつては、大多數のものは、この國家に對して、全然別個のものであるといふ感を受けてゐる。このことは、國家がその支配下にあるすべてのものを、その構成員と考へる必要のないこと、並に、國家に對するこの意志には種々な程度の存することによつて、これを説明し得る。

かくて、國家の政策または方向を最後に決定する權力を窮極の主權者と名づけるのである。これが國家の意志である。この意志の依存するところは窮極においては、一般的意志であるが、「人民の意志」がすべての人民の意志であることが稀であるやうに、すべての國家形態における活動的政府は人民の選擇によつたものではない。それは最良な場合においてさへ、動搖しつゝある多數がこれを決定するに過ぎないものである。

かく主權は、直接明瞭にではないが、一般的意志に××する。從つて主權活動の範圍は、一般的意志の表現である法の構成に向けられなければならぬ。而して、法の目的は同胞間の社會的關係を秩序づけるにある。同胞相互の勤勞と抑制とを要する。かくて社會の存するところ權利と義務の關係が存する。この社會一般の外的關係を一の法的秩序として組織することが、國家主權の目的であり。そして唯一の目的でなければならぬ。而して、社會一般の關係を規定するが故に、國家はそれと性質を同じくする諸團體相互間の關係を規制し得るのである。

以上は[illegible]がマックイヴァの「近代國家論」に現はれた[illegible]その主權論の大要である。彼の著述は菊判約千五百頁に渉つてゐるので、これを要約することは甚だ困難であるが、その主權の要點は以上で傳へ得たと思ふ。彼の理論は社會學的に見るとき、その史的本質と理念的本質との間に多少の差誤もあるし從來の法律的主權論に比すれば、その價値は比較にならぬほど大であるといつてよいであらう。

ドウンクマンの應用社會學

松本潤一郎

應用社會學といふ名稱であるが、此迄の所三種の夫々異つた研究が、これによつて意味されて居たことを注意しなければならぬ。一つはアメリカ流の應用社會學であつて、ヘンダースン等は之を實際社會學、社會的技術學とも云つた。社會的行爲を規律する原則を呈出せんとするのであるが、それは單一に社會學原理を應用しただけでは不充分であつて、經濟學道德人類學等種々な科學の知識を併せて考慮して始めて個々の實踐的行爲に對して適切な指導理論たりうるものであらう。事實上、今日米國に於て企圖される所の應用社會學

攻究は多數の社會的諸科學からの實際的施設への應用」に外ならないのである。第二はヲードによつて力說されたる、社會的理想及社會改良の合理的基礎の研究といふことである。ヲード的應用社會學は彼の「純粹社會學」の上に樹てられる社會的規範理論すなはち「社會による社會の意識的改良の研究」であるが、然してこの場合ヲードでは應用社會學は飽まで科學であつて、決して技術を含まないのが特色とする。自ら社會學的原理が應用することを敢てしないのであつて、たゞそれが如何に應用さるべきかが示さんとするのみである。故に政府でもなく、政策でもなく、又社會改策でもないのである。高々社會的政治的活動が指導すべきやうな一般的原理が提示する邊りで止まうとする。卑近なるアメリカ式應用社會學が社會政策的、社會事業的であると解するならば、ヲードのそれは高踏的であり倫理的社會學である。

第一のものと第二のものとは、併し乍ら一面相通ずる立場に在る　それは或は卑近なる意味に於て或は原理的たる意味に於ての差異はあるにせよ、共に實踐生活へ指導が求められようと欲する共通點である。事實上、この共通點ある故に、總てのアメリカ式應用社會學は又ヲードに根本的に隣接するものであると許せられるのである　實から云ふならば、ヲードと雖も實踐的な米國といふ國風が持つたと考ふべきである　第三種の應用社會學は何等此實踐的關心が挿まない點に著しい特色が具備して居る。そしてそれが飽まで一理論の上位に於て論議する獨逸に於て唱導されたといふことは興味ある對照でなければならない。獨逸に於てかの形式社會學的純粹社會學興るに及んで、フイアカント等は社會の純粹形式の理論が個々の社會現象の研究に對して發見指導的原理たるべきことを強く主張した。個々の社會事象が問題とする推しなべての社會的諸科學に於ては、純粹社會理論が念頭に置くことによつて研究が容易にされ、豐富にされる　此關係について云ふ時は內容的社會諸現象の攻究は、すなはち形式的純粹社會原理の應用的研究と認むべきであつて、此性格に就てこれが應用社會學と解しうるであらうと云ふのである　私はこの意味の應用社會學の觀念は社會學上に於ては確に斬新な考へ方であると信じてもよいのであるが、事實はかのローザンヌ數理經濟學派の經濟學の一大部門たる純粹經濟學に對する應用經濟學の區分が、社會學上應用社會學が形式社會學に對する意味に於て指摘せしめた先縱をなして居るのではなからうかと疑ふのである

應用社會學新論として私がこゝに特にあげたいのは、伯林に於ける應用社會學研究所長カアル・ドウンクマンの最近時の企圖であるが、それは上記した在來の應用社會學のいづれのものとも接觸點が持ち乍ら、ある他の意味に於て、それらの孰れとも異る立場に立つ新規の試みである　實際社會學に對しては技術を避けて著しく理論的である。又ヲード的な「社會倫理學」と比較するならば、それは多分に分科科學的である。更にそれが形式社會學者の概念する所の應用社會學と異る所は、社會學即應用社會學たる點にあつて、純粹社會學の存在をそれ自身の內に包含する特質に於て見出される。

ドウンクマンは「總ての理論が實際活動の動機から現れ出でた」一大事實を先づ指摘す

る。自然科學は自然征服の手段であり、精神的文化の認識亦人類の向上進步の手續に外ならないのである。故に理論といひ實踐といひ此二つのものは密接に相互に結合されて居る。數學物理學生物學等に於て見るが如く、理論と實踐とは截然と分たれるものでは無く兩者は無意識の內に、氣付かざる間に融合しつゝあるのであつて、凡ゆる理論が同時に應用的であることは、恰も意的衝動なくして理智を考へざると同樣である。理論の獨立は單に相對的に認められるのみ、決してそれは絕對性を持たないのである。「意志がその實踐的目的を欲する時、純粹理論を欲する」關係にあるからである。而して吾人が社會的事象に近づくに從ひ、かくの如き理論的認識の實踐的制約といふ特性が愈々明瞭化すると云はなくてはならぬ。社會過程が吾人を圍繞して存在するのは意志的過程としてゞある。然らば之を理智的に把握し得たとしても、意志の命令を思考から切り離すことは果して可能なる事柄であらうか。——

彼は右のやうな出發點から總ての實踐的傾向を帶びざる、之を根本から否定さへする所の社會學理論のすべてを、「應用社會學」の旗の下に拒否せんとする。彼は應用社會學以外に社會學ありえずとし、應用社會學は即ち、社會生活の實踐的傾向の學理、從つて社會的行爲への指導理論であると標榜するに至つて居る。

ドウンクマンの新しき應用社會學は直接マックス・エーバーの會得的社會學に於ける價値離脫の特質への反對說となつてあらはれて居る。一般科學の理想は永い間形式的數學的自然科學に置かれて居つた。そしてそこに「實踐理性の上位」といふことが忘却せられて居たのである。併し乍ら實踐理性即ち意志の閑却は許され得ない。エーバーは之を純粹科學的要素としての合理的者の概念と結合することによつて、そこに科學的な、即ち客觀的事物的科學としての社會學を可能ならしめたと信じた。併し乍らそれは科學と政策との分離を意味し、ドウンクマンによれば、當時の文化狀態をエーバーが單に巧に綜合せる假初の妥協以外に出でなかつたのである。マックス・シエラーの出現と共に、社會學は再び直接の應用と行爲の自由に辿りつき得たといふのである。

然らばドウンクマンは結局如何にして社會學的理論と共にその應用的指針を提示して呉れるのであるか。彼はこの場合社會集團を理論的攻究の對象とし、社會集團の生活そのものに於て應用的原理を見出して來る。社會團體そのものに規範的原理を求めるといふならば、それはかの過去の社會有機體說に於て、吾等が經驗した古い團體主義哲學の再興ではないであらうか。確に之を想起せしむるものがドウンクマン的應用社會學に發見することが出來る。何となれば彼は全體社會（例へば群、部族、民族、國家等）に對する個々人の歸屬と服從とを殆ど絕對的であると考へ、カントの無上命令に倣つて社會學的命令の第一をあげて「汝の行爲よりして全體に對し何等の損害も與へざるやう行爲せよ。蓋し全體は汝自らの存立の基礎條件たる故である。全體に對し何等の選擇もあり得ない！」と命ずるからである。とは云へ、ドウンクマン社會倫理は決してかの有機體說に含まれたやうな社會團體第一主義を無條件に貫徹するものではないことを附言しなければならない。彼は輓近社會

團に於ける集團の形式的研究を充分に意識するものであつて、社會を以て直ちに全體社會と認識した有機體的見解を斥ける。そして要素的諸集團から全體社會が組立てられる各種の構造を理論的に分析すると共に、部分的集團に對する個々人の依存關係を以て常に相對的であると考へる。從つて、若し個人の行爲によつて特定集團の生活傾向が積極的に促進されえないならば、彼れは移つて他の種類の集團を求めてこれを住家としなければならないし、又個人々格の保障の爲めに、自己に忠實に行動し得る所の場所を選擇すべき自由を個人に認むるに至つて居る。

新應用社會學のドウンクマンに於ける企圖にこれ等の關係に於ても、等しく社會集團の分析的研究を必要とし、之を前提とすることに於てのみその示向的見解が成立つのを見るであらう。此等の前提的研究それ自體が形式社會學的、純粹社會學的であるのはいふを俟たない。唯かくの如き理論の裏は直ちに實踐的原理となり來るのが基礎的特色である。彼の見地から各種多樣な社會現象へ對して實踐的適用が豐富になされ得ることは、彼が例示的に社會學的教育、社會政策、社會民族的政治を論じて居ることから略々明瞭であらうと思ふのである。

（註）私はドウンクマンの「應用社會學 教育、經濟、政治を特に顧慮したるその問題と任務」伯林一九二九年版を主として基礎的傾向について詳論するに止めて置いた。彼の社會哲學的見解については「社會的共性の批判 ゲマインシャフト哲學」伯林一九二四年版を參看せらるべきである。

プドフキン・ヴェルトフの映畫理論

清水光

序

映畫は、その言葉の眞の意味において近代的な新興の藝術である。映畫は實に、技術的な機械そのものから近代的な社會に生れた。それは技術的な基礎に立ち、機械的な生產過程による物質的基礎の故に、機械的なる近代社會に於いて、最も強力なる藝術として重心的な地位を占めてゐる。

この藝術としての映畫が、新興のソヴエト・ロシアに於いて理論的に如何に把握されてゐるか。これは興味ある問題である。機械が既に合理的にその機能を果しつゝあるソヴエトに於いてこそ、技術的・機械的なる基礎に立つ映畫藝術はその歪むことなき本來の機能を遂行し、その理論は最も正しき意味に於いて進步的であり得る。新興の藝術――映畫の尖端を進む映畫人プドフキン・ヴエルトフの映畫理論を考察する所以である。

1

映畫藝術の基礎はモンタアジユである。こ

の合言葉の下に若きソヴエト・ロシアの映畫は進展した。とはプドフキンの有名な言葉である。

モンタアジュとは本來は、組立てを意味する工學上の術語である。この古き藝術觀に於ては恐らくは白眼視されるであらう言葉が、ソヴエト・ロシアの新しき映畫の合言葉として用ひられてゐるのは興味あることである。ここに古き藝術理論に對する新しい立場が鮮かに表らされると共に、映畫の技術的・機械的な存在が理論の上に歪むことなく反映されてゐる。その機械性に著しい特色を有する映畫藝術が、正に夫れに相應しき理論的表現を得てゐる。ところで映畫のモンタアジュとは如何なることであらうか。

映畫は、常識的には、カメラの前の俳優の動作を中心とする劇的場面を撮影（機械的に再現）することによつて成立する。この場合にカメラは再現的に機械的に把握されてゐる。このカメラの前の劇的な場面を監督し、その劇的動作の發展を空隙を作ることなく進展せしむる職務を映畫監督は負はされてゐる。ここから所謂、コンテイニユイテイの概念が生れる。この映畫の連續性、したがつて統一性はカメラの再現的、機械的な把握を基礎として矢張り外面的に再現的に理解されてゐる。

これに對してモンタアジュの理論は、映畫は單に撮影されるものでないことを主張する。「映畫が撮影されるといふ言葉は全然、間違つてゐる。それは日常語から消え去らねばならない。映畫は「撮影」はされない。」映畫が映畫藝術であり得るのは、夫れが撮影されるだけではなく更に組立てられることに依つてである。カメラの前で如何に物象が動いてそれが機械的・再現的に撮影されても、夫れはそれ丈けでは映畫にとつて死せる對象であるに過ぎない。映畫は自然の模寫であり記錄である寫眞的（機械的・再現的）複製から、映畫的實在を組立てねばならない。それは丁度、個々の文字から文章が組立てられて、始めて文字が文藝的に生きて來るのと同じである。一つの文字は單なる記錄である。一つのカツトも、機械的・再現的に止る限りたとへそれが動いても單なる記錄であるに止つてゐる。一連のフイルムがモンタアジュを成して始めて映畫的に意味を持つて來るのである。「モンタアジュは根本的に創造的な契機である。それを通して始めて精神的な寫眞（機械的・再現的な）から生命ある映畫的な形式が創られるのである。」

これをプドフキン自身が深い自信を持つてゐると云つてゐる一つのモンタアジュの實例によつて明らかならしめよう。これは彼の傑作、一九〇五年のロシアを描いたゴルキイの「母」による映畫の一場面である。

息子が牢獄に坐つてゐる。突然、彼に明日解放されるとの書付が渡される。ここで「獄裡に悦ぶ人」を映畫的に表現しなければならない、悦びに興奮した機械的・再現的寫眞、夫れは前後の連續によつて如何に劇的に悦しいものである筈であつても、顔面筋肉が空しく畫面に爆發するに止つてゐる。そこでプドフキンはカメラの再現性のみに依ることなく、又外面的な連續に拘ることなく、「獄裡に悦ぶ人」のモンタアジュを次の如くに表現した。

手の動きと顔の下半分、笑ふ口の大寫し。

それから

激しく流れ去る春の小川。

水の中に碎ける太陽の光の戯れ。
村の池に遊ぶ小鳥の群。
笑つてゐる小供。

これらの畫面は次から次へ悦びにふさはしい輕快なリズムで滿護したことと思はれる。そして文字から文章が組立(コムポーズ)てられるやうに個々のカットから「勤勞に悦ぶ人」の映畫の文章(モンタアジュ・ザッツ)が組立(モンテイレン)られたのである。そして文學に於いて「始に文章ありき」とよばれるやうに映畫に於いて基礎的なものはモンタアジュ・ザッツであるといへるであらう。テイモチエンコの言葉を借れば「モンタアジュこそ映畫を藝術作品たらしめる夫れは映畫藝術の形式である。」からである。

モンタアジュの映畫理論の基礎は、かくの如きものであるが、モンタアジュ論に依つて映畫藝術の重心がカメラの前の世界からカメラそのものを通じて、その背後にまで移されたのを見ることが出來るであらう。従來の映畫理論に於いてはカメラの前の劇的場面の監督だけが注目されて、カメラの後に、それ以上の重大な物が存在することを注意しなかつた。モンタアジュ論の確立によつて始めて、テイモチエンコと共に人は、映畫監督が劇場よりの借物でレジスユウルと呼ぶ事なく、始めて「映畫の主人(マイスタア)」あるひは、より精確に、より正當に「映畫の技術家(インジニア)」と代へらるべきである」と主張し得るであらう。モンタアジュ論によつて、映畫は理論的に演劇の束縛より解放さるると共に、カメラの再現的・機械的側面だけでなく、その創造的なる機能を十分に把握したといへるであらう。そして映畫藝術は再現的・外面的な持續、統一から、より創造的な内面的なリズム的統一に向つて進展し深化されたともいへるであらう。

映畫・モンタアジュ論の一般的な、基礎的なことは大體かくの如くであるが、勿論、映畫のモンタアジュはモンタアジュ・ザッツを以つて終りはしない。映畫にこれを基礎として一纏りの場面に、場面は插話に、插話は夫れ自身に多少の纏りのある部に、一歩々々に組立られて「明確な藝術作品」―映畫が完成されるのである。

ところでプドフキンに於いてはモンタアジュ・ザッツのより高次へのモンタアジュは、大體に於いて場面、叙事の言葉が示す如くに劇的な構成に於いて完成される。ここにプドフキンの映畫人としての從つて理論家としての特色が存在する。彼はエイゼンシュテインの如くに群衆そのものを映畫の中心とせず、又ヴエルトフの如く現實その者を映畫の目標とせずして、「仕組まれたる映畫」を劇的に(勿論、演劇的にではないが)より效果的に組立てようとする。ここにモンタアジュの理論家としての彼の特異性が存在してゐるのである。

2

ヴエルトフも映畫の基礎をモンタアジュに認める「モンタアジュとは――個々のカットを映畫作品に組織することであり、撮影されたカットを以つて映畫作品を構成することである。然しそれは、カットを集めて個々の場面を造り上げること(演劇的組織)でもなく、筋書によること(文學的組織)でもない。」このヴエルトフが演劇的組織と呼ぶ所の「場面」といふ言葉こそプドフキンがモンタアジュ・ザッツのより高次の組立てに用ひた言葉である。ここにヴエルトフが中心とする「映畫眼」の映畫理論の根本的な差違がある。

「映畫眼革命」を主張するヴェルトフ一派の宣言は、實に「仕組まれざる映畫」のための宣言であつた。そしてこの理論實現のために彼等は鬪つたのである。「映畫眼の過去は——世界の映畫藝術の辿つてゐる進路を變更させるための苦鬪である。演技的映畫から「仕組みのない映畫」に劇に仕組まれた映畫から記錄的な映畫に、劇場の舞臺から生活の舞臺に——世界全體の映畫藝術の重心を置き換えるための苦鬪である。」

「映畫眼」は仕組まれた造り物ではなくて現實の事實を、その記錄を求める。

「映畫眼は——事實の映畫的記錄であり、記錄的映畫を標榜する運動である。」

「映畫眼は——外見上混沌としてゐる人間生活の中に切り込むことによつて、課せられたテエマに對する解答を、生活その者の中から見出さうとする。映畫眼は、總括的な組立法を行はうとする。無數の事象の中から淸算を取らうとする。撮影機を通して、最も性格的なものと最も合目的的なものとを引出さうとする。拾ひ出された個々の部分の一切を、極めて視覺的なリズムの中に、極めて視覺的な形式の中に入れようとする。拔萃された「辭彙」の中に入れようとする。」

映畫眼はかくの如く、モンタアジユの基礎の上に仕組まれた造り物ではなくて、現實の事實の機械的に忠實な再現による記錄を完成しようとする。映畫語を、演劇語や文學語から完全に區別し、「記錄的映畫文字」の概念を打立てようとする。「人間の眼より、より完全な眼である映畫眼」によつて、ラヂオの記錄が「私は聞く」といふことの組立てであるように「私は見る」といふことの組立てであり總體である如き映畫の記錄によつて全世界の人達を相互に結合させようとする。

「映畫からラディオ眼へ」視、聽二覺の綜合的組立てによつて、ヴェルトフが中心に「映畫眼」の運動は、事實の上に現實に世界の統整に向つて努力しつゝあるのである。

プチ・ブルジョアの犯罪理論

風早八十二

一

犯罪及び刑罰の理論と云へば、今日のインテリゲンチア養成機關たる大學の法科では、舊派理論と新派理論とより外のものは知らず文科では形而上學的犯罪理論と社會學的犯罪理論とを對立させてゐるに過ぎない。

なるほどそれらの對立が社會的に大なる意味を有つた時代もあつたにはあつた。即ち、それぞれの對立物がそれぞれ對立せる社會的地盤に立つてゐた場合に於てさうだ。元來、舊派理論(乃至は形而上學的理論)によれば、刑罰は惡に對する應報的絕對的否定ではあるが、刑罰權は社會契約により各人の割讓した最少限度の自由の總和に過ぎないから、刑罰權は各人の自由を保護するに必要な限度に於

てこれが行使する時正當な根據があるとする。而して、刑罰の對象は行爲である。心理の現象は法律の干渉すべき限りでない。各人はその犯罪行爲が外部に及ぼした實害の輕重に比例してのみ刑罰が科せられるといふ。舊派のかゝる主張は如何なる意味を有つてゐたか？封建的社會組織の下に於ける宗教的方法による犯罪處置は人間の心意を對象とし、裁判官の自由心證を手段とする。從つてそれは專制的裁判官の專斷的部落主義的科刑を伴はざるを得ない。舊派理論はかくの如き封建的弊害を除去し、各人をして客觀的に一定せる規準によつて刑を受けさせようとする意圖に出たものであつて、その固有の法律解釋方法、罪刑法定主義と相俟つて、以て、新興ブルジョア階級に可及的最大限度の生命活動の自由を保障せんとするものであつた。

だが、ブルジョア階級が過去との對立を克服して一度支配階級として登場し終るや、彼らは新らしい――將來よりの――對立物に當面せざるを得なかつた。ブルジョアジーは[illegible]の[illegible]せんとする爲に、攻撃的役割をでなく、反動的役割を演ずる事を餘儀なくさせられた。こゝに於てはもはや自由放任は禁物である。自己の地位を（その地位を保護する組織を）脅かす危險ある者が血眼になつて探し出して驅逐することが課題となつた。刑罰の對象は、外部行爲でなくして犯人の人格の社會的危險性である。だから、犯人が危險性を有すると判つたら、行爲の爲されるのを待つまでもなく、これに社會防衞處分を行ふべしといふ要求的學説は、その解答である。それは、社會的防衞といふ觀念の下にかくれてゐるけれども、資本主義階級の目的に奉仕するプチ・ブルジョアの犯罪理論に過ぎない。

此の時期に到つては、もはや刑法に於ける新・舊兩派の爭なるものは同じ地盤の上に立つものであつて本質的意味を有さない。いづれも、現代國家存立の基礎、私有財産制度の維持を前提とし、唯[illegible]來る新興犯罪層に對して如何に最も有效に反動を加へようかといふ事を考へてゐる點に於て全然立場を同じくする。[illegible]は、[illegible]味として、同一地盤の上に唯一の統一的犯罪理論を構成するに至つてゐるのである。其處で、私は今日の資本主義國家に於ける最尖端に立てるデュルケーム派の社會學的犯罪刑罰理論を一應紹介することによつてそれが何故にプチ・ブルジョア的見地であるかを指示するであらう。

二

デュルケーム學派は犯罪を以て一の統制機關、即ち、國家）に對する違反行爲であるとする（デュルケーム「社會的分働の區分」再版）。一の統制的權力は、一度組織されるやそれ自身の個有の力によつて自働的制裁を加へる。それは、その個有の作用によつて或る種の行爲に對して犯罪と烙を打ち、又は或る種の犯罪を刑罰する事も可能である。斯くて、官吏の職務でも公文書偽造でも、特權階間に於ける貸借でも公道に於ける過度の疾走でも、一般人の反對感情が少しも起させないに拘らず、犯罪となるといふのは、それがこの統制機關に[illegible]示してゐるからである。だが、統制機關に對して生ぜしめられたる幾分の損害が問はれるに拘らず、犯罪の社會的意圖に對する一層

著しい損害が民事的賠償に附せられるに過ぎない事があるのは如何なる理由に基くか。例へば交通警察に對する極めて些細なる違反さへ罰金に處せられるのに、契約に對する違反が屢々反復されても損害賠償の義務を負はされるに過ぎぬのは何故か。

社會の云はゞ腦髓とも云ふべき統制的機關のみが何故特權的に保護されねばならぬのか。デュルケーム學派と雖ども國家權力が先在するものでなく、それは社會の必要上、社會から生れ出でたものであることは、一應これを認めはする。

彼らによれば、凡そ一の統制的權力の第一にして最も主要なる機能は社會的信念・傳統・共同的慣行を尊敬せしめる事、即ち、社會內外の一切の敵に對して共同意識を擁護するにある。かくてその權力は萬人の目に共同意識の生きたシンボルとなる。それは最早單に程度上多少重要なる一の社會的機能ではなくして具象化されたる共同的類型である。そこからその力が生れる。但し、一度此の力が生れるやそれは社會生活の一の自動的能因となり、自己の獨立性を以て自發的に、反作用を及ぼすのである。それは社會に於ける諸種の分散せる精神が齎すと同樣あらゆる反對的力を排斥する。然も此の事は社會の諸種の分散的精神がそれ程に生き〲と此の反對を感じない場合に於ても行なはれる。然しながら統制權力が犯罪を創設する事が許されるのはその力が共同感情から來てゐるが故に外ならない。此の關係は刑罰權に就ても同樣に云ひ得る。即ち、國家が發生してからは此の刑罰權は凡て國家の裁判所を通じて强行されるに至つたのであるが、その根據は常に必らず社會の中に分散してゐた反動權に由來することを忘れてはならぬ。つまり國家刑罰權は本來社會に屬せし反動權の反映に外ならぬ（第七三頁）。まことに『國家なるものは、……むしろ一定の發展段階に於ける社會の一所産である。それは、この社會が自己自身との解決しがたき一つの矛盾にからまり、融和しがたき對立に分裂して了ひ、そしてこの對立を除去する力がないといふことの告白である。しかるに、この對立物、相抗爭するもろ〲の經濟的利害を有する諸階級が、自らと社會とを無益な鬪爭のうちに滅亡させないために、軌範が防止し、「秩序」の埒内に抑制すべき、一個の、見かけ上社會に超越して立つところの權力が必要となるにいたつた。（エンゲルス著『家族、私有財産及び國家の起原』參照、西雅雄氏譯白揚社版二〇九頁）

かように、デュルケーム派は、國家權力が社會の要求により社會から發生したものではあるが、一度發生するや、その相對的獨立性を以て、社會に對し反作用を及ぼすことを認める。此處までは猶ほ間違ひではない。

だが、彼らは、此處で一轉して、國家權力を固定的なもの、先驗的なもの、普遍恆常的なもの、同一的なものとして提出し始める。曰く『犯罪は幾分先驗的なる一の權力に對する侵害である。……

然るに、經驗的に見て、個人より上位に在る道德的力としては、共同的力を除いてあり得ない。』(第五二頁)と。此處に、國家權力は先驗的なる一權力と合體し社會力と同一視されるに至つてゐる。

デュルケームは、國家權力が自然發生的なることより直ちに、國家權力の永久性の結論を導く。即ち、社會の更に高次的なる發展の

過程に於て、國家權力が社會と不斷に衝突することを否認したい。これは、社會學派の意識の認識の混亂から來るむしろ當然の歸結であると思はれる。私は嘗て、デュルケーム派の社會學が獨自なる社會的實證的研究方法から出てゐるに拘らず、その適用に於ては遂にデューリングの社會一般に、シュタムラアの法律哲學に歸着すべきことを、その社會形態學の方面に就て指摘したのであるが、今、同派の國家權力と社會との關係に就ても同樣なるプチ・ブルジョア的見解を見出さざるを得ない。（次の機會には、私は同學派の階級觀念の分析批判を試すことによりて、結局、社會學派のプチ・ブルジョア的見地を全面的に克服したいと思つてゐる）。

三

デュルケーム學派は犯罪の形式から社會學的に規定して、これが刑罰と云ふ效果から起りしたることに求めた。刑罰—國家權力の[illegible]ら、刑罰は個人に對する社會の熱情的反動的反應であるとする（刑法論五一頁）

刑罰の[illegible]の刑罰と云ふことは刑罰の第一の特質である。その例は原始部族に於ける刑罰によつて示されてゐる。刑罰の要求が想はば相手が動物であらうと無生物であらうと問はりなく罰せられる。新派の刑法學者によれば刑罰は今日に於てはかゝる盲目的復讐的性質より變じて反省されたる目的的性質のものになつたのであつて刑罰によつて犯人に科せられる苦痛はもはや一の方法的なる保護手段に外ならぬと云ふ。が、一の慣行の性質と云ふものはその慣行が適用する者の意識的意圖が變つたことによつて必然的に變るものではない。例之、新派は今日の刑罰が合目的々と云ふが、それは昔の刑罰に就ても同樣に云ひ得ることである。現象の内面的機構はそれが意識されると否とによつて存在されるものではない（第五四頁）。而して、その不變的性質は刑罰の本質が求むべき犯罪の衝動にあるのでなく、既に犯された罪に對する云はゞ評價作用であることに存する。その證據には、人は[illegible]とようとして機械に注意をするが、此の事は、若し人が犯人に惡い事をしたから罰せられるのであり、又、その惡い事をした程度に應じて罰せられるのであると信じたい限り、説明がつかない。刑罰が若し單なる防衛手段ならばかゝる罪刑の均衡は不必要であつたらう。つまり、刑罰は犯人の惡性によつて異なるのでなく、犯行の性質によつて異なるのである。例へば竊犯は殺人犯より刑罰が輕い。その場合、竊犯者が矯正不可能の人格だからと云つてこれに死刑が科するわけにはゆかぬ。デュルケームはかくの如くに、刑罰の本質を、一種の道徳的意識に結びつけて説明してゐる。

此の點に就て、デュルケームの高弟フォーコンネは更に詳細なる社會心理的說明を試みる。卽ち「或る特定社會の生存の主要條件は其の成員の團結を確保する信念の體系の活力である。……かくの如き信念態の襲擊はその社會にとつて、解體と死の過程の始まりである。……一の生物は害惡を消極的に耐へるものではない。それは反動する。而してその活力に[illegible]する。有機體にあつてはその應衝的反動は、明確な意味では、少くとも有用なる目的に適合してゐる。……刑罰的制裁は犯罪によつ

て動揺を受けた信念を、そつくりそのまゝ回復しようとする。その信念は受動的に侵害を耐へてゐたら萎縮してしまふであらふが、反動する事によつて育てられ、力強さを取戻すのである。刑罰はかようにして犯罪から生ずる道德的害惡を償ひその結果へ導くことを防止する。刑罰の效用は本質的には、それが犯人に及ぼす作用にあるのでなく、却つて社會自體に對して及ぼす作用の中に存する』(『責任論』(一九二〇年、第二二六頁。)

一の行爲は何故に犯罪であるかと云へば、それは社會から排斥されるからであり、而して、何故社會から排斥されるかと云ふ事は右の如き社會心理的理由による。即ち、刑法學者が漠然とよぶ『反社會性』なる文字はデュルケーム派によつて極めて見事に社會心理的に根據づけられてゐる。だが、說明は其處にとゞまる。デュルケームの社會學の全體系の爾餘の部門と同じく、此の點に就いても、社會及び社會意識は何らの內面的矛盾なく階級性なき平面一律のものと看られてゐる。然るに階級性を糊塗しつゝ、かくの如き合理的說明が爲される場合、それは現實に於て、支配階級の一切の刑罰に社會性の外觀を帶びさせると云ふ非合理的なる歸結を生ぜしめる。私が此の說をプチ・ブルジュアの地盤に据ゑる理由の一は其處に在る。(一九二九年十二月一日稿)

ブハリンの農業理論

河西太一郎

一 はしがき

ブハリンがその基礎理論をマルクスより承け、その發展理論をレーニンより繼ぐものなることは人の知るところである。從つてブハリンがマルキシズム並にその發展としてのレーニズムの上に何を新たに加ふる所あつたかは聞かに疑問である、けれども過渡期に關するブハリンの理論的業績に至つては頗る目覺ましいものがある。此點に於てブハリンをレーニン以後の第一人者を以てするも恐らくは失當ではないであらう。

ブハリンの農業理論として注目に値するものも亦過渡期に於ける農業問題に關するその理論的展開である。これに就てはブハリンの著書中左の四書の中に大體その要領を窺ふことが出來る。

Das Programm der Kommunisten (Bolschewki), 1918.

Das ABC des Kommunismus, 1919.

Oekonomik der Transformationsperiode, 1922.

Ueber die Bauernfrage, 1925.

勿論ブハリンの農業理論はその全理論體系の一構成部分に過ぎないのであるから、之れだけを引離して、紹介することは必らずしも容易ではないのであるが、こゝでは紙數が甚だ限定されてゐるため、ブハリンの農業問題に關する見解中比較的主要なる二三の點を摘

々に取出してその梗概を紹介するに止める。

二　農業問題の階級的考察

マルキシズムはその實踐的意義に於てはプロレタリアート解放の哲學であるから、常に問題をその階級的見地から考察することは今更云ふまでもないが、農業問題に就ても亦勿論然りである。ところで農業といふ最も重要な生産部門の經濟構造の特徴は經濟制が極度に様々錯雜してゐる點である (Bucharin. Ökonomik der Transformationsperiode, p. 32)から。その具體的なる階級的構成の分析並にその諸階級とプロレタリアートとの關係に關する理論的究明が改めて重要なる問題となるのである。これに就てはマルクス並にエンゲルスの基礎的分析に基いてレーニンが既に詳細なる規定を施したのであるが、それを承繼してブハリンは農民諸階級對プロレタリアートの相互的利害關係に關する明快なる解明を加へ、以て其等諸階級に對して採るべき政策の理論的基礎付けを與へたのである。

即ちブハリンは、農民階級は決して統一的なる階級ではない、と云ふマルクス以來の教說に從つて、これを四階級に分析し、その夫々のプロレタリアートに對する地位を明かにしたのであるが、今その大要を紹介すれば即ち左の如くである。

(一)大農階級。プロレタリアートと大農階級との利害關係を最も深刻に分離せしむる根本的要因は、資本家的所有の利害、即ち勞働力の買手と賣手、資本家と賃銀勞働者といふ間の對立である。從つて大農階級は反プロレタリア的勢力の傀儡部隊たるべき運命を有するものであるが、しかし封建的土地所有に對する農業革命の行はれる範圍に於ては、此階級すら地主に對して反抗することがあり得る。

(二)中農階級。この階級の利害關係を勞働者階級のこれと分離せしめる根本的要因は、私有財産——假令それが自己の勞働力を使用するに役立つのみの場合と雖も——に基づく私的商品經濟の利害である。穀物販賣者(農民)と穀物購買者(勞働者)との利害は此點に於て内的に分裂する。けれども中農階級が資本家的搾取の過程中に捲き込まれるために生ずる他の若干の要因(高利、工業トラストによって行はれる價格政策、租税、帝國主義的制限の除去、穀價引上)は、中農とプロレタリアートから分離せしめる傾向の要因に遙かに優越し得る、それ故に此階級をこれを中立せしめることを得る。商資本的販道の特に強烈なる所、或はそれが封建的隊道と結合する所に於ては、中農階級はプロレタリアートと提携し得る。

(三)小農階級。この階級とプロレタリアートとの分離要因は同じく私的なる商品利害關係から生ずる。しかし此場合に於ては、分離要因と結合要因との比例は中農階級の場合とは全然異なり、小農自らが屢々穀物の購買者であり、賃銀勞働者として雇傭せられることも稀ではない。從つてこの根本的利害關係は大資本との鬪爭の方向に向ふのである。それ故に小農階級はプロレタリアートの味方たらしめ得るのであり、その決定的な提携者たり得るのである。

(四)雇傭農。これとプロレタリアートとの分離要因は從來の私有財産から生ずる。しかし此の分離要因たるや極めて微弱なものであって、兩者の利害關係の共通によって全然打ち消されて了ふ。此階級は唯形式上獨立せる

のみであつて、實際は全然資本に隷從し、資本によつて搾取せられる勞働者なのである。それ故に彼等はプロレタリアートの味方となり、その豫備軍――形式上は蔽はれてゐるが――たるのである。

(五)農業勞働者。これは即ちプロレタリアートそれ自身の一部である。けれども此階層には資本に對するその鬪爭を屢々困難ならしむる特殊相が伴ふ。それは客觀的には勞働行程に於ける農業勞働者の分散狀態と農村に於ける諸關係の强度な家長的性質とによつて條件付けられるのであるが、之等の特殊な諸事情が階級的利害關係を困難ならしめ、農業プロレタリアートをして勞働者階級の後れた層たらしめるのである。此層の獲得がプロレタリアートの先づ第一の任務であることは云ふまでもない。(Bucharin, Ueber die Bauern-frage, S. 38—42.)

三　農業問題の歷史的考察

辨證法的歷史的考察がマルキシズム方法論の重要なる特色を有することは之れ又改めて云ふまでもないが、ブハリンに依るこれが適用はその農業問題論に如何に現はれてゐるであらうか。ブハリンは農業問題を資本主義の發展期、勞働者階級の權力獲得の直前期、及び權力獲得後の三期に分ちて考察すること大要左の如くである。

(一)資本主義の發展期(一九一四年の戰爭に至る)に於ける農業問題。此期間即ちプロレタリアートが尚未だ政權獲得に當面せざる時期に於ては、マルキシストの任務は、大抵の資本主義諸國に於ては、何よりも先づ、資本主義の發達行程に關する小ブルジョア的幻想、理論的偏見、誤まれる見解を打破するにあつた。即ちマルキシストは、オポッチュニストに反對して、常に農業に於ける大規模生產の技術的、經濟的優越、集積及び集中の法則、農民階級の階級的展開の必然性、及び農業生產そのものの資本化を主張した。かくて此時期に於ける基本的見地は、資本主義發展の將來の行程の豫見であつた。マルキシストは、農業に於ては工業の發達とは異なりたる一見全然特殊な發達行程が存すると云ふ所謂農業の『非資本主義的發達』論を何よりも先づ打破しなければならなかつた。而して此時期に於てマルキシストの採るべき實際的政策指針としては、(イ)ブルジョア革命の課題が既に解決されて居つた諸國に於ては、エンゲルスの既に云へるが如く、『鬪爭として小農黨を獲取すること』、(ロ)然らざる諸國に於ては、封建的土地所有の完全なる××、農民のための土地の收入を保證するにあつた。

(二)勞働者階級の權力獲取直前期の農業問題。プロレタリア黨の任務は、前の時期に於ては、階級鬪爭が出來得る限り發達せしめんがために、資本主義の自由なる發達に對する障礙物を除去することに貢獻し、かくて自己の階級力を集中するにあつたのであるが、今や問題は進展し、權力の獲得、プロレタリア獨裁實現の問題が中心となり、それと共に勞農提携の問題が特に緊急の問題となる。蓋し此歷史的時期は『プロレタリアートの後れたる諸層のみならず尚又農民階級の廣汎なる諸層を獲得せんとするプロレタリアートとブルジアジーとの間の決戰期であるから』である。而して此時期に於ける實際政策の指針としては、資本主義的大生產の行はるゝ諸國に於ては、賃銀勞働者の使傭によつて耕作せらるゝ

大所有地を國營に移すことに努力すること。但し時局の必要止むを得ざる場合には大所有地の一部（その範圍は當該國の事情如何によつて決定せられる）を小農及び往々又中農のために分配することを躊躇してはならない。それは蓋し、大抵の諸國に於ては、小農階級の直接的援助及び中農階級の中立なくしては、プロレタリアートの權力獲得は不可能であるからである。ハンガリー、イタリー、及びポーランドに於ける消極的經驗、並にロシアに於けるその積極的經驗を見よ、

三、權力獲得後の農業問題。支配に到達したるプロレタリアートの根本的の任務は農民階級と協調することである。此問題はこれを回避することが出來ないといふことを明瞭に認識する必要がある。蓋し、農民階級は地球人口の大多數を占め、その生產上の特殊の重要さは依然非常に大なるものがあるからである。而してこれとの協調は、プロレタリア國家の經濟政策が、小生產者の私經濟的動機を考慮に入れ、且つまさしくかゝる動機から出發しつゝ、小生產者を徐々に完全なる共同經營形態とに導く時にのみ可能である。

プロレタリア國家及び支配的プロレタリア黨は農民階級の分化過程を注意深く觀察し、且つ社會主義的經濟要素の生長を絶えず保證しなければならぬ。即ち共同化の種々の形態に財政的援助を與へ、又ブルジョア的影響から解放された協同組合制度の生長を凡ゆる方法で發達せしめなければならぬ。かくして農業日傭勞働者、土地を所有せざる農民、及び小農の組織を結合せしめ、且つ新たに發生し來る農民階級中のブルジョア的、資本家的諸層に對する對抗力として、凡ゆる方法でこれを援助しなければならぬ。

勞働者階級と農民階級、或はその一定層、との經濟的提携は、工業の特殊的援助に依らなければならぬ。そこで工業は、資本家的工業よりも、結局農民階級にとつてより有利になる程にその生產力を發達せしめなければならない。

勞働者階級と農民階級との相互關係は、プロレタリア獨裁期間に於ては、提携である。しかし農民階級との協力は決して權力の分割を意味するものではない。けれども農民階級が完全に社會主義的建設過程に引き入れられ、かくして社會主義的變化を受くるに從つて、必然的にその最も進步したる要素の間に協同への參加過程が起るに違ひない。

但此全時期に特殊な發達法則をその特色とすることを明瞭に認識しなければならぬ。即ちその發達が順調に進行する場合には、階級的對立は一定の時間からは徐々その再生產の規模が縮小し、社會主義的經濟要素は進化の過程を辿つて成長し、絶對的なブルジョア的形態は漸次に驅逐せられ、而して小經濟形態は、協同組合制度により、凡ゆる共同的結合形態の成長によつて、漸次に變形される。かくして結局農業の共同的大生產の組織過程、都市と農村との對立の除去行程の進展すると共に、資本主義の下に於ける農工業の不均衡的發達法則、それによる農業の後れたる狀態が漸次に克服され行くのである。（三三）又全農工業の電化、大經營所の建設、大交通網の開設は、都會と農村との關係を根本的に一變するであらう。これは分散的に小所有者の社會的勞働者への轉化を促進するのみではなく、農業生產の全過程を合理化し、且永的に變形させるであらう。原始的な、殆ん

ど野蠻的な道具は最新の技術の成果に代へられ、それによつて資本主義生産の根本的不一致、即ち工業の發達と農業の發達との間に存する不均が撤廢されるであらう。・・・・都市と農村との對立は次第々々に消滅し、・・・・生産力の發展は巨人の足並みを以て、確實に且つ齊然と前進を續けるであらう。』(Bucharin, Oekonomik der Transformationsperiole, S. 125—126.)

既に指定された頁數を經過してゐるので以上の叮嚀なる紹介を以て一先づ此稿を終へなければならぬ。始めにも一言觸れて置いた如く、プリハンの所説はその先人の所説に特に新たなるものを加へてゐると云ふことは出來ないであらう。けれども過渡期に於けるマルキシズム理論家としてのプハリンの面目は以上の簡單なる叙述によつても大凡これを想望するに難くはないであらう。

生殖素ビタミンEの解說

藤卷良知

(イ)榮養と生殖との密接關係

榮養と姙娠とが密接なる關係を有して居る事は既に周知の事實である。彼の世界大戰爭の際ドイツ及オーストリア兩國は食糧に多大なる缺乏を來し、爲めに國民一般は榮養不良に陷つた事は人のよく知る所である。當時兩國の婦女子等は榮養不良の爲め、月經不順或は停止を來し、又姙婦の出産豫定日を遲延したのである。米國に於ける調査も亦榮養不良の婦女子の姙娠及び出産率は榮養佳良のそれに比して遙かに低下して居ると稱して居る。ロエブ氏は榮養不良或は不給は子宮、卵巢及び乳腺に直接多大なる影響を及ぶすものであると稱し、又レノウド及マッコンバー兩氏は榮養不良に依つて婦女子の身體特に卵巢に特種の變化を起すものであると云つてゐる。即ち

一、健全なる卵子の發育を妨ぐ

二、卵子排泄管の閉塞

三、卵巢の內分泌機能障碍

四、子宮の不正常態を來すか又は受胎を防碍するか或は又胎兒に異狀を來すものであると云つて居る。

動物實驗の結果によると榮養不良、不給或は飼料の配合宜しからざる際、生産率の減少を來すものなる事は吾人の日常目擊する所である。ロオプ氏の研究に依れば、モルモットに標準食餌を小量給與する時には該動物は榮養不良を來し、卵子の發育遲滯し、時としては全く發育することなしと。斯る食餌を以て飼育したる動物は姙娠すること殆どなく、たとへ姙娠するも、流産するもの多しと稱して居る。之等動物の卵巢を組織學的に檢索すれば、卵巢は萎縮し、特に結締組織は甚しく萎縮し、卵子の發育不完全となり遂に不姙症に陷ると稱して居る。スローネーカー及カード兩氏は菜食主義者の食する食物と同樣なる食餌を以て白鼠を飼育すると、該動物の發情期

は皆無し、且妊娠率は四分の一となり、一代一代と代を重ねるに從つて不姙症に陷るものであることを認めたのである。又一方に於てマーシャル及ニイコル兩氏は、羊の交尾期三週間前より營養豐富なる食物を與ふる事によつて姙娠率を高め得るものであると稱し、又モランド氏はレチチンが比較的多量に含有する食物を與ふれば出產率が高まるものなりと稱して居る

以上述べた樣に、幾多の學者が食物と繁殖との關係に就いて研究したのであるが、其後に至つてエバンス及ビショップ兩氏は動物の繁殖には或未知要素の必要である事を發見したのである　即ち一九二二年兩氏は人工合成飼料――カゼイン牛乳蛋白一八、ラード一五、コーンスターチ五四、バター九、鹽類四の割合を以て混合したる飼料――に一日一・四瓦の乾燥酵母を添加して動物試驗を行つた所、殆んど總ての動物は不姙となつたのである。又同氏等は、不姙となつたものにチシャ（萵苣）を與へる事に依つて姙娠能を回復し完全に繁殖し得るものであると云ひ、動物の生殖には或未知要素を必要とするものであつて、此の要素はビタミンA・B（何れとも異つて居る事を認め、これをビタミンXと命名した。

又一九二四年シュアー女史は、牛乳蛋白質は發育促進の榮養素としては完全たるものであるが、生殖には未だ不完全不適當であつて、牛乳蛋白質飼料にビタミンA・B及アミノ酸を充分給するも、生殖は殆不能の場合が多い。しかし若し之に酵母、胚芽、白米等を補給すると四代に亘つて完全に生殖を遂げ得る事を認めた。白米にはビタミンBが含有して居らぬから、此の生殖に關する新要素は明かにビタミンBと區別し得べく、之をビタミンEと命名するが至當であると稱したのである。爾來ビタミン研究者は繁殖と關係ある要素をビタミンEと稱して居る

（ロ）ビタミンEの生理學的意義

ビタミンEは他のビタミンの樣に生育或は發育には何等關係の無いものではあるが生殖作用を營む上には必要缺くべからざるものである。長期間このビタミンEが比較的缺乏した場合、或は短時間極度に缺乏した場合には、動物の雄性は睾丸が萎縮し、全然不姙症に陷るのである　但し短時間或は比較的少く缺乏したに過ぎない場合には姙娠能力は失はれないけれども、假令姙娠しても胎兒の發育は不良で、多くの場合子宮内でそれは死亡し、吸收せらるゝか或は流產する。然らば何故胎兒が發育不良に陷り、或は胎内で死亡するかと云ふに、ビタミンEの缺乏は胎兒の内臟器管特に肝臟、心臟及び血管の發育が不良ならしめ、且つ赤血球の生成が不充分となると同時に、又一方では胎盤に變性が起すからである。

然しながら胎盤の變性の甚しくない以前に、ビタミンEの給源として小麥胚子油を經口的に三〇〇乃至六〇〇ミリグラムを一回だけ與へるか、或は五五〇ミリグラムを一回注射すると、再び正常狀態に復し出產を完全にする事が出來るのである

以上は雌性の場合であるが雄性に於ても生殖腺に同樣な變化を起すのである　一例を擧げると、幼少な白鼠にビタミンE缺乏食を與へると、九〇乃至一〇〇日で生殖不能に陷るのであるが、成熟した動物に依ると一ヶ月で全く生殖不能に陷るのである。何故斯る現象が

生するかと云ふに、ビタミンEの缺乏は睾丸を萎縮せしめ、精蟲の發育を阻害し、且つ凝固變性を起して精蟲を死滅せしめるからである。又ビタミンEの缺乏せる動物は交尾を全然欲しないものである。エバンス氏の研究に依ると授乳期中母鼠にビタミンEが缺乏すると、兒鼠は痲痺症に陷り、其の內三五%は死亡し、一七%は同症より恢復するも、他の四八%は恢復し得ないと稱して居る。

(ハ)ビタミンEの物理學的及化學的性質

ビタミンEはエーテル、アルコール、メチールアルコール、ペンタン、ベンゼン、アセトン、エチールクロロホルム、二硫化炭素その他有機劑に溶解し、且油脂にも溶解するが水には溶解しない。又ビタミンEは熱に對しては他の何れのビタミンよりも安定性を有し一五五度に二時間加熱するも全然破壞しないものである。光線に對しても亦殆ど安定性を確保し、紫外線を二〇分間照射するも殆ど破壞される事がない。但し同光線を四五分放射するに於ては少量が破壞される。又ビタミンEは空氣によつて酸化される事なく、熱風に相當長時間さらされても全く安全である。又酸及アルカリーに對しても安全であるが、醋酸に對しては安性がない。特に醋酸中に於て煮沸すると直ちに全部破壞されてしまふ。又ビタミンEは該ビタミンを含有する油脂と共に硬化或は乾燥するも破壞の惧がない。

(ニ)食品中に於けるビタミンEの分布

ビタミンEは日常食品中最も多く種子の胚子及び野菜の綠葉中に存在して居る。ビタミンA・B・C及Dは肝臟中に相當多量に含有され、筋肉中には極めて少量であるが、ビタミンEは肝臟中に少なく、寧ろ筋肉中に多く含まれて居る。また腦及腎臟中にも相當多量に存在して居る。又精蟲の發育には該ビタミンは必要缺くべからざるものである關係上、睾丸中にも多量それが存在して居るし、卵巢中にも亦多く含まれて居る。心臟、膵臟、脾臟中には何うかと云ふに、肝臟に於けるより以上に多量含有され、豚肉及ラードに於ては兩者共に殆ど同量のビタミンEがある。牛肉には豚肉に比して少ないが、肝油中より多く之を含有し、又魚肉中には極めて微量を含むに過ぎぬ。牛乳中にはビタミンEは極めて少なく、バター中にも少量を含むに過ぎない。

植物性食品には動物性食品に比して多量にビタミンEを含有して居る。其中最も含有量の多いのは小麥胚子であつて、白鼠の不姙症を豫防するには、一日に〇・一五瓦の小麥胚子を給すれば充分なのである。米胚子及大麥胚子中にも多量に之を含有し、又玉蜀黍胚子中にも比較的多量を含んで居る。キヤベツ、チシヤ及び小松菜其他綠いろの野菜類中には比較的多量に含有して居るが、落花生、バナナ、オレンジ、トマトには少量しか含まれてゐない。ココナツ油、クリスコ及びクルミ油には少量を含むに過ぎないが、米小麥油、大麥油及燕麥油には多量にビタミンEが存在してゐる。

(附記)所謂ビタミンF

テンポの速かな我國民はビタミンFに關し餘りにも神經が過敏の樣であるが、ビタミン研究者はビタミンFを未だ承認して居ない、茲には唯ほんの參考までにその概略を記して置くに止める。

一九二八年米國ウヰスコンシン大學教授エバンス博士は、白鼠を化學的に純粹な合成飼料で飼育した際、その飼料に脂肪の含有量が少いと動物は十分成長を遂げることの出來ない事實を發見したのである。實際時々の實驗でも、二三代目位の脂肪では白鼠は決して完全な發育を遂げる事が出來ない。然し又餘り多量に脂肪を給與すると、却て發育不良に陥るばかりでなく、如何にビタミンAを豐富に含んでゐるバター脂や肝油の如きものを給與しても、早晩必らず其動物はビタミンA缺乏症に陥るのである。此現象は要するに、脂肪の餘りに多量に給與することは、ビタミンAの酸化を來し、ビタミンAの働きを妨げるからである。エバンス氏は、發育には如何なる脂肪酸が必要であるかを研究した結果、飼料中には十%以上の脂肪が存在してゐないと、動物は完全な發育を遂げる事の出來ないといふ事實を認め、且この試驗に使用した脂肪はラード、バター、コヽナツ油等の種類の如何に係らず、唯ラードが最も有效であることを認めた。之と同時に之等の脂肪中の或ものが發育に必要を缺くべからざるものの存することを發見し、該脂肪中に存在して居る或未知要素をビタミンEと命名した。又これと同時にチシヤ(萵苣)にも性的能力の發育を促進せしむる要素の存在してゐることを認めたのである。エバンス氏の所謂ビタミンEは、他の脂肪溶性ビタミン卽ちビタミンA・D及Eと化學的性質を全く異にし、それに特に酸化の脂肪酸の中に存在して居るものであると解して居る。要するに所謂ビタミンEは動物の一般發育、特に性的能力の發育に必要缺くべからざるものであると解して居るのである。

精神分析學の二大分派

久保良英

一

フロイドの學説は其自身に於ても非常に變化して來て居ると非難され、しかし新しい方面の開拓と新事實の發見とからして、最初の主張が幾度も變更を受けることは當然である。フロイドは最初は心の病理や日常生活に於ける精神の錯誤、宗教の起源に就ての説明の研究とか不快感の抑壓による生物の本能衝動の見方を公にした。所がこれ等の現象の中、性慾に關するものが大部分であり、且一層重要なる點に於けるタブーやトーテムの研究、更に進んでは藝術的作品の解釋をなすに至つて、各々性の欲求の根柢深い事を説明し、漸次に性の本能を以て、各種の精神活動の原動力と解するに至つた。精神分析學が性慾説と言はれたのはこの時代の主張に名づけたものといふべきである。所が個人精神より社會精神の發現たる各種の團體行動へと精神分析的研究が進めて行くと、唯性慾だけでは説明に困難になつてくる。教會とか軍隊とか戰爭とかパニックとかの現象になると、自我と非我との對立が

明白になつて來、遂に自己愛の概念に變化して行つた。尤もフロイドは世界に於ける凡てのものを團結せしむるものは性愛(Eros)であると言つては居るが、最初其の解釋に用ひた頃の性愛とはその內容に於て相違し、極めて廣汎なものになつて居る。氏は教會と軍隊との例を引き、二つの團體は愛の錯覺に基いて居ること、即ち一はキリストに、他は司令官に對する愛着から結合されて居る。若しこの錯覺が破れると、教會も軍隊も崩壞するとする。この外個團體の一員が他の團員に對する愛の結合もある。かやうにフロイドは團體各員の人格の變化と制限とを說明するのに、團體の指導者と、その團員とに對する性愛的結合を以てして居る。しかしこれ等の結合が、假令性愛の語を用ひては居ても、ヒステリー患者の病源となつて居る性愛とはその趣を異にして居ることは勿論である。

かやうにフロイドの學說は變化して來たに拘らず、氏の學徒の中には、尙氏の最初の主張を墨守するものもあり、或は中途の變改說を採用する者もありて區々である。所が氏の學說の缺點を最初から察知して、獨特の見解を樹立したものに、ユングとアドラーとがある。前者はリビドウを勢力又は活力の意味に廣く解釋し、それが內部に向ふか又は外部に向ふかによりて、吾人の精神的疾患は勿論、正常の性格に至るまで解釋し、後者は力への意志を強調して、疾病や性格を補償作用によりて說明し、全くフロイドの主張から離れて居る。二氏共に精神分析の方法を踏襲して居るが、フロイドの如く性愛を以て中心動力とせず、寧ろこれを二次的に取扱つて居る。就中ユングの方は性愛を可なり強調するが、アドラーに至つては全く二次的のものとし、これをフロイドの如く重視しない。

二

先づユングの原理から述べる。

氏の心理學は他の一般心理學者のそれと相違して、精神の根本機能を、思考、感情、感覺、直覺の四種とする。而してこれ等の機能の方向を定め、態度を決するものは、リビドウ即ち活力である。而してこの態度は對象に對する主體の古い生物學的關係から結果して居る。而してこの關係は次に示す二種の解決の中何れかを採用する。即ち(一)僅かの程度の防禦力が漸次に順當になつて行くこと、(二)自己防衛の個人的準備をなすことである。この中第一のものが外向的態度を生じ、第二のものが內向的態度を生ずる。而してこの二種の態度が前記四種の機能に表はれるもので、次の八種の型が吾人の間に存すとする。

外向的思考
外向的感情 } 外向的合理的

外向的感覺
外向的直覺 } 外向的非合理的

內向的思考
內向的感情 } 內向的合理的

內向的感覺
內向的直覺 } 內向的非合理的

外向型のものは興味と注意とを客觀的出來事に向ひ、社會によりて承認された道德法が彼の行爲を指導する。就中(一)外向的思考型のものは客觀的材料に囚はれ、個人の經驗により得た材料を蓄積する。自然哲學の愛好者、經驗科學の研究者は多くこの型に屬し、彼等の意識生活は宇宙の法則や非人格的事實によりて支配され、無意識界の感情活動を抑壓す

るやうになる。その爲に無意識界は益々敏感になり、遂に障害を引起すやうになると神經的疾患を生ずるやうになる。(二)外向的感情型は多く婦人に見られる所であるが、感情の主體が無く、只感情過程のみあるかの如く見ゆる。周圍の感情狀態に支配され、他人の悲哀に同情して泣いて居るかと思ふと、隣人の喜悦を見て直ちに笑ひ出すといふ有樣である。感情と思考とは兩立し難いことから、無意識界に一種の思想が發達し、激しくなると種々のヒステリー症を引起すやうになる。(三)外向的感覺型のものは主として男子の中に發見され、著しく現實的のものである。具體的享樂を追求し、外面的體驗を非常に尊重する。道徳性も比較的現實的で、理性的内向的でない。彼等の好んで口にし耳にする所は現實主義であり、所謂感覺主義である。人生を一のカンバスの如く取扱し、淺い深さの意味に注意しない。(四)外向的直覺型のものは、直覺が機智に富み、當面の問題を適當に臨機に解決する長所がある。その代りに傳統的精神や道徳的態度を嫌ひ、新奇のものを追求して、時として失敗を招くことが多い。よく政治家にはこの種の型が多く、非常に成功することもあるが、又思ひがけないことから失脚して、政治的生命を失ふものもある。事業慾に驅られ遂に破綻したり背任罪を犯したりするものも、この型に屬するものである。

次に内向型のものは、外界に興味がなく、環境から離れ、主觀的見地によりて行動するものである。(一)内省的思考型は思考が主體に初まり、主體に歸るから、外界の事實は單に主觀的原理の一例として用ひられるに過ぎない。他人の主張に對して冷淡であり、且つこれを排斥し、自己の意見を公にすることを非常に嫌ふものである。自己の仕事の一々に就ては細心に思考するが、他人の感情を少しも顧慮しない。極端になると、確信が頑固不拔となり、主觀的原理が彼の人格全部になつてしまふ。精神科學を研究する學者にこの種の型のものが非常に多い。(二)内向的感情型に共通な點は、感情の強度が裏面に現はれることなく、往々無頓着の外觀を呈することがあり、一般に理解され難い。情緒詩人とか理想小説家とかに多く見られる型で古代の聖時賢に相當し、烈しくなると懷疑の態度を生じ、神經的疾患を引起すやうになる。外界に對する行動は一般に調和的であり同情的である。殊に家庭に於て都合よく、眞心から家庭のために働くものである。(三)内向的感覺型のものは、客觀的刺戟から離れた主觀的觀念を取扱ふ。彼等の有する觀念は對象の再生されたものでなく、以前の主觀的經驗や未來の想像的事實から引き出したものである。常にお噺や神話の世界に生活し、外界の事物は象徴化される。例へば紋の紺のカーテンに隔れて綺麗な森と思つたり、低調の音を聞いて醜い小惡奴を聯想したりする。(四)内向的直覺型のものは内部の心像の中に現實を發見し、外界の事物と自己の心像との間に區別がない。從つて往々大たる發見をなすことがあるが、人生にそれと關係づけることが出來ない。功利的實際的の事業を嫌ひ、行動が一般に退嬰的であるが、しかし人生の原理や、材料の可能性に興味を有し、且つそれ等を漠然に思ひつくといふ長所がある。

かやうにユングはリビドウによりて精神機能の方向を分類した點は、フロイドの所論よりも遙かに系統的である。フロイドは新方法

や新天地を發見するには獨特の天才であるが、その研究結果を系統化する力に乏しいやうである。從つてフロイドの著書を見ると、卓見が隨所に發見されるが、科學としての體系に缺けて居る。ユングの研究は新境地を開拓したともいふべき部分は極めて尠く、フロイドと相似た材料を蒐集して居るが、これ等を系統化して、立派な科學の大系を作り上げて居る點に長所がある。

三

次にアドラーの主張を述べる。

　氏の方法も意識的並に無意識的の精神内容の原動力を自由聯想によりて引出さんとする點に於て、フロイドと同一である。又フロイドの好んで取扱つた、日常生活に於ける忘却、夢、精神的疾患を材料として居る。しかしその同一現象を全く異つた見地から解釋する。即ち在來の精神分析者のやうに孤立せる單一の出來事を解釋することゝせず、全體的性格に對する脈絡的關係から、行動や經驗を解釋する。アドラーによると、人間生活の根本的成分は劣等感である。これは先天的に具有するもので、生後直ちに明瞭に發見することは出來ないが、自我意識が明かになつてくるに從つて明白に表はれてくる。子供に於ける劣等感は助けなき感、大人よりも一層弱いとの感、大人に頼るとの感から成立する。幼兒が母親を慕ふのはフロイドの言ふ如き性愛からでなく、助けなきことから來る依托である。子供が他の兄弟や姉妹を排除して兩親を占有せんとするのは、愛の葛藤からでなく、大人を味方にして自己の優越を圖らんがためである。從つて他方には早く強大たらんと希求し女兒は母親、男兒は父親を理想とし、且つそれの行動を模倣する。

　フロイドが夢を以て性慾の實現であることもアドラーによると誤謬であるとする。吾人は性慾に關した夢を見ないことは無いが、全く性慾に關係しない夢を澤山に見る。飛ぶ夢や落ちる夢の如きもフロイドは性慾の象徴とするが、アドラーは飛ぶ夢は大望の象徴で、自我實現の希求を示し、落ちる夢は試驗の夢と同じく失敗の象徴であるとする。殊に身體的又は精神的に他人に比し劣等の所があるとそれを補償する如き夢や、優越の狀態に達した夢を見るものである。

　日常生活に於ける忘却を以てフロイドは不快の事實を忘れ、快の事項を記憶すと述べ、例へば借金の返濟期日が忘れたり、出席したくないと思ふ集會の日時を忘却したりすると言つて居る。しかしアドラーによると吾人は快とか不快とかの爲めに記憶したり又は忘却したりするものでない。吾人は必要とするものを記憶するものである。而してそれはその者の全人格に關係し、例へば進歩的積極的のものは自己確信を増大せしむる如き事項を多く記憶し、退嬰的悲觀的のものは劣等感を助長する如き不幸の事實をよく記憶するとする。

　女子が男子たらんとの欲求は、フロイドのいふ如き性の倒錯でなく、恰も子供が大人たらんとの欲求と同じく、自己の劣等感から來て居る。地位が劣等であれば何とかして優越の地步を占めんとする。その手段は積極的に出づることもあり、消極的に出づることもある。婦人解放や參政權運動の如きは前者の場合で、婦人の涙は後者の場合である。當々と反抗することが出來ない場合には、涙を以て

婦人は男子に勝たんとする。かの無抵抗主義の如きも眼鏡に腕を押すのと同じく、結局は押した方が負けになる場合がある。

身體器官に缺陷があると劣等感は強く現はれる。而してその缺陷を他の方法で補はんとする補償作用が行はれる。眼の惡い人は聽覺や觸覺が鋭敏になり、足の不自由のものは手の働きが發達する。吃音であつたデモスゼニスは雄辯家となり、耳の惡かつたベートーベンは作曲家になつた。病氣の場合には、その不快を補償するために想像上の苦痛が現はれる。ヒステリー患者に於ける腹痛、頭痛、眼の痛み等は、心的苦悶を軟化する手段となつて居ることが多い。精神病が烈しくなりて床に長く横はり、弱い一瞬間に過ぎなければならぬ者は特殊の發作を生じ、窓の方に突進したり、窓の外に自身を投出さんとしたりする。極めて地位の低い貧しい一婦人が新しい場所に引越すと、よく自殺を企てた。その原因を探るとその自殺をしようとしたことによつて他人が訪れ、其の枕頭に集るやうになり、その患者は他人に認められないといふ苦痛を脱して居たといふことである。大きな活字で新聞に書かれんが爲めに、殺人を企てた例も少くない。これ等は何れも劣等感を逃れんとの補償作用によりて説明がつくとする。

アドラーの見地はフロイドの性愛よりも廣い範圍に適用されるやうであるが、しかし純然たる性慾より來る行動に至つては劣等感によりては説明が出來ない。吾人はアドラーとフロイドの説は互に相補ふものであると考へる。而してアドラーの主張する個人心理學はフロイドの精神分析學の如く系統が立つて居ない。氏の門下生、就中ウエクスブルグによりて科學的大系が構成されんとして居る。卓拔なる識見と、未開地の開拓とに於て、アドラーはフロイドと同じく大才であるが、系統化する點に於ては兩氏共に不得意のやうに思はれる。

景氣變動の最新説

有澤廣己

一

ヴアルガの正しく指摘するが如く、戰後の時期は、一個の新たな「科學」を成立せしめた。景氣變動の研究がこれである。

現在、景氣變動の研究の中心をなすのは、アメリカ合衆國である。ミツチエルをはじめとして、パーソンス、ジョルダン、ハミルトン、リンコルン、キング、パブソン、ブルークマイアー、ムーデイ、プアー等々により、極めて大規模に資料の蒐集、整理、發表が行はれつゝある。就中、内外各方面から、多大の期待を以て迎へられつゝあるものは、ハーヴアド經濟研究所において、パーソンス、パロック及びクルム監修のもとに刊行される調査（一九一九年以來）及び經濟統計評論（一九一九年以來）である。その他、聯邦準備局出版の聯邦準備局報告（一九一四年以來）などは

じめとし、公私の諸機關の刊行する此種の刊行物の數は數へ切れない。

歐羅巴においても、ハーヴアドに倣つて、或はこれと協力して、一連の景氣研究所が設立された。一九二二年末にはストックホルムに、一九二三年にはロンドン並びにパリーにおいて、二五年にはベルリンに、二六年にはローマにおいて。わが國においても、ダイヤモンド社「財界バロメーター」は一九二四年に、三菱合資會社資料課「本邦財界狀勢」は一九二八年に、いづれも多かれ少なかれハーヴアドの流れを汲んで、創刊された。その他、我々は倘數種を數へうるであらう。

註、資本主義的諸國における以上の諸研究所に對して、我々はまたソヴイエート・ロシヤのモスクワ景氣研究所（一九二〇年設立）の存在とその活動とに注意すべきである。數理統計の基礎の上に立つて、ヴアーゲマンの所謂天文學的研究方法の下に行はれつゝあるチェッツプロフ、イグナチエフ、コンドラチエフ等々の研究については、私はこゝに論及する餘白をもたない。

以上が今日行はれつゝある景氣研究の機關及びその活動の大様であるが、アメリカにおける若干の例外を除き、殆んど全部、戰後における產物であることがわかる。しからば、何故に戰後の時期がかくも多數の景氣研究の機關を設立せしめたであらうか。

戰後における資本主義經濟の客觀的狀勢――それにおける構成的變化、恐慌の不規則性とその震動力の強大化、從つてまたこれが克服の困難と犧牲の增大等々は、理論に疲れたブルジュア經濟學者を驅つて、新に景氣研究の任務に就かしめた。景氣研究といふ新な「科學」の意義と目的とは、從つて、この資本主義の未曾有の困難なる時期に際して、景氣の經過を觀測し、恐慌の時點を豫測し、出來るだけ迅速にして且つ適確なる經濟景氣の豫報を發して、もつて景氣の推移をして、出來るだけ圓滑に平穩に導かんとするにある。だからして、既にこゝにおいては、資本家的經濟機構に存在する景氣變動の諸法則、別言すれば、恐慌の因果性自體の研究といふことよりも、むしろ必然的に生起する景氣變動を所與の事實として受け取り、たゞこの事實の經過の豫測といふより實際的目的が、直接的にその主要目的となつてゐるのである。

二

近代的な景氣研究は、經濟生活におけるリズムに關する研究として、佛人ジュグラーによつて始められ、この事業は見事にミッチエルによつて繼承され、一應の完成を告げたが如くに見えた。實際、彼の大著「景氣循環」（一九一三年初版、一九二七年第二版――これは初版の第一部だけの增版である）において初めて數理統計的景氣研究方法と經濟理論的研究方法との綜合は一應完成され、景氣研究の「金字塔」の建設玆に成れりとして世に迎へられた。而して、その理論及び方法はハーヴアドのパーソンス等によつて採用され、こゝに所謂アメリカ型の景氣研究の礎石が据ゑられたのである。

ミッチエルによれば、景氣變動は多種多樣の原因の合成結果として現はれ、景氣循環は經濟活動の上昇・下降運動の周期と定義される。だが、併し彼にとつては、景氣變動の因果性の追跡は問題でない。たゞ景氣の症候學を研究するにとゞまる。從つてそこには「記述

的分析」は行はれるであらう。だが因果法則の發見に始めから放棄されてゐるのである。だから我々はこゝにおいては、材料の本來の意義における「研究」とは無關係に立つものと云はなければならない。なぜなら「信賴するに足る質的及び量的分析は經濟理論と經濟統計との綜合によつて始めて生ずる」からである。（エー・アルトシュール、社會政策學會叢書第百七十三卷、一九二八年）

ミッチエルとその見解の上に立つ近代的景氣研究とは、從つて從來の景氣理論に對して次の點において、その特徴をもつものと云はねばならぬ。即ちこれをベルリン景氣研究所の所長ワーゲマン教授をして語らしめば、彼は語り續けて曰く、『より深い意味において、ドイツの研究所の仕事はハーヴァードのそれと平行して進んでゐる。ハーヴァード及びそれに類似するアメリカ的な努力は、先づ第一に經驗學的なることである——主として景氣理論であり、それが因果的考察を前面に押し立てゐた……從來のドイツの景氣論に對立して。……その二つの見解の對立は、一つの例において最もよく說明される。即ち、景氣理論は、景氣變動の發病素を發見せんと努め、若しくは、既にこれを發見したと主張した。アメリカ的研究はこれに反して、主として、病狀及び經過の出來るだけ完全なる描寫をもつて滿足する。……症候學が諸徵候をより完全に包括するやうになればなるほど、それだけまた確實に診斷は下されうるのである。』從つて『ドイツ景氣研究所もまた先づ第一に、症候學をやるのを、その主要なる任務と考へる。それといふのも、本研究所は、今日景氣變動の原因を滿足すべき仕方で闡明ならしめることは、殆んど不可能であると、考へるからである』と。（景氣研究四季報第一卷）

三

ハーヴァード研究所にしろ、ベルリン景氣研究所にしろ、その景氣研究の綱領は、上述の如くその軌を一にしてゐるのではあるが、併し、その研究方法においてはまた自ら區別さるべきものがある。近代的景氣研究の發達は主として、この研究方法の上において現はれるにすぎない。その他の部分では我々はロエーヴエと共に『經濟的所與の理論的關聯への我々の洞察は、あらゆる様相記述と相關關係の計算とによつては、寸毫も深められはしなかつた』ことを斷ぜざるをえない）。

エルンスト・ワーゲマンの新著「景氣論」（一九二八年）は、或る意味ではこの領域におけるミッチエルの「景氣循環」以來の大收穫であつた。それにおいて彼は自己の主張するベルリン景氣研究所の固有の研究方法を展開すると共に、また景氣研究を一つの分科科學にまで高めんとの試みをなした。

彼によれば、アメリカ型の景氣研究を特徴づけるものは、『それが經濟生活を主として機械として、強大なる機關として觀察し、その進行は數理的・計算技術的方法の助によつて表現され且つ豫測されうるとなす點にある。』この如き見地に立つ時は、當然に「單一方式」（單線によると複線によるとを問はず）に向はざるをえない。而してこれがために單一方式を攪亂する諸要素——一般的趨勢、季節的變動、不規則的影響等を、除去しなければならぬ。

この謂はゞ技師的態度に對して、ベルリン研究所は、醫學的、もつと良く云へば生物學

的原理をその基礎とする。即ち、國民經濟は一個の有機體として現はれ一つの生きた有機體として、動植物の生活形態と同様に、その總ての部分の緊密なる結合、その總ての機能の密接な協働、その聯結を有するばかりではなく、更に運動の自律性とも稱すべき一つの特質をも有する。この特質は先づもつて、運動作用に表はれる。だがこの運動作用は、萬事において機構の運動とは異り、たゞ運動結合の事實において之に一致するに止り、この結合の種類においては全く異なる。だが併し、經濟の有機的運動の自律性は、經濟が外部からの刺戟や影響を如何に攝取するかの方法を觀察する場合において、最も明に看取される。即ちこの場合においても外部的影響は常に單なる刺戟として作用するにとゞまり、經濟有機體は之を自ら加工して攝取する。だから、政治的事變、戰爭、天災等の如く、その性質と程度とに於て甚しく異なる外部的影響を受けても、經濟は恐らく常に同様の方法で運動すること、恰も謂はゞ心臓が全く異なる手段――それが化學的性質のものであれ、物理的性質のものであれ――に對して同様に反應するが如くであらう。彼は之を要約して曰く、

『一、經濟の總ての部分は、密接なる機能的聯結關係に立つてゐる。此等の部分は緊密なる一のシステムを作り、このシステムはそれ自身の法則に支配される。』

『二、外部からの影響は、それが非經濟的領域から來ると他の經濟體から來るとを問はず、單に刺戟として作用するに止り、而してその刺戟は觀察される經濟有機體に於ては、自律的な運動を惹き起すものである。』

經濟のかゝる生物學的把握は、從つて生活發現をたゞ一つの點から理解せんとし、一つの經濟指標から經濟診斷をなすことを許さない。アメリカ型の單一方式は排斥されて、代つて「合序原則」が現はれる。なぜなれば、この場合においては景氣變動とこれが研究者との關係は、恰も症狀に對する醫者の診斷の如きものであり『診斷は豐富な個々的觀察からして下され、この診斷から豫後が定められる』のであるから。

そこで經濟なる生物體の症候學としての景氣論には、多數の經濟指標より成る一つのシステムを持たなくてはならぬ。ベルリン研究所が今日までに作り上げた指標は、(一)生産指標、(二)就業度指標、(三)在庫指標、(四)國內市場の指標としての外國貿易、(五)事業指標、(六)信用指標、(七)三市場指標、(八)物價指標である。勿論指標のシステムはこれをもつて盡きてはゐない。經濟循環の考察において靜態において發見される「合序原則」の分割を、更に進めることによつて益々包括的に構成されるべきである。

かくて獲られたる現實の諸指標は、景氣經過の模型的樣相を示す所の「景氣表式」と對照され、そこに現はれる偏倚からして一定の豫斷の推論を可能ならしめるのである。事實また既に『これらの指標は本研究所をして、景氣診斷及び豫斷までをもなすことを得せしめ、而してこれらの診斷及び豫斷は、今日まで事實上の景氣經過によつて、後から後へと十分に確證された』のである。

なるほど一九二七年におけるドイツ經濟の好景氣に對して、二八年の不景氣を、ベルリン研究所は豫斷しえたが如くである。併し乍ら、

『經驗に富む醫師が深き原因を知らずして、症狀の大體を見たゞけで疾患の今後の經過を豫知し得るが如く、』その時代その時代に特殊なる經濟法則を深く知ることなくして、經濟界における將來の展開を豫報することが、果して何時までも可能であらうか。ワーゲマンは云ふ、『天氣豫報者にとつて、天體の成生の問題が一の限界領域と見做さるゝ如く、景氣論にとつては、經濟變動の原因の問題は、その本來の問題領域の外にある』と。或る結果を除去するがためには、これが原因を除去することをもつて根本的方法とする。だからして因果の問題は科學の問題となる。景氣變動、特に恐慌に對する最良の對策は、これが原因を究明して、その原因を除去する點にあらねばならぬ。然るにこの最良の方策を豫め意識的に放棄しておき、然かもなほ景氣變動の諸斷然豫後の上において名醫たらんとする意圖には、見逃すべからざる自己矛盾が含まれてゐる。ただ併し、この矛盾はワーゲマン、ミッチエル等々の景氣研究家の頭腦が自ら作り出したものではない。ではなくして、この矛盾こそは、現在の經濟機構そのもの、必然的に與へる所のものである。なぜなれば、景氣變動は現在の經濟機構のもつ必然的惡であり、從つて景氣を除去せんとすれば、然らばこれによつて機構は必然的に變革され、若しくは機構を維持せんとすれば、然らば景氣はそれが必然的所產として出現せざるをえないからである。この二者擇一の前に立つて、しかもなほ機構を維持しつゝ、「景氣なき經濟」を實現せんとする試み、これこそが、ワーゲマンの規定する『主として實際的目的を追及する一分科々學』としての景氣論である。

四

さて最近數ケ年間、景氣研究に捧げられた驚くべく廣大な勞作の成果は何んであらうか。確にこれによつて、統計觀測によつて、知られた一定の經濟現象を統計的に把握することが出來た。否、更に進んで、長期的變動季節的變動及び景氣變動とが相互に分離し、景氣變動の大いさに就いての一定の豫見が得るに至つたとさへ云つてよい。

併しながら、景氣研究が恰も「景氣なき經濟」を招來せしめるかの如き期待が、一片の夢想若しくは仕事にすぎなかつたことも、同樣に明白となつた。否、それのみではない。景氣研究に課せられた、より顯進なる資本家的實際目的、換言すれば、「景氣豫報」すらが見事に失敗に歸したこともまた明白である。一九二九年秋における米國の恐慌が、景氣研究の母國における多くの景氣豫報に反して、而してただ一つ、モスクワにおけるヴアルガの豫報に合致して、遂に現實せざるをえなかつた事實は、單に一つの興味ある例にすぎない。

新興の一分科々學としての景氣論は、果して何處にゆくか。私は知らない。ただヴアルガの次ぎの言葉は、或る暗示を與へないでもない。『景氣研究が純粹に經驗的に、又は誤つたブルジョア理論の助けを借りて行はれてゐるかぎり、その成果が何らかの仕方において根本的に改善されるであらうといふ希望は、少しもない。マルクスの理論が景氣研究上の數理統計的方法と結付いてのみ、この研究所(ドイツの景氣研究所)がマルクス主義的指導の下に置かれて始めて、それは實際に有用な成果に到達するのであらう』(一九二七年下半

誤における世界經濟年報）」十二月七日
附記、（ワーゲマンの著書の極めてよき紹介文に、谷口吉彦氏「ワーゲマン教授の景氣變動論」（經濟論叢廿八卷三號）がある）

カッセル マッケンナの貨幣價値決定理論

高島佐一郎

一

すでに金本位制の征矢が弦をはなれた今、（一）我が金本位制は如何なる形態を採るであらうか、（二）その制下における我が貨幣の對內・對外價値の調整は何を究極點として推移し安定するであらうかは、吾々に共通な關心對象をなすものと思ふ。

この點吾々は我が國權威者による若干の論文に接到した。是等の文獻中、右設問の一には土方博士が金塊本位制となされるのを見たのみであるが、他の諸家に至つても其の貨幣論上の立場から推して同樣な考へを有たれるかに思はれる。戰前に比較して莫大なる貨幣用金保有國は凡そ英米同樣、金地金本位を採るべきであると爲すムリナルスキイの所說が、もし世界輿論の一片を代表するものなら、本邦の本位形態も結局それに歸趨するものであらう。だが轉じて假問の二に至ると、之ら諸家が槪ね、興味を示されてゐないのを見出す。然るに今の私の認識要求の中心は却つて、玆にある。そして有力にこの點を示唆する一團の理論を吟味するのが、私の主題なのである。

二

抑も金の價値が貨幣價値を決定するのでなく、貨幣價値が金價値を決定する、——之は獨逸名目主義論者の一致した學說なのであるが、その貨幣價値自體の決定に至つては唯、歷史的產物、又は歷史的範疇に屬するてふ理義の以上には進展しなかつたが、比較的に諸國貨幣價値——一般的購買力の安定してゐた時代の價値現象に向つては、此の理論は現實的にすら十分な妥當性を有つてゐた。いな世界戰後殊に中東歐諸國の貨幣價値は激浪の中を往つたとは云へ、貨幣價値の連續性といふ論理は尙ほ效果を失はぬのであるから、右の學說も亦隨つて觀念世界においては效力を失ふものではない。ではあるが、現實に貨幣價値が決定される理法と過程を解明するためには、自ら之とは異なる視角から吟味しゆく學說が要求されたのであるし、又これを要求する現實世界が展開し來つたのである。

それは何か。一九二一年以降、米國の弗價値みづからが安定したのみでなく、その弗價値が金價値を支配し、更に國際的貨幣價値全般——國際的物價水準——を指導し來つた現實的情勢が、卽ち此れだ。そしてこの現實生活をただしく思惟世界に映像して之を根基づけ之が所緣を解明したるものこそ、カッセル（一九二一年、一九二四年）、ケインズ（一九二三年）、アディス卿（一九二五年）、ホオトレイ（一九二七年）、マッケンナ（一九二八年）等い

打ちだした、其れぞれの論書なのである。いまだ一片な恐らく簡約しておかうならば、其は、新金本位――統制せられたる金本位のもとにおいて現實に貨幣價値一般を決定し安定せしむるものは兌換價値であり、その安定兌換價値を國際的貨幣價値の基準たらしめるの力は米國聯邦準備銀行政策である、と爲すのである。言ひかふれば、新金本位の下に貨幣價値を一般的に決定するものは、金地金の一定量――例へば右國が純金一匁、三磅十七志十片半が米國標準金一オンス、又は二千七百九十ライヒスマルクが純金一ポンドといふごときではなく、有力なる米國中央銀行政策によつて統制され安定されたる兌換價値　同國の一般物價水準に外ならぬ事實を、率直に認識し、それから其原因を解明するのである。

三

然るに之の論者の理論は現實を把握してゐるにしても、何處でも論證されぬ論があるらしい。何故なら、カッセル、キッチン等の試みた長期統計研究の成果に從へば、世界物價水準上の變化一般は世界金供給高上の變化と直接に比例してゐる――其、世界の銀行準備及び用金總高增額約二千四百億圓てふ上部構造はその約九分即ち二百有餘億圓の貨幣用金保有高がかつちりと基礎になつて其の貨幣價値を維持してゐる。しかも世界の産金年額中の貨幣用新供給高は、同世界現保有高の三分にすらも及ばず。隨つて世界の經濟生活發展度がカッセルの推算するごとく確實に年三分に達するものなる限り、通貨より作用する限りにおいては、世界的物價水準低落趨勢は免かれぬ。更に世界物價水準と同貨幣用金保有高との斯かる相關關係を考ふるならば、米國のみ繁榮し歐洲諸國悉く停頓するとはいへ、米國同金保有高は僅に、四十五億弗（一九二五年末）にして世界同保有高の四割五分を占むるのみである。

斯かる事實と統計の前に立つて、何うして、(一)世界の貨幣價値即ち一般物價が安定せられ、(二)しかも此の安定が米國聯邦準備銀行政策によつて保障される、と言ひ得るのか？だから、斯の如きは背理であるか、然らずば詭辯であるか、であらねばならぬ、と人は言ふかも知れぬのである。

だが、其れは背理でもなく詭辯でもないのである。

四

思ふにカッセルが一九二二年國際聯盟理事會に向つて、「世界の貨幣問題」中で一有力國が先づ起つて其の貨幣の對內價値を確定して國際的貨幣安定の指導的地位を採らねばならず、之に該當する國は米國を措いて無い、旨を強調したのと、時を同じうして、米國聯邦準備銀行は既に早くも、貨幣信用統制政策を操縦して兌換價値を安定し、斯くして國際的貨幣價値の指導力を握つてゐた。ホオトレイの彼も、物價安定政策は各自國の信用統制力によつて遂行せらるるので、金價値の安定は單に之が結果たるのみ。之を實現したればこそ、米國は、世界の金市場と兌市場とを唯一不二のものたらしめ得たのだ、と言へるもの、即ち之である。

では、此の兌價値安定政策の實力は何づくから由來したのか。それは先づ、米國の巨大な對外貸付、萬年出超、無限の富源と生産力を背景とする、聯邦準備制度の固有する公開性・通商性・全國的聯合銀行預金の標準的集中性にあり、次いで、此の組織力から發出する、割引政策及び公開市場政策の發揮する通貨調

節力にある。だが、之が直接力に至つては、貨幣用金保有高の増減によつては通貨信用の伸縮を許さず、偏へに安定的物價平準の維持並びに全産業の通貨需要のみを標準として通貨削減量を統制したるの一點に横たはる。卽ち其れら中央銀行の發券額及び預金額には各各四割及び三割五分の準備あれば十分なる所へ、毎に通じて其れらの七割乃至八割を保有して、その超過金保有部分は全く藏置するか又は十割準備の金券を發行して四割準備の銀行券を回收するか、處置するによつて、流入金を通貨用に供用せず、以つて通貨數量から迫り得る限りにおいて物價安定を策したのである。

一言で掩へば、新金本位の運用上、通貨創設の標準を安定物價のみの上におき、金の囚はれを切斷したにある。然らば、その安定的標準を何處に置いたか。この政策實施下の一九二二乃至二六年に亘れる平均卸賣物價指數が恰も一五〇を維持したるに鑑み、物價を戰前の五割高、別言すれば貨幣價値を同三割減に安定し得たものと看て、之を基準――二七年秋、之が行政的表現として米國勞働局物價指數は此の一五〇をば改めて基數として――とした。同國議會にては同年この貨幣價値安定を中央銀行の法律的義務化せんとする法案が現はれ而して否決されはしたのであるが、其れには拘りなく、貨幣價値安定を標準として通貨統制を續行するには最善の努力を續けてゐる。

五

この大戰前五割高物價の安定を根基づけた學說はないのだが、ムリナルスキイは世界の通貨流通高が一九一三乃至二六年間に三割一分を增せる傍ら、諸金爲替本位國の外國手形は世界金保有高の一割九分に相當するから、象徵的に考へては此の五割高には相當な客觀性があると云つてゐる。その基礎付けの當否は措くこととして、之が進みて一九二五年金本位復歸後の英國一般物價の基準となり、更に最近獨佛伊等すらもの一般物價安定の標準たるに至つた所以に至つては、何か。之も、米國の金融政策力ないし權力政策の現れだと言つてしまへば其れまでだが、最近、カッセルの「新金本位論」、ブラウンの「英國と新金本位」、マッケンナの「弗本位上の世界」(孰れも一九二八年發表)は、一の學說とも看えられる程の解明を此の點に施してゐる。語言するならば、旣に米國に、金の束縛から貨幣價値が解放したのであるから、他諸國の物價が自國のより高まれば單なる商品としての金を幾らでも吸ひとるとともに、逆の場合には單なる商品たる金を送りだす。のみならず、米國及び英國は、諸國貨幣的補充用としての金ならば隨時どこへでも現送するし、又イイアマアキイングも極めて自由博雅に施す。そして斯かる金移動が、國際的物價平準の均衡するまで續行されるからに外ならぬ、と言ふのである。

上來が凡そ「新」金本位の現實を直視して、カッセル、マッケンナ初めの諸家の略ぼ一致せる理論的表現である。今これを本邦の現實世界に移す。近く實施される我が金本位の運用と精神は、必然の力によつて此の「新」金本位の以外のものではありえず、隨つて我が物價平準を此の國際的物價平準の系統中に組織するは又一の必然に屬する。だから數年前この點を道ひ破つたアデイス卿の言葉をもつて、此の文を結ばふ。「金本位の職能は、單なる安定ではなくして、我が國物價を世界物價に連結するにある」。(一九二九・一二・六)

定價	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年十二月十八日印刷
昭和五年一月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　東京市牛込區[illegible]町七番地　竹内喜太郎
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内（一一〇）五三五・五三六・五三七番
振替東京二三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
新マツダ
瓦斯入電球

GHUO KORON (*The Central Review.*)
y The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly
Terms of Subscription : Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including
stage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.